泡鳴全集

第六巻

目次

青春の頃

嘗て文章世界に掲載されて、發賣禁止になつたものへ、著者が生前筆を加へたものを、今回內務省の內閱を經て轉載することにした。伏せ字の個所はその刪除を命ぜられた部分に屬する。

一

春夫の父がここを選んで家を建てる時、ちよツと春夫にも相談した、――お前はどツちがいいと思ふ、この地面を全體借りるわけにも行かぬから、前の方に出ようか、それとも後ろの方がいいか、と。渠はこの時無論後ろがいいと云つた。かう云ふ商賈を初めるにも入り口がおもてへ出てゐた方が堂々として體裁が備はることなどは、まだ渠のあたまには這入つてゐなかつた。父はどうせやがて息子に讓る家だから、息子の云ふ通りにして置かうと云つて、後ろにきめた。

○○寺と云ふ寺の大きな庭を縮めたその一部を借りたのだが、別な方面に正面が向いてるその寺のうら庭には今でも池もあり、山もあつて、ながめもよい。こちらもこれを共通に見て樂しめるのが、長らく地方にゐて都會に出て來た家族には珍らしかつたのである。父の知つてる維新前には前通りなどはなく、その奧は草ぼう〳〵の、狐や狸の住ひであつたと云つた。春夫は自分の住まひを『自然窟』などと名づけて、自分の心に得意がつた。

割り合に閑靜な庭の池には、大きな眞鯉や緋鯉が澤山泳いでるし、それにつづく山には高さ三十丈もあらうと云ふ檜の木も立つてゐて、その下へ清い水が湧き出て來るのを池に引き、また井戸にもしてあるのである。夏などは、珍らしいほど冷たい水だからと云つて、近處からよく貰ひに來た。そしてその貰ひぬしが派出な衣服を着た女の子であつたりする時など、渠は私かに自分の胸をとどろかせた。

渠は、家族と共に東京に出るまでに、獨りでちよツと大阪の宣教學校に這入つてゐたが、教會の說教や祈禱會や聖書研究會で出逢ふ若い又は中年增の婦人どもとは、さう直接に話しをしたこともないけれども、何だか親しみのあるやうに思はれて、不斷の心持ちが賑やかであつた。が、上京してから東京の諸教會の事情が多少分つて來ると、牧師や傳道師の不眞面目なのにつれて、信者も皆殆ど不熱心なのがいやになり、また卑しまれて、耶蘇教その物までが自分に權威のない物になつてしまつた。そして同教的な傳道者にならうとした目的を變じ、わざ〳〵年齡を多く云つて神田なる或專門學校の政治經濟科に這入つた。その課業が午前にあつたり、また午後而も夜あつたりするのを、渠は芝から素直に歩いて通學してゐたので、或時など、外務大臣なる大隈さんが條約改正の問題で來島恒喜の爲めに霞ケ關に於いてダイナマイトを投げつけられた實景をも、直接に遠く見て人並みの血を湧かしたこともある。

然し、教會と云ふものが別な意味で忘られなかつた。そこへ行きさへすれば、兎に角、心に何とか

してもとの賑やかさ若しくは空想の滿足が得られるやうに思へた。つまり、少しでも女に接近してゐたかつたのである。それが爲めによく方々の會堂へ行つて見たが、その行く動機が自分ながら面白くないと分つてゐるので、人に話しかけられても引け氣味があつて――つまり、教會の大きなのは餘りに親しみができさうでもなく、小さいのにはまた目に立つ娘もゐなかつた。

そのうちに、渠の家の前にも二階家が建ち、横手にも、奥の井戸へ通る一間はばの道を隔てて、三軒の平長家が新築された。

『困つたものだ、ね。さう早く前の家が建つほどなら、いツそのこと、こツちが前へ出て置いたらよかつた』と、父は悔しがつた。そして丁度こちらの玄關の前へ向ふの勝手口をつけようとしたのに反對して、それを共通の横通りの方へつけさせたのを、せめてもの心やりとした。こちらの住ひにつづいて奥の方へ建てて置いた小い借家二軒には既に人が這入つてるし、また、まだ公けの許可を得ないけれども住まひの二階には下宿人が部屋の數だけはつまつてた。春夫には女の人でも來て呉れればよかつたのだが、客は皆慶應義塾や電信學校や築地の工手學校の生徒ばかりで、そんなもの等の爲めに父から渠は自分の部屋を下のうす暗い三疊敷きにきめられてしまつた。

『こんなところぢやア、若し友だちが來ても見ツともない』と云つて、女の友達でもできた時のことを私かに想像して不平を並べたけれども、父は部屋の變更を承知しなかつた。

そのうちに、また、前の家へ引ツ越して來たものがある。樫村と云ふ表札が出てゐるが、やがて分つたところでは、〇〇省の次官を勤める某少將のめかけで、この女主人はまださうお婆さんではないけれども、春夫の母と同じやうにぶく／＼と肥えてゐて、今一名どこかの店のかみさんと共に、近處でのをんな相撲三幅對と云はれた。そとを歩く時などを見ると、兩足を少しひらき氣味にしてゐるので、如何に立派な衣服を着てゐても姿が見ツともないばかりでなく、人にいやな聯想を起させるので、感情に理性上潔癖を耶蘇教から學び得てゐた春夫は成るべく見ないやうにしてゐた。

名をおみよさんと云つたが、かの女と渠の母とは直きに懇意になつてしまつた。脂肪ぶくれの同病が相憐み相親しむのだと思へば、渠には渠等の心根が一樣に思ひやられて、侮蔑の種にたらないではゐなかつた。が、渠とはずツと年したの弟なる竹坊は何も分らないので母と共にそこへ出入りして、段段と慣れて來るに從ひ、おみよさんに獨りで平氣に抱かれてゐることもあるやうになつた。

『竹ちやんは誰れの子』と云はれ、初めは

『あアちやんの』と云つたのを、おみよさんから面白半分に訂正され、おしまひには、『おばちやんの』と云つてるのが春夫の部屋からよく聽えた。それが可愛いと云はれて、弟はかの女にもまたかの女の妹なるお千代さんにも愛せられた。

お千代さんは、渠と竹次郎との年がずツと違つてるよりも以上に、またその姉よりはずツと年した

のやうであつた。そして渠とはおツつかツつのやうに見えた。そして色も白く、顏だちもその姉よりはずツと整つてたけれども、人のめかけと一緒にゐるその妹であり、また何等の學問もしてゐないらしいので、少しも渠の注意を引かなかつた。

二

横手の三軒長屋にもすべて人がつまつたが、奥の二軒は老人夫婦やら腰辨の家族やらで係り問題ではなかつた。ただ一つ、その手前の一軒にはおそろしい美人がやつて來た。年は春夫よりも一つ二つうへかも知れない、とへ無學であつても、かのマリヤに於ける耶蘇の如きえらい而も美しい子が生まれるだらうと渠には思はれた。

渠の家族や、下宿人や、樫村のおみよさんなどにも、この家が好奇心のまととも世間話の種ともなつてるやうであつた。

二階の人々のうちで一番年うへの日高さんと云ふのが、その工手學校から歸つて來た兄を玄關から飛び上らせて、直ぐ茶の間へ這入つて春夫の父と長火鉢を仲にして、中腰に向ひ合ふと、かけ込んだ勢ひとは全く反對に微笑しながら小ごゑになつて、

『今見ましたが、な』と、茶の間に續く勝手口のそとを左りの手と目つきとで示めした。何ごとが起つたのかと丁度そのそばに立つて見てゐた春夫にはお向ふの島津のことだと分つた。『なるほど別嬪です。』

『さうだらう。』父も何だか助平ッたらしい顔つきで話し相手になつた。

『……』年甲斐もなく、若い者につ向て、と渠はませた心でかけ離れた傍觀をしてゐると、自分の父が國に於いてさんざんに色をんなに溺れ、自分の母に多くの心配をかけるので、自分は或朝、まだ夜明けには間もあつた頃に、父が酒くさい息をして歸つて來て、直ぐ母の隣りの寢どこへもぐり込んだその枕もとへ行き、むせび返らうとする胸を押さへながら、そんなことをしてゐちやア、もう免職だぞと、かねがね母が口にしてゐることを取り次いで片ことのやうに投げつけたところ、父の爲めにひどく叱られたのを思ひ出してゐた。父の話はやがてその家族のことにまで移つた、

『然し、なぜああつん／＼して愛相がないのだか、ね？あの子に限らず、あの兄もおやぢさんも皆唐變木で、人に挨拶一つすることを知らない。』

『……』春夫はこの最後の言を父が自分に當て付けたのだと受け取れた。自分は下宿人に對してもさうだが、また父の舊友で海軍大佐をしてゐるものや、舊藩主の家令をしてゐるものが訪ねて來た時でも、ろく／＼挨拶には出なかつた。そしてたま／＼命ぜられて茶を持つて出ても、これが御子息ですか、なか／＼大きくおなりです、な、などと云はれるのを、ろくにあたまもないものが失敬なと云

はんばかりにして直ぐ退いた。

『變人ですか、な？』

『まア、さうだらう、ね。』

『………』變人であらうが、唐變木であらうが、人のうわさなどをばかりして喜んでるのを聽いてゐたくもなかつた。渠は却つて何かわけのありさうな島津家の方に私かに同情しながら、自分の部屋へ引ツ込んだ。が、何をしてゐる家かと云ふことは、自分にも知りたかつた。

　そのおやぢさんの風彩はどツちかと云へば職人風だが、時々出入りしてゐるものを見ても亦勇み肌の人しかない。そして母がゐない爲めだらう、

『お才、お才』と呼ばれてる娘ばかりが水仕事をしてゐる。

その水口を横目にそれとなく見ながら、おみよさんがこちらへ聲をかけるのを春夫が學校から歸つて來て見たことがある。

『竹坊や、ゐますか、ね？』

『………』

『竹ちやん！』

『今歸ましたが、まア、おあがり遊ばせ』と、母がなつかしさうな聲で勝手口へ出迎へた。

『……』よせばいいのに、また女同士の井戸端會議かと思ひながら、春夫は玄關を上ると直ぐ自分の部屋へ這入つた。が、渠等が何を云ふのかと云ふことに物好きながら耳を傾けた。

『春夫さんが今お歸りです、ね。』

『さうですか?あれは學校から歸つて來ても只今を一つ云はないので、いつ歸つたのかいつも分らないのですよ』と、母はこちらへ云ふことをあきらめてると云はんばかりに訴へた。

『でも、男らしい人になりますよ、あの人は――なか／＼活潑で。』

『さうでせうか、ね?』これは嬉しさうな答へであつた。

『……』何も知らない癖にと云つてやりたかつたが、さう云はれて母が喜んでるのには渠も惡い感じはしなかつた。渠は玄關の直ぐ横手なる三疊敷きの、前の方に明けた一間の窓したなる机に頬づゑを突きながら、渠等の方へ横顏を向けて、ちよツと自分の舌をぺろりと出して見た。そしてさんざらさう馬鹿にしたお目かけでもないと考へられた。その妹を、云ふことをきかぬと云つて毎日のやうにあアがみ／＼叱りさへしなければだ。自分だけが男を持ち、その男の爲めに贅澤をして遊んでゐられるからツて、それで妹ばかりをこき使はうとするのは無理だ。お千代さんが時々ふて腐れるのは尤もではないか?それをがみ／＼云つてゐる様子がこの室から、板壁一つ隔てて、手に取るやうに聽えてるのだ。

かの女は今、そのからだにも似合はず、低い聲になつて、意外のことを語つてゐる、

『お向ふは、時に、あの、入れ墨師ですツて、ね？』

『さうださうで、ね——而も名うての名人で。』

『……』それで初めて分つたのだが、島津の人々が——三人とも——成るべく人に顔を合はせないやうに、また顔を合はせても物を云はぬやうにしてゐるのは、世間を隱れてゐるのである。こツそりと法律に反いたことを家業にしてゐるからだ。入れ墨は、何でも明治維新になつてから、野蠻だからツて嚴禁されてる筈であつた。

その禁を犯してまで、昔おぼえた家業を續けてるのは、そのおやぢとしてはまだしも止むを得ないか知れないが、その娘などがどうなつて行くのか？いつまでもおやぢの不法な犧牲になつてゐるべきものでもあるまい？かう云ふことを考へてると、口かけの妹に對する同情がまた入れ墨師の娘にも分たれた。

朱や藍やその他で色取つた立派な武者繪や氣味の惡い動物畫を人の背中に見たのは、渠が東京の湯に行くやうになつてからである。が、すいた男の名を藝者共がその腕に墨で入れることは、これまでにも聽いてたばかりでなく、現に、渠が國で、喰ひ扶持を持つて英語敎師の書生に行つたそのうちの細君の腕に、その亭主の名があつたのをちらと見たこともある。

そんな思ひ出に今の話が入りまじつて珍らしく渠の血を湧き立たせた。そして、ほんの、うわべな

る勇み肌の誇りや、旦那取りの喜ばせやでなく、眞に精神からうち込んで來て、こちらの名を法律に反いてまでも入れ墨しようと云ふほどの女が欲しかつた。

けれども、渠はかかる心持ちを自分で壓服する爲め、今、習つて來たバジホトの經濟論の一節を、いつも通り、無遠慮な大きな聲を擧げて演説口調で讀んだ。今や自分で說教の眞似などは稽古しなくなつた代りに、將來の野心の爲めに辯舌の用意は怠らなかつた。

三

渠は一週のうち六日はよくつづけて勉强したが、日曜になると、前々から得て來た習慣上、どこかへ行かなければ氣がすまなかつた。そのどこかとは會堂の外になかつたのだが、一たび洗禮まで受けたその信仰の無くなつたのを再び恢復したいと云ふのでもないから、どこへ行つても、信者らしい顏はしなかつた。

愛宕町なる○敎會へ行つて見ると、何よりもさきに思ひ出されるのは或外國敎師の娘とその宣敎學校の一學生とのローマンスであつた。春夫も上京の當座は大阪からの關係上同じ學校へちよツと通學してゐたので知つてたのだが、その學生がその娘に思ひをかけてからは、每晚のやうに夢遊病のうちに下宿を出て、娘の父の西洋館までかよつた時。々その途中を同窓のものが出逢つても、目をつぶつて

るので分らないでとほつて行くのだが、自分の部屋にもどり付いた時、同室のものがどこへ行つてきたと聽くと、マギイさんに逢つて來たと答へた。マギイとは娘の名なるマガレトの略語だ。それも夢のことで、まさか實際に逢つて來るのではなからうと云ふのが皆の推定であつた。明くる日になつてはもう、本人自身はそんなことを知らなかつた。けれども、春夫等よりは二三級うへの本人は日曜日になると、特別に洋服すがたをめかし込んで、マガレトと共に手を取り合つてこの教會へ出席した。そしてかの女の父もそれを許してゐるのは、相手がおほ金持ちの子であるからだらうと云ふ評判であつた。が、その娘が去年本國の大學へ行くことになつたので、男も亦一緒に行つたさうだが、このことは春夫の退學後のことであるから、よくは分らない。

また、同學校にゐた某と云ふのは、宮内省に勤めてる某大官の子であつたが、毎日曜日や金曜日の說教や祈り會には特別なお化粧をして聖坂の教會へ出かけた。澤のテイブルの引き出しにはおしろいの用意まであつた。これを思ひ出して、或時、春夫も同教會に行つて見ると、成るほどと思つたほど多くの若い女どもがゐたが、すべて同會附屬の女學校の生徒で、這入つた檻のまゝ持ち運ばれてるやうなもの等だから、とても自由に話し相手を得られさうではなかつた。

そしてかかるところでは、いづくも皆、

てた。そんなら何で世に女ができたのだ、なぜ男があるのだと、春夫には思はれた。屁理屈でなければ、僞善の敎へではないか？それに比べると、或時ちよツとのぞいて見た築地の天主敎會堂の方が——舊敎だと云はれながらも——理屈を云はないだけ莊嚴であり、また奥ゆかしかつた。多くの女は、すべて罪ある者として遠慮の爲め、眞ツ白なかつぎを着て出席してゐた。そしてその後ろに坐してる渠のところまでも敎壇で燒くキリスマのかをりがにほつて來た。けれども、かかる空氣にとぢ込められた女のうちでも、而もその童貞學校の生徒が、不倫の子をそこの寄宿舍の高い便所から生み落し、小使ひが氣付いてすくひ上げた時には、もうその赤子は死んでたと云ふことを、渠は自分のうちに下宿してゐる同敎信者から私かに聽かせられた。

かかることがすべて渠の燃えるやうに寂しい心を遠くからかきまぜてゐたところに、渠は自分の最も手ぢかに於いて一つの不愉快な事件に接した。初めは、下宿人日高に關してのことだ。日高もいつのまにかお向ふの目かけの家へ遊びに行くやうになつてたのである。そして春夫の父と共に酒を馳走になり、おみよさんのぺこん〱云ふ三味線に合はせて、これはへたか上手か春夫には分らない歌などを歌ふのが時々聽えた。旦那が來てゐるのでは、とてもそんなことのできさうな筈はない。

『君に別れて』と、日高の聲らしいのが、また、急調子で歌ひ初めると、

『あ、パラ〱ポン』とあひの聲を出したのは、おみよさんであつた。

『君に別れて、パラ〱ポン、松原行けイば、ドン〱、松のつゆやアら、涙やアら！』

讃美歌のやうな嚴肅な歌を聽きつけてる春夫には、それが――殊に、晝間の時は――卑猥にも又馬鹿馬鹿しくも聽えるので、こちらでも向ふへ當てつけるやうに、またそんな猥聲の耳に入らないやうに、自分も聲を擧げて貨幣論を讀んだ、

『グレシヤムの法則とは惡貨幣が善貨幣を驅逐する法則である』など。

『春夫』と、渠の母が飛んで來て、『少し遠慮するものだよ――今お向ふへお父アんも行つてるのだから、ね。』

『なアに、かまふもんか！』

ところが、或夜、渠の父は酒くさい息を吐きながらお向ふから歸つて來て、しよげたやうな聲で母に云つた、

『日高は怪しからん、ね――きツと、ありやアくツ付いてるよ。』

『なんぼ何だツて、そんな人でしようかおみよさんも？』

『どうせ人の目かけなんかする身だから。今も、こツちを呼んどきながら、いい時になりやア、早く歸れよがしだ。日高は日高で、たぬき寢なんかきめ込みやアがつて！』

『……』そのたぬき寢では、自分でも詰らない經驗があると、春夫はかげながら思ひ出した。國で

の夏休みに、父のつとめさきなる田舎の海岸に行つた時、大阪へ行つていつも留守がちな或發明工夫家の子持ち細君を好きになり、そこばかりへ遊びに行つた。そして或晩、とう／＼父の家へ歸りたくなかつたので、わざとそこの茶の間の次ぎで眠つたふりをしてゐた。實は、子供ながら自分の好いてるかの女に色をとこなど持たせたくなかつたのだ。が、やがてその男がやつて來て、

『あれは誰れぢや』と云つた。

『〇〇さんとこの坊さんや。』

『早う歸せ、歸せ――邪魔くさい！』

　この心持ちで父も今追ひ歸されて來たのだらうが、母は、

『若しそんなことがあつちやア、お向ふの旦那さまにもすまないでしように――うちで知つてながらほうつて置いちやア？』

『今度一度日高によく忠告してやるつもりだ。』

『……』その忠告をしてやつたかどうか分らないが、父はこの事件を、何の爲だか、時々話に來る〇〇報記者に語つたらしい。そして、よせばいいのに、この記者――どうせ下まわりのだらう――をその望みに從つておみよさんに紹介した。すると、その場で記者は斯う／＼云ふ不都合な事實があるさうだが、新聞に發表してしまうか、それとも相當な口どめ料を出すかと云ふ談判を初めた。父もその意外

に驚いたけれども、斯うなつてしまつては何とか仲を取るより仕かたがないので、記者の初めの要求よりはずツと下の額――何でも三十圓とか――をおみよさんから出させて、無事に納めることにした。

　ところが、それから一ケ月も立たないうちに、かの女はまた同じほどの金額をむさぼり取られた。

『どうせ弱みのあることをしてゐるからいやとは云へないんだらうが、何だツてまたお父アんはあんな男を紹介したのだらう？』

『なアに、ただ紹介しろとしつツこく云ふから。』

『だツて、有名なゆすり新聞の記者ぢやアないか』と、春夫はお向ふに同情するやうに云つた。

『そんなことを知るもんか？』父は自分の落ち度を辯護でもするやうであつた。『たとへゆすられたツてちやんとしたものならびくともする筈はない！』

『そりやアさうだが――』春夫はそのゆすり記者の强慾を憎くんだばかりでなく、自分の父が記者の最初のゆすりには記者から一杯飮ませられたのに、今回はこちらへ何の渉りもつけず直接に行つたのを不平であるらしいので、それをも淺ましく思つたのである。『こツちも餘り考へがなさ過ぎた。』

『……』父は少し顏を赤めたが、別に返事はなかつた。

　兎に角、それから、お向ふへは、日高もおぢけ付いて全く行かなくなつたやうだし、春夫の父や母も氣まづい氣がして遠慮がちになつた。それがこころ寂しいのだらうが、おみよさんは今度は春夫に

逢ふたんびに遊びに來い、遊びに來いと云つた。渠もその頃いつのまにかお千代さんの方に氣がないでもなかつたので、行つて見たいやうでもあつた。が、いまだに竹坊だけは『おばちやん、おばちやん』となついて獨りででも遊びに行つてるので、兄が自分の小い弟と樫村入りを競爭するやうに見られても面白くなかつた。

渠の私かにとどろく胸のうちでは、お向ふの人々として姉がさうした者なら、その妹も別に堅氣な筈のものでもなかつた。そしてさうした考へをも入れて注意すると、お千代さんは色が白いばかりでなく、顏の肉づきもよく、手などもまる／＼と堅ぶとりに太つてるやうだ。そしてまだ一度もこちらに物を云つたことはないが、うまく出くわすと、顏をさツと赤らめてお辭儀だけはするのであつた。こちらもそれを見ると、馬鹿にしながらも、胸が俄かにどき／＼した。

それが度かさなるに從ひ、耶蘇教會などを空しくあさるよりも、手ぢかに自分のいい友達がありさうに思へて來た。

四

井戸端への道一つ隔てた入れ墨師の娘もその一人で――その家の父も兄も無愛相で、全く人嫌ひのやうであるに似合はず、かの女けだは――さすが女である爲めだらう――さうつん／＼してはゐなか

つた。近處の人々へも挨拶などはするやうになつたし、出入りの商人どもへもよくちよツとした冗談を云つてることもある。而もそれが歯ぎれのいい江戸ツ子辯であつた。

時候が段々暑さに向いて、方々の家が明けツ放しになつて來ても、かの女のところだけは愼ましやかに障子を締め切つてあるのを、そのうらの方までまわつて行つて突きとめて來た物好きの下宿人もあつた。

多分秘密な家業上さう云ふ風にして、その暑苦しさや窮屈さも辛抱してゐるのだらうと思はれた。が、不思議なほど殆ど毎日のやうに兄弟喧嘩をしてゐた。否、兄弟喧嘩と云ふよりも、むしろ兄がその抵抗も抗辯もしない妹をただむやみに叱つてるのである。そしてその叱りかたと云ふのが、また、何で歸りが遲かつたとか、なぜあの男にからかつたとか云ふのであつて、どうも兄の燒き餅からであるらしいとのことだ。

これを春夫の父が或婦人の來訪客に語ると、その婦人は年寄りだけに落ち着いたもので、斯う云つてた、

『そりやアよく世間にはありますよ。にイさんが良縁がなくツてぐづ〳〵してイる爲めに、そのおいもと子さんの縁談を邪魔すると云ふやうなことが、ね。』

『………』春夫は獨りで或はさうだらうとか考へた。あの兄があんなひよツとこづらでは、とても、

良縁のありさうなわけがない——殊に、それが法度破りの子では。
或日、渠が學校へ出かけようとすると、——そんな時には必らず島津の家に好奇心と何とはない慕はしさとを向けたのだが、——丁度見たる人の怒鳴り聲がきこえた、
『いやだ、おいらア兄として云ひぶんがあるんだ!』
『さう大きな聲をするな』と、そのおやぢさんがとめてゐた。
『……』美人だけにまたお才さんの縁談の口があつたのを、成るほど、兄が邪魔でもしてゐたのだらう。
それにしても、
、　　、　　。　？　。
そのうちに、人々の話は一層おほ袈裟になつた。かの女は下町風と云はうか、派出好きと云はうか、髪もいてふ返しが好みらしく、なか〱目に立つ柄の着物を選んで着てゐる。が、時によると、もう、夏になつたので、おほがたの手ぬぐひ地のゆかたをつけてることもある。ところで、手桶を提げるにもその長い袖のさきをわざ〱つまみ上げるやうになつたのは、きツと姙娠を押し隠す爲めだらうと云ふ評判であつた。

『そんなことがあるもんか』と、春夫は自分だけできめてゐた。

初めの程とは違つて、この頃では渠が朝起きて井戸端へ顏を洗ひに行くと、恰もそれを待つてたやうに、必らずかの女も手桶を提げて來て、先づこちらへ水を汲んで呉れる。

『どうもすみません』とばかりは繰り返されるが、渠はいつもかの女の顏を仰ぎ見ることができなかつた。努めて平氣をよそほひながら、最初にその場で肌をぬぎ、いつも通り兩手や肩をこすつてると、

『わたしがふいてあげましようか』と云つて、かの女は渠の後ろへまわりかけた。

『いえ――』渠はただ斯う云つて自分の肩をよけたが、それだけのことをでも近處の人に見られはしなかつたかと思ふと、まことに嬉しくもあり、また耻かしくもあつた。で、それからと云ふものは、毎朝、肌はぬがないで寢卷きの下から手足をふいた。そしてその女のいろ／＼話しかけるのを受け身では答へたが、こちらから進んでは何も云へなかつた。

同じく美人と云つても、お千代さんに比べると、お才さんの方が顏が上品である。けれども、同じ色白と云つても、お才さんの顏の色は白さを通り越して青みがかつてゐる。それを渠の父は曾て『淫婦の相がある、ね』と云つてゐた。が、淫婦でも何でも、もう、春夫にはかまはないほどにかの女が自分の胸に這入つてゐたのだ。

渠の心では、お千代さんがいいだらうか、それともお才さんがいいだらうかと迷つた時がある。そ

のうちに、然し、お千代さんはその姉に餘り叱られたとかで、とう〳〵親の方へ逃げ歸つてしまつた。かの女がこちらに對して顔を赤める優しい樣子も、もう、再びは見られないのかと思ふと、いよ〳〵、多少はかの女よりも圖々しさうなところが見えても、お才さんばかりしかなかつた。

梅雨も半ばを過ぎてたが、その晴れ間などに、自分の鬱陶しい又物戀しい氣持ちを晴らしかたがた、奥の井戸への道を反對に眞ッ直ぐそとまで出て、お才さんがついて來はしないかと思つてゐると、果してまたやつて來た。そして自分のそばに並んでそとの通りを眺めながら、ふたりの今見てゐることに就いて――遠慮がちにだが――いろ〳〵話をしかけた。

渠も亦、もう、大丈夫だらうと云ふ見當が付いた氣持ちになつて、少しうち解けるやうになつた。が、そこへ、

『お才、お才』と、がみ付くやうに呼び返す聲がきこえた。

『また兄さんが！』と云つて、後ろを見てから、ちよツと聲を低め、『少しいらツしやい――留守に、ね』

『はい、いづれ――』渠はかの女の手を握り占めたかの如く私かに自分を燃やしてゐた。

渠には、もう、耶蘇教もなかつた。教會もなかつた。いや、學校や自分の家もなかつたとも云へる。家にゐれば、朝から晩まで、島津の方にゐるおやぢさんや兄が留守になるのを狙つてるばかりであつた。

そして初めての訪問の時、先づ見たかつたのはどんな道具を以つて入れ墨をするのかと云ふことをであつたが、その室らしい奥座敷の中仕切りをかの女があわてて締めてしまつたので、ただ床の間に天照大神宮と書いた軸物におみきのあがつてるのがちらと見えただけであつた。狭い茶の間に通されて、自分は長火鉢の少しこちらに、かの女はまた火鉢の向ふに坐わつて、さし向ひになつたが、最初の挨拶がすんでしまうと、もう、ちよツと話をする糸ぐちが發見されなかつたので、

『お宅の御商買は――一體――何ですか』と、つい、云つてしまつた。が、口に出してしまうと直ぐ、餘りに出過ぎた言葉であるに氣が付いた。

『………』かの女は下を向いて、膝のさきについてる犬がたがすりの模樣を右の手さきで摘まみ、摘まみしてゐたのだが、その少し赤らめた顏を擧げて、暫らくこちらを見詰めた。目がぱツちりとして、まつ毛がおそろしく長い。そのあひだをただにが笑ひをして見せたが、これから段々心安くすることが既にきまつてるかの如き意味で答へた、而もあまツたると調子で、『いづれ分ります、わ――申し上げないでも。』

『………』渠は直ぐまた言葉が行き詰つた。

『神田へお通ひですと、ね。』今度はかの女からの言葉であつた。誰れからか、もう、聽いてたらしい。

『何になりなさいますの？』

『僕ですか?』一層固くなりながら、『僕は政治家になるつもりです』と答へたが、『藝術も面白いのですが』と附け加へた。それとなくかの女の父の技術にも云ひ及ぼさしめる考へであつた。

『藝術と申しますと、繪や彫刻です、ね?』

『………』渠はかの女もその父の商賈がらから多少話せるやうになつてるのだ、な、と思はれて、更らになつかしみを感じた。半ば敎へてやるつもりで、『それに、僕の云ふのはおもに文學の方面ですが、役者の藝やその他何でもあたまなり手なりで巧妙なわざを現はすのも皆、そのうちへ這入ります。』

『まア、然し、そんな物よりも』と、かの女はそのおやぢさんの仕事にも云ひ及ぶのを避けるやうにした、『矢ッ張し、政治の方がおよろしいでしよう。』

『そりやア――然し、僕は、政治にも經濟學が將來必要になつて來るやうすですから、おもにその方を自分では勉强してゐます。』ほんとうにかの女に通じるかどうか分らないけれども、自分はそんなことを云つて聽かせた。自分よりも一つ二つは年うへだらうと見て取つてるだけに、何となく自分の新たにできた姉にでも向つてる氣がして、こちらから寧ろあまへ込んで行きたかつた。

『結構です、わ。うちのにイさんは繪かにきなりたい、なりたいツて云つてるんですけれど、お父アがなか〳〵――』

『僕も父さへ許せば、藝術家の方に向くのですが――』

「繪や彫刻なら、また、ようございます、わ、ね。」

かの女はその左り手の方の茶簞笥に目をやると、すぐその方に片手を突いて右の手を延ばし、茶道具を出し初めた。

これをちらと見ただけで、渠はぱツと顔がほてつた。そしてわざと横を向いてしまつたが、丁度そこの柱にかかつてるのは歌麿か何かの細い版畫であつた。浮世美人の立つてるその裾の色が褪めて薄くなつてるところに、今見たあざやかな色を添へてながめた。そして、

『………』人をあたまから馬鹿にしてかかつてるのだらうか？それとも、また、そんなみだらを平氣な習慣なのだらうか？おなかなどが人の云ふやうに大きさうでもないが、若し大きくなつたとしても、自分の好きには變はりがないと考へられた。

そのうちにかの女の兄が歸宅したので、渠は挨拶もそこ〳〵にかの女の見送りを受けてそこを出た。が、そのあとに兄なる人はかの女を非常に叱りつけてるらしい聲がきこえた。それをもツと立ち聽きしてゐたかつたのだけれども、眞ツ晝間のことでもあり、こちらの父母や女中に見つけられるのがこころ苦しかつた。

五

春夫の家に於いても、また一つ渠の若い神經を刺戟してやまぬことがあつた。

何でも品川の或女郎屋に使はれてそこへ年中出入りしてゐるものの娘で、お末と云ふのが、その子供の時から女中になつて來てゐた。渠などはかの女のことを名で呼ばないで、

『おい、目ツかち、目ツかち』と心やすい友達のやうに云つてたのだが、生來なか〳〵あか拔けがしてゐて、言葉も亦はき〳〵者であつた。それが爲めに渠の母にも重寶がられ、父にも亦可愛がられて育つた。ところが、もう年頃になつたと云つて、かの女の親が嫁入り口をきめて來たので、止むを得ず久し振りでまた別な女中をやとつた。

目黑の奥の多少資産ある百姓の娘で、給金を目あてよりも行儀作法をおぼえたいと云ふのであつた。本名はお鶴だが、それでは春夫の母と同じ呼び名になるからと云つて、こちらでこれまで女中を呼び慣れたおすゑと云ふのをつづけることにした。

このおすゑは春夫よりも三つ四つうへの癖に、まだ時計の時間を讀むことができぬほど、無學と云ふよりも田舍ものであつた。

『おい、おすゑ、何時か見て來て吳れ』と命ずると、

『はい』と云つて勝手へ行くが、そこにゐ合はせた父なり、母なりが直ぐ何時何十分と云つて聽かせるので、かの女はその通りをこちらへ傳へた。それで、渠には初めのうちそれが分らなかつた。

何かのついでに、渠の母が渠におすゑの餘り無學なことを歎したので、渠はかの女を時計の前に立たせて、その讀みかた、數へかたを教へてやつた。が、年したのものに物ををそはるのが耻ぢだとでも思つてだらう、ろく／＼おぼえようともしないので、矢ツ張り、もと／＼通りであつた。

それが氣になるので、渠は或時、勝手へ行つて、

『おすゑ、これを讀んで見ろ』と云つて、一、二、三、四と書いた紙を見せた。

『いやです、わ』と云つて、かの女は笑つたが、二度とふり向きもしなかつた。

『………』それほどのことを馬鹿にしてと思つた爲めか、それともそれさへ全く見えないのか、どツちとも渠には分らなかつた。

『教へてお貰ひなさい』と、そばにゐた渠の母も云ひ添へた。『聽くは一代の耻ぢ、聽かざるは末代の耻ぢとも云ふから、ね。』

『まア、氣ながにしてやるがいい』と、父はその後になつて春夫の相變らずやき／＼云ふのをなだめた。『人にをそはるのをきまり惡がつてる女だから、その時その時に、獨り手におぼえて行かせるやうにしてやるより仕かたがない。』

『だツて、おぼえなけりやア本人があとになつて困るだらうと心配してやつてるのに！』渠は水仕事をしてゐるかの女にも聽えるやうに云つた。そして自分では、自分の父や母がこれまでにも女中に縫ひ物まで教へ込む熱心を知つてるので、それに多少の手助けをする考へであつた。

ところが、或日、或下宿人の部屋へ渠が話に行くと、

『今度のはまたたか〳〵別嬪のお目かけさんだ、な』と云はれた。

『……』渠は顏を赤くしないではゐられなかつた。まさか、自分のと云つて冷かされる筈もないから、まことに一層の意外であつた。して見ると、父はあの目ツかちのおすゐ――父の娘としても末から二三番目となるべき――を、も、ただはき〳〵者として可愛がつてやつてたばかりではないのか？思ひ出して見ると、あの子には成るべく奇麗な衣物を着てゐさせるやうにしてゐた。けれども、かの女がそれにつけ上つてぞべら〳〵してゐたのを、春夫はかの女の生れた品川遊廓あたりの風を眞似してゐるのだらうと思つてた。それとも、父はお向ふのおみよさんを見てから、自分もと云ふふうに、昔の持ち前を再び出したのであらうか？『お父アんが――まさか、まさか』と、心でもうち消したが、その後はそれとなく注意を拂つて見るやうになつた。

今のおすゐを

『うどの大木』と渠がかげて惡口を云つたのは、この脊が圖ぬけて高いのに、案外ぼんくらである爲

めだが、細おもての顏だちは割り合によく整つてゐる。そして來た當時から、朝晩二回には必らずおしろいをつけ換へるのである。而もそれがなか〱念入りで、時間がかかる。

『おすゐは奇麗好きなのはいいが、あんなにお化粧に時がかかつては、朝ばんの用がいつも後れて』と渠の母はこぼした。

『なアに、奇麗にしてイる方がいいぢやアないか？今度のが一番いい女中だ』と、父はいつも喜んでゐた。然しその樣子が必らずしもかの女を自由にしてゐるとは、春夫にはツきりと受け取れなかつた。

　きんらい節がはやつてゐて、ちよツと三味線をひける婆アさんどもがよくそれを歌つて金を貰ひに來た。田舍ぶしの陽氣な調子でいろんな皮肉や滑稽な歌の文句を歌ふのだが、歌毎にそのしまひには、『のツぺらぼうの、きんらいらい、おかしいやおまへんか』と云ふかみがた言葉が繰り返しになる。それをかの女は誰れよりもおもしろがつた。三味線の音がすると、

『また來た』と云つて、箒木などを持つたまま勝手へ飛び出した。また、流しもとへ下りて物を洗つてる時などにやつて來ると、衣物の裾をまくつてしやがんでるまま、その方をじツと間ぬけたやうに見上げてゐて、おしまひの『のツぺらぼう』になると、待ち受けてたやうにあは、はと笑ひ出した。時には二度も三度も笑つてるのが聽えた。

　それをかげで聽いてると、まだ〱さうでもないが、渠が直接に見た時には、その締りなく笑ふ者

こそのツぺらぼうであるやうな感じがした。

『餘りさう馬鹿笑ひはするな』と、渠の父もかの女を叱り付けたことがあるけれども、その時になるとまた同じやうであつた。

『………』馬鹿にしては惜しい女だと、春夫は思ひ詰めてたので、私かに何とかして少しもツと知識を與へてやりたかつた。が、若し父が自由にしてゐるものとすれば、こちらで入らざらん世話を燒くにも及ばないのである。その上、こツそりかの女に物を云つて、こちらにかの女を何とかする氣でもあるかのやうに思はれては、自分の父に對して本意ではなかつた。

けれども。或時。

『　、　、　?』

『　、　。　』。

『　』

父が喜び、母もこれをかばふ女であるだけに、春夫は誰れも見てゐないところで——たとへば、自室を出た直ぐそのはしご段をかの女が客のお膳を引いて下りて來るところなどで——出くわす時は、物を云ひ得ぬ時であればあるほど、自分の手やからだが顫えるのを覺えた。無論、直接自分が戀してゐる爲めではなく、自分の父の思ひ物であるかも知れぬと云ふことに殆ど戀と競爭してゐる程の敵意を拂つてだが。

自分ながら微妙に思はれるこの渠の心持ちを、かの女は――如何に無學でも、年うへの女として――渠の目つきやそぶりに於いて感じないではゐなかつたらしい。時々、こツそりと渠の勉强室へ這入つて來て、お客さんの殘り物か貰ひ物らしい林檎や蒸菓子を置いて行つた。

けれども、渠は自分の心が俄かに全くお才さんにばかり向いてからは、おすゑのことを餘り氣にはとめなかつた。いや、却つて自分はおすゑを邪魔に思つた。蓋し自分が島津の家へ初めて行つたのをその最初に見つけたのはかの女であつた。そして勉强室へ來たついでに、

『あなた、お向ふのをお好き、ね』などと冷かした。

『馬鹿！』低い聲にだが叱りつけて、『下だらないことをお父アんやおツ母さんにしやべつたら、承知しないぞ！』

『何も申しませんよ。』これもその聲を渠の耳もとへ持つて來た。そしてぷんと鬢のあぶらをにほはせながら、『たツぷりとお樂しみなさいよ！』

『馬鹿！馬鹿』としか云ふ言葉が出なかつたほど、渠はその耳のあたりまでのぼせてゐた。そして、そんな卑しい冷かしの言葉なども初めて聽かせられたのだが、それでも私かに嬉しかつた。

六

お才さんにその家へ逢ひに行くのは鼻さきにあるだけになか〳〵六ケしかつた。こちらではおすゑが見張つてゐないと思へば、向ふでそのおやぢさんや兄が在宅であつた。また、向ふが丁度いい場合に在つても、そんな時には生憎おすゑがこちらの勝手にゐて、妨げをしてゐるのであつた。

それでも、然し、そればかりに心をそそいでゐると、――丁度泥棒が人のすきを狙つてるやうだと自分ながら思はれたが。――その後また二度ばかり人の目をかすめる折があつた。その度毎にお才さんは例のみだらな風を見せ、而も一度目よりは二度目、二度目よりは三度目と親しみが進むに從つて、それがまたわざとらしくも見えたので、こちらは却つておぢけ付いて固くなるばかりであつた。そして歸つて來てから、晝間でも夢に心をだらりとゆるめて、

・

それを氣味惡く恐れて、夜も成るべく夢を見まいと目を明けてると、ランプを消した部屋の眞ツくらな天井にかの女の青みがかつた微笑の顏が現はれて、それがやがて横に疊へ突いたゆび輪の手の派出な袖のたるみに變はり、また紫じみた繻子の晝夜帶となり、つひにはまた崩れた膝の唐縮緬に見えて來る。斯うして渠は段々と早くからの夏痩せも手つだつて神經が衰弱して行つて、學校へ出る氣にもなれなくなり、朝から晩まで自分の部屋でごろ〳〵してゐた。そして日に二三度も井戸端へ顏を洗

ひに出るのがせめてもの心やりであつた――かの女もこれに氣がつけば必らず水を汲みに來たから。
『春夫はどうしてこの頃學校へも行かないで、ごろツちやらしてゐる？』父はとう〳〵斯う云つた。こないだぢうからこちらの樣子を見てむづ〳〵してゐたやうであつたのだ。
『少しあたまが惡いやうだから』と、中廊下を自分の部屋の方へ出るところで、茶の間の明いた障子にけつたるいからだを手でささへながら答へた。自分でも憎いほど取りすまして、『實は、目的を變へたいのです。それで考へてるんですが、矢ツ張り、文學の方が僕にやアいいやうに思はれるから。『實際、最近俄かに自分の物ごころに赤や白やの色覺がちら付いたり、變はつたりして見ると、こんな經驗は、わが國で今名うての政治家だが雜駁なあたまを有してゐるらしいもの等のではなく、寧ろ外國の詩人傳などにある人々のそれであつた。だから、自分も大分迷ひ出してゐたが――まだはツきりと考へをきめてないのに、この場合の云ひぬけとして、もう、きまつた如くしやべつてしまつたのだ。
『そんなことは許せない！』父は本氣になつて怒鳴つた。『文學なんて、惰弱で又ろくに金にもならないことを男子としてすべきではない！』
『解釋が違つてる』と、つい、こちらもむきに答へたが、それツきり部屋へ引ツ込んで來た。
今のおすゐに貰つた小い古ぼけた懷中鏡を机の引き出しから出して、自分の顏を眺めて見ると、男親ゆづりで女好きのすると親戚のものに云はれた赤黑い顏も、色が青白く、目が兩方とも少し窪んだ

やうに寫つてる。どうしても速かにお才さんとの約束だけでもして、自分の物にして置きたかつた。

その翌朝、井戸端へ出た時、お寺の山から井戸のうへをおほつてるあんずの樹がその熟した實を一つ、丁度、春尖のしやがんで下を向いてたわきへ落した。何物が飛んで來たかとびツくりして見たのだが、それであつたので手に拾ひ上げた。そこへまたかの女がやつて來たので、實を持つた手を以てちよツとうへの方を示めし[illegible]笑しながら、それをかの女に與へた。

かの女はにツこりして金いろの指輪ある方の手をさし出してから後、その姉らしい態度を改め、

『あの、今晩いらツしやい、みな留守になりますから』と、ひそやかな聲で告げた。

その日一日はむやみに長かつたのである。そして夜になつてからも、おすゑの臺どころ方づけが殆どわざとらしくなかなかすまなかつたので、家を出なのは九時を過ぎてゐた。

『日暮れからお待ちしてましたのに』と、かの女は不平さうであつた。

『でも、女中が勝手もとにがん張つてましたから。』

『女中なんか――?』

『………』そこにも渠はかの女の注意を姉の言葉らしく感じた。ふたりツ切りではなかなかさし向ひになれなかつたので、渠はやツと隔ての堰きを切りぬけて來たやうな氣がした。

今晩こそは、言葉に云へないでも、手を握らせて貰つて、約束の手がたを得ようと胸をどき付かせ

てゐると、

かゝ女ゞ年ゝへのせいだらうと思へる平氣な落ちつきを以つて、そのおやぢさんが商買の手本にしてゐると云ふ武者繪の本を見せた。が、間もなくその女のおやぢさんが歸つて來たので、そこ〳〵にいとまをつげた。

『お前は向ふの法度破りのうちへ度々行くさうだが――』渠の父は渠の歸るのを待ち受けてたのか、歸ると直ぐ茶の間へ呼び込んで、詰問した。

『度々ぢやアない』と、つッ立つたまゝ、渠もどうせ知れたものだから白狀した。が、自分のきまり惡さを隱す爲めに、そばに自分の母と共に坐わつてるおすゑを睨み付けながら、『そんなおほ袈裟なことをお前が云つたのか？』

『いいえ』と、こちらを見上げたが、その否定の樣子は如何にもわざとらしかつた、『わたしではありません。』

『うそつけ！時計も讀めない癖に！』

『度々ぢやアなくとも』と、父が受けたのを一しほ渠は氣持ち惡く思つた。おやぢに思ひ物があらば、こちらも別に言葉のうへだけの約束ぐらゐはして置いてもよからうに！『矢ツ張り、行つたのはほんとうだらう？』

『……』直ちにうんとはうな付けなかつた間に、自分の母も心配さうに口を出した。
『お前は氣をつけないといけないよ。向ふはお尋ねものも同様だから、ね。』
『馬鹿な！それとこれとは違はア！』
『でも、おかみの御法度を破つて商買をしてるんだから、ね。』
『そんなことアこツちに無關係だ！』坐われとも云はれないだけ、渠は自分にまだ駄々をこねる餘地があると見た。
『云つて置くが、ね』と、父はそのあごをまでうに向きにして言葉を改めた、『向ふの娘は今姙娠中で——うか／＼遊びに行つてるうちにこツちへおツつけられちやア詰らないよ。』
『こツちだツて、そんなことア——』但し知つてるともかまはないとも云へないで、ただから威張りを見せて引きさがつた。
渠は自分もかの女の腹部がいよ／＼少し怪しいと見たのである。それは、それとなく聴く周圍のうわさ通り、出入りの、或若い衆の種だらうだが——それだのに、また、かの女があんな様子をこちらに向ける氣が知れなかつた。けれども、自分があの繪の一片を次ぎへめくらうとした時、かの女は
『わたしが明けます、わ』と云つた。そしてそのとたんに、多分わざとにだらうが、その一片と共に

こちらの指さきを握つた。直ぐまた放してしまつたのだが、その時、あの青い頬にもぱツと時ならぬ紅をさした。そのはすツぱだが女らしい、優しいこころ根を思ひやると、自分の身が今でもぐんにやりと融けて行くやうである。

かの女の腕にこちらの名を入れ墨しろと云へば、必らず私かにその通りするだらう。が、それよりも寧ろ、渠は自分の腕なり胸なりにかの女の名をかの女の手で彫り入れて貰ひたいのである。

七

けれども、今度は自分の父の監視までが嚴しくなつたので、渠はまたなか／＼いい機會を發見できなかつた。そのうへに、斯う叱られた、

『もう、夏期休暇も直きだから、今のうちにもツと勉強して置けー勉強もしないでぐづ／＼してイるから、却つて下だらないことを考へるやうになる！』

『へい』と、渠は人を馬鹿にしたやうな返事をした。

『………』父は渠の突ツ立つてるその顏を見上げて、なほこわい目つきで追窮した、『今から女のことなど思つてちやア、ろくな人間にもなれやアしない！』

『………』女のことばかり考へてるのではないと云はうとしたが、それでもきまりの惡さがよこへ反

れて、父の國に於ける行ひを責めることになつた。『お父アんだツて、隨分あすんだんぢやアないか？』

『そんなことを云ふものぢやアないよ』と、母はそばからさしとめた。

『………』實は、母がそばにゐたので、渠はつい勢ひを得てさう云ふことを云ふ氣になつたのであつた。父がまた今夜も女のところへ行つて歸りが遲いと云ふやうな時には、かの女のつもり積もつた心配が――これもよそに反れて――父の自由過ぎた行動に對するあられもない對抗運動を空想した。それにはいつも自分が引き合ひに出されて、自分の姉と共に母が相談じみた悔しまぎれの話し合ひをしてゐたに據ると、自分をもツと年うへにして、せあて姉ほどの年になつてれば、うちへよく遊びに來る舞ひ子なり藝者なりにくツつかせて、さんざん放蕩をさせて見たら、その親はその時初めて目が覺めるだらうにと云ふのであつた。自分はその時から耶蘇の說教をきいてたから、佛教や儒教の古くさい空氣の中に育つたをんなどもは下だらないことを云ふものだと超然としてゐた。が、それでも母や姉が父の免職を豫期しての心配には十分同情したので、父に對して一度淚の爲めにかた言のやうになつた忠告をしたのだ。そんなことを自分の母は今全く忘れてしまつたかのやうだ。そして父をしておもて向きは威だけ高に答へしめた、

『コツちなんざア、遊んだツて別に人の厄介にやアならなかつた！お前にやア、まだその器量がない。』

『………』積極的には無論ないかも知れないが、消極的には、女と共に私かに言葉の上の約束だけは

して置くこともできる！それで滿足できないなら、手に手を取つて――乞食をでもするつもりで――逃亡することもできる！まかり間違へば、また、心中情死をも！

渠(かれ)はわざと極端に自分の考へを持つて行つたのだが、この情死と云ふ觀念(くわんねん)を元のやうにさげすみはしなくなつてゐた。もとは、楠正成の自刄を卑しんでも、石田三成の生殘りを新らしい信仰の犧牲的實現だと思つた。が、耶蘇教の思想を離れて見ると、後者は後者として正しいと同時に、前者も亦前者としては間違ひがなかつた。そして近松門左衞門あたりの心中物を讀んでも、人情と誠實との至り極まるところは、既成(きせい)の信仰や道義をただかたちのうへで押しつけるべきものでないことが分(わか)つた。

けれども、自分のこんな理論若しくは信仰――これはいろ／＼な女に迷ひながらも近ごろになつてます／＼自分の確信となつて來たものだが――を以つて親を說くのは、つまり全世界の人を救濟するだけの努力を要することであつた。が、釋迦やキリストが全世界を救つたと云ふのは眞ツかなうそで――自分(じぶん)の考へでは、全人類は救へるものではなかつた。耶蘇教的宗教家となつて、天國(てんごく)へ人々の手を引いて行つてやらうと思つたのは、自分の一時の夢であつた。天國にせよ、極樂にせよ、それが理想的であるだけ、そこに至る條件は完全無缺その物であらう。が、人間は――たとへちよツと神たる空想的條件の如(ごと)くちよツとは完全無缺の域に進めたとしても――生(い)きてる以上は海の潮のやうな滿ち干がある。まして、その滿ち干がいつも不完全な生活であるのは免がれないに於てをやだ！

これを自分が學び得たのは鹿爪らしい宗教論や哲學に於いてではなく、却つて經濟學目中の貨幣論に於けるグレシャムの法則からである。この頃では、自分の學問を演說口調で音讀するのは——あまりに馬鹿々々しくもあり、またお才さんに聽えても見ッともないので、——やめてゐる。が、神經の衰弱と女の戀しさとの間に於いて私かに謹んで考へて見ると、所謂聖人が出ても、世を救へないのは、救はうとするからではないか？いや、聖人も人間だから、人間を人間以上に救はうとしても、それは自然の理法に叶つてはゐないのだ。矢ツ張り、もと〳〵通りになつてしまう。これ惡貨幣が善幣貨を驅逐するのではないか？手を引くものも引かれるものも、結局は、惡貨幣なんだ。人間は惡貨幣たる本性を自覺して、そのままで自分は自分を生活させればよかつた。

『これほど謙遜で、而も言を得た道があらうか』と、渠は躍りあがつたことがある。『自分が踏むから道はできるので、自分の踏まないところには道も何もあるもんでない。おやぢが何と云つても、政治なんかの野心は放棄して、お才さんと一緒になり、貧乏をしても文學に自分の足を踏み出すことにしよう！』自分の政治志願にはまだ自分で見たところの宗教的偏見が加はつてて、それで以つて世を敎へると思つてたのであつた。『これが分らないものは、親でもこッちの至誠を理解しないのだから、それまでのことだ！』

斯う考へをきめたのだが、これを父にうち明ければ、また、一概に、

『をんなの爲めに目的がぐらつく』と云はれるに相違なかつた。
『………』女の爲めではない、眞理の爲め至誠の爲めだと自分自身で答へて見ると、然し、理性の世界になつて、お才さんは必要がなくなつて、かの女に對する戀が餘計な事になつてしまう。
いや、自分にはこの餘計なことを二重にしてゐるわけだ。かの女に對する戀をその一つとすれば、父の命令で自分の進まぬ學校へ矢ツ張り行つてるのがその二である。
一方を棄てると父に誓ふ代りに、他方をも父から解放して貰はうか――たとへば、喧嘩の兩成敗の如く。いや！それではお才さんにすまぬ。如何に理性の乏しい女だとしても、その爲めに自分をいよいよ藝術的方面に向けて呉れたのだから。かの女を棄てて藝術だけを取るのは、實不正直な學生が大學を卒業してからその卒業までの費用を出して呉れた養家を後ろ足にするやうなものだらう。それには自分は餘りに人情があつて――。
惑はざるを得なかつた。一旦信じた神を棄てて無にしたまでの惑ひ苦しみよりも、一層實際的に苦しい惑ひであつた。
『それをこそ入れ墨で彫り現はして貰へ！』と、如何にもあざやかな藝術的だとこの場合に思へた聲が自分のどこからか聽えた。
『………』さうだ！かの女のもとへ行つて萬事をまかせるより仕かたがなかつた。あの特有さうな

い微笑の奥から見えるあの女らしい、優しい赤いこころ根を藏する胸に身を抱かれて、全身にかの女の内心までをも精神的な墨針で印象されながら、あまい氣だるい自滅の淵に生きられれば生かして貰ひたい！

今一度――今度こそ――逢へば、きツと成功するにきまつてるのだが、子供に嚴格な父や意地惡く忠義ぶつてるおすゑの爲めに邪魔されて、また三四日もつづいてその機會がなかつた。そしてかの女にそれだけ遠ざかると、――もう、井戸端や梅雨あがりのそとで話をかはすほどでは滿足しなくなつた自分の反動として、――却つて燒けまじりに、自分の藝術心の理性的方面ばかりが段々あたまをもたげて來るやうな氣がするのである。それがまた自分には心寂しく、むな苦しかつた。

不承無精に徒歩でかよふ學校みちも、丸の内を虎の門から行き、神田橋を這入つて歸つて來るのであるから、このやうにあたまが物憂く、神經が疲れとがつてる自分の足には、面白くかよつた時とは違つて、なみ大抵ではなかつた。そして教授や講師どものまじめ腐つた講義も、多くは、ミルや、バジホトや、アダムスミスや、リカルドや、ロシエルなどの淺薄な受け賣りであることがますます見え透いて來て、自分の足やからだの疲勞を補ふにも足りなかつた。

その日もみちみち何だか癪にさはつて、むしやくしやしながら歸宅したのだが、まだ袴もぬがぬうちにおすゑが飛んで來て、

『春夫さん、あなたの好きな人がお嫁に行きますよ』と、あざ笑ひながら自分に告げた。
『女が嫁に行くのが何でをかしいんでい？』
『でも、あなたが御心配でしよう？』
『馬鹿！』
　それでもそのわけを知りたかつたので、そらとぼけながら聽いて見ると、けふ、袴をはいた人が向ふへ來て、お才さんのいい緣談があると云つて歸つた。あす、また詳しく話に來るのださうだ。
　その翌日は、何と云はれても、渠は學校へ行けなかつた。かの女がどうなることだか、かげながら知りたかつた。そしてまたじツとしてゐられないので、急いで手紙を書いて見た。
『拜啓——ほのかに承はりますと、あなたはお嫁に行く話ができたさうですが、ほんとうですか？實際にあなたがあなた御自身で御承知なさることはないと思ひますが、それとも俄かにお氣がかはつたのですか？僕は、もう、あなたよりほかに無いのです。あなたに手を握られた時直ぐにもこの心を申し上げたかつたのですが、丁度御尊父が御歸宅になつたので何も云はないで歸りました。あなただツて、もうこの心はお察し下さつてるでしよう。やめて下さい。お嫁に行くのはやめて下さい。今度お逢ひする時必らずあなたのお膝もとにひれ伏して——』斯う書いた時、渠にもとの信仰上に使つた言葉が自分の赤い慾の爲めになつてるのに氣が付いたが、そんなことには頓着してゐられなかつた。『あな

たのお許しを得ます。どうか辛抱してゐて下さい。僕は學校へも行かないで心配してゐるのです。あなたはあれほど僕の心をおびき出して置きながら、僕がそれを感じないでゐるとお思ひですか？僕は父が反對すればあなたと一緒にどこかへ行つてもいいのです。あなたもさう決心してゐて下さい。あなたを失ふのは僕のいのちを失ふのですから。』

ちよツと渠は讀み返して見たが、どうも自分の本統の精神は別にあるやうだ。が、自分の今動いてゐる内心は十分にこれを隱しながら向ふへも通じさせることができると思へた。

折を狙つてかの女にそツと手渡ししようと、これを封筒に入れて、おもては宛て名だけにし、自分のふところに入れてゐた。然し、けふに限り、何度井戸端へ行つても、かの女は出て來なかつた。そしてお晝少し前に、向ふのおやぢさんがその人らしい者とそとへ出て行つたのを見た。

思ひ切つてかの女の家の勝手もとから手紙を投げ入れようかと思ひながら、その前を井戸の方からとほつて見たけれども、かの女の兄がゐるやうであつたからとほり越して、自分はうちの玄關の方へ曲つてしまつた。そして思ひ返して見ると、たとへ兄などゐたところが、大膽にほうり込んでかの女の手に這入りさへすれば、もう、かの女のこちらに向ふ決心ができてしまうのであつた。が、心はあせつても再び自分の足を返すだけの勇氣が出なかつた。

そのまゝ家に這入つて、かの女を空に描きながら暫らくぼんやりとしてゐた。すると、いつのまに

か、こちらの勝手もとに人が集つてるけはひであつた。自分も飛び出して行くと、下宿人二名の外に父も母も集つてたが、

『……』一段低い流しもとに立つてるおすゑがこちらを手で拂ふ眞似をして、靜かにせよと云ふ意を示した。そしてそとにも近處の人が二三人見えたうちに、おもて向ふのおみよさんの肥えた姿がわざとらしく手桶を提げたのも見えた。

皆、息を殺してゐた。そしてはツきりではないけれども、聽えるのはただお才さんの家の話し聲であつた。おやぢさんも旣に歸つてるらしい。けれども、その話し聲は立ち聽きするものがあるのに氣がついた如くぱツたり止んだ。

『二階で聽いてたら』と、下宿人の一人が說明したところでは、兄が嫁を取るまで妹もかたづいて行かぬといふ約束だのに、まして目かけにく行なんて承知できぬと、兄は大きな聲で反對した。それをおやぢさんは、どうせこんな身持ちになつた奴だから、女郞に賣つたと思つて、やつてしまへと云ふのだ。『それぢやア話が違ふからいやだ、畜生！と云つてたぜ。』

『目かけのこくちだらうが――』

『？』

『………』

かの女の腹の子は若い衆

の種であるに違ひないから、その若い衆はこの頃逃げて、一向に顏を見せないぢやアないか？その寂しさを今度はこちらへ向つていやして貰はうとしてゐたのだ――みだらな女と云へば云へるが――。

『うん、君が人から評判された通りにか？』

『少し靜かに』と、父はこわい顏をしてその客をふり返つた。多分、日高の相手であつたおみよさんもゐる爲め遠慮させるつもりであつたらう。

『それから、また女の方が殺して下さい、殺して下さいと云つたツけ――どうせ何とかだからツて。』

『どうせ何とかだらうが、嫁入りしたくないのか知らん』と云つて、父はまたふり返り、その子の顏を瞰んだ。春夫には、父がその子をかの女からも思つてるのではないかと云ふ心配をしてゐるやうに見えた。

『なアに、反對でせう――行きたい方なんだ。』

『あの腹でかい？』日高は笑ひながらびツくりした眞似をした。

『……』春夫はこの客のこの輕薄な言葉を聽き、この輕薄なそぶりを見て、そんなことをかげで云はれる爲めに人の子をしよひ込むことの如何にも馬鹿々しいのに切めて氣が付いた。そして自分もかの女が姙娠してゐながら人の目かけに行けと云ふ父の命令に從はうとしたことを不思議がつた。

『もツと喧嘩して聽かせばえいのに』と、同じ客が云つてたけれども、向ふは矢ツ張りひツそりして

ゐた。
が、ひッそりしてゐて呉れる方が春夫に取つては結構であつた――向ふの爲めを思つてもだが、また自分のかの女に對してまだ殘つてる執着を考へて見ても。そのうちに聽えた、
『もう、どうとも勝手にしろ！おいらア知らん！』おやぢさんの太い聲だ。
『あれも手こずつてるんだ』と、父が一言云つたので、向ふの聲はそのあとが春夫に通じなかつた。
『どこでも子供にやア手こずるんですよ』と、母もその子をふり向きながら口を出した。
『然し、あんな因果ものにやア――』
『……』そんな心配は無用と、春夫は自分の心で云つた。たとへ自分がかの女を思つても、それは何も因果なんて云ふものではないと思へた。
そとに默つて立つてたおみよさんが取り澄まして井戸の方へ通つた時には、向ふのおやぢさんが玄關に出て下駄をはいてゐた。人々は皆これが爲めにそれぞれ解散したが、春夫はかの女がよそへ行くのをよしたらしいのに一先づ安心して自分の部屋へ立ち歸り、獨りでます／＼かの女を戀しくなつた。けれども、渠には自分の學校行きと自分の目的とが別々になつた如く、また自分の理性と自分の戀とが離ればなれになつた。
渠は夜ツぴて考へたのだが、――藝術は自分の戀を傍觀してもいい。また、戀とは別に行つてもか

まはない。戀を神聖だとか、藝術のいのちだとかするのでは、とても、かの女のやうなものは容れない。かの女が何の爲めに四五日前にはあんなに手を出し、四五日後には直ぐまた他の縁談に應じかけたのだか、第一この譯が分らない。あの時こちらも手を直ぐ提供すればよかつたのを、弱い爲めにさし控へたのであきらめを付けたのだとすれば、或はこちらが惡かつたのかも知れぬ。それにしても、なんでまたさう氣がかはるのだ？父の想像したやうに腹の子を誰れかに早く押しつけようとするのでは、無論、自分だツてそんな馬鹿々々しいことをされたくはないが――。

けれども、ます〳〵かの女は戀しいのである。いや、かの女の弱味につけ込んでかの女の赤い切れ、かの女の金いろした指輪の手、かの女の顫える微笑、かの女の姉らしいみだらが戀しいのであつた。肉の戀――これで滿足だと考へて、渠は自分の疲れ切つたやうな心の底までをも顫はしめた。

八

けれども、

その翌朝、おすゑのあわただしい知らせに驚き起きて、顔も洗はずに云はれたところに行つて見た。こちらと共通になつてるお寺の庭なる池のそばには、父や二三名の下宿人を初めとして、寺の住持や小僧が集つてた。そして池の中にはお才さんが兩手を胸に合はせたまゝあふ向けに浮かんで死んで

ゐた。

『畜生！』自分も斷ッ心に叫ばないではゐられなかつた。自分をも――まだ約束もしないうちに――棄ててしまつたと思へたからである。餘りに見え透いてる――餘りに薄情だ――こちらを出しにして、果してその子を押し付けようとしてそれができなかつたので、

、

あるくらゐのことは、如何に年したでも分らないことはない。自分はかの女が俄かに憎々しくなつた。

『一體、お前は知つてないか、ね』と、突然、父はこちらを半ばにらむやうにして、家の離れと山との間なる裏木戸の方を指さしながら尋ねた、『誰れか毎晩あすこを明けて這入るものがあるのを？』

『どうしてそんなことを聽くのです、こツちは見まはり役でもないのに？』

『然し』と、今度は折れて出たやうにして、『あすこが明いてたので、直ぐ庭をとほつてここへ飛び込んだらしい。』

『………』春夫は自分を父がかの女とあひ引きでもしてゐたかのやうに思つたのではないかと考へられて、餘りにまた馬鹿々々しかつた。『勝手に飛び込んだものを、人が知らう筈はない。』

さうは體裁を作つたものの、始終思ひをやりかはしてゐた井戸端をとほつて、こちらの裏木戸へ這入つた時、かの女にこちらが思ひ出せてゐなかつたかどうかを知りたかつた。

そこへかの女の兄もこちらの庭から驅け込んで來た。案内もなく失敬な奴めと叱りつけてやりたかつたのだが、こんな場合だからおほ目に見てやつた。そして、

『お氣の毒なことになりました、ね』とまで挨拶したが、向ふはろくに返事をしなかつた。そして、かの女の死體をかきつばたの群がり簇つてる横あひから引きずり上げて、死體の腹部へその流れ落ちた片袖の先きをつまんで載せた。

死んだあとまでもかの女の耻辱を見せたくないと云ふ意味であつたのなら、春夫は自分も――若しかの女の兄か弟であつたら――この時同じことをしてやるだらうと考へて見た。そして斯う云ふことに詩や小說の材料を一層豐富にすることができたのに力を得て、自分はいよいよますます藝術家たる決心を強めた。

つらつら考へて見ると、自分はかの女に直接關係をしなかつたのは理性上の仕合せであつた。が、どうせ死なすほどなら、その生きた身體をかついで行つてどこか兩方の親にも見えないところに一ときでも隱して置くのであつた。

然し何と云つても、もう駄目になつた。かの女の代りを探し出すと、かの女よりもまた年うへだが、もう、おすゑの外にはなかつた。そのおすゑが――お才の葬式が出てから四五日日に――こツそりとまた春夫の勉强室に這入つて來た。

「どうしたい』と、渠は何げないふりで自分の胸中に於けるをののきをごまかした。

が、かの女の方はさしたる引け味も持つてゐなかつた。笑ひながら、机の角にその手をおろして、

『あなたは矢ツ張り死んだ人と仲がよかつたの、ね。』

『どうしてそんなことを?』

『でも、書き置きがあつたと云ふぢやアありませんか——おなかの子は春夫さんのだと云ふ?』

『誰れがそんなことを云つた?』

『お向ふのにイさんが、お隣りの人に。』

『馬鹿!そんなことを云つたら、向ふへどなり込んでやるぞ!』何ゆゑに罪な人に着せようとしてあの兄が勝手なうそを云つてるのだらう?若しまた果して書き置きがあつたとしても、不断だツて人に物を云ふのを避ける家のものがわざ〳〵こんな秘密のことに限り他人に口外したとは、死人と兼てうち合はせの上の手品であつたらうか?それとも、あとかたもない疑ひをあとかたもない事實らしく云つた方が、若い衆の種であつたといふよりもまだしも上品だと思つたのか?兎に角、そんなことなら一層容易に、死人を生きてた間にこちらの手にのせることができたのだが、と云ふ毒々しいまでの思ひ出や後悔の感情が、今やすべておすゐに向ふのであつた。が、それを苦笑にまぎらせながら、『然し』と一段低い聲になつて、『お父アんも知つてるか?』

『……』かの女も釣り込まれて、ただそのあごでのみえいとうなづいた。

『ぢやア、大丈夫だ』と、渠はかの女を突ツ放すやうにまた當り前の聲であつた。父がその話を知つてこちらを責めないのは、眞實の有無に拘らず、もう濟んでしまつたことと安心してゐるのだらう。ましてこちらには全くおぼえのないことだもの。然しそれを今更ら私かに惜しまれた。お才の早くつけ込めばつけ込むことのできたあだな姿ばかりが――入れ墨した如く――春夫の胸に深く刻まれてゐるのであつた。

九

それからと云ふもの、おするの樣子ばかりに春夫の注意は向いた。

かの女は朝ゆふのお化粧をすますと、必らず一度は日高の部屋へ行くやうであつた。無學なものだから、そそのかされると、本來はさうでないにしても段々浮氣ツぽくなつて行くのかも知れない。相手に人の口かけのところでそら寢をしたほどの喰はせ物であつて、如何に親切さうでも――いや、實際に行き屆いて親切さうだが――ほんとうには信じられないのに。そしてこの頃では、また、たまにはおみよさんのもとへ行つてるやうだ。

そんな男の部屋へおするは何でまたしげ〳〵行くのだらう？時には、ほかで手を叩いてゐても、そ

れには氣がつかないで何かしらあはあはと笑つてる。そして長い間そこを出て來ないこともある。
萬事にやかましい自分の父がそれを知らないこともなからうと自分は不思議がつてると、或時、果して茶の間からせッかちさうな手が鳴つた。おすゑはあわただしく二階を下りて行つたと思ふと、直ぐ叱られた。

『何をべちやくちやしやべつてるんだい！お前が日高のところへばかり這入り込むから、うちの用が後れるばかりぢやアない、ほかのお客さんが不公平だとおこつてるぢやアないか？』

『……』それは實際だらうと、自分にも贊成できた。が、その不平黨のうちには、鹿爪らしい舊教信者が一人あるのを滑稽に感じた。

そのうちに、長い間うちの客であつた日高は一先づ都合があるからと云つて、荷物の一部を殘して他へ轉宿した。春夫の想像では、父が餘りに燒き餅らしくがみ／＼女中を叱るやうになつたから、その相手としてここにゐたたまらなくなつたのだ。若しまたさうでなくば、おみよさんの轉居さきを追つて行つたのか？兎に角、おみよさんは近頃どこかへ引ツ越してしまつたのである。

『おやぢを刺戟したお手本がゐなくなつたと同時に、またおやぢの戀がたきも去つてしまつたのだ』と、渠は獨り鼻さきで笑つた。そして笑ひながらも、ここになほ一人殘つてゐはしないかと考へて見た。ただ遠慮して敬意を表してゐるのである。

二三日すると、日高は車屋を使ひによこして殘してある荷物を要求した。父はその手紙を向ふの白筆だから確かと見ると云つた。そして自分で二階からその物をおろし、今一つあるから待てと念を押したが、またはしご段をあがつて行く足おとがした。

そこへおすゑが中廊下を奥の方からやつて來る草履のおとがしたかと思ふと、いきなり、かの女の怒つた聲で、

『その行李をどうするのです？』

『わたしのお客さんが取つて來いとおツしやつたので――』

『これは日高さんのですよ！』かの女はそのそばに立つてゐるらしかつた。

『どなたのか姓名は知りませんが、今、ここの旦那は確かな手紙を持つて來たのだから渡してやるとおツしやいました。』

『いいえ、わたしが渡しません！これはわたしが預つたのですから、日高さんが相當のことをして來なければ渡しません――あのうそ付き！』

『そりやア、またどうしたと云ふんだ？』父が丁度おりて來てからの言葉だが、餘ほどあはれみを含んだ調子であつた。おすゑはあの大きに體格ですすり泣きをしてゐるやうすだ。『この小さな行李も日高さんのだが、ね、お前も聽いた通り斯う云ふわけぢやア、この女中と何か相談してあることもある

のだらうから、こッちの一了見ぢやア氣の毒だが渡されません。』
『さうですか？』
『まア、向ふへさう云つて貰ひたいのだが――』
『それも尤もでしよう。ぢやア、さう申しましよう』と云つて、車屋は歸つて行つた。
『あの薄情をとこめ！』おすゑは行李の一つを蹴飛ばしたおとがした。『今の今までさうとは思はなかつたのに！』
『然しこの荷物にやア何も罪はないよ――若しもいためなどしてあとで云ひがかりでもされちやア、こッちが迷惑だ。』
『とう／＼あいつにだまされたんだ、ね』と、母がおすゑに同情する聲も聽えた。
『……………』いつのまにくッついてたのかと、春夫はそんなことを考へて見た。すると、ずッと以前に直ぐ隣りの借家を貸してあつた或町なる燒き芋屋の隱居から、その孫むすめを借りて、ちよツと女中がはりにしてゐたことがあるのを思ひ出した。その娘は少し足りなかつた。そして矢ッ張り或客にだまされて兒を孕み、それを殺したかどを以つて何年かの懲役に行つた。それが或明けがたのこと、春夫がたま／＼便所に起きた時、とぼけた寢むさうな顏をして、寢卷きの前を亂だしたまま、二階から下りて來るのを見た。その時のやうすが今おすゑに就いても見えるやうであつた。

そ知らぬ顔をして、渠は茶の間へ出て行くと、かの女は第二の行李を自分自身の物に限られた押し入れの方へ運んでるところであつた。そして父と母とは火鉢を中にさし向つて默り込んでゐた。

『全體、どうしたのだ？』渠はおすゑに言葉を向けたのであるが、その返事は母が引き取つた。こちらを横に見上げて、投げ出すやうに、

『つまり、じようにされたの、さ。』自由と云ふことをじようと發音したのは、初めて聽くのであるが、これは母一個のなまりであるか、それとも昔の一般をんなは皆さう云つてるのか、どちらとも分らなかつた。けれども、さう云ふ發音の爲めにこの言葉で現はれる意味が、

一層圓滑に而も眞實に受け取れた。

おすゑがそれでも全くの馬鹿を見まいとして、相手の所有物二つを人質に取つてただけでも、まんざら、燒き芋屋の娘ほどにはおろかでないことが分つた。同時にまた父との關係が全くなかつたことも今回で分つた。

して見ると、自分が遠慮なくかの女に手を出してもかまふまいと渠の心が一しほ動き出したのである。一たび男を知つたものがお才の如くこちらへ容易に思ひを寄せたのには、その理由が別にあつたとしても、おすゑほどの知識程度ではその一度の失敗がどれほどの反省を與へよう？

けれども、その結果はどうだらう？今度は行李の始末ぐらゐでは追ッつくまい。斯う渠が思ふと、

矢ツ張り、自分の戀を自分の理性と別々に取り扱つて置くことができないのであつた。戀が神聖なら、理性もさうだ。理性が不神聖なら、戀もそれでなければならぬ。これを兩存させる爲めに渠はまた新らしい苦しみを加へた。

渠には、もう、あのおすゑが他の女からも、父からも、また客からも、自由に解放された者として現はれてゐながら、渠は自分の胸に燃え立つ慾情をどうしてもかの女にぶツつけることができなかつた。

學校の方は、もう、父が何と云つても行かぬつもりで、渠は自分の新方向に於けることをばかりとぢ籠つてやり出してゐた。が、その目のさきへいつもおすゑのことがちら付いてゐた。

『高がうちの女中ぢやアないか』と云ふ自嘲の聲も内心に聽えないではないが、直ぐそのあとからかの女のおもかげがその内部にまでお化粧をして現はれた。そして何を教へても直ぐ分りよく通じる女のやうであつた。

何よりもさきに一つ云つて聽かせたいことがあるのだが、これを口に出すのは直ちに自分の内心全部をさらけ出すのだと云ふ氣がして、いろ〳〵な折があつても云へなかつた。

かの女もこのやうすを見て取つて、寧ろおそれてゐたものと見え、或朝、こちらの室——この時は、長らく日高に占領されてた二階の三疊になつてゐた——へ雨戸を明けに來た時、渠がけふこそはと思

ひ切つて、先づ蒲團から半身を起すと、かの女は半ば明けた戸をそのまゝにして飛びのいた。

『……』そんなにまでこちらを警戒してゐるのかと思はれたが、一言かの女の爲めに云つてやりたいと思ひ詰めてたことが渠のかの女を見詰める目からも飛び出さうになつた。『おい』と、自分は大きく出たつもりであつたが、口びるまでがふるえながら、『二度と――人に――だまされちやアいけないよ？』

『はい。』かの女はこちらには安心したやうに答へて、ぽツと赤くなつた顔をちよツと横へ向けた。ほかの部屋へ聽えるのを心配したらしい。そして、これも俄かに足こしがゆるんだやうにからだをぐら付かせながら、再び近づいて來て戸を明けにかかつた。

『……』渠はそのかの女の手を後ろから無理に引ツ張りたかつた。けれども、矢ツ張り、自分の本心やら將來やらを思ひやつて、さし控へた。

――（大正七年五月二十七日）――

猫　八

一

『おい、大將』と呼びかけられて、猫八は今まで熱心に讀み耽つてた講談倶樂部から目をその方に轉じた。その聲で直ぐその人だとは分つてたので、心易い氣になつて、

『いよう、先生！』わざと惚けた顏つきをして見せながら、『よくこの電車でお目にかかるぢやアございませんか――さては、何かいい巢でもこツちの方に出來ました、な？』

『なアに、巢鴨の巢、さ！』

『……』それには渠も早速一本まゐつた。が、この時あたりの乘客どもがすべて聽き耳を立てて來たので、渠は今手が明いて引き上げて來た高座のうへの氣分をまた自分の心に引き出してゐた。そして乘客どもが皆自分のお客のやうに見えて來たので、ここは矢ツ張り何とかやり返してやらねばならぬやうな氣になつた。『さうでげしよう、な』と、俄に尤もらしい顏になつて、丁度この時癲狂病院の前を自分らの電車が通つてるのをじろりと見て取つて材料に入れた、

『巣鴨なんかにやア、どうせ氣違ひか猫八のやうな化け物しか住んでをりませんから、な。』
『は、は、はア』と笑つた物があるので、渠はこんな場所でもいつもの手應へを得るには得たが、場所柄を思つてそのうへの輕口をさし控へようとすると、何だかこの口が承知して呉れないやうにも思へた。
『まア、おとなしくしてゐなよ。』私かに自分で自分を制しながら、相手の顔を見てゐた。この人は高見と云つて、一二度或催しに自分を招いて呉れた人で、人の善ささうな默笑をその少し醉ひの出た、そして睡さうなあの顔に續けてゐる。『おい、小奈良の小大佛』と喉まで出たが、朋輩の者でもない人にと思つて、ぐツと呑み込んでしまつた。それから、さし障りのないと思へた言葉がべらべらと飛び出した。『もう、一杯すみました、な——この不景氣に先生はなか／＼景氣がよささうぢやアございませんか？少しあやかりてい、な、——えい？わたくしなぞはこれから自宅へ歸つて、やツと——その、な——熱いのにあり付けるかと思つてますのでげすが、な、かかアがその用意をしてあるかどうかも分りません。』
『は、は、はア！』筋向ふに座を占めてこちらを見詰めてゐた男がまた笑つた。
人の笑ひさへ聞えれば、自分には氣持ちよく響くのであるが、自分自身には少しも面白くないのが不思議であつた。藝人としての理窟を云へば、それは澤山あることはある。人を笑はせるには自分か

ら笑つてゐては利き目がないと云ふこともその一つだ。けれども、自分は人の好む酒をもさし控へて、この商賣に使ふ自分の聲を保護してゐる癖に、人に向つては矢ツ張り酒を呑むかの如く見せかけなければならぬ。こんな苦しいことが他の仕事にもあらうか？人は藝人なんてしやア／＼して、世に苦勞もないやうに思つてるが、その本人にもなつて見るがいい。人の知らない苦勞をこて／＼としてゐる。自分なんかはまるで苦勞の固まりで以つて出來たやうな人間である。

　それでも、一つ樂みなことには、自分の長屋住ひのうら垣根をぶん拔いて、そこから出たところの明き地を前々から安く借りて、野菜を作つてゐる。そして多くできた時は、自分の家族がそれを喰ふばかりでなく、隣り近所のものにも分配してやる。近所のものが喜ぶのを見るだけでも亦一つの樂みである。

　小かぶや大根の葉に附く青蟲や黑蟲は、畝並みに溝を堀つて置いて、そこへ向つて葉を振ふと、皆ころころと落ちてしまう。それを一どきに踏み付けたり、子供なぞ棒の先で突ツついたりして、殺すのである。

　昨今は胡瓜や茄子の苗をも植ゑつけたので、根切り蟲に注意してやらねばならぬ。この蟲は泥棒や自分達と同樣、夜業ばかりする奴だから、晝間探しても少しツだて姿を見せぬ。今夜は一つ、晩飯をすませると直ぐ、自分はふんどし一つになり、子供に提燈を持たせて畑に行き、十分に根切り蟲の退

治をやつてやらうと考へられた。
　すると、この時、小大佛(こだいぶつ)の先生が目を見ひらいて、
『今夜は、もう、用がなからう』と尋ねた。
『へい、高座は二個所すましてまゐりましたが――』これでは自分の返事が足りないやうにも思へたので、裏は向ふの意味を汲み取つて、『どこかうまいところへ、お伴できますか、な？』
『なアに、どうせうちへ歸つて寢るだけのことなら。どうだ、おれについて來(こ)ないか？』
『まゐりましよう――あなたのお指圖(さしづ)なら、どこへでも。』『どこ、華嚴の瀧までもと云ふ歌を――思はず――口もとまで思ひ浮べた。
『或文士達の研究會だが、ね、聞いてゐて爲めにならないことでもない。これから行けば、もう、たツた二時間の辛抱(しんばう)だ。そのあとはお前の世界にしてやるから。』
『そりやア面白いでしよう、な、わたくしも後學(こうがく)の爲めにお伴致しましよう。』『さうは輕い氣持ちで答へたけれども、今しがたやツと下して來た重荷を今夜また今一度背負(どしよ)はされはしないかと云ふことを案じられた。自分には、毎晩組合の義務を果して歸るさの電車の中ほど輕い身心(みこゝろ)になつてる時はほかにないのである。聽いたところでは、今からなほ少くとも二三時間は家に歸れない。して見ると、その間にも畑の植ゑつけ苗の根を二本でも三本でもあの根切り蟲に切られてゐるかも分(わか)らないのだ。

一方にそれを氣にしながらも、やがて電車が終點に着いたので、渠も講談倶樂部を懷中にねぢ込んで、高見さんの後から立ちあがり、ひよこりひよこりと。不自由なからだを出口の方へ運んだ。渠はこの十數年來リヨウマチの爲めに半身不隨のやうになつてるのである。人並みならぬこんな身體をしてゐても、藝が身を助けるの諺で、妻子を先づ人並に養つて行けるのが有難かつた。

默つて歩いてると、こんな生眞面目な考へに沈みがちであるのを、ふと、知り合のでぶでぶ女に出會つてまたうち破られた。

『猫八さん!』かの女はその太つた胴體を自慢さうに前の方へ運ばせながら、行き違ひに、止せばいいのに、こちらへ、その胴體にも似合はぬ優しい聲をかけた、『今、お歸り?』

『いよう、大山大將!』渠はついまた冷かして見たくなつて、いつも通り冷かした。横にその方へ向いて仰々しく立ち停つたのだが、女が笑ひながら行つてしまうので、自分の目を放して言葉でだけ追ひかけさせた、『今一つお座敷があるので、な。』

『さう』と云ふ返事は後ろに聽えてゐた。『ほんとにあなたは稼ぎ手よ!』

『………』なアに、金になるのかどうかは分らないのであるが、向ふが如何にも自慢げに見えるやうにあのからだを運んでるので、こちらもただ何か自慢してやりたくなつて、今からさして行く所をお座敷と云つて見たのだ。

『でツぷりした女だ、な』と、高見さんは云つた。

『どうして――あれでなか／＼亭主にやア可愛がられてをりますから溜りませんや！』

『へい――？』

高見さんは眞面目に聽いてゐたが、自分には實はそんなことは分つてないのであつた。ただ冗談でありさへしたらよかつたのだ。この人も案外話せないと思ひながら、話題を轉じた。

『なか／＼暑いぢやアございませんか？この分ぢやア、この梅雨は乾梅雨でげしようか、な？困ります、な。』

『そりやア、雨が降れば寄席の客あしも減じようから、な。』

『お客の足なら、摺り小木にもなれでさア。わたくしはちツとばかり人の地面を借りて野菜を作つてをります。困るのアそれが、雨が降るべき時に降らないとうまく行きませんから、な。』

二

こんなことを語つてゐるうちに、或家の門を這入つた。ここにも僅かばかりだが胡瓜の畑を作つてあるのが渠には奥床しかつた。

その家の二階へ上るにも、渠は變てこに尻をひよこ／＼曲げてでなければ上れなかつた。けれど

も、自分の事を

『今夜は珍らしいお客さんを一人連れて來た』と云つて、高見さんが六七名の一座へ紹介して呉れた時には、自分もいつも通りお客に嬌へ込んだ時のやうな誇りを感じた。『あとで一つやつて貰つてもいいと思つて——例の猫八です。』

『こりやア面白からう』と叫ぶものもあつた。

『例のは氣に入りました、な、わたくしも多少は知られた藝人ですから。あなたがたのやうな偉い文士方の前へ出ましても、な、その、さうおぢ氣が出ないのは仕合せです。』斯う云つてじろりと一座を見渡すと、無邪氣に笑つたものもあるし、別に感觸を害してゐるやうなものもないらしいので、こちらの洒落を寛大に理解して呉れる人々だと分つた。が、なほ念の爲めにもツと分らせて置くつもりで、『但し前以つてお斷わりして置きますが、わたくしはリヨウマチの爲めに人樣のやうにはからだが利きません。從つて、斯うわざと畏まつてますやうに見えるのもその爲めでげして、あながち諸君を怖がつてる譯ではございません。』

『は、は、は』と來たので、渠は先づ安心して、もう、こちらの物だと暫らく口をつぐんでしまつた。

誰かの書いた小說の研究が初まつてるのであつたが、題目は俳優の事であるから、渠も緣の近い藝

人として聞き耳を立てた。
　當家の主人らしいのは、二三年前にはよく錢湯で一緒になり、近頃でも時々途中で出會ふことがある人だが、これが高見さんに向つて、
『今、「虎」が問題になつてるところです』と云つた。
『誰れのです?』
『久米氏の虎です、五月の文章世界に出た。』
『僕は讀んでませんが』と、高見さんは答へた。
『ここにも讀んでる人は少いのだが――これをわざ〳〵六月の會に持ち出して置いたその人が今夜出席してゐないので、何も云はないで通過してしまはうかと思つてるのです。』
『どんな筋なんでしよう』と云ふ問ひに主人は答へて、
『僕もその人が問題にして呉れろと、ハガキで云つて來てあつたのでちよツと讀んで置いただけなのですが、――淺薄と云へば淺薄な物だが、低い程度で器用には纏まつてると思ふ。作者にもさう深い要求がなかつたのだらうから、あの作者としてはあれでもいいのでしようが――虎とは作の主人公なる三枚目俳優が扮することになつた役目です。この俳優には、原文を引くと、『もう、八歳になる子があつた。そしてその子は去年初舞臺を踏んで彼と同じく否、彼よりももツと正式な、新派俳優になる

未來を有つてゐた。彼はその子を決して三枚目にはしたくないと思つた。』

『………』この本讀みを聽いて猫八はえらいところへ飛び込んで來たものだと思はれた。この思ひは自分でも少し大袈裟な考へだとは承知しながら、まるで自分の事を云はれてゐるやうであつた。自分には男の子が四人あつて、總領は十四で高等一年、次ぎは十二で尋常五年、いづれも出來がよくて級長をしてゐる。この十二のが父親の眞似が上手で、而も父親以上の藝を持つてるが、それでも第二の猫八にはしたくないのである。否、父親が猫の喧嘩や動物の聲を眞似して、高座のうへから客の機嫌を取つてるところを子供に見せたくない爲めにこそ、早くからわざ〳〵こんな不便な郊外を選んで住んでるのだ。猫が虎に變つても、そこに大した相違はない。

『彼の振られた役と云ふのは、ただ虎の一役だツた。』主人が讀んでるのはその小說の本文らしかつた。『人の名ではない。ほんとの毛だ物の虎に扮する一役だけだツた。動物役者と云ふ異名をさへ取つてゐたので、今更ら虎の役を振られたとて、それが何の不思議であらう。けれども、ちよツと悲しく感じた。長年馴れて來てゐ乍ら、職業だと思つてゐ乍ら、どうせ茶化してゐるのだとは思ひ乍ら、自分の中なる人間が馬鹿にされてるやうな氣がして、ちよツと腹立たしくさへ思つたと云ふやうなシチユエイションに在る主人公です。』

『なか〳〵器用には作者の狙つたところは一貫してゐます』と、天神さま見たやうな顔つきの人が熱

心な口調で口を出した。

『……』猫八には、今主人が云つたシチュエイションと云ふ英語が耳に殘つて、苦しいはめと云つたやうな意味の言葉ではないか知らんと想像された。そして自分は實際にお客様方の御贔負についはめられて、それに自分もついはまり込み、とうとう二進も三進も動けない今の身分になつてるのだと私かに洒落れて見た。が、その心の奥ではます／＼藝人のいやなことを感じた。

『座長がそりやア深井君のはまり役だと指摘するところがあります、ね』と、五分刈りあたまの前後へむツくり山脈のできた善智識顔の坊さんらしいのが云つた。

『それから他のものにもその幕はすツかり深井君の虎に喰はれてしまふと云ふやうなことを云はれて』と、主人は言葉を進めた、『渠は幾らかまた得意にさへなつた。けれども、虎だから、臺辭を云ふことがないので稽古にも出る必要がない。その口を利用して子供は上野の動物園へ行つて呉れろと云ふのを幸ひ、ぢやア近頃評判の河馬でも見せてやらうかと云つて、その實、自分は虎の様子をでも研究して來るつもりになつた。すると、途中、電車のうちで或劇評家に出會ひ、どこへ行くのだと尋ねられたので、實は、子供に大評判の河馬を見せに動物園までと答へたが、機敏な劇評家からそりやア嘘だらう、もう聽いてるよ、實は虎だらうと目星をさされた。』

『さう云ふところにも一種の悲哀は出てゐます』と、天神さまが云つた。

『………』猫八は悲哀と云ふ言葉を聽いて、今更らのやうに目を見張つた。ます〳〵自分のことでも作り換へて、うがつてあるやうに思へたからである。右の手を疊に突いて、左りの手を膝の上に在る疊んだ手拭ひの上に置いてたのだが、人情と云ふものは誰れが感じても結局斯う同じところに落ちるのかと感心して、その横坐わりのままあたまを少し後ろへ反らせて『成るほど！わたくしのやうな無學のものには小說なんかはいい加減に作り事を書いて、うそ八百を並べてあるものと思つてをりましたが、——尤もこれはお歷々の先生方には初めから失禮であつたかも知れませんが——今伺つて見ますと、成るほど本統のことを狙つてあるものでげす、な。』

『今の小說は無論皆さうだよ。』例のは少し怒つたやうに答へた。『うそを書いて滿足してゐる小說家とは吾々は小說家が違ひます！』

『ふ、ふん』と鼻で笑ふのは智識がほであつた。

『たか〳〵憤慨するぢやアありませんか』と、ひどい近眼らしい人もにツこりして冷かしを云つた。

『別に憤慨してゐるのではないけれど、世間にはよく馬鹿者があつて、碧瑠璃園や德富蘆花のやうないい加減な通俗小說をえい方の標準にして俗惡な批評をするものが多いから。』

『どうも濟みません。』猫八は澄ました顏でちよツと頭を下げたので、皆が笑つた。が、それだけでは今度は自分が滿足できないやうな氣になつて、一つ冗談を云つた。『わたくしは、然し研究の途中でき

だ劇評家にはお會ひしたことがございませんが、或時、蚯蚓の啼き聲を研究する爲めに、あの、そこの廢兵院の森に夜明しをしてしやがむでをりましたら、泥棒と見誤られて刑事に誰何された事がございます。』

『それも、君、一種の悲哀か眞面目かの結果だよ』と云ふ天神樣の說明があつただけで、別に誰からも、は、は、はツとは來なかつた。

『………』猫八は豫期に反して、がツくり調子拔けがした。そして初めて思ひ及んだのであるが、これは自分のお客ではない。自分は藝人として人を泣かせたり笑はせたりしても、自分の泣いたり笑つたりする餘地を持たない。ところが、この人々はまた自分らよりも一段うは手で、人を泣かせたり笑はせたりする藝人その物の自分では泣いたり笑つたり出來ないその心持ちまでも研究してゐるらしい。さすがはその方の專門家達だらう。これぢやア自分は潔く兜を脫がうと云ふ正直な謙遜心を起して、『さうしてその俳優はそれからどう致しました』と尋ねて見た。重に子供との關係を知りたかつたのである。それでも、多分、役不足を云つて舞臺に出なかつたとか、子供だけは芝居へ見に來させなかつたとか云ふのが落ちだらうと高をくくつてゐた。

三

『そうれ見給へ。見事に白狀に及んだぢやないかね、併し虎を見たいんならわざ〳〵動物園まで行くにも及ぶまいぜ。――二升飮ませれや誰だつて成ますが?――どうだい、そツちの虎を見に行かうぢやないか?――そいつアいけません。何しろこいつを撒くわけには行きませんからね、と彼は又子供をかへり見た。と云ふ所もあるのだが』と、主人はなほ本を見い〳〵語つて行つた。そして皆が猫八などのゐるのを忘れて虎の方へ心を傾けたが、猫八にはその虎が自分のやうであつた。『馬鹿さ加減を云へば由井の役だツて同じやうなものさ。寧ろ君の虎一役が名譽かも知れんぜ、人氣が虎の一身に集まつたりして、ね。――さう思つてわたくしも一生懸命やるだけはやるつもりなんですが、ね。――さうとも、僕たちだツて寧ろ君の虎に期待してゐるよ。――恐れ入ります、と深井は苦笑をし乍らも、內心少からず慰められた。』

『いけません、な』と、猫八は顏を顰めて見せながら、『そんなところで例のシチュエイションをやつては!』

『うふ、ふ』と、乙な笑ひが聞えた。

『先生がたの前で、わたくし風情が、生意氣な英語の使ひ方をしたのは間違つてるか存じませんが――』この英語は所謂妥協と云ふことに當るのではないかと思ひ直したのだが、『兎に角、その深井とか云ふ俳優がその場合に折角持つた眞人間らしい考へを、劇評家の煽てで無くさせてしまひ、うか〳〵

とまた調子づいて行つちやア困ります、な。』

『ところが、さうであるから却つて面白くもあるのだが――』と、主人は云つた。

『然しわたくしならそんなことは』と、渠は自分をそんな馬鹿でもないと辯護するやうに熱心じみたが、主人ばかりでなく皆も耳をかたむけて呉れなかつた。

『動物園に行つて虎のぢツとしてゐるところや欠伸をしたのを見ただけでも、渠は兎に角色男の氣持ちよりも虎の氣持ちをよく分つたと思つて歸宅した。いよ〳〵初日が來て、縫ひぐるみの虎が舞臺に出て欠伸をすると、それだけでも大向ふから深非、深非！と呼ぶ聲がかかつたので、些からず得意になつた。そしてその幕切れのところで劇の女主人公に躍りかかると、大向ふを初めとして諸見物の大喝采を得た。』

『人を馬鹿にしてゐるぢやアありませんか？』これは初めて口を出すずツと若い人の言葉であつた。

『そりや人を馬鹿にしたもの、さ』と、天神さまも今度は笑ひながら口出しをした。

『……』猫八もまた何か云つて見たくなつたほど高座で受けるお客からの待偶に對する不平が浮んでゐた。『そりやア、わたくしから見ますと、詰らない事を嬉しがる見物人の事を馬鹿にしてゐるのでごぜいまして、多分その俳優の本人には同情してゐて呉れてるのでげしよう、な――見物なんて、寄席のお客も同樣でげすから。』

『一體、それは』と、高見さんは穏かな顏つきで初めて質問を出した、『作者が皮肉を云つてる作でしようか――僕はさツぱり讀んでゐませんから、意見のあらう筈はないのですが、――今、聽いたところを以つて見れば？』

『皮肉には違ひないのですが』と、知識がほが切り口上で答へた、『こんな淺薄な程度の皮肉でも作者が滿足できるかどうかが問題でしよう。』

『そこだらう、ね。』『近眼は近眼らしくもなく案外にはき〳〵した言葉であつた。『僕もこれは讀んでゐないが、一體、あア云ふ連中の書いてる物は孰れも小器用には纏まつてるが、少しも背景や深みがない。』

『今、猫八君も云はれた通り』と、知識がほは續けた、『主人公に對する作者の同情は見えてるが、その同情の現はし方が極めて薄ツぺらなのです。』

『薄ツぺらでも生活背景がないことはない。』これは主人の發言であつた。『ただ薄ツぺらた背景しか持たせることのできない作者だと云へば云へるのだ。T君がこの作をわざ〳〵提議したのも、今夜出席してゐないからその眞意は分らないけれども、多分、纏まつてもゐるし、またどこか物足りないしと云ふやうなところを疑問にして評議して見たかつたのだらうと思はれる。』

『そりや多分さうだらう。』

『……』猫八にはバツクとかハイケイとかが何のヘラだか分りませんと言つて、皆を笑はして見たかつたが、自分の云つたことを問題に採用して貰つたので鼻を高くして。眞面目腐つた顔で、『さうして、この小說はそれでお終ひでげしようか――何か別に落ちでも？』

『は、は、はア――』二三名がただ笑ふだけであつた。

『……』猫八には變なところでどツと來たものだと思はれた。

『落語家ぢやないよ』と、天神さまがまた入らざる口を出したと思はれたが、猫八は直ぐ自分の無學を冷かされたのだと分つたので、極りが悪いのをまた謝罪に紛らせてしまつた。

『へい、どうも濟みません。』

『小說には落ちなんかはないが』と、主人は言葉を改めた、『猫八なら落ちとも見るだらうと思はれることがこの小說を結んでゐて、而もそれが爲めにこの一篇を淺薄ながら生かしてゐるのだ。深井は幕切れに大喝采を得て縫ひぐるみの姿で得意さうに引上げる時、暗い書き割りのかげから『お父さん』と云つて自分に飛び付いたものがある。びツくりして見返ると、自分の子供が父の餘り馬鹿々々しい役をしたのを子供ながら泣いてゐるのであつた。自分も今更らの如く泣かざるを得なかつた。そして『虎と人間の子とは暗い背景のかげで暫し泣き合つた』と云ふのです。』

『最後のところはなか〳〵振つてる、ね』と、近眼は皆に向つて云つた。

『それがなければ全篇が引き立たないのを見ても』と、知識がほも附け加へた。『この小說が餘りに心細い出來であることが分ると思ひますが――?』

『さうだ。ね。』主人は、もう肩が拔けたと云ふやうな返事であつた。『結局、さう大した作ではない。』

『……』猫八はそれでもこの最後の泣き合ひの一件を聽くに至つてびツくり仰天をしたほどに目を見張つて見せた。これも矢張りわざと誇張して見せた表情だとは自分ながら知らないでもなかつたが、同時にわれ知らず、いつもは心の奥にのみ秘めてゐた物が顏にまで現はれた氣がしたと云ふのは、自分の職業に對する悲しみと次男を第二の猫八にさせようかどうかと云ふ惑ひとが一ときに誘ひ出されたからである。渠は自分の滑稽商賣にも似合はぬ顏つきを人には見せたくないと努めてゐるのだが、努めれば努めるほど顏その物が反對に云ふことをきかなくなつて、鏡にでも映して見れば、自分の顏がべそ搔き面になつてるやうに思はれた。が、もう、それを取り繕ふ事をしないで素直に、『いや感心致しました』と、その小說が一座の作その物でもあるかのやうに敬意を表した。『わたくしにも同じやうな悲哀がございまして、如何にも感心致しました。けれども、若しわたくしにも、その、先生方のお仕になる批評と申すのを一つ云はせて戴きますと、その深井と云ふのが自分の本意でない役を演じながら、それを子供に見せて置いたのは甚だしい間違ひだと思はれますが――?』

『そりやアさうでもえいことで、作者としては問題でない。』

『所が、わたくしにはどうでもいい譯に行かないのです』と、渠は自分もいよ〳〵討論會の仲間入りをでもしてゐるかの如く少し膝をにじり出して、天神さまの意見に反對するのであつた。『わたくしにも子供がございまして、總領と次男とは小學へ通つてますが、次男の十二になるのがわたくしの眞似にかけちやア天才で、わたくしが病氣ででも席を缺勤致しますと、お父アんの代りに行つてやらうなんて申します。』

『は、はア』と、天神さまは感心したやうな、また馬鹿にしたやうな笑ひ方をした。

『商賣とは申しながら、唯さへおやぢが馬鹿な眞似をしてをりますのに、わたくしはまた子供まで馬鹿にされたくないので、子供がおやぢの出る寄席へ接近しない爲め、わざ〳〵こんな不便な郊外にも住んでるのでげすから、な。』

『さう云ふ方の氣分も多少は出てゐないことはないが』と、主人は答へて呉れた、『そこをばかり主とした作ではないから、これはこれでいいのでしよう。』

『猫八君は自分の藝を餘り馬鹿にしてはゐませんか?』近眼が斯う自分に質問した。

『無論』と、ちよツと行き詰つたが、さう考へ直すまでもなかつた。『さうより仕やうがございませんから、な。苟くも人間でありながら、虎の啼き聲までして飯を喰はにやアならないのでげすから。』

『けれども』と、一方の言葉は續いた、『この作の主人公は君とは反對に、早く藝人になれるやうにと

子供を常に劇場へ伴つて來てゐるのでしよう。』

『そんなおやぢが世間には多いので困ります。』猫八は少からず不平であつた。藝人だツて人間だのに、この席の人間には自分に對する同情がないと見えた。こんなところにぐづ〳〵してゐたツて、一文の御禮さへ貰へないんだらうからと云ふ氣になつて、心で、陶淵明の『歸んなん、いざ――いざ、歸んなん』を唱へた。この方が自分を潔くしたのだ。そして明けツ放してある二階のそとに夜が段々ふけて行くに從つて、子供の事と共に自分の畑の苗の事がまた一番心配になつて來た。

□

そこへ、

『そんなことよりも、僕が一番癪に障つたのは』と來たので、また天神さまのお喋舌かと云つてやりたかつたが、さきは例の熱心な調子であつた。『この作者の輕薄な態度である。時事新報に出た匿名の月評にこの作が非常に惡口云つて、久米もこんな淺薄な物に滿足してゐる男だから駄目だと云ふやうなことが書いてあつたので、實は、僕もほん氣でどんなに淺薄な物だらうと思つて讀んで見たのですが、僕にはさう馬鹿にした物でもないと思はれた。ところが、今夜ここの御主人に伺つて見ると、その月評子とはその久米自身であるさうです。』

『へい』と、猫八は澁々口を出した積りであつたが、われ知らずにたりと笑つてゐた。そして矢張り自分の考へ通り、この作者には、この作の落ちまたは結論は自分の本意に出たのでなく、實際の本意は人を馬鹿にした物だとうなづかれた。そして久米とか云ふ人ばかりをすツかり氣に入つてしまつた。『昔の三馬などのやうにちよツと面白い人ぢやアございませんか？』

『そんなに輕薄なんか、なア、久米と云ふ作者は』と、知識がほが云つた。

『そりやア、これまでの作を見ただけでも分つてるぢやないか？』これは近眼の言葉であつた。

『若し輕薄な人なら、輕薄な作をするのが當り前で、――それを好いたり、嫌つたりするのは讀者がはの勝手だらう。』

『矢張り、お客次第でげすか、な。』猫八は主人の說を斯う受け取つた。そしてそれに媚へ込む氣になつて、『然し隨分茶氣のある人で、わたくしは偉いと思ひますが――？』

『偉いにも、色々あるから、ね。』

『わはツ、はツ』と、二三名の者が一緒に聲を擧げた。

『先生』と、これまで一言も云はなかつた書生らしい人が言葉にその神經質らしい口調を帶びさせながら、初めて口を出した。『わたくしは久米氏の物を一つも讀んでをりませんから、あの人の事に就いては何事も云ふ權利はございませんが、――創作にはどうもその作者の人物が裏づけられてゐないと

深くないやうにわたくしには思はれますが――？』
『君はいつも理想主義者的に物を云ふ人だが、如何にその反對のげんじつ主義者だツて、それは決して否定しちやアゐません。』
『それなら、安心ですが――』
『ただ君の云ふやうなことにばかり僕等は停止してはゐない。』
『そこが何うも』と、一方は小首を傾げた。
『たとへその人の人格が出たとて、その人格的生活が出てゐなけりやア矢ツ張りぐたい的にはならないではないか？』
『………』書生の神經質は今度は微笑しながら、お辭儀をして、『それなら、わたくしにも分ります。』
『………』わたくしにはちツとも何のことだか分りませんと猫八は云つて見たかつた。げんじつ主義も自分には分らなければ、ぐたいとか容體とかも分らないので、ただかの落語家のこんにやく問答を思ひ出してゐた。
　その間に、なほ二三の小説が問題になつてるやうであつたが、虎ほどには自分の興味を引かないので自分の坐つてる右手の壁にかかつてる譯の分らぬ西洋畫や、自分の前方の左り手に在るビール箱で組み立てた書棚の本の金文字やらに目をやりながら、出ようとするあくびを嚙みしめた。尤も、主人

は「猫八には酒を出すがよからう』と云つて呉れたけれども、
『いいえ、矢ツ張り、かつぶしの方が』と答へて、主人の細君に餅菓子を供へて貰つた。そしてかの女と共に野菜作りの樂しみやお互の子供教育のことを語り合つた爲めに、子供に讀めさうな雜誌を二三册貰つた。
そのうちに、高見さんから、
『ぢやア一つやつて貰はうぢやアないか』と來た。
『………』さて、これからがいよ／＼おれの世界だと思ふと、虎の小說に得た濕ツぽい氣分などはどこへやら行つてしまつて、自分の藝の評判を虎以上にして貰ひたかつた。いつしか坐り直してゐた自分の用意には、高座に於けると同樣の引き締つた精神が現はれてまだやらぬうちから自分の物眞似聲が自分には聽こえてゐた。右の手の小指を鍵の手に曲げて、直ぐ明いた口の中へ持つて行きかけたが、ちよツと中止してその指を調べて見ながら、半ば獨り言のやうに、『汗で油切つてるから、うまく行くかどうか？』
一應その指のあせを手拭ひで拭き取つてから、どこを風が吹くと云はぬばかりにして、ほうほけきようとやつた。
『巧いものだ、なア』と、天神さまは行きなりから賞めたのだが、それがうるさかつた。

『今のは籠の中での鶯ですが、今度は谷わたり。』けきよ、けきよ、けきよ、ほうほけきよう！それから引き續いて松蟲、鈴蟲、轡蟲の聲。また、鴉、ひばり、うづら。合はせた唇を平たく前の方へ突き出して、おけらの聲。寢靜まつたらしい近所へは少し迷惑だらうがと云つて、雄鶏雌鶏の啼き分け。また草ひばりの聲もきかせた。

どの啼き聲にも、聽き手が聽き手だけにこちらが奮發できたので、皆も靜かに耳を傾けた樣子が見えて、自分の思ひ通り自分も滿足した、そしてお負けとして蚯蚓の聲をして見せるつもりで、

『一般に蚯蚓が啼くと申すのは、あれはおけらの聲ださうですが、蚯蚓も矢張り啼きます、な。』斯う前置きしてちツとまたおけらに似た聲を出してから、『これで向ふの聲を出して見ると分ります。わたくしはその研究に廢兵院の森で夜明かしをしたことがございますが、人の足音がしますと、一旦向ふの聲が途切れます。そこへしやがんで暫らく待つてをりましてそれからまたやつて見るのですが、こちらの聲が向ふのにそツくりだと、直ぐ應じて來ますし、間違つてると御返事がありません。』

『は、は、はア！』主人は特別の高笑ひをした。

『全くですよ』と、自分は眞面目を訴へた。御返事には、つひ、いつもの冗談が出たに過ぎないのだから。

『だから、さ、外國にはもツと大仕掛けに猿の言葉まで研究して見た人もある。』

「わたくしも英語でも學んでをりますと、やつて見ますが――』

「然し、猿は英語を使はない。』

『わはツ、はツ』と、二三名。

「………』まるでお株を取られた氣がして、ちよツと興ざめた。その胡麻化しにだが、『學術上では、猿が人間に進化したと申すさうですが、ここのお話は虎が猿になりました。』

『いや、君の動物まね聲にもなつてありがたいよ』と、主人は答へた。

五

『それはさうと』と、これまで厭な奴だと思はれた天神さまが、この時いい事を尋ねて呉れた。『君がさう云ふことをするやうになつた動機を聽きたい、ね。』

『動機と申しますと――?』

「まア、云つて見れば、初まりの思ひ付き、さ。』

「成る程、な。――わたくしはこれでも初めから百姓、いや、ドン藝人ぢやアございません。尤も、どなたでもさうでしようが』と洒落てから、自分にも思ひ出の多い昔を語つた。自分は片手片足が利

かなくなつてから、女房とも相談して飴屋になつた。が、ただ唐人笛を吹いてひよこりひよこり歩いてるのでは、どんな鼻垂れ小僧でも買つて吳れよう筈がなかつた。最初の日はまるでゼロであつたが、二日目にやッと十錢分だけ賣れた。その銀貨一つを子供に喜ばせかたがた預けて置いたら、子供のことだから、それを橋の欄干に置き棄てて遊んでる間に他の子供に取られてしまつた。三日目にも商賣に出たは出たものの、こんな事ではとても駄目だと失望して、かの吉原土堤の上に足を投げだして、ぼんやり考へ込んでゐた。』ここでわたくしは天來の思想を得て、他日藝人になる素養ができましたのでげすが』と、ちよッときき手を笑はせてから、かはづの啼き聲を覺えた話しに移つた。『ふと、氣が付きますと、田ン圃でかはづが澤山啼いてゐる。』自分は今、目をその方に向けた時の樣子をして、顏を少し横に突き出し、その時やつて見たよりもずッと上手な具合ひに、玉子なりに握つた手のうへの方の穴へ自分の口を持つて行き、ちよッとくッくッと云ふ啼き聲をきかせ、『自分もやつて見ると、多くのかはづのうちから六七匹だけがこちらの方へ向き直つた。これは不思議だと暫らく考へてをりましたが、今一遍』と云つて、かッかッと云ふ聲に改めて見せ、『やつて見ると、今度はその六七匹を除いたあとのかはづがすッかりこちらを向いた。』

實は然うすッかりうまく行つたとは思はれなかつたのだが、その時そばに見てゐた證人があるわけでもないから、安心して話を綺麗にしてしまつた。『そして分りましたのですが、前の啼き方はめす

で、あとのはをすです。さうして其屋にはをすが六七匹ゐただけで、あとは皆めすであつたのです。』

『面白い！』

『……』自分は天神様のお賞めにあづかつて、一層自分の興も湧いて出た。『これがわたくしの思ひ付きでして』、『それから子供の集まつてるところへ行つてその眞似をして見せると、案外によく儲かれた。そしてその翌日からはかはづの飴屋などこへ行つても待ち設けられた。

『先生、飴と云ふものはなかなか儲かるものでげして、僅か五錢のもと手でその時三十錢から四十錢にはなりました。』

『そんなにいい儲け口を止めてしまつたのには？』

『そりやア、わたくしの道樂が嵩じましたのです。な。わたくしには物の啼き聲を眞似るのが持ち前に備はつてたとでも申すのでしようか？何でも眞似ます。いや、すべて啼く物で眞似ができなけりやア、出來るまで研究致します。お客さまのうちにはよく螢を啼けとか、疝氣の蟲を啼けとか云ふ註文が出ますが、それはわたくし以上の天才にも恐らく出來ますまい。わたくしとしては、今ぢやア、猫の喧嘩や蟲、鳥の啼き聲では平凡になつて、飛行器や自動車の眞似もしなけりやア追ッ付きません。』

『そりやア、物眞似にも油斷があつて』と、主人は云つた。『その油斷で多くのものは通俗化させられてしまふ。』

『そんなことでは君も』と、また天神さまが言つた、『見す〳〵墮落するばかりぢやないか？それよりも、いツそ、今君が自分の經歷を語つたやうな具合ひに、自然で飾り氣がなく、寄席へ行つてもその通りしやべつたらどうや？その方が餘ほど自然で面白いぢやないか？』

『僕もそれがいいと思ふ』と、近眼が贊成した。

『然し、わたくしのいのちは高座のうへからお客を馬鹿にして見せるところにあるのです。』

『そりやさうだ、ね。』高見さんは兩の膝を兩手で抱いてゐながら、こちらの味方らしく云つた。『この人の臨機應變の皮肉や冷かしと來たら、隨分痛快ですよ。』

『その代り、こちらも亦或ところまで行くていと、妥協や讓步をして置きます、な。蛩や疳氣の蟲を啼いて見せることもございます。どうせ啼く物でないから、どう云ふ風にでも構はないわけでげすが』と、それからきツとした見えになり、『おめへさんも隨分わからねい、な、疳氣の蟲が啼けるかい？それが不滿足なら、どうせ、もう木戸錢は取つてあるのだから、とツとと歸つてもいいぞ！――これだけでは餘り殺風景になりますから、最後には向ふにも花を持たせまして――だが、おめへさんだツても途中から歸りたくはなからう。おいらも實は歸したくねいんだ――てなことにしてしまひます。』

『それも一種の落ちだらうか、ね？』近眼が笑ひながらの問ひであつた。

『矢張り、一種の結論でしよう、な。』これは猫八には先に虎のお終ひでちよツと云ひ損なひをしたと思へた、その取り返しの積りであつた。『ところが、これが宮様がたなどへ招かれて參りますていと、ぎや〱ぎやアなんて』と、突然歯をむき出し、目を躍らせ、顔を珍妙にしがめて、猫の喧嘩する時の様子をして見せ、皆を一度に吹き出さしめた。が、自分は澄まして、言葉を續けた『庭鳥ぢやアない、猫の蹴合ひをお見せ申すにはまだ差し支へはございません。先様が御婦人である場合などには、やんごとなきお顔をお隱しになる扇の影からもそのお笑ひがよく伺はれます。が、時によりますと、――○○○様へあがつた時などは、お前は物眞似ばかりでなく、落語と云ふものも巧みださうだから、一つ面白いのをお客さま方にお聽かせ申せと云はれましたので、わたくしはお斷り致しました。とても畏れ多くてできません。けれども、達てと云はれたので、一席願ひましたことは願ひましたが、――妙なもので、初手から少しもお分りになりません。どうせわたくしどもはわたくしどもの劣等な社會の事しか存じませんから、自然その話もそこへ落ちます。――おい、八公、ゐたか』と云つて、尻を捲くつて上り框へ腰かける様子をして見せ、『これがそも〱何の事だか通じないのですから、――べらんめい裸ぢやア尻は捲くれねいから、な、なんて云ふ氣を利かした面白味も通じません。』失禮な申し分ではございますが、全く張り合ひがない、どツと來べきところをでも皆様がたはお澄ましになつてをられます。』

『そりや生活(せいくわつ)がまるで違つてるから、ね。』

『さうでげしよう、な。』渠はさすがに學問ある人の仲間(なかま)は違ふものだと考へられた。こちらが自分で實際に當つて來ながら、而も自分では說明し切れなかつた事をも、渠等のうちではたツた一言(ごん)で分らせて吳れた。本統に上つ方と自分らとの生活(せいくわつ)がまるで違つてるのだ。暮し方に月と鼈(すつぽん)との相違がある。

　斯う思つて、自分は自分らの裏長屋の事を心に浮べてゐた。とツ付きが怠け勝ちの鍛冶屋で、いつもその山の神に怒鳴(どな)られてる。その次ぎが女髮結ひで、男が何人代つたか分らない。その隣りが自分の家で、そのまた次ぎには電車の車掌がゐて、人のまだよく眠つてる時からがたツぴしやり出して、ちん／＼屋の商賣に出て行きやアがる。そしてどん詰りには、日ツかちで跛足の蜆屋(しじみや)がゐる。實は皆殆ど眞ツ裸かの社會であるが、そのうちでも人間らしいのは先づ自分のところばかりだ。百姓はほんの自分の片手間仕事だが、それでもそこにあの我利々々亡者どもの知らぬ餘裕(よゆう)がある。そして大根や菜ツ葉をも時々は渠等にただ分配してやつてる。これでも自分らは宵越(よひこし)の金は持たぬちやき／＼の江戸ツ兒で、自分は藝者の腹から淺草の有名な料理屋に生れ、女房も神田上水に産湯(うぶゆ)を使つたものだ。ついでに自分の見識を皆の前に披露したくなつた。

『或時、わたくしの長屋の入り口に立派な馬車(ばしや)が停りました。どうせきまづい生活をしてゐるのは御承

知であつたでげしようが、――猫八と申す藝人の家はこちらか?――へいと、わたくしはちよツと當惑致しました。――では、本人は在宅かどうか?――へい、師匠は今湯にまゐつて留守ですが――まさか、ふんどし一つのわたくしがその本人ですとは出られませんから、な。――ちよツとお待ちを願ひます、只今直ぐ呼んで參りますから――と云つて一先づそとへ出ました。女房にはちよツと目くばせ致しましたが、氣まづい顏をしてをりました。――わたくしは家を出るていと、直ぐ入り口の鍛冶屋へ這入り、そこのかみさんに譯を話して衣物と帶とを持つて來て貰ひまして、今湯から歸つて來た風をして、借りた手拭ひを水に濡らしたのと石鹸箱とを持つて、――お待たせ致しました、濟みません、わたくしが猫八ですが、御用は?――弟子と師匠とが少しも顏が違つてませんから、向ふも不思議に思つた　は止むを得ません。――實は、〇〇家から來たのだが、同家では只今お前の話が出て、面白い藝をする者ださうだから直ぐ來るやうに云つて來いとのことだが、と云ふのでした。」

六

この時、近眼が餘り遲くなると困るからと云つて席を立つた。その横顏をじろりと見上げて、自分は少し不愉快の意を表したけれども、渠は氣が付かなかつた。その上に、また他の二人も立つて、一緒に歸つて行つたのである。これが寄席なら、どうせ木戸錢は濟んでるものだからと云ふ諦めも付き

易い。けれども人が折角心を落付けて正直に語り續けてゐるその中途で失敬して行くのは、本統の失敬ではないかと思へて、諦めが付き兼ねた。途中の暗い横丁から化けて出てやるぞと云つてやりたかつたが、主人を初め、まだ熱心な相手が殘つてるので話の調子は左程折れもしなかつた。

『今話が出たと云つて直ぐ呼びに來るていな事は如何にも華族らしいです、な。さう云ふ場合にでも、わたくしは行かない事もないのでげすが、――江戸ツ子の氣性として、あたまから金のことを云はれると、反抗心が起りまして、な。』

『然し商賣なら、そんな必要はないぢやアないか』と、主人は反駁した。

『いや、如何に商賣でも、四角張つて幾らで來て吳れるかと出られちやア、もう、なに、くそツ、勝手にしろと云ふ氣になります、な。寄附なら寄附でようございますし、出せるならまた默つて身分相當に出せばいいでしよう。』

『そんな舊式なことア駄目だよ。それよりやア初めから何圓以上でなけりやア招かれない、そして貴族なら貴族のやうに平民よりもずツと高く出せと、前以つて請求する方が今時は却つて見識だらう。』

『然し金錢のことを申すときたなくなりますから、な。』

『それが今の藝人どもの舊臭味・さ！』

『どうせ今の藝人にやア新らしい眞似などはできません。奇麗に出て來なけりやア、恐らく、大遊び

ツたり斷りましよう。或時など、わたくしがはだかで鍬を運んでますていと、畑のところまで〇〇子爵からのお使ひがあつて、いつ、何時からと云ふ約束になりましたが、幾らやればいいのだと聽かれたので斷然止めてしまひました。藝人は意氣で生きてますから、な——その代り、氣が進めば、ただでも行つてやります。』

『それも惡い事はなからう——ところで、高見君のやり出さうと云ふ養豚の事はどうなりました』と云つて、主人は話題を轉じてしまつた。そして小說とは全く別な事をもよく知つてるかして、その方の話が暫らく皆と共に續いた。

『わたくしが來て居りますからツて、さう動物の事をばかりお話になるにやア及びますまい』と、洒落を云つた事は云つたが、自分は、もう、大分に倦んでゐた。取るべき晩食をまだ取らないので、腹がすいて來たにも由るのだらう。

『どうせ電車はなくなつたのだから』と云ふやうな呑氣な事をあとの客は語り合つてたが、自分は皆が早く引き上げればいいと思はれた。そして氣がめいつて來ると、不思議に氣にばかりなつたのは、今夜の謝禮を——出なければ出なくてもいいのだが——高見さんから出すのか、ここの主人からか？それとも、この儘になつてしまふのか、と云ふことだツた。本職の自分と共にお喋舌ばかりする奴らはゐるが、聽き手としての氣が利いてゐさうなものはなかつた。

この谷が今にも解散する時には分ることだらうと辛抱してゐるのである。それにも拘らず青見さんを始め、皆が思ひやりなく動きもしないので、だからツて然しぼんやりさきへ歸るのも詰らないので、自分はまた具さんを相手に今までまだ忘れてゐた自分の畑の事を語つた。別にこれは商賣にしてゐるものではないけれども、畑のことに話が向くと、どんな相手にだツても自分は時々われを忘れるほどに面白く、元氣が出るのであつた。これは自分としての趣味だ、樂しみだと、兼てから思つてゐる。で、

「お茄子でも胡瓜でも、これからやがて取れるやうになりますから、御入用の節はいつでもさし上げます」など云ひながら、兎角不平さうになる自分の厭な顏を自分で紛らしてゐた。そして前には少々さし控へられた手を件菓子へ三度も續けて出した。

七

廢兵院で鶴の啼く聲が澄み渡つてよく聞える午前の一時近くになつて、皆が席を立つた。自分もわざと潔く立つて、皆と一緒に二階を下りたが、ふところへねぢ込んだ古雜誌と菓子や煎餅の殘物とが今夜のお禮代りかと思へば、馬鹿々々しいやうな氣もして、ここで私かに例の虎と抱き合つて暫らく何だか泣いて見たかつた。決して金の貰へないのをくよくよ思つてるわけでないのは、自分が江戶

ツ子たる點に照り合はせても分つてるが、――そしてこれも江戸ツ子たる女房が、女の弱い氣に負けて、時々よひ越しの金を殘さうとするのを、自分が投ぐりつけてまで使はせてしまうところを見て貰つても、分つてるが、――百姓の勞働生活に比べて見ると、自分は人に下だらない藝などを見せてそれで生活をしなければならぬ身が、今更らに何となく悲しかつた。

『わづかだが、ね――』氣が利かないでもなかつた高見さんが、外へ出てから圓助二枚をこツそり渡して吳れたので、自分もちよツと氣を取り直すことが出來た。そしてそれが爲めにだらう、あとからついて來て、

『散歩がてら送つて行きます』と皆に言葉をかけた主人に對しても、一層敬意を拂ふことができた。が、自分ながら――いやな習慣から出たのだらうが――なんて、けちな根性だらうと卑しまれた。そして成らうことなら、あすからでも藝人をやめたかつた。

　今や自分が氣に懸るのは天氣ばかりであつた。いつ雨が降つて吳れるのだらうと空を仰ぎ見つつ、自分は皆の後からひよこり〳〵足を運んで行つて、道が薄暗くて誰とも分らない人に聽こえるやう、

『虎――猿――豚、今夜はほんとに動物の話ばかり出ました。』

『それに、君のかはづ、さ。』返事は知識がほのであつた。

　ふとこんにやく問答の神經質を思ひ出すと、天神さまと一緒に前方を語り合つて行く聲がしてゐ

る。やがて廢兵院の森を過ぎると、二三間で自分の長屋横丁の入り口なので、

『この奥がわたくしの住居ですから、むさいところですけれども、若しお通りすがりにはお立ち寄りを願ひます』と云つて、渠は皆に別れを告げた。が、今一つ自分としては云ひ殘したことがあるので、足を一歩進めてつけ加へた、『それから、わたくしの畑は直ぐそこの枳殼垣をお覗きになれば見えます。今は暗うございますから、よくはお見えにならないでしようが、これからお茄子でも胡瓜でも隨分澤山なります、家族だけではとても喰ひ切れないほどで――』

『……』

『では、皆さん、わたくしはこれで失禮いたします。』

茄子や胡瓜の成るのを今から、もう待つてるらしい長屋のものらは、すべて寢靜まつてゐた。そしてこの江戸屋猫八なる自分のお歸りに挨拶をして吳れたのは、近所の酒屋が飼つてる犬ばかりであつた。が、今夜ほど謙遜な、そして人間らしい氣持ちになつてる時は自分でも珍らしいと思へた。

廢兵院は森道が餘りに暗いので、電車通りから曲つて來る通行人の爲め、兼ては自分の廣告の爲めに、自分の名を書き入れた瓦斯燈を立てさせて吳れるやうに願ひ出てある。その許可が何だか六ケしさうだが、そんなことは、もう、どうでもよかつた。誰れも無意義に自分の腹を痛めるものはないだけのことだ。

ふと自分のけちな根性で受けたこの宵越しの金が氣にならないでもないが、何を買つてやらうにも子供は、もう、熟睡してゐるに違ひない。電車通りのおもちや屋や喰ひ物みせも、戸が締まつてるに違ひなかつた。で、これも、自分で月謝を拂ふべきところで、あべこべにそれを貰つて來たことに笑ひまぎらせてしまへるだらう。

兎に角、自分の女房には早速今夜の小説の話をして、つく〴〵藝人の悲哀をそこに覺えた通りかの女にも味はしめようと決心しながら、渠は自分の家の戸ぐちへ近づいた。

——（大正七年七月）——

淺間の靈

一

『あなたのやうにしんねりむツつりしてる人、わたし嫌ひ』と、お菅は云つた。

『………』今田はこれを聽いて、心ではまた何を生意氣なとつぶやいたが、事が面倒になるのを恐れて、おもてには少しも怒つて見せなかつた。そしてその翌日、役所へ出てゐるひまに俗語字引きを引いて置いて、歸宅してからかの女に半ば獨り言のやうに、然し物を敎へてやるつもりで、『しんねりむツつりとは、東京では、何ごとをするにもはかばかしくないことを云ふのだが、お前の亭主はそんな性質の男ではない』と答へた。自分の方が勤め先きをいつもかの女より早く歸宅するので、晩めしだツても自分が火を起したり、瓦斯で物を煮たりして用意して置くのである。かの女はそれがたま〳〵できてゐないのを發見するとこちらを女中ででもあるかのやうに叱り付けるのだ。で、自分は第一のをんな鬼から免がれて來て、また第二のそれにぶつかるやうになつたことを感じ初めてゐた。

『では、あなたの女房に專賣局などに行かして置いて、あなたはどんなにはかばかしくわたしを養つ

て吳れます?』

『まア、さう云ふなよ。今に發明が特許を得るやうになれば、ふたりで十分好きなことをして遊ぶ、さ。』

二

今川にはお菅は內緣であつた。渠の戶籍上の妻は別に國にゐた。けれども、その國が渠に一生忘れられぬありがたい物になつてるのは、何も本妻がゐる爲めではなかつた。渠は自分の生れた土地を靈地と信じて來たのである。

淺間山が目の前に屹立してゐて、高い空に勢ひよくけむりを吐き出してるのを、子供の時から朝ゆふに見ないわけには行かなかつた。大きくなつてから、一二度山上に登つて行つて、噴火口の周圍をまわつて見たが、その二度目の時、けむりの太い柱がおほ風の爲めにしなつて來て自分の方へ倒れさうになつた。自分は一心不亂に淺間の靈を念じた。この時ほど自分の信仰心を緊張させたことはなかつたので、その後になつても、時々山の鳴動が聽かれたり、またそれが地震となつて家に響いたりする毎に、その時のことを思ひ出して淺間を崇敬した。

自分の家はその靈山のふもとに在つて、而も町ぢうでの舊家であるが爲めに、年來の旅宿業の方は

本妻にまかせて置き、自分は選ばれて三等郵便局を經營してゐた。そこに何不自由もなかつたのだが、自分は靈山のめぐみに由つて生まれたその爲めか、貴顯のお姿にそツくりだと云はれるのが得意であつたに反して、かの女は山の荒みたまを受けたのか、荒ツぽくて口やかましく、氣に向かないと亭主にでも子供にでも當り散らすさまが、まるで山の御神の荒ぶる時を思はせた。けれども、それが何となく神意のやうに見えて、渠は敬遠主義を取らないではゐられなかつた。

『あなたは何だ、ね、男のくせに子供を叱ることもできないで？』

『いや、おれは子供をさうお前のやうに叱らない。惡いと思へば、子供だツて獨り手に直すやうにするだらう――もう、さうあたまから叱る年ごろでもない。』

こんなことにでも毎度衝突があつた。そしてその都度自分や自分の子供にかげながら同情して呉れるのは今の內緣の妻であつた。お菅は女中として甲斐々々しくもあり、親切でもあつた。それにほだされて、つい自分はかの女と關係してしまつたがもとで、一層家ぢうの衝突が大きくなつた。中學三年生の長男はこちらに贊成したけれども、小學教員をしてゐる總領なる娘は、不斷その母を嫌つてながらも、母の味かたになつた。

その結果、總領娘が二十二、長男が十七の時に、自分は自家を見限つて、お菅と一緒に東京へ出たのである。長男もあとを追つて來たけれども、自分の收入がまだないと云ふ理由を以つて一緒に住ま

はせることにお背が反對したので、或おもちや屋の小僧に入れてしまつた。そのうち、自分は政友會の關係を辿つて、且、郵便局を請け負つてゐたり、字を綺麗に書くと云ふ爲めに、元田さんが大臣をしてゐる○○省の傭ひに採用せられ、その官房の秘書課の人となつた。

自分には原さんや元田さんほど天下にえらい人はなかつた。殊に、後者には役所で直接に會ふやうになつてから、一層えらい人に思はれたので、自分のところへ來て渠等を惡く云ふものがあれば、躍起になつて辯護の勞を取つた。

『元田崇拜者』と云ふのが自分の東京へ來て最初に得た仇名であつた。少し年が行き過ぎてるがと云はれたが、俸給は三十五圓貰ふやうにして貰つた。それまでの暮しは、お背が上京後直ぐ通ふことになつた煙草專賣局の、女工としての給金で何とか間に合はせてゐたのだ。

いよ〳〵夫婦とも稼ぎができるやうになつたので、居を自分の勤め先きに近い木挽町に定めた。狹くるしい横丁ではあるが、場所がらだけに、すぢ向ふには立派なはかま屋があり、また向ふ角には大きな酒屋がある。いづれも小僧を四五名から七八名は使つてる。こちらの角は年を取つた女戸主の貸し蒲團屋で、その隣りが今田の家で、そのまた隣りには大工の請け負ひがゐる。下に一と間、上に一と間の今田の家賃が安くして貰つて十三圓には驚いたが、二階へ直ぐ一人經師屋の下請けをする老人が來たので、それから毎月五圓の間代が取れるやうになつた。

半間の水口に並んで格子戸があり、これを這入つたところの奥行半間の土間からあがると、直ぐ夫婦の住まひたる六疊の座敷だ。この突き當りにはまた一間幅の庭（と云ふよりも土間）があつて、それをかこつた低い板壁の上から、歌舞伎座の裏手の赤い煉瓦塀がのぞいてゐる。便所へ行くたんびにそれが見えないではゐなかつた。

兎に角、家も定まり、職もできたと云ふので、國からは娘の好意として簞笥一さをと紫檀の机とを屆けると云ふ通知が來た。その手紙に據ると、矢ツ張り、お菅の無教育を行く末の見込みがないと非難してあるけれども、

『全く父上がお好きの上で斯うなつたのでございますから、兎に角、おふたりで何卒幸福にお暮し下さいませ』とある。本妻の無情、我むしやらに比べては、娘の優しい心根がありがたい。飽くまで母の味かたになつてることを發見した時には、これも一緒に憎かつたけれども、一たび離れて見ると、娘の方でもこちらと同じやうに同じ血を懷かしいに相違ない。あふれ出ようとする涙をお菅に押し隱しながら、あとの方をも讀んだ。『うちでは、たとへ女が働く商賣ではございますが、家の大黑ばしらが動いて行つたのですから、とてもうまくは續きますまい。けれども、私もをりますものですから、できるだけは母にも力を添へましよう。こちらのことには御心配なく、……』

『……』お菅は平べツたい顏に白目がちな日をすゑて、こちらの顏いろばかり讀んでる樣子であつ

たが、この時突然けんどんな聲で尋ねた、『きツとわたしの惡くちでしよう?』

『なアに――疑ふなら讀んで御覽!』渠は言葉やわらかにその手紙をそのまゝかの女の方にほうり投げて、込み上つて來る感情にちよツとすきを與へた。かの女が眼中無一文字で、どんな字をでも讀めないのには安心であつた。

『人を馬鹿に!』いきなり引き裂かうとしたので、渠はかの女をすかして、一旦それを取り返してから、二三日のうちには荷が着くだらうと云ふことを云つて聽かせた。そして心ではこの手紙は淺間の山靈に誓つても自分が娘に對する愛情の守り札として、毎日役所へ往き來のふところにしツかり納めてゐようと決心したのである。

三

机と桐の古簞笥とが屆いて見ると、簞笥の引き出しには今田の殘して來た衣物なども這入つてゐたけれども、お菅の物は何もなかつた。無論、ないのが當り前であつたのだが、それをもかの女は何だか不平の種にして、

『わたし、詰らない、わ、毎日働かされてばかりゐて』と云つた。

『……』それも可哀さうだと思はれたので、渠は一晩かの女に芝居の立ち見をさせてやつた。そし

て今一つ、欲しい物を買へと云つて、最初の俸給日になにがしの金子を自由にさせると、黄とえび色との幅一寸もある立て縞の紡績と、牡丹色地に雁とあしの葉とを白く拔いた綿更紗とを買つた來た。

『赤ン坊の衣物見たやうなのをどうするのだ』と聽くと、かの女は、

『派手でいいでしよう』と答へた。

『三十四にもなつてかい？』

『でも、あなたよりやまだずツと若いのよ。』

『………』渠は自分の愛する者が若い氣でゐて吳れるだけでも刺戟があつて嬉しいと思つた。官房や文書課に勤めてゐるものを見ると、皆大學出で而も皆年が若い。そして自分のやうな年輩者が段々、官界からも社會からも、追ツ拂はれて行く傾きのあるのに對して今更らの如く憤慨までしないではゐられないではゐられなかつた。東京へ來てからは、毎日のやうに頭髮の間のしらがを氣にして拔き取り、役所に出る前には、必らず鏡を手に取つてあごに見える白色を墨の粉で以つて塗り隱した。

お菅もこれに倣つて濃いお白粉の外にも顏を墨で作つたので、たださへ引き釣つてる眉が一層いかつくなつて、最近に歌舞伎座で見た草履うちの岩藤さながらである。けれども、かの女がそれをいいことにしてゐるので、渠は別に何も云はないのだ。

感心にも縫ひ物だけは下手ながら獨りで出來るので、かの女はいつのまにかその派手な紡績の衣物

にひわ色ガスの裾まはしを付けた。それから、綿更紗の方は被布になつたが、へに金巾の裏を附けた。そしてその兩方を電氣の光に着て見せて、その顏を後ろに反らし、足の裏でちよツと上げた裾まわしを見た。

『どうです、ね』と、突ツ立ちながらこちらに向つてにこ付き、『ハイカラでしよう？』

『………』渠は如何に田舍ものでも、かの女の年輩と衣物の縞、またその衣物と被布の小紋が皆、不調和なのを分らないではなかつた。それに、また、裾まわしのふきが出過ぎたり、詰め過ぎたりしてあつた。けれども、東京で暫らく突拍子もないことばかり見慣れて來た自分には、それでもハイカラに通用するのだらうと思へた。その上、電氣の光が、もう瘦むくなつてた自分に、微笑の女をいつになく美しくして見せた。

『この上にマントを着て行くのよ。』

『それもよからう、さ。』

釣りがねマントはその前に古物を買つたのだが、夫婦がかたみ替りに用ゐると云ふ約束で、色は黑と鼠との地味にし、縞の方で派手なおほ格子を選んだ。けれども、これを渠がちやんと着て出たのは初めのうち一、二回切りで、大抵はかの女の出勤に用ゐられた。そして渠自身は雨の日にも外套なしで、背廣に足駄でてくてく通つた。

『君の有名なマントはどうしました。まさか質に入れたのでもあるまい』と、無遠慮な或若手が冷かしたので、その翌日は着て行つた。けれども、またその次ぎからは向き出しであつた。

それほど自分の女房が服裝を氣にするのも、『〇〇省の官吏の奥さん』と云はれたい爲めであるから、自分も却つて結構なことだと許して置いた。自分の女房を無教育な女中と云はせるよりも、その方がどんなにいいか分らない。まして今回の發明が成功すれば、一擧にしておほ金持ちの細君になれるわけであるから。

渠は一方の壁を床の間と見立てて、自分の顏がよく似てゐると云ふ貴顯の軸物を掛けた。倹約を訓令した或文書入りの石版刷りである。その反對の壁のはづれに國から屆いた簞笥を置いた時には、机を室の眞ン中に出して久し振りの讀書をでもして見たいと思つた。そして、『東京一の芝居も近くツて、ほんとうにいい場所だ、わ』と云つて喜んだお蔦の言葉を再び心に浮べても見た。かの女は專賣局の仲間からでもおだてられて來たのだらうが、『木挽町のやうな場所へは、東京の人だツて、なかなか住めやしない』などと、通を氣取るやうになつてた。

『そりやさうだ』と、渠も合ひ槌を打つた。

四

渠には木挽町は自分の役所にも近く、日常の買ひ物にも便利で、またお菅の云ふやうに人聽きも惡くなくツてよかつた。が、ただ一つ困ることには、きまつたをわい屋が來遠くて、たま／＼來た別なのに賴むと一荷二十錢づつ呉れいと云ふ。田舍なら、喜んで取つて行き、その場でなければあとになつて、大根なりにんじなりを禮の爲めに持つて來るのが當り前になつてるが、ここではそれが主客を顚倒してゐる。そしてそれだツてもなか／＼來合はせないので、隣り近所も皆一樣にこれには困つてた。

『ちよツとにばかりを拜借します、うちのは餘り溜つてますので』などと云つて、初めのうちは人數の少い家へはこちらから出張するのがお互ひのことであつた。が、そのうちにはそこのも亦溜つてしまつた。そしてどこのも氣味惡く、どぶん、どぶん！ぼちやん、ぼちやん！とはねるのである。どこででも、申し合はせたやうに、便所へ行く時には、先づ新聞紙の大きな切れを敷き落す爲めに必らず用意して行くのであつた。

それが然し渠の一つの野心を刺戟することになつた。如何に年は寄つても、わざ／＼東京へ出て來たしるしには、やす官吏のはしくれになつて若いもの等に馬鹿にされてるのでは滿足できなかつた。何か一つ一攫千金の工夫をして、同僚どもを驚かし、また自分を如何にも老いぼれのやうにさげすんでる今の女房に隨喜の涙を流させたかつた。その糸ぐちをここに得たのは、これ確かに日頃信仰する、

淺間の山靈のお助けだと考へられたので、初めてこの發明に思ひ付いた日、便所から出て手を淸めるが早いか、座敷の眞ン中に坐わつて、それと思つた方向に向つて暫らく手を合せて感謝した。

『何ですの、俄かに？』お菅もまだ勸めには出かけてなかつた。朝の日光は歌舞伎座のうら煉瓦に當つてるけれども、うすら寒かつた。いつか緣日で七錢に買つて來た鉢植ゑの秋海棠が光を欲しさうにしてゐるが、けさに限つて、渠はそれを緣がはから出してやる氣にはなれなかつた。

『いい思ひ付きができたのだ、必らず人にしやべつてはいけないぞ！』斯う念を押してから、渠は自分でも他言を憚るやうにして、低い聲でそれをかの女の耳もとへ行つて語つて聽かせた。ほかのことではない、便所のはねを避ける機械の發明であつた。

『ふ、ふん！』かの女は鼻で笑つた。そしていつもの通り手鏡を立てて眉を直してゐながら、『御飯がすんでるからいいやうなものの、若しその前にそんなことを聽くなら、たべられやしない。胸が惡くなつて。』

『だから、金儲けばかりでなく、人の爲めにもなる。』

『なんで、そんなことが！』立ちあがつて寢まきをぬぎ棄てたかと思ふと、直ぐ例の着物を着にかかつたので、今度は渠が入れ替つて鏡に向つた。

『………』壁に掛けた貴顯の肖像に似てゐる顏のわきへ、かの女が衣物をたくつて見ては直し、見て

は直すたんびに、その腰を卷いた赤い切れの色が映るのを、少し不敬のやうに感じられた。が、それを云へばまた却つて、

『あなたのやうなおぢイさんが――失敬な』と云ふやうなことを云ふにきまつてるから、差し控へた。

『………』そちらだツて、もう、若い女だとは云へないのだが――。

それにしても、渠は自分のかほ色がいつも陰氣くさく青いと云はれて、實際にも青いのに、けさはさうでもないのを自分ながらいい思ひ付きの爲めだと頼母しく思つた。そしていつになく痛いのを辛抱して、時間の許す限り、あごのあたりの短いしらがを拔き取つて、その殘りのには黑々と墨を塗つた。そしていよ〳〵出勤の時には、旣にマントがまた無くなつてたけれども、別に獨りくどきはしなかつた。

『では、行つてまゐります』と、坐わつて手を突くところなどを私かに思ひやると、お菅もいまだに主人を主人として奉つつてる樣子が見える。

『いよ〳〵あいつにもらくをさせてやる時期が近づいたのだ！』

『今田さん、けふは何だか愉快さうです、ね』と、若い同僚の一人が役所のひまにからかつた。

『はい、少しいいことがございますので。』渠は自分ながら珍らしくもにこ付いて受けた。そして少か

らず口ごろの老人虐待に對する鬱憤をも漏らす氣になつておしやべりをした。『わたくしのやうな年輩のものがいつまでもお役所の御厄介になつてるわけにも行きませんので、今回一つ、別方面に面白い金儲けを思ひ付きました。かの大正博覽會も目前に迫つてます時に當り、わたくしは一つ或發明に取りかかります。』

『へい、それはどんな發明です』とか、『何を工夫したのだらう』とか云はれると、若いものに橫取りされさうな氣がして再び不斷の謹愼と無言とに立ち返つた。

五

初めのうち、渠が役所の引けを待たれたのは、早く歸つて自分とお菅との爲めに晩めしの用意をする爲めであつた。が、發明を思ひ付いてからは、ただそのことばかりが氣になつた。

朝でも夜でも、時間のある限り机に向つて、叮嚀な圖を引いて見た。その叮嚀さは、役所の辭令や書類を書くそれよりもまた格別であつた。それが爲めには、晩めしの用意を忘れてゐることもあるし、また徹夜をして寢むい目をこすり〱出勤もした。

『あなたの發明も大抵にしておよしなさいよ。わたしが働らいて來ても、張り合ひがないぢやアございませんか？』お菅はその歸宅早々また臺どころを働かなければならぬのをこぼした。『その上、たた

さへ陰氣な人がなほ更ら陰氣になつて、さ、ほんとに辛氣くさい！』

『まア、さう云ふなよ。これができ上つたら、大した物ぢやアないか？』

『へん、そんな物が！』かの女はこちらとはまるで別な世界に住んでゐた。そして時々、餘りくさくさすると云つて、隣りの芝居へ出かけた。そんな時には、必らずかの女の同村から出て來た若い書生を伴つた。『陶山さん、陶山さん』と云つて、工手學校の生徒だが、殆ど毎晩のやうにここへ遊びに來て、かの女の歡迎を受けてゐる。尤も、かの女から請求されて、よく菓子や酒を買ふが、今田は下戸で、酒の方にはお相伴ができなかつた。雪國に生れたものの習慣として、女でも一般に酒を飲む。そして飲むと、盆踊り歌のやうな物を歌ふ。渠だけはにや／＼笑つてそれをただ聽きつつも、矢ツ張り、隅の方で圖を引いた。

その初めは、田舍によくある水ぐるまを手本にして、自分の構圖を拵らへたのである。心棒があつて、その周圍に光線の如くいくつもの軸を出し、その各々のさきへ杓子のやうな廣がりのある物を附け、そこへぽたりと當ると、したへまわる。そしてまた次ぎのぽたりをそのまた次ぎの杓子が受ける。さうして置けば、無論、一たび途中でとまるのであるから、はねても上まで來る恐れがないと考へられた。

いよ／＼さうきまつた時には、隣りの大工に賴んでその形を――何の爲めとはうち明けないで――

二つ作つて貰つた。一つは實驗の爲めによごすもの、今一つは特許局へ出す見本としてだ。が、でき上つて見ると、この車の心棒をどこに掛けるかが疑問になつた。まさか、その兩方のはじを据ゑる爲めに二つの棒か板かを立てゝゐるわけにも行くまい？よしんば、行けたとしても、あまりに費用や手數を要することで、こんな簡單な種類の發明には向かないにきまつてた。

『これは宙にぶらさげるより外に仕かたがない』と氣が附いてそれを獨り言に云つた。お背はこの時ぐツすり眠つて、いびきを擧げてゐた。

翌朝になつて早々、心棒の兩端に繩をゆはへ付け、私かに便所へ持つて行つて、それを宙におろし、繩の兩端を兩足で踏まへてゐて、自分で實際を試みて見ると、うまく杓子へ當つたことは當つた。が、第一回のが當るが早いか、くる〳〵とまわり出して、その勢ひが餘りに目まぐるしかつた。そして次ぎへ次ぎへとぽたりが當るに從つて、その勢ひは一層烈しくなり、繩までが下からずん〳〵卷けて、そのよごれた機械は段々とうへの方へ上つて來た。そしてやがては人の尻を打ちさうになつた。

『これでは駄目』であつたので、あわてゝ右の足から一方の繩をはづし、それをも假りに左りの足したへ一緒にした。必然の排泄物はこの機械の具合不具合ひには關係なく、無遠慮に出たので、下からは新らしい紙の落ちてないのを幸ひにしてぽちやん、ぽちやんとはねて來た、私かに顏をしがめなが

ら、『これだから、困る！』直ぐ聲に出して、『おい、お菅、新聞紙、新聞紙』と叫んだ。
『發明よりやアまだ新聞の方が役に立ちますか？』
『……』渠はかの女のわる落ち付きに落ち付いてやつて來たのをがツかりしないではゐられなかつた。うへからも水をあびせかけられたやうな冷やりした氣がしながら、十分に用を達してしまうと、立ちあがつて機械を繩に依つて兩手で引き上げ、そのままそツと持ち出して、手洗鉢の棒ぐひの立つてるわきへほうり出すやうに置いた。手を洗ひながら、かの女に同情を求めるつもりで、『どうも、うまく行かん。』
『……』かの女は寢まきのまま臺どころの瓦斯釜に向つてた。もとは、先づ渠が起き出でて釜の下を焚き、朝めし一切のことが用意できる頃になつて、かの女は床を出て、夜具を疊み掃除をするのが役目になつてた。が、この頃では萬事をかの女がして、渠の工夫にできるだけの時間を與へて呉れる。それだけでも、無學の割りに分つてありがたいのだが、渠は自分の一大發明家たるに對してかの女からもツと同情なり、親切なりを得たかつた。が、冷淡にも、『どうせうまく行きますものか』と、そツぽうを向いて云つた。その癖、機嫌のいい時には、『若しこれがお金になれば、わたしもうんと衣物を買つて貰ひます、わ。さうして一度、陶山さんや陶山さんのお友達を皆連れてツて、芝居をおごつてやる』などと。

『………』かの女の陶山さん陶山さんが聽いてあんまり亭主として面白いことではなかつた。が、まさか、十以上も年したな男とくツ附き合つてはゐないに相違ないと堅く信じた。

『あなたも自分の好きなことをしてゐるのだから、わたしもわたしで好きなうわ氣ぐらゐはします、わ』と云つた風なことは、渠にはかの女の冗談と云ふよりも寧ろこちらの發明中止を迫る威嚇の言葉として受け取れた。それがこちらには最も手頼りなく、最も寂しく感じられる。時には、『わたし、專賣局をやめて、活動の案内人にならうか知らん――○○館や△△倶樂部には男ツぷりのいい辯士が來てゐるさうだから』とも云つた。女工などに行かして置くから、ろくなことは覺えて來ないのだ。かの女の出勤をやめさせる爲めにも、速かにこの發明は成就させなければならぬ。

　こんなことに自分の考へがぐら付きたがらも渠はなほ机に向つて、緣さきの地上に置かれた機械をじツと見詰めてゐた。去年の秋からかかつて、やツとこれまでに仕上げたものが失敗に終つたのだ。その爲めには役所でやるべき當前の職務以外の、寫字その他の小仕事をすべて斷わつて來たので、歲末の出費などに苦しい無理をした。その影響がいまだに及んでるので、お営が時々燒けを起すのも一面には尤もである。ことしも、もう、三月の中ごろで、赤い煉瓦壁に反射する朝の光には多少ぽかぽかしたところがあつた。けれども、渠には自分の心がまだ冬のやうな冷たさをおぼえた。

材料に木をばかり使つたが、せめて心棒だけを金にしてその兩端に矢ツ張りかねの輪をはめたらい

いとも思ひ直したけれども、それでは例の費用が嵩む。それに、あんなに勢ひよくまわる必要もないのみならず、あのまわりかたでは寧ろ杓子に當つたものを反對にはね返す恐れもあつた。

このことを尤もらしい口調に少し笑ひを帶びさせて勝手の方に向つて說明した。すると、かの女も笑つてこちらを慰めて吳れるだらうと思つた渠の期待は裏切られた。

『ふん』と、かの女はまた鼻で受けただけだ。あとは半ば獨り言のやうに、『何の役にも立ちやアしない！』

『お前はぢきにさう云つてしまうが――なアに、まだ〳〵望みはある。』ここまで來て全く失敗に終はるのは如何にも殘念であつた。

『……』かの女は然しそんな返事に頓着なかつた。めしの焚けた釜を座敷の方に運んで來ながら、

『さア、できた、できた！早くたべて、いつものところへ行つた方が面白い！』

『そりやアをんな同士で浮氣な話ばかりしてをれば面白からう、さ。』斯ういや味を云つて、渠もお膳立てに向つた。ゆふべから夜ツぴて張り詰めてた心が急にがツかりしたせいか、けさは特別に空腹を感じてゐた。

『をんなばかりぢやアないのよ。』こちらを意味ありげに見上げてにこ付きながら、『監督さんは皆をとこだから、ね』と云つたかの女が、よそひ立ての熱いところを二三口がつ〳〵とかツ込んだかと思ふ

『分るもんか！お前などに分るもんか！』赤煉瓦の向ふがはからも、芝居ものの物眞似が聽えた。

六

ところが、その翌日、渠は思案に餘つたので、何かいい考へを與へられるかと思つて、役所の歸りに直ぐ、ちよツとまわり路をして、久し振りで、特許局へ勤めてゐる同鄕人のもとをそれとなく尋ねて見た。無論、發明をしてゐると云ふことなどはおくびにも出さなかつた。

けれども、却つて向ふの方がよく知つてゐた。

「あなたも何か考へてをられますさうですが」と、渠は年したなだけにまだこちらを敬つて呉れてるやうであつたが、その次ぎの言葉が餘りに人を馬鹿にした、「きのふ、奥さんが來ての話に、心配してをられましたよ、あなたが發明狂になつたのではないか知らんて。』

「發明狂！』寢耳に水であつたので、ただこの名詞を無意識に繰り返すと同時に、きちんと坐わつてる自分の洋服の胸を反らせた。が、やがて意識が自分には確かになつて、『そんな言葉さへ家內は知らない筈です。』

『そりやア、陶山から敎はつてる、さ。』その口調までがぞんざいに變つた。

『……』成るほど、陶山も同鄕人だが、――して見ると、お菅は自分に隱して、時々、こんな用も

ない男のところまでもほつき歩いてるのだ。夜業があつたなど云つて遲く歸るのは、皆うその皮だ。そしてその亭主が飽くまで秘密にせよと命じてあることをみんなしやべつてしまつたらしい。途中で人に横取りされたら、どうするつもりだらう？『わたくしは然し淺間さまのふもとに生まれ、わが貴顯の御靈が附いてをりますから、大丈夫氣違ひなどにはなりません。』

『然し、君、――あなた、――雪隱のはね避けなどは、とツくの昔から、田舍の百姓家にはよくあるもので、たツた一本の棒切れのかたはしに四角な小板か矢の羽根がたをつけて置いて、そこへ糞が當ると下へさがるが、落ちてしまうとまた途中まで上つて來る仕かけになつてすま。どうも、聽いて見るにあなたのはそれよりやア拙いやうぢやアありませんか？』

『なアに、また考へ直してをりますから。』むかし流の非科學的なものなどはお話にならぬと、私かに心であざ笑つた。が、そこに何だか一つの希望ある暗示を得たやうに思はれた。

『兎に角、君のことから同郷人の間に發明熱が高まつて、それが孰れも皆くそに關係あるものばかりだから驚いてしまう。そのうちで陶山の友人が一つ先鞭を附けて、もう直きに特許がおりるやうになつてをります。』

『それは一體どう云ふ――』斯う尋ねかけたが、口がどもつて、くわツとのぼせた。お菅のおしやべりが禍ひして、人に先きんじられたと思ひ取つた。

が、さうでもなかつた。全く別なもので、一錢を投げ入れると、さくら紙の疊んだのが出て來る仕掛けの箱だ。そしてそれを博覽會の便所々々へ備へ付ける相談が既に成立したやうすだと云ふ。

『君もどうせやるなら、早く仕遂げ給へ――特許の方は及ばずながら僕が骨折つてあげますから。』

『さうです、な――一つ大車輪でやつて見ましよう。これが爲めには實際に寢食を忘れてをりますのですから。』斯うは答へたものの、渠はこの人に對する非常な反感と侮蔑とを抱いていとまを告げた。こいつらの世話などになるものか？陶山やお菅だツて、また靈山の氣を受けては生まれなかつた下等なやつらだ。何が分るものか？人を――氣違ひとは！

『またやつて來給へ』と云ふ、乃ち、こちらの高貴な生れに對しては餘りに無禮な挨拶が聽えるやうであつたが、返事をしてやらなかつた。人の努力を横取りしないまでも、何かの世話にかこ付けて無努力にこちらの苦心をあやからうと云ふのだらう。

『愉快、愉快！そら、わツしよい、わツしよい』と云ふ氣持ちを聲にも歩調にも現はして自分の目の前に來たる大道の通行人を押し除けながら、渠は自分の家の方へ向つた。すると、自分ではさう急いだつもりでもないのに、家の方が直きに到着したのが不思議であつた。

それにしても、陶山がまた來てゐた。ゆふべは幸ひにも來なくツて、まア、いいと思つてたのに！そしてお菅が長火鉢の向ふで、電氣の光に打たれて、ころげるやうにして、あは、は、と笑つてゐた。

こちらの調子づいた足取りをどこかの貸し二階からでものぞいてたのかとも考へて見たけれども、さうでもなかつた。

『うはさをすれば影とやらよ。』かの女は、こちらがむツつりしてまだ土間に突ツ立ち、男女ふたりの方を等分に見詰めてゐる方に向つて、そのからだを坐わり直した。そして惡かつたと云ふやうすもしないで、『今、あなたのことを云つて陶山さんと笑つてたの。あなた、きのふの朝のくる〳〵とんをおぼえておいでですか？』

『………』失敗であつたくるま仕掛け、縄巻けの登り打ちを、やツと今になつてをかしがつてるのだと分つた。が、まさかきのふのことを健忘性ではあるまいし！かの女までが、人を實際の氣違ひ扱ひにしてゐるらしいのが癪にさはつた。じツと目を据ゑて睨み付けたのである。

『あのおそろしい顏！』かの女は然し再び笑ひ出した。そしてあは、は！あは、は！と、二度にも三度にも腹をかかへて、とう〳〵倒れてしまつた。それから再び坐わり直した時に、腹のあたりを兩手でさすりながら云つた、『ああ、をかしかつた。――くる〳〵とんは陶山さんの發明よ。』

『………』馬鹿！何がをかしいのだ、何が發明だと云はぬばかりにして今田はやツと自分のほこりだらけな、そして近頃磨いたこともない短靴をぬいだ。そして座敷へあがるが早いか、何も云はずに、片隅の机に行つてきちんと坐わつた。あとから眞似をして思ひ付いたものが成功したと云ふのに、こ

ちらが油斷をしてはゐられなかつた。そして女房にも萬事をこれから秘密にすることに決心した。渠の心の落ち付く世界はそこにしか無かつたのである。

七

いよ〳〵實際の春の季節に這入つて、而も上野に博覽會が開らけてから、渠の考案はまだよくきまらなかつた。そしてそれに要するこざ〳〵した物の買ひ入れに、女房から見れば入らない入費が嵩んで行つた。

かの女の手ひどい反對があつたにも拘らず、

『なアに、おれの物だ』と云つて、渠はさきに娘から屆けて來た簞笥も賣つた。また、その中に在つた着物も二三着七つ屋へ持つて行つた。

その結果、惡いことだとは思ひながらも、渠はお菅や陶山の云ふがまゝに、お菅の福島にゐる友達から頼んで來た東京初のぼりの女教員を――何かに喰ひ物にするつもりで――家に預かることにした。自分の娘とおない年で、而も可なり美人であり、またその生れが卑しくないかしてなか〳〵上品であつた。成るべくいいところへ世話をしたくなつたので、

『それには森久保さんにお會ひなさい。わたくしが紹介してあげますから。東京の教育界は青山と

豊島師範との二派があつて、どこでも豊島派は冷遇されてます』など云ふ親切な注意を與へてやつた。會つて話して見ると、喰ひ物どころではなかつたのだ。若しできることなら、——とても、空想ではあるが、——自分の無學なお菅などは追つ拂ツても、この女を女房にして見たいと、心のうちにだけは思つた。けれども、二三日間、自分の家庭と自分の心とを隠はして呉れただけで、惜しいことには、勝手に府下の小學校へ赴任してしまつた。

その女にだけは自分もこツそり自分の發明の二度目の工夫を打ち明けた、

『實は、もう、さうだときまつたので、今、ブリキ屋へ見本を拵らへさせにやつてあります。』

今回のは材料が木でなく、そしてもツと、ずツと簡便なのであつた。幅九寸、長さ一尺三寸のブリキかトタン板が一枚あればいいのだ。それを幅の方で圓めて長い筒の如くし、その兩端に鎖りを附けて釣るす。ぽたりとそこへ當ると、この最初の當りで筒がうまく揺れて、下からはねをさへ切つて呉れるわけだ。

『何が嬉しいのです——こんなに貧乏して』と、お菅がはたで縫ひ物をしながら、また不平を漏すのをよそに聽き流して、渠は、この思ひ付きに定つた時には、ただ坐わつてにこ付いてたばかりでなく、机の前を跳りあがつて手をも打つた。

『もう、大丈夫！大丈夫！』

『またくる〳〵とんぢやなくツて？』
『あは、は、はア！』渠はただおほ笑ひに笑つた。『お前などに見せるものか』と云ひつづけてゐたのである。そしてブリキ屋へ見本を註文する時にも、たとへ出來てもうちへは屆けてよこすな。自分が取りに來るからと命じて置いた。
そして出勤の往きにも復りにも、また休んだ日には三度も四度も、ブリキ屋へ行つて見るけれども、一向できてなかつた。
『そりやア、わたくしが一年餘りもかかつて考へた物ですから、製造するにはなか〳〵六ケしうございましようが――』
『なアに、別に何も六ケしいからと云ふわけでもございませんが――』
『……………』渠はブリキ屋の主人を、ぢやア、何か心配ごとでもあるのだらうと見て取つた。『あなたの方もさぞ御愁傷でしようが、わたくしもこれはおほ急ぎでやつて貰ひたい發明品だから、一つ國家の爲め、淺間の靈の爲めに、よろしく賴むぞ！金は十圓でも百圓でも出す』と、成だけ高になつて、ちよツと自分のえらいところを見せてやつた。
その晩に、こツそりお嘗をそとへ呼び出した者がある。
『陶山か？それとも、別な――？』渠は斯う感づいて、こちらもこツそりそのかげに近づいて見た。

障子の締まつてる臺どころのうち側から耳をそば立てると、その聲は案外にもブリキ屋の主人であつた。

『そりやア、奥さんがさう保證なすつて下さいますなら、いくらもかからない物ですから、作つてあげてもよろしうございますが、——旦那さんの御樣子が少し變だと思ひましたので——。』

『なんだ!』渠は障子を引き明けてはだしでそとへ飛び出した。そしてブリキ屋に向つて兩手を固めて迫つた、『また人を氣違ひ扱ひにするか!これでも〇〇省の官吏だぞ!』

『あなたは、まア、引ツ込んでおいでなさいツてば!』お菁は感心にも仲へ這入つてとめた。芝居ででもこんな場面を見てゐるからだらうと渠に思へた。それが爲めに渠は無事に濟ましてやつたが、向ふは引き取る時にお菁から念を押されて、

『よろしうございます。ぢやア、あすの晩までに拵らへて置きますから』と云つた。

それを取りに行つても、その代償を渠は許可ずみになるまで待たせて置くつもりであつた。が、お菁の

『それぢやアあんまりだ、わ、あんなことが無かつたのならまだしもですが』と、たツて口説くのに從つて、止むを得ずまた一着を曲げることにした。凡その代金のところはかの女が聽いてあつた。

質屋で明きになつた風呂敷を以つて、渠はブリキ屋から、できたその見本——今回のは一つだ——

を受け取り、しツかりとこれに包んだ。まだ秘密で、他人には勿論、お雪にも見られたくなかつたのである。

『わたくしは百萬長者になりますから、その時はまた分割りをあげます』と云つてそこを出た。そしてその歸りに、二圓のうちが七十錢殘つてるのをすツかり出してあんパンを買つた。お雪がさぞ喜ぶだらうと思つてだが、おべこべに向ふ見ずな買ひ方をしたと叱られた。まだ何でも欲しい物は約束通り何萬圓でも勝手に買ふがいい。やがて耳を揃へて拂つてやる！

その夜に見本を自分の枕もとに供へて床に就いたが、誰れかに見られはしないかと云ふことが心配でろく／＼眠れなかつた。

翌朝になつて、たださへ怠りがちになつてる役所をまた一日休むことにして、特許局へ出頭した。手續きの書類を書くことなどはお手の物だから、とツくの昔、判このやうな字で以つてその用意がしてあつた。

この方の掛りの人がこちらの說明を一應聽き取つてから、

『さう巧く動いて呉れればいいが、な』と、半ば獨り言を云つた。それからまたこちらへはツきり向つて、『ところで、一體、この機械は便所の中の左右にかかるのですか？それとも、前後にですか？』

『無論、前後にです。』『こんなことは聽くまでもなく、分り切つてるではないかと云はぬ

ばかりの嚴格を以つてした。そして渠はなほ言葉の說明を補つて置くつもりで、見本の筒を兩方の鎖りによつて兩手に持ち上げ、そのまゝで應接室のテイブルから床の上に持つて行き、兩手の鎖りで筒を前後に引き向けた。そして自分はこれをまたいで、洋服の腰を少しおろし、自分の尻を實際にちよツと前後に動かして見せ、『つまり、斯う云ふ風に致してすれば、鎖りで瀨戸の上に引ツかかつて宙に垂れてをる筒の方も自然にゆすれて行く仕掛けになつてるのであります。』

八

『占めたぞ！占めたぞ！おい、お萱、『ははア、結構です、いづれ審査の上特許になるでしようから』と來たわい！』

渠は本通りを横町に曲つて自分の家が見えると直ぐ、近處の人にも聽えるやうに斯う叫んで來た。けれども、かの女がいつも通り斯う云ふ時間には留守であるのを忘れてゐた。

獨り座敷の眞ン中にあふ向け大の字になつた。もう、これから思ふ存分の樂ができると考へると、若いものまでがテイブルや椅子で狹くるしくなつてる西洋室の中で、每日々々あくせくしてゐるあり様を憐み笑はざるを得なかつた。

そしてけふ初めて氣が付いたのだが、世間はいつのまにか四月で、路傍の櫻が咲いてるのであつ

た。往き來の人々も何となく浮かれた樣子をしてゐた。道理で、自分の周圍もほかほかとあツたかくて、心の奧にまで愉快な氣ぶんがみなぎつてゐる。

それはさうと、お菅の聽いて來たところでは、陶山の友達の發明が既に博覽會の便所に備へ付けてあるさうだツけが――。あんな價打ちのない物で成功したツて、それこそ『何の役にも立たぬ!』

『今に見ろ、おれのを』と、自分の片手を固めて、その握りこぶしを天井の方に突き出した。

そのうちに、ねむけがさして來たので、晝めしの用意も忘れてぐツすり寢入つてしまつた。そして呼びさまされて見ると、お菅が歸つてゐて、もう、晩であつた。

何はさて置き、けさの應對を詳しくかの女に云つて聽かすと、

『今度こそほん物らしいの、ね』と喜んだ。そして、陶山の外にもいろんな男を出入りさせてこちらをどこまでも心配させてた女ではあるが、打つて變はつたやうにおとなしくなつて、枕を並べながら、或時こんなことも云つた、『若し人の云ふやうに氣違ひなら、あなたに發明などができるものぢやアないわ、ね。』

『無論、さ。――今だから云ふが、ね、人はおれよりもお前の方を氣違ひのやうだと云つてるぜ。頓狂に不調和な衣物など着てゐるので。』

『そりや氣違ひぢやアありませんわ、ハイカラなの。』

『……』それもさうだらうと、渠にも思はれた。兎も角、現金な女房ではあるが、親しんで來られると、それに對する可愛さがよみ返つた。『それにしても、な、おれは百萬長者になるのだから、これからお前もつまらない男など相手にするなよ。』

『あなたが長者さまになれば、わたしはその奧さまさまですから、ねい。』

夫婦の情もこの肝腎な場合になつてるところで、生木を裂かれるやうな事件が起つた。と云ふのは、かの女の國なる母親が大病で、その看護にかの女は歸つて來ねばならなかつた。それには多少の金をも用意して行かねば、かの女ばかりでなく、渠の顏にも關すると云ふので、さうかと云つてその金を拵らへる質種も別になくなつてるので、最後に殘つた机を賣ることにした。考案や製圖を超越してしまつた今日、そのみなもとであつた臺の必要は二度とない筈であつた。

紫檀の材料だけに、それが案外高く賣れたが、その上に、なほかの女は鄕里へ着て行く晴れ衣を何とかしなければならなかつた。その爲めにかの女は、渠が幾度も惡いからと反對したに拘らず、さきの女敎員が當分のあひだと云つて預けて行つた大きな行李を、無斷で、殆どそれしか這入つてゐない押し入れの棚から引きずりおろした。

『……』かの女がそちら向きに力んでた厚化粧の顏をちよツとこちらへふり向けて、きまり惡さうにしたのは、あまり重かつたので、つい、ぶツと粗相をした爲めだ。

『それをとめる發明もまだできてない、な。』

『御覽なさい、みないい物ばかりでしよう』と云つて、かの女は中の物を暫らく出したり入れたりしてゐた。

『丁度おれの娘に着せてやれば似合ひさうな物ばかりだ。』

『わたしにだツてもよ！』

そのうちから選び出して、かの女は先づ赤いちりめんの裏が付いた友禪ちりめんの裾よけを腰に纏つた。次ぎに、かの女の說明によると板じめちりめんだと云ふ赤い襦袢を着た。その次ぎに、茶と白との筋が三つづつ並んだ縞のお召しの袷を着た。これには、うすい藤色ちりめんの裾まわしが附いてゐた。そしてその上に褪紅色の博多と黑の中に茶ツぽい黄の三本すぢがある博多との所謂晝夜帶を結んだ。それから、最後に、ききやう紫の紋羽二重の三紋附きを羽織つた。

これでは、もう、大發明家の立派な奧さまであつた。

『……』渠にかの女の成り上つた姿にすツかり見とれてしまつて『矢ツ張り、人間は身のまわりが肝腎だ。』

『さう？』かの女は手かがみを何の飾りもない壁の柱にもたせ掛けて、頻りにその姿を映し見てゐた。そして溢れる微笑を以つて地が黑くて平ぺツたいその顏までを美しく輝かしめながら、こちらを

ふり向いて『いいでしよう』と云つた。

『うん、惡くもない。』この自分の返事がかの女の留守を身づから慰める思ひ出であつた。その他にもかの女は女教員の銘仙の羽織や衣物を持つて行つたのであるから、それを着た姿をも想像してゐた。けれども、今にもあの局からの許可が下りて來れば、直ぐ特許料を出さねばならぬこの時に當り、お菅が專賣局の方を休んでるし、とても、金の見込みが付かないのも少からず淋しかつた。

娘に當てて出した無心の手紙に對する返事は直ぐ來たが、發明の成功を祝してあるだけであつて、

『然しお金はとてもこちらから送れません。近日のことを父上は御存じないのですが、母上の子供やお客さんに對するがみ〱病がつのつて來たばかりで、――これも母上のおもなる相手がうちにいらツしやらない爲めですが、――それが爲めに宿屋商買は實に衰微して行くばかりでございます。わたくしの俸給などではなか〱その埋め合せがついて行きません。特許とかが下りましたら、早速少しお金を送つて下さい。そして成らうことなら、東京をやめてこちらへ歸つて來て下さい。』

『誰れがあんな百鳴り婆々アのところへなど歸つて行くものか？』然し娘にはこちらへ呼び寄せてでも一度逢ひたかつた。

九

花曇りの天氣が續いて、あたまがもや〳〵と鬱陶しい。が、丁度さくらの滿開で、近處の世間までが――渠には直接の交際はないけれども――全く浮き〳〵してゐる樣子につられて、渠の氣も一層そわそわしてゐる日であつた。お背がまた金の入用を云つてよこした。

誰れに書いて貰つたのか知らないが、その手紙は割り合ひにうまく書いてある。そして、『母の病氣にも入費がかかり候へど、偶々の歸郷なる春に候へば、その方にも色々物入りが御坐候。』なんだ、遊び付き合ひの金かいと、讀んでちよツと躊躇された。『貴殿も――』これは亭主に向つては不向きな言葉だが、『今回一大發明を成就致され候事に候へば、その特許さへ得給へば、その上で如何にとも埋め合せは附くことと存じますから』と、それでも、こちらが寧ろ云つてやりたいやうなことを云つてある。さう思つてにツこりしながら見て行くと、『何卒貳十圓ばかり御工面成し下され度候。若し如何にしても外に工面の道これなく候はば、一時、阿部さんの』と、女教員の名を出して、『行李中の品を持つて行き下されたく――』

『分つた、分つた』と、渠はかの女がそばで聽いてゐるかの如く返事した。そしてそのあとを讀まなかつた。自分の心が直ぐ自分の取るべき俸給のことに移つた。

けれども、役所の俸給日はまだなか〳〵であつた。さりとて、別に金を借りに行く友人の當てもなかつた。渠はここにちよツと自分の考へが行き詰つた。

ところで、自分もまた思ひ出したのは、かの女教員の行李をであつた。さきにお菅がしたやうにそれを、そのほかはからツぽの押し入れ戸棚からおろして、調べて見ると、まだ澤山殘つてる派手な物がある。

『行李中の品を！さうして二十圓ばかり！』

『ははア、これだ、な？』自分はさう氣が付いたけれども、それは手紙で云つてよこしたのではなく、お菅が出發する時に云ひ殘して置いたことのやうに考へられた。然しこの品物一切では二十圓どころか四十圓や五十圓はらくに貸しさうであつた。が、さう借りると、受け出すのには何でもないとしても、さし當り、その持ち主の教員に氣の毒だと思つた。

一々手に取つて見ると、絽の五つ紋だ。絽で朱色の下着だ。銘仙の羽織りだ。お召しの綿入れだ。鯉と金魚と蓮と目だかの裾模樣がついた絽の紫地の衣物だ。

渠はつるりと自分の髮の延びたあたまを圓く撫でた。どうも、大きな眞宗寺の娘ではないか知らんと思へたからである。蓮の模樣と云ひ、絽の好みと云ひ、國の檀那寺の佛壇の飾りや袈裟を思ひ出すことができた。同時に、また、自分のあご髯を暫らく剃らないことにも氣が付いた。そして、斯うしてけば〳〵しい赤い色などを見るに付けても、これから面白いことができようと云ふ自分にしらがの増えて來たのが情けなかつた。

その他の物のうちに、また、絽の友禪の夏襦袢があつた。渠はこれを手に取ると直ぐ、自分の鼻を持つて行つて、その持ち主の上品なおもかけを嗅いで見た。

そして先づ十五圓と云ふ見當を付けたのである。

渠はその一切を行李のまま自分の肩に載せて、眞ツ晝間、而も午前の八時ごろに、

『なアなつ屋アだ、なアなつ屋アだ』と、からだまでに調子をつけて獨り言を云ひながら、出て行つた。

その金をかはせでお管に郵送する手續きを濟ましたあとで、いツそのこと、自分が持つて行つてやつたらよかつたのにと思ひ初めた。特許局の方へまわつてまた催促して見たら、もう直きに許されることになつてると云はれたので、もう役所のことなどはどうでもよかつた。それに、一度娘に逢つて見て、衰微したと云ふ自分の家の様子も知りたかつた。また、もツと大切なことには、ありがたい淺間さまを直接に拜して、いよ〳〵發明のできた感謝の意を表したかつた。

それに、まだ一つ大切なことがあつた。お管の手紙をうちに置きツ放しにして來たので、今それを讀み返すことはできないが、その手跡が――どうも――考へて見るに――ほかの男の手ではなく、陶山のであるらしかつた。あいつの字は前にも一度見たことがある。字ぞろひはきたないが、可なり達者だ。

『さうだ！して見ると――』歸り道の大道の眞ン中にぱッたり立ちどまつてたが、うッかり斯うしてはゐられなかつた。

渠は今一度質屋へ行つて十圓の追ひ增しをして貰つた。そしてぷいと上野停車場へ急いだが、午後二時發のよりないので、それを待つて汽車に乘つた。

一〇

午後の八時頃に小諸驛に到着すると、渠はそれから人車で自分の町へ運ばれた。

渠は先づ以前に自分の郵便局で使つてた人のもとへ行き、そこへ娘を呼んで來て貰つた。が、足かけ二年目に見たかの女は、矢ツ張り母の味かたであつた、自分の思つてたやうな優しい子ではなかつた。その母親に似たのか、あたまから父に心づよい說法をしてかかつて、お嘗のやうな女と早く手を切つて、もと〳〵通り母と一緒に住めと忠告した。

『でないと、とても家が立つて行きませんから。』

『おれはあんな家などのことを少しも考へてゐやしないぞ！』斯う云ひ放つて、そこを出てしまつた。娘の泣いてる聲があとに聽えたけれども、自分の感じでは、かの女も東京にゐて泣くのをさへ見せに來ない長男とさしたる違ひもなかつた。

待たせて置いた車にまた乘つたが、今まで自分の肌身につけてゐた娘の手紙を破りちぎつて、夜かぜに飛び散らしめた。そして星ぞらにそびえ立つてけむりを吐いてる靈山をありありと拜んで、すツとした氣になつた。こんな旅行をするのはほんとうに初めてなので、そこに餘ほどの脫俗した樂しみを感じてゐた。それから、お菅の故鄕を見舞ふのも初めてなので、これにもまた餘ほどの好奇心が動いてゐた。

車上の渠は、娘に對する反感と脫俗した樂しみとに驅られて、電車よりも速かにお菅の里に向つてた。そして、その間に、

『わツしよい、わツしよい』と云つて樽みこしを擔ぎまわる東京の子供らのことを考へてた。

『さうからだを動かしたら困ります』と、車屋に云はれた。

近づいて見ると、この足かけ二年を住んだ東京の町などに比べては、田舍も田舍、あまりの田舍であつた。そしてかの女の藁ぶき家が、その中へ這入らないうちから、まことに見すぼらしい乞食小屋のやうであるのを想像できた。茶の木か何か低い灌木で三方を取り圍まれてるが、馬屋一つ建つてない狹い前庭から這入つて、戶締りをして皆が眠つてたところを叩き起した。前ぶれなしのことであるから、かの女は驚き且よろこんだ。

『丁度今夜歸つてゐてよかつた』と、かの女は見おぼえのある袷せの寢まきのままで語つた、『友達を

つれて町へお花見に行つてたの。』
『おツ母さんはいいのか？』
『ええ、大分。』
かの女はあがりがまちに立つて、土渠はまだ間にゐたうちに、多くの寢どこが横の方へ取りかたづけられた。
『どうか、まア、こちらへ』と、おやぢさんらしい人が言葉をかけた。『むさくるしいところでございますが――。』
まだ電燈の發明が屆いてゐない家の中には、うすら暗い竹の筒臺のランプがともされてあつた。その光に照らされた自分らの坐わり場所を見ると、ゐろりの周圍すべてが疊ではなく、一面に荒むしろであつた。
古く燻ぶつたから紙の奥に今一つ部屋があるだけらしく、天井がないので家根うらからは二つの室が見透しであり、今はき物をぬいだ土間には土の釜土が大きな蝦蟇がへるのやうにうづくまつてる。
お菅のおやぢなる人に云ひ付けられて、かの女の妹と云ふのが火の落ちたゐろりに太いまきを焚き初めた。おやぢに、かの女の弟夫婦に、またその子供に、ただ母なる病人を除いては皆、ずらりと並んでうやうやしく初對面の挨拶をした。が、一旦床に就いたのを叩き起された爲めであらう、皆寢と

ぼけた顏をしてゐる。けれども、それだけに自分の家來が多くなつたつもりで、自分の方はます／＼えらいと云ふ氣になつた。

『大した御發明をなさつたさうで』と、おやぢが皆を代表しておそる／＼祝辭を奉つた。

『うん、これは淺間の爲だから。』渠は皆の方を瞰んで、兩手を坐わつた洋服の膝に張り、兩の肩を怒らせて見せた。けれども、まきの燻ぶる煙で目や鼻に這入つて息ぐるしかつた。

『また、淺間はおよしなさい。』かの女に斯う云はれても、この時、自分には、もう、東京に於ける原さんも元田さんもなかつた。

『木挽町は花が咲いたでしよう？』

『うん。もう、滿開を過ぎたらう、な。』渠はここに來てまでもかの女が自分等の住んでる場所をかかる百姓家に比べて誇つてるのだらうと汲み取つて、心ではそれに贊同した。

『東京はいいところでございますさうです、な』と、おやぢは果して既にだまされてゐた。『うちにゐながら、二階の窓から直ぐ花が見えてるなんて！』

『そりやア結構なところである！』渠には、ここに來ては淺間が寧ろ東京の方に在つた。

『おかねを持つて來て？』

『うん、質屋から十圓工面した。』渠はその前にかはせに組んだ方を忘れてゐた。

『それツぱかり?』お菅は目を見張つて、俄かに打つて變はつて、ふくれツ面になつた。

『然し、仕かたがない、さ。』

『足りなけりやア、いくらでもあの品を持つてけばいいぢやアありませんか?』

『そりやア、みな持つて行つた、さ。』

『それでたツた十圓?あなたもよツぽど頓痴氣だ、ね――それに、顏のひげも剃つて來ないで!』

『……』ひげやしらがの手入れどころか、自分のあたまにはありがたい後光がさしてゐるのをかの女にも見せてやりたかつたのに、かの女は却つてそれの威光を滅却させるやうなことを云つた。で、暫らく默つてゐたが、こと更らに笑つて見せてから、かの女の機嫌を取るつもりで話題を轉じた、『實は、今、娘に逢つて來たんだ。』

『えツ!わたしのところへ來る前にうちへ寄つたのですか?』かの女は却つてその怒りを大きくした。顏を眞ツ赤にして『ぢやア、まだ不足の分はうちへ渡して來たんです、ね!』

『いや、うちへは寄らなかつた。』斯う云つて、正直に道順を辯明したけれども、かの女はどうしても信じなかつた。そしてヒステリの本性を出して突然に泣き出した。

『うそです!うそです!あなたは娘と云つて、おかみさんに逢つて來たのだ!それほど逢ひたけりやア、向ふへ行つてとまつて下さい、ここへとめることはできません!』

『これ、折角おいで下さつたのに、そんなことを云ふでない』と、おやぢはおづ〳〵しながらお菅を制した。

『………』かの女はそれツ切り泣きをとどめたけれども、涙のまだ溜つてる目を以つて意地わるさうにこちらをじツと睨み付けて、『いつから來てゐたんです？』

『けふ、二時に上野を立つて――』

『わたし、信じません！』

『………』渠はかの女のひどくすねてしまつたのに當惑して、どうしていいか分らなかつた。

『わたしの留守につけ込んで』と、飽くまで追窮されるのがつらかつた、『もう、とツくにから來てゐたんだ。隱し立てしたツてその位のことはちやんと分つてます、助平おぢイ！』

『これ、お菅、どうしたことだ？』おやぢはまた娘を叱つた。

『………』渠はまだ一人でも味かたのあるのが嬉しかつたけれども、お菅のけふ町へ出たと云ふよそ行き化粧のままで、まだらにお白粉剝げのしたその顏が、熱したうへに持ち前のいかつさを見せてるのを見詰めてゐると、自分の物を云ひかねてる口びるまでがぶるぶる顫へ出した。嫉妬されてるのだと氣が付いた。

『そのざまを御覽、隱し切れないから！あす、また町へ行つて、あなたのところへ怒鳴り込んでや

る！』
『………』怒鳴り込んでも眞實は動かせないと思へたが、娘がお菅を落し入れる爲めにこちらが二三日前から來てゐたなどと云ふうそを云ひはしないかと云ふことが心配になつた。陶山が初めてお菅を尋ねて來た時、自分はこれを自分の娘にめあはせてやればとも思つた。そしてこのことから今陶山を思ひ出して、自分も亦心の奥からふら〳〵嫉妬が涌いて出た。が、ここに兩方からの妥協點を求めるつもりで、少し聲を低めてだが、どもりながら『お、お前こそ――す、陶山を――つれて、き、來た癖に！』
『なんですツて？』かの女のは反對に甲走つたおほ聲であつた。『陶山なんかつれて來ないでも、東京で十分に樂しめます！』
『畜生！』如何に自分でも堪忍ぶくろの緒が切れた。これまでこらへ〳〵てゐたまさかが取り返しの付かぬ事實と分つたのだ。近頃になかつたほどの冷靜な自分自身がそこにちよツと現はれたが、それがまた忽にあたまへまた熱して行つて、『ぢやア、無論、あいつばかりではなかつただらう？』
『無論。さ！』かの女は飽くまでづう〳〵しかつた。『それでなけりやア、どうして毎月三圓づつでも親に送れるもんか？』
『………』渠はそれを聽いて、怒りをつづけるどころではなかつた。ぽろ〳〵と涙をこぼした。自分

の娘をまでも一緒くたにして、自分がふり切つたその娘の母は、如何にがみ〳〵屋であり、けんどん屋であつても、まだこの亭主を出し拔く淫賣のやうな女ぢやアなかつた。が、それをさへふり切つた時の自分の奮發と反抗心などは、今や全く失せてしまつた。最初の發明見本が駄目であつた時よりも自分は一段も二段もがツかりした。あらゆる希望の絶頂から絶望の極に投げ込まれたのだ。自分の愛するお菅をばかりでなく、自分の發明品その物をも既に、自分の留守に、東京に於いて陶山や陶山の友人どもに奪ひ取られてゐると思ひ込んでしまつた。

二

頭は自分の背中が打たれたあとのやうに痛むのを覺えて目をさますと、見馴れぬ床の上に寢てゐたのであつた。

ふと氣が付くと、自分の額には冷たい手ぬぐひが當つてる。そしてそのそばにお　が坐わつてる。荒むしろの床からこれはまだかの女の里にゐるのだと分つた。

自分の隣りに寢てゐる病人もこちらに向つて何か物を云つてるが、それが自分の高い出世を祝つて呉れてるやうであつた。淺間の山靈が確かに自分のもとへ大辭令を持つて來た筈だが――。

『少しは氣ぶんがよくツて？』お菅は優しい時のおだやかな聲でこちらへ尋ねた。『あなたが熱を出し

てからこれで二晩目の朝よ。』

『……』ぢやア、その爲めに自分の就任式の日取りが後れたのだらうが、けふは、きツと行はれるだらう。餘ほど氣ぶんがよくなつた。

『かはせがけさ來てよ。』

『あア、さうであつた、な。』

『あなたは若しさうなら、さうと、早くおツしやつて下すつたらよかつたのに！』

『思ひ出さなかつた。』實際に、そんなことはどうでもよかつた。

『丁度いいわ、ね、あなたのお藥代にするおかねもできて。』

『……』いや、自分は病氣でも何でもない、旅に疲れたのだ。早く東京へ歸つて、樂々したかつた。

起きあがつて、自分の着てゐる、馴れぬ古綻卷きを見るにつけても、古壁へ自慢さうにかけ並べてあるお召しの衣物や銘仙の羽織りが目に立つた。

『きのふも町へ行つて來たの。』かの女の得意さうな報告を聽きながらも、いつ、自分がこんな立派な物を買つてやつたのか、自分自身には思ひ出せなかつた。『さうしてあなたのうちへも寄つて見たら、お杉さんは特許が取れたら、少しうちへもおかねを送つて呉れと云つてゐた。』

『………』さうだ、自分の娘はお杉と云つたツけと考へて見たが、顏を洗つてから直ぐ渠は馬鹿に空腹を感じてゐる自分を爐ばたに出た膳に向はせた。給仕をするお菅のほかには誰れもゐなかつたが、默つて箸を運んだ。

『そのにしんはわたしが喰べてたのよ、うちでは少しも砂糖をつかはないんだから、別にわたしが煮て置いたの。』

『………』これにも返事しなかつた。そして自分は何杯喰つたかおぼえないけれども、かの女は八杯だと云つて笑つた。その割りには腹が何ともなかつた。

やがて便所に行つたのだが、くそ溜めの上へ板を二枚渡してあるだけで、瀬戸などはなかつた。また、さきに聽いた實式のはねよけもこの百姓家では備へ付けてなかつた。けれども、そこからまた遠く淺間やまを拜めたので、それに向つて自分の發明を感謝した。この二三日に、淺間をもう特別な氣もちで拜めたのは三度だ。

『これで氣が濟んだ！』ので、渠はお菅を作つて歸京した。信州で一度お菅に云はれて床屋へ行つたことは行つたのだけれども、人がまた自分の顏を餘り青くなつたと云ふので、自分も念の爲めに鏡をのぞいて見た。すると、青くなつたのではなく、小さいといつも笑はれる鼻のあたりにまでもずツと威光が増したのであつた。『古來稀れなる淺間の靈が乘り移つてるのだから、お前達は皆この靈體に敬

禮を表すべきものである』と、近所の店さき、店さきを說いて步いた。
　それにしても、渠の一番氣にかかるのは質物の一件であつたところ、果して阿部さんが月末にもならぬうちに取りに來た。そして福島から上京中だと云ふその紹介者夫婦をも伴つた。
『分つた、分つた！何も云はないでもこの靈眼に見えてる』と、今田は阿部さんに向つて云つた。不斷着の肩を怒らせて、兩の肱を突ッ張つて、『お前は質物のことを心配して來たのだらうが、そんなことはどうでもいい。これは古來稀れなる淺間の靈が乘り移つて、やがて高位就任の式を行ふ。その時には、主務掛りに命じてお前を官女の取り締りに任命させてやる。』
『……』阿部さんはにた〳〵笑ひながら、紹介者の細君の袖を引いた。
『そんな不眞面目なことでは不敬に當るから、愼んでゐなければならぬ。皆はお前を喰ひ物にしようとしてゐたのだから、暫らくの間は十分に身を愼んでるがよろしい。――お前は、また』と、一方の細君に向つて、『無教育だから困るが、官女ぐらゐにはしてやる。』
『へい、どうぞ。』
『さうだ、さうおとなしくして。――それから、お前だが』と、紹介者その人に向つて、『お前はなかなか役に立つ男だから、宮ざむらひのかしらに取り立てる。』
『どうかよろしく』と、男は手をあたまへ持つて行つて、その上をくるりと撫でた。

二人の女どもがそれを見て吹き出したので、今田の機嫌がそこなはれた。けれども、阿部さんの持ち物のうち、質屋へ行つてゐないそしてお菅が着てゐた分だけは返すことにしてやつた。そしてそれを、はたから、何とか云つて拒まうとした不正直なお菅を一喝のもとに叱り付けた。

『さア、烏帽子と直垂れを持つて來い！』渠は先きに立つてそとへ出たが、蒲團屋やはかま屋、また通りの菓子屋、煙草屋、煮まめ屋などの店さきを一まわりして、店毎にまた『古來稀れなる淺間の靈』を說いた。

皆が行列をして從つてゐるつもりであつたところ、再び家の前に來た時には、お菅ひとりであつた。他のもの等は、頻りに質屋のありかを聽いてたと思つたら、その時行つてしまつたのらしい。

『いかの鹽から――かつをの鹽から！』と云ふのがやつて來た。

『あ、からいの』と、その方にふり向いて、右の手を延ばしてさし示めした、『それを少し。』

『あまい、あまい――あま酒！』

『あ、あまいの』と、またそのに向いた。今度は左りの手でさし示めしながら、『それもよろしい。』

渠は兩手をさし延ばしたまま、お菅の二つとも買ふのを待つてゐた。

そして發明品の特許は下りることに通知が來たが、金がないのでまだ取りに行けないのであつた。

――(大正七年十月)――

要太郎の夢

自分はどうしたのかふんどし一つであつた。それも、うちにゐてのことなら、この暑い時節を不斷のことであるから、左ほど不思議にも思へない。が、大道を歩いてゐる。俄か雨にでも出くわしたのか知らんと見ては、さうでもない。なか〳〵上天氣のやうだ。そして大道と云つても、東京の街のやうなところではなく、どこか——斯う——昔、書生の時に、旅行をして通つたことのありさうな景色で、——これが全體として不思議なことには自分を不自然に壓迫してゐるが、自分の右手は一體に山が迫つてゐて、自分の左り手には、青々した田ン圃が廣がつてて、そのまた向ふには、つかひ古したのこ切りの齒のやうに缺けてでこぼこした出入りのある尖りを見せて、何かの森が空にそびえてゐる。そしてその黑いかげのおもてを螢が飛んでゐる。

自分はいつもより早く床に這入つたつもりであるから——さうだ——ぢやア、夜かと見ると、さうでもない。蚊屋の中から寢ころんで廢兵院の森を見てゐるやうなところはちツともない。そして少しも熱天の暑さを感じないけれども、夏の眞ツぴる間のやうだ。さうだ、その眞ツぴる間に、丁度日曜

日であつたから、お母さツんと自分とは二手に分れて、大きな風呂敷をたもとに押し隱して、町役場の廉賣米を買ひに行つたツけが——

大の男が途々獨りで耻辱を感じないではゐられなかつた。さうだ、自分は穴へ這入つて、そこからこツそり拔け出して來たのだから、自分には自分が見えてゐても、多くの人にはそれと發見されないでゐる靈魂のやうな身ぶんを感じて、今や不思議なほどに氣が輕い。

ふと、氣が付くと、自分は火の見ばしごの上からその下界の混雜を見おろしてゐる。さうだ、町役場の直ぐそばには高い火の見ばしごが立つてゐる。自分が毎日電車に乘るにも、下りてからも、必らずそのはしごのもとを通らなければならぬやうになつてるが——斯う物價が高くなつて、而も役所の俸給がゐ坐わりでは、耻辱を超越して鼻の下が先づ大切にならないではゐないのである。

風呂敷をたもとに隱してうちを出る前に、おツ母さんは宣言を發した。

『お前、親子のやうなふりを少しでも見せたらいけないよ！』まるでこちらから些かでも金を持つて行きながら、泥棒をでもしに行く氣になつてゐた。死んだお父さんはおほ酒呑みではあつたが、昔の侍ひで、その時矢張りお役人であつたと云ふ。その未亡人とその子とが——

『ぢやア、夫婦のつもりにでもなつて』と云ふ皮肉が、後の祭りではあるけれど、今やツと口に出た。無論、これはかの女自身に對してではない。寧ろこのせちがらい世間に反抗した氣持ちでだ。が、

うまいことが云へたものだとわれながら感心して、いつになく餘裕ある愉快をおぼえて、自分は寢てゐながら吹き出した。けれども、ちよツと目がさめかけたと思ふところへ直ぐ役場の光景が浮んだ。

町役場のところへ行つて見ると、多くのおかみさんやら小僧やらがどし〳〵押しかけてゐた。自分も來た以上は、思ひ切つて、米のなくならないうちに買はなければ損だと云ふあせり氣が出てゐた。

おツ母さんはずん〳〵進んで行つて、みんなのさきに出て、役場の門で、つツかひ棒に喰ひとめられてゐるやうであつた。

みんなの顏を見ると、それとなく澄ましてゐながら、がつ〳〵した樣子がその据わつた目つきにまで現はれてた。

『あさましい！あさましい！』

自分も押し進んで行けた時には、皆は皆解散してゐた。自分獨りこんな耻ぢをかかせられる位なら、いツそのこと、米の安い田舍へ引ツ込んで、安樂に暮す方がましだと思つた。

それが爲めにこんな田舍へ米の成る木を探しに來たのであつたか？それを發見しさへすれば、自分獨りであるから却つて占めたもので、他の誰れにも手を觸れさせない。さうだ、自分獨りで占領して、たらふくおツ母さんにも喰はせ、殘りがあらばこちらで廉賣に出してやる！

『おツ母さん、安心してゐて下さい。やがて俸給もあがりますから。』

「實際、これぢやアやり切れやアしない。人さまのやうに女中の一人も置けないで――どうして――いいお嫁さんの來やうがない。』

『おツ母さん、それどころですか?親子ふたりで喰ふや喰はずで――』さうだ、さう云つてかの女の手前は澄ましてゐるものの、自分には戀しい女がないでもないのだ。あの、お隣りへ近ごろ越して來た雪子さんだ。

向ふも勤めがあつて、電話局に行つてるので、顔を合はすのは往きや歸りの途中か、たまには同じ電車の中か、然らざれば、自分の勝手ぐちのそばに在る共同井戸へ水を汲みに來る時だ。けれど、逢へば向ふも顔を赤くして、必らず何かこちらへ云ふことがありさうにしてゐる。自分も云ひたいことがあるので、一二度訪問して行つたが、その度毎に邪魔になるのはかの女の姉である。

妹が言葉ずくなであるに反して、姉の方はおしやべりだ。雜誌などを讀んで、いろんな生意氣なことを云ふ。

『須本さん、新らしい女なんて云ふてましたけれど、みなどうしたのですか?子供を持つやうになつたら、皆引ツ込んでしもた云ふやおまへんか』などと、大阪言葉を丸出しにして、こちらを責めるやうであつた。

『わたしは新らしい女でも男でもありません』と返事してやつた。

『そりやそやけど、な、須本はん、紅吉(こうきち)たら云ふのは大阪の出だツせ。それがまた新らしい女を通(とほ)さなんだ云ふたら、わていらのいツち耻(はぢ)曝(さ)らしにもなりましよう。あんた、どうおもやはる？そんなことなら、いツそ初めから舊い女で通した方がえいやおまへんか？』

『あんたは、たア』と、妹はそれでも控へ目であつた。『いつもそんなこと云やはるけれど、人は人でえいやないか、自分たちは自分たちのことを眞面目(まじめ)にしてゐたら？』

『あんたはまだ年が行かんくせに、舊いことばかり云ふてやはる！』これではかの女自身が新らしがつてるつもりだ。

『………』妹の方もそれには答へなかつた。そしてこちらと顏を見合はせて、にツたりした。

『お互ひにそんなことどころではありますまい。どうです、この頃のやうに物價(ぶつか)が高くなつちやア——米がとう／＼五十錢臺にまでなつたぢやアありませんか？』

『ほんまに、なア』と、また姉が受けた。

『さうかと云つて、まさか、わたしらはあの施(ほどこ)し米(まい)のやうな物を貰ひには行けないし。』その時にはまだほんとうに行くだけの勇氣が自分にはなかつた。

『………』向ふの姉はその痩せぎすの長い顏を俄かに赤くした。そして押し默(だま)つてゐた。

『さうです、ね』と、妹が答へたけれど、これも姉と顏を見合せてちよツといやなやうすをした。

『……』あすこでは、こちらよりも先きに、親子三人が別々に買ひに行つたのであることを直ぐ思ひ出されたが、矢ツ張り、人には隱してゐたのだ、お互ひにまだそれをうち明けるほどの親しみにはなつてゐない。

門を一つにして、向ふもうへ一と間、した一と間の同じ家賃に住んでるのだ。が、こちらよりも人數が一人多いにも拘らず、そして妹の取つてる俸給だツて電話局では知れ切つてるのに、その暮し向きがこちらに比べてさう困つてるとは思へない。多少でも、矢張り、死んだと云ふ父の遺産があるとすれば、向ふの方がそれだけらくなわけだらうか？

うちのおツ母さんは、然し、渠等の母なる人を見るのもいやがつてる。『おます』、『おまへん』、『さかい』、『さうだす』など云ふいやな言葉を使つて、べちやくちやとおしやべりで、ちよツと見ても輕薄さうだと云つてだ。けれども、うちのおツ母さんだツて、いろんな人の惡くちを云つて喜んでるところなどを見ると、あまり輕薄でないとは云へまい。

その上、向ふが娘の自慢ばかりすると云ふのだが、こちらだツても、二階で私かに聽いてると、自分のことをだが冷あせの出るやうないい氣なことにしやべつてるのである。

輕薄な點に於いても、おしやべりに於いても、公平な目から見れば、恐らく負けず劣らずであらう。が、そんなことは自分にはどうでもいいのだ。ただ困ることには、そんなかげでのいがみ合ひの

爲めに、自分を隣りへ遊びにやつて與れない。二度目の訪問の時には、おツ母さんの目を掠めてほんのちよツとの間な行つたのだが、直ぐ見付けられて非常に叱られた。

『お前は母親を女だと思つて馬鹿にするのだ、ね！これでもお父さんが亡くなられてからは、ね、お父さんに代つてわたしの腕一つでお前を育てて來たのだよ。』斯う云ふことを云ひ出す時の顏と來たら、青すぢがその痩せこけた頬ぼねの上や額のあたりにも筋立つて見えて、如何にもヒステリ性をむき出しにしてゐる。無論、さうもならう、さ、おツ母さんの通過して來た人生を思ひやれば。自分のおツ母さんは自分の父の死んだあとで一時父の友人のめかけになつてゐた。それと別れてからまた他の男ののち添になつたが、それも亦死に別れであつた。さんざんに苦勞をしたのはしただらうが、開らけたものには餘り自慢すべき苦勞でないかも知れぬ。が、それを以つてかの女は子に對する權威ででもあるかのやうに意張つてるのだ。『なんぼ女だツても、ね、わたしはお前に對しちやア亡くなられたをとこ親も同前だよ。』

『……………』自分は獨り身でゐる爲めにだらう、いつまでも子供扱ひにされてるのだ。はいはい、左樣です、御もツともですと云つた風をしてゐなければ、おツ母さんを滿足させて置くことができない。その爲めに、訪問したい隣りをそれツきり訪問しないのだが――

さうかと云つて、三十づらを下げた男が女にさう途中で馴れ〳〵しく物は云ひかねる。ましてそれ

を口說くことは？寧ろ手紙を認めて置いて、それを女に手渡しして見ようかとも考へたことは幾度も
だが、それにも勇氣が出なかつた。
　その後、勤めの往きがけにも、その復りにも、門を明けるたんびに雪子さんが見えて呉れるかと思つてるのに、ついぞ見えたことがない。そして、どこへも行つてゐない姉の方ばかりが、いつも待ち受けてるやうにその家の二階の手すりへ出てゐて、
『お歸りやす』など云ふ。『けふも暑うおましたやろ、な。早う服でもぬいでお涼みなはれや。』
『……』いや、自分は今ぬぐべき服もないままで青田と青田との間を歩いてゐるのだ。人には誰れも見付からないでゐて貰ひたい。殊に巡査にでも出逢つたら――それにしても、『ありがたう』とは答へて置くが、一體そんなことは入らざらんお世話ではないか？人が服をぬがうと、ぬぐまいと、隣りのものから命令して貰ふ必要はない。
　それにおかしいことには、かの女はこちらが家にゐる頃に限り、幾度となく井戸へやつて來て、そのついでに――おツ母さんの言葉に從へば、泥棒のやうにきよろ〳〵と――こちらの家の中をのぞくさうだ。水を汲んだり、洗濯をしたりしてゐるのだが、そこを離れる時きツと一つ何か忘れ物をして置いて、それを取りに來る時に、また家の中をのぞくさうだ。
『あの娘はお前に氣があるのだ、ね』と、おツ母さんは云つた。

『……』自分は、まさか――ぢやア、いツそのこと、妹の方であつて呉れたらとも答へられなかつた。

『然し氣を付けないといけないよ、あんなにのらりくらり遊んでばかりゐる女だから、折があればお前を喰ひ物にしようとしてゐるかも知れやアしないから。』

『なアに、御心配にやア及びません、わたしは朝鮮米でも外國米でもありませんから。』ふ、ふんと自分の言葉を自分からをかしくなつて、また吹き出したやうであつた。實際に、自分の眞面目くさつた性分としては、こんなうまいことや呑氣なことを夢でなければとても云へない筈だと思つた。さうだ、自分は今夢を見てゐるのだ。不斷の窮屈な家庭や世間から拔け出して來て、空想の世界にらくな呼吸をしてゐるからこそ、斯う打ち解けた心持ちで泰平樂を云へる。それが如何にも天へでものぼつて行くやうに愉快だ！

　然しおツ母さんの忠告は兎に角實世間の事實であつたのだ。そして世間にありがちだと云ふ、いやな心持ちが作つてる。乃ち、獨身をんなや後家のひがみ根性で――さうだ、その忠告には角が生えて、見る／＼おそろしい怒りの顏が現はれた。そして、

『お前は、まア――お前は、まア！』牛のやうな力でかの女はこちらの胸ぐらを取つて、こちらを小突きまわすのである。『そんな子ではなかつたのに――あの女に魅入られたばかりに、人を馬鹿にし

て、このおッ母さんを女に見替へようとするのだ、ね！見替へるなら見替へて御覽！お前を取り喰らつてやるから！』

『……』何だか、――斯う――死んだお父さんがこちらをおッ母さんと見違へて燒き持ちを燒き出して來たやうだ。それには、尤もまた男が女に入れ替つてるが、――人を見替へて寢返りを打つたのは寧ろおッ母さんではなかつたか？おッ母さんこそお父さんから小突きまわされなければならぬのに――。だから、小突きまわされながらも、自分は人ごとのやうに少しも苦しくはなかつた。

さうだ、お父さんがこちらを――顏がよく似てゐる爲めに――おッ母さんと見違へてるのだらう。果して怒つてゐるおッ母さんの顏が寫眞に殘つてゐるお父さんの顏に見えて來た。そして別にこわい樣子もしてゐない。

『わたしですよ。要太郎ですよ。』斯う聲をかけて、どうか雪子さんと一緒にして下さい、おッ母さんは邪魔をしますけれども――と云はうとした。が、この時には、お父さんもおッ母さんもどこかへ行つて姿が見えなかつた。

いつのまに妥協ができたのであらう？この世は親どもでもそう現金でなければならぬのか？何だか非常に寂しい氣がして來た。が、今一と言云ひ添へて置きたかつたのに。さうだ、こちらも夫婦を一組こしらへたい、そして自分の樂しいのは雪子さんであつて、姉の方ではない。

『どうです、ね、あなたのお勤めはちツとは面白いですか？わたしの仕事などは毎日すこしも面白くないので困りますが――』

『さうです、ね』と、妹は答へたツけ。その姉とは違ひ、努めて東京口調を用ゐようとしてゐるけれど、さうをあたまから强めて一長音に引ツ張ることはしないで、わざ〳〵二の短音に分け、而も第二の音に輕く所謂力點なる物を置くところなどは矢ツ張り大阪流であらう。東京人として育つた自分の耳には不調和だけれども、不調和ながらにも感心にこちらの流儀にならうと努めてゐることが伺はれるだけ利口さうである。『然し、どなたにでもその仕事となれば、さう面白い物ではないのぢやございますまいか？ただ遊んでをつても詰らんとか、おかねになるからとか、つまり、そんなことで止むを得ず致してをるのだらうと思はれます。』

『………』さう云はれて、自分は成るほどと考へた。なか〳〵よく分つてる女だ。

『あの姉より妹の方はまだしも却つておとなしさうで、人間らしく生まれついてるらしい』と、おツ母さんも云つたことがある。

その人間の住まひだらう、小さい二階家が森のかげに遠く見えた、然しその森は自分らの見なれてる廢兵院の森ではない。森のこなたには矢ツ張り青々した田ン圃がある。こんな風景は自分らの住ひする巣鴨町にはない。その爲めだらう、二階の手すりからのぞいてゐるのは戀に饑ゑた姉でもなく、

またその妹でもなく、施餓鬼の米にさへあり付けぬ靑鬼である。

その角が見える。そのつめが見える。饑ひ瘦せて飛び出したその目が見える。自分も神經がさう云ふ風に瘦せとがつて行つて、そんなに遠くの物までが見えるやうになつたのか?して見ると、自分も白米に追ひ詰められて、もう、あの世へ見透しで來たのか?

道理で、父を尋ねて石童丸、――高野山ではなく、ここで、死んだお父さんにも會つた。そしてそのあとは如何にも寂しい。けれども、前々通り衣食の爲めに苦勞してゐるよりは、どんなにらくか分らない。氣が夢のやうに輕い。外國米を人に隱れて買ひに行くやうな耻辱もなく、內地米が五十錢以上になつたのを心配するにも及ばない。

ただ、このあの世にも山があり、森があり、小川が靜かに流れてゐて、而も稻を作つてあるのが少しをかしいが――これは、まだ自分がここに新米であると云ふ、乃ち、まだ米に多少でも關係がある爲めに――自分は斯う考へて、思はずまた吹き出したが、なほこのいい氣ぶんがつづいた――あのさきの世界の風景をまだ自分が記憶に浮べてゐるのかも知れぬ。それとも、また、これはここの實景で、暴動などを起したり、またその暴動に共鳴したりする必要がなくなつてることを示めす爲めのものとすれば、その靜けさが死の寂しみを伴つてゐて、如何にもよく自分に調和した一幅である。

さうだ!自分はこの輕い心もちで靈魂の世界に來てゐるのだ。靈魂の世界には衣食の料が入らな

い。所帶の苦しみがない。隱し立てする恥辱もない。いや、恥辱はあつても、それをそれとしてうち明けてしまうから、詰り、ないのと同じことなのだ。だから、素ツぱだかな咎め立てするものもないのだらう。

丁度希臘の昔のやうに、人間のからだまでが神聖になつて、少しも咎め立てや、はにかみをすべき故障がない。融通無礙だ。自分の讀んだ或本に書いて在つたではないか――昔の希臘の少女どもは腰にうす物さへつけないで、神さまのお祭りの時には、皆野外にうち揃つて踊つたと？そして多くの見物のうちから、われと思つた若い男は身づから進み出て、これと思つた少女に自分の手を提供した。男の手を提供された少女はこれを拒むことができない代りに、手の提供者たるものは自分に於いてその身體も精神も健全であつて、二人の間に生まれる子が必らず國家の爲めに第二の健全國民たる條件をあらかじめ備へてゐなければならなかつた。まして、下界の人のやうに、朝鮮米さへ喰ふや喰はずでは――？

かかる氣もちは氣もちとしては長い時間をずん／＼進んでゐたが、自分の位置は少しも動いてゐないのに氣が付いた。

低い後ろの山から出て來た道は、田のもの青さに對して白い砂を敷きつめたやうに見えてゐるが、少しさきにあるゆるい曲り角へは一向に達しない。そして自分の向き出しなからだの皮膚が自分の踏ん

で來た道その物になつてるやうに白かつた。

うか〱してゐると、どうも見付かりさうなので、ちよツと後ろをふり向いて見たとたん、かちやかちや云ふサアベルの音が聽えて白い服の巡査が自分の前に立つてゐた。

『こら、貴さまは――』

『………』自分は夢が覺めたやうに驚いたが、直ぐ右手に建つてる一軒家の店さきへ逃げ込まうとした。が、自分の左り手に衣物の疊んだのをステキの曲つた首のやうに掛けてゐるのに氣が付いた。誰れの物だか分らないが、絹もので、たてか横かの、白と紺との棒縞の單衣だ。若しこれがたての棒じまなら、曾つて自分が着たおぼえもあるので、これに一つの假か思ひ付きを得て、自分は左ほどおぢけもしないで、巡査の方に向つて踏みとまつた。そして割り合ひにおほやうに笑ひながら『どうも濟みません。實は、これを質に入れたいのですが――』

『………』巡査もなか〱おほやうであつた。『ぢやア、何んとかしてあげませう。』

『………』自分は少からず感謝の意を目に込めて渠の顏を見てゐた。

『おい』と云つた風に渠はそばなる店の方へあごをしやくつて見せた。

その方を見ると、意外にも二人の姉妹がにこ〱して、店の田舍のお休み所のやうで、何でもいろいろな駄菓子ががらす箱の中に並べてあり、わらじなどもかかつてた、その――奥から、下駄を突ツ

かけて出て來た。そしてその姉の方が親切さうに甲斐々々しく自分の手から衣物を受け取つた。

『なんとかしてあげろ。』

『どこにしましようか』と、かの女は惡びれもせず、またこちらを嘲ける風もなく、巡査に馴れ馴れしく聽いた。不斷からよく知つてるおまわりさんらしい。『福井がえいでしようか――それとも、田中屋が?』

『どツちでもよからう』と、巡査はこだはりもなく答へた。

『………』まさか。夫婦の約束をした仲でもあるまいが、お互ひに近處の質屋を二ケ所とも知り合つてる。してみると、かの女の家でも、時々持つて行くらしいのだ。福井も田中屋も、實は、自分のうちの通ひつけの一六銀行だ。

『それなら、なぜ自分自身で行かない』と云はれさうだ。が、自分は今や別な世界の人であつた。着て行くにも着る衣物がないのが決して惡いことではないやうだし。また、幽靈か何ぞのやうに歩く足もない。

で、ただ巡査やかの女の爲すがままを見てゐた。

かの女は雪子さんの姉さんには違ひないが、この場合、自分には苦しい時の神頼みか、いつもに似合ますうりぶこへ人て思へた。そして姉さんの後ろについてまご／＼ばかりしてゐる妹を却つて不甲斐

なしと見た。

ところが、自分も亦その店さきをいまだにまご／＼してゐるのである。そして考へてゐた、自分の戀しいのはこの女だ、な。いつ云ひ寄つて見ればいいのだらう？云ひ寄るにしても、先づ直接に當るのがいいか、それともおツ母さんに話をしてからにしようか？おツ母さんと渠等の母とが仲よくつき合つて呉れると、それこそ渠等の所謂いゝツちえいのであるが、などと。

胸のあたりがかゆいので自分はそこへ手を持つて行つた。ぼり／＼云ふ音が自分の耳に聽えたけれども、いい氣持ちであつた。どこかでするヴイオリンか何かの音樂を聽いてるやうであつた。かゆいところへ手の行き屆いた音樂だから、さぞそれは名手の作であらう。

そのうちに、

『おまわりさんは』と見まわすと、その姿はどこにも見えなかつた。そして娘も店もなかつた。そしてそれが何となく惜しまれたばかりではない。『一體、自分の渡した棒じまの衣物はどうなつた？どこへ行つてしまつた？』

質屋へ持つて行つてやると云ふから、そして巡査もついてゐることだから安心して、何の疑ふところもなく手渡ししたのではないか？その相手がいつのまにか皆どこかへ行つてしまつたのだ。初めから自分は詐僞にかかつてたのか？まるで自分は雲の上に立つて雲をつかんだやうだ。

一ときは心がひやりと、氣がぼんやりとした。けれども、夢だらうからと思つて、今一度その場面を自分に恢復するやうに努めてゐると、果してまたその店さきがあり／＼と見えて來た。そして巡査は自分に向つて、

『ただ立つてゐてもお勞れでしよう。そこへ這入つておかけなさい』と云つた。

『………』自分は腰辨だけれども、○○省の屬官で、勤勉の點に於いては△△課にその人ありと聽えてる依田要太郎である。課長のおぼえもよくて、やがては俸給もあげてやると云はれた。それを知つてゐる爲めだらう、巡査もこちらに敬意を表してゐるやうだが、――さりとてなほこちらを罪人のやうに監視してゐるのが私かに氣に喰はなかつた。自分のあとについて――自分を逃げさせない爲めにか――店へ這入つて來て、渠もこちらのそばへ腰をかけたので、『どう致しまして、わたしは暴動にも加はりませんでした。石も投げませんでした』と云つてやつた。

ところが、これも案外であつた。

『わたしもあなた同樣に外國米を買つてる身ぶんです』と、巡査は問はず語りをした。

『………』こんなのが大阪で群集の前に立つて僕等も君等と同じやうに米の高いのには困つてるのだからと云つて、群集を說き靜めたのだ、な、と思はれた。

『なアに、困るのは』と、頑張つてやつた、『働かないからでしよう。勤勉でないからです。』

『然し、どんなに娘が勤勉でおましても』と、不思議なことには、この巡査が俄かに大阪言葉とその口調を使つた、『俸給があがらないのにお米ばかり高うなるのでツさかい！』

『……』思ひ出すと、それは姉妹の母親が井戸ばたでこちらの母に語つた言葉そツくりであつた。

『あんたンとこの男はんだツさかい、ほん都合がよろしゆおましようが、うちはをなごばかりで、なアー』

『……』そのをなごとか、あなごとかを一匹欲しいのである。『どうです、少し安く負けて貰へますまいか？』

どうも――自分が云ひ出す言葉と云ひ、口調と云ひ、どうも、役所に於ける自分の周圍の人々の利口さうな言葉であり、口調である。そして自分の不斷の習慣にも心持ちにも叶つてゐない。自分はさう大膽になつてゐられない性分だのに。

『おい〳〵、負けろと云つたら負けろ！』斯う一人の愉快な同僚は、無理に叫んで見せた。やす萬年筆を役所へ賣りに來た男があまりにひやかされて、荷の箱を持つて戸を出て行かうとした時にだ。萬年筆屋が踏みとまつて、それでもこちらをまだ未練がありさうに見てゐるのに向つて、『然し行くなら、行け！二度と再びこの敷居はおれがまたがせやアしないぞ！』

『ふ、ふん』と云つて、他の同僚どもは笑つた。

『どうか少しお手やわらかに――』

『ぢやア、負けろ！その代り、皆で一つづつ買つてやる。』

自分の合成金ペンやペンぢくもこの時おつき合ひに買つたのであるが――。

『それもいツそのことに一緒に質入れしたらどうです』と、巡査は云つた。

『………』馬鹿！そんな安ものは、雲助がふんどしを質に入れるやうなものではないか？』

『それでこそおれも眞ツぱだかけい――は、は、は、はア！』

自分で自分の笑ひ聲に氣が付いてちよツと目をさますと、自分の隣りにおツ母さんの寢てゐるのが見えたやうであつたが、なほ自分はいい心持ちであつた。

やがて自分はあの姉妹の家とは反對の隣りなるおほ屋さんの畑に出てゐた。狹い畑ではあるが、なすびが澤山成つてゐる。その一つびとつが、よく水のまわつてるせいか、色つやがいい。八百屋で買つたら、どうしても十で四錢はするだらう。

そのなすびを――誰れも見てゐないやうであるから――少し盜んでやらうと思つた。そして手を出す前に自分の横手を見たら、矢ツ張り今の巡査が自分を監視してゐるのであつた。

自分はそのてれ隱しに、わざとづか〳〵と畑の中に進んで行つて、なすびの一つびとつに小さい小學生徒の帽子のやうな物をかぶせてゐた。

『いい思ひ付きです、な』と、巡査もまじめに賛成した。

『斯うして置けば色が褪せないのです。蟲も附かないのです。』

『結構です、わたくしはあなたの今月のお家賃を五圓に負けてあげます。』いつのまにかおほ屋の寛大なおぢイさんも出て來た。さうして呉れたら、不斷の望み通り一割り下げになる。

ところが、その畑は水田に變じた。そしてまた白砂のやうな道が現はれた。道ばたにはお休み所がある。自分はその中に矢ツ張りはだかであつた。

『衣物をどうした？衣物をどうした』と、今、おほ屋さんに見られたあまりの耻かしさに聲を擧げて叫んだ。

そこへ丁度自分に聲をかけた者がある。――

『田中屋さんで云ひわけして、やう／＼これだけでけました。』

『………』質の工面が着いたのであつた。が、金を持つて來たのは、誰れかと思つたら、妹の方だ。

『ありがたう御座います。ありがたう御座います。これでわたしも助かります。今月の米屋の拂ひがこれでやツとできますのです。』

われ知らず自分の上官に向つての如くぺこ／＼とあたまを下げてゐた。

五圓札らしいのを二枚手渡しされて、そこを出ると、曾て近在を旅行した時におぼえのあるやうな

宿場はづれであつた。割り合に小奇麗な藁ぶき家が雨がはに立ち並んでゐて、その向ふの方には半鐘をつるした火の見ばしごの立つてゐるのが見える。

兎に角何十軒かの人家の並んでるこんなところを、こんな風でとほつて行からうとする自分だのに、これを誰れも怪しまないのが不思議であつた。

日は矢ツ張り照つてるやうだけれども、自分にはうすら暗いので、この自分の風體が分らないのだらうか？それとも、矢ツ張り、自分は心だけあつて、形がなくなつて見えるのだらうか？

それにしても――一體、あの呑氣な巡査は下界のであつたらうか？それとも、また自分よりも一層超脱した世界のか？

返り見ると、今自分の休んでた店がまだ見えてる。あすこの娘どもも亦不思議ではないか？少しもこちらを怪しんだ樣子がなかつた。依田その人か何だか分らぬものに大金を持つて來て、その責任を平氣で受ける氣か？

若し自分が自分でなかつたら、どうするだらう？自分が幽靈であつて、質物があとに煙となつてゐら？若しくは、自分が泥棒であつて、あの品物が贓品だツたら？

さうだ、――自分のたて棒じまの衣物は既に、とツくの昔、一六銀行で流れてしまつたのだに！それをどうして自分が持つてゐたか分らない。

『こりやア、ぐづ〳〵してゐちやア――』誰れか一人、同僚のうちに人の財布を盜んだものがあつて、自分にまでもその嫌疑がかかつて來さうなところに臨んでゐた。取られた本人は――同僚のうちの誰れだかその人をよく確かめられないが、――段々他のものから誰何して自分の方へ近づいて來る。『さうだ、ぐづ〳〵してゐちやア――』この時、自分は本氣になつて逃げ出さうとしたので、自分の盜んだことがばれてしまつた。『しまつた』とは思つたが、自分のふところへ渠がいきなり手を突ツ込んだ時には、品物がなかつたので自分は安心して踏みとまることができた。

その代り、例の店さきからは、皆が出て來て、こちらを果して怪しさうに見守つてる。それだのに、自分は逃げようとするからだが少しも動かない。いや動かないと云ふよりも、こちらが逃げようとすればするほど反對に向ふの方へ引きつけられる。

自分は何だかおそろしい力を感じた。何か大きな物があつて自分をあたまから抱きすくめて、獨りでにすうツと宙に引きずり上げて行く。それが不安で溜らない。

すると、その力に向ふの妹も引かれてゐるかして、うへの方へあがりながらこちらへじり〳〵と接近して來る。そのまじめな顏が玉子なりにふツくらして、鼻の低いところに却つて愛嬌があるのを雪子さんだと思へたのは、自分の間違ひであつたことが分つた。矢張り見ず知らずの、全くの他人だ。それが今しがた打ち解けてゐた樣子とは打つて變つて、俄かにこちらを不審になつて來たのだら

う、じツとこちらをのぞき込むやうにして來る。

自分には――どうもこの女に巡査がのり移つてるのだと思へた。今にも接近したら、かの女が自分を捕縛するのではないかと云ふ恐れが刻一刻に加はつた。

恐ろしいが、逃げられない。そして自分はます／＼うへからの抱きすくめを感じる。從つて、其の力がかの女をもます／＼こちらのそばへ近づけて來る。その恐ろしさと動きの取れない爲めとで、自分は

『うーん』と呻つたやうである。すると、ぱツとその場面は消えてしまつたが、一旦消えた場面が直ぐまた現はれた時には、自分は矢ツ張り例の白砂のやうな宿場道に立つてゐて、向ふから妹の方がちよこちよこ走りに追ツかけて來るのをきまり惡い氣で待つてゐた。

『濟みませんがそのおかねは返していただきます。』

『………』かの女がさう云ふだらうとは自分もその前からちやんと分つてゐた。自分はかねを――からだ中に、しまふところもないので――また兩手に一枚づつ載せて、兩方の親ゆびで飛ばないやうに押さへてゐたのである。自分はこの自分のざまを見て淺ましくもなつたけれど、かの女の世間並みな輕薄を一層淺ましく感じた。雪子さんも矢ツ張りこんな人だらうか？若しさうなら、とてもこの戀は成功しない。

可なり冷やりとした風が吹いてゐたが、並み立つ人家の藁ぶき家根にぽつ〳〵生えてる草の葉は少しも靡いてゐないのが不思議だ。走つて來た女の袖や裳すそに餘ツぽど氣は引かれたけれど、それも風には當つてゐない。而も自分らの立つてるところは、丁度人家をはづれて、雨がはが田ン圃になつてるのに！

『一旦お渡しは致しましたけれど』と、かの女の言葉はつゞいた、『あんたはどこのおかたとも分りまへんので、若しあとで間違ひでもでけたら困りまツさかい。』

『………』畜生！かの女は今やその姉そツくりの言葉を使つてる。妹までが上がた贅六の輕薄なよそ行き言葉になつてやがる。

おれはお前の隣りに住んでるものではないか？間違ひのできツこなどがあらう筈はないではないか？それでもなほそんなに薄情な出かたをするのか？それなら、それでもいい！もう、お前らとはつき合ひもやめた。おれの戀もすツかりさめた！

『要太郎！要太郎！』

『………』雪子さんが自分を呼びツ放しにするのはおかしいと思はれた。

『要太郎！』

『………』また呼びツ放しだ。要太郎さんと云へ、こちらも雪子さんと云つてやつてるではないか？

『要太郎！』

『……』なんだ、おツ母さんの聲らしい。

ふと、自分は目をさましたのである。そして自分が眞ツぱだかであると云ふ今までの壓迫觀念を脫することができて、やツと先づ安心した。壓しつぶされてるやうな自分の呼吸が全く自由になつてるのに氣が付いた。自分は靈魂の世界に行つてたのでもなく、またおぼえのあるやうな、ないやうな田舍の道に立つてたのでもなく、いつもの蚊屋の中に在つて、おツ母さんのそばに寢てゐた。そしてまだ横になつたままこちらを向いて笑つてゐるおツ母さんも機嫌がよささうだ。

蚊屋のそとには、明けがたの光が戶のすきまから這入つてゐて、電氣の十燭光を早く消えろ消えろと云つてるやうだ。もう、自分らがいつも起き上る頃になつてる。そして直ぐまたけふの出勤のことが浮んだ。

『君の勤勉に免じて、やがて俸給を上げるやうに上申してあるから』と、こないだ、みやげ物を携へて課長をその宅へ訪問した時に課長が云つた言葉も思ひ出された。

『どうかよろしくお頼み申します。さうなれば、うちの母もさぞ喜びますでしようから――』

『夢でも見たのだらう』と、おツ母さんは云つた。その言葉が、けさも亦寢起きからいつもの通りはきはきしてゐるのにつれて、自分もまた相變らず心のさわやかさをおぼえた。そして直ぐ、これはオ

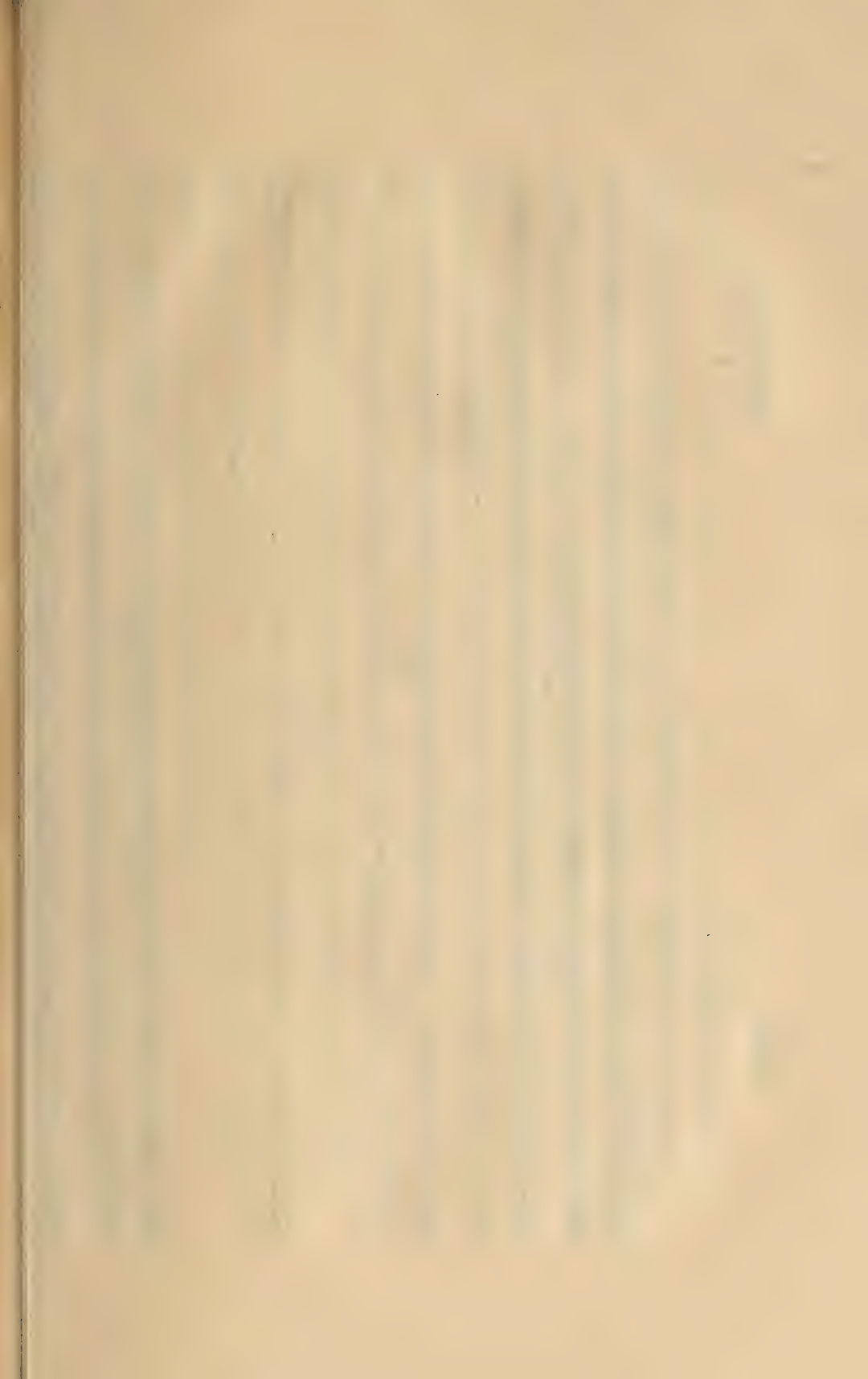
キシヘラの爲めに酸素を十分吸入したのだと思つた。自分の叔父が入らないと云つてわけもなく呉れたこの機械を、けさも昨夜から自分が手あしにつけて寢てゐたのだ。これを自分はまだ横になつてるままで取りはづしにかかると同時に、かの女の言葉はつづいた、『何かむぐむぐ苦しさうに云つてたから。』

『はツきりと分りましたか?』

『何だか口をむぐ〳〵させて』と、かの女もまだ笑ひがほであつた、『何だかちツとも分らないが苦しさうだツたから。』

『………』分らないで仕合せだと思ひながら、『なアに、くだらない夢でした』と、あツさり答へた。が、自分はなほ私かにその夢——殊に、その最後の場面——を再び思ひ浮べて、實際にさめてる自分にもいやアな寂しみをおぼえた。

自分のこの健康なからだにだが、遠くて近いやうな、そしてまた近くて遠いやうな、雪子さんと自分との間をまだ〳〵水くさくしてゐる體裁や利己心やが多いのを感じた。同時に、また、その日ぐらしの貧乏人のやうには左ほど困つてもゐないのに、われからあせつて、外國米などを恥ぢを忍びながら買ひに行つた自分らの淺ましい根性が自分の今の正直な夢にそツくり現はれたのだと思つた。

——(大正七年九月)——

午後二時半

『………』

渠に取つては十五年の恩給期限はなか〱待ち遠しかつた。渠はもと自分と志望に從つて新聞記者をしてゐたのであるが、自分の殆ど盜むやうにして貰つた妻が、海軍の豫備大尉の娘であつたが爲めに、自分の緣戚のものに軍人が多かつた。そしてかの女の姉や、妹の亭主も軍人であつた。

『親類が集つた時でも、わたしだけが張り合ひがありません、わ』と、かの女はよく云つたものだ。かの女のつもりでは子供の時から見慣れて來た金ピカ物がその亭主の肩なり胸なりに欲しかつたのであ、るけれども、それは育ちの違ふものには突然望めることではなかつた。せめては主計官にでもなれないか知らんと云つて、かの女はその亭主の爲めにいろ〱計劃や運動をして見たが、それも駄目であつた。

『おれが軍人向きでないのは初めから承知の上で來たのぢやアないか？』

『それはさうですけれど――せめては文官の高等官にでも――』かの女の餘りの失望と、一面には熱

心な希望とに動かされて、渠が新聞記者をやめて、假りに陸軍省の翻譯掛りになつたのは二十七才の時であつた。初めはやとひとして這入つたが、その翌年には編修補助にして貰つた。それでもまだ判任官であつた。

そこへ世話をして呉れた故郷の先輩なる某氏が大臣になつたので、やツと特別任用でその秘書官になれた。その內閣の壽命が餘りに短かつたので、直ぐ一緒に辭職したけれども、これに高等官の經歷を得たので、もとの巢に歸つて本官の編修になつた。そして秘書官辭職の際に大分貰つた金を以つて、今の家を建てたのも妻の鈴子の計らひであつた。

『あなたの老後の爲めにも、また、子供の爲めにもなります、わ』と、かの女は云つた。この時には、もう、かの女の世間的不平は消えたやうになつて、かの女は俄か凡人であつた。姉妹同士のつき合ひに多少の不自由があつても、さう亭主を責めなかつた。『自分は自分だけのことをしてゐればいいのだ、わ』などと云つて。

渠自身も亦もとの友人どもからは段々遠ざかつて行つて、自分の職務大切に、そして金を溜める一方であつた。いつのまにかおぼえた唯一つの道樂は、釣りをすることだ。そしてその釣り道樂に大分巧者なことが云へるやうになつた時に、やツと恩給期限が來た。そしてこれを機として自分は後輩の爲めに地位を明けなければならなかつた。けれども、直ぐまた他の〇〇省に轉じて、今度は恩給を貰

つてる關係から、本官にならないで囑託になることができた。

隨分官界に於ける苦勞や辛抱はして來たが、渠の家庭は無事圓滿であつた。古びては來たけれども、自分らの住む家は自分らの物だし、これまでの俸給の四分の一は遊んでゐても取れる上に、また今度の囑託給がこれまでに劣らず這入つて來ることになつた。その間に、十七の娘をかしらに、子供が總計四人できた。

「ほかのものは火事や泥棒でみんな無くなつても、これだけが、まア、わたし達の儲けもの、ね――隨分丹精して來たのですから」と、鈴子は云つた。子供が皆ずらりと枕を並べて寢てゐる客間兼用のその室のまだ障子をはづしツ切りの敷居の上に、寢まき姿の膝をにじらせて坐わつてゐた。

『……』渠は○○省で翻譯したものを或實業書店から出版する約束が突然できたので、そんなことなら暑中休暇のうちであつたらなどと贅澤な小言を云ひながらも、俄かに二三日前からその整理をしてゐたのだ。が、それがやツと今夜終つたので、不斷より遲く、今、あすの出勤時間を心にかけながら、自分の書齋の寢床に就かうとして、便所へ行つた。そしてそこを出た時に、今までおつき合ひに茶の間で起きてたかの女がここに來てゐたのだ。自分は戸の締まつた椽がはに突ツ立ちながら、それとなくかの女を見ると、細おもてで、ぴんと引き締つた氣品のあると思へたその顏は、丸まげを結ひ[illegible]頰の肉が落ちてゐ

た。で、自分もかみの柱へ脊をもたせてずるりと腰を下ろしたがら、『然し、それだけお前もお婆アさんになつたのだ。』

『そりやア――』かの女はちよツときまり惡さうにしたが、直ぐ當り前の笑ひ顔になつて、『お互ひに、ね。』暫らく間を置いて、『だツて、もう、道子がおよめに行けば行けるやうになつたのですもの！』

『………』渠は自分でもかの女の視線に引かれて行つて、かの女と共に總領むすめの寢がほを兩方からそツとのぞくやうにして見た。實際に、今でも、既に自分の妻や姉や妹の手を經ていろんなところからの申し込みがあるのだけれども、まだ早いからと云つて斷わつてるのだ。ふと思ひ出すことがあつて、自分は獨りでぽツとあわいのぼせをおぼえながら、『ぢやア、――何か？――道子の結婚の時を期して、その母アさんにも久し振りで第五番目の子ができるか、ね？』

『どうして？』鈴子は、これも少し顔を赤らめてだが、目を丸くしてこちらを見た。この鈴のやうな目つきがまたかの女の若い時からの一特色であつたのだ。

『………』渠はにや〳〵笑ひながら、『一般にさうしたものだとよ。』

『どうして？』かの女は一層不審の力を強めて來たやうすだ。

『これは別に六ケしい哲學や科學の問題ぢやアない』と、わざと仰々しい前置きをしてから、『それ、死んだ吉岡がよく云つてたぢやアないか？』

『なんツて？』

『新婚の娘夫婦に對するその親たちが燒き持ちの一件、さ。』

『そんなこと、聽いたことない、わ。』

『よく云つたぢやないか、それ——娘が結婚すると——そのおやぢやお袋も一度は若返つてその氣になるものださうだツて？』

『なんだ』とざツくばらんに受けて、かの女はそのこけた頰にはちよツとまた赤みを見せた。そしてこちらの目を避けて、子供の方に向いた。

年に從つてかみの方から床が取つてあるので、書齋を仕切るふすまに一番近い鈴子のは別として、次ぎに道子、それから陽一、繁子、勝次郎の順に、皆うすい毛布をかけてよく眠つてる。が、道子が電氣の光を眞うへから受けてゐる。性質までが母親に似て生まれたせいか、その顏も上品であるのが渠にもすゑ頼母しかつた。

渠は一體自分で覺悟して官吏ぶりの生活をやり出してから、さう親しい友人がなかつた。それも初めからなかつたのではない。が、たまの餘暇には自分の上官や上官の先輩へ御機嫌を伺ひに行かねばならぬ爲めに、普通の友人へ敬意を返しに行く時間がなかつた。また、あいつは俗物になつたと云つて、向ふから近づかなかつたりもある。いづれにしても、自分が沒々と何か可にかに友人どもから遠

さかつて行つたのである。

けれども、かの吉岡だけは自分の新聞記者時代から友人であり、自分が官吏となつてからも唯一の親友であつた。こちらも官海の事情や軍備上のことを知らせてもいい範圍に於いて知らせてやつたが、向ふもまた官僚擁護の雜誌を發刊したと云つては毎月寄贈して來たり、また著書ができたからツて身づから一本を携へて自慢しに來た。▽▽と號して、ちよツと名の知れた政論家になつてゐたが、こちらがもう半年で恩給に達するところまで漕ぎ付けた時に、向ふは氣の毒にも脚氣衝心で死んでしまつた。

『可哀さうなことをした。』

『お氣の毒です、ね』と云ひかはして、夫婦一緒になつて葬式の世話やら、遺族のあと始末やらに及ぶだけの智慧や力を貸した。

けれども、その後になつて、いろ〳〵の方面から間接若しくは直接に聽えて來た評判によると、あとの祭りでどうすることもできないけれども、吉岡はあまりに不評判であつた。何でもそのすぢの關係者をゆすり歩いてたのださうだが、それを私かによく聽いて見ると、こちらが敎へてやつた官海の事情などをも利用して行つた形跡までもあつた。そしてそのかすり得た金をすべて雜誌とかその他の計劃とかにばかりつぎ込んだのなら――また、貯金してゐたと云ふなら――まだしもだが、多くは女

郎買ひやら藝者買ひやらにうツちやつてしまつたものらしい。それもそれだけのことなら、世間一般の男のすることだから、自分はただそんな下等なことをあいつもしてゐたのかとあざ笑つただけで濟まして置けたかも知れない。が、怪しい女が別に二人もあつたと云ふ。

『それぢやア丸で成つちよらんぢやないか』と云つて、嚴格な一夫一婦主義で押し通して來た渠は、自分の鈴子と共に俄かに呆れてしまつたのである。

吉岡の葬式を自分らが頻りに手傳つてたことを知つてる先輩者で、陸軍省に於いて自分とは別な課の人事課長をしてゐるものが、或時、自分に向つて、笑ひながら、

『あなたは吉岡さんの親友でおありでしたさうですが――どうです、別に家庭を犯されはしなかつたですか』と尋ねたことがある。

『……』自分は何のことを云つてるのか分らなかつたので、『犯されるとは?』

『は、は、はア』と、笑ひを聲に出した切りで、その課長はあとを續がなかつた。で、家に歸つてから、鈴子にもこのことを話つて見たけれども、かの女だツて分らう筈がなかつた。

けれども、その意味が初めて分つたのは、自分が今度の〇〇省に來てからである。ここへも吉岡は這入り込んでたらしい。ここでは、もう、自分は渠のほんの僅かの知り合ひであつたと云ふことをすら隱したゐるのだが、渠に對する接渉の任に當つたと云ふ參事官の一人の話をそれとなく聽いてゐる

と、渠は、誰れだか知れないが或人の細君とも怪しかつたのだ。
『ふ、ふん』と、自分は私かに鼻で思ひ出し笑ひをした。かの陸軍省人事課の課長はあの時このことで冗談を云つたのであつた。
渠自身が正直に云ふと、自分の鈴子もまた自分同樣に吉岡夫婦とは仲がよかつた。そしてかの女がまだこちらへ方づき立ての頃、――その頃、吉岡も結婚したのであるが、――或晩、こちらへ兩夫婦並にその他のものが集つてかるた會をやつた。すると、鈴子が大切に守つてた『をとめの姿』を吉岡に拔かれたので、それを取り返す爲めにかの女が一生懸命渠に向つて乘り出して行つたことを、いまだにあり／＼と思ひ浮べることができる。かの女はさすが軍人の血を受けてるだけあつて、負けぬ氣で、そんな時には亭主のゐるのをも忘れ、また向ふにも細君がついてるのをも忘れたほど熱烈であつたツけ。吉岡も亦あの頃はまだ若くて無邪氣であつた。
そしてお互ひに子供ができ、お互ひに年を取つて來てからは、『熱烈家の鈴子さん』と云ふのはただ吉岡が昔をなつかしむお世辭に過ぎなくなつてたし、かの女も全く別人のやうにおツ母さんらしくなつてた。それに、また、かの女も耶蘇教學校出で――自分と同樣、信仰こそ薄らいでしまつてるけれども、矢ツ張り、その時の素養は消えてゐないので、家庭の生活や夫婦の關係をもまじめに、極神聖に考へて來た。

『ふ、ふん！いかに吉岡がそんな男であつたことを知らなかつたツて、こちらの――さうだ、こちらの――家庭を犯されるなんて――』つまり、かかる何等の根據もない類推やら想像からしてでツち上げた話が一般の世評になるのだから。世評といふものは誰れのに限らず當てにたらぬものだと考へられた。して見ると、吉岡自身のことだツて、實際には、どこまでが事實か、本人に當つて見なければほんとうに信じられないのであつた。

『まさか、人の奥さんに關係してゐたなんて――そりやアうそでしよう』と、自分の鈴子も極淡白に云つてた。

　だから、自分は亡友の行爲に對して半ばは同情的に、そして半ばは詰問的に、嚴格な疑ひの念が日と共に增して行つたのである。それも相手が生きてゐさへしたら、さし向ひで詰問すべきところは詰問し、同情すべき點は同情してやるのだが――そしてそれが自分の役所で運ぶ飜譯の筆のもとにも現はれて來たし、また自分が玉川へ行つてあゆを釣りするときの釣り竿のさきにも浮んでゐた。

『そんなことがあり得ようか？若しあつたとすれば、語るより隱すが却つて早く、直ぐどこからでも現はれて、社會的制裁をあいつがとツくから受けた筈だ。それが而もあいつの死ぬまで社會に知れ渡らなかつたのは、多分實際でなかつたからだらう。若し生きてる時にそんなうそを耳にすれば、あいつは立ちどころに名譽毀損の告訴を提出したかも知れない。』それをまた反對に考へても、或男が妻を

實際に犯されながら、それに氣の付かぬこともなからう。そして氣が付けば、これを自分にして見ても、その妻を生かして置かぬか、さきの男を告訴するか、直ぐいづれかの手段を講じただらう。たとへ川柳の所謂『知らぬは亭主ばかりなり』であつたとしても、相手の男の方の妻が男の何とか遣つたけぶりでそれを感づかないではゐなからう、そして感づけば、直接にその男に對しても、またその男が不倫の關係を結んでる女の亭主へ向つても――たとへ燒き持ちからにしたところで――抗議を申し込まないでは置くまい。

無論、自分の妻はそんな不倫を夢にもできまいし、吉岡の細君だツてもさう馬鹿な女ではなかつた筈だと思ひながらも、日に少くとも一二度や三度はこの疑念が自分自身のことのやうに心配されないではゐなかつた。つまり、吉岡の死後に於ける名譽をこちらは少くとも自分にだけでも恢復してやらうと云ふ親切心からであつた。

そのうちに夏も休暇も過ぎてしまつた。そして秋になつても、日曜日にはぜ釣りを忘れないで、その用意が客間でできた豊めし後のことであつた。吉岡未亡人がその總領むすめの文子をつれて久し振りに訪問して來た。

『丁度いいところへ來て呉れた――あなたに一度聽かう、聽かうと思つたことがあるのです。』

『何を？』

『………』渠自身には、吉岡夫人は無邪氣に見えたが、鈴子がよせと云ふやうな目つきをしたので、その場は先づさし控へて、『まア、それはあとで話すが、ね。』

『お顏が暫らく見ないうちにお黑くなつてること！』

『そりやアこれだよ』と云つて、渠は紙に卷いた釣り絲とうこんの袋に疊み入れた釣り竿とが、自分の前に置きツ放しにされてるのをさし示めした。

『矢ツ張り、釣りにお行きですか？』

『いや、けふはあなたが久し振りに來たのだから、やめて話してもいい。』

『まア、けふはゆツくりしていらツしやい』と、鈴子も夫人に告げた。

　夫人のつれて來た娘の文子が道子のゐる茶の間の方へ行つてる間に、渠はこツそり夫人に聽いて見たところによると、自分らの一ケ年以上も段々と氣になつて來たことごとが殆ど實際の事實であるに驚かれた。その不倫な奧さんと云ふのも、有名な或實業家の娘で、女子大學を出て、矢ツ張り政商と云はれる種類の實業家にかたづいてる、可なりしツかり者の評判ある婦人であることが分つた。

『………』自分は餘りの公憤に動かされて、『なんでまたあなたは默つてゐたのだ――告訴をすればいいぢやアないか？』

『わたしは、もう諦めてゐましたの』と、夫人は半ばしめツぽい然し頼母しくもない調子で答へた。

『何と云つたツて、云ふだけ張り合ひのない人でしたから、ね、——目的の爲めには手段を選ばずなど云つて却つて、こツちを少し燒くのはよせなんて責めるんですもの。』
『呆れたものだ！そんな手段が既によくなかつた上に、さう云ふ場合の燒き持ちは女の權利ではないか？』
　渠としては自分の思ひも寄らぬ世界が俄かに自分に開らけたのであつた。かかることにも無自覺に諦めを云つてゐられるやうになつた耶蘇教をんな——相當の高等教育も地位もありながら人に通ずるやうな有夫の婦人——そんなものどもを表面だけでも無事に內證で支配するほどの悪辣な腕があつた男——。而もそれが自分の手近に開らけてゐた世界だ！自分らと元は共通であつた吉岡らの信仰も、全く當てにならぬものであつた。女の教育なども、自分が信じてゐるほどには役に立つものではなかつた。それを知らずに通したとあつては、もう、自分らの——と云ふよりも、自分一個の——不明と未熟とが反省せられて、自分は四十の坂を越えてまでも、今まで人生に何をうか〳〵してゐたか分らなくなつてしまつた。
　渠はここに初めて人生の暗黒面に自分の口を呼びさまされた氣がした。そして、もう人のことなどはどうでもよし、自分自身の情けなさと、自分の闇のやうな周圍のおそろしさとにつくづく襲ひ打たれてしまつた！

『さう憤慨して下さるのはわたしに取つては今でもありがたいことですけれども』と、夫人は云つた。『本人が死んでては、もう、――』

『……』然し自分ではその本人の有るなしには關係しなかつた。そんな無自覺、不道德の世界に住んでた親の娘だと思ふと、自分の娘と同年に生まれた文子を見ても憤慨されると共に氣の毒であつた。

丁度、今、かの女はうちの道子と共に椽がはを庭へ下りた。渠は不道德きはまるその父親の子などと自分の大切な娘を遊ばせたくもないと云ふ氣がさきに立つた。が、それを心で抑し靜めながら、二人の若い子どもが何も知らないで仲よくしてゐるのをながめると、昔、その親同士の親しかつた時のことが自分の記憶にありありとのぼつた。そしてその時の潔白で盛んな精神なり感情なりが、娘どもにそツくり遺傳したやうに思はれた。年にしたところが、渠等の親同士がおないどしであつたやうに、渠等も亦おないどしだ。物質的生理的なことに遺傳が證明される以上、人間の精神だツて遺傳しないとは渠に云へなかつた。

庭には、もみぢや椎の樹立ちを背景にして、渠自身の造らせた小さい築き山がある。そして築き山のこなたには細長い池があつて、その左り手から山へのぼる小ぐちのところに石燈籠が立つてゐる。そのあたりをこちらから眺めると、池を隔てて、今、萩の眞ツ盛りだ。曾て同僚と共に或ついでに

京都から取り寄せたところの垂れ萩だが、赤くて而もどことなく寂びのある花が盛んに咲いてゐる。
けれども、奇麗とか優美であるとか云ふことに於いては、――如何に天然の花でも――若い發育ざかりの娘どもには、とても、及ぶものでない。優しみの上に、あツたかみがある。活氣がある。血に燃えようとするその熱を握る手があり、足があり、からだがある。決してただでは育たないのである。それを折角ここまで育て上げながら、人に呉れてやるのは惜しかつた。

そして渠は暫しわれを忘れて自分の娘の姿に見とれて、一般の男が一般の女を見るやうな目で、それとなく文子と比較してゐると、文子もうちのに負けず劣らず發育のいいのが妬ましかつた。そして俄かにまた親としての氣持ちに立ち返つた時には、後家に育てられる娘と兩親の揃つてる娘とに多少でも相違の見えないのは、自分らの落ち度を證明するものだと思はれた。

ところが、その萩の垂れ簾りの後ろへ渠等の共によく發育したからだのしも半身が消えて行くのをじツとこちらから眺めてゐると、自分のやツと實際的にさめたと思ふ人生に對する眼には、また一つ驚くべき事實が發見された。

ほかでもないが――さきに立つて行つた自分の道子の少し左右にゆれるやわらかな尻の恰好があとなる文子のそれにそツくりであつた。それは自分に取つて棄てて置けない重大事件ではないか？

『………』ぶる／＼と渠は思はず身ぶるひをした。そしていきなり立ちあがつて、畳んである釣り竿

を袋のまゝ自分の足に踏まへて折ツぺしよつてしまつた。そして附屬の糸と共に庭へ投げ棄てた。それから、夫人に向つて、立ちながら何の遠慮もなく、『直ぐ歸つて貰ひます』と宣言したが、あまり愛嬌がないと思ひ返して、『少し——俄かに——用ができましたから。』

『どうしたと云ふのでしよう、ね、あなたは——急に?』鈴子は夫人にすまないと云はぬばかりにおどおどした。

『用があるから、あると云ふのだ』と叱りつけて、渠は隣室なる自分の書齋へ引ツ込んだが、そのあとに夫人の歸り仕度の挨拶が聽えてゐた。

『別にわたしは失禮なことも申しませんし、文子だツて藤生さんのお氣にさわるやうなことは——』

『なアに、何かの氣まぐれでしよう。お客さんに對してこんな變なことは今まであつたことはないのですが、ね』などと、鈴子は入らない愛相を云つてた。

『……』客が歸つてしまうまで、渠は自分の机に頬づゑを突いて考へ込みながら、意外なことに狂ひ出した心を無理に押し靜めてゐた。さうだ、自分も客に對してこんな失禮なことをしたのは生まれて初めてだと思ふ。官吏になつてからは、成るべく友人を訪問しない方針を取つて來たが、向ふからやつて來た客を無愛相に突ツ返したことなどはない。まして官吏以前に於いては、恐らく人並み以上に開放的であつた。自分の留守に男の客が來てゐたツて、自分は歸宅してからそれを心よく持て爲し

でゐた。無論、成るべく燒き持ちじみたことはお互ひの禁物であつた。
けれども、それが自分の處世上に却つて重大な落ち度であつたのぢやアないか知らん？
『あなたは變な人です、ね』と、鈴子がそこへやつて來て、今の餘憤らしいものを漏らした
『……』渠はその方へふり向きもしないで、わざとにも机に頬づゑを突いてゐた。そして自分の目のじツと据わつたその目さきには、今日まで可愛がつて自分がその顔や正面の姿ばかりを見た娘の、後ろ姿が見にくい惡魔の忘れがたみのやうに浮んでゐた。
これは矢ツ張り見違ひではなかつたか？また思ひ違ひでは？曾ては、宗教家にならうと思つて神學校へ這入つてた時代から、忘れずに鍛ひ上げた自分の理性が今も失はれてはゐないと思ひばこそ、渠は一層この突然の思ひ付きが苦しかつた。
そして鈴子が二度と口を出さないで行つてしまつたのを——或は、利口な女として早くもこちらの意中を感づいたからであらうかと考へながらも、——さツぱり思ひやりのないことに取れた。
獨りでにいら／＼して來たので、半ばはこの寂しみをいやすつもりで、
『おい、道子！道子』と叫んだ。
『みツちやん、お父さんがお呼びですよ』と云ふ鈴子の聲が、この鍵なりに曲つた家の一番はづれなる臺どころの方から聽えた。

『はい』と云ふ晴れやかな返事は玄關のそとからであつた。

『………』近處のお友達と立ち話をでもしてゐたのか？不良少女や少年にたぶらかされないやうにといふのが、いつも自分らの子を育てるおもな心配の一つであつた。

かけ込んだらしいのが、ばた〳〵と椽側を云はせてやつて來た。急いだ爲めか姿勢の正しくないまま、

『御用ですか？』

『ですかぢやアない！』つい、またこんなことを渠は大きく叱つて見た。

『御用でございますか？』かの女はこちらの瞰らむだ目が餘りにこわかつたのか、こちらをもぢもぢしながら見て、何をおこつてるのかと云はぬばかりであつた。立つて少しかゞめてゐた腰を椽がはと疊との間におろし、不斷と違つて、わざとらしく手をついた。

『もツと、こツちへ來い！』渠も矢ツ張り不斷よりきつい調子にならずにはゐられなかつた。坐わつてゐる自分としては少し横向きにかの女の方に向いてゐた。

『………』かの女の口を結んで、むツとすねた樣子は、その母が時々するのによく似てゐるけれども、母との類似は少しも問題にならなかつた。それが圓みのある腰をにじらせながら疊の上を近づいて來たが、かの文子にさうさせて見たら、矢ツ張り同じになるに相違ないと思へた。

『立つて見ろ！』

『………』かの女はすツきり立ち上つて、俄かに泣き出しさうな顏をしたが、それをちよツとにが笑ひで取りとめた。そして眞ツ正面向きで、愛相もこそも盡きるやうにまじめ腐つて、兩手の置きどころに困つてた。

『………』馬鹿！體操をさせるのぢやアないぞと云つてやりたかつた。が、初めて斯う、自分の子を女として眞ツ日の前に見たのである。若しこれが他人の娘であつたら――そしてどうせ不良少女のやうに終はつてしまうにきまつてるものなら――？渠の胸が慘酷な氣持ちでとどろいたのは無論ほんの一瞬間であつて、その瞬間後は矢ツ張り血を分けてやつたものの愛着であつたが、どうしても言葉の表面にはいつも通りの優しい聲を出すことができなかつた。源氏模樣のゆかた姿を相變らずにらむやうにして、ただ早くちに斯う命令したのである、『後ろを向いて見ろ！』

『………』素直に云はれた通りにしたが、向ふ向きになる時にかの女のやはらかにうねらせた腰のあたりには、またさきの文子が見せたとそツくり同じ曲線が出たばかりではなかつた。一層驚いたことには、自分の記憶に殘る吉岡の後ろ姿がそツくり遺傳となつて現はれてゐるのであつた。

『もう、いいから行け』と、渠が怒りの命令を發したのは、渠自身には少しも不自然でなかつた。

『………』こちらをふり向きもしないで、道子はその兩手をその顏に押し當てて、ばた〳〵と逃げて

行つた。渠はさながらかの女と云ふ自分の戀人がいつのまにかあだし男を拵らへて、子を生んでたのを發見したかのやうに、かの女を憎ましかつた。

恩給年限と殆ど同期間に渡つて、否。もツと古くは初めて耶蘇教の所謂福音に接してからこのかた、人間として全く封じて來たところの呪ひ言葉が、渠自分の感情の上にその封禁を破らないではゐなかつた。畜生！――淫婦！――姦通！――僞善！これをおろかにも氣が付かないで來た自分！ないがしろにされた自分！自分らが親友として叮重に葬つてやつたかの吉岡は、あの墓石のしたから今でも舌を出して笑つてるのだらう！馬鹿とは實に自分の名か？それにしても、自分のこのふつつかに付け込んで自分をこれまで一層馬鹿にしてゐたものらが、妬ましい！恨めしい！

こちらは少しも酒を飮ましもしないのに、どこかで飮んでやつて來て、吉岡がへたくそなカツポレを踊つて自分らを笑はせたことがある。まだお互にも△△新聞にゐた頃のことだが、――その時のをかしな腰つきを今でも忘れてはゐないのである。

『斯う云ふ風にしないと、踊りの優しい曲線美は出ないのだ』と云つて、その時、あとでまた變てこな手つき、足つきをして見せたが、自分らにはその手あしよりも腰つきがまたおかしかつた。ところが、それが自分の娘の腰つきにそツくりであつた。

渠は自分でも感じられた程にいやな顏にしがんで、兩手で自分の胸を打ち、自分の互ひの手をさい

なんで見た。が、それでも足りないので、机につッ伏して、左りに分けたチック付きの髪の毛を兩手でかきむしつてゐた。そして言葉に出して、

『この馬鹿！この馬鹿』と、自分のあたまを投ぐつてゐた。

そこへ鈴子が濡れた手をしたまま飛んで來た。

『一體、どうしたのです、ね、あなたは？道子が恥かしかつたと云つて泣いてるぢやアありませんか？』

『………』渠はかの女がこの室に這入りもしないで椽がはに突ッ立つてるのをじろりと見たが、それッ切り顏をそむけてまた机に向つた。そしてかの女が相變らずこちらを馬鹿にしてゐる、な、と思つた。如何にその親戚が軍人ばかりだと意張つてたツて、女の不義は決して治外法權ではなかつた。

『吉岡の奥さんには失禮なことをおツしやるし』と、かの女はとぼけてゐるのだらうか？それとも、全く無邪だらうか？「道子には何だか詰らない眞似をおさせなさるし、あなたはけふは餘ツぽどどうかしてイますよ。』

『………』無論、どうかしてゐるのであつた。然しそれはお前の爲めだとは、如何に何でも、まだ明言するだけにまとまつてゐなかつた。

『少しこれから御注意なすつて下さいよ』と云つて、鈴子は行つてしまつた。

『……』さうだ！注意が必要だ。相手は死んだツて、一度あつたことは、また別な折さへあらば再現しがちであるから。

渠は「藤生儀作」と云ふ自分の表札を取りおろしたくなつた。有名な釣り道樂の連中たることも忘れたかつた。家にゐた溜らなくなつて、ふらりとそとへ出たのであるが、日ごろ手慣れた自分の道具を持つてゐないと、どこへ行くと云ふあてもなかつた。自分が家を構へた時にはまだ武藏野のおもかげが多少殘つてたあたり——今では俗惡な貸し家ばかりが多くなつた小街道——を歩いて行きながら、今少し經つた頃の秋のくぬぎ林の中をたび／＼吉岡と二人して跋踄したこともあるのが思ひ出された。乾反り葉が樹かげに落ち積もつてゐてかさこそと音を立てるその中を進んで行つて、熊蜂の巣にぶつかつてびツくりしたツけが、——さうだ、さすがは有名なひろ野の趣きがあると語り合つた。そして、

「他日若し金ができて家を建てるなら、こんなほとりがいい、ね」と云つた吉岡の詩的理想を實現して、自分は先づこの代々木に住まひを搆らへたのであつた。

が、今や自分はそれをさへ悔いられた。自分が實際に得意がつて渠にも誇り示めした、新らしい家や家庭がそのそも／＼に於いて渠に穢されてゐたのを、この十五年以上も氣付かなかつたのである！自分は私かにこのことを思ひ詰めると、自分の踏んでる大地の底から自分のおろかしい恥辱と復讎心

とがしみ出して來るやうに感じられた。

いつのまにか明治神宮ぞとの林を過ぎて、低い田ン圃をさし挾んで向ふの初臺に對する高みへ出てゐたのだが、——こちがはの高い樹立ちがまばらであつて、その樹々の葉も落ちかけてゐるのに反して、向ふの初臺は暗く見えるほど葉の簇つた常盤木か何かが立て込んで、澄み渡つた空に向つて出入りの多い高びくの角立つた屏風に圍まれてるやうだ。

玉川の釣りにまぎれてこの夏を一度もここへやつて來なかつたうちに、あたりのくさ木も、向ふの西洋畫になりさうな森や、その間にぽつ〱見える建て物やの眺めも、去年見たのと同樣の秋げしきになつてゐたけれども、これに向ふ自分の心は、もう、全く去年のものではなかつた。

自分が今目を遠く放つて森の間に家根だけを見るその二三軒の家々の一つには、自分の同鄕人で自分のかねがね私かに尊敬する或名士がゐるのだが、——その懷かしい森や家も、また自分の口のしたなる黃がね稻葉に黃ばんでる田ン圃づらも、また〱自分の足もとに伏すあか穗まじりの雜草も、皆いちやうにこの自分を見放してゐた。

さうだ！吉岡の外には、友人をも避けて來た自分はその報いで今や獨りぼツちである。自分はそして妻にも娘にも實は見放されてたのだと云ふ心持ちになつてゐた。

しぼり縮緬の兵兒帶のあひだから時計を出して見ると、——これにも自分を狂はせる原因なる腰と

いふものが聯想されたが、――丁度、午後二時半であつた。ふと氣が付いたことには、自分は今のこの時刻よりもずツとうすら寂しく、ずツと手賴りなさがいや增してゐた、やがて自分自身のゆふぐれになると、自分と云ふ獨りぽツちの魂はそれと共に眞ツくらなところへ消えてしまひさうであつた。自分を喰ひとめる力が欲しかつた。自分をこのやうに失望、落膽せしめたその根本の事實を攫みたかつた。その爲めに、自分の苦しい、そして情けない胸では、

『早く確かな證據を――確かな』と叫んでゐた。家に歸ると直ぐ、渠は客間の押し入れをそツと明けて、多くの寫眞帳から道子の獨り寫しを一つこツそり拔き取つて、自分の書齋へ引ツ込んでしまつた。娘がその特徵に似てゐるのは何も不思議がないのだが――自分では娘が自分にも少し似たところのあるのをどうかして發見したかつた。さうすれば、問題は何もなくならう。さうだ、そして自分のこの苦しみも――

自分は娘の寫眞と手かがみに寫る自分の顏とを頻りに比べて見たのである。

『おれが今、青い色をして兩方のまなこが常になく引き釣つてゐるのは、この臨時の爲めの現象であるとして見ても、九州人の特色は爭はれないもので、――斯う』と渠は云つて、自分の兩方の頰ぼねが出ツ張つてゐるところから下が急にとがつて行つてるそのあごだけを右の手で押さへて、そのままを左りの手なるかがみに寫して見ながら、『斯う仕切つて見ると、丁度、おれの顏は鈴子が曾てからか

つて云つたやうな眞ツ四角な豆腐の感じを與へる。けれども、道子は上品な瓜ざねかほだ。』
どう見直して見ても、自分に似たところはけぶりにもなかつた。この點が――消極的にだが――必らず一つの證明になると思へた。が、自分はもツと多くの證據を得たくなつた。そして口がとツぷり暮れてからもいろ〳〵に考へ通してゐた。
それからと云ふもの、渠は役所にゐても、わが家に在つても、俄かに自分の性格がすツかり變つたやうふさぎ込む人間であつた。何をしても――何を見ても――少しだツて面白くなかつた。そして僅かのことにも妻の横ツつらを投ぐつたり、娘をひどく叱り付けたりした。こんなことは全く渠の一家族には最近のことでしかなかつた。
『そんなにわたし達に何か惡いことがございますなら、親類なり兄弟なりにさうおツしやつて下すつてもようございます』と、鈴子は度々怒りながらも訴へるやうになつた。そしてそれを相手にしなかつたら、かの女の依賴でだらう、一度はかの女の姉の亭主が、また一度はかの女の妹のが、その爲めにやつて來た。
『なアに、病氣ですよ』と、然し渠は何げなく笑つて見せなどした。『わたくしも實際に自分ではをかしいと思つてます。また鈴子などにも氣の毒だとは考へてゐます。が、これは男子のヒステリ性とでも云ふのでしようか？』

兎に角、相當の證據を集めるまでは、うか〳〵とはしやべり出せない問題であつた。ところが、或日、役所からうんと疲れて歸宅した時、渠を玄關に出で迎へた道子の顏に、その母と吉岡との顏が兩方の輪廓を重なり合はせてゐるのを見た。

『お歸んなさいまし』と云つて、道子が手を突いて下に向いた顏は鈴子のにそツくりのやうであつたが、再び顏を上げた時には吉岡の死にがほであつた。

『……』渠は先づぎよツとして、ぬぎかけた赤靴の足を引いて突ツ立つた。死人の幽靈がかの女の後ろについてるのぢやアないかと思つたからである。が、再び見直した時には、それは幻影として消えてゐた。けれども、

『お父さん、これが――』と云つて、留守に來た手紙を一つ書齋へ持つて來た時には、また、かの女の腰つきばかりでなく、その顏までがはツきりと吉岡のおもかげになつてゐた。

『これだ、これだ!』渠は悔しまぎれに小踊りをするのであつた。そしてその翌日から翌々日になると、もう、道子の顏の瓜ざねのやうな輪廓に吉岡の、男子としては優し過ぎるほどふツくらした線の而も日には不斷、人を馬鹿にしたやうなところがある、その顏つきをも確かに認めることができるやうになつてゐた。

一體、そんな機會が自分の鈴子にいつあつたのだ?十七ケ年前と云へば、自分らの結婚した年であ

つた。かの女はまだ無邪氣で而も熱心に自分ばかりを思つてゐた。

『あんな書生ツぽに自分の大切な娘はやれない』と云はれたので、かの女は不斷着のまま、夜おそく、あの目黑からの暗い寂しい道を、獨りで自分の下宿へ逃げて來た。それから自分はかの女の家へ英語を敎へに行くことをやめた。そしてかの女が一旦向ふへ引き取られた時には、もう、結婚の用意をする爲めであつた。

『わたし、嬉しい、わ！』

『僕だツて、さ』と云つて、熱い接吻をしてやつたツけ。

その前後にかの女は吉岡に紹介されてゐたが、――子ができるほど親しんだとすれば、少くとも、こちらに於いて新らしく持つたあの澁谷の家を明けた夜がなければならぬ。道子の年齡を今から十六年九ケ月をさか登つて行つて、それに十ケ月を加へて見ると、自分が二十六歲の春だ。さうだ。あの時なら一度止むを得ない事件で十日ばかり國へ歸つたことがある。さうだ、さうだ！その時の留守宅に於ける樣子をいろ〳〵に想像して見て、今更らのやうに自分の胸が煮えくり返つた。

が、――一度でも男を知つた女はみんなそんなにまで寂しがつて、而もそのあとをさツぱり抑しぬぐつてゐられるものだらうか？いや、これはたちだ。育ちだ。かの女らは女中に手をつけた隱居おやぢ（今は死んでしまつたが）の娘どもであつたぢやアないか？

さうだ――自分だツて、ゾラの小說ぐらゐは讀んでる。そしてその一つで見ると、女優との關係などは――若しみだらなものなら――どんな時刻にでも付く。暮合ひにでも、奈良とかにも、はたまた、たとへば自分の午後二時半にでもだ。

斯うなると、渠は自分の妻を器量よしだと思つてるだけ、それがますます淫婦に見えて、それだけ墮落した女優も同樣にさげずまれた。そして、もう、僞善者とか不義ものとかぐづぐづ考へてる狀態を自分のつき詰めた心は乘り越えてゐた。

或日、晩めしがすむと直ぐ、渠は自分の家族には何も云ひ置かないでそとへ出た。そして代々木停車場附近で見て置いた廣告ばしらに書いてあるその番地によつて或辯護士を尋ねて行つた。

幸ひに在宅であると云ふので、ちよツと秘密な事件で面會したいと申し込んだ。すると、その家ぢうで一番奧の坐敷らしいところに案內して呉れた。が、小い狹い家であるので、自分はまだ安心することができなかつた。で、

『すみませんが、ちよツとつき合つては貰へますまいか』と云つて、そとへつれ出してから、『どうでしよう、どこかこの邊にちよツとした料理屋か何かございますまいか？』

『さア』と、辯護士は踏みとまつた。『ないことはございませんが、――どうするのです？』

『その家全體を暫らくのあひだ貸し切りにさせたいのです。秘密の相談ですから。』

『そりやア恐らくできますまい、な。たとへ大きな一室は借り切れるとしても、その次ぎの室には矢ツ張り客がありましよう。』

『………』自分はこの答へをこちらに思ひやりのない答へだと受け取つた。渠をつれ出したものゝ、これでは途方に暮れるのであつた。止むを得ず別な思案にして、『ぢやア、恐れ入りますが、わたしの家まで來て戴けますまいか？』

とう〳〵渠は自分のところへ辯護士を來て貰つた。そして書齋に引き入れて、次ぎの室との合ひのふすまを明け放し、家族を――そこに寢てゐる小さい子供までも――遠ざけて、成るべく低い聲で自分の疑問と苦しみとをうち明けた。そして、最後に、

『何とかした方法でうまく娘を否認し、『同時に妻を離別することはできますまいか』と相談した。

『ちよツと六ケしい問題ですが――』

『………』自分はその聲が高いと云ふことを目つきと手つきとでして見せた。

『まア、よく研究して見ましよう。』

『それでは、どうか賴みますから』と云つて、その夜は別れた。自分は渠に手賴らんばかりの緊張をおぼえてゐたのだが、それが爲めに却つて何となくあツけなかつた。そして心の奥にばかり、妻や娘に對するさげずみと憎しみとが逆襲の合ひ圖なるのろしとなつて燃えてゐた。

その翌晩、役所の引けを待ちかねてまた立ち寄つて見ると、辯護士はまだ調べにかかつてゐないと云つたので、お禮はいくらでもするから早く頼むと云ひ置いた。

すると、その次ぎの晩には向ふから尋ねて來た。そして、これは——或先輩に聽いて見ると、——『單に法律上の問題ではないやうで——寧ろ法醫學や精神醫學あたりの問題ださうです』との報告でであつた。

『………』渠は自分の顏に恥づかしみの色が、ぱツと、ひどく現はれたやうに思つた。で、自分の威嚴を再び取り返すつもりで、『うん、或はさうでしよう』とぞんざいに答へた。が、それにも拘らず自分の見にくいうちかぶとを見すかされた氣がして、こんな時の癖たるどもりを丸出しにしながら、『そ、さうです、じ、實は、——わたくしも——そ、さう考へないでもなかつたのです。』

渠はこれが爲めに却つて辯護士と自分との間によそ〳〵しい遠慮と隔てとが除かれたやうでもあつた。

『なほわたくしも研究して見ましようが』と、辯護士が云つたのに對して、

『どうか頼みます。——然し、この件は飽くまで秘密を要しますから』と、自分は念を押して向ふの骨折りをまじめに感謝した。そして向ふが責任を感じてわざ〳〵持つて來て呉れた變態生理書を心を落ち付けて讀んで見ることにした。

けれども、また渠は獨りになると、この疑ひがあながち自分の病的から起るばかりとは思へなかつた。秋そのものよりも以上に、自分のます〳〵澄み切つて來る理性のうへに、自分のそして同時にかの女の午後二時半が、はツきりとその輪廓を重ね合ふのであつた。そして變態生理書の內容などは、とても自分の慰安や安心にはならなかつた。

『わたくし達に若し落ち度がございますなら、どうぞうち明けて下さい』と云つて、鈴子までがこの頃では氣違ひのやうに熱心になつて、自分に泣き付くのである。かの女は花の返り咲きのやうにその昔の熱烈さを恢復して來たのだが、それが少しもこちらの心を和らげないで、却つてます〳〵かの女の昔の身もちを疑はしめた。

『淫婦！午後二時半！』と云ふ侮蔑の別名を私かに渠はかの女につけるやうになつてゐた。が、泣き付かれればつかれるほど、自分はおもて向きには卑怯になつて、ただ强情な心の奧に於いてのみ、かの女に對する憎しみと自分の失望とがいや增して行つた。

死んだものには諦めも付かう。然し、現に生きてるもの同士が俄かに斯う疎隔して向ひ合つてゐるのは、死よりも苦しかつた。

が、――さればとて、この藤生儀作が死んで行くその行くさきまでも、自分ではこの解決がつきさうではないのである。

――(大正七年九月)――

父の出奔後

『おかアはん！』

『………』

『おかアはん！』

『………』

『えい加減(かげん)に起きなはつたら、どうです？もう十二時やで。』

『………』矢ツ張り、返事はなかつた。

また、ふて寢をしてゐるのだとは分つてゐても、あまりのことに吉次郎は母を次ぎの茶の間から呼び起して見たのである。渠自身は茶の間にゐて、不愉快ながらも、妹二人と共に、朝から多くの貝ぼたんとそのばねとを秤りにかけて、一人一日の內職仕事(ないしよくしごと)に十分なだけにして、それを別々な古新聞紙に包み分けてゐた。そしてそとから仕事のでき上つたのと取り換へに來る女や子供にそれぞれ、それそれを持たせて歸してゐた。

『高尚なる内職があります』と云ふ看板を出して、これさへやつてゐれば、どうか斯うか親子四人の暮しは立つて行くのである。が、母は少しもそれを喜んで呉れないのだ。そしてその不機嫌にまかせて、よく

『お前らのやうなやくざものを子に持つたおかアはんは乞食より不仕合せや』などと叫んだ。そんなことを云はれると、子どもの方でも少からず反感を持たないではゐられなかつた。

『おかアはんは、な』と、きのふも、母が錢湯へ行つた留守の時に渠は妹らに語つたのである。『お父さんのをらんやうになつたのが寂しいのんや　寂しい云ふよりも、燒けて燒けてたまらんのやで。』

『さうか知らん』と、下の妹もばねを分けてる手をやすめて、いやアに笑ひながらこちらを見た。

『僕は近ごろ確かにさうおもて來たんやが――。』

『そりや、な、四十から四十五六のところはまだななどのさかツりや云ふさかい。』うへの妹は一層分りがよかつた。そのぼたんのめす、をすをいじくつてゐたのをさへ恥かしさうにして、ちよツとさし控へてしまつた。そしてその顔の赤くなつたのをごまかす爲めにか、

『どないしよう、一方が足りやへんやないか?』

『どうしてや、そこにあるのに』と云つて、渠はかの女の後ろなる紙袋を知らせた。

『そや、そや!わたし、忘れてゐた』と、わざとらしい高笑ひをした。

『………』渠にはまこと、妹のやうすが、どうしてもそれを忘れてゐたのだとは受け取れなかつた。兎に角、そこへ母は歸つて來た。あのおめかし屋と云ふかげ口を云はれて來たかの女が、この頃では、からすの行水のやうにして早く湯をあがつて來るのであつた。

それが勝手口の木戸をあけて裏庭に這入るが早いか、けんある聲で、

『また詰らんこと云うて阿呆笑ひしてる！』

『………』渠はその方をちよツとふり向いたが、おも長のけんどんな顏の額に靑すぢが立つてるのを見るのもいやであつた。もとの通りそれには後ろを向けて、『みな仕事をしてました』と答へた。そして妹どもと目を見合はせた時には、皆が同時に聲を忍んで吹き出した。

『何がをかしいのんや？』

『………』渠は暑苦しいので狹い家ぢうをできるだけ明けツ放しにしてあつた。臺どころになつてるところは僅かに三疊敷きばかりの板の間で、そこに半間のうち流しがあつて、臺どころのそと幅を半分妨げてるので、障子をその方に立てよせてあつても、殘りの明きは三尺はばしかなかつた。そこからかの女はあがつて來ると、板の間を無理にがたぴしさせながら、流しの前のかたかたに瓦斯かまどの据ゑてあるその上の棚へ、持ち歸つたしやぼん箱を置いたかと思ふと、つか〳〵と茶の間へ這入つて來て、渠の後ろ横手へぺたりと坐わつた。

『何がをしいのや?——云うて御覧!』
『……』仕事にかこつけて、誰れも返事をするものはなかつた。
『何がをかしかつたんや?——おかた、また、人のわる口云うてたんやろ?』
『わる口など云うてやへなんだ。——なア、つウちやん』と、うへの妹は云つて、したの妹に念を押して見せた。
『さうよ。』下のがまじめになつて答へた。『別にわる口やないけれど、おかアはんのお湯がこの頃早うなつた云うてました。』
『そりやほんまのこツちや』と、渠は仕事の手をやめないで、白状した。實際に、その日に限らず、それは兄妹同士で度々語り合つたことであるから。遲いのもただ顏の磨きやお化粧の爲めにならまだしもだが、東京へ來た以上、少しは遠慮すべき大阪言葉を丸出しにして、而も誰れかれの區別なく、べちやくちやと湯の中でしやべり合ふのだからツて、妹どもは母と一緒に湯に行くのを嫌つてゐた。
『早うても、早うなうても、わての勝手やないか?それを何もお前らにかれこれ云うて貰ひますまい。おかた、早う歸つたら、お前らは親の惡くちを十分云うてることがでけんさかい、な。』
『何を云ふのんや、おかアはんは』と、渠は少したしなめるつもりであつた。が、それがます〳〵かの女の心をこんがらかせてしまつた。

『……』かの女は例の如く口からすべり出す言葉で以つてこちらの仕事や互ひに張り合つてる氣持ちやを邪魔するのであつた。そしてこんなことも云つた、『あのお父さんは碌でなしの極道もんであつたけれど、うちにゐやはつた時はお前らもおとなしかつた。あの人がうちにをらんやうになつてから、お前らはわてををなごやおもて馬鹿にしとるのんや。』

『そんなことありませんが、な！』うへの妹も母によく似た顔をしがめて、たしなめるやうに云つた。

すると、母はまた意地惡く出て、その口まねをして、

『ありません、ございます――お暢までが生意氣になつて來ましてん！』

『……』渠には、まるでお話にならなかつた。母は小ごとを云ふことがなくなると兄妹が努めておぼえつつある東京言葉をまでも非難し初めるのが常なので、つい、自分も多少癪にさはらないではゐられなかつた。『お父さんが姿を隱しやはつたんも尤もや、おかアはんはあんまり口かずがおいい！』

『さうだす』と、母はすねてしまつた。『わては口かずがおいいさかい、お父さんにも子供にも見棄てられました！どこへでも棄てて貰ひまほ――わての行きどころがありまへん！』

かう云つて、寢どこへ這入つた切り、母はきのふからけふまで、その六疊の客間から出て來ないのである。朝寢は毎日のやうになつてゐたのだが、十二時になつてもまだ出ないのはけふが初めてだ。

『うちが片づかんで困る』と、妹どもは低い聲だが聽えてもかまはぬかのやうに不平を語り合つた。

『よんべもめしをたべなんだのやさかい、腹がすいたら自然と獨りで出て來まッさ』と、渠は妹等にだけささやいた。

多少面白半分に母のことを傍觀してゐるのだけれども、渠は自分が一家の生活をしよはされてゐるのだと云ふことに思ひ及ぶと、詰らぬやうな、そして苦しいやうな、うちのものには誰れにも訴へることのできぬ重々しい氣ぶんにならないではゐなかつた。

父は大阪から東京へ渡つて隨分奮鬪したことはしたのだ。それを思ふと、子供ながらに父の心が小氣味よかつた。

大阪に於いて、うちの代々の家業が時代の變遷につれて衰微して行つたのは、決して父の落ち度ではなかつた。この卷煙草のはやつてる時代に、煙草入れの問屋などに發展の見込みがあらう筈の物ではなかつた。それを父も氣付いて、いよ／＼轉業ときめてから、何をやつてもうまく行かなかつた。そのうちには土地での不評判をたへ切れなくなつて、東京へ出て來た。そして相場に手を出したのであつた。これには全く失敗したと云ふわけでもなかつた。が、もと／＼燒け半分でやつたのであるから、うまく儲かつたりすると、年にも似合はず、隨分藝者買ひや女郎買ひをした。そのあげくに、料理屋の女中か何かのいかがはしい女に別に家を持たせることにした。そして大抵はその方へ行つてとまつた。

『なんぼ末の見込みがなうても、大阪にをつてもとの家業をしてをつた方がまだましであつた』と云つて、母がその所天や子供に向つて愚痴をこぼすやうになつたのは、それが爲めだ。

或時など、夜なかにだが、かの女は皆の子供がまだ次ぎの室で眠りに落ちてゐないのに、父に向つて父としての面目が全くつぶれるほどの咎め立てをした。それが爲めに、今晩はうちでとまつてやらうと思つてた者をも怒らせてしまつて、夜ふけをわざ〳〵飛び出させるやうにしてしまつた。そして母も一緒に負けぬ氣になつて、寢卷きのまゝ家を飛び出した。

『あんたがさう薄情なら、わて、警察へ訴へてやる！』斯う母が云つたのが耳に殘つたので、吉次郎を初めとして、子供は皆、どんな結果になるのかと心配した。

『………』何とかして途中から父と母とを無事に引きもどして來たいものだと考へたのだけれども、渠は何だか馬鹿々々しくもあり、また自分の父母の痴話喧嘩に立ち入るのが却つて父母の威嚴を臺なしにするやうに思はれた。で、うへの妹（それが自分もついて行くつもりであつたのか、寢卷きをぬいで、不斷着に着かへつつあつた）に向つて、『あんた、いて來なはれ。』

『さうおもたけれど、なア――。』かの女も亦尻込みしたやうになつた。帶を半分ばかり卷きつけたまゝでその寢どこのうへに坐わつてしまつて、考へ込みながら、『云はれて見ると、いきともない。』

『僕もやが――』

『あんた、いきなはれ』と、かの女は下の妹に命令するのであつた。
その夜は、兎に角、父も歸つて來たし、母も交番などへ飛び込まないで濟んだ。が、子供はこの事件に昂奮した爲めに、再び床に納まつても夜ツぴて眠られなかつた。そして茶の間の方でうと〳〵はしてゐながらも、――下の妹だけを除いては――客間に在つたことをすべて半ば夢ごこちで知つてゐた。
その翌日になつて、父はいつも通り蠣殼町へ、そして母は不斷よりも機嫌よく、
『わて、ちよツと運動して來まツさ』と云つて、珍らしくもそとへ出たその留守の時に、
『僕はよんべ眠らずや』と、渠は何げなく不平さうに云つた。が、自分の上の妹が、
『わたしもよ』と答へて少し顏を赤くしたので、さうだ、ゆふべのことなどを自分は妹などに再び思ひ起させるのではなかつたツけと氣が付いた。そしてまだ無邪氣な下の妹にその前幕の方だけを詳しく云はせて見たところでは、父が先づ門を出ると、右へ行つて煙草屋の角を右へ曲り、あの通りを江戸橋の方へ進んだ。これは女のゐる方向であるにきまつてた。あとから出た母もそれを小また走りに追ツかけたが、無言で行つて、角から十間とないそば屋の前（もう、無論、戸が締ってた）で父を驅け拔けると、直ぐその角をまた右へ反れた――ついて來いと云はぬばかりにしてだ。
『どこへ行きやがるんぢや』と、低い聲にだが怒鳴つて、父はその場に踏みとまつた。

『……』母はちよこ／＼走りを少しゆるめたけれども、ふり向きもしなかつた。

『馬鹿野郎』と云つて、父は暫らく考へ込んでたやうであつたが、そのそばに立つてゐる娘を見て、これにでも相談するやうに、『たわけた奴ちや、なア』と云ふと、すた／＼同じ方へ歩き出した。ほんとうに巡査にでも訴へたら困ると思つたのだらう。

大塚の公番から、その横丁をずツと通り抜けて、敷き石を敷いた道をだら／＼と下だつて行つて、折り戸の通りを乞食橋に出て、それを渡つたら、もう直ぐのガアドの下だ。つまり、そこへ實際に行かれたら面倒には違ひなかつた。

『おかアはんが——まさか』と、妹は思つたさうだ。けれども、仕かたがないので、兩親のそのまたあとからついて行つたのだ。が、丁度自分らの家の裏通りになつてるので、第一の角から母はきツとうちの方へ曲り返すだらうと思はれたのに、さうはしなかつた。そんなら、第二の角からかと思はれたに、矢張りさうでなかつた。そして第三、第四の横丁にもわき目をふらず進むやうすを、妹『さア、大變や』と考へ出した。『をなごと云ふものは、おかアはんでもあないに强情なもんか知らん？』

『さうやろ、な、困つた人や』と、うへの妹は聽いてて相槌を打つた。

『それからどうしたんや？』兄は早くそのさきが聽きたかつた。

とう／＼敷き石の下だり道まで行つたところで、父は留りかねたやうで母の首すぢを攫んで引きと

め、
『どうする云ふんだ』と叱り付けた。
『警察へ訴へます、訴へます！』母は泣き聲であつたが、その時には既に地べたに突ツ伏してゐた。
そのあたりは道が狹くなつて、一方は植木屋の庭、また一方は奧深い人家であるので、そしてその前後には大きな樹木が人のあたまの上を高くおほつてるので、母だツても、女一人では夜みちを嫌つてるところだ。泥棒のやうな男が默つて立つてたと云つて、妹ふたりがそこから驅け出して來たこともある。けれども、それだけ人けがないのを妹はまだしもよかつたことにした。父も恐らくそんなことを仕でかすにはそこが最もいい場所だと思つたのだらう。
『阿呆云ふな！』父が母の頬かどこかを投りつけた音がぴしやりと闇に聽えて、『さア、立て！歸るんや！』
『いやや、いやや！わて、歸りまへん！うつなら、死ぬまでうちなはれ！』
『阿呆云ふな！』
『あんたばかりえいことして、これが阿呆なら――。』
『そやさかい、歸る云ふてるやないかい！』
やがて娘のこちらにつツ立つてる前を通つて、父は母を引きずつて行つた。母としては寧ろ引きず

られて來た時から既に情愛を恢復してゐたのだらう。
斯うしたことを感じたりおぼえたりしてゐるにつけても、渠は自分の妹どもと共に父の放埒よりも母の愚痴にいつも同情してゐた。けれども、父はそれが爲めに却つて母ばかりでなく、その子供をも多少蔑の如く見るやうになつて行つて、ます〱うちへ寄り付く日數が少くなつた。
父たるものの行動としては餘りのことでもあるし、母の情愛ある歎きをも餘りに見かねるししたので、一度、母の達ての願ひにも從つて、渠は自分の父に向つて頗る强硬な忠告を與へたのであつた。すると、父は意外にもいつのまにかその怪しい女と共に姿を隱してしまつた。
これは渠にはただ意外であつたのだ。が、妹どもは母に同情して、
『薄情な人や』と云つて、父のことを泣いた。母には、つまり、意外の上に一層その歎きを增さしめることになつたのだ。
『ほんまに薄情な樣でなし！』と、口では呪ひながらも、いよ〱姿を隱したのだと分つてしまうと、かの女は血まなこになつて諸方の心當りを探しまはつた。警察へも搜索願ひを出した。けれども、いまだに父の行くゑは分つて來ないのである。
『妻を棄て、子どもを棄てた男や、とてもお話にならん』と呆れながら、渠は皆のものにも自分だけの諦らめやら不平やらを憚らず公言した。妹どもに於いてもその歎きの間に自分に贊成するやうな不

平があつた。
『お父さんもお父さんや、なア。』うへの妹は斯う云つた、『なんぼ先きのをなごが可愛い云ふたかて、おかはんやわたしらを棄てはらんかてえいやないか？』
『無論のこツちや。然し、棄ててしもたんやさかい、仕かたがあらへん。』
『そないなことあらへん』と、母はまた意外にもその子どもの云つてることをなじりでもするやうに躍起となつた。そしてまるで父の味かたになつてるやうに答へた、『お前らがお父さんをそない薄情におもてたさかい、お父さんもそれを知つて、うちが面白ならうて逃げはつたんや。』
『そやない。』渠はどうしても自分の母に反對しなければならぬ氣がした。それで、その理由を最も簡單にかたづけて置くつもりで、『おかアはんがあんまりねつ過ぎたさかいや。』
『わて、なんでねつ過ぎまツか？』
『……』渠の見たところでは、自分の母は目を圓くしてこちらを見上げ、人ごとのやうにとぼけてゐた。かの女が自分で自分のことを分らないのかと、こちらはもどかしかつた。
『なんや知らんけれど、な、僕らには子を棄てるやうな男はお父さんやない。』
『そやかて、お前らを產ませてもろた人やないか？。』
『そんなこと知らへん！』渠には、斯うなると、自分を生んで貰つたことが左ほどありがたく思へな

かつた。
『薄情な人の子やさかい、なア。』母はこちらを罵るやうな、また憐れむやうな答へであつた。
『………』父だツて、母だツて、親たる以上、親の方がどうであつても、こちらにはその必然の義務があり、敬愛がある。これを渠は自分の心に忘れてゐないながらに、自分の母も父同様で、その子どもの眞の味かたであるか、どうか、分らなくなつてゐたのだ。
『女房や子どものことよりも、もツとほかにあたまを使ふことがあるのや！』と、よく父は怒鳴つた。それは子どもにはよく分らないでもなかつた。相場なんか、殊に不斷ぼんやりしてゐてはとてもできない仕事であるから。けれども、母はそれを直ぐ怪しい女のことに取つてしまつた。そして子供のゐる前ででも、怒り出すと、直接に父に向つて、
『あんたは極道やさかい、な。えい年をして、子どももあるのに、いろ氣違ひやさかい、な』などと、子どもの聽くに堪へぬやうなことを云つた。そして逃げられてしまふと、絶望の餘り、矢ツ張り、母自身も『子どものことよりもツとほかに』のことに『あたまを使つて』ゐるやうなのが、渠には少し滑稽に見えた。
さし當り困つたのは渠の手で一家をどうすることもできなかつたことだ。自分は自分の應用化學志願の夜學に通ふ學費と小使ひとを儲ける爲めに、或會社へ晝間を通つてただけだ。妹どももまた、大

阪での破産以來、女學校にも行かなかつたので、當座の役に立つやうな仕事にありつけさうでもなかつた。

止むを得ず、この事情を大阪に殘つてる自分の兄へ訴へて見た。が、兄もまだ人に使はれてる身でさう自由にならぬことは自分にも分つてた。が、母へ僅かの小使ひを送つて來ただけで、他のことには冷淡な返事しかよこさなかつた。

『どうせうちの家督は吉次郎が繼ぐのやさかい、責任もそツちやにあるやろ』などと、こんな文句が自分の最も癪にさはつたことである。

どうした間違ひでか、兄は戸籍上父の弟になつてる。從つて、父がゐない以上は、一家の責任が戸籍面では吉次郎なる自分に落ちて來るわけだ。これを楯に取つて、兄はこちらの九死一生の場合をもよそごとに見過ごしてゐようとするのであつた。

『その薄情な點だけでもお父さんの血を分けてる證據になるやないか？』斯う云つて、渠は自分の母にも加勢を求めたけれども、母は、

『どツちやでもえいやないか』と云つた。『あんにやんがあとを取るのがいやなら、そのおとが家督になるのんは當り前や。』

『………』あとを繼ぐと云つても、何も殘つてやアしないではないか？『そんな呑氣なことやおまへ

ん！』藥は一旦むきになつてしまつた。自分の母には無論どツちでもよからう――どうせ誰れからでもかまはない、養つて貰ひさへすればいいのだから。けれども、自分は自分の利益と自分とを間違つた戸籍面の爲めに束縛されるのが――兄のさうとぼけてゐられるのを小憎らしく思へば思ふほど――堪へ切れなかつた。會社のうは役にも相談して見た。また、その人から紹介を貰つた或辯護士をも訪ねて見た。が、結局、一度は裁判にかけねばならぬのであつた。

その費用がない。たとへ費用ができたとしても、また、裁判をつづける間の一家の生活をささへて行かねばならぬ。この義務と責任とがすべて自分にふりかかつて來たのである。突然のことで、なかなかまご付かざるを得なかつた。

初めのうちは、それでもまだ父が賣り惜しんで殘して置いた貴重品や衣類があつたので、それをちびちびと質に入れたり、手放したりしてゐた。さうできるので、父も一面には安心して出奔したのだらうと思へる點もあつた。

初めに賣り拂つたのは、おいらんの道中を描いた半切の一幅で、――畫家の方はあまり聽かない人であつたが、それに贊を書いたのは父が尊敬してゐたと云ふ、今は故人なる大德寺の和尚さんで、この贊の爲めに島原の道中が何でも禪學の意味に解釋されてるのだと云はれたものだ。が、

『こないないやらしい畫を仰山にありがたがつてやさかい、あの人は結局極道になつてしもてん』と、

母はいま〳〵しさうに云つて、それを行李の中からほうり出した。

『……』渠は然し多少その畫の意味を面白く感じないでもなかつたので、父に對する燒けと不平とからにしても、自分等の貧乏の血祭りにするにはまだ別な物があらうと思つた。が、母はどうしてもそれを一番縁善の悪い物として賣つてしまつた。そしてそれが兎に角二百五十圓の豫想外な取り引きになつた。

それが面白かつたので、その後も渠を初めとして、皆のものが必要に感じて段々にいろんな物を賣ると云ふことに興味を持つた。青磁の香爐が五十圓に賣れた。菊地容齋の官人が三十五圓に、そして母が子供には見せいでなこツそり處分した繪本が五六冊で二十圓に、その他にも、二圓や三圓に出た物がまだ少くはなかつた。

その金がすべて日常の最も必要な生活費にばかり使はれたのではなかつた。まだ燒けと面白味とが手傳つてゐたのであるから、皆で價への高い菓子を買つたり、親子どんぶりをあつらへたりしたことも度々であつた。妹などはまた欲しい反物をも買つた。

そのうちには、他に賣り拂ふ物も思ひ付けなくなつたにも拘らず、母は父のよそ行き衣物一と組だけを、

『これはあの人のかたみも同前やさかい』と云つて、手放すのに反對した。そしてかの女は客座敷に

獨りつくねんとしてゐる時など、私かにそれを簞笥から出して見て、こちらが讀んだことのある田山花袋の『蒲團』にある主人公の如く、そのにほひを嗅いでるのではないかと思はれたやうなことも度度である。子供は皆それを面白がつて、渠が先きになつて、そんな時にはこちらの六疊からそツとのぞいて見た。が、或時一度見付かつて、とげ〲しく叱られた。『何をのぞいてたんや？人のすることをのぞいたりして――わて、何も惡いことなどしてやへん！』

『………』渠は顏を引ツ込めて、妹どもと共に、わざとらしくかげで笑ひの口を抑さへた。

けれど、やがて實際にそんな呑氣でゐられない日が來た。渠はどうしても自分の獨立仕事として何かの商賣を初めないではならなくなつた。が、母はそこまでに立ち到つたのを氣付いてゐないかのやうに、まだ父の歸つて來ることばかりを夢見て、例のどんぶりや菓子などをも註文しようとしてゐた。

妹どもは寧ろ兄の方に同情して、

『兄さん、何か喰べ物みせを初めなはれ、もと手もちびツとでえいし、手まも簡單で、わたし達も手傳へるさかい』などと云つてた。

『然し、お客さんはおかアはんばかりかも知れへんで』と、渠は自分の冗談にだが答へた。自分には、その實、母の無同情が解せなかつたのだ。大阪の兄が自分の相談相手にもなつて吳れないのは、あい

つの利己的な強慾からであるから、いま〳〵しいけれどもわけはこちらに分つてゐる。が、自分の兄のことを惡く云ふと、母はいつでもそれを辯解した。

『あの子かて、金がありさへすりや送つて來るで、なア――その證據には、感心にも、わてに小使ひを呉れたやないか?』

『たツた二圓や三圓のはしたがねやないか』と、渠はふくれツつらをして見せた。

『然し、氣は心や。』

『……』阿呆云ふなと渠は叫びたかつた。自分も親孝行がそんないい氣で濟めば、いつでも濟ませて置きたいのである。が、今、自分が兄のやうに子としての義務を免れようとすれば、父のやうに姿を隱すよりほかに道はないのだ。自分にはそれができない。そばにゐない兄のことばかりをいい子のやうに想像してゐる母は、これをその望み通り――たとへ兄が受け付けないにきまつてても――大阪に送り返すことができるかも知れない。が、それでは自分の妹どもが可哀さうに思はれる。渠等はほんとに薄情な兄などを思はないで、母とも一緒にゐたがつてるし、また自分をも手頼りにしてゐるし――。

そこへ、丁度、或知り合ひの厚意で紹介を得て、渠は或製造所からぼたんの内職を一手に請け負ふことになつたのだ。この歐洲戰爭の爲めに外國貿易の狀態が變はつて、わが國からも――おもに露西

亞へだが――貝ぼたんの賣れ口が廣まり出した。自分が請け負つたのは婦人の洋服などへ附くぼたんだが、たとへば、うは前の合はせ目にたて一例に並んでゐて、うは前とした前とを合はせて、そのうへから手で撫でれば一度に皆がはまり、これをまた兩手で引ツ張れば直ぐばり〳〵と一ときに離れるやうなばね仕かけの小さいぼたんだ。

そのをすの方は製造所であがつたままでいいのだが、めすにはこまかい眞鍮のばねを入れなければならぬ。そしてばねの這入つためすとその相ひ手とをボール紙を隔てて合はせてやる。それが一枚のボール紙に三ダス、三十六箇つくのである。

この紙を百枚、乃ち、ぼたんで三千六百箇を合せると、誰れでも二十七錢の內職になる。それを自分は一千箇づつに數へて七錢五厘にきめた。すると、そのうへに別に自分の請け負ひ口錢が一千箇に付き三錢は取れる。內職者は一人一日に奮發すれば三千箇もできるが、その持つて來る實蹟から見ると、先づ一千乃至二千の範圍だ。けれども、この頃では、うちから直接に出すのだけでも毎日、三十人ぶん、四萬五千箇以上あるので、それからの利益が一日に平均壹圓四拾錢ばかり。また、別にうちから下請け負ひをさせてあるところが三ケ所あつて、その方面からの純益擧り高が合計毎日およそ壹圓貳拾錢。まア、一ケ月に八十圓ばかり儲かる勘定にはなつてゐる。

そのうちから、十五圓ばかりはかよひ小僧を使つてる費用に出るが――とても、自分はうちへ皆が

持つて來る品を受けつけるのに急がしいので、自分で化粧ぐるまを引いて芝の製造所までその原料を取りに行くひまなどはないのである。

そのうへに、時々、製造所の機械に――まだ職工が馴れない爲めに――故障ができて、原料のできかたが停止することもあつて、そんな時にはこちらが、一日なり二日なりを、手をこまぬいて待つてゐなければならぬ。そしてそれだけ自分らも儲けを取り後れるわけで――。

「請け負ひの寂しみ！」と云つた風な心持ちを實驗して、自分は妹どもに新らしがつた。機械だツて人間と同じやうに故障ができないとは云へない。して見ると、それによつて生活してゐるものらが、それの停止する間、仕事や儲りを矢ッ張り停止するのは止むを得ないことであつた。自分らは如何に儲けようとあせつてゐても、機械がその間儲けさせて呉れないのだ。

『ほんまにさうや、な。』うへの妹は分つてゐた。が、母はいろんなことから話を、

「もツとえい仕事はないのか、なア』と云ふ方へ持つて行つた。

渠は然し自分の母の意見を相ひ手にする氣がでなかつた。蓋し母はもツといい仕事その物を云つてるのではなく、父が歸りさへすればいいとばかり考へてるのであつた。

『お父さんが歸るのんは別にえい仕事やおまへんで。』たまには斯う憎まれ口も自分としては云ひたくなつてゐた。

何だツても、母は午後少し機嫌のいい時は皆の手傳ひもするが、その手傳ひが手傳ひにはならない。やだては、必らず、

『こないな詰らんことしてをつてどうなるんや？』などと云ひ出し、それからそれへとあとのものらの引き締つてる共同の心持ちを害して行つて、しまひには皆から却つて邪魔になると云つて、別室へ遠ざけられてしまふのだ。

『………』渠自身には母が何かと云ふと大阪の兄を引き合ひに出して賞め初めるその眞意も分らなかつた。『兄さんかて何も詰ら無うない仕事をしてるんやないやないか』と、よく自分はかの女に反對した。そしてきのふのやうな場合にも、かの女がすねて、いま〳〵しさうに隣りの室へ立つて行く後ろ姿に向つて、『あんたはただ引ツ込んでりやえいのや、別に僕等にてんがう云はんかて――。』

『そや〳〵』と、母は憎たらしくそツぽうを向いたまま叫んだ。『お前はお父さんを追ひ出して、われ勝手なことして、わてばかり苦しめます！』

『誰れが苦しめます？僕等がこんな仕事をしてるのも皆おかアはんらの爲めやないか？』

『ちよツともありがたうはない。』

『………』うへの妹はこちらに目くばせして、また面倒だからうツちやつて置けと云ふ様子をした。

『おかアはん！』と、下の妹は聽きかねてか、仕事の手を置いて聲をかけた。『あんた、そんなこと云ふ

て、もツたいないやないか？うちの兄さんかて、皆の爲めに一生懸命になつて呉りやはつてるんやさかい。』

『無論、さ。』渠は斯うきつく云つて、自分の、これから父にも劣らぬつもりの奮闘心を感じたが、その感じに妹の優しい言葉が一致して來て、自分の胸のうちは涙で一杯になつたのを押しこらへた。

『…………』母は然し返事をしないで、あひのふすまを締めてしまつた。

『…………』うへの妹も亦、そのふすまのぴしやりと云つた音に神經をいら立たせたかして、その目に角を立ててちよツとその方を見てから、母に聽えてもかまはぬと云つた風な聲で、『暑くるしいのにな！』

『…………』

玄關の二疊の障子を取りはづした窓からはいい風が這入つて來ないでもない。が、その二疊は內職者が來た時に自分らが取り澄まして應待に出なければならぬ室なので、そこと茶の間とを仕切る障子は外さずに玄關ぐちの方へ立て寄せて置かないでは、自分らの樂屋なる茶の間がすツかり見透かされるのであつた。

それが爲めに一室——而もこのたツた一室——に限られた樂屋がうす暗く、また風通しが悪いのは止むを得なかつた。それにまた客間の方へのふすまが締つたのだもの！儲けを見込んで新たに買つた

煽風器の洒落ぐらゐではなか〳〵追ツ付かないのであつた。これは母だツても知つてゐないことはないのだ。

『氣の毒や、な――この部屋はうす暗いのに、暑苦しうて』と、機嫌にまかせては云つたこともあるのに、今やこちらと向ふとのさかひをわざ〳〵締め切つたりするかの女には、もちろん、こちらに對する思ひやりなどは――若しあつとしても――心ぼそいものであることが見えた。果してかの女も聽えよがしの獨り言であつた、『詰らん！詰らん！』

『……』こちらは、もう、相ひ手にならなかつた。

時計を見ると、まだ午後三時であつた。そして夏の三時はまだ眞ツぴる間のうちだ。門前では近處の子供がたこを飛ばすか何かして遊んでる聲がしてゐた。

下の妹に郵便箱を見て來させると、仕事に關するハガキが一つ來てゐた。

けれども、母は押し入れから蒲團を出して敷いてるやうすであつたのが、暫らく何をしてゐるのか、ひツそり納まつてたあとで、

『お鶴――お鶴』と、突然、下の妹の名を呼んだ。

『……』妹は然し返事をしなかつた。

『お鶴！』

『………』こちらでは顔をしがめてその姉や兄を見ながら、『今、手が置けんやないか？』
『親が呼んだら來るもんや。』床に這入つてるやうすだが、その聲の態度はなか〳〵權威を持つてるもののやうに澄ましたものであつた。
『………』妹は舌うちをしてから、しぶ〳〵立ちあがつた。そしてあひのふすまを明けると、こちらへ背にこの樣子を御覽よと云はぬばかりにして、ふすまを締めようとはしないで母の方へ近づかうとした。すると、母は、
「後ろを」と注意した。
『………』あと戻りしたのが、こちらに向つてすね笑ひを見せてゐた。それからばたりと無作法に坐わつた音がした。
『お前はなんでそないにはしたないのや？ちよツとは學校へもやつてやつたんやのに、親に對しても行儀作法いふもんをおぼえてやへん。』
『………』
『吉次郎やお暢のやうに、人が惡うなつたら、もう駄目や。お前だけはまだ年が行かんさかい、今から氣イつけとらんと、矢ツ張り惡うなんのや。』
『………』

『返事せんかい？』

『……』妹は返事をしよう筈がなかつた。

『お前もお妹さんがゐやはらんと、わるになつた、なア。』

こんなことで母は若いものをいぢめてゐる間は、渠もまだ自分ではうツちやつて置けたのだ。が、やがては大阪の兄のことを――こちらから見れば、そのあること無いことを、ただ母の記憶や想像から色づけて――また賞め初めた。そしてこんな時には、きツと、その對照にこちらの惡くちを聽えよがしに云ふのであつた。まるで、血を分けて呉れた者がその兄弟や姉妹の仲をまたわざ／＼離間しようとでも思つてるやうだ。兎に角、こちらには全くうそだと思はれるやうなことまでも兄を賞める爲めには云ふのだから。

『つウちやん、こツちやへ來なはれ、そんなうそのやうなこと聽かんでもえゝい』と、渠は云はないではゐられなかつた。

「……』妹も渠の呼びかけた言葉をいいしほにしてだらう、こちらへ戻つて來た。ぴしやりと明け[illegible]てせられたふすまの向ふでは、なほこちらへ向つての物云ひをしてゐた。

『親がうそなど云やへん。ほんまのこツちや。お前らこそ、お父さんを追ひ出して――そのうへ、えい氣になつてわてを苦しめて――』

『それがまたうそやないか』と、渠は堪へ切れなくなつて怒鳴つた。ふすま一つ隔てて、向ふに向つてだが、『僕はおかアはんの達ての頼みがあつたさかい、お父さんに忠告したんやないか?』

『然し、あんまりきつい異見を云ふて貰ひたうなかつた。』

『そんなことは、な』と、渠はかの女の餘りなわがまゝと云はうか、そらとぼけと云はうか、如何にも終始一貫せぬ考へかたに子として反省を與へるつもりになつた、『あとであんたがくッ付けた理窟や!』

『理窟やない。ほんまのこッちや。』

『………』うへの妹はこの時くす〳〵と笑つたので、渠もかの女と顔を見合はせて、

『ヘッ』と云ふやうにあごを突き出して自分の舌をぺろりと見せた。そしてかの女の笑ひの意味を自分で斯うだらうと推察したので、これをまた母に取り次いで、『理窟かて、よう道理が合ふてればほんまです。』

『ふ、ふッ』と、また妹は吹き出した。

『誰れがわろたんぢや?――何がをかしい?』

『………』渠は自分もだと云ふ意味で自分の鼻さきを向ふに突き出し、自分の左りの手の人さし指でそれを示めすふりをしてから、妹とまた笑ひがほを見合はせた。

『何がをかしいのんや？』

『………』

『云ふて御覽！』

『………』渠等は、もう、自分らの仕事を急いでゐた。返事を誰れもしなかつたのは、また出て來られては面倒だと思つたからである。

『さはらぬ神にたたりなし』と云ふことを、よく不斷から、母のことに關して妹どもはかげで云つてゐたのだ。けれども、急がしくない時にまでも皆が母を疎外してるわけではない。

この親子のいさかひと云へば云へるいさかひがきのふあつてから、母は晩めしも朝めしも喰べないで床に這入つてるのである。食事の時間毎には呼ばつて見たのだけれども、出て來なかつた。

『すねてんねやさかい、なア』と、けさも、うへの妹は渠にささやいた。が、この時にはかの女も渠と共にまじめであつた。自分らにして見ても、朝晩の二度も食事を取らなかつたら、如何に寢てゐたツて腹がすいてたまらないだらうから。

『氣の毒やないか』と云つて、下の妹はその兄や姉にどうしたらいいだらうと云ふ目つきで、私かに相談をかけた。

『ほたら、枕もとへ持つていてあげまほか？』渠は母の方へ直接に、自分としては子の優しい言葉だ

と思へる言葉をかけて、實際にさうでもしなければならぬと思つた。返事はなかつたけれども、皆が朝めしを終はるまでも出て來なかつたので、下の妹をしてお膳を持つて行かせると、母はなほすげなくも、

『いらん、いらん』と答へた。そして妹が、

『そんなこと云はんで、な』と勸めれば勸めるほど、いら〳〵した聲を立てた。

『……』渠はそれを聽きながら、母に對してまことに濟まないことをしてゐたやうに思へた。つまり、かの女と一緒になつて自分らも餘りにいら〳〵する爲めに、かの女を餘りにすねさせてしまつて、自分らの眞ごころまでにもかの女が氣をまわすやうになつたらしい。もツとも、かの女だツて、ふて寢をしてゐると云ふことは寧ろ自分らに對する面目ない弱みであるを萬更ら知つてゐないことはなからうから、自分らが正直に出るとなほ更ら、燒けと面目なさとがこんがらかつて、その場の度を失ふのでもあらうが――。

兎に角、かの女に向つてはもツと愼しみ深くしなければならぬと思つた。と云つて、別にどこが惡いと云ふのでもないから、醫者を呼んだり藥りを買つて來たりする必要はなかつた。

家ぢうの掃除ができないで困ると云ふほどのことをさへ辛抱すれば、その他のことには却つて母の顏を見せて吳れない方が仕事の邪魔にもならず、不愉快な言葉も聽かないで、結局、都合がよかつた。

けれども、渠は今更らの如く愼しみの必要を感ずると同時に、自分の母が父に棄てられた上、また子供にも棄てられかけたのだと云ふことに思ひ及んだのである。これが最もよくないことに思はれた。

世間では、然し、自分らのことを親孝行だと云つてるのだ。こないだも、うら向ふのおかみさんが自分に向つて斯う云つた、

『あなたがたはお父さんがお留守におなりになつてから、よく皆さんでおかせぎです、ね。近處の人は誰れでもあなたがたを親孝行だと賞めてゐますよ。』

これをうちの事情を知つた上の同情から出たお世辭と見てもかまはない。母の例のおしやべりと燒けツ腹とからして、父の留守は子供を嫌つての出奔であるやうに、皆に云ひふらしてあるのだ。それにも拘らず、世間がなほ自分らに同情してお世辭でも何でも云つて呉れるには、母の言葉をうはべばかりのことに見て、實は母その人が見棄てられたのだと云ふことを世間も感づいてるに違ひなかつた。自分の母にはそれがまだ分つてないのだらう。

『さうでなければ、人があんなにそらぞらしいことを云ふてをれん』と、うへの妹も母のことを見なる自分に非難した。

『ほんまに、なア』と、自分は贊成しないわけに行かなかつた。

母は誰れか自分らのことを親孝行と賞めるものがあると、殆ど躍起になつてそれをうち消すのであつた。そして、かけで聽いてると、おきまりのやうに斯う云つてた、
『大阪にをりますのは感心にさうですが、なア、こつちのは皆親不孝で困ります。』これが他人に遠慮や謙遜の言葉であるとは、自分らに決して受け取れなかつた。
『………』自分の母は馬鹿なのだらうか？それとも、ひがみ根性のある爲めにさう見えるのだらうか？自分はそんなことで思ひ惑つたこともある。が、けふ、ぼたんを取りに來た一人の若い愛くるしいおかみさん――自分は若し結婚するなら、こんな人を欲しいと私かに思つた。つや〳〵した丸髷に赤いてがらをかけてゐた――がその老人夫婦もある家庭の六ケしい事情を問はず語りした。それを自分がそれとなく聽いてゐたに據ると、かの女は老人夫婦と所天との間に立つて、苦しいはめに在るので、せめて內職でもしてその苦しみを忘れたのであつた。自分が若しかの女の所天なら、そんなに、自分の妻を苦しめないやうに自分の親を叱り付けてやる。が、かの女のそれはそれだけの意久地がないので、自分は寧ろ取つて代つてやりたかつた。それにしても、その話に據ると、如何に四十の坂を越しても、女は矢張りまだ〳〵燒き持ちを燒く。若いものの仲がいいのを妬んで、水をささうとするさうだ。恐らくそれはおのれが獨りぼツちにならうとする寂しみを感ずるところから生ずる心の變態であらう。

そこから出發して考へて見ると、自分の母にもさう云つたところがあるやうだ。かの女自身が思ふやうにならぬ情愛の上の煩悶からして、自分らの仲――これは無論夫婦のではないが――のいいのを燒いてるのではなからうか？

して見ると、まことに氣の毒なもので――自分らはかの女をそれが爲めにおろそかにすべきではなく、寧ろもツと同情してやらなければならぬ。この同情がなかつた爲めに、自分らがかの女の所謂「親不孝もの」に見えたのなら、その責めはかの女になくて、自分らにあるのであつた。

一體、かの女はその所天に對して情愛が深かつたのであらう。燒き持ち燒きであつたのも、夫婦喧嘩をするとねつ〳〵し過ぎてゐたのも、また、棄てられてもなほ棄てた本人がやがて歸つて來ると思つてるらしいのも、みな、深い情愛の證據であらう。さうすると、これまでのことはかの女に取つて滑稽どころではなく、まことに眞劍であつたのだ。そして而も失望落膽の結果、訴へるところもないので、自分らに對してばかりすねたり、ほざいたり、ふて寢をしたりしてゐるのだ。

かう思つて、自分は隣室の病人ならぬ病人の心持ちを常になく新らしい見かたを以つて想像して見た。すると、今月はいくら儲かるだらうなどと思ひつつ、でき上つて來た對ぼたんが六個づつ六列に並んだボール紙を數へてゐるあひだに、母のうす化粧をした時の姿が目の前に浮んだ。

「年寄りがお化粧すると、人が笑ふさかい、およしやす」と、うへの妹はあツさり云つた。

『ほんまにわたしらまで世間に耻かしうなつて』とは、したの妹のあまへる言葉であつた。
『生いき云ふな！』母は然し言下に叱り付けた。
さうだ。叱られるのも尤もであつた。自分らは母の心持ちを全く理解してゐなかつたのだ。母としては、いや、男に對する女としては、俄かにながらさうもして見なければならなかつたのだ。父が自分らの家に落ち付かなくなつたのは、一つには事業上の失敗の燒けツ腹からであつたが、また一つにはあの冒險な新仕事に元氣を得て、人間が若返り、そして若い女を圍ふやうになつたからだ。して見ると、これをやめさせようとするには、若しくは少しでも多くうちに落ち付いてゐさせようとするには、母としてどうしても平常のやうにうか〳〵してはゐられなかつたのである。俄かにお白いもつけねばならなかつた。紅もさゝねばならなかつた。
『お婆アさんにべに、お白い。』これはしたの妹が曾て自分らに解かせようとした三題ばなしの題であつた。
けれども、一たび狂ひ出した駒はあと戻りはしなかつた。そして母はまた俄かにお化粧をやめてしまつた。その湯がからすの行水に變じた。それから、また、朝寢をするやうになつた。
『絶望の極か』と思ふと、自分も亦その氣になつて、だらけたやうな胸さわぎをおぼえた。そして、きのふから皆にいぢめられてふて寢をづつけてるその人を——たとへば、どこかの若いおばさんとし

て――何とか救ひ上げてやりたかつた。十二時前に呼び起して見た時から、もう、一時間ばかり立つたが、その間に自分は殆ど全く別人になつてゐた。そして自分の聲がふるへるまでに優しく、『おかアはん、僕等もひるめしにしまツさかい、起きなはれ。』

『……‥』母には、その聲が實際に優しく通じたのか、それともいよ〳〵腹がへつて堪らなくなつたのか、兎に角、かの女はこれをしほに床から離れて來た。そして臺どころの流しもとでちよツと口の中を洗つただけで、皆と一緒のちやぶ臺に向つた。けれども、皆にじろりと一わたりこわい目を向けたばかりで、誰れにも言葉はかけなかつた。

『……‥』皆も亦話しかけなかつた。

渠は自分以外のものがどう云ふつもりだツたか知らぬが、自分としては今浮べてゐた幻影がかの女を見ると直ぐ滅んだ爲めであつた。蓋し自分のちよツと懷かしく思つてる或ところのおばさんは顏も美しくて生き〳〵してゐるが、目の前にゐる人はいやな目つきをするにも勢ひがなく、箸を持つ手にもまた皺があつた。

――(大正七年九月)――

法學士の大藏

『また法學士の大藏さんかい——あの馬鹿が大學をびりにでも能く、まア、出られたものぢや』と、佃先生が云つたよし。

それが爲めにだか、

『おるが馬鹿なら』と、大藏はそれでも憤慨しないではゐられなかつた。『あいつは何ぢやい——昔の早稻田の政治專門部をさへ卒業せなんだと云ふぢやないか？高が御用新聞の社長で滿州をごろ付いたことが何の手がらぢや？今でも見ろ、肝腎な金もなく、學問もなく、ただ〇〇伯の子ぶんであると柔道が二段取れるとぐらゐで、人におほぼら吹いたツて、駄目ぢや！おるのうちが若し東京にあつたら、きツと、あいつもおるのおやぢにあたまを下げて來る連中ぢやないか？』

渠には政治家若しくは代議士と云へば、必らず自分の故鄕のそれらが思ひ出され、そしてそれらはすべて誰れかの定義した通り『借金をする動物』であつた。渠の高等學校時代にも、大學時代にも、

この定義を冗談のこと、皮肉のことだと云つてしまうもの等が多かつた。けれども、渠ばかりはいつもこれを實際的觀察から來たところの、眞面目な間違ひのない定義であると主張して來た。そしてその證據には、きツと、自分のおやぢへ泣き付きに來た代議士候補者どもの名を擧げた。

先輩として賴みにするものもなく、友人と云ふ友人もなしに大學を卒業した渠は、その唯一の誇りとするおやぢの紹介によつて佃先生の庇護を受ける爲めにこの庚申塚へ夫婦と赤兒と女中とで來たのであつた。おやぢが同縣人でもない人を先生と呼ぶには、その先生は餘ほどえらいところがあるのだらう、そして奉職の口をもその勢力圏内で探して呉れるのだらうと樂しみであつた。

來て見ると、先生が門近くのところで泥だらけのカーキー色の仕事衣を着て、ダリヤの花を十ばかり一輪に付き二錢づつで或女の子に賣り渡してゐたのが最初の印象であつた。

『仕事中ですが、まア、ちよツといらツしやい――立ち話も失禮ですから、腰でもかけましよう』と、もツと奧の方に立つてる住まひの、そこから今の庭を越えておもて門までが藤棚の蔭に見える椽がはに案内されて、珈琲とバナナの馳走を受けた。先生は種々な政治意見やその勢力範圍のことをいろいろ語つたが、目下、世を韜晦してゐるのだと云つて、この草花園を經營してゐた。書生も二三名はゐて、とても一緒の家に住むことができなかつた。幸ひに、花園の一隅に隣する家が貸し家になつてたので、先生はそこを借りて呉れることにして、書生どもに命じて裏庭の低い生け垣の一部を破り抜き、

そこから自由に往き來ができるやうにして呉れた。電車へ乘りに行くにも、さう云ふ風にして們の門へ出るのが早や道であつた。

けれども、この便利を門のそとへまでも利用したのは大藏自身ではなく、多くは自分の妻のお靜や女中であつた。自分はどちらの門をも滅多に出たことはない。毎日一度や二度は赤兒を抱いて花園をぶらつき、先生どもの仕事をしてゐるのをそのかたわらに突ツ立つて見てゐることはあるが、あとの時間は其の間の長火鉢にかじり付いて、そのさし向ひにお靜を坐わらせてゐた。

『如何に美人でも、毎日見とると平凡ぢや、な。』

『だけん』と、かの女は顏の筋を多少は動かすだけの優しい微笑を浮べて『一度國へ歸つていらツしやいと云ふとるぢやないの――氣ばらしにもなるし、お金を特別に呉るるかも知れんし？』

『また着物を買はうと云ふのぢやろ？』

『そるにしても、今から火鉢にばかりあたつとるよりやよからうもん。』

『おるが買うた火鉢におるがあたつとるのがどうして惡いな？』

『………』かの女は何だか詰らなさうに浮き世雜誌を引き寄せて音讀し初めた。これは以前からの命令的習慣にさせてあるので、書いてあることは何であつても、寧ろ男まさりだがその優しい聲が顏の時間つぶしには氣持ちがよかつた。

女中のお定も面白さうな小說の時などにはたすきを半ばはづしてそばに寄つて來たり、一緒になつて何だ、かだと感想を述べるが、大藏はそれを許してあつた。すると、時には、話のついでから思ひ出したやうに、お定は、

『旦那ンさまもちツとお出かけなツして、奉職口を運動したらどうぢやろに』などと、差し出ぐちを云つた。そんな時にも、頰づえつきの渠は怒りもせず落ち付いて笑ひながら答へた。

『おるはほかの卒業生のやうに貧乏人ではない。急いで口を探さんでも、きツとあの松方が適當なところを、ありさへすりや知らして吳るる。』

松方と自分が呼び付けにしたのは、東京府の知事をしたこともある政黨員で、國では自分のおやぢに隨分金錢上の恩顧を被つてると自分自身では信じてゐる人だ。自分には、その人が高い利子を自分のおやぢに拂つてることなどは當り前のことで、高利を貸したそのことが既に恩顧でなければならなかつた。で、大學を出ると直ぐ、手紙一本をその人に送り、〇〇縣久野直次郞のせがれが（と、自分で名乘つて）今回いよ〳〵大學を卒業して法學士になつたから、どこかいいところへ紹介して吳れと云つてやつた。こちらは殆ど命令をでも下だしたつもりであつたところ、果して向ふからは叮嚀な返事が來て、卒業を祝すると共にいづれ適當な位地を心がけて置くとあつた。殊に、そのうちに『貴殿の如き大家の御子息にはどうせ詰らぬ職務は御紹介出來かね候べく』と書けてゐたのが氣に入つた。

『兄に負、大政黨に於いて一部の領袖だけん』と、向ふを讃めることが自分自身を一層えらくしたので、今は政黨にも官僚すぢにも失脚してゐる佃先生などには尊敬や期待を持つ氣になれなかつた。その上、若いものが二三名ゐるので、お靜が先生の宅へ毎日のやうに遊びに行くのが面白くなかつた。『ちよツと買ひ物に行つて來ますよ』と云つて、かの女が赤兒を自分の手に渡して出ることが度々ある。で、兒を抱いて痛はりながら待つてゐても、かの女は二時間も三時間も歸らない。その間をお定が自分のゐる茶の間へ横になつて、雜誌の繪を見たりしながら、話し相手をするので、どうやらからやら退屈はしのげた。けれども、自分の女中のつげ口によると、お靜は夜の遲い時などは、何が面白いのか、きツと若いもの等とから花を引いて來るのであつた。

　或時なども、かの女が歸りが餘りに遲いので、自分は待ち兼ねてまたお定に手を出した。そのあとでもなほお靜はなか〳〵歸つて來なかつた。花を引いてるばかりでもあるまいかと、自分に引き合はせて考へられて來た時には、兒を自分のあぐらの上に抱いて火鉢に向ひながらも、胸のうちがじり〳〵と煮えくり返つた。そしてやツと歸つて來たかの女をいきなり立つて行つて蹴飛ばした。

『つくしよう、この尼！』その手ごたへが自分の抱き兒にまでも及んだかして、それが自分の胸のうちで泣き出した。

『そぎやんこつ！』お定が斯う云つてとめて來たのも間て合はなかつた。

『ほんこでもありやこそ。』
『そるばツてん、行ぐ必要はなか！』蹴た方の足を今度は疊に踏みつけて叫んだが、恨めしさうな顏をこちらに向けてお靜が起き上りかけてるのを見ると、渠は自分の愛慾が動いて來たのを感じた。兒を素直にかの女に渡し、出の少い乳を無理にも飲まさせて、自分もそのそばでそのそれらしいにほひを嗅いでゐた。
『旦那ンさァ――おかツつアま――お休みなさい』と云つて、お定は玄關の間に取つてあるその寢どこへ行つた。自分はまた奧の間へお靜を促した。自分には、お定が自分との間を少しも氣取られないやうにしてゐるのをなか／＼利口に思へたが、お靜の若さ美しさには見かへられなかつた。お定はおやぢの家の女中であつたのを、去年、自分が歸國した時に關係してつれて來たのだが、矢張り同國のもので東京に於いて結婚したお靜があることは、前以つてかの女にも分つてゐた。兩者とも自分の家に多くの金があることを信じて來てゐるのが自分には一つの誇りであつた。殊に、お靜の如きは、その父から自分の家には金があることを聽いたばかりで、自分と東京で知り合ひになるが早いか、しよツちう、自分の下宿へ入りびたつて來たのであつた。
『おるも眼識はあつたのだけん、その美人を逸しなかつた』と云つて、その後その時の話が出たついでにかの女の機嫌を取つた。

『ぢやア、着物を貰つて頂戴よ。』

『直ぐそるだけん困る』と答へても、かの女の願ひが切になると、棄てては置かなかつた。

椽がはに立つて、花園の横通りを通る女をよく見てゐても、畫家〇〇氏の細君がちよツとハイカラで目に立つだけで、あとのものに碌なのはない。そしてそのハイカラも、うちのお靜に比べると、大分年增でもあり、そして上品でなかつた。お靜の特色は色が白く、眼が大きくて涼しく、顏の輪廓に優しい威嚴があることだ。けれども、それが爲めにかの女を誘惑しに來るものが自分のまだ學生時代にも多かつたので、かたツぱしからそれと見ると絕交して來て、今では自分に殆ど全く友人がない。然し、その方が結局心配もなく、また金を貸せと云はれる恐れもなくツて、結構であつた。

ところで、お靜は渠に蹴られた股のところが痛み出して、その翌日から立てなかつた。お定は渠に私かにそれはわざとおほげさにしてゐるのであるから、いい加減にあしらつて置けと忠告したが、それにも拘らず渠は自分の所存で醫者を呼ばせた。そして醫者が紙に黃いろい物をなすり付けたのをかの女の股に張り付けるのを見た時、如何にもひり／＼と滲み込みさうなので、これは、また、直つたうへで、一つの立派な下着なり何なりを買つてやるに價へする事件だと思はれた。

但の家からは先生を初めとして、細君や書生どもが順番に見舞ひに來た。それがまた、毎日ぽつねんとしてゐる大藏には、久野家のおほ繁盛の日と見え、おやぢの家へわれもわれもと金を借りに來る

繁盛にも比べられて、久しぶりの得意を公けに示めし得たやうであつた。
『詰らないでしようから、まア、花でも見ていらツしやいよ』と云つて、先生の細君はダリヤの花束を大きな瓶にさしたのを置いて行つた。一體、音樂學校を卒業したと云つてゐながら、オルガン一つ持つてゐない女が、人に詰らないでしようからなどと云へるか？先生の細君としては、自分とお靜との間の差よりも割り合に年が若くて、而も愛嬌のある女だが、それが大藏には自分をおろそかにして自分の妻にばかり肩を持つた仕うちと思はれた。
『人を馬鹿しとるぢや！』斯う妻の枕もとに在つてむツつりして、簡單に胸一杯の不平を漏らした。そして花を瓶ごとまたあし蹴にしてやらうかと云ふ氣が出た。
『さうばいた』と、妻も案外に同意した。佃夫人などに云はせれば、さうですよあなたと上品に云へること葉で、そんな分りにくい國ことばを大藏はかの女やお定とも相談して成るべく出さぬやうにしてゐるのだ。が、かの女の方がわざと國なまりを出すので、自分自身もつい釣り込まれることがある。そして却つてそこが國に於ける自分のおやぢや自分などの位置を思ひ出されるので愉快でもあつた。この心持ちを嘗てかの女に告げたら、それからと云ふもの、かの女は無理を云つたり欲しい物があつたりする時は、一層わざとにもさうするやうになつた。そして自分もそれが賴母しかつたのだが――。
お靜は青葉を次いで、『お花なんか死人にあげるものぢやろに――氣が利かん。うまいお菓子でも持つ

て來りやこそ。』

『さうぢや、さうぢや。――お定、餅菓子でも買うち來い。』酒を飲めぬので、自分にもそれは好物であつた。泣いてる赤兒をお定から抱き取つて、にこ〳〵し出して考へて見ると、先生の細君は今何と云つたか？

『それでも、まア、あなたがお蹴られになつた爲めに――また』と、かの女はその優しい微笑の目をお靜の顏からこちらへ向けて、『何かお好きな物を買うて貰へますよ。』

『……』それに違ひはなかつた。『まア、心配すな。直つたら、何かまた買うてやるから。』

『ほんとに？』その、枕のうへで、嬉しさうにした顏を、うへから一つ接吻してやつた。

二

その翌日は早朝からお靜が三越へ出て行つたのを待つてゐると、晝にたつても歸つて來なかつた。渠自身には、かの女が畫家のハイカラ細君にもまさつた派手な着物を着て、花園の横通りか園內の道を澄ました顏で歸つて來るのを、かの女自身のまだ知らぬうちに自分でかい間見ることが一つの樂しみであるので、度々椽がはへ出て見るのだが、少しもさう來て吳れなかつた。半ば心配と失望とに押し包まれた氣持ちで獨りつくねんと火鉢に向つてると、横通りをいつもの通り聽えて來る足おとで、

あれはどこの主人、今度のはどこの細君だと云ふことが聽き分けられた。
『旦那ンさまのお耳には目が付いとりますぢやらうばい？』こんなことを云ふお定も冗談に於いては隅に置けぬ女だと、大藏には思へた。
『うん。』一層得意になつて、また足おとを聽き澄ましてから『見ち來い、あはれ湯淺の年増細君ぢやぞ。』
『………』お定は笑ひながら椽がはから立ち戻つて來て、その細君のどツしりした歩き振りをちよツと眞似して、そり身になり『そン通り！むツとこわい顏をして！』
『男のやうに巖丈な體格で、兩方の肩を斫う』と、自分も亦お定の眞似に釣り合ふ肩つきを見せ、『いからかして、な。』
突然、職人か何かが湯淺夫人と行き違つて來たのであつた。
『君が　なさけ　の　かり寢　の　床よ、まくら　かた敷き　夜もすがら………』
（ふしが今度は義太夫言葉になつて、）
『お前　と　わたし　の　その　仲は
去年　や　ことし　の　こと　ぢや　ない………』これが行き過ぎるまで、二人はじツと笑ひをこらへてゐたが、やがて一緒にどツと笑つたのである。

その聲で、渠の腕にゐた赤兒が眠りの目をさました。そして近頃にないほどの泣き聲を擧げた。
『ようツ、泣いた――泣いた！』大藏には餘ほど珍らしかつた。
『そるでんあアた』と、お定はいた〳〵しさうな顏をして、『まだほんとの聲ぢやないか。』
渠は今殆で忘れてゐた物を自分の意識のうちへ取り入れたのだ。
自分には兒が可愛いのか、兒を生んだ女が可愛いのか、どツちともよくは分らなかつた。けれども、妻が留守になると、その度毎に妻の生んだ兒を抱きづめにして待つてるのである。それでも、それが眠つてるか、じツとしてゐるかでは滿足できないばかりでなく、また何の爲めに第一等のミルクを飲ませてゐるかを疑はれた。
どうも、他人の兒に比べては、からだもやわ〳〵して病身のやうで、發育も鈍いのが分つてながら、なか〳〵笑はないのを不平で溜らない。そしてたまに笑つたやうな口つきをすると、
『あの笑ひは千兩ぢや、なア』と誇張して妻や女中と共に喜んだ。そして今一度その笑がほをさせて見ようと苦心しても、もう二度とは無駄になるのであつた。
せめては時々泣き出す聲を――他の兒に比べては蟲の音ほどに細いけれども――聽くと、俄かに可愛味を生ずるので、
『成るべく泣かせて置け』と主張して、よく妻と衝突した。『お前はいそぎやんいこつ云ふて可愛くないか？』

『可愛いんだけん、云ふのぢやなか？』

『馬鹿！』かかる時には、虐王の專斷をやるのだと自分には思へたほどの强暴心を以て妻をでも誰れをでも叱り飛ばさないではゐられなかつた。そして兒の可なりひい／＼泣きつづけるのをじツとしてそのまま見たり聽いたりして、自分にやう／＼滿足の時が來ると、『乳でもやれ』と、やツと待ちかまへてゐる妻か女中かに手渡しした。

そしてまた退屈になると、兒がミルクを飲んでゐる最中でも何でもかまはずその兒を自分にひツたくつて膝のうへに乘せた。そして泣いて與れないと、

『さア、おらべ、おらべ！』まだ少しも自由の利かぬ者の手を動かしたり、首をゆすつたりした。

『あんまり可哀さうで見とれん』と云つて、お靜はそんな時には必らず隣りの室へ行つて横になるか、さなくば佃の家へ遊びに出た。

『ぢよんさまはもだゆとるのですよ、旦那ンさま！』お定がこんなことを云ふのには、然し、別段腹が立たなかつた。

そのうちに、家ぢうのものが一致して一つの不審を赤兒にいだくやうになつた。どんなに後れた兒でも、もう立たなければならないのに、少しも立たうとしないのみか、抱けば抱いたまま、寢かせば寢かしたままで、殆ど動きさへもしない。

『骨なし兒と云ふのがござりますが、な。』

『そるかい、あアた』と、お靜はお定のこの注意に初めてぎよツとして顏を向けて、所天の方を見た。

『馬鹿なこつ！』渠は一言のもとに渠等の疑問をはね付けた。『毎日のやうに上肉を喰ひ、鮮魚は鮮魚で特別なせんぎをさせとるのに、その親の子にそぎやんこつあるかい？』

『けツどん、華族の和子にもかたわがあるもん。』

『そんなら、先生のとこへ行つて、細君にでも聽いち來い。』

この三人會議のあつた結果、お靜が卽時に佃へ行つて來ての報告によると、同家では初めからそれだと思つてたが、慮遠して云はなかつたのだ。かうした兒はどんな醫者にかけてもとても直しやうがないと云ふにきまつてるだらうが、諦める前に、まア、一度は大學病院にでもつれて行つて見て貰ふがいいだらうツて。

『どうしたらよか！』妻が大藏の前に泣き伏して、おい〱としやくり泣きをしてゐるのを見ると、渠も自分でやツと浮き腰になつた。そして、

『かうしちやをれん。』赤兒を自分で抱き上げ、『まだ二時だけん、お前も一緒に來い』と妻に命じて、共に家を出た。

さして行つたのは大學病院だが、とても順番を待つてゐられなかつた。妻の思ひ付きで、別に同鄕人が可なり大きな病院を開らいてるそのところへ行つた。

すると、そこの院長が

『これは決して骨なしではありません』と保證して吳れた。

『そゝ見ろ！』大藏は妻に向つておほ意張りであつた。そして失せようとした希望を恢復して歸つて來た。

丁度、門のそとに先生の細君がしたの子供を抱いて立つてて、こちらを見るが早いか聲をかけた、

『お歸りですか――どうかと思つて、わたしはここでお待ちしてましたの？』

『………』渠はおもてに嬉しさをあふれさせてゐたけれども、かの女がうそを云つたのを失敬だと思つたので、それに對する復讐のつもりで、兒を突きつけるやうにして、『大丈夫です。骨なしではありません。』

『そりや結構でした。』

『けツどん、まア』と、お靜があとからうち消すやうに、『矢ツ張りそれに近いのです、ね。』

『………』渠はかの女をふり返り、こわい顏をしてにらみ付けてから門內に入ると、また先生がダリヤのすたれた花を切り去つてるところに出くわした。かげでは自分等があんぱんと名づけてる、五分

刈りの團ツこい顏をふり向けて、

『どうでした？』

『骨なしではないさうです。』その細君の方に向つた時よりも少し言葉をゆるめてゐた。笑ひを見せながら、『ただ骨が普通よりもやわらかいので、ミルクもあまりあまくせず、藥劑には石灰分を取らせてをりさへすりや直るさうで――』

『矢ツ張り、同じことでしよう、な。』

『………』大藏には先生の言葉が面白くなかつたので、ぷいと失敬してしまつた。あんなやつ等とぐづぐづ立ち話をしてゐるには及ばないのに、お靜は大分してから家に這入つて來た。そして云ふには先生夫婦の親切な忠告では、醫者のはほんの自分達の氣休めに云つたのだらう――醫者が同鄕人であればあるほど疑はしいことには、自分達の父が金持ちであるのを見込んで、とても直らぬとは知りつつも、藥り代を取れるだけ取つてやれと考へたのかも知れないから、そこのところもよく考へて見なければならぬわけだ、と。

『馬鹿！ふうけ！』大藏は、直徑少くとも七八間は離れてる佃の家までも聽えよがしの大きな聲で、二度にかの女を叱り付けた。それから、氣取つたほどおほやうに、『兎に角、おるのうちは、くすり代など問やせんぞ！』

それからは、渠自身で毎日のやうに病兒を病院につれて行き、家に在つてはまた自分の妻に、かの女がいやがるにも拘らず、自分の獨斷で成るべく鹽からい物を喰はせるやうにした。香々――から味噌――鹽しやけ――思ひつくに從つて、斯うした物を出入りの商人に云ひつけた。然し自分とお定とはすべてさう云ふ物を嫌ひなので、從前通りのものを喰べてゐたが――。そして鹽からを得たに至つては、その名の上も下もからい意味を現はしてるのを大いに氣に入つたが、それでもなほ、いかはまだあまいので、いつもかつをのにさせた。

そしてそれらの物が自分の豫算通りに減じて行かないで、一日なり二日なりを越えて殘つてると、『そるでは母としての情愛が足らん』と云つて、妻を責めた、かの女の出す乳を渠は自分で吸つて見て、その味を『これではまだいがん』と云つた。人に隱れて買ひ喰ひが多いせいだらうツて、たださへ自分でしツかりもと締めをしてゐた財布の口を一層しぶく引き締めた。そして自分は、自分をさし置いてかの女ばかりが佃の家でたび／＼菓子やしるこを馳走になつて來るのを、同家の書生から聽き知ると、『わうでい者』と叫んでかの女をどやし付けたと同時に、佃の細君をもかの女の一味徒黨に思ひ初めた。けれども、また、妻の機嫌を取る必要がある時には、自分から進んで何ごとにも例外を許してやつた。

ただミルクだけは決して自分以外のものの手を借りず、必らず自分で水を割つて自分であまくない

までの加減にし、そこへまた燒き鹽を入れてやることにした。

『滋養よか大事な作用を早う兒の五體に起す必要がある』と思ひ込んだ爲め、誰れが何と云つても、この新らしい習慣を改めなかつた。『矢ッ張り、今の科學思想は進んどる。お前らは皆無學だけん、科學的治療の眞理を知らんのぢや。』

『けツどん、醫者は却て恐らくあまい物を藥にしとるぢやろて。』

『どうして?』渠は妻の意外な言葉を不審に思つた。

『あアたが滋養分を取らさんのだけん、死んではくすり代の種なしになるて。』

『誰れがそぎやんこつ云ふた?』

『佃先生が——冗談にぢやろけツどん。』

『あいつア貧乏くさい癖に、法螺吹きぢや。』

渠は佃夫婦のお靜に對する入れ智慧などをてんから相手にしないで、同郷人なるその醫者をばかり信用した。或日、病院からの歸りに、電車を大塚の終點で下り、少し豫定の時間を後れてゐる爲め家に殘してあるお靜のことも心配になつて來たので、急いでまた王子電車の方へ足を運んだ。すると突然、今自分が下を通つてるガードの上を、山の手線の電車がかみ鳴りのやうな音を立てた。思はず自分の頸をすくめた拍子に、線路の鐵につまづいて、抱いてた兒と共に倒れた。兒はびツくりして泣き

出した。調べて見ると、あたまを打つたかして、そのぼんのうくぼのところの薄い毛に泥がついてゐた。で、直ぐまた病院に引ッ返したのである。そして兒を診察して貰ひ、自分も左りの肱にすり傷ができてゐたのを繃帶させた。

それから、やッと歸宅して見ると、妻のお靜は無事であつた。そしてけふの出來事を自慢さうに語つてきかせると、かの女よりもお定の方が涙をこぼしながら斯う云つた、

『おかッつアまは旦那ンさまほどぢよんさまを可愛がつとりやせず。』

『無論ぢや、お靜は馬鹿だけん、まだ金の力を知らん。』

自分のやうに達者なうへにどッしりと人間らしく肥える方の滋養分は第二としても、この兒には、骨を固める石灰分や鹽ぶんその物が第一の滋養ではないか、その爲めに費用をも惜しまないでやつてると云ふことを、よく皆にくり返して聽かせた。

『けッどん、何だか以前よりも弱つて來たのぢやなか』と、或日、お靜が絶望的な歎息を漏らした時には、渠は機嫌がよかつた。そして無事に次ぎの如くうその外は、すべて東京言葉だと自分で思へるのを以つて答へた。

『氣のせいだよ。おれも、個の細君にそらごつを云はれてからは、時々さう云ふ氣がした。』

三

今、湯淺の夫人がそこを通つて行つてから、大藏は泣く兒を抱いたまゝ、あやしもせず、ゆすりもしないで、じツと、その泣き聲やその動く具合ひをうち味はつて、多少の可愛味を感じてゐた。けれども、この兒がその父の愛情を內心から動かすのは、いつも、僅かの間であつた。直ぐ靜まつてしまうか、眠つてしまうかした。さうなると、大藏はまた自分の妻の歸りの遲いのが心配になつて來る。

せめて兒を眠らせないやうに腕にゆすぶりながら、一あし、二あしと佃の花園へ出て見た。大きなもちの樹の爲めに少し日當りの惡いこの部分にも、矢ツ張り、ダリヤが澤山植わつてゐて、ここのは、佃の前庭にあるのよりも何ゆゑか太く高く延びてゐる。その癖、花が比較的に少なかつた。が、この花の盛りが赤いろ、黃いろ、白、斑まじりなどに、ぱツとまだ賑はつてた時は、自分にも多少美しいやうな氣がした。けれども、自分も自分の妻と共にこんな物には一向趣味がない。

『ええと、きのふ――お靜がまた何とか云ふた、な――さうぢや、花なんか死人にあげるもので――』

たださへその通りどうでもいい花が、もう、斯うすがれになつて僅かばかりぽつ〳〵下咲きに咲いてるのでは、そしてうは葉がしほれて來ては、大きくはびこつた雜葉のやうに目の邪魔にこそなれ、面白くもをかしくもなかつた。霜が一回來れば直ぐいもを掘り上げなければならぬと云つてたのに、滑

稍にも手が行き屆かないで、いまだに斯う棄てて置いて、而かもその殘りの花からでも一錢や二錢を舉げようとしてゐる個その人の性格が、自分には卑しく見え透いて來るやうに思へた。そして自分のおやぢが百圓貸せば三ケ月で百四五十圓、千圓貸せばまた千四五百圓になつて行くのに比べて、心であざ笑ひながら、『だけんけち臭い、なア――ふん、半つき米か！』自分のところではそんな物を喰はないと云ふのが、兼て一つの自慢であつた。

　ふと、然し、そのダリヤの太い青ぐきが何本も並んで立つてるのを、ぐたりとしたその葉の間から見渡した時、自分にちよツとおもしろおそろしい思ひ出が浮んだ。故郷の國ざかひに於ける可なり深い山の中で――そこへ自分は或友人とふたりツ切りで迷ひ込んだことがある。どちらを見ても、大きな樹木が立ち渡つてて、到る所でそれを仰ぎ見る自分達の顏や肩には、ぽとりと樹の葉のしづくが落ちて來た。その音のほかはしんかんとして、やみ夜の如く無言で、見渡す限りどこからでも何かおそろしい物が現はれて來さうであつた。自分達は方角も分らずに歩いて一目散に驅け出した。自分は大きな青大將を踏んで、その場にすべり倒れた。その時の氣持ちを今この兒に向けてやつたらどうだらう？どう感じるだらう？

　と、斯う云ふ不思議なことを思ひ付いて、渠は深山になぞらへたダリヤの林を少し分け入り、ゆふべの雨からまだじめ〳〵してゐる黑い土のうへへ、――これを日光もささぬ山奥の地べたと見做して

――ねんねこに包んでゐた兒をそツと手からおろした。そして自分だけはまたそツと拔き足さし足でその間を出て來てから、小蛇でもやつて來て咲れないかと、そのあたりを腰をかゞめながらあちこちとのぞき、すかして見た。自分はまた少し喰ひ過ぎてるかして、自分のうは目ぶたが充血して重たく感じられたが――。

そこを、自分の家の様がはから女中に見られたのだ、

『旦那ンさま――』

『………』われを忘れてゐたところへ突然の呼びかけであつたので、自分ながらびツくりして、兩方のから手を後ろへひらいたまゝ、からだぢうがどきツとした。その時には、もう、一二歩あとずさりしてゐたが、幸ひにそこへ踏みとまることができた。

『何しとんなさる？』

『おい、お定』と、渠は俄かに兩方の手を肱と共に前後に動かしながら、兒がねんねこの中で少し目いてる方を指さして、『いごいとる、いごいとる！』

女中に云はれてから兒を渠は直ぐ拾つて來たが、お靜がゆふがたになつても歸らないのであつた。渠はお定と共に同じちやぶ臺で晩食をしてゐると、かの女は箸を運びながら自分の妻のこの頃の樣子が少し油斷ならぬことを告げた。

『そぎやんこつあるもんかい？』
『けツどん、おかツつアまにや奥野さんがまたよか人ぢやろかい――子爵の和子だけん。』
奥野とは佃の書生の一人で、農學士で、子爵の子には相違ないが、その先生の直話によつても、出來そくなひの人間であるので、先生が頼まれて監督がてら預つてる者と分つてた。大藏にはいやな人物であり、また如何に華族だツて金がなけりやアと云ふ負けぬ氣があつた。で、自分のうちばかりにゐてかつえてゐる世間ばなしの種をもこの者だけには聽かうとはしなかつた。自分は別に佃の書生と云ふよりも、親類すぢとして來て先生に使はれてる、小悧口な長さんを選らんだ。
自分のことを先生が『あの馬鹿が』と云つて罵倒したのを聽かせたのも長さんである。その時、長さんは先生の細君の金を五六圓盜んだとかで、先生に一二間も投げ飛ばされて逃げて來たのであつた。ところで、自分が先生に對して間接にした答へを先生に運んだのも亦長さんだ。あツちこツちへいいことばかり云つてまはつて、茶の一杯も飮ませられるのを喜んでる不良青年ではあるが、それだけまた自分には持つて來いの調法者で、
『一體、○○畫家にはいくら程の收入があつて、あんな細君をハイカラにして置けるぢやらうか？』
『さア、うちの奥さんの話では、何でも毎月七八十圓のくらしぢやさうだが――』
『へい』と、さう聽いて自分は一と安心した。何でも他人が自分よりよくないことを望んでるのだか

ら——』『兩親も女中もをるぢやないか？それで七八十圓ぢやア、毎日まづい物を喰ふとらねばならん。うちなどは、おとながたツた三人で月二百圓は入るよ。』この勘定には、無論、自分の法螺と妻の贅澤費とが這入つてるのは承知の上であつた。

『けれど、なア、あいつにや少し財産があるやうだぜ。さうしておれが注文も受けんで花束をこしらへて持つて行つても、直ぐ買ふて呉れるよ。』

『あつても知れたもの、さ。』無論、おほがね貸しなる自分の父の家に比べてはだ。

『ある細君は蟹のやうに平べツたい顏をしとりながらなか〳〵氣取つてるけれど、畫家の方はええい人だ——少し助平ツたらしいが、な。』

『さうぢや——は、は、はア』と、自分は屈托を忘れて笑へた。

『おれは、な』と、長さんは調子に乘り、大藏が肱をかけて、火にかざしてゐる兩手の一方をちよツと火鉢越しに叩いて、『時々氣を利かして、朝めし頃に生み立ての玉子を持つて行つてやんね——ゆふべはきツとだらうとあらかじめ見當をつけて置いて、さ。』

『は、は！』

『さうすると、な、必らず買ふよ——いいところへ持つて來て呉れたツて、な、ふたりともぼんやりした顏をしとつて。』

『……』大藏は自分も亦笑はうとしたが、今度は笑へなかつた――自分もその手で度々買はせられたのかと思ひ出されて、そんな時には話頭を轉じさせた。『ほかにまだ新種はできとらんか？』

『さア――』

『こないだ引ツ越して來たあの人物は？』

『まだ見て來んけれど、あすにも花か玉子を持つて行つて見よう。』

こんな具合ひに自分はゐながらにしてよその家族の人數や生活ぶりが詳しく知れるのが面白いのだが、奧野にはこれをやらせることが出來なかつた。が、自分の妻の方は長さんをあまり相手にしないで、自分の前でまでも、

『奧野さん、奧野さん』と云つてることは事實だ。そして自分に隱れて渠等と共に花などを引いてるのだ。

『ひよツとすると、一緒に芝居でも見に行つたのぢやなか？』斯う思へ出すと、渠自身にはお定の食事中を猶豫してやるだけの、心のひまもなかつた。『直ぐ見ち來い。』

お定が急いで隣りへ行つて來ての報告では、奧野は今やツと仕事からあがつて井戸のわきで足を洗つてるところであつた。大藏には、さうして見ると、長さんはまだあがらないのだらうからここへ話しにやつて來るのが今夜はまだ後れるだらうし、――それでも先生は、もう、例の半つき米に洋食の

食事中か、な、などと云ふことが思ひに浮んだ。渠には、人のうちのことを努めて想像して見るのが仕事であつた。

『どうしたんぢやろか、な？』食事をすませて、日は暮れたけれども、まだ自分の妻の音沙汰はなかつた。『きツとまた芝居ぢやろ』と云つて、嘗て妻に強いられて一度行つたことのある帝劇の中を思ひ浮べようとしたが、自分のあたまにはただ多くの男や女が大理石の柱の間にめまぐるしいほどごたごたしてるばかりで――舞臺の面白をかしくもなかつた狂言などは反古のやうに皺くちやになつて、どこか斯う、自分の頭腦のかた隅に押し込められてる。これは自分の頭腦組織に於ける、生理學者の所謂腦溝の摺襞が複雜な爲めだと自分では信じてゐるので、少しも自分の腦力を疑ふ材料にはならなかつた。『その證據には見ろ、おるの腦は足おとでその人をよく聽き當てるぢやないか』などと意張つて見せるのが度々であつた。『けツどん、おるは大學であんまり腦をつかつた爲めに、近視眼のかはりに近腦性になつとるのぢや』と云つて、この自分の新造語が自分としては科學的に何を意味するかをきのふも長さんに說明してやつた。乃ち、腦力が自分から遠く離れた物を想像することができなくなつて、手近い物にばかり集中するのだと云ふ說明を――。

『そるとも』と、お定はいやに微笑しながら、『また吉岡さんのところぢやろかい？』

『あの少尉もお靜のよか人だけん。』渠は斯う冗談にしながらも、自分のいとこが段々とおとなびて來

たことを思つて、多少不安をおぼえた。こないだも、ここへ尋ねて來たので牛肉を御馳走してやると、酒がないから面白くないと云つた。そしてちよツとそこまで見送つて來るわと云つて出て行つたお靜と共に料理屋へあがつて、三時間ばかりもこちらを留守させた。それは、然し、お靜の歸つて來ての辯解でよく分つてしまつたけれども、お定が寧ろ承知しないで、自分に私かにこわ意見をして、若い細君をあんなに不しだらにさせて置いては、お國のお父さんから落ち度のないやうにと賴まれたわたしがすまぬと云つたツけ——

『そぎやん冗談どころぢやなか。』

『お前は本人のおるよりも燒き餅やきぢやて——ぢやア、見ち來う。』運は暗い中を——また自分の女房を待ちかねてと書生どもに見られて云はれるのがいやさに——こツそりと佃の門まで出た。

自分の二三軒どなりの婆アさんが挨拶して通つてたが、自分はうす暗いのにまぎらして返事もしなかつた。その他にも、自分の椽がはから見たことのあるらしい男や女が、暫らく立つてる間に、四五名も通つて行つた。それらが皆お靜でないのを馬鹿らしくも憤ほらしくもなつて、くわツと自分のあたまに熱がのぼつた。けれども、一番親しい火を離れて來たのが如何にも手賴りなく寒かつた。

『お前見ち來い。』立ち歸つて、斯うお定にいら〳〵しい調子で言葉をかけたが、かの女が臺どころの何か洗ふ物音をちやら〳〵させてゐたので、そい方へまで進んで行つて、かの女と電燈との間に立ち

ふさがつたのに氣が付かなかつた。

『暗うございまツせ、旦那ンさま。』

『さうか』と云つて、渠は、ふところ手をしたそのうへにも少し肩をすくめさせてゐた自分のからだを、まごつかせて、一二度は右や左りにやつて見てから、やツと眞ツ直ぐにかの女の方へあかりがさすやうにしてやつた。

『おととひの、またけふぢやないか？あんまりあアたをないがしろにしとるし――若しまた吉岡さんのとこへでも行つとるんぢやつたら、きツとあやしいことがあるんだけん、わたしがお國の旦那ンさまにすまん。』

『よし〳〵、今度こそ一つぎゆツと云はしてやる。』渠はぽうツと熱して來て、自分の聲が異樣にふるえてゐるのを自分でもおぼえると、寧ろこの場合をお靜も何も入らなくなつて、五燭の光にしやがんだからだの上半部を一段低い踏み板の上から映し出してる年增の、その不斷は黑くしやくんだ顏の横がほが美くしく可愛かつた。『ちよツとこツちや來いよ！』夢中になつて、自分の手を下に延ばしてかの女の手をぐツと引ツ張つた。

『手がぬれとります』と云ひながら、かの女も聲をふるはせて素直について來た。

四

……けろりとして火鉢のわきの坐に直つてからのこと、また同じ命令をくり返した、

『矢ツ張り、見て來ち貰ひたい、な——電車の停留所まで行つて。この場合、自分の腦力が佃の門までの廣がりでは足りなかつた。

『………』お定に返事がないと思つたら、いつのまに行つてたのか、便所の方から椽がはをやつて來たので、その方をふり向くと、かの女の今立ちどまつて腰ひもあたりを兩手で直してるのが、障子の腰がらすにうす黒く映つた。

『そとは隨分寒いぞ、羽織でも引ツかけていけ。』

『あアたぢやなか——今から火に當つて寒がつとるのはあアたばかりぢやろて。』

『そぎやんこつなか——お前らは神經が遲鈍で、この寒うなつたことを感じんのぢや。』

『また寒うはありまツせん』と、さきにお靜が氣取つて云つた通りのことを口調までそツくり眞似したのである。『綿入れなど着て——あアたはちツとひよツきんもんぢや。』

お定は障子を明けて茶の間へ這入つて來た。そして常になくばたりとつよく障子を締めた。見に行くのをいやなのか知らん、困つた、な、と思つて默つてると、こちらを見向きもしないでずん／＼隣

りの室まで通つた。自分はそれを橫目で見てゐたのだが、かの女の女中らしく短くたぐつてた裾が長くなつてゐた。かの女はお靜の化粧鏡に向つて膝を落し、ちよツとその結び髮の引き釣つた鬢をなでた。お靜が見ると怒るのだけれども、自分だけの時は――今もそれがから紙の明きから見えてゐながら――自由にさせてゐた。

やがてうら庭に人のけはひがしたので、お靜かと思ふと、違つてた。けれども、別にまたこころ待ちにしてゐた一人だ。

『今晚は。』長さんが遠慮なくうらの椽がはからあがつて來た。

『やア、探報先生』と、自分はその方を見上げてにこ〳〵しながら、『もう、晚めしはすんだか？』

『うん、例の半つき米よ――まづい、まづい』と云ひながら、自分の火鉢の角をまはり、自分と向ひ合ふところの、即ち、お靜がゐたらかの女を坐わらせるその座を占領して、今吸つて來た卷煙草の灰を、鐵壺の釜とそれから鐵瓶のかかるところとの間に、輕くだが押しつけて、いつもの通りに灰を落した。

『……』また惡い癖をと、大藏は折角奇麗に磨けてゐる鐵をよごされるのがいやであつた。自分の右りでの橫ツ腹に最早や少しできかかつて來た火だこを左りの手で撫でながら、にらむやうにちよツとその方に目をやつた。けれども、よせとは强く云へなかつた。そのうへ自分は今少し心臟の鼓動に

疲れてぼんやりしてゐるので、いつもより元氣がなく、火鉢のふちへ肱をついたその兩手の上に自分のあごを置いて、『さて、新らしい報告は？』

『今夜は素的なのがあるぞ。』これは畫家〇〇氏の夫婦別ればなしで、それが爲めに畫家夫人は大先生のところへ今來てゐて、何でも裁判沙汰にすると云つてるのであつた。

『こりや面白うなつて來た』と、大藏は喜んでまた元氣が出て來た。『一體、それぢや仲がよくなかつたのか、なア？』

『無論、さ。おりやこれでも江戶ツ子のかはりに大阪生れのちやき〳〵だ、あのモデルを今度逢ふたらなぐつたろ思んだが、どうや――あいつがいろ女になつたんやさうだが？』

『あいつがかい！』大藏はかの女がいつか花を買ひに來て、つい、この椽がはから見えるところで、佃の細君と立ち話をしてゐたのを、自分の妻と共に、障子のかげからのぞいたことが思ひ出された。

『うん、やれ、やれ、一層面白くなる！』

『やつたろ。今、ちよツと話を聽いてると、おりやあの細君に贊成――同情ぢや。』

『訴へて、もと〳〵通りになると云ふのか？』

『いいや、うちの先生の紹介で辯護士を賴んで、手切れ金を取るんだ――手切れ金を！』

『それも面白い！』斯う調子づいて叫んだには、また一つには、苟くも法律を學んだ自分のもとへは

先生も必らず一度は相談に來るだらうと云ふ下心があつた。

　そこへ、お靜がお定と何か話をしながら歸つて來た。大藏は妻の聲が耳に這入ると、もう、叱つてやることなどは忘れたやうになつて、先づこの新聞を知らせてやりたかつた。

『いらツしやい』と、溢れさうにこ〳〵してゐるお靜は先づ長さんに立ちながら挨拶してから、『只いま。遲くなつてすみません。吉岡さんに電車の中で逢ふて、うちへ來いと云はれたもんだけん。』

『まア、そぎやんこつあとまはしにして、さーおい、畫家のうちが夫婦別れになつて、あの細君が手切れ金の訴訟を起すちふこつぢや！』

『モデルが原因になつて』と、長さんが說明しかけたが、自然に自分の妻に中止させられた。

『あの〇〇さんの？』お靜は意外らしく目を見張つて、茶淺黃縞養老お召しの羽織ですらりと立つてゐるからだを少しあとへ反らせた。それから所天には最も無邪氣で、少しもこだはりを持つてないやうに見える微笑を浮べながら、『わたしも手切れ金を貰つて、もツと好きな物を買ひたい。』

『馬鹿！』自分も笑つた。そしてかの女が大切さうにかかへてゐる風呂敷包みを見ながら、『どれ見せち見ろ。』

『また大分三越の借金がふえましたよ』と云ひながら、かの女はぺたりと所天のわきへ坐わつた。

『なアに』と、自分は寧ろ長さんに自慢するのであつた、『おやぢにまた云ふてやりさへすりや。』

包みから出たおもな物は、赤地に白の筋を染め拔いた長襦袢の出來合ひだ。
『まア、奇麗なこつ！』お定がこの時横あひから顏を出した。
『この色が少し寢ぼけとるので、氣に喰はんけツどん――』
『少し、な』と、お定も首を傾むけた。
『今一つ目のさめるほど燃えるやうなのがあつたんだけツどん、あまり――高い――ので』と、お靜は段々に聲をやわらげて、所天の顏を下からのぞくやうにした。疊に突いてた左りの手をがツくり折つて、顏をも横に左りの方へ曲げたので、かの女の横ずわりに坐わつてるからだがその方へねぢれた。そして俄かにその場で赤みのさした顏にはにやりと微笑を見せた。
『………』大藏はそれをかの女が人まへも憚らず、自分にあまへて感謝してゐるのだと受け取つた。何だか自分のからだの奧からまた異樣な感じがして來たので、自分もちよツと顏を赤くした。それを長さんに押し隱すつもりでわざとざツくばらんに出て、『こりやなかなか結構ぢや。矢張り、赤いのは挑發的でよか。』
『あアたの物もある、わ、よ』と云つて、今一つ白のフランネルの切れを幾重にも折り疊んだのを出した。
『寒うなつたから、なア。』それの折り疊みを二つ三つに開らいて見てから、『こりやぬくといぢやろ。

早速、お定、ひもをつけて吳れよ。』

『旦那ンさま』と、お定は少し大きな呼び聲を出して、然し笑ひながら、『そぎやしこ駄目です、わ。』

もちッとよか物買うてお貰ひ遊ばせ。』

『餘計なこつ！』お靜も半ば笑つてたが、不平さうな顏をしてゐた。

『左樣、しからば』と云つて、渠はかの女をもッと笑はせるつもりであつた。『おりや何を――』

『ほんまにえい、なア』と、長さんが橫からそッと襦袢をいじくつて見ながら、『おれもいッそ奥さんの方になりたい、な。』

『……』さう云つて吳れれば話せる、ありがたいと思ひながら、冗談にだが――ダリヤのいも掘りが兼探報記者、兼人の細君かい！』

『さうぢや、さうぢや！』

『長さんは面白いこつ云ふの、ね？』お靜は買ひ物を再び包み初めた。

『おりや奥さん崇拜ぢや。』

『長君の今夜もたらした報告は、然し、上出來ぢやろ？』

『そン通り』と、かの女もやッと不斷の話し相手に返つた。『モデルがどうしたの？』

『畫家をあのハイカラから奪ひ取つたのです』と、長さんはまた同じことを雄辯にまかせてたふく

と說明しかける身がまへをした。

「もう、君、分つとるぢやないか？」斯う遮つて、大藏は長さんに話のつぎはを失はせた。自分の目はまぶたが重くて、大分しよぼ〳〵して來たのをおぼえながら、お靜ににこ〳〵した顏を向け、「それはさうと、吉岡はどうぢやつた？」

「無事よ。あ、それに就いてわたしも一つ聽いて來た材料がある。」お靜の得意さうに報告するによると、いとこと同時に士官學校を出た男があるが、或女學生を思つて度々訪問に出かけたあげく、結婚を申し込んではね付けられた。軍人なんかほんとの人殺しで、お負けに大尉まで正式の結婚手つゞきができないんだから、いやだと云ふのだ。ところが、それはそれにして、も一つ困つたことには、男が送つた最後の大切な手紙を女は、左程重んじもしないでゐた爲めだらう、どこへか落し忘れた。それを拾つた者はその二三軒隣りに住んでるごろ付き新聞記者であつた。手紙を種にして女と男と兩方からいくらかのはした金を取らうとした。吉岡少尉はその友人の方に賴まれて、何とか無事にもみ消してしまう爲め、先づ女を相談がてら訪ねて見ると、女は案外に平氣で、そして手紙なんかよこすからいけない、全體、軍人と云ふものは社會にあまり意張り過ぎるから、少しそんなことででもいじめてやるがいいと云ふ權幕をも見せた――相談に行つた人もまた軍人であるのを忘れたかのやうに無遠慮に。

『これも面白い』と云つて、大藏は長さんの方を見た。『今夜はこの編輯局はなか／＼多忙ぢや。』

『面白い、なア。』長さんのあくびまじりの返事が大藏には物足りなかつた。

『さうして吉岡はどうしたんぢや？』

『そるだけん、止むを得ずそン新聞記者に直接にぶつかつて、金を十圓ばかりつかませて歸るところを、わたしが電車のうへで行き逢ふと――』

『えい氣味ぢや。一體、吉岡も貧乏なくせに意張り過ぎる。』

『そぎやんこつ！』

『お前は好きぢやろが、おるは嫌ひぢや。』斯う云つて腕の火だこを撫でながら、大藏は出て來たあくびをわざとにも大きくして長さんの方に見せた。目がしよぼ／＼して、涙に曇つた間を、けふはこれだけ人の大事件や大失敗を聽けば澤山だと云ふ滿足が感じられた。そして妻が遲くまで遊んで來たことの憤りやお定のそれに對する注意などは、おぼえてるやうでも、どこへやら行つてしまつて、何よりも早くお靜と二人ツ切りになりたくなつた。そして長さんに乞ふて歸つて貰つたのも、それが爲めであつた。

大藏の家では、佃の人々に對する好き嫌ひの點に於いて、二派に別れてゐた。お靜は子爵の子なる奥野の言葉を通して、先生や、またその細君の母親やを見たが、大藏はすべて長さんを――『そらごつ師』だとは思ひながら――一番近しくしてゐるので信じた。それが爲めに時々夫婦喧嘩が起つたけれども、相變らずお靜はひまさへあれば佃の家へ遊びに行くので、大藏も自分の家にばかり引ッ込んではゐられなくなつた。

畫家夫婦の進行してゐる訴訟事件に就いてとう／＼自分に先生から一度も相談がなかつたのを――自分をないがしろにしたと――恨みに思つてゐながらも、自分は妻に從つてよく先生のところへ行つた。夜などは、その度毎に花を引くのだが、或時、お靜があんまりべたべたした樣子を書生の奥野に見せてゐたので、いきなり、かの女の手を攫んで引きずり歸つて來た。

『あアたはあんまり見ッともない』と、かの女は不平を云つた。

『どッちがあんまりぢや？これからいぐな！』

『では、皆をうちへ來るやうにして下さい。』

『勝手にせい』と云ひ放つたのだが、自分はいやでもあり又望みでもあつた。

それからのことだ、長さんばかりでなく、書生どもが皆毎晩のやうに來たのは。

『今晩は』と云ふ長さんをさきに立てて、皆がぞろ／＼と這入つて來ると、大藏は

『やア、救世軍の諸君!』などと、冗談に氣取つて云ふまでに心がうち解けて來た。この救世軍とは、長さんの説明によると、但先生が冷かし的に命名したので——あんまり所在なしに暮してゐる人間に同情して、いのち掛けさながらに毎晩ぞろ〳〵うち揃つて訪問に出て來ることを云ふのだ。大藏は初め聽いた時自分を先生が馬鹿にしたのかと思つて、ちよツと氣を惡くした。が、よく考へて見ると、自分は履歴書までつけて自分の仕事の運動を人にさせてあるほどの者で、既に二度までも手紙を出したのに、いまだに效果を奏しないのは自分が一度も直接に會ひに行かぬ爲めではなく、向ふでまだ自分に適當なのを發見しないばかりにきまつてた。そして自分は四十圓や五十圓のはした金は取りたくない。して見ると、渠等の同情とは、自分の子供の病氣のことか知らんとも考へたが、渠等は冷淡で、そんなことを一言も尋ねたことがない。すると、この所在なしの人間とは、てツきり、お靜のことだ。お靜は三越か芝居のことでなければ、毎日遊ぶことしか知らない。それに、自分の妻を慰める爲めに人がいのち掛けとは、冗談にも面白かつた。

　或晩、渠が丁度親になつて、見ずの絶對を撒いたところで、どこかへ使ひに行つてた長さんの聲が珍らしくも自分の本門の方から聽えた、

『婚禮だ——婚禮だ!』

『どこだい』と、一名の書生がその方に質問を發した。

『△△さんだ。』
『あの、一週間ほど前に越して來たうちぢや、な』と、大藏はお靜を念を押す爲めに見た。『長さんが婚禮のその場までそれを聽き込まなかつたのは一大失態ぢやないか？』斯う、自分はここの編輯局長たる權威を見せた。
『さう幾ら長さんだツて――』
二名の書生が先づ飛び出して行つた。そのあとで奥野が立つた。
『奥野君、行がないで見ず料を呉れよ。』
『まア、あとで――』
『わたしも見て來う。』お靜も奥野のあとさきになつて出て行つた。
『みんないぎやがつた』と、自分はお定に不平をこぼした。お定は何かいい手を持つたかして、さしでもやりたさうにしてゐる。これを見て取ると、自分は却つて――不利益だと見て――自分の惡い手の札をばらりとうツちやつてしまつた。
『あら、珍らしく手四ぢやつたに！』
『から花ぢやから、みな馬鹿にしとるんぢや。』
『旦那ンさま』と、お定は改まつて、意味ありげなうは目づかひをして、『こんな時ぢや。早う見てい

らツしやい、おかツつアまを。』

『さうか』と云つて、自分もむしやくしやしてしまつたので出て行つた。

本門を出ると、一方は少し地盤があがつて行く里いも畑であつたが、いつのまにか芋がすべて無くなつてるのが可なり深いもやのうちに見える。もう、小袖のかさね着をしてゐても、伊達だとも早過ぎるとも云はれないのだが、つめたい空氣が自分の押さへてゐる袖ぐちから這入つて、兩方のわきのしたに氣持ち惡くさわる。すると、自分では明ばんをつけて直つたと思つてる自分のわき香を、まだ直らぬと云ふお靜の繰り返しごとが思ひ出された。『くさい、くさい』と、人を馬鹿に！

畑に沿ふて、よその門燈の光を手賴りに、多少のぼり氣味になつてる幅二間ばかりの道を歩くと、夜、滅多に出たことのない自分の目がちらついて、うツかりすると、雨に掘れたあとのでこぼこに落ッこちさうだ。

畑の角を曲がると、直ぐ右手三四間のところに人が多く集つて、すべてそのあたまをそこの窓格子からちら／＼漏れる光に照らされてゐた。自分はふと歩みをひそめて、若し長さんがゐたら、その後ろから目隱しをしてびツくりさせてやらうと思つてゐると、一番手まへに見えたのはお靜で――而も脊の高い奥野の肩につかまつて、窓の中をのぞくやうにしてゐた。

自分は忽ちくわツと怒つてづか／＼と進んで行つた。

『いゝ、あアたも――』と云ひかけて奥野から手を離したかの女を、いきなり、なぐり付けた。

『つくしよう！來い』ぐん／＼引ツ張つて來ようとすると、かの女も手を取られたまゝ驅け足になるので、少しも手ごたへがなかつた。默つて踏みとまり、かの女の頬げたを一つなぐつた。ぶツ倒れても物を云はないでゐるのが物足りないので、土の窪みへ下りて、ところかまはず蹴飛ばした。まだ泣きもしなかつた。

『ひどいことすなよ。』長さんがついて來てゐた。その後ろに奥野も立つてゐた。

『……………』大藏は自分一生の權威を示めすのはこの時だと云はぬばかりに、かの女の束髮の根を摑むが早いか、かの女をずる／＼と自分の門の前まで引きずつて來た。そしてそこで手を放して、今一つ蹴飛ばした、『這入れ！』

『………』お靜はなほ無言で起き上り、明いてた門へ逃げ込んだ。

『來んな』と、自分は長さんに云ひ放つた。そしてついて來ようとした長さんの鼻さきへ門の戸をぴしやりと締めた。

『へツ』と、こちらを馬鹿にした聲がそのあとに聽えた。然しそれを氣にする程の餘裕は自分にはなかつた。

『わツ』とお靜が泣き出した時には、大藏も自分の家に這入つてゐた。

着物を泥だらけにして茶の間の眞ン中に泣き倒れてゐる女を見ると、そのそばに突ツ立つて、やツとわれに返つた。そして心持ちのいいほど自由な滿足が得られさうに、俄かにかの女に對する自分のあはれみと愛情とが溢れて來た。自分はかの女を可愛いと思へば思ふほどかの女を泣かせないでは滿足できないのであつた。

『旦那ンさま、あんまりおかゝツつアまをひどい目に逢はせちやいけませんよ。』お定が赤兒を抱きながら、皆の散らかしてあつた花札をかたづけ初めた。それには頓着しないで、

『さア』とふるゑを帶びた聲になつて、『着物を着かへろ。――帶を解け。――また、ふて腐るな！』

『……』かの女は物も云はず、動かうともしなかつたので、自分が自分の手でかの女のよごれた衣物をぬかしてやり、寢どこへもかかへて行つてやつた。

六

その翌日、かの女は身につく物だけを持つて逃げてしまつたのである。立つたりゐたりして夜中の十二時や一時まで待つても歸宅しないので、いよ／＼それだと分つた時には、大藏は地團駄を踏んでお定に當り散らし、次のやうな云ひ合ひもあつた。

『なぜお前が晝間云ふた通りに迎へに行かん！』

『けツどん行ぐさきが――』

『そるからそるへ尋ねて行ぎや！』

そして腹いせにお靜の簞笥や行李を明けて見た。いつか買つてまだその代金を拂つてない長襦袢や、大きな眞珠をまた小いのが五つで取り卷いてる純金の指輪などはないが。その他にいろ〳〵殘つてる物をあちらこちらへ座敷中に投げ飛ばした。そしてゐたたまらなくなつて直ぐ探しに出かけようとしたのを、お定は今夜は、もう、電車がないからと云つて、無理に押しとめた。

そのまた翌日、大藏は赤兒を抱へて早朝から出かけた。先づ吉岡少尉のところへ行くと、かの女はきのふ來たことは來たが、千葉へ行くと云つて歸つた。それで、直ぐ千葉の知るべまで追ツかけて見ると、矢ツ張り來て去つたあとであつた。

夜になつて一先づ歸宅して見たのは、萬一お靜が兒に心を引かれて歸つてゐやしないかと思つた爲めだが、この最後の希望も失せてしまつた。

『どぎやんしようか、お定、國へ行つたと云ふんぢやが？』

『あんまりぢや、な、おかツつアまも――一日や二日なりやこそ、さう何日もぢよんさまをわたし一人ぢや預かれぬ。若しやのことがあつた時、どんな疑ひを受けるか知らなか――人の子を厄介にして殺したなどと？』

『そぎやんこつおりだツておもやせん。』『大藏はお定の意味を斯う自分の善意に解釋した。そして抱き兒に相變らず鹽をまぜたミルクを拵らへて、瓶のゴム口を兒の口へ持つて行つてやつた。暫らく樣子を見てゐたが、『飮むぞ、飮むぞ――ひだりいのだけん。』

子供さへこの具合ひで殘つた二人がやつて行けるなら、お靜の方は當分わざとにもうツちやつて置くのも一策だらう。――かの女に取つては、今回のも去年の春やつたのと同じ手で、結局、再びけろりと歸つて來ると、直ぐまた何か好きな物で納まるにきまつてるから、と云ふのがお定の入れ智慧であつた。

『そるにしても、兎も角一度先生に相談して見たら――』

『おりや好かん。』『吉岡へ行つても、千葉へ行つても、お靜に對する同情の聲ばかり聽いて、自分は叱られたも同樣なほどさん〴〵な冷遇に會つて來たのだ。この上にも、また、あの口の惡い佃から冷かしを云はれるのがいやであつた。

夜が明けるのを待ちかねて、また兒をつれて家を出た。そして第一列車で東京を離れた。

國では、おやぢからまたさん〴〵な小ごとを喰ひ、お靜には泣きつくやうにあたまを下げて、やツとかの女を迎へ歸ることができた。が、家に着くとまも無く兒は危篤に落ち入つた。往き復りの長い旅を、たださへ人間並みでない兒が鹽ばかりを飮ませられた爲めぞとお靜はひどく不平をこぼした。

それも佃の細君に來て貰つたり、かかりつけの院長を呼んだりして、はたからもかれこれ云はれるので成るほどさうかと思へたが、大藏自身では兒どもの狀態に今も旅行前も別に變はりが見えなかつた。

『どうせかたわの兒だけん、死んでも惜しうなか』などと、お靜は淚を流しながらもさう心配らしくなかつた。

兒は兒で、また、泣いても笑つても初めから大して動きはしなかつたので、今となつてどこが特別に惡いのか、大藏の考へでは、恐らく誰れにも分らなかつた。せめてちよツとでも動いて呉れるのが面白いので、以前には眠つてるのをわざ〳〵ゆり起して見たりしたのが、今ではいつも目を見張つてるやうにして、眠りに落ちることがなくなつた。そして、しよツちう、手あしを少し動かしてるので、この點だけは却つて以前よりも興味が多くなつた。

『おい、病氣か？そるとも元氣がついて來たんか』などと、自分はお靜が便を取つてやつてる時に、はたから、兒の赤いそしてぶよ〳〵と手ごたへのない胸をいじくつて見たりした。この時初めて心臟の鼓動がひどいと見たが、骨のやわらかい兒にはこれが當り前なのであらうと思へた。

『さうひねくらんで置きなさいよ、病氣ぢやないの。』お靜もただ斯う云つただけだ。

佃の主人が一度見舞ひに來て、

『醫者が失望しますよ、折角、君等の爲めに苦心してをつたのに』と云つた。

『………』君等の爲めとは何だと云ふ反感が大藏自身に起らないではゐなかつた。なぜなれば、俑はさきに自分の所謂科學的治療說に反對して、醫者が却つてあまい物を用ゐてゐるだらうと云ふことをしやべつた。若しそれが事實なら、何で自分等の爲めにならう？然るに、それを自分等の爲めとは、乃ち、向ふから云へば君等の爲めとは、云ひかたが矛盾しないか？そしてかかる矛盾を見舞ひの言葉にしたのは、人を馬鹿にしてたのだと。けれども、さうは正直に云ひ切れないので、ただ苦笑しながら答へた、『あの院長は同縣人でもありますし、なか〳〵信用すべき人ですが、な。』

『それだから、君はいかんよ。如何に同縣人でも、また如何に君のおやぢさんがちよツと金を貸したことのある人でも、そればかりで安ツぽく信用しちや。』

『何だ、安ツぽい？』つい、むツとしてしまつて、例の奉職口を賴んである政黨員を先生の前でも呼び棄てにして、『松方に金を貸したのもちツとやそツとぢやありません！』

『こりや面白い！』俑はずツと威だけ高になつて、『貸したのは君自身か？――君が僕にさう云ふ氣で反對するなら――』

『………』大藏は先生の怒るのを初めて見てぎよツとした。長さんを二三間も投げた矛術の二段が自分の口の前に控へてゐるのであつた。そしてなほその言葉を繼がうとして、自分の方をくり〳〵した

眼で見つめてゐるのがおそろしくなつた。

『先生はあアたの奉職ぐちのことも御親切に云ふて下さるのですよ。』お靜は口を挾んで呉れた。『あアたがあまり呑氣だけん。』

『僕はなか〳〵』と微笑に碎けて、『君が細君をいじめるやうには行きませんよ。』

『いや、僕の思ひ違ひです。』にが笑ひで一つ、火の上へ輕くあたまを下げて、やッとからだの慄えが收つた。けれども、先生が驕虐的に云つたやうに自分の父親と自分とがさう別々なものであるとは心で承知できなかつた。

『奥さん、くすり瓶を持つて來て御覽なさい。』佃はお靜の持つて來た瓶を直ぐ傾むけて、手のひらに中の物を二三滴たらし、それをぴた〳〵と甞めて暫らく味はつてゐた。『それ、御覽！鹽ッけは少しもない。さうして砂糖分ばかりだ。』先生は自分の妻の方から自分へ鋭い眼を向けて來て、『僕が前に二三度も注意してあげた通り、君の屁理窟と屁のやうな治療法を醫者もよう知つてて、その反對の用意をしてあつただけぢや。結局、今まで醫者にかかつたのが有害でこそあれ、何の爲めにもなつてをらん。』

『まア――ね』と、お靜はあきれた顏つきをした。

『僕は現に角あなたがたの迷信を破りに來たのだから、これで失敬します』と云つて、佃はずん〳〵歸つて行つた。

『………』大藏はじツとその足おとを聽き送つてたが、いい加減になると、また惡くちが云ひたくなつて、『あいつ、意張つてやがる、なア。』
『をアたこそ――けツどん、先生もちツと云ひかたがひど過ぎる。』
『失敬ぢやなか』と云つて、自分もかの女に十分共鳴するところがあつた。
お靜は然しその後、もうどうでもいいやうに斷念してゐたので、自分もとう／＼その氣になつた。病兒のことを頻りに世話したのはお定ばかりだ。

七

いよ／＼死兒となつたので、染井の、巣鴨に近い寺で葬式を行なつた時、大藏が親族席から來賓を見ると、佃夫人を初め、近處から來た婦人どもが皆泣いてゐた。女が泣くのはまだしもだが、長さんや奥野までが人の見切りをつけた物の爲めに目をしよぼ／＼させるのが自分にはをかしかつた。親族席はと返り見ると、自分等夫婦のほかには、吉岡少尉と、その母なる自分の叔母と、千葉から來た藝者屋のかみさんとがゐて、矢ツ張り、泣いてた。が、殊に吉岡が軍服を着て涙をまぶたでぱち／＼胡麻化してるのが自分のこらへてゐた笑ひを誘ひ出した。
「おい」と、然し、少しは遠慮した聲で、『君は軍服を着とるんぢやぞ。』

『……』隣りから默つて自分の袖を引いた者がある　驚いてふり返ると、自分の妻であつた。いつのまにか目を眞ツ赤に泣き腫らしてゐる。これを見ると、自分も初めて少し涙がこぼれた。

燒き場へは自分は失敬して、長さんについて行つて貰つた。そして翌朝の骨あげには奥野を頼んだ。

『ちツぽけな物になつて來た、なア。』可愛いと云ふ感じを籠めた聲で斯う云つた時には、自分はまだよく抱き慣れてた通りの生き物を圓い風呂敷包みの中に期待してゐた。が、直ぐ包みを自分で解いて見ると、また白い包み物であつた。こんなに二重にも包んであつては、さぞ息がしにくからうと思ひながら、またその白ぬのを解いて見た。すると、こんな物は自分として初めて見るのだが、素燒きの壺であつた。で、ここにやツと自分で自分に確かめることができたのだが、骨なしなどと佃夫婦に惡くちを云はれてゐた兒が――自分のあんなに熱心に、特別な科學的治療法を施してやつたにも拘らず――とう／＼死んでしまつた。壺を前にして見つめながら、今一度おらべ、ならべ、泣け／＼と云つて見たかつた。『可哀さうに、なア。』

『もう、見たうもなか、しまつて下さい。』

『……』自分にはお靜の言葉が死んだ兒に對して餘りに冷淡過ぎるやうに思へた。返事を與へないで、自分は直ぐ壺のふたを取つて見ると、中にはから／＼した骨のこまかくなつたのがある。妻その他のものにも對して死んだ兒を辯護する爲めに、『そる見たこつか、ほねなしならこぎやん物なか！』

『あつても、どうせかたわなら――』

『腦の骨はどれぢやろか？』いきなり手を突ツ込んで、最も多く自分の治療の利いてゐさうなくづを取り上げた。

『きたない、およしなさいよ。』お靜は溜りかねたやうに自分の手を抑さへた。

『何のきたないかこつがある、鹽やミルクのかたまりぢやないか？』斯う云つて、それを自分の口に入れてぼり〱かじつた。そしてまた直ぐそれを自分の火だこがひどくなつてる手のひらへ吐き出した。

そして呆れてる妻の顏を見てまじめに笑ひながら、『けツどん、鹽からくはない。』

――（大正七年十月）――

公爵の氣まぐれ

われは明治維新の一功臣であるといふこと――木戸、大久保の繼承者であると云ふこと――日本憲法の起草者並に最初の釋義者、實現者であつたと云ふこと――一大政黨の總裁であつたと云ふこと――大勳位、公爵であると云ふこと――すべて斯う云ふことが渠の平生の氣ぶんをして緊張と滿足との絕頂に達しさせてゐた。上御一人を除いては、あらゆる人間は自分の眼下に在つた。山縣はただ軍人の長者のみ、大隈は口舌の雄に過ぎないではないか？最近には、かの韓國全體と云へども自分の指一つで左右することもできるのである。日本歷史をさか登つて行つても、自分がこれぞと思つてぶつかれるのは豐太閤の外にはなかつた。

『わしのこの飄輕な顏だけを見ても、あの猿面冠者の生まれかはりぢやと云ふことが分るではないか』と云つて、夫人を笑はせたこともある。

『まさか』と、かの女はこちらの意味を十分に理解しないで、微笑しながら否定して答へた、『御前さまには秀吉よりは男ツぷりはすぐれてをられます。』

『は、は、は！それで若い藝者なども惚れ込んで來るのか、な？』

『それはどちらとも受け合へませんが――』

さうだ、それは確かに受け合へるべきではなかつた。死んだ黑田が云つたツけが、いたづらをしさうでしないのは大隈、しなさうでしてゐるのは山縣、そしてしさうでその通りするのは伊藤だと。これを思ひ出すと、確かに黑田は自分の知己であつた。否、この三名に共通の知己だ。山縣は實際にその品行にかけては不正直で、まるで濶達ではない。あいつに比べると、大隈や自分は正直なものだらう。けれども、大隈にはまだ理論上の偏見があつて、それに自己の自由な行動を妨げられてるだけ、正直でも濶達とは行かない。ひとり自分に至つては濶達自在である。

自分は兵庫縣知事をしてゐた時代よりして、幾百人の女に關係して來たか分らない。そしてゐかけ同樣にしてゐる藝者でも、いやになるとその度每に金を與へて別れた。殊に、老年になるに從つて若いのがよくなつて、而も一週間ぐらゐにはそれを交換するやうにもなつた。世間はそれをあること無いことに誇張して面白半分に攻擊し、自分もその攻擊を面白半分に聽いてゐるのが愉快であつた。それが爲めに、自分は却つて人間としての若々しい元氣をいつまでも維持することをこそ得たのだが、少しも自分の責任を怠つたことはない。否、自分の國務上の障害を來たしたことはない。豐太閤はまだ淀君の爲めに事業の停滯を來たさしめられたかも知れないが、自分はどんな女にでも――たとへ

ば、かの光明にも、――わづらひを感じたことがない。寧ろ自分に對する新聞の艶種的揶揄や攻撃が自分の爲めには唯一の安全辨になつて、自分の國家的盡力はすべて破裂もしないで無事に伸張して行つたやうだ。

『わしが一番困つたのは、御維新の際に於ける馬關砲擊事件でもない。條約改正問題の場合でもない。日淸講和の際の三國干涉と日露講和の條件とぢや』と、貳人に白狀した。三國干涉の際にはどうしても三國の忠言、と云ふよりも威嚇を容れないでは、國があやふかつた。この時の苦衷は白耳義の外務總長で男爵なるラムベルモンに同情ある知己を得て滿足したのだ。が、日露講和の際には、軟論が却つて軍人がはより出てゐるのを知らない世人は、自分をばかり軟論の代表者だと見て頻りに彈劾した。あの時、話せるのは兒玉ばかりだと思つたので、あの行者めいた飯野を使ひにして奉天まで行かせ、講和談判地をポーツマスから大連に移し、兒玉と自分とが委員になつて談判をやり直すことを相談させたが、時機が旣に後れたのだ。それだのに、自分には最も多くの記念をとどめる土地の一つなる兵庫縣に於いては、神戶の諏訪山に建つてる自分の銅像を引き倒して、而もそれを多くの人々のふんどしをつないで以つて引きずりまはつた。

『御前、如何にも怪しからんではございませんか』と云ふ、その報告を聽いた時には、自分もちよツとかかる忘恩的行爲を貰つたけれども、考へて見ると、これも一つの安全辨であつた。如何にあるこ

と無いことの艶聞が多い自分の銅像だからツても、これをふんどしで引きずりまはすとは怪しからん
が、それが自分の身がはりになつて吳れたので、とう〳〵時局は無事に納まつて行つた。
その後、この話が再び家族的な食卓にのぼつた時であつた、
『わしはポンチ繪の材料には極都合のいい政治家ぢやらうから』と云つて、寧ろ得意に滿ちた微笑を
漏らして見せた。『皆もわしほど濶達にやつて吳れたら、日本の政治もすら〳〵と行くのぢやが、なー
ー』
「外國で申せば、御前は、まア、獨逸のビスマルクでございませうか？」
『そりや昔はさうぢやらうが、今ぢやア先づルウズベルトぢや、な。』
斯う云ふ場合に、渠は自分の聽き手が『成るほど』とか、『如何にも』とか、素直な返事をしてゐな
いと不機嫌であつた。その代り、自分の思つたことも素直に語つて、少しも取りつくらふことをしな
かつた。
『どうも——山縣とわしとは同じやうに國事に奔走して來て、同じやうに天皇陛下の御寵愛にあづか
り、同じやうに爵位も進んで來たのに、ただ一つ癪にさるはることがあつて溜らぬことには、向ふは
軍人であるから、宮中で出會ふても、停車場で出くはしても、帽子を取らないで片手を擧げる。それ
ができぬわしには、いつも侮辱をさへ感じられるのぢや。』渠には、自分が非上侯らと共に初めて英國

に習學した當初の目的通り、海軍の研究にとどまつてやつて來たら、今頃はとツくに海軍の方で元帥、大將になつてゐたのであることが分つてゐた。それだのに、山縣や東郷を初めとして、その末輩までが誇りがほに擧手の禮を以つて無腰の自分を侮辱するやうに思へないでもなかつた。從つて、かかる禮を受ける時は、こちらも生眞面目になつていつも武士的に向ふを嚴格に睨み付けてやつた。

ところが、たま／＼韓國統監として赴任することになつてから、こちらも多少古武士たることを示めすに足るの服裝なる統監服と式刀とが定められた。腕には金すぢが四つも附いて、帽子もいつも被り馴れた大禮服のやシルクハツトやでなく、軍人のやうに圓く平たいのであつて、これにも金すぢがまはしてある。そして腰には、而もがちや／＼云ふ劍をさぐることができた。けれども、その劍だけはその形がちよツと自分の氣に入らなかつた。大禮服につくのと對して違ひはなかつた。できた規定の上では、海軍の式刀に準じて造らるべき物だが、その長さが餘りに無くて、何だか見すぼらしいと思へた。そこで自分は、規定には反するが、もツと長いのを自分が寸方まできめた。『それでもよろしうございませうか』とためらつた者に對して、よしとその責任を引き受けた。海軍のに準じたのも自分自身の好みに從つたのであるから、それを長くするのも自分自身の好みでかまはないと云ふつもりであつた。そしてその中味としてはこれも自分の持つてる唯一のわざ物、備前三郎國宗の銘がある一刀を入れることにした。

『これでわしも滿足の上滿足ぢや、これまで全くいつも文官じみてをつて、山縣などに逢ふても、どうも肩身が狹いやうでいかなんだが――』と云ふことを、初めてその出來上つた式服を着用して見た時に、かたはらでその世話をしてゐた夫人に向つて語つた。すると、かの女は斯う注意した。

『御紀念の爲めにこの姿で先づ寫眞をお取りになつたら――』

『……』渠は自分の夫人にみなまで云はせずに、『さうぢや、直ぐ呼んで來い――お前と一緒に取らう。』

『では、わたくしも式服に着かへてまゐりますから――』

渠はかの女の俄かにいそ〳〵して行く後ろ姿をちらと見送つて、婆アさんながらも、矢つ張りいつも相變らず自分の喜びを共に喜んで呉れる心根を賴母しく思つた。自分が今度韓國へつれて行かうと思つてる靜子などに比べると、手れん手くだも拔きでまるで色も褪せ、艶も消えたしろ物ではあるが、自分のながねん連れ添つて來た女房としてあれでいいのだと思つた。

寫眞屋の來るまで、夫人の着かへができる間を、暫くでも四賢堂で例の嚴肅な沈思默考に耽つてゐようと考へたので、渠はゆるやかに歩みを洋館のそとに運んだ。そして自分らの住居の敷地よりは一段低くなつてる庭園へ下りて行つた。

前方一帶の松ばやしを越えて相模灘、と云ふよりも寧ろ太平洋、の海かぜがうすあツたかく吹いて

來て、自分の頬に當り、自分の頬ひげあごひげをもいたづらさうに撫でる。が、世界を相手にして既に韓國を處置して來た自分には、その風までが自分の赤ン坊のやうに可愛かつた。そして、ふと思ひ浮べたことには、またこの大磯の小學生徒を集めて、この姿を見せてやり、

『このおぢイさんはまた天子さんのおん云ひ附けを受けて、韓國へ行かねばならぬやうになつたが、今度は全く別な役目で——韓國統監と云ふものができました』と云ふことを演說して聽かせてやりたかつた。

斯う云ふ無邪氣でゆツたりした氣ぶんを感ずる時に限つて、渠は自分の經驗では、自分のからだぢうの毛穴までがすツかり口を明けて天地自然の靈氣を呼吸してゐるやうで——今や丁度この庭內にほころび出してるところの梅ばやしの馥郁たるかをりが、洋々たる大海のうしほの香とまじり合つて、自分の鼻を衝くのが乃ちその靈氣であるやうだ。そしてけふは去年とは格別にその氣持ちが違つて、また日に日に進んで新らしくなつてる氣がした。それが『なんだか自分の度々取り換へる女のやうぢや、な』とも考へられて、ちよツと微笑した。この時、口にくはへてゐた葉卷きの灰が落ちたやうであつたから、立ちどまつて、その葉卷きを左りの手に受け取つて、自分の胸を見ると、眞ツ黑のつやある羅紗の一部がちよツと雪のやうに眞ツ白になつてゐた。この高價な煙草の結果を見よと、不斷ならわざとにも拂ひ落さないで伊達をきめ込むところだ。が、まだ陛下にも見せ奉らぬのを少しでもよ

としてはと考へたので、われ知らず右の手の指さきを揃へてその灰を自分の胸から拂ひ落した。この時、左りの手はできるだけからだを離れてゐた。

すると、その煙草のかをりがそれだけ鼻から遠ざかつたそのあとをも、また天地の氣が滿たした。

『御前のお鼻の穴は隨分大きい、わ』と云はれたことのあるその鼻の穴を、自分は一層大きくして、こころよい呼吸をした。そして再び歩き初めると、今までふと忘れてゐた武力が自分のずぼんの足に當つてがちや／＼云ふのが溜らなく嬉しかつた。

靈妙な天地に對して、またいともありがたい陛下に對して、自分は詩人政治家として一句なかるべからずと思はれた。けれども支那くさい、『天地靈妙の氣』とか、佛じみた『世々生々みな緣あり』など云ふ五言または七言の詩句は、もう、自分には少しも新らしくなかつた。『そんな陳腐な、据ゑ置きの、ゐざりじみたやうな句は眞ツ平御免ぢや』と云つて、詩才のない詩人〇〇の作をひやかしてやつたツけが――。

斯う云ふ方へ自分の考へが向いた時には、渠は自分の意匠で三年前から自分の默想室としてこの梅林の間に建ててある、方九尺の四賢堂に這入つてゐた。

その中央には、榊を活けてある花瓶を乘せた一個のテイブルと一脚の椅子とがある。そこへがちや

がちやがちやと云はせて進んで行き、いつも通りどツかりとその椅子に腰をおろす時、帶劍が今一度がちやりと云つたのがいつもとは違つてゐた。

先づ、南方の壁にかかげてある『四賢堂』と云ふ皇太子殿下の御筆を仰ぎ見てから、渠は自分の目を東西の壁に移した。そこには、三條、岩倉、木戸、大久保の四公の肖像がかかつてる。これは、曾て新らしく來た秘書役に向つて、

『わしの身づから以つて先輩と稱讚し信敬するところの人人で、四人とも各々その性質や傾向は違うてをつたけれども、みなわしの畫策を最もよく採用して呉れた』と、自分が云つて聽かせたことのあるその人々だ。今や自分は獨り自分の父にでも向ふやうなあまへた心持ちになつて、『どうか皆このわしの使命上また新らしい服裝を見て貰ひたい』と云はぬばかりであつた。

自分は内閣總理大臣を設けて其最初の總理になり、樞密院を設置してまたその最初の議長になり、帝國議會あつて初めての貴族院議長になり、また初めて政黨らしい政黨をまとめてその最初の總裁になつた。この最後の場合などは、殊に陛下の内閣に向つて公然と反對しなければならぬ境遇に立脚したが爲めに、わざ〳〵伊勢の大廟に參拜して、自分に私意があるのではなく、實に國家の爲めの誠意と覺悟とからであることを誓つたほどで、——多くの人は知らないが、自分はその時、諸官職を投げうつてかかつたばかりでなく、自分が陛下から特別に頂戴した爵位までをも拜辭したのである。が、

これだけはお聽き屆けにあづかることができなかつた。

今回の使命たる韓國統監も、亦その下地は皆自分で切りひらいて來たやうなものだ。先づ、明治三十七年日露開戰早々には、韓皇帝慰問の特派大使を務め、次ぎにその翌年、日韓新協約の締結の爲めにまた特派大使となつた。その結果が遂に今回のだ。

ひる返つて、またかの廢藩置縣の廟議決定までのことを考へて見ても、自分は明治元年五月、兵庫縣知事を奉職中、『國是の綱目』なる一文を草し、何禮之をして多少文章上の字句添删を爲さしめ、これをふところにして陸奥宗光、中島信行の兩人を從へて、京都にのぼり、時の政府に出頭してこれを提出した。座には三條、岩倉の兩公を初め、西鄕、大久保、廣澤、後藤等もゐた。そして後藤が例の無頓着なおほ聲を擧げてこちらの提出書を讀み上げたが、一人として可否の論を云ひ出すものがなかつた。當日は恰も宮中に於て御祭典があつたとかで、渠等、議定や參與の面々もいつのまにかその方へ行つてしまつた。そして取り殘されたのはただ自分と陸奥、中島とであつた。あの時ほど憤慨したことは珍らしかつた。誰れもゐないのを幸ひに、そこへ聖上から參與職一同にとして賜はつたところの重詰めの御料理を、三人で勝手にむしや〳〵やツ付けてしまつた。

渠等は恐らくこちらどもが國家の大事を建白するなどとは生意氣だと思つたのだらう。けれども、その前、正月の下旬には、既に木戸公が自分を訪ねて來て、王政復古とは決して各藩所領の一部を朝

廷に獻納すると云ふやうな姑息な處置ではなく、各藩その物を廢止することに理解を有してゐた。岩倉公がまた自分の云ふことを重んじるやうになつたのは、自分が維新早々、外國官判事兼大阪府判事を拜命した際で、自分の說が渠の信用する儒者玉松操の『維新の方針は一に建武中興の例に依るべきでない、須らく神武東征の例に則るべし』と云ふ說に符合した爲めだ。且、自分は三條公にも大久保にも特殊の知遇と關係とを有してゐた。

斯うして自分は朝廷と薩長兩藩との意志を疏通させることができたのだが、それがまた官僚となつても朝廷と國民との疏通を計り、政黨を組織してもまた國民と皇室との疏通に努める一途しかない所以になつた。今やまた國運と共に發展して、自分はわが皇室と國民とに韓國を疏通させようとしてゐるのだ。一匹夫から起つてます／＼天下の重大事に當ること、如何にもありがたく、如何にも滿足であつた。

夫人が丹念に取り換へて置いて呉れたらしい卓上の花瓶なる新らしいあの榊をぢツと見詰めながら、

『何かいい句を得たい』と考へた。ところが、ふと近ごろ珍らしくも思ひ出したのは、自分の舊作中の一句だ。

『一條の　鐵路、工　まさに　起らんとす。

八箇の　砲臺　きづきて　中ば　成る！」

これは明治二十一年、西郷從道と共に露領浦鹽の視察に行つた時の感じで、——極東問題の中心としてシベリヤ鐵道はまことに自分等の最大恐怖であつた。が、その後これができ上つて見ると、日露戰爭に於いても、左ほどおそろしいものではなかつた。

すると、また日清戰役の際に成つて、さきの『一條の鐵路』と同樣に世間に持て囃された自作逸題の長篇詩の最初の數句が浮んで來た。

「大風　吹き起す　渤海　の　浪、
朝鮮　八道　戰塵　颺る。
憐むべし　小邦　外侵　に　困しみ、
千里　の　山河　城障　を　空しうす。
日東　の　天子　蒼生　を　憂ひ、
直ちに　三軍　を　發して　遠征　に　從ふ。』

征服は國威の發揚であり、國威の發揚は乃ち天子の蒼生を憐みいつくしむ愛のおほ御ごころに歸することが、今や自分にも、維新以來、段々と分つて來たのである。

けれども、自分の舊作の思ひ出には左ほど興味がなかつた。そして多少あぐんだ心が自分の目をお

のづから北壁の方に向けた。そこには、三島中洲翁の起草と揮毫とを煩はした『四賢堂の歌・伊藤公の徽に應ず』と云ふ七言二十二句の額をかかげてある。『條岩二公搢紳の傑』とか、『尤も推す木保兩侯の賢』とか、『我が藤侯あり民望に協ふ………侯を併せてまさに五賢堂と呼ぶべし』とか云ふのは、全く事實的な頌贊の言であるからそのままでも仕かたがない。が、『或は珠玉の如く、或は金鐵』や、『房杜の功業』や、『首を回らせば天釣』云々やは、惜しいことには、いつも自分が考へる通り、陳腐だと思はれた。

もツと云ひやうがあつたらう。蓋し自分には自分の行きかたがあると云ふ自信がおもてに現はれると、美人がわれから美に見とれるやうに、また音樂家がおのれの美聲に聽き惚れるやうに、自分も誰れに聽かせるとはなしに、自分の最近の一作を低唱微吟して見た。

『治亂　誰れか　言ふ　兩途　ありと、
脩文　講武　是れ　良謨！
胸中　畫する　ところ　他策　なし、
韓山　の　草木　を　して　蘇らしめん　と　欲す。』

これは昨年の十一月、新協約調印の爲めに韓國皇帝と四時間にも渡つて大きな論判をした時の自分の意氣込みと誠意誠心とを示したものだ。

そして今度こそはいよ〳〵韓國全體を殆ど全く自分の目したに蘇らしめるのだと思ふと、その反對に、わが今上陛下のお姿がますますありがたく、ます〳〵かう〴〵しく、自分のふかす葉卷のけむりの正面に見えて來た。すると、また、その一方には、自分に大勳位や最上爵位を賜はるその懷かしみとは全く別種の懷かしみのある高杉晋作のおもかげが現はれた。これは維新の際、長州人としては才學群を拔き、前途有爲の士であつたが、東奔西走の結果、不幸にして肺を病んで夭折した。が、自分の幼名なる利助を訓が同じいからと云つて俊輔に改めて呉れ、俊輔の音が相通ずる爲めだとて自分の雅號を春畝名づけて呉れた人だ。一方に詩人を以て任ずる自分には、時に春畝の雅號の方が大勳位公爵よりも結構なのである。

けれども、自分の詩は政治と思想的趣味とがぴツたり合つた時でなければいいのができぬやうに思はれた。そして今の自分にはどうしたものか、その合體狀態が湧き出て來ないのであつた。

葉卷きを口から取り放して、堂內にまでも流れ來たる梅花のかをりを鼻から吸ひ込んで見ながらも、いつのまにか、また手の煙草が口へ行つてゐた。そしてその鼻さきなる紫のけむりの中に見えて來るのは、大隈の圖ぬけて大きな顏や、自分の一心同體で顏はもツとすツきりしてゐる西園寺のやを初め、維新前後から自分の奔走上接觸して來たえらい人物どもばかりではなかつた。十二の時、奉公さきの主命を帶びて自分の家門を通りかかつたので、餘りの寒さをちよツと凌がうとして家に立ち寄

つたら、

『不心得千萬ぢやがの』と自分を叱責(じつせき)した慈母の顏もあつた。

『愚痴(ぐち)とよわ音は禁物ぢや』と云つて、寒中にも草履をはかせなかつた恩師來原良藏のぶッ裂き羽織に靴ばき姿もあつた。

また、傲慢若しくは偏見はありながらも、隨分わが國の爲めになつたパクス、英國最初の公使や、シイボルトやフルベキ氏も現はれた。また、最初の歐洲行きの際、運上所(うんじやうしよ)などへ知れないやうにこツそり世話して呉れた横濱なる英吉利一番の商館員ガルと云ふ人や、この人が紹介した帆前船(ほまへせん)の船長で自分らにうじの湧いたビスケツトを喰はせた何とか云ふ外人も――。

また、前後四回の歐洲行きに於いて、自分が直接に敎へを乞ふたり、會見したりした人々で――ロンドン大學の化學敎師キリアムソン――白耳義の世界的外交通であつたラムベルモン――獨逸へ行つた時、音樂研究の天才田中正平の安否(あんぴ)を尋ねて自分を困らせたカイゼル――自分を賓客として受けた英國當時の首相ソルスベリ卿――。それに、また、講和使として來た李鴻章や、征伐のした心で日本の視察に來たクロパトキンも。

まだいろ／＼な人物や事件(じけん)が自分の目の前を往來して、すべてそれが、

『お前はえらいぞ』と大鼓を叩いて呉れるやうなのだけれども、――そしてそのどんごこ云ふ響きが

よく自分の胸にするのだけれども——餘りにうるさくなつたので椅子から立ち離れた。すると、不慣れの爲めに忘れられてた帶劍がまた腰にさがつてがちやりと云つた。その中味を何げなく拔いて見て、自分がこの年になつて再び劍を帶びるやうになると、今までは人にあざ笑つてゐた刀劍趣味も、萬更ら馬鹿にしたものでなとやうに思ひながら、自分の國宗の冴えた燒きやにほひに見入つたのである、すると、また、今度は他人の顏でなく、自分のそれが研ぎ澄ました峰のところに寫つてるのを發見した。

『なんだ、こんな猪ツ鼻に！』さうだ、わしに若いのが惚れて來るのは確かに、自分の夫人が逆に冷かした通りだ、男ツぷりのいい爲めではなかつた。すると、今度はかの光菊を初め、自分のこれまで關係したいろ〳〵な藝者どもの顏が見えて來た——お○も、○子も、また○○なども。長崎の藝者——京都のそれ——神戸、大阪、東京、京城などの——。

そしてその間にまじつて、鹿鳴館で西洋の舞踏模倣の盛んな時代に、自分とあらぬ浮き名を立てられて、こちらは面白かつたが向ふは大變困つたと云ふ、立派な女子教育家なる婦人の端麗な姿や、これはまた自分が失敗した某子爵の若い令孃のはだしで逃げる樣子も見えた。

けれども、そんな女どもよりも、あれだ！あの、自分が兵庫縣知事をしてゐた時に、まだ盛んな若氣と志士的向ふ見ずとを以つて、ぞツこん惚れ合つたあの藝者だ！あれと共に聯想されるのは伊東己

代治であるが――あいつも藝者のやうな名を附けて貰つてるだけあつて、なか〱面白い奴であつた。自分の門前に三日三晩もうづくまつて、書生に置いて具れなければいつまでもそこを立ち去らぬと云つた。その、自分に對しての痛快なうち込みかたを、自分はまたそツくりあの藝者に向つて再現したツけ。いつも已代治を伴につれて行つて、三晩も四晩も續けざまに痛飮した。

『三千五百の

　からすを殺し、

　あさ日出るまで

　寢て見たい。』

これは自分の作で、かの女に對する意氣込みであつた。あの時には、わが國の人口はまだ三千五百萬と云はれた。それでも、政治上の不言實行をする爲めには矢ツ張り今日と同樣にうるさかつた。その爲めずツとあとになつていツそのことにと思つて身を政黨に投じて見たのだが、日本の人口が增加し、日本その物が發展すると共に、自分も亦それにつれて大きくなつたのだ。

『えい！』一つ氣合ひをかけて、拔き身を一と振り振つて見たけれども、妄像はなか〱そんなことでは拂ひ落せなかつた。刀を鞘に納めてから、卓上のはじに置かれてる煙草を再び取つて、堂内を一直線に行き來して見た。が、それからそれへ――それからまた――。自分ながら、うるさいのを通り

越して不快になつたけれども、妄像はます〳〵止めどなくその數がふえて來た。

自分が話に聽いてるマカルトと云ふ畫家は、その一度でも使つたモデルの顏をよくおぼえてゐて、それを幾人でも必要な場合には再びその記憶から呼び出すことができた。その時まではまだしも便利であつたが、しまひには。必要もない時にでもちらちらと目の前に現はれるやうになつた。一人や二人づつではなく、一ときに四十人も五十人もだ。それがうるさいので自分で自分を逃げまはつてたが、段々そのうるさゝが苦しみと變じて、とう〳〵それから逃げるところがないと云つて死んでしまつた。で、自分もマカルトと同樣な氣違ひになつては溜らないと思つた。

『わしは氣違ひではないが、滿心の結果かも知れぬ。』けれども、こんな經驗はこれまでにも度々あつた。そしてかかる場合には、國務に關係ある來客があつて、それとの話に自分が緊張して行けば直つた。然らざれば、また、一句を得て、それを五言なり七言なりの詩に作り上げてゐればよかつた。

今は、然し、生憎そのどちらのきツかけも無いのであつた。西園寺でも尋ねて來ればいいのにと思はれた。

そこへ、ふと。またけむりの中へ現はれたのは、一つの青ざめてゐる而も素直な顏だ。實は、これが一度は藝者と共に、今一度は大きな實業家と共にも出たが、今は最後にそれだけで他を壓殺したかたちだ。それが誰れの顏であるか、ちよツと自分にも思ひ出せなかつた。死にがほとしては餘りに素直

であり、活きてゐる者としては色が青過ぎた。自分はそれを暫らくぢツと見つめてゐたが、『こら、おぬしは何物ぢや』と一喝してやらうとすると、直ぐ消えてしまつた。同時に、又、他の多くの妄像も全く消えてしまつた。何だか急に寂くしなつたやうな氣もしながら、はて、不思議だと小首を傾けてゐると、自分でも和らかいと思へる微笑のうちに思ひ出した、思ひ出した——死人でも他の人でもない、自分がよく行く熱海の溫泉宿の若主人の顏であつた。

その繼母が何でも申しわけがないと悟つて咽を突いたが、突きそこなつて、その傷を人に見られたくない爲め、そとへ散歩に出る時などあみ笠をかぶるやうになつてからは、あの主人も少し氣が落ち付いて人間らしくなつたやうだ。が、死んだ實業家雨の宮が——さうだ、こいつと一緒に現はれたのだ——あれを曾て何とかしてやる法はないかと云つて來た頃には、あの主人の養父は餘りにその女房に迷ひ込んでゐた。家つきの娘とその養子をおツぽり出して、無理にも女房のつれツ子をあと取りにしようとしてゐた。つれツ子がまたどこの馬の骨か分らない外國人の血を受けてゐて、無慈悲と云はうか、非人間的と云はうか、若主人夫婦を折があらば殺しかねなかつた。若夫婦はその寢どこへピストルをうち込まれでもしないかと云ふ心配から、夜、椽がはの兩端へ澤山の椅子を重ねて置いてからでなければ眠らなかつたさうだ。

或時などは、家にある、否、熱海中にただ一つあるトルコ風呂の中へ這入つて、ふたり死なふとし

た。

『ふ、ふん！きやつらもうまいことを考へたものだ。』實際に、あのトルコ風呂へは物の十五分とは這入つてゐられないことは、自分も一度試みて知つてるが――あすこで蒸され死にをすれば、苦しみを知らないで極樂淨土だツたらう。雨の宮やその他の人の奔走甲斐があつて、――反對に自殺しかけた繼母にはちよツと氣の毒であつたが、――兎に角、つれツ子は家との關係を絶ち、おやぢも心を入れかへるやうになつたのは結構だ。『若主人にも暫らく會はない――』が、きやつも萬更らの素町人ではない。その實母は最後の江戸ツ子武士とも云へる榎本武揚の大使の世話までしてゐたことがあると云ふから。

こんなことを考へると同時に、渠は自分の新調服と帶劍とを先づこの若主人に見せてやりたくなつた。そしてその一途にばかり心が向いたので、默想も詩作も中止にしてしまつた。

再び劍をがちや〳〵云はせて四賢堂を出で、急いで本館へ行つて、秘書役のものに東京なる統監附き武官村田少將や藝者の靜子へ電報を打たせた。そして夫人にはかの女との寫眞撮影をすませてから、改めて、『今から熱海へ行く』と申し渡したのである。

『もう、秘書から伺つてをります。』かの女のすげない答へには、こちらの浮き〳〵してゐる心には少しもそぐはなくなつてゐた。

『………』また！燒き持ちらしいことは禁物の一つにしてあるからだらうと受け取れた。

『御服裝は？』

『このままでよい。これに大勳位の略章と韓國勳章とをつけて行から。』

*　　*　　*　　*

熱海への途中では、なほ滄浪閣に於ける妄像の殘黨が――たとへば、イムペリアリズムを帽子の名のやうなアンペラズムと呼び違へた頑固黨佐々友房の殘黨の如く――渠のあたまにつきまとつてゐて、その仲間にまじつてまた青い顏も、渠の讀みつつあるロンドンタイムスのおもてに度々見えたり消えたりしてゐた。

が、この鐵道人車發着所へ到着して見ると、その青い顏の持ち主なる末三郎も例の如く迎へに出てゐた。

『やア、達者か、の？』渠は自分の近い親戚にでも接する氣ぶんであつた。

『よくいらせられて下さいました。また、この度はまた韓國統監とかにお成りなさいまして、お目出たう存じます。』二度三度に叮嚀なお辭儀をした。

『………』自分は先づそれを末三郎に云はせたかつたのであるから、十分滿足の體を示した。且、お辭儀をする時に向ふが既によくこちらの違つた服裝をも見ただらうとは考へながらも、わざと自分の

帶劍を地上に引きずつて、口からはゆつたりとしたむらさきけむりを吹かせながら、人力車の用意をしてある方へずぼんの歩を運んだ。『ここでは、もう』と、車の上に重いからだをどツかり据ゑてから、『梅花も盛りを過ぎたぢやらう、な。』

『はい。然しまだ少しは殘つてをります。』

『……』その殘ると云ふ言葉が面白くなかつた。自分には、ここの氣候が特別にあたたかいので——これは實際に特別なので、——もう全く散り切つてしまつたとありたかつた。四賢堂に於けるけふの梅が香を思ひだすと、その中に浮沈した例の妾像どももまだ散り切らないやうな氣がするのであつた。

* * * *

けれども、何だか樂しい氣ぶんにうち勝たれながらゆふがたの町を宿につくと、渠は直ぐ電燈のもとで自分の式服をぬいで、ゆツくりした和服になつた。この時初めて氣が付いたのだが、自分は何の爲め用もないのに統監の服をこんなところへ着て來たか分らなかつた。そして陛下に對しても相濟まぬやうであつた。

『さア、今夜は無禮講を許す。皆、一緒に飲め』と云つて、付き添ひ武官や秘書、その他と共に晩酌を初めたのだが、靜子の顏を見てゐるので、やツと、ぷツつり、うるさい妾像どもから遠ざかること

ができた。かの女は自分にはまるで魔よけのやうなものであつた。いや、あの計へ切れなかつたほどの妄像はすべて、本年取つて十七歳なるかの女一人の顏を早く見たかつたばかりの御叮嚀な前ぶれであつたことが、今更らのやうに了解された。氣のせいか、今夜の闇を照らす光がまた格別にかの女をあでやかにしてゐるやうであつた。女としては特別に色が白く、肉體が豐富で、その肌もつる／＼と羽二重のやうなのを私かに思ひ出してゐたのだが、而もまたかかる女には珍らしいほど上品で素直だ。

『御前――お酌』と云つて、顏をぽツと赤めながら、手ぎはよく酒をついで呉れるその兩手を袖くちから、こちらが拵へてやつた赤地に四君子を白く染めぬいた長襦袢のはじが見えてゐた。衣物の紋や裾模樣には、また、かの女はこちらのさがり藤をつけさせて呉れろと云つたのだ。が、それは斷乎として許してやらなかつた。蓋し、自分はいつも人に斯う云ふのを常とした、

『わしのつれてくるのは女房でも目かけでもない。藝者ぢや、何も遠慮は入らんから、勝手に酌をして貰へ。』

藝者を藝者として寵愛することは、自分は陰險な山縣や耶蘇教くさい大隈とは違つて、昔から少しも恥ぢとしない。儒教や神道では、また、正當な理由を以つておほぴらに妾を畜はへることをも許してある位だ。これを野蠻などと稱するは、外部から取つて附けた理窟や先入見に過ぎない。その代り、自分はかの女の酒席の斡旋をまでも獨占しようとはしない。だから云はば、公平に人々の酒席を

斡旋させてる女に向つて自分の大切な紋どころを與へるなどとは以つての外であつた。『わたし、御前さまの奥がたになりたい、わ』などとあまへる時があつても、自分はうそにもさうしてやるとは答へなかつた。

けれども、自分がかの女に對する可愛さは色をんなに對するやうでもあり、また自分の娘にでも對するやうであつた。そしてこの心持ちだけは自分ばかりで占領してゐたいのであつた。

『………』ぢツとかの女の顏を見詰めて、溜らなくのぼせあがつて來るのを胸のあたりで押し靜めながら、渠は自分もまだ〳〵若い氣が失せてゐないのを身づから祝福した。そして、はたのものを返り見て、『どうぢや――こいつは掘り出し物ぢやらうが？』

『こいつだとか、掘り出し物だとか』と、かの女はまた顏を赤めながら、『なんだか、まるで、ここほれわん〳〵の小判のやうですわ、ね。』

『小判、結構ぢやないか。』と、村田が云つた。

『ぴか〳〵光つて、のう。』自分はかの女に見とれてゐた。

『わたし、おかねなんか欲しくはない、わ。』

『それぢや何が欲しい？』

『………』かの女は村田の質問に答へるつもりらしくちよツともぢ〳〵してゐたあとで、『わたし、い

きたいの。』

『お嫁にかい?』

『いいえ――自分のいのちを、ほんとうに。』

『近代劇に出る女優のやうなことを云つてるぞ』と、若い秘書役が口を出した。

『そりやア戀より外になからう』と云つて、村田はこちらの顏を見た。

『……』自分もかの女の云ふことに同感できないことはなかつた。『士はおのれを知るものの爲めに死し、女はその愛するものにいのちをささぐ』だ。かの女の實際のまとがこちらをさしてるのかどうか分らないが――そして又、そのこちらをちらと見た意味ありげの目つきでは、てツきりさうも取れないことはないが、――兎に角、そのいきたいは感心にも誠心誠意の意味でだらうから、さう云ふ戀の爲めにはいきるも死ぬるも同じだ。自分の理解する禪や武士道の極意同樣、生死一如の觀念があつた。そして自分もそんな心持ちで角力甚句を歌つてきかせた。

そこへ若主人の末三郎が顏を出して、

『若し御意でございましたら、明日、梅林へ御案内申し上げても――』と云ふやうなことを述べた。

『いや、無用ぢや。それには及ばぬ。』自分が先刻あすこのことをちよツと尋ねたのは、そんな詰らぬつもりではなかつた。かの羅曼的な青い顏が浮び出た四賢堂の周圍なる梅林とこの地なるそれとを、

ふと聯想したに過ぎなかつた。

　折角緊張してゐた自分は、今、この末三郎と云ふ貧弱な現實のはしくれにぶつかつて、酒興の半ばを削がれてしまつた。そして大磯からここまでそツと自分の心に乘せて、そツと運んで來た梅花のかをりも、俄かに全く失せ去つてゐた。

　がう／＼と云つて、下の海の方から響いて來る浪の音に耳をすまして、夜も大分に更けたやうだと思つたが、なほ氣を換へるつもりで、自分は皆の食膳を撤回せしめ、得意の字を書いて見たくなつた。尤も、先刻から、熱海町長や國府津警察署長などが出した絹や唐紙が二つ三つ集つてるのであつた。

　西洋館とは云へ、この室には疊が敷いてあるので、直ぐその場に毛布を延べさせ、末三郎と秘書とに墨をもツとすらせた。

『うちへもどうか一枚』と、末三郎がはたで墨をすりながら云つた。

『わたしにも、ねい、御前さま。』

『よし、よし』と、自分は靜子のねだりを承知した。

『わたくしにもどうか、お願ひができますれば――』

『どうかわたくしにも――』

『………』靜かに葉卷きをくゆらせながら、自分の前に延べられた一枚の絹地に向つて、目を半眼につぶつて精神を落ち付けつつあつたので、自分は一々の返答をしなかつた。暫らくしてから、『おい』と、靜子にあごで命令して、『そこを押さへてをれ。』

『………』やはらかい裾を引いて立つたかの女は、絹地の上の方へ行つてこちら向きになり、きちんと坐わつた膝のあひだに赤いのを少し見せながら、兩手の白くきやしやな指さきで絹の兩角をそツと押さへた。『斯うでございますか！』

『………』渠は自分の煙草をわきへ置くが早いか、十分に墨を含めた筆を取つて、一氣呵成に左の自作詩を書いた、——

『治亂　誰れか　言ふ　兩途　ありと、
脩文　講武　是れ　良謨！
胸中　畵する　ところ　他策　なし、
韓山　の　草木　を　して　蘇らしめんと　欲す。』

例の、今度こそは——と云ふ意氣が伴つてゐたので、自分ながら筆が思ひ通りに運べたと考へられた。そして自分としては一番氣に入つた時に使ふ『公爵伊藤博文』を書き添へた。

それから、唐紙にただ『博文』と書き添へたのを一つ、單に『春畝』としたのを一つ書いた。する

と、靜子が再び、
『御前、わたしにもよ』とねだつた。
『さうぢや、な、抑さへ賃にでも一つお前に書いてやらずばなるまい。』
『あなた、これを頂戴な』と云つて、かの女はそのそばにゐた熱海署長の持つてゐる唐紙をいきなり奪ひ取つた。
『人の物を――失禮な。』自分はただ微笑してゐた。
『いや、代りを持つてまゐります。』末三郎はその爲めにすぐ出て行つた。が、一つには、一方のすずりを受け持つて墨をすつてた手を、暫らく休める爲めであつたらうとこちらには思はれた。
『さア、一つ、お前の望み通り悲痛淋漓な戀をでも書いてやらうか、な？』
『ええ、何でもどうぞ。』
『………』渠は自分でまた自作なる例の都々逸『三千五百のからすを殺し』を書きなぐらうと考へてゐたのだ。けれども、昔の女とは少し相手が違ふやうに思はれて、斷念してしまつた。そして別に左の如きを書いて見た、――
『大磯　小磯　の
　景色　を　問へば、

沖　の　か　も　め　に
富　士　の　雪。』

これも或宴會に於ける即興の自作であつた。

『假名まじりは閣下には珍品でございます』と云ふやうな話を一方で語り合ふものがあつた

『御前さま、ありがたう。』靜子は嬉しさうにこれを引き下げようとするのを、

『ちよツと待て』と、渠は自分でさしとめた。ただ『春畝』として渡すならかまふまいとも考へたのだが、漢詩以外の書はこれまで、誰れにも書いてやつたことがなく、また、自分として不得意なものを世間に殘すのも面白くなかつた。それに、よしんばこれをやつたところで、家庭を持たぬかの女はどうせ誰れかに取られてしまうのであつた。『やめぢや、やめぢや』と云つて、自分はこれを太い指の兩手でかき寄せてずた／＼に引き裂いた。

『あら！』かの女はその新調着をでも破られたかのやうに、俄かに失望して、こちらをぼんやりと見詰めながら、涙ぐんだ。

『……』渠には、その方がその場に自分で引き寄せて羽がひ締めにでもしてやりたい程の、可愛い傑作であつた。

『わたくしにもどうか――』

『わたくしにも——』

そんなのが前後左右から機を待ち受けたやうに一ときに現はれた。で、また、これが自分にはうるさい妄像の群れであつた。そしてさきのは靜子に早く會ひたい前ぶれであつたが、今度のは、もう、かの女と二人ツきりになりたい催促だと受け取れた。實際に、今やさう云ふ心が自分に動いてるのである。そして自分の不斷(ふだん)とは違つて——不斷はたツた三時間ほどしか眠らないが——今夜は一つ早く寢てやれと云ふ氣になつた。

ふと氣が付くと、いつのまにか次ぎの間の仕切(しき)りが明いてゐて、その方にも人間がうよ〳〵とゐた。そのうちの一人は——書生か何か知らないが——どてらを着てつツ立つてゐたので、こちらは粗略と侮辱とを感じないではゐられなかつた。

『………』熱心にこちらの書を求めるのはいいとしても、それが爲めに警察官どもまでがその職務(しよくむ)を忘れてゐるのだと云ふ憤りを得たので、つツと立ちあがつて、大きな聲で、『村田少將！』

『はい』と云ふ返事は別な室から聽えた。

『………』渠は、少將が室の入り口に顏を出した時には、衣桁(いかう)にかけてある自分の帶劍を取つて小脇にかかへてゐた。が、『一體、これはどうしたことぢや』とあびせかけた時には、つるりと劍を拔いて自分の頭上に威(ゐ)だけ高にふり上げてゐた。

どや〳〵と有象無象は逃げて行つたけれども、自分の心は納まらなかつた。

『皆、あまりに閣下の御機嫌がおよろしいのにまかせて――』

『いや、もう、やめぢや！』斯う村田に答へて、かちりと劍はもとの鞘に納めて、これをもとの場所にかけた。怒つては見たものの、これほど氣がすツとしたことは自分には珍らしかつた。一面では初めて帶びた劍の威光を示めしてやるつもりであつたが、また一面には、こんなことで單に威張つてをれる軍人なんか、隨分組し易いものだと思はれた。そして少しねむけがさして來た自分の心は、今や、靜子の方へばかり傾いて行つたのである。』さア、靜子、來い！』その方へ一二歩進んだ自分の羽織のうらが自分のお召の衣物にこすれた音がした。

まだ四五名の官吏や有志が殘つてるにも拘らず、渠は自分の太い巖丈な兩手を以つて、かの女が遠慮がちに立ちすくんでるその右の手を取り、その左りの肩を抑さへた。そしてかの女をまた小脇に締めかかへないまでにして、自分の呼吸をはづませながら、その室を出た。そして別にきまつた寢室の西洋寢臺のそばに行つて、これに腰をかけた。

『いやだ、わ、御前さま、わたしの分をお裂きなすつたりして』と、半ばは恨み半ば恥かしがつてるかの女を一層堅く引き寄せて、渠は成るべく自分のこはい口ひげがさはらないやうに、かの女のふツくらした頬ツぺたに一つ接吻をしてやつた。

『まア、さう云ふな』優しい聲を顫はせながら、『韓國へつれて行つてやるのだから、な。』
『ほんとに面白いところ？』
『そりや、わしと一緒にをりさへすりや、どこでも面白からう。』
　明けツ放しになつてるひらき戸のそとを末三郎がまだ賴みがありさうな顏つきをして通りぬけようとするのを見たので、
『こら、若主人』と、渠は自分からそれを呼びとめた。
『はい』と云つて、末三郎は呼ばれたのをいいしほにして入口のところまで近づいて來た。『もう、お休みにおなりでございますか？』
『いや、まだ寢やせん。』若主人にだけは一枚何か書いてやらうと初めから考へてゐたのであるから、ここへ紙と硯とを持つて來させた。
『然し、御前さま』と、末三郎も亦あまへるやうに、『そんなところでお書きになりにくくはございませんか？』
『……』渠は靜子に取つて來させた葉卷きをくゆらしながら、獨りで寢臺の上に乘つて、あぐらをかいてゐたのだが、『なアに、ここで十分ぢや。』
『左やうですか？』末三郎は床の上に膝を突いて頻りに墨をすつてゐた。

『わたしが少し手傳つてあげませうか？』

『いや、お前はわしのそばにをれ』と云つて、渠は自分の靜子が少しからだをこごめて立つてゐるその肩を自分の右の手で抑さへて、またしツかり抱き寄せた。

『いやア！』かの女は倒れさうになつたが、その左の肱をこちらの膝に突いて、その半身の力をささへた。

『………』渠はかの女のかをりあり、あツたかみある重みを感じながら、若主人に、『おぬしもここのお袋（ふくろ）の爲めには隨分苦勞したが、この頃では、もう、安心（あんしん）ぢやらうが、の？』

『はい、もう、御前さまがたのおかげで――』

『今暫らくすれば、また、あの强つく張りのおやぢは死ぬぢやらうから、さうなれば、ここもすつかりおぬしがたの世になると云ふものぢや。』

『お言葉でございます。』

『一つどうぢや、わしと一緒に韓國へ來て、おぬしは京城や釜山にホテルを建てては？それとも、また、沿海州の漁業權を得て鑵詰製造でもやつては？』

『結構でございますが――今のところ、どうも――』

『繪は引き續いて書いてるか？』

『いや、どうも——番頭同様、家業にいそがしいものですから、とてもそんなことは——』
『……』眞はこの男の顔が一度榎本武揚と共に自分に現はれたのは當前のことであると思はれた。『一體、おぬしが死んだ榎本に名乘りに行つて、受け付けられなかつたのはどこでぢや！』
『あのお方が箱根へいらツしやつた時お尋ねしにあがつて見たのでございます。わたくしが畑徹一のせがれと書き入れた名刺を出しますと、會つて下さいましたので、手ツ取りばやくでございましたが、母が生前にかねがね閣下を御幼少の時にお世話したことがあるから一度會にひ行つて見よと申してゐたことを申し上げました。すると、俄かにお顏の色がおかはりになりました。確かにお心當りがあつたには違ひございませんが、改まつて申されましたには畑徹一と云ふものにはおぼえがあるやうにも思ふが、世話になつたとはおぼえない。』
『それは警部や屬官などもをつたところでぢやらう？』
『はい、五六名は——』
『場所がわるかつたんぢや。あいつは俗物であつたから、屬官などのをる前ではそれ位のとぼけかたはしようもの——苟も大臣たるものが、しし大便の世話を受けたと云はれては、自分の威光に關するとでも思つてな。』
『さうかも存じません。』

『その癖、誰れでも子供の時にはその世話を受けることは忘れて。』

『如何にも――。わたくしは、然し別に何の依賴(いらい)や要求があつて行つたわけでもございませんでしたから、それツ切り二度と再び伺ひませんでした。』

『なアに、こツそり會ひに行つたら、あいつも白狀したに相違ない』と云つて、渠は末三郎の最後の言葉の意氣(いき)に感心したけれども、自分の前では餘りに生意氣だと思はれたので、不快をおぼえないではゐられなかつた。が、直ぐまた寬大(くわんだい)なる心が溢れて來た。そして自分で若主人の持つて來てある唐紙を縫どこの敷き布の上に廣げながら、『さア、もう、そのくらゐでよからう――けふはお前を思ひ出して、ここまで會ひに來た記念(きねん)ぢや。』

『いや、まことに恐れ入ります。』

『……………』自分の腳子と若主人とに上の方を抑さへさせて、渠はくずした膝を坐わり直した。そして昨年の十二月初めに、韓國から、今度の統監たるした地を拵らへて滄浪閣へ歸つて來た時の感想(かんさう)を述べたところの七言絕句を書いた、――

『老い去り、何ぞ　辭せん　萬難　を　濟ふ　を！

新盟　緊ぎ　得たり　兩邦　の　間。

芙蓉、一別　三旬日、

我を　迎へて　天邊　笑顏　を　開く。』

………筆のあとを二三度默つて讀み返して見たが、滿足であつたので、『これでわしらも休むとしよう――あすの朝、出發するから、な』と、たツた今決心に出たことを若主人に報告してから、落款として『公爵伊藤博文』を書き添へた。

――（大正七年十月）――

お安の亭主

『さうがたツぴしとはしご段をおりて貰つちやア、困りますが、ね！』

　　　　一

作衞はこないだぢうから云つてやらうと思つてたことを、やツと今、その客に向つて口外したのであつた。帳場兼帶の茶の間で、長火鉢にあたりながら、二階を下りて來た客の樣子を見てゐると、

『はア』と云ふ答へを、きまりが惡かつたしるしに、またはむツとした置きみやげに殘して、下駄を引ツかけ、大學のノウトをかかへて出て行つてしまつた。

　そのあとで直ぐまた女房のお安に叱られたのである、

『あなたはなぜさうお客さんに小言をおツしやるんです、ね！』何か洗つてたところの濡れ手を手ぬぐひでふきながら、かの女は裏どころの方から出て來た。立つてるままでだが、相變らずいら〳〵した顏にその目と口とをとんがらかせて、『この商賣は實際にお客さんで立つて行くのぢやアございませんか？』

『商賣に客で立つて行かないものなどアありはしないよ。だが、ね』と、少し渠はかの女の心をやわらげるつもりで一段と聲を低めて、『ああみしく〱やられちやア、はしご段がこわれてしまうぢやアないか？』

『それをこツちが辛抱するんですよ。』

『それもさうだが、ね――』結局は、斯うしていつも自分は勝ち氣な女房に說き伏せられてしまつた。

二

渠は自分の越しかたを考へて見ると、世は段々に澆季となつたやうに思はれる。國引けの時に舊藩に引ツ込んだ自分の兄が、明治十八九年頃に再び出京して來たが、『またいつになつたらお扶持を貰へるやうな世になるのか』と云つた。その兄に比べると、自分はまだまだ開らけてゐた。

『そんな世がまたと再び來るものか、ね、それが爲めに四民平等の明治になつたのだから、ね』と云つて聽かせた。

自分はあの時東京府の土木課に勤めて、隨分はばを利かせてゐた。多くの土方どもは自分の部下となつて東京各區の道路普請をやつた。隨分成績がよくて、立派な道路を拵らへたのだが、市區改正や

電車通行の爲めに殆ど皆あとかたもなくなつて、青山墓地のあたりと深川あたりとに少し殘つてるだけださうだ。

あの時は、江戸ツ子氣取りの女房までが、

『おいら』と云ふ、ピネオの文典によれば、第一人稱單數の代名詞を使つて、部下の『おめいども』におほざツぱの馳走などをしたが――。

あの先妻が死んでから、そして引き續いて最も可愛かつた總領むすめがコレラで倒れてから、どうも自分のすることがうまく行かなくなつた。つまり、經驗もない輕薄な若いものらに蹴落されて行つたやうなものだ。で、自分は或博士の推薦で高知縣の土木工事へ行くことになつた。その途中で大阪に二三日ぶら／＼遊んだ間に、今の女房に出會つた。

心齋橋を渡つてくると、後ろの方から、

『林さん――林さんぢやアございませんか』と呼ぶ者があつた。

『………』不思議だ、かみ方ふうでない女の聲のやうだと思つて振り向いた。

すると、それは先妻の生きてる頃、うちの裏に當るところに住んでた小學教員の細君で、かの女も一ときは矢ツ張り教員をしてゐた女であつた。うちへも客で忙しい時は手傳ひに來て、殘り物を喰つたり、持つて行つたりした上に、こちらが人を使ふことをまだ知らないなどと云つて、近處へ惡くち

を云ひふらすさんざんなあばずれ者と思はれてたのが、その亭主の死んだ爲めに、生れ土地なる大阪へ歸つたことがあるのを、今俄かに思ひ出せた。

『おう、お安さん！』斯う云つて、立ちどまつた時、もう、自分は今夜松島にしけ込むには及ばないかも知れぬと云ふことをあたまに浮べてゐた。

『矢ツ張り、林さんでした、ね。』ちよこ〳〵と近づいて來たのが、年甲斐もなく、顏を赤くしてゐた。

『まア、お珍らしいところで――』

『………』自分は確かに物になりさうに思つた。『ほんとうに珍らしいところで、ね。』

どうした爲めに大阪へと聽くから、自分は女房を失つたりして、今回高知縣へ渡るつもりであることなどを立ち話した。向ふも亦亭主に死に別れてから母のもとにまだひとりでゐることを告げた。

『お互ひにやもめになつちやア、つまりません、わ、ね。』

『さうですよ。』自分はとぼけて、何げないやうに返事したけれども、『兎に角、往來での立ちばなしもいい圖ぢやアありませんから、――どうです、ね、今からわたしの宿へでもいらツしやつたら――いろいろまだお話もありますから、ね』と云つて見た。

『ぢやア、お邪魔にあがりましようか』と來たのだ。

『………』もう、占めたものであつた。

その日は日の暮れまで話し込んで、かの女はとう〳〵とまつてしまつた。尤も、どうせ二人とも一方がかけてゐるのだから、ここで出會つたのを幸ひ、昔のなじみ甲斐に一緒にならうと云ふ相談が即座にまとまつたのであつた。そしてその翌日は、かの女もちよツくらと荷物をまとめて來て、自分と一緒に川口から船に乘つた。

高知へ行つてから、一度、土方同士の喧嘩があつて、その一方を許して置けば自分の仕事にもまた自分の生命にも關するのであつたから、他の方をうまく抱き込んで、一方の連中をすべて夜中に川の中へ叩き込んでしまつた。

『そんなむいきなことをして來なすつて、いいのですか』と、お安は非常に心配した。この時には、無論、こちらの女房としてすまし込んでゐたのだから、今にもあとを追ツかけて來て、自分らを取り卷きでもしないかと云ふ恐れを持つた。

『なアに、心配するにやア及ばないよ、今夜はおいらの家のまわりに澤山の見張りをつけてあるから、ね。』

『でも、人を殺しちやア――』

『幽靈ぐらゐはやつて來るかも知れないが、若しか警察に分つたとしても、下手人は別にきまつてるから。今どきのやつア、どいつもこいつも義理や恩義を知らないから、あたまからなぐり付けるより

ほかに仕やうがないのだ』と、自分は左ほど氣がかりもなくかの女に云つて聽かせた。かの女はまだその時は素直であつた。そして川から獨りで助かつて來たものらも、それからおとなしく自分やお安の云ふことを聽くやうになつた。

高知の事業を無事にすましてから自分はまた新占領地なる臺灣に渡ることになつた。この時は自分のお安を東京なる兄の近所に住ませて置いて、自分ひとりで出かけたのだが、土木工事の賄賂事件にまき添へを喰つて、一ケ年も未決犯にぶち込まれた。不正直な上官どもはみな始めからうまく逃げて正直な自分らばかりが詰らないざまを見たのだ。無罪にはなつて歸つたものの、自分もあまり調子に乘つて酒や女にばかり身を持ち崩してゐたのが分つて、お安に全く信用を失つてしまつた。留守中の最後の半ケ年ばかりは碌に仕送りもできなかつたので、かの女はをんな一人の腕で——人仕事をしたりして——かの女とそのままツ子との生活を立ててゐた。

それを口實にしてかの女は威丈だかにこちらに臨み出した。そしてこちらが刑狀持ちと同じやうにされて、どこへ行つても勤めさきの世話をしてくれるものがないのを、こちらが意久地のない爲めに仕事を見付け得ないかのやうに見た。

『よしんば、おいらに意久地があつても、ね、向ふで世話をしてくれないのだから仕かたがないぢやアないか?』

『ぢやア、土方にでも何にでもおなりなさい。わたしは別に獨りで暮しを立てますから！』

『今更ら何をぬかす！』

これは歸京後まだ程もなかつた頃のことだが、自分は火のついたランプをかの女に向つて投げ付けた。かの女は身をかはしたので無事であつたが、ランプは疊に碎けて火の海を現じた。それをかの女は座蒲團でもみ消したが爲めに、兩手にひどい燒けどの引ツ釣りが殘つた。お負けに、家主から立ち退きを命ぜられると云ふ始末で――

それからと云ふもの、自分の向ふ見ずと馬鹿正直とを自分で愼む氣になつた。お安も亦さう持ち前のやき／＼、いら／＼を見せることが少くなつた。そして最後のつてを得て、〇〇鑛山へ這入つた。初めはそこの事務員に勤めたのだが、段々と知り合ひが多くなつたのをしほに辭職して、お安の思ひ付きに從ひ、そしてかの女の目利きを信じて、質屋を開業した。可なり繁盛したのだ。そしてそこに前後七年間もゐたのだが、息子の不仕だらと逃亡との爲めに世間に顏向けができないと云ふわけで、それもかの女の發議で店の始末を他人に讓り渡して、再び上京したのであつた。

そして本郷の臺町に下宿屋の讓り渡しを受けて、自分らが出京の目的通り、これで以つてお互ひの外に手頼りのない老後の落ち付きを得るつもりであつた。が、二三ケ月もやつて見ると、この家業には餘り男の手を要しない。そしてする用がないと、つい、火鉢のそばにうづくまつて、女中の言葉使

ひやお客さんの上り下りにまで小言を云ひたくなるので、却つて女房からも叱られたり邪魔にされたりするやうな傾きになつた。

『あなたは別に何か仕事をお見つけなさいよ』と、うるさいほどにせつかれた。

『ゐさふらふぢやアあるまいし！』渠は自分からひがみ根性を出してかの女に喰つてかかつた。それには、かの女が近頃私かにがらにもない薄化粧までして、若いものらの機嫌を取るのを少し妙な方へ持つて行つて見てもゐたのだ。

『あなたは變な人です、ねい、わたしが何か浮氣にでもなつたやうに思つて！この商賣では、ね、いかにお婆アさんでもしみツたれてるよりは小ざツぱりしてイる方がどれだけいいかお分りにならないんですか？』

『……』渠には自分の婆アさんはしみツたれてるのが當り前になつてゐたので、かの女にわざわざ化粧をさせるやうな商賣その物の性質も氣に喰はなかつた。で、二階の客どもにわざと聽こえてもかまはぬつもりで、『おいらのうちにおいらががん張つてるのが何で惡い？いくら女向きの商賣だからツても、ね、亭主がゐないでまとまりが付くと思ふか？』

『そりやア、何も亭主を邪魔にしてゐるわけぢやアございませんが――』

『いや、邪魔にしてイる！』

『でも、大切なお客さんの爲めにやア――』

『馬鹿！亭主とお客さんとどツちが大切だい？』

『あなたは餘ツぽど分らない人です、ね、わたしが斯うしてやき〳〵と女中をふたアりもこき使つて、あなたがたの家の爲めにかせいでゐても――』

『………』結局は矢ツ張り、自分の女房に云ひくるめられてしまふのであつた。かの女の兩腕に大きな燒けどうの引ツ釣りを見ると、また、自分の昔の無謀が返り見られて、昔のやうな手出しはできなかつた。

かの女もそれをその強みにして、思ふ存分に立ち働いてるので、渠自分の用としては、棚を釣つたり、井戸端のこわれを直したりするやうなことしかなかつた。自分からもこれでは餘りつまらなくなつたし、かの女の忠告として他に何か仕事を見付けるのも自分の氣晴しやからだの運動にもなるからと云ふのが、かの女の實際の親切心から出た言葉だと分つたので、うちの或お客さんの紹介があるのを幸ひ、或新聞社の小使ひに出た。

ところが、社長の實弟と云ふのが靑二才のくせに生意氣で、人を人とも思はぬ待遇ばかりをした。兎に角、今まで人に使はれるよりも人を使つて來たこちらには、自分の氣ぐらゐがまだ高かつた。

或時など、出ぐちのところへ來て、靑二才が突ツ立つたまま、

『早く出せ』と云つた。

『………』こちらはそれと分つたけれども、わざと、『何をですか？』

『おれのはき物だい！』

『………』太閤さんの昔ぢやアあるまいし、『わたしは、ね、あなたの草履取りに來てゐるのぢやアありませんよ』と云つてやつた、おかげて、たツた三日目にそこを追ひ出されてしまつた。

三

『もう、おぢさんの世話は御免だ』と、その紹介者なる學生に云はれて見ると、今度は自分で自分の職業を求めて見るより仕かたがなかつた。

『あなたのやうにさう世間は一國ぢやア通りませんわ、ね、少しやア色もお世辭もなけやりア。』お安も笑ひながら斯う云つたのだけれども、その目つきには呆れたと云ふ樣子があり、その口うらには人をないがしろにしたところが見えた。

『………』よし來た！そツちもさうなら、こツちもそのつもりでと云ふ決心を、渠は私かに新らしく發起したのであつた。今度自分で何かいい仕事を求めたら、そんな婆々アなどそツちのけにして、少しやア若い女でも目かけにして、別に安樂な家を持たせて見よう。その時になつて、決して指のさき

一本だッてお安には干渉させぬぞと。

錢湯へ行つてそれとなく聽いたによると、或官吏のあがりが何かいい商賣はないかと思つて市中を一週間ばかりぶら付いた間に、東京中の天ぷら屋のあげかすを買ひ取つて、その油を再びしぼり取ることを思ひ付き、いよ／＼それをやり初めると、二三年でおほがね持ちになつたと云ふ。さて、そんないい拾ひ物はないか知らんと、渠も亦自分で市中をぶらついて見た。

お安の拵らへて呉れる辨當をふところに入れて、神田へ行つても、下谷へ行つても、自分が曾て土木技師として手をつけた道路はこの邊だと思ひ出されながら、そのあとかたなどは殆ど殘つてゐなかつた。全く新らしくなつてるのもあり、またずッと廣がつてるのもある。京橋區の八丁堀には、自分らの昔住んだ舊藩のお屋敷あとがあり、それがさんざんになつてることは兼て知らないでもなかつたが、再び念の爲めにまわつて見ると、すッかり町屋に變じてゐた。そしてそこにも時代のます／＼威光なく、野卑に、ざッくばらんになつて行く姿を自分は見て歎かざるを得なかつた。

「世間の人情はます／＼紙の如く輕薄になつて行く癖に、道路や建て物ばかりはどこへ行つても昔とは違つて、ます／＼立派になつたのにやアおいらも驚いた、ね。」歸つて來て、渠は何の獲物もないのを煙草のけむりに胡麻化しながら、斯う自分の女房や女中の立ち働いてるのに云つて聽かせた。「新富座や歌舞伎座が立派だと云つたのは、そりやアずッと昔のことだ。神田吳服橋の手前の堀ばたを歩い

てゐると、何か大きな石造りの建て物があるから、あれは何でしようと人に聽いて見たら、日本銀行であつた。これなぞア實に誇るべきものだ、ね。』

『何と云つても』と、お安の聲が臺どころから聽こえた、『おかねの世の中ですから、ね。』

『實に、さうだよ。――然し、淺草の觀音さまは相變らず賑やかだ、ね。それに變はつたのはお城の近處で――二重橋の正面なんか、實に立派なものだ。一度、お前も女中をつれて行つて御覽。』

『それもいいでしようが』と、手を休めに火鉢のそばへ來たお安は、笑ひながら、(但し、この笑ひが渠にはおそろしいのであつた)『あなたは――何のことはない――お辨當を持つて毎日東京見物をなすつていらツしやるんですか?』

『まア、さう云ふものぢやアないよ、おツつけ何か見付けらア、ね――これでも、みちみちいろんなことを注意して歩いてるんだから。』

『どんな物を注意なさいました?』

『死んだあにきの廣告塔は、あれはいい思ひ付きであつた、ね。あの時は確か許可されなかつたと云つたが、今ぢやア方々に立つてゐるよ。おいらは一つ水道の行つてないところへ新鮮な水を人夫の車で供給してやつたらと思ふが、どうだらう、ね?』

『水道がなけりやア、井戸がありますから。』

『井戸の水はよくないと云つて、さ。』

『こツちがいくらよくないと云つても、長ねん使つてりやア仕かたがないでしよう。』

『それもさうだ。』

こんなことで二三日を空しく費やしたが、渠が芝の方へ行つて見た時に、ふと自分の兄の遺族へ足が向いた。兄の家の當主は道樂者である上に親類づき合ひをきらひだと云ふし、その女房はまた、自分の見たところでは、お安とは反對で、女のものぐさであり、引きずり者である。向ふも兄の死んだ前後を除けば殆どたよりをして來ないし、こちらも別にこと更ら近づかうとする氣がなかつた。

自分の兄は死ぬまで皇宮警手であつたが、その息子には大して望みがないからと云つて、高輪に寺を一つ買つて與へてあつた。そして自分の甥夫婦はそこで、もう、長ねん、素人下宿をやつてる筈だ。自分らが今回下宿業をやり初めたのも、實は、お手本をそこに取つて、もと／＼からうらやましかつたその眞似をしたのであつた。

で、自分は競爭的にそこの現狀も知りたかつたし、また多少後生のことを思ひ出してる自分にはお寺と云ふに對する尊敬の意もあつた。

電車通りを泉岳寺の一つさきの停留所からあがつて行つたところの、泰明寺と云ふ寺だが――きてうめんな兄の生きてた時にその兄がよく見まわつてたのとは違ひ、大きな門前の石段からして草が生

えてるまゝになつてゐた。門を這入つたところに在る有名なおほ芭蕉も、相變らずあることはあるが、去年の枯れ葉を切り拂はずに置かれるから、折角すく〳〵と出てゐることしの新らしいひろ葉のみづ〳〵しさが少しも引き立たなかつた。僅かばかり生き殘つて霧島が咲いてるが、これも元のおもかげはなかつた。庭の隅々は雜草がぼう〳〵と生えて、いたちか狐の住みかになりさうだ。

渡つて行く敷き石だツて、いつの雨にかは知らないがそのまわりの土が掘れて、右にころんだり、左りに曲つたりしてゐて、日より下駄の齒がまがつて滅つたのを穿いてる者には、そのうへを歩くのもちよツとあぶなツかしい。また、高い緣がはにまわしてある手すりも、ところどころ腐つて、ぽツきり折れたまゝになつてゐる。

あにきが若し生きててこのざまを見たら、また何と云つて歎くだらうと思ふと、何よりも先きに墓場の方へ這入つて行つて、その久しく無沙汰であつたお墓におまゐりをした。

それから、また玄關へ立ち戻つて案內を乞ふたのである。奧の方では子供がわア〳〵泣いてて、なかなかこちらの聲が通じなかつた。が、かまはずづか〳〵とあがつて、ほこりだらけの廊下を庫裏のところまで行くと、仁（取つて五つになつただらうと思はれた）をがみ〳〵叱つてた甥の女房良子がこちらを發見して、

『おや、叔父さんですか――お珍らしい』と、びツくらした樣子だ。

『………』今どきのものは、お安を初め誰れでも、子供をあまり因業に叱るが、これはまことによくないことだと思ひながらも、さりげなく穩やかに、『わたしですから、ね、失禮致しましたよ。もう、年を取るとおのづからせツかちになつて、案内が通じないと、つい直ぐ、ね、斯う云ふ風に遠慮なしにあがつて來たくなつて、ね。これも全くの他人ぢやアないから許して貰ひますよ。』

『まア、よくいらツしやつて下さいました、ね――どうなすつたかと思つてましたに。』

『まア、失禮しますよ』と云つて、渠はわきにあつたよごれた座蒲團を自分で引きよせて來て、大分ここまで歩きつかれた足をやツとその上に座わつて休めることができた。そして疊み手ぬぐひを出して一と先づ顏の汗をふいた。その間に、このがらんとした庫裏のかた隅に置かれた僅かの商賣道具や、三四年もそのままになつてるらしい赤くぶく〳〵した、そしてところどころ藁のはみ出た疊などを認めて、これでは隨分貧困をしてゐるわいと思ひながら、『わたしも、ね、今度あちらを引き拂つてまた出て來たのですよ。さうして、ね、家内には本鄕で下宿屋をやらせました。』

『さうですか、ちツとも知りませんでした。』この云ひ草がその調子に於いて氣に喰はなかつたので、渠は

『そりやア知らない筈だよ』と應じた。が、來さう〳〵氣を惡くするでもないと思つて、『まだこちらへは落ち付かなかつたのでお知らせはしませんでしたが、ね、昨今ではどうやらかうやらうまく行け

さうになりましたから、まア、安心して貰ひます。』幾間ほどあると聽くから、まア、うへした十三四間は使へると說明してやつた。
『結構です、ね。』かの女のこの返事にも何だか意地の惡い角があるやうに思へた。『お安さんは前々からうちのやうに下宿屋をしたいとおツしやつてたのですから、本望が達して喜んでるでしよう。』
『大きに、ね。』こちらは向ふのぞんざいな言葉にまた興味をそがれた。が、
『では、叔父さんは大分おかねをためて東京へ出てらツしやつたのです、ね』と云はれた時には、思はず自分もにツこりして、
『さうでもないが、ね』と答へた。そして心では自分とこの家とには暮しに於いて餘ほどの懸隔があるやうなのを得意に思へた。そして良子がその言葉ぶりばかりでなく、その顏に於いても何だかとげとげしいところができてゐるのも、その貧乏の爲めだらうと推察して見た。
『少しこツちへも融通して下すつたらどうです、ね？』
『それもことによつてはかまはないが、ね――一體、常雄さんはどうしてますか、ね？』相變らずのらくら坊主でゐるのだらうと、實は、聽き糺すまでもなかつたのだが――。
『お話になりませんよ。この頃ぢやア、女郎のあがりと一緒に品川で家を持つてます。』
『仕かたがない、ね、それぢやア――おつとめなどはどうするんだ？』

『何もしません、わ。』

『おやア、葬式のあつたりする時は？』

『滅多にありませんが、ね——そのときやア、近處のお寺から坊さんを賴んで來て。』

『へい——どうして斯う、われ〳〵の息子にはできそくなひができたか、わたしのは逃亡して行くゑが知れないし、ここのはまたそんなざまだし？』よく聽いて見ると、常雄は品川の女郎屋へそこの娘の爲めに英語を敎へに行つてるうちに、女郎あがりの或引き手をんなにあつくなり、とう〳〵それと家を持つて始終留守なのであつた。『常雄さんはもとから少し親不孝であつたから、ね。』

『親不孝どころですか』と、良子はいつのまにか淚に落ちてゐた、そしてこちらをその本人ででもあるかのやうに向つて來て、『女房不孝、子不孝です。わたしばかりが子供を三人もかかへて——今、うへの二人は學校へ行つてますが、ね——とてもやり切れないぢやアありませんか？繼母のお時さんは、また、お父さんが亡くなられると直ぐ、わたし達をどうせ薄情だからと云つて、實子の方へ逃げてしまつたし！』

『さうわたしに突ツかかつて來ても困るが、ね——まア、わたしにも考へがないことはないから。』斯う云つて、渠はつい同情に引き入れられてしまつた。そして同時に胸算用もして見るに、方々歩きまわつたあげく、何かいい仕事を見付けたとしても、つまり、その資本に自分のふところを閉らかなけ

ればならぬ。して見ると、まかり間違つたことに資本をおろすよりも、ここで別に下宿屋を盛んにしてお安と對抗させる方が安全の策でもあり、また親類助けでもあつた。お負けに、ひよツとすると、大阪でお安に逢つた時のやうに、良子も赤一種の物になるかも知れないのであつた。

勝手から大分離れたがけの下にある井戸のところで皿洗ひをしてゐるのが見えてた良子の母親も、やつて來て、久し振りの挨拶をした。

庫裏の緣さき三間ばかりのところには、大きなくるみの木が一本立つて、うへの枝さきからは今やぽつ〳〵黄白色の花を垂れ初めてゐる。その根もとには引き臼がころがつてる。これを見ると、渠は自分が田舍で育つた子供の時のことが思ひ出されて、早やこの家に新らしい親しみができたやうであつた。

『あんなに畑があるのに、うツちやつて置いちやア勿體ないぢやアございませんか？』

『これ獨りぢやア』と、母親はその娘をさして、『とても、手が行き屆かないのですよ。』

『さうでしよう、ね』と、もう、この時、渠は良子の不精なのを忘れてゐた。『どうしても男がゐませんでは――』

『おぢさん、御飯は――？』

『いや、まだですが、ね』と、渠はかの女に答へながら、ふところから辨當を出した。『斯う云ふ物を

持つて毎日仕事さがしに追ひ立てられてをりますが、――幸ひ、ここで丁度喰べさせて戴けば結構ですよ。別に御心配は入りません。』

『ぢやア、丁度うちでもこれが、ね』と、かの女は同じ角張つてでもお安のよりはまだしも取りえがあると思はれる顏の眞ン中に、鼻じわを寄せて笑ひながら、かた手の指で圓い形を見せて、『必迫ですから、けふは許していただいて、まア、新らしいおかう〳〵ででも――』

『なに、お茶さへ貰へば結構ですよ。』

四

渠が鮭の鹽びきの添へてある辨當を喰べ初めても、良子とその母親とは――もう、晝めしがすんでるかして――そばを離れなかつた。が、良子の膝にかじり付いてる仁がこちらの物を喰ひたさうに見てゐるので、自分は鹽びきのむしりをのせた飯を箸につまんで、

『やらうか、ね』と出して見た。けれども、仁はいや〳〵をして、出ては來なかつた。拍子ぬけがしたのでそのつまんだのをそのまま自分がぱくりと口へ運んでしまつた。

ふと氣が付くと、母親を除いては、仁も良子も、この暑さに向はうとする季節にも拘らず、まだ綿入れを着てゐるのであつた。氣の毒になつて、渠は自分で私かにほろりとしかけたのである。で、獨

りで箒を運びながら、渠等に向つて、渠等を慰めながら、自分の家内の奇麗好き、几帳面ではあるが、どうも自分を邪魔にし、おろそかにすると云ふ不平を語つて聽かせた。

『わたしはこれでも困つてるものにやア一時融通もしてやらうと云ふ腹でをりますが、ね、家内と來ちやア——どうしてあんなに因業に生れついたものだか？——金を握つたら最後、放しませんから、ね。とても、あれぢやアかね貸しなんぞアできませんよ。』

『當世はそれがいいんでしようよ』と、母親は棄てッ鉢のやうに應待した。

『なアに、貸すべき時には貸し、返すべき時には返すのがほんとうです、さ。』良子の方がこちらには分つたことを云つた。

『さう〳〵。それなら立派なものだ。』けれども、ここにこの親子の間に何か衝突でもあつて兩人の話がしツくり行かないのではないかと感じられた。

お茶になつてから、かの女は詳しく苦しく事情を話した。常雄が年中うちにゐないので、何事もかの女獨りで手まわりかね。家が毀われて修繕するにも、大工を賴めばなか〳〵安直に行かず。自然に垣根は破れ、屋根は漏り、客人はへるとも、滿員することはなく。借財は嵩んで、その利息にますます追はれる。だから、

『これぢやアわたしも全くやり切れないぢやアありませんか？』

『全く、ね。』渠はかの女にまた涙を以つてかき口說かれると、このどこか優しみのある女を斯うまでうツちやつて置く薄情の常雄に對して憤りをさへ感じないではゐられなかつた。『若しさうあなたがわたしに來て吳れいと云ふなら、一つやつて來て、わたしがこの泰明寺を盛り返してあげてもいいが、ね――』

『どうかお賴み致しますよ。叔父さんに來ていただければ、――さうして少しでもおかねの融通をしていただければ、うちそとの修繕もできて、お客もふえて來ます。うちが繁昌すればこの家の佛もかげながら喜びましようし、また叔父さんから拜借する物も段々お返しすることができて行きましようし――。それには、借用證書もちやんと差し入れますから、ね。それから、叔父さんだツても、あツちでお安さんと一緒にゐて小さくなつてないでもすむわけでしようから――。』

『そりやアさうだ、こツちでも願つたり、叶つたりですから、ね。――まア、一つゆツくり考へて見ましようよ。それにしても、ね、若しわたしがいよ〱來るにしたツて、親戚同士の間で貸し借りの證文なんか必要はございませんから、ね。融通はお互ひのことで、わたしの入用な時にまた都合して戴けば、それでよろしいのですが、――その前に一度、常雄さんに會つて、渠の意見を一つ突きとめて置かないと――』渠は自分が世話はしたが、入らざらんことをしたと、あとで云はれてしまへば馬鹿を見るばかりだと考へられた。

『それには及びません』と、良子は斷言した。その理由によると、常雄はこちらへ呼んでも來ないだらうし、こちらが逢ひに行つても面會を謝絕するにきまつてた。その上、常雄の方々に分れてる兄弟どもやその他の親類でも、誰れ一人として泰明寺のことを心配して吳れるものはなかつた。この數年間は、もう、良子ばかりの骨折りでこの寺を維持して來たのだから、かの女が承知の上で叔父をここへ呼んだ以上は、誰れも異議を申し込むものはなく、若しあつてもその云ふことは通させないのであつた。『不斷はうツちやつて置いて、叔父さんが來たからツて今更ら故障を云へる義理ではないぢやアありませんか？』

『それもさうだ、ね。』渠はかの女のさすが違つた教育を受けて來たそのしツかりした覺悟にも感心してしまつた。『ぢやア、兎に角、けふはこれで歸るとして——お安にも相談しなけりやアならないから、ね。』

『まア、よろしいでしよう。』かの女がこの時俄かに頓狂な目つきをしたので、こちらはまだ自分に云ひ殘したことがあるのだと見て取つた。

『大體は今の話で分つたと思ふが——』

『でも、お安さんに相談すりやア、これは直ぐぶち毀はれます、ね。』

『さうはわたしがさせません。』渠は自分の家内の性分を良子もよく知つてる筈だからと考へながら、

ここに自分も自分の覺悟を示めした、『お安の持つてる物は、つまり、みなわたしの物だから、ね。』

『叔父さんは――どうか――そのつもりでゐて下さいよ。それに付けてですが、ね』と云つて、かの女がまた話を延ばしたによると、目下さし迫つて米代のとどこほり五拾五圓を拂はないと米屋があすからの米を持つて來ないし、ほかにまた良子と子供との夏物を質屋から出す費用が五圓ばかり入るし、都合六拾圓のかねが入用だから、早速だが何とかして吳れろと云ふのであつた。

『………』さう打ち明けられて見ると、もう、渠は拒むことができなくなつてゐた。そして『承知しました――明日ぢうに持つて來ますから』と請け合つてしまつた。

五

『それぢやアどうぞ、ね――叔父さんの爲めにうちが助かるわけですから』と云ふ、良子が玄關での別れの言葉を後ろからあびせかけられて、作衞はぞツとするほど嬉しい記憶を自分の脊中に印したのであつた。

『………』これほど實際に願つたり叶つたりの話はほかにあらうか？これがうまく行けば、良子も今云つた通りお安などに小さくなつてゐるにやア及ばない。いや、都合によれば、自分の物はすべて秦明寺へ持ち込んでしまつてもいいのであつた。

もう、市中をうろつく必要も自分にはなくなつたので、泉岳寺まで歩いてちよツと義士のお墓へおまゐりをしてしまうと、直ぐ電車に乘つた。そして車中で考へて見ても、歸つてからの話の切り出しを餘ほどうまくやらねばならぬのであつた。ゆツくり相談をしてからと自分が良子に云つたのは、寧ろその場をつくろふ爲めであつて——實は自分だツて家内に相談するはぶち毀わしに過ぎぬくらゐのことを知らないではない。

　こりやア、いツそ、こちらから先手を打つて大きく出て、かの女につべこべ云はせぬ策を取るに越したことはないと決心できた。が、それでも家につくと、ちよツと氣がにぶつて、半ばおそる〳〵がらす戸を明けて這入つて行つた。幸ひにかの女の姿が見えなかつたので、急いで茶の間へ行つて、先づ火鉢のそばへ坐わり込んで、成るべく心を落ち付けてゐた。

　かの女は二階からたすきがけ、手ぬぐひをあねさん被りの姿で、掃木とはたきとを持つて下りて來た。お客の室までも日に少くとも二度は掃除しないで置かぬかの女の習慣と云はうか、若しくは癇性病みと云はうかを、兎に角、また因果な生れ付きだと憐れまれた。

『お歸んなさいまし』と云ふのをきツかけにして、渠は直ぐ出しぬけに、

『けふは、ね、都合のいいことを思ひ付いて、もう、それときめて來たよ。おいらがあの泰明寺を盛り立ててやることになつたのだ。』

『へい――あすこへおまわりになつたのですか？』

『………』渠はかの女に早や少し不安の色が見えたのをわざと見ないふりで、『ふと、その氣になつたから、ね。』

『良子さんは相變らずだらしなくしてゐるでしよう？』

『あア貧乏しちやア、誰れだツてもだらしなくならう、さ――この時節にまだ綿入れを着てゐるんだから、ね。』

『それが甲斐性のない證據ぢやアございませんか？』

『さう云へばさうかも知れないが』と答へた。が、渠はかの女がまた自分と相對して坐わり込んだのを見て、例の癇高い抗辯を先づ以て豫防するつもりで、『兎に角、おいらも今度は一つ發心して――泰明寺に住み込むんだ、ね。さうすりやア、お前の邪魔もしないで都合がよからうし、一面にはまたおいらのつぎ込む資本に利子がついて來る。』

『常雄さんもいらツしやるんでしように――？』

『あいつは相變らずのらくら者で、ね、今ぢやア別に女郎あがりと家を持つてるさうだ。』

『では、あなたがその常雄さんの、つまり、そのあなたの甥子さんの、あと釜にならうと云ふ――？』

『馬鹿をお云ひでない――年甲斐もない！』渠は斯うかの女の癇づつた皮肉を何げないふりで穩やか

に叱り付けたが、圖星(うぼし)をさされたのであるからちよツとどぎまぎした。そして顏が赤くなつたやうに思はれたので、それをまぎらす爲め自分の鼻が顏ぢうに皺を寄せるまでにこ付いて見せながら、『おいらだツてそんな馬鹿はしないが、ね、若しまた、よしんばしたところで、さうすりやアお前の爲めにやア邪魔ものがゐなくなるのだから、結構なわけぢやアないか？』

『勝手な理窟(りくつ)はおよしなさい、あんまり馬鹿々々しい！』

『ちよツとお待ち』と、渠はかの女が立つて行く後ろ姿に聲をかけて、『それに付いて云つて置くが、ね、あす、六十圓を持つて行つてやらなきやアならないんだから、お前の貯金(ちよきん)から出して貰ふよ。』

『勝手におしなさいな！』かの女の突ツ放した聲は臺どころの方から聽えた。

『無論』と、こちらは元氣(げんき)を出して、『お前の物はおいらの物だから、ね。』

* * *

『おかねぢやアないでしよう、あなたのからだが欲しいんですよ』と云つて、お安は底氣味(そこきみ)惡く笑ひながら、夜になつても飽くまで貯金帳を出さうとしなかつた。

『ぢやア、腕づくでみんなかツさらつて見せるぞ』と、渠はおどして置いた。

で、その翌朝(よくてう)になつて、かつ女は成るべく貯金には手をつけたくないからと云つて、お客さんの前拂ひや預り金のうちから、こちらの要求通り、耳を揃へて出して呉れた。そして渠は自分の思つてた

よりも容易に、また早く、泰明寺へ急ぐことができた。

六

『いよ〳〵わたしがゐることになれば、お二階のお客さんにもちよいと挨拶をして置かねばなるまい、ね、殊にさう二三年も前から同情を以つてゐて呉れてる方々なら』と云つて、渠は自分からのこ〳〵はしご段をあがつて行つた。そして丁度一人だけゐたところへ顔を出した。餘ほど優しく出て、『御免なさい――わたしは、ね、この家の主人の叔父に當るものですが、今回、頼まれてここの爲めに一と肌入れることになりましたので、ちよツと御挨拶にあがりました。下宿業の方もこれから少し改良して奮發させますから、どうぞよろしく、ね。』

『………』おとなしいお客であるかして、ただはい〳〵とこちらへあたまを下げてばかりゐた。

『餘ほどいい人品のかたと見える、ね』と、渠は下へ來てから皆に告げた。『本郷などの學生とは違つて、紳士らしく叮嚀なものだ。』こと更らに聲を低めて、『あア云ふお客さんは、ね、決して逃がしちやアいけないよ。』

『ありやア、もう、もとから常雄を憎んで、わたしにばかり同情して下すつてるんですから』と、良子は答へた。

『……』――渠はかの女の答へがあまりに事もなげなので、却つて、或は、あれとくツ付いてるのぢやアないか知らんと云ふことがちよツと氣まぐれに自分のあたまに浮んだ。

けれども良子や子供が、自分の爲めにやツと夏着が出せて、自分の見たところでは、先づ人並みに小ざツぱりしたうへに、渠等を初め、良子の母親までが、皆、自分のことを『叔父さん、叔父さん』と云つて尊重して吳れるのである。かの早く死んだ娘のはかなさや、逃亡して居どころさへ知らさぬ息子の不孝を思ふにつけても、これが初めて自分の身に親しく『お父さん、お父さん』と云はれてるかの如く嬉しかつた。

自分の居間として良子がきめて吳れたのは、二階のおもてに向つて、椎や青桐の繁りの上から海が見える、なか〱眺めのいい一と間であつたが、

『こんな結構な部屋は新らしく來るお客さんに殘して置いた方がいいと思ふから、ね』と云つて、自分から進んで下の、北向きなる、うす暗い一室をえらんだ。そして心の奧ではそれを他日かの女を口說きでもする場所とした。この室の高い緣さきにも庭があつて、がけうへの人道が高く、竹やぶと共にこれに迫つてるけれども、なほ瓢簞なりの長さ四間ばかりの池を備へてゐる。一つも手入れがしてなく、幾年間かの落ち葉や枯れ枝がそのままに池を埋めてるのであるが、どこから飛んで來た種かは知らず、コスモスが一本ひよろ長くこのわきに延び立つてゐる。ここをも追ひ〱は整理せねばなる

まいと考へられた。

一日は一日とたつに從つて、いろんな相談を受けるのだが、成るべく、まア、かねの話はあとまわしにして、渠は寺男にでもなつたつもりでそとまわりの仕事から始めた。最初から氣になつたのは門前の草であるから、それを先づむしり取つた。次ぎには、おもて庭の雜草を去つて、つつじの枯れ枝やらちやうじの不恰好な枝を切つた。それから、野菜を作つて置けば客のおかずにも重寶だからと云つて、尻はしよりで畑の土を掘り返し、そこへ菜ツ葉の種を播いた。そしてそのさくの切れたそとへ出て、鍬にもたれて休んだ時に、そばへ來てゐた仁に向つて、丁度自分の子に對するやうな心持ちで、かたわらの大木を仰ぎ見ながら、『この木には、ね、今にくるみと云ふ栗よりもおいしい物が成るのだよ。その時にやア、叔父さんが登つて行つて、たんと取つてやるから、ね。』

『叔父さんのお骨折りで畑が綺麗になりました、ね。』良子もそこへ出て來た。

『若い時とは違つて、これだけ作るのは骨だから、ね。』斯うは云ひながらも、この自分のおほ仕事を見ろと云ふけしきを見せた。

屋敷の周圍が廣いので、毎日枯れ枝の落ちたのを拾つても、それで毎日の湯をわかすことができるのを發見して、皆の錢湯へ行くことをやめさせて、自分が湯どのに水を運んで、自分で釜のしたの火をたいた。

ここの玄關は門を這入つて右へ六間ばかり行つたところにあるのだが、そこから左りへちへしたの座敷が延びて行つて、釋迦如來の本堂に接近してゐる。そして本堂は丁度寺門からの突き當りになつてるところで、ここにもお客を置けば置ける室が兩がはに各々一つづつあるにも拘らず、そのおほ格子の障子がみがすべて破れたり、すすけ切つたりしてゐるので、渠は自分の財布から紙を貰つて來て、綺麗に張り直した。本堂前にあるびんづる天にも新らしいよだれ掛けをさせた。

それから、本堂に向つて左り手の庭の隅には、ちよツとした地藏さまがあるのだが、矢ツ張り、ろツちやらかされてあつた。その家根まで取りかへるには大工を入れなければならぬので、先づ、そのまわりの草を去り、石地藏の身についたごみを拂ひ、その周圍やそこへ行くまでの道をはき清めた。

『……』こんな骨折りまでするのも、つまりは、やがて自分の物になつてしまうからだと思ひながら、渠は庫裏へ行つて、『お前は、ね』と、良子をさう呼んで命令した、『あすこのお地藏さまへこれから毎朝新らしいお花とお水とをあげなけりやアいけないよ。わたしは今あすこを綺麗に掃除して來たが、ね、人間と云ふものは隨分氣まぐれなものだから、毎日あアして置けば、段々お參りするものができて、お賽錢があがるかも知れない。』

『そりやア、あれでも元は御利益のあるお地藏さまだと云はれて、子供に目が悪いのがあると、よくお參りがあつたさうですから。』

『ぢやア、なほ更らのことだらう。』

斯うしてゐるうちに、その月の月末が來たが、ゆふべ拂ひ込まれたお客さま二名の宿料だけを以つてしてはどうしても不足が三十圓あつた。

尤も、そのうちには出入りの商人に對して拂はねばならぬ分ばかりでなく、月を越えて三日までには出さねば流れてしまうと云ふ良子の衣服の質受け費も含まれてゐた。

『これですから、ねい』と云つて、かの女が朝ツぱらから質屋の通ひ帳を出して見せるので、渠がそれをちよツと調べて見ると、そのほかにもまだ大きな口がある。一々こんな物をこちらがしよはされちやア――と先きまわりの迷惑を感じたが、大きな口をしよはされるよりは、今、小さいのを男らしくしよつて、もう、それツ切り二度とはしよはない方がましであつた。

『さう〳〵質などにやア置かない方がいいよ。』

『そりやアさうですが、ね――叔父さん、どうしましよう？』かの女は質の通ひと共にすべての書き付けをこちらの前にさらけ出した。

『………』渠はどうしても自分で何とかしてやらねばならなかつた。また本郷を當てにするよりほか仕かたがないのだが、それにはまだ時間が早かつた。晝めしまで庭まわりをしてゐた。午後、本堂へ一人おまゐりがあつたのから氣が付いて、大きなお賽錢箱を明けて見ると、――もツとも、おととひ

もこれを明けて失望したのだが、――今はまたたツた一つ宛穴錢と五厘錢とがあつた。庫裏の方へ持つて行つて、指さきにつまんで見せながら、『こんな物を投げるから、何の御利益もないんだ。』

『さう、ね。』良子が大抵のことをこちらまかせにしてゐるので、渠は自分の一存で賽錢は賽錢だけを別にして一つの箱に入れ、一週間にいくら、十日にいくら、一ケ月にいくらと、その溜りかたを調べて行く氣であつた。

『さア、これから行くと、丁度向ふがよろづ諸拂ひを半分ばかりすまして、半ば安心したと云ふところへぶつかれるだらう――今夜は、然し、都合によると、歸れないかも知れないから、さう思つて戸締りをよくやつておくれ』と、渠は云ひ置いて出た。

臺町に行けたのは午後の四時頃で、丁度まだ晩めしを出すには早いしと云ふところで一と息するつもりでだらう、兩方の米かみに卽效紙を張つたお安は、帳場兼用の火鉢の前に坐わつて、そろばんをはじいてゐた。

『……』かの女はこちらを見ると、先づ早やおぞげを振るつて見せた。

『わたしが來たのに』と、渠はづか／＼あがり込んで行つての威し文句にだが、いつものおいらが使へなかつた、然し、かの女の鋭くした目つきをこちらも負けないやうに睨みながら、『そらぞらしく何がこわい、ね？』

『またおかねぢやアないでしよう、ね！』

『いや、さう云はれると御明察恐れ入るが、ね』と、渠はそれでもちよツと洒落を云つてかの女を喜ばせたつもりで、『實は、まだ改良の手初めだから、うまく行かないで、お願ひに來たのだが、――どうかおいらの入費に三十枚だけ渡して貰ひたいのだ。』良子のことに觸れられるのを避ける爲めに、ただ自分の入用として持ち出したのであつた。

『………』お安の景氣が今月はよかつたかして、直ぐあツさりと要求だけの紙幣を提げ金庫から出して、それを持つたままの手で疊を二三度叩きつけながら、『これはあの女に取られるのですか？それとも、あなたの爲めになるんですか？』

『無論、わたしの爲めだよ。』渠はかの女のこちらへほうり投げたのを拾ひ上げながら、『今に見ろ、あの泰明寺をおいらの物にして見るから！』

『ふん、多分そのあべこべでしよう――』

『そんな――心配は――御無用だから、ね』と、渠はちやんと坐わつてた自分のあたまを三度に上下させて、意地づよさを見せる爲めの顏をしがめながら念を押した。

『ぢやア、それで――とツととお歸んなさい！その代り、もう二度と再びこツちへ來ちやアいけません！』

『………』とまつてやる必要がなかつたのを渠は自分でまた案外であつた。負けぬ氣のかの女のことだから、こちらを良子と、もう、できてるものと見て、わざと俄かに下宿人をでも男にしたのだアないかと思はれたけれども――。

七

作衞が今一度本郷へ行かねばならぬことができたのは、六月に這入つて、直ぐのことであつた。そしてこれも亦質物の爲めでだ。

良子が一日の日に質屋から歸つて來ての話によると、

『叔父さん、また一つお頼みができましたよ。あとで御迷惑なんか決して懸けませんから、ね――うちの都合がよくなれば、必らずお返しできるにきまつてますが、――お婆アさんの衣物なんです。それをどうしても今月は流れと見て競賣に附してしまうと質屋の番頭さんが云ふんです。立てつづけにお氣の毒ですけれど、たツた四十圓のところですから――それに、お婆アさんはわたしの親ですけれど、泰明寺にはよその人ですから、その持つて來た物を常雄の寺で流されたと云はれちやア、お婆アさんの身うちのはうに對してわたしが顏向けがなりませんから、ねい。』

『………』渠はそれには如何に多辯に泣き付かれても直ぐ承知の意を示めし切れなかつた。そんなに

期限が迫つてるものがあつたのなら、きのふ、良子の物を出して吳れろと云つた時に旣にかの女には分つてた筈だ。こちらも帳面づらではちよツと一見したほどだから。それをこちらによくは知らせて置かないで、圖々しくも先づかの女自身の物を出させてから、そのあとで云ひ出した。よしんば、承知するにしても、順序に於いて二重の手間を要するが、而もきのふのまたけふだ。或は、あまり一どきにはと云ふ遠慮があつたのかも知れぬが、まれには少しかの女に圖々しい點が見えないでもなかつた。その母親といつもしツくり行かないやうなことのあるのもその爲めであつたらう。

『きツと恩返しは致しますから』と、口のさきばかりで云つてるが能でもないだらう。私かに自分が考へて見るに、ここは自分と良子と母親との三人三樣の寄り合ひ世帶のやうなものだ。この場合恩返しには少くとも三つの行きかたがあらう。第一、借りたかねに利子をつけて返せるまでは、家の會計を全くこちゝにまかせること。第二、さうでなくば、追つてこの家をこちらに渡す爲めに、家族はみな無條件でこちらの扶養を受けること。これも駄目なら、第三、こちらと良子とは夫婦になつて、この家業を相助けて繼續すること。

ところで、第一のに從つて云へば、かの女は人のかねは受け取つても、これをどう使つたかを詳しく知らせない。それでは、こちらは債權者でも何でもないうへに、寺をとこの眞似をしてゐるのも餘計なことにならう。第二の行きかたの如きに至つても、殆どそのけぶりも見えない。かの女はこちら

の金でこちらを扶養でもしてゐるかのやうなつら構へを時々しないでもない。けれども、既に二度もかねをつぎ込んだのであるから、こちらも今となつては乘りかけた船であつた。

『畜生！今に見ろ』と、渠は庭の掃除をしてゐながら心の底に妙な氣を催して獨り言を云つたことがある。どうしても、第三の策が自分にもかの女にもお互ひに便利なのぢやアないかと思はれた。

『わたしだツて、まだ、浮氣をしようとおもやア、できる年ですから、ね』と、かの女も或折りに、その母親もゐる前で、冗談のやうに、歯くその附いた歯を歯ぐきまで出して笑ひながら、語つた。仁に出ない乳をしやぶらせてた時だが――。

『そりやアさうだ、放蕩で而も薄情な亭主なら、それをかれこれ云ふ權利はない。』斯う渠も自分の合ひ槌を打つて置いた。きツとかの女も自分の考へつつあつた第三條件に這入つて來る前ぶれだらうと思へたから。そして斯う云ふ方に自分の心が向いて行くと、自分の矢ツ張りもツと出してやらうと思ふかねのおもてにも、前以つてあツたかみがあるやうにおぼえられた。

『すみませんが、何とか、ねい――』

『よろしい』と、渠はかの女にまた答へてしまつた。『然し、今度はきツと、さう、らくには行かないよ。お前も知つてる通りのお安だから、ね、きツと今度はがん張るに相違ないから。』自分としては、本郷にある自分の洋服を數へて八着とも持つて來るのが一番無事だらうと考へられた。隨分着ふるし

たのもあるが、また、自分が臺灣に於いて高等官同樣の人々に入りまじつて交際した時のフロクコートもそツくりしてゐる。また、鑛山にゐた時に、自分のうちの質流れをそのまま自分のにした隨分立派なオールフルコート(と、むかし通りの發音で自分はオヷコートのことを思ひ出しながら)もある。こんな物はすべて——これを自分がそツくり讓つて着せてやらうと思つてた息子がゐない今日では、——賣り飛ばされても質入れされても、自分には、もう、用のない物であつた。無論、別に都合のいいことができたとしてだが——。

『なアに、談判が六ケしくなりやア』と、かの女はお安を見くびつてるやうであつた、『わたしが加勢に行つてあげます、わ。まア、二三日とまり込むつもりで行つてらツしやい。』

『とまり込んだツて、もう、わたしはあんな婆々アに野心なんかはないのだが、ね』と、渠は思はず自分の語るに落ちた。そして、こツちからも向ふからも兩方で女の燒き持ち責めになつちやア、自分の立つ瀨がなくなるがと思つた。『都合によると、わたしはいツそのことわたしの財產をみんな持つて來ようかと、今、考へ付いたのだ。さうするにやア、なほ更らお前が來るのはよくないよ。どんな思ひ違ひから』と、自分の弱みをそこに包み隱して、『女同士が喧嘩にならないとも限らないから、ね。』

『叔父さんの爲めなら、わたし、お安さんと喧嘩なり云ひ合ひなりもしてあげます、わ。』

『ありがたいことにやア相違ないだらうが、ね、さうまでしないでも、わたし獨りで無事にうまく取

つて來られるだらうよ。』斯う呑氣に構へて、渠は三度目の無心をした自分の女房のところへ歸つたのである。

自分が暫らく獨りで過した寂しみをかの女にも自分で思ひやつて、渠は先づかの女の機嫌をこれで取り直せればと私かに願つた。二階の明き間へ追ひやられながら、その日の晩もその翌晩も何かの誘ひが階下からあるのを空しく待ち明かした。

渠は今回は自分の來た目的をおくびにも出さなかつた。すると、かの女も亦特別に何も聽かなかつた。そして晝間は、二人の間に何ごともなかつた時のやうに火鉢に向ひ合つてうちわを使ひながら世間ばなしもするが、夜になるとかの女はぱツたり近づいて來なかつた。

あだし男の寢どこへでももぐり込んで行くのぢやアないかと思つて、第一夜には一度夜なかに下りて行つて、戸締りを調べるふりをしてかの女の室をそれとなく檢査すると、かの女は獨りで蚊屋の中に眠つてゐた。第二夜には、少しからだの鬱勃を溜りかねて、わざと亂暴をして見せるつもりで、かの女の簞笥の鍵を探した。が、いつものところになかつたので、そのまま簞笥の小引き出しを無茶苦茶にがた／＼云はせた。

『何をなさるんですか』と云つて、かの女は筒袖の寢卷き姿で出て來た。引き出しをこわして中の物を出してでもしたと思つたのか、最初は全く眞ツさをな顏になつてた。

『貯金帳を出せ』と『渠は突ツ立ちながら、『いくら溜つてるか見るのだから！』

『あすにして下さい――わたしも今度と云ふ今度は決心がありますから。』かの女はしたにかた膝を突いて、電氣の光にこちらを恨めしさうに見あげた。

『……』何をぬかすとでも叫んで、思ふさまかの女の横ツつらを撲ぐりつけでもしたら、この憤りは一時直るだらうかと思つたけれども、じツとさし控へた。そして再び二階へあがつてから、どうしてもこれはお安にもいよ／＼別れる氣が出てゐるのだらうから、自分はます／＼良子の方を抱き込まねばならぬと考へた。

『……』翌朝になると、少し手のすいた時に火鉢へ來て、お安から先づ口を切つた、『こないだぢうのおかねは、もう、無駄になつたのですか？』

『無駄ぢやアない、まだ足りないのだ。』

『いくら持つて行つても足りないでしようよ――あの後家さんにしぼられてるにきまつてますから、ね。』

『後家とア可哀さうぢやアないか、また常雄が死んだわけぢやアないし、』と、辯護してやる氣になつたが、何げないふりで、『おいらをそんな腑ぬけだと思ふか？』

『さうぢやアございませんか――三度目のおかねを取りに來ても、あなたから何とも云ひ出せないで？』

『そりやア、少しやアおいらにも良心があるから、ね。』

『良心がまだおあんなさるなら、おかねを持たないでお行きなさい。いくらつぎ込んだツて、あのだらしな屋を取りとめることはできないでしようよ。常雄さんは利口だから、早くからそれを見ぬいて逃げてるのに、そのあとを――人もあらうに――その叔父がねらふなんて！』

『……』さう云はれて見ると、尤もな點もないではなかつた。渠がちよツと考へ直して見ても、良子の元來が不精な女だ。地藏さまの水やお花だツて、その後、自分が注意してやらねばいつも怠つてる。そして衣物を質から出すのもいいが、それが少しも家業の助けになることではない。折角の資本を殺して行くやうなものだから、またかねが入用になると、またずる〳〵と同じ物を質入れしてしまうだけのことだらう。そんなものに自分の大切なかねをつぎ込んでるのは馬鹿〳〵しいことであつた。『ぢやア、一つ考へ直して見ようよ。』

その翌日、乃ち、六月五日も渠は二階に立て籠つて、成らうことなら小がね貸しにでもならうかと考へた。そして夜になると、詰らないので早くからとこに就いた。そして、ふと眠りから覺めると、したには何だか大きな聲をしてお安と今ひとりの女とが云ひ爭つてる。良子が來てゐるのだと分つた。で、とこのうへに半身を起したが、暫らく自分はそのままで耳をかたむけてゐた。

『わたしは何も叔父さんをだましてゐるんぢやアありませんよ。叔父さんが尋ねて來られて、常雄の

不仕だらに呆れて、それぢやア困るだらうから、わたしが何とかしてあげようとおツしやつたんで、わたしもそれはありがたいことだからツてお賴みしたんです。』

『ぢやア、その出したおかねが生きて來ますか、ね？』

『生きるにやアきまつてるでしよう。段々うちが繁盛して行けば、その恩借金は利子をつけて返せますから。』

『そりやア口のうへでは、ね。』

『口ばかりぢやアありませんよ、さう馬鹿にして貰ひますまい！』

『………』渠はこれを聽いてうツちやつては置けなかつた。そのうちにお安がこちらの野心を素ツ破拔きでもすると、今起きてて聽いてるお客さまどもや良子その者にも自分の都合が惡いと思つた。飛び下りて行つて、『何もふたりともそんなに大きな聲をするにやア當らないぢやアないか？良子もまた何の爲めに今ごろやつて來たんだ？』

『叔父さんが暫らくお見えになりませんから、どうなすつたか、御病氣にでもなつてゐられはしないかと思ひまして。』なか／＼體裁のいいことを云ふ女に聽えた。

『………』渠は良子の自分に向けた目つきに、是非自分を奪つて行きたいと云ふやうなみだらな光りまでを認めて、またその方に心を動かしながら、『病氣ではないが、ね、少し考へることがあつたの

で――』

『もう、考へるまでもないことぢやアありませんか？』

『………』お安に比べても、一層つけ〳〵云ふ女だと、初めて渠は氣が付いた。

『人が考へないで何ができます？』お安はまだおこつてた。『わたしは斯う見えても、ね、まだあなたよりやア少し年が若いんですから、ね！』

『………』渠はお安が何の爲めにそんなことを云つたのかよくは分らなかつた。察するところ、多分男の取り合ひなら若い方が勝つとでも云ふのか？それとも、一方にだまされるほどまだ老いぼれてやしないと？で、かの女に向つて、『お前も下だらぬことを云ふのはおよしよ。』

『ふん』と、良子も調子に乘つて他方をにらみ付けて、『若いからあなたまでがわたしにだまされると云ふんですか？』

『お前も亦何を云ふのだい？』

『なアに、ね』と、俄かに良子は顏を和らげて、『叔母さんの云ひぶんでは、何だかわたしが叔父さんをまで取り込んだやうに云はれますから。』

『このままぢやア』と、お安も笑ひになつてだが、負けてゐないで、『さう云ふ結果になりますよ。』

『なアに、そんなことはない、さ。』渠は實際に女の方のことは氣まぐれないだから、泰明寺を何とか

して自分の物にさへすれば、ただそれでいいのだと云ふ氣になつた。

『叔父さんにくツ付く位なら、わたしは、それこそ、自分よりずツと若いのをおもちやにしてやります、わ。』

『は、は、はア』と、渠はお安と共に無邪氣な笑ひに落ちたが、良子をいよ〳〵一すぢ繩では行かぬ女と知つた。で、ここだと自分は露骨に出て、『兎に角、例のことで來たんだらうが、わたしも考へたところでは、今度こツちの資本をつぎ込むとすりやア、今までのやうな曖昧なことぢやアいけない、ね。その代り、おいらの方でも大奮發をして、あすこの疊から障子までをみんな取りかへて、家業に大改革を施すが、どこでも會計は債權者が預かるものだから、さうしなけりやアいけないよ。』

『そりア、どうでも叔父さんの御都合のいいやうに――』

『ぢやア、今晩は、もう、電車がなくなるといけないから歸りな。』時計を見ると、十一時を過ぎてゐた。

『では、叔父さん、あすのお晝までにお待ちしてゐますから――叔母さんもお休みなさい。』

『………』お安は良子をうはべばかり機嫌を直して送り出してから、こちらに、『また氣が變つたんです、ね』と云つた。

『どうも、一度約束してしまつたものだから、それを中止すると、うそをついたことになるから、ね。』

『あなたの馬鹿正直とお猿さんのやうな笑ひ顔とにやア呆れましたから、ね、わたしは、もう、何も申しません。お望みの洋服も貯金もみんな持つてお行きなさい。その代り、わたしのまゝツ子が歸つて來てもわたしにやア今度何の關係もないやうに、あしたは直ぐ夫婦別れの手續きをすませて行つていただきます。』

『それもよからうよ』と、いま〳〵しくだが、こちらも答へた。

八

運送屋に委托して手廻りの荷物を拵らへる監督をしたり、調べて見ると百六十圓ある貯金帳の名義を郵便局で書き換へる手續きをしたり、離婚屆の爲めに二人で區役所へ行つたりしたので、約束の時間を後れて、やツとゆふかたに渠は泰明寺へ歸つたが、それからと云ふもの、自分の鼻いきが荒かつた。

一ケ月ばかりの間にすべての客間の疊がへやら修繕やらをすませ、家根の雨漏りを直させ、庭のでこぼこや破れ垣根をつくろひ、その他に庫裡のへツついに至るまでの修理を行ひ、泰明寺は人が見違へるだらうと思はれるほど體裁が一變した。軒には涼しさうに靑すだれもかかつた。

『おかげさまで、ねい』と云つて、嬉しさうに家ぢうを渠と共に良子が見まわつて來た時、かの女に

向つて、渠は庫裏にできた新らしい長火鉢の上座に坐わりながら、得意のにこつきを鼻の上にまで見せて、——これをお安がお猿さんのやうな笑ひと嘲つたのだらうと自分自身でも考へられたが、持ち前だから仕かたなかつた。

『どうだい、斯うして置きやア、もう、常雄がたとへやつて來ても、何とも云へた義理ぢやアなからうが？若しなほ未練がましいことでも云つて來たら、おいらが承知しねい。』

『さうですとも！』良子も亦相對して火鉢の前に坐わつた。

『………』明け放つた室外にも、丁度、ほかに誰れも見えてなかつたので、渠は夫婦氣取りのさし向ひと見て、時ならぬ胸のとどろきをおぼえた。それを無理に制しながら、『このうへは、もう、ただ一つ約束がお前の方に殘つてるだけだよ。』

『何でしよう、叔父さん』と、かの女は少しかがみ勝ちなからだを引いて、困つたと云ふ風で、『會計のこと？』

『なアに、ね——』渠はかの女が恥かしい爲めにわざととぼけてゐるのだと思つた。少し云ひにくさうに、『お前とおいらとが夫婦になること、さ。』

『………』かの女はびつくりした。『いつ、そんなことを約束しました』と、俄かに眞ツ赤に怒つた。

『だから、前から叔母さんにもそんな思ひ違ひのないやうに云つて置いたぢやアありませんか？』

『………』渠はあの時のことをさう云ふ意味とは取つてゐなかつた。寧ろその反對だ。かの女がきまりの惡さをお安の前で隱す爲めに堅いやうなことを云つたり、また、くツ付くなら叔父さんよりも若いものになどと度胸づよく毒づいたりしたのであつて、いよ〳〵最後の大資本をおろしてやると云ふ時の條件には、暗に結婚のことが這入つてるものと思つた。けれども今反對されて見ると、義理上の叔父としても、さう明らさまに主張できないので、『何も約束がしてあつたと云ふのぢやアないが、ね、約束したらどうだらうと云ふんだが――』

『いやです、わ、そんなこと!』かの女は言葉の上でこちらを突ツ放して、茶の間を出て行つてしまつた。

『………』畜生!ぢやア、會計をも飽くまでこちらへ渡さないつもりだ、な、と渠は初めて感づいた。それでもなほ他日かの女に寂しい氣まぐれが起つた時を見て、再び云ひ寄れるものと信じた。

然し、それからと云ふもの、渠の信用はこの寺ぢうに落ちてしまつた。氣のせいか、二階のお客さんまでこちらを馬鹿にするやうだ。渠自身で私かに惡く取つて見ると、もう、家や庭の修繕もすツかりできたから、お前などはゐないでもいいと云ふやうであつた。

なか〳〵涼しさうで、けしきもいいと云つて、暑中休暇の時節にも拘らず、前拂ひのお客さんが三四名も果してやつて來たが、かの女は受け取れた現金の顏さへも自分には見せない。それぢやア約束

が違ふと云ひたいのだが、自分に弱味ができたのでさし控へるより仕かたなかつた。賽錢を集めて置く箱にも時々誰れかの明けた形跡があるので、もう、そのあがり高の統計を取ることもできなかつた。これを良子に注意すると、

『子供でしようよ』と相手にしない。また、『どうせ僅かしかあがらないんだから』とも答へた。さう僅かと知つてゐるには、その本人もこツそり明けたのだらう。

　その上、かの女は最初のやうには立ち働かなくなつて、客間や勝手の不潔などをあまり掃除しようともしないで、ひまを見ては仁と共に寢ころんでた。

『三番のお部屋を掃除して來たらどうだ、ね』などと、渠はつい度々小言を云はねばならぬので、その度每にかの女の我意、よい反抗的理窟を聽かせられた。

『さう叔父さんにばかり意張らせる約束ぢやアなかつたのですよ、わたしの方は都合がつき次第借りたおかねに利子をつけて返しさへすりやア――それが爲めに、あの時、叔母さんもわたしから證文を取つたのでしようから、ね。』

『ぢやア、いつ返す?』

『それは、今御存じの通りぢやアございませんか』と、かの女はこちらがつよく出ればおとなしかつた。『今少しうちが發展すれば、耳を揃へてお返しします、わ。』

『裁判にかけても取つてやるぞ』と、渠は叱り付けたことがある。お安のどうしてもと云ふ要求を満足させる爲め、良子をして證文一通を書かせて向ふへ持つて行かせたのは、今となつては却つて好都合であつた。まさかの時には、それが口を利くだらう。自分としては、どうせここへ入り込むのだから、そんな物はどでうもいいと思つたのだが――。

再三再四の衝突で互ひに感情がます〱かけ隔たるやうになつた時、丁度、渠がむかし里子にやつたまま二十年あまりも逢ふ機會のなかつた娘の則子がその亭主と共に素ツ寒貧で訪ねて來た。で、この夫婦を自分の代りに月十五圓の實費で下宿させて貰ふことにして、自分は自分らの所謂『ノウマニイ』『無一物』『着のみ、着のまま』で、また本郷へ歸つて行つた。さきに持ち出した八着の洋服なども、質屋に行つたまま、泰明寺の修繕に固定してしまつたのだ。

九

『案の定、素ツぱだかにされて來ました、ね』と、それでもお安はくやし泣きに泣いて呉れた。

『………』渠は寢卷きも同樣のひとへ一つであつた。『もう、何も云はないから、ね、どうか乞食が來たと思つて臺どころのかた隅にでも置いて貰ひたい。』

かの女も何も云はなかつた。そして、ありがたいことには、二階の明き間を一つ與へて呉れた。渠

は用がない時にはいつもそこに小さくなつてゐた。そしてあれだけのかねを持つてゐたら、可なりのかね貸しになれたものをとくやしがつた。

或時、則子が尋ねて來ての話によると、良子にはその前から男があつた。そしてそれは作衞が泰明寺へ乘り込みの挨拶を最初にしに行つた時の、かの若い、紳士らしくおとなしい人だ。

『呆れたものだ』と、渠はさきにちよツと疑ぐつて見たことの當つてたのが却つて意外なのに歎息した。そして良子が晝の間をぐうたら寢ころんでたのは、夜、あの男とちちくり合つてた爲めだと思ふと、今更ら私かに自分の胸が煮えくり返つた。

『どうです、ね、どうせあなたは今ぢやアどツちにも他人ですが。わたしとあの女と？』

『もう、何も云つて呉れるな――實際に關係なんかあいつとはなかつたのだから。』渠は斯う云つてお安にあやまつたけれども、かの女は信じないやうすであつた。

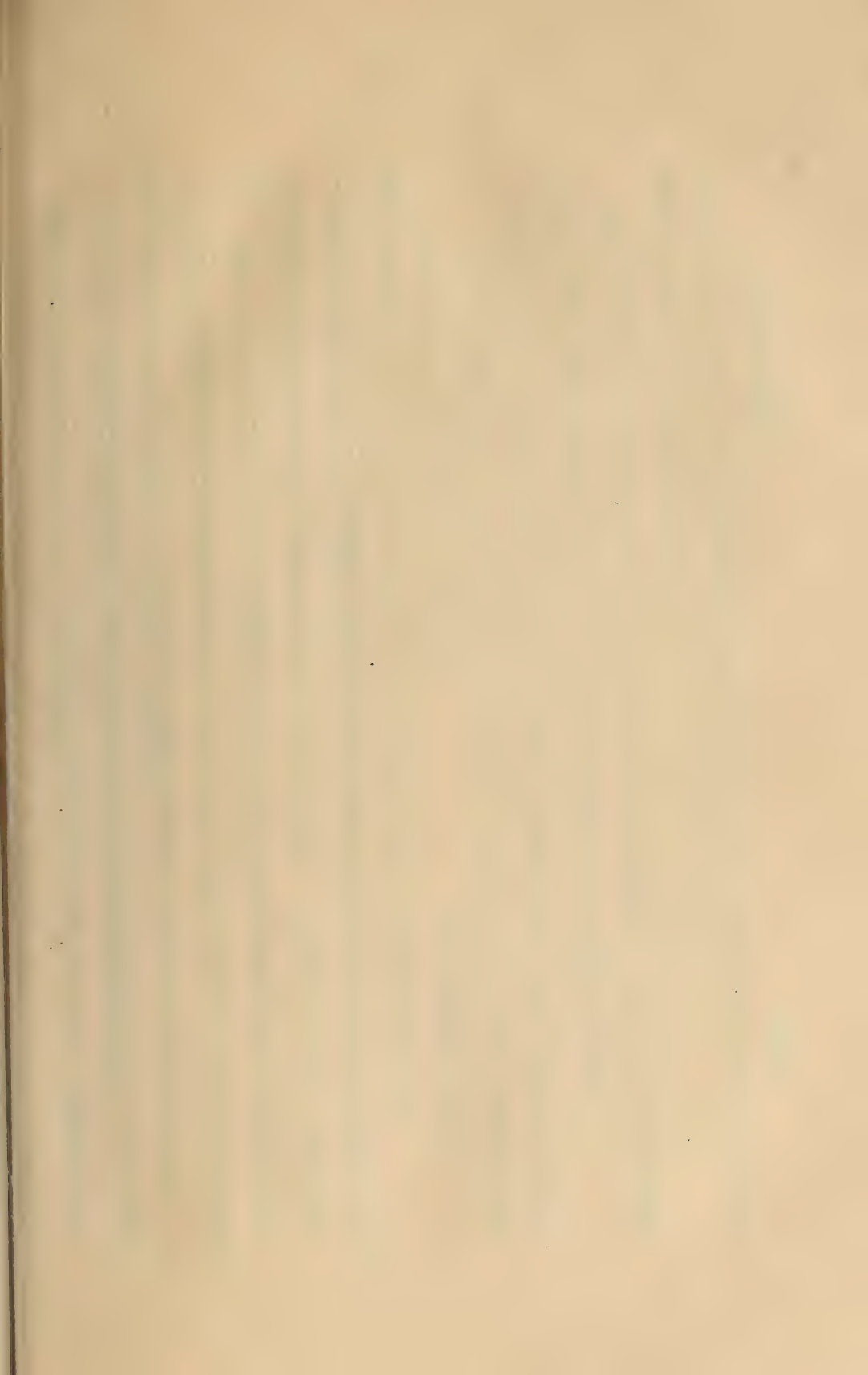
そのうちに、また、逃亡してゐる息子の便りが案外にも滿州から來たが、病氣の爲めに消費したかねを返却する必要上、二百十八圓を送れと云ふのであつた。こんなことがあるのをも前以つて心配して、お安は自分と手を切つたのであるから、今更ら相談することも自分としてはと遠慮された。止むを得ず、泰明寺へ相談しに行つて見た。すると、良子は話を半分も聽かないで。

『叔父さん、駄目ですよ、道一さんにいくらおかねを送つたツて、常雄と同樣で、無駄です！』

『さうでもなからうと思ふが、ね――』渠は自分の子に對してはまだ慾があつた。まだ年が行かないものを常雄と同一視されたくなかつた。けれどもかの女は、こんな場合に御相談に乘れればいいのですがとてもおだやかに出ればこそ、かの女の所謂恩借などは露ほどもおぼえてゐないかのやうに、白ばツくれて、非常識にもこちらをまたはね付けたのだと、自分には受け取れた。歸宅してからお安に訴へたには、『あいつはいよ〳〵以つて薄情な女だ、ね。まるで義理も人情も知らない女郎のやうだ。あんなやつにやア天がどうせ一生幸福を與へまい、さ。――然し、不思議なことには、わたしがよくして置いたお地藏さまには、あんな見すぼらしかつたお地藏さまだが、ね、ちよい〳〵お參りがあるやうすだよ。』

――(大正七年十一月)――

家つき女房

一

『おい、お葉、おまへも早く湯に行つて來ねいか』と、うちの人は今夜も亦店の方から聲をかけた。こちらも殆ど同じやうに太つてて、男だけにそのうへ嚴丈でどツしりしてゐる人の言葉だが、きいた風に近ごろ江戸ツ子じみた眞似をし出したのが――初めから江戸ツ子なるこちらには――少しきざに見えるだけで、人がらにも似ぬその聲の優しさにはいつもながらこちらの身も心も引き入れられるのであつた。ましてやこの二三日と云ふものは、それにまた一層の優しみが加はつてこちらの心を動かすのであるが、そこに一點の疑ひを入れて見れば、その加はつた優しみだけが餘計のやうだ。人のよく云ふ猫撫で聲にも聽こえる。それが如何にも不思議であつた。

『………』だから、わざと直ぐには返事をしなかつた。その爲め、つい、心がいらいらしてゐるのが自分ながら桶の中で皿小鉢や猪口のちやら／＼云ふ音に分つた。

『………』うちの人はなほ、餘りにわざとらしいほど優しい聲で、一言をつけ添へたのである。『お瀧

ではとても赤ン坊の世話はできめいから、な。』
『はい。』赤ン坊と云はれたので、つい、お葉も返事してしまつた。
きのふも考へたことだが、子どもをひとりも産んだ經驗のない者が、可愛がつて湯屋へもつれて行つて呉れるのは、こちらの急がしい時間を全くありがたいことでないことはない。が、不慣れの爲めにあつい湯の中へすべり込ませたり、板の間へ落されたりしては困るのであつた。それに、折角、あツたまつたものにうか〳〵して湯ざめの風を引かせられても可哀さうであつた。けれども、どうも不思議でならなかつた。
一體、お瀧さんは何の爲めにしげ〳〵とうちへ來るやうになつたのか？ただうちの人のいとこの女房であると云ふだけではないか？そのうへ、うちがまだここへ移つて來なかつたつい此の間までは、いとこもさう親類づき合ひをしなかつたではないか？淺草からこんなところへ移つて來たので、うちが近くなつた爲めだと云ふだけなら、それまでを餘り薄情にしてゐたわけではないか？まさか、手ぢかへ女の好む呉服屋がやつて來たからと云ふばかりでもあるまいに――？
そしてやつて來ると、きツと、おのれのうちででもあるやうな顏をして、店の小切れや反物を勝手次第にいじくりまわして、高いからもツと安くしてやれとか、安いから今少し高く賣るがいいとか、あまツたるい言葉を以つて、失禮にも、こちらにまで差し圖がましいことを云ふ！

ずツと年が若いからツて、年うへのものを馬鹿にする氣か？

『あたしが色をとこを持つたら、先づ、ね、これを襦袢の袖にしてやる、わ。』

『………』かの女はお瀧がうちの人にべた／＼してゐる様子やら言葉ぶりやらをあの時見てゐ、聞いてゐたままに思ひ出してた。團十郎の歌舞伎十八番の富樫や辨慶や。名古屋さんざの模様のついた羽二重切れを、そして欲しさうに取り出して來た。

如何にもいやな女だ。

絹琉おほ島がすりの羽織り地に、かすりの崩れがある爲めに、たツた拾圓五十錢の札を附けてあつた。それを知りもしないで、而も利いた風に、

『これはあんまり安過ぎる』などと云つた。

『………』こちらにはそんなおせツかひは云つて貰ひたくない。

また男の袖にはいいがらだけれども、少し紡績が這入つてゐるので四圓五十錢になつてゐた。ところが、あの女には紡績入りと本物とを見分けるだけの目がまだできてゐなかつた。安ツぽい職人ふぜいのかみさんとしては、つまり、それが當り前でもあらう。そして、

『あたしに呉れるなら、これでもいい、わ』などと、虫のいいことを云つた。

『………』然しまた別に不思議なことがある。めん甲斐絹のうらでも附けたら、前かけとしてちよツ

と本物にも見えるだらうと見立てられたところの、黑地に黃色と赤との格子じまがあつたのが、それが賣れたおぼえのないのに、きのふから見えないのである。『あなたは御存じありませんか』と、うちの人に聽いて見ると、

『……』少し小くびをかしげて見せてから――それも然し疑へばわざとらしかつたが――『はて、な』と答へたのがそのこなしに釣り合はなかつた。そして曖昧な顏つきで返事をした、『おりやア知らねいぞ。店さきにかけてあつたのだから、盜まれたか、な？』

『まさか――？』證據もないのに云ひ出して、また年甲斐もなく燒き餠かと突ツ込まれるのが面白くなかつた。うちの人には少なからず氣が立つてるやうなところも見えたので、それツ切りさし控へた。が、きツと、お瀧さんが渠の承知のうへで持つて行つたのであるに相違ない。

なんしろ、晝までも夜でも、かの女が來て、店さきでぺちやくちやしやべつてゐられちやア、お客さんの邪魔になつて、邪魔になつて――。

『これがいいでしよう、あなた、お價段も安くツて』とも、かの女は店でお客さんがその買ふ反物をはでなのにしようか、それとも少し地味でもいい方にきめようかと考へてたのに云つて聽かせた。

『……』安けりやアいいとばかりは云へないのである。そのうへ、そんなことは向ふのふところを馬鹿にした言葉ではないか？ほんとに、邪魔になつて、邪魔になつて――。

奥に這入つてる時でも、またかの女の聲は晴ればれして氣持ちがいい代りに、餘り甲高いのが氣になつて溜らない。

『あら、あぶない！』かの女は自分で赤ン坊の枕もとに突き當りかけて、頓狂な聲を出したツけ。折角よく寢ついたものがその爲めにまた目をさました。こちらのやうに調子が低く、而ものツそり物を云ふと時々叱られてるものには、唐人喇叭のやうにまことに耳ざわりでならぬ。

『もツとおとなしくおしやべりをするものですよ、あなたはあんまり活潑過ぎます』とたしなめてやつた。成るべく角の立たぬやうに笑ひにまぎらして云つてきかせたのだが、向ふにこたへがなかつたのである。

『おばさんとあたしとアまるツ切り性分が違つてるんですもの！』

『………』こちらには矢ツ張り人を馬鹿にしたとしか響かなかつた。

實際に、お瀧さんが何の爲めにやつて來るのか分らないが、そんな若いものを相手にして喜んでるうちの人の心持ちも亦こちらには分らなかつた。

かう云ふことを考へ込んでると、今ふたりに飲ませた酒の猪口と共に皿小鉢が桶の水の中でちやらちやら云つてるのが自分の耳には氣遠くも聽えてゐた。

この商賣は何と云つてもおほ問屋に信用がなければならぬ。そしてこの信用を得るまでなか〳〵容易でない。

二

ところが、うちなどは、一たび今の代となつて失敗してしまつたものの、兎に角、もと〳〵から數代に渡つての呉服屋であつた。それが一つの信用その物であるから、たとへ初手からの資本がなくとも再び斯うやり初めることができた。品物は店相當にどし〳〵持つて來て呉れる。

それも然しうちの人に對してではない。云はば、つまり、家つきの自分に免じてである。このことはうちの人も十分に承知してゐて、いよ〳〵再びこの店が持てるやうになつた時、

『お前の爲めだ、お前の働きだ、實に、ありがたい』と、涙をこぼさんばかりにして、こちらに向つてあたまを下げた。それほどのことは當前である――實に、家つきのものとして自分のうちの古い信用を持つて行つて問屋によく分るやうにかけ合つたのだから。そしてよく賴んで品物が來るやうになつたのだから。その時までは、まだうちの人は然し江戸ッ子氣取りではなかつた。この氣取りだをかしいほど俄かに出て來たのは、お瀧さんが來初めてからである。かの女は女の癖に何かと云ふと、

『なんだ、べらんめ』とか、『やッ付けちまへ』などを口に出す。職人とのつき合ひがある爲めにだら

う、冗談やらから意張りはうまいものだが、落ち付いた商賈のことなんかは殆ど全く知つてゐない。
『………』氣の毒なことには、反物屋がちよツくらちよいとにできるものとでも思つてるらしい。
『あたしも、おばさん、ここの旦那に吳服屋の店を出して貰はうか知ら――一體、日にいくら儲かるんでしよう、ね？』
『………』こちらはその無邪氣だが丸で無茶苦茶な問ひには、ただ笑ひを以つて返事なしの返事をするより外に道がなかつた。資本にもよるではないか？する場所にもあるではないか？このやうな――つまり、――日本橋や淺草に比べては、――云はば、まア、場ずゑに當るところと、ほん場とでは、また丸で違ふ。それに、うちの先代のやうに、小僧や番頭を多く使つては、そのことも考へなければならぬ。
『大きくやれば大きく儲かるし、小さくやれば小さく儲かる』と、それにはうちの人も冷かし半分に分り切つたことを云つて、にや〳〵笑つてゐた。
『そりやア、知れたこツてしようが、ね――』斯うまたあまへたやうにからだをちよツと二つに折りひねつて、それでも少しはおこつたやうすであつた。多少は人並みのたましひもあるらしいその橫ずわりを、後ろから見ると、根のゆるくなつたぺちやんこのいてふ返しがぐら〳〵動いてゐた。
『………』こちらにはそれが如何にもだらしがなかつた。

色はさう白くないけれども、かの女の顔立ちがきやしやで仇ツぽく、若し賣られて行くなら藝者向きだ。どツちかと云へば、いきな肌合ひに生まれてゐるからこそ、あんなにだらしない風をしてゐても通れるのであらうが――しろうとにしては餘りあけすけな、ざツくばらんで、うちの娘どもに比べては、丸で行儀作法をわきまへてゐない。遠慮と云ふものを知らず、そのうへ立ちゐ振舞ひに不注意だらけだ。

大きな方の娘は今ここに一緒にゐないからかまはないけれども、若しゐたら、もう年ごろになつてるのだから、お瀧のやうな女をうちの人のいとこに當る人のかみさんとして斯うしげ〳〵見せて置くことはできなかつただらう。うちが淺草にゐた時には、お瀧の方は少しも來なかつたからよかつた。

が、うちが失敗の結果、一度しもた屋になり、新宿の奥の長屋へ假り住まひをすると、いとこが一度やつて來た。そして、

『どうも敷居が高くなつて、とても行けなくなつてましたが、斯うちよくになつたから、またちよくちよく寄せて戴きます。』

『……』人を馬鹿に！こちらの失敗したのをちよくになつたなどと云つた。あの時には、こちらもくさ〳〵してゐたのだから、お前のずツと年うへいとこが道樂とお人よしとの爲めに家をぶツつぶしてしまつたんだぞと、餘ツぽど云つてやりたかつた。

『やつて來るのはいいけれど、お前ももツとしツかりしなけりやアいかんぞ――さう仕事嫌ひでは』と、うちの人にさへこんなたしなめを受けてゐる人で――勇ましい職人はだでもなかつた。

『へい』と、まづい返事であつた。

いよ〳〵ここへ來てからは、またいとこは薩張り來ない。その代り、仕事嫌ひの亭主をいやがつてるその女房が來てその亭主に對する不平をあの甲高い聲でさんざんに並べ立てた。

『あんな男ぢやアなかつたのだが』と、うちの人も多少うちをかばふやうに困つてゐた。

『……』それから時々足が向いて來るやうになつたが、初めのうちは、こちらも、あれだけの器量のいい江戸ツ子むすめをあんな亭主に――たとへ、好きでくツつき合つたとは云へ――いつまでも添はせて置くのは可哀さうだと思つた。よく持て爲してもやつた。が、それをいい氣になつて圖に乘つて來た爲めだらう、この頃ではいやなほど多くのあらを見せるやうになつた。そしてかの女のそのあらのあるところにつけ込んで、うちの人がよく冗談を云つたり、手でからかつたりするやうになつた。そしてまたお瀧がそれを嬉しがつてるやうにも見える。

うちのが女にかけてはなか〳〵喰へないところのあるのはよく分つてるだけに、この頃、時々おそくまでもうちを明けることがあるのを、疑つて見れば、お瀧とくさいやうにも取れないことはなかつた。そんな時に限つて、かの女はよひから顔を見せない。

そこへ持つて來ての新銘仙だ、高が知れたきず物とは云へ、あの前かけをいつのまにかやつてしまつたりして――

ふと、にツこり獨りで笑はないではゐられなかつた。あの代物にはちよツと人の氣が付かないやうなしみの如きものがあつた。當り前に賣らうとしては、毎日見る度毎に氣になつてゐたのを、うちの人はゑい、いツそのことにと思つて、そのきずを云はずに向ふを嬉しがらせてやつたに違ひない。隨分、人が惡いのだから。

さうして置いて、而もうちの人はかの女をうちのもののやうにこき使はうとしてゐるのだ。

『おい、そのそろばんを取つて呉れ』などと、きのふもかの女にあごで命令した。いい氣になつてゐる女は、然し、奮發して立つて行からともしなかつた。

『………』不しようたらしくも坐わつてるままで横ずさりをして、からだと手とをその方に延ばした。ところがその爲めに、おのれの膝の方がお留守になつて、洗ひざらしでもちよツと氣の利いた銘仙の衣物の褄のあひだから、唐ちりめん――せめて本ちりでもあればいいのに――のはじが自慢さうにはみ出した。それに氣が付かないでだか、延ばして突いた手を疊のうへでなほ一二度に押し延ばしながら、齒切れはいい口調で、『なか〳〵とどかない、ね。』

『………』とどかないのは分り切つてるではないか？

『そのまにお膝もとが火事だ、火事だ』と、うちの人もじツと見てゐたので知らせてやつたけれども左ほどきまり惡がりもしなかつた。

『消しに來なよ！』

『………』こちらでは、女が見ても見ツともないと思へたのに。男なら、きツとみだらな考へを起さしめられたに相違ない。

大きな方の娘がまだうちにゐた時には、うちの人にはまま ツ子だけれども、自分は先代との間に生んだ實子としてできるだけ行儀を敎へ込み、作法も仕込み、また女の道の一部として茶の湯、生け花、三味線なども習はせた。

そしてお瀧さんなどが平氣で云ふやうなみだらな言葉は用ゐさせず、膝などを不恰好にはだけることなどのないやうに不斷から愼しませてあつた。

それにも拘らず、年ごろになつて來れば、その年ごろになつたと云ふだけででも一般の男の氣まぐれな心を引くものらしかつた。わざはひは外にあるばかりでなく、うちの中にもあつた。

その頃には、もう、うちの人も二進も三進も行かなくなつて、燒けばかりを起してゐたが――

俄か貧乏のやりくり算段をしにこちらが日本橋の問屋へ行つて留守だツたあひだに、いつもの一杯機嫌にまかせて何か變なことを云ひかけたとかで、自分の娘は自分に泣いてそのことを訴へた。

『おツ母さん、どうかこれから貰ひ出しにはお父アんに行つて貰つて下さい。さうして若しどうしてもお出になる時はあたしをも一緒につれて出て下さい。』

『……』自分は娘の手を取つて泣いた。そしてうちの人を大切と思ふだけに、どうしていいか分らなかつた。

娘の手を放して見ると、一人前になつて來たかの女を妬ましくならないでもなかつた。うちの人に對して憤りを發しないでもなかつた。さうかと云つて、うちのを面と向つて責めるのは氣の毒でもあり、またこちらの氣が咎めもした。

で、うちにも外にもそれとなく、その夜から娘を千住の親類へとまりにやつた。その後はとてもうちには置けないので、どこかへやつてしまうことにした。それには、もちろん、斯う暮しが押し詰まつて來ては、どうせかの女をもともと通り有福にうちで育てて行くことができず、また自分らと共にこんな所帯の苦勞をさせるのも可哀さうだと云ふ、二つの理由をつけることもできた。

『てけ、てけ、すつてけ、敷島――ほい!』

若いをんな藝人どもがそのをんな師匠の三味線につれて、揃つて順番に面白い歌を歌ふありさまが浮んだ。

源氏節の連中は、そのをんな芝居や語り物をやつた最後に、必らず『てけ、てけ』をやつたもので

ある。自分ら親子はもとそんな物を好きであつた。それが千住や近處の小さな寄せにかかると、一度なり二度なりはきツと聽きに行つた。そしてその女どもをうちへ呼んで御馳走をしてやつた。渠等はまた、東京へまわつて來ると直ぐ、向ふからきツとみやげ物を持つてこちらへ機嫌伺ひにやつて來た。

そんな、こんなの關係を辿つて、やがて娘をその連中に入れてしまつた。かの女自身も好きであつたところへ、半ば無理に因果を含めて、そのお師匠なるなか〳〵しツかりした女のもとへ、藝人にするつもりで、やつてしまつたのである。

『そんなむごいことはせんでもよかつたのに』と、うちの人は云つた。

『………』これは、若し實父が生きてたら、なか〳〵聽かないでおこつただらう。また、おこられて仕かたがなかつたらう。が、うちのには心におぼえての弱みがあつた。そしてこちらはまた再びそんなことをさせまいと云ふ覺悟を持つてゐた。

『若しおツ母さんが無理なら許して、ね。』斯う最後に溜りかねてなだめて見た時には、

『ちツとも無理とは思ひません』と答へて、娘は泣き崩れた。

『………』こちらもそれに釣り込まれて泣いてしまつた。そしてそのそば杖を喰つた爲めに、自分の次ぎの娘も、まだ小學校さへ終はらぬのに、可哀さうにも奉公にやられてしまつた。

それからと云ふもの、自分は油斷ならぬうちの人の、そとに於ける行ひには私かになか〳〵注意を怠つてはゐないのである。

三

時々店へ買ひ物に來るどこかのおかみさん達があると、もう、その二度目からはにや〳〵と冗談を云つてゐた。それがここへ來てから一層目に立つやうになつた。

そしてその上手な冗談に乘つて來るものには、直ぐ

『ぢやア、負けて置きます』などと云つてしまう。

『負けるのア當り前でしよう――何かその上に景物を添へて置きなさい。』

『まア、この小切れぐらゐなら――』

『………』商賣人がそんなあまいことでは今度も亦失敗するにきまつてた、『あなたはあんなことぢやアとても恢復ができませんよ。もツとしツかりやつて藏かなけりやア――』

『よし、よし』と云ふ返事もそらごとのやうに聽こえた。『然し、ね、さうお前のやうに慾張らうとしたツて、ここいらのお客は神田や淺草とは違つてらア。』

『でも、あなたはさう氣まへがよ過ぎて向ふをもしくじつたんぢやアございませんか？』それがうそ

なら、まだ殘つてる帳簿を出して、店の缺損とそとで遊んだ馬鹿々々しい費用とを一度見せてもかまはないのであつた。

『なアに』と、うちの人は平氣であつた。『この商ぺいは一等氣まへを見せて置かねいと、あとが續かぬものだ。

『それもよろしいでしようが、ね。』こちらはこれ以上に直接の反對もできなかつた。『あなたのは然しお客さまぢやアないのでしよう――女の顏をでしよう』と、おしまひにはこちらも笑ひにまぎらしてしまつた。

そしてその女の顏を渠は初めて――店へのお客さんではないけれども――お瀧さんに續けることができたのではないか知らん？自分には斯う考へられないこともなかつた。どうせほかの男にべたべたしてゐる女だもの。

『うちの野呂間にやア』と、かの女はその亭主のことをあけすけに云つて、『ほんとに呆れツちまうわ、よ！ろくろく稼いでも來やアがらねいで、人よりも早くおほめしを喰らつて、おなかが一杯になると、職人ふぜいで、ふん！きいた風に、あア腹が張つた、張つた、散步でもして來るツて、さア！その散步でもが生意氣に呆れらア、ね。』

『ステツキでも持たせてやればよ。』

『ほ、ほ！ほんとに、さ！』

『……』こちらは腹がけどんぶりの兄さんが書生のやうに手もとの丸く曲がつた杖を持つて歩いてる樣子を思ひ浮べてゐた。男も意久地がないやうだが、女も亦あんまりだらう。

『それでももとは惚れ合つた仲だア、ね。』

『馬鹿々々しい！――てツちも癪にさわらア、ね。お膳も何もうツちやらかして置いて、あすんでやるんだ。』

『あいつア、實際』と、うちの人も一緒になつてのわる口だ、『もとから少しうす馬鹿だから、な。』

『……』けれども、こちらにはそれが惡口と云ふよりも、お瀧を喜ばせるうは言らしかつた。うちの人だツても、そのいとこの事をこちらに話しする時は、さう馬鹿扱ひにはして聽かせなかつたから。で、『そんなことはありませんのに、可哀さうに』と、自分は義理あるいとこの肩を持つてやつた。

うちのが身うちのことを惡く云ふのもよくなかつたが、お瀧さんが兎も角そのつれ添つてる亭主のことをよそへ來て棚おろしするのは、こちらには以つての外であつた。

然し、そこにこの二人の間にどこまでかの馴れ合ひができてるのではないかと感づかれたので、ゆふべもうちのがおそく出て十二時過ぎに歸つて來たのを自分はそれとなく責めて見た。

すると、藥は問ふに落ちず、語るに落ちて、

『お瀧だツて、な、あのうす馬鹿にばかりかかり合つてゐちやア、一生浮ぶ瀬がねいや、な。』
『とう／＼うす馬鹿にしておしまひですか、あなたのおいとこさんを？』
『聽いて見りやア、おいらも呆れてしまはア、な。』
『だから、あなたがお瀧さんを横取りしてもいいとおツしやるんですか？』
『馬鹿を云へ！』餘ツぽど圖星をでもさされてきまりが惡かつたと見え、そのまぎらしにだらう、聽きもしないことをまで附け加へて、『そばぐらゐ振舞つてやつたツて――』
『お振舞ひのわけが違ひましよう。』斯うやわらかにだが抗辯をした。それも、つい思はず出た言葉であつたが、自分ながらその實際の意味に這入つて行つて、いやアな、きたならしいことまで自分の想像に浮んで、而もこれを押しのけるよりも、寧ろます／＼それに引き入れられた。そして自分はからだ中があたまの方へかけて熱くなつて行つて、胸にはさきに娘に對して持つた妬ましさよりもずツと根づよい、力づよい妬みと敵意とが燃えた。
『そツちの亭主が馬鹿だからツて、こツちの亭主を寢取るつもりか？』宇津木正次郎はよしんばのろい男であつたとしても、この宇津木葉子がそんなことは承知できない！
　自分は一旦後家となつた家きつ娘で、暫らくは後家を通してゐた。それがやがて一人の田舍ものの爲めに――自分にも足りない落ち度があつたとは云へ――矢ツ張り、お瀧さんが今嬉しがらせられて

ると思はれるやうな手で、段々口說き落されてしまつた。渠はその時はまだ全くの田舍ものであつた。自分のうちへ、初めの頃は度々反物をおろして貰ひにやつて來た。そして實着(じつちやく)さうに見せて、金錢上の取り引きはてきぱきとかたづけてゐた。こちらの方では、第一に、確かな人間と見た。それからなか／＼働きのある男と分つた。そして奧へも入り込んで來(こ)られるやうに許された。それから、また、段々とこの女主人の心を動かすやうになつた。その手や言葉を今から考へて見ても、なか／＼うまい物で、この道を若し泥棒(どろばう)の方にでも持つて行けば、無論、一すぢ繩ではとてもをへる人物ではなかつただらう。

泥棒どものうちには、口で鼠の聲を出したり、足おとや手おとで物のころがつた音をしたりするものがあるさうだが、うちの人と來ちやア、云ふことがうらはらで丸ツきり違つてゐる。そして猫をかぶつて猫撫で聲が上手(じやうず)だ。それが最初にはこちらに少しも分らなかつた。

いよ／＼二度目のむこ養子にしてからのこと、

『どうしてほんとの問屋(とんや)へいらツしやいませんでしたの』と尋ねて見たら、

『それも手よ』と、わけもなく答へた。『人からこの家のことを詳しく聽いたので、おれはお前を見込んで張りに來たのが仕事だ。だから、この色をとこがお前のとこでおろして貰つた品物は、皆、直ぐまたほかの反物屋へ賣り飛ばしてゐた。その間に多少でも口錢(こうせん)が取れたのは、ほんの、ただ二の町の

儲けであつたのだ。』

『………』自分は聽いて一度は全く呆れてしまつた。そこまでもたくらみがあるとは夢にも知らなかつた。けれども、こちらは再婚の嬉しさで心が一杯になつてた時だから、さうちよくに打ち明けられたのを、意外と思つてしまうよりも、却つて一層嬉しかつた。親に知れないやうに子供がいたづらを成し就げられたやうに——もちろん、それは寢物語りに於いてであつたが。

その時自分にはもはや十四歲の娘と八歲の娘とがあつたのだから、今更ら、まだ子供を產んだこともないお瀧さんと比べられては、ずツとお婆アさんであるのは分り切つてゐる。が、自分だツてまだお役に立たぬことはない筈である。

その證據には、娘をその十七と十一との時にふたりともよそへ出したその翌年には、珍らしくも、貧乏の中にだが、今の人の子を設けた。それが近頃ではうツくんを云つたり、にツこり笑つたりするやうになつた。そしてその子がなければ、ひよツとすると、こんな亭主には見切りをつけたかも知れなかつた。

渠のお人よしさをんな道樂との爲めに、俄かに家運が衰微に向つて、夫婦になつた三年目には、もう、うち輪では餘ほど苦しいありさまになつてゐた。その出直しを今、やツと氣を持ち直して、やつてるのではないか？こんな見すぼらしい店であるにしても、渠が前のことを悔いてれば、うか／＼し

てはゐられないのだ。
それに何ぞや、お瀧さんの仕込みでだらうが、近ごろでは、俄か仕立ての而も下司な江戸ツ子などを氣取つて、――實に、ほん氣の沙汰とは思はれない。それも一つの浮氣の手でがなあらうか？馬鹿馬鹿しい！
若しお瀧さんの亭主がろくに稼がないで夜遊びをする爲めに、かの女が氣まぐれをする申しわけのできるものなら、こちらにこそは同じよりも以上の申しわけもできようと云ふもの。然し自分には可愛い兒もある。そして自分は決してそんな薄情をんなや不貞腐れではない。かど張つて出れば、自分は家つき女房であり、うちのはむこ養子でしかないと云へるけれども――。

四

こんなことを獨りで考へながら、ゆふべは夜ツぴて眠られなかつたのだが――赤ン坊も何かの具合ひでそれを感ずつてか、特別に寢付きがよくなかつた。
『可哀さうに、さう泣かせるなよ』と、うちの人も申しわけのやうには云つてゐた。
『……』こちらは然しそんな氣まぐれなとぼけかたを相手にしなかつた。無理に泣かせたのではなく、どうしたのか獨りでぎやアぎやアと云ふのであつた。

何をお瀧さんに振舞はうとするのかと云ふこちらの意味には、然し、うちの人もてツきり圖星をさされて少しは氣がとがめたと見え、それツ切り、なんにも云はないで渠は眠つてしまつた。
そしてそのたわいのない男の寢すがたを横から見てゐると、こんな時にこそ、燒き餅ぶかい女が出齒鉋丁などを男の喉に持つて行くのだ、な、と思はれた。
ところが、お瀧さんはそんないさかひのあつたことを知らないので、
『坊や、お湯に行きましようか、ね』などと云つて、今夜もまたやつて來た。
『…………』ゆふべと同じやうな時間であつた。
矢ツ張り、こちらの食事半ばに來て、自分らのそばで赤ン坊をだいて呉れながら、相變らず例のおしやべりをしたり、うちの人の盃を受けたりした。
『あたしも赤ン坊がひとり欲しい、わ。自分のができて、こんなに抱けたら、まア、どんなに嬉しいだらうか、ね?』
『…………』こちらはその言葉をさう惡く取つたわけでもないが、かの女が如何にも淫亂の本性を云ひ現はしてるものとしか見えなかつた。
『拵らへてやつてもいい、さ』『うちの人は醉ひにまかせてのやうな風をして、馬鹿なことを云つた。
『ほ、ほ』と、お瀧は胡麻化し笑ひをしてから、『どうか、ね。たんとお禮をしますから。』

『………』馬鹿もの！と叱つてやりたいほどであつたが、おだやかに出て、「あなたはそんなことを男の前で冗談にも云ふものぢやァありませんよ。』

『おばさんは大層堅いんです、ね。』

『………』こちらには、かの女の目つきと口調とが――どうも――こちらの再婚に關する時の事情をあざ笑つてるやうに受け取れた。

そして食事がすむ頃になると、また、かの女は自身の持つて來た手ぬぐひやしやぼんと共に坊やをだいて行つた。

もう、そんなあぶなツかしいおせつかひには及ばぬと云つてやりたかつたが、うちの人が『早く行け、早く行け』と賴んでたので、こちらはどう云ふわけかと考へながら、遠慮して默つてゐた。そしてそのあとになつてから、わざと出しぬけに斯う云つて見た、

『あの人は一體、坊やを可愛いのでしようか、それともあなたを好きで――？』

『何を云ふんだ？』胡麻化しのてれ隱しにだらう、横を向いてしまつた。そしてその時、丁度ひとりお客さんがあつたので、渠はそれにかこつけて店へ坐わりに出た。

『………』こちらはその圖々しい後ろすがたをじツと見送つて、子どもさへなければ自分の權利として追ひ出してやらうかと考へた。が、これまでに、もう數年間を辛抱して一緒に住んで來たことを思

ふと、さまざまの未練がないでもなかつた。そして自分の胸にはむら／＼と妬みの血が涌いて出た。

食事がすんでも、まだ自分はそのままお膳に向つてゐたのだが、ふと、いい考へが一つ出たので、立ち上つてその室の横手の、横丁に向つた窓の障子をそツと少し明けた。そして寒いので一旦は戸締まりをしてあるその戸のさんを外し、二つの戸を少しづつ引き戻してそのさきへ五分ばかりのすきを殘し、そこに當る障子紙のところへ、自分の指さきにつばを附けてちよツと穴を明けた。

店で客をあしらつてゐるうちの人を見ると、これに氣が付かないやうであつたから、安心して、自分はそ知らぬふりでまた臺どころへ戻つた。

そして皿小鉢をちやら／＼云はせてゐるのだとは、神ならぬ身の知らう筈はなく、向ふも亦とぼけたふりで、

『おい、早く行つて來なよ』と、またお湯の催促をしたのである。

『………』その來なよがお瀧の消しに來なよをこちらに思ひ出させた。そしてゆふべから今夜にかけてたださへ優しい聲が一層優しくなつてるのをいよ／＼怪しまずにはゐられなかつた。

不貞腐つた女が別に男を持つと、そのわが亭主を抑つて一段と以前よりもよくするさうだ。一つにはおのれの惡事を感づかせない爲め、また一つには申しわけがないと云ふ心の引け味からであらう——が、自分としては今、そんな女の手をあべこべに男から仕向けられてゐるやうだ。

斯うなると、もう、たとへ坊やが鬼のやうなお瀧の爲めに熱湯の中へ突つ込まれて死んでしまはうとまゝよ！自分は自分の大切な所天のそばを留守にして置きたくなかつた。

自分と入れ替はりにお瀧さんはここへ歸つて來るのであるから、自分の留守に——赤ン坊はどうせ何も知らないから——さうだ、自分の留守に、ゆふべも何をしてゐやアがつたか分らない。

坊やをつれて出るのも、疑つて見れば見るほど、こちらを湯におびき出してしまう手であつて——そのあとをふたりは前以つて申し合はせて狙つてるのかも知れない。

『あたしも子どもを欲しいツ』と、うす暗いところでまたあごをしやくつて、私かにお瀧のあまツたるい言葉を眞似て見ながら、この妬ましさが絶頂に達したのをおぼえた。

『おい、のろい奴だ、なア——早くしろよ』と、うちの人の氣がせき出したのにも矢ツ張り優しみがあつた。

『………』からだ付きから云つても、こちらののろくさしてゐるのは昔からのことである。それを人の浮氣の爲めに手ばしこく直すことはなほ更らできなかつた。

然し、餘りにせつかれるので、丁度、臺どころごとがかたづいたのを幸ひ、その氣になつて先づつべたい濡れ手をふいた。そして自分も手ぬぐひとしやぼんとを用意して、家を出た。

『坊やに風を引かすなよ』と云つたうちの人の言葉を、わざとにもそらぞらしいお世辭としか聽いて

やらなかつた。そして自分ばかりが坊やの味かただと云ふ、親子の愛着心がそとの寒い夜かぜに滲み出て來て、浮き世が何だか溜らなく心ぼそかつた。

しやぼん箱を兩手でしツかり胸に抱き込んで、自分のくびを下向きにすツ込めながら、しめつて堅い道を、少しちよこ／＼と足を急がせた。そして自分の心のうちには、よく人の云ふ『世が世ならば』を繰り返しながら、死に別れた人の番頭から貰つた、堅くすツきりした人物や、その命令が今更らのやうに懷かしかつた。

五

少し行きかたが後れたので、もう、お瀧さんはお湯からあがつてゐた。板の間で衣物をたくつて、そのきやしやなからだに纏ふところであつた。

『………』ふと、自分も赤い物を腰に卷いた時のことが思ひ出されて、若い女の身を羨ましくまた妬ましくなつた。

『なか／＼おとなで、ね』と、はき／＼した口調で云ふかの女の言葉を自分は無理にこれもそらぞらしいものだと見た。『いい氣持ちさうに目を半分つぶつて、だまアつておぶうに這入つてるの。』

『さうでしたか？』自分の返事も亦よそ／＼しかつた、そしてこの相手の女が男に接する時のやうす

や氣持ちをその言葉につれて想像された。無理に見せた笑ひを直ぐ赤ン坊の方に轉じた時には、然し、もう、その笑ひの無理はおのづからの和らかみに變はつてゐた。『おう、坊や、あツたいか、え』と云つて、おほびらな紫矢がすりのねんねこにくるまつてる兒を抱き上げた。そしてそれとなく、お瀧さんには悟られぬやうにして、ねんねこの上からその脊中やら足の方やらを調べて見た。そしてさう案かりさうでもないのに安心した。それから、やツとかの女に向つて、できるだけ穩やかに、然し半ばは獨り言になつて『どうもお世話さまでした。』

『からだがちツぽけで、ね、お負けにたわいがないから』と、かの女も何げなく出てゐるやうだが。見ると、その切れめの長い目もとを圓くしてゐた。少しも油斷してゐるやうすはなかつた。『うツかりすると、落してしまひさうで――』

『さうでございますよ、まだこツちのしてやる通りになつてるんですから、ね。『而もこんな物を預かるのをしほに人を安心させて置かうとしたり！決してその手は喰はぬ。

『おう、笑つてるよ！』お瀧さんも然しほんとに可愛いと云ふやうすをして、この時はこちらの方をのぞき込んだ。

『………』坊やのことが云はれてると、それでもこちらはちよツと氣が變つて、別にいやな感じに襲はれなかつた。

ほかのものも二三名ゐて、あたりから坊やを可愛がてて呉れた。かう云ふ可愛いものがあるのに、うちの人は物好きな――！

『ぢやア、置いてきますよ』と云つて、かの女はせか／＼と獨りで出て行つてしまつた。

『……』自分はそれにもあツけに取られたのである。子どもだけはてツきりゆふべ通りにつれて行つて呉れるものと思つてたのに。

成るべく急いで這入り、成るべく早く湯をあがらうと思つて、兒を湯屋のおかみさんにまかせることにしたが、帶を解き初めて見ると、その解くと云ふことにいやな感じが伴つて出たのである。自分は溜らなくなつて、俄かに解くことを思ひとまつた。そして斯うしてはゐられなかつた。

亭主が夜遊びに出たからおのれも出てやるのだと云つてるほどの者が、何でさう急がねばならぬことをその家に持つてゐようぞ？

ゆふべまではかの女がまだこちらに氣兼ねがあつて、お湯を出て行く時には殊勝らしくも子供をさきへつれて歸つて呉れたのだらう。が、不都合にも、もう、こちらを相手にし易いとでも思つてか、圖々しくもその地がねを現はしたのは？手としても、餘りにまづい！

きツと、きれいになつたところで――？さうだ！斯う考へると、自分の心からが先づ自分のあの場を引ツくり返すやうな氣がして――どうしても、斯うしてはゐられなかつた。

ぷんと、ほかの人からにほつて來た人間のにほひをも癪にさわつた。急いで自分の帶を卷き直し、赤ン坊をおかみさんから抱き取るが早いか、土間へ下りようとして、くら〳〵と目まひがしたのを番頭臺につかまつてやツと自分の日より下駄のうへに踏みこたへた。そしておほ急ぎで湯屋を出た。そして頭巾をして坊やの顏には夜かぜが當らないやうにしてやりながら、自分ながら呆れるほどのろい足を速めて、自分の家のそばまで來た。

店のお客さんは來てゐるやうすがない。店さきの右手の棚へ自分が人の目に立つやうに積み上げた白毛布を後ろに照らさせて、店かざりに軒から下げてある多くの小切れの風にゆら〳〵動いてるのが見える。が、淺草の時に比べてはそれぐらゐではまだ〳〵ずツと見すぼらしかつた。

それを祭しはすかひに遠見して、ちよツと立ちどまつたのだが、自分の店が何だか自分の家ではないやうで——坊やと自分とはもはや、振り棄てられた末、どこかの場ずゑにさまよつてる氣がした。

先づ、然し、本通りと橫丁との角に當る自分の店の隅へ拔き足で近づいて、坊やを少し自分の右の方へ隱しながら、こツそり店の中をのぞいて見た。ところが、うちの人の姿が果して見えなかつたので、今度はあわてて例の窓に殘して置いた戸のすきまへ行つて見た。

自分は一ときに逆上しさうになつた。あごががく〳〵とし出して、ふらつく足を、それでも、自分ながら踏みしめて今一度のぞいて見ようとしたが、餘りに遠慮された。胸から思はず、

『えへん』と、一つ、大きなせき拂ひをしてしまつた。そして直ぐ勝手口の方から、わざと障子や臺どころの板をがたぴしさせながら、あがつて行つた。

家ぢうが眞ツくらに見えたのは、自分が餘りにのぼせてゐた爲めで――少し氣を落ちつけて目が見えると、赤い顏をしたお瀧がこちらの直ぐそばで部屋(へや)の眞ン中に突ツ立つてゐた。そしてうちの人は、もう、店の方へ行つて、このそばにはゐなかつた。

『お歸り――あたし、ぢやア歸(かへ)る、わ』と云つた。このあとの方の言葉はかの女(ちよ)がうちの人に云つたのか、それともこちらへか、どちらとも判然(はんぜん)しなかつた。

『…………』自分はかの女を瞰みつけたけれども、返事をしてやらなかつた。

『ぢやア、左樣なら。』お瀧はこと更らに平氣(へいき)さうにして店の方へ行つた。

『…………』こちらも直ぐには坐わらないで、奧からかの女(ちよ)の方をじツと見つめて見てゐると、土間へ下りた時直ぐくるりと向き直つて、今一度こちらをじろりと見返した。

『…………』かの女は、もう、膽ツ玉をでも据(す)ゑたと見え、こちらが見てゐるのを知りながら、下駄をはく時その手を鼻に突いて、うちの人の坐わつてる方へ顏を突き出して、ちよツと何か耳うちをした。

『…………』自分はこの二晩、三晩をお人よしい故を以つて皆に出し拔かれてゐたのかと思ふと、あら

ゆる口惜しさと立ちどころに來た失望とに押し付けられて、赤ン坊をじッとだき締めたまゝ、天井でもくづれて來たやうにどッたりと重い膝を火鉢の座に落した。

そとにはどちら行きかの電車の通つてる響きがする。自分はお瀧の逃げて行つたあとばかりが憎々しかつた。

『お湯にへいつて來なかつたのけい?』店からはうちの人が斯う聲をかけた。

『………』よくさう澄ましてゐられるものだ！相變らずわざとらしい部分の優しみには、ぬら〳〵した青大將のやはらかいうねりを思ひ合はされた。自分はぞッとおぞ毛をふるつたが、その誘ひに、つい、心では、なんだ、とぼけてゐやアがつてと云つてしまつた。

暫らく互ひに奥と店とを隔てて無言であつた。

もう、どうなつてもかまはないと思つた自分だが、宇津木お葉としてはいつまでもここに斯うして坐わつたまゝ、坊やともろ共に死の來たるのを待つてもいいと云ふ氣であつた。うちの人に向つても、あんまり人を馬鹿にした仕うちが悔しかつた。

ぼんぼん時計の後ろで鳴るのを――見る氣もないままに――數へてゐると、九時まで打つた。もう大分に夜が更けたと思つてるのに、まだ冬の夜は長かつた。

うちの人のゐる店の方から這入つて來るものは、この奥へ吹き入る風までが薄情らしくに寒い。坊

やにばかりは湯ざめをさせないやうにと、赤い頭巾を目ぶかにまたかぶせ直してやつた。

前通りを今、四谷見附けの方から來た電車が新宿の方へ通つて行つたやうだ。そしてそのあとに支那そばの喇叭が聽えてゐる。これとあめ屋の唐人笛ほど子供の寢てゐる神經にさわるものは恐らくゐるまい。この二つに自分が今一つ、いやな物を加へて見れば、あのお瀧の甲高ごゑだ。

『およしツてば、おぢさん、助平ツたらしい！』

『……』あのおこつたやうな而も嬉しがつてる聲と來たら、そも〳〵何たることであらう――！うちの人もまた人の前をも憚らないで――！仕合はせにも、うちの娘はあんな淫亂ちきではなかつたので、直ぐとその母へ泣き訴へた。けれども、そのおかげで、可哀さうにも、藝人ふぜいに落ちて行つた。

ふと、障子の腰がらすからそとをのぞいて見た。人のあし音がしたので、お客さんかと思つたのだが、さうでもなかつた。こんな寂しい店では、とても繁昌して行きさうがない。

支那そばの喇叭は今電車の行つたさきとは反對の方角へ遠のいて行つたのだが、そのあとに向つてそれを無遠慮なおほ聲で呼び戻す聲がした。

『支那そば！支那そば！おい、そばや、そばや！』

『……』お向ふの西洋小間物屋のせツかちな旦那であるので、またかと、こちらはをかしくなつた。

『もう、寒いから店を締めろよ。』

『………』これはまたうちの人の突然な言葉であつたが、お向ふのに比べてはいつも馬鹿におとなしいのである。これで惡い氣まぐれさへして呉れなけりやア――。

『おいらアちよツと出て來るから、な。』

『………』てツきりあれだと直ぐ相像はついた。

がらすからのぞいてゐると、うちの人は店の丸火鉢のそばを立ちあがるが早いか、待ちかまへてゐたかのやうに、こちらをふり向きもしないで下におり、下駄を突ツかけてそそくさと行つてしまつた。

自分には、然し、渠がいくら隱れ遊びをしようたツて駄目であつた。

自分は先づ抱いてる子をねんねこでしツかり、あツたかにおんぶしてしまつた。それから、店へ出て土間へ下りた。そこには、半襟や小切れやちよツとした反物類の陳列品がうへからつる下がつてゐた。

――めりんすの半襟――銘仙、秩父ちりめん、羽二重などの小切れ――黑地にみどりとゑび茶のおほがら子持ちじまの新銘仙を二つ折りにしたもの――すべてこんな品々を手速く取り外した。そして外せないのは自分の力で引きちぎつた。そしてそれらを一緒くたに二度にも三度にもくる〳〵と丸め

て、疊の方へ投げ込んだ。

この時、丁度ひとり、

『もう、おしまひですか』と云つて、女の客があつた。が、殆んど夢中になつてる自分には、これも亦お瀧の同類ではないかと思はれたので、すげなく斷わつて、まるで相手にしなかつた。そしておもてのはづし戸を店の横手から一々運んで、ずん／＼うちがわへ締めてしまつた。それから、臺どころの方へ行つて、勝手口からそとへ出て、そこの戸を立て寄せて置いて家を離れた。

『………』お瀧と申し合はせがあつて、うちのはきツとどこかへ落ち合つてるに相違なかつた。それを突きとめて置きたかつたのである。

『そばぐらゐ振舞つてやつたツて――』ふん、何を云やがるんだ、あんな女に！畜生！お瀧をだツてそのまゝにして置くと思ふのか？

六

お葉がそれと心あたりをさして行つたのは近處で有名なそば屋であつた。

その前へ來ると、ぷんと一つ、湯屋などのとは違つて、色けを離れたいいにほひがした。それで自分もちよツと喰ひ氣の方が動いた。そして殆ど半分は嫉妬の熱をさました。

直ぐ暖簾をくぐつて這入ると、そこの勝手に近いおもて店であつたが、そこには二人のすがたが見えなかつた。

で、門の方を奥へ這入つて行つた。そして足おとのしないやうに敷き石をよけながら、客のゐてもひとりやふたりやの、または全くからツぽの座敷々々をこツそり庭からのぞいて見た。

すると、一番奥の、大きな石のてうづ鉢に近い小座敷に、果してふたりはふたりツ切りの夫婦氣取りでさし向つてゐた。そしておかめか何かのどんぶりを明けて、一杯やつてるところであつた。

それがそとから障子のがらす越しに見えてゐるので、ぐうツと自分の喉が鳴つた。

『御馳走さま』と云つて、出しぬけにあがつて行つてやらうかとも思つた。

が、――若しうちの人がうまうまと見つけられたそちらの不始末を胡麻化す爲め、こちらの女としての餘りはしたなさを楯に取つて、こんな時のいきどほりを漏らしでもしたら、どうだらう？殆ど密會のやうないい氣持ちになつてるところを、突然にびつくりさせられては、卑怯なこそこそ泥棒も俄かに强盜にゐなほるかもしれなかつた。あたまから若し怒鳴り付けられては、自分としてお瀧に對しても癪の種がふえるわけだし、また他のお客やここの人々に向つても面目がないのであつた。

自分が來て聽いてるとは夢にも知らないふたりの話だ――

『お葉さんだツて、もう年が年だらうから、ね――』

『…………』畜生！失禮な！

『さうだ、有無を云はせぬことにして置くとしようかい？』

『さうだとも！』

『…………』何がさうだともだ？おほきに御世話だ！たとへ一杯機嫌のうへのことにしたところが、こちらをさし置いて夫婦にでもなる氣だ、な！人があの人の爲めにはこれまでどれだけ苦勞をさせられて來たかも知らないで――先祖の家をつぶされただけでも、その恨みが一層執念深くあの人に對する自分の離れられぬ心となつて、ただそれだけでも滿足をして來たのだのに。

自分は今まざ〳〵と渠に初めてうまくだまされて行つた時のことが思ひ出された。――番頭も引け、小僧も休み、娘どものよく眠りに就いたのを見計らつてだが、自分はそツと家をぬけ出した。そしていつも近處まで來て待つてる男の手に迎へられた。そして淺草公園の、矢ツ張りそば屋でなければ牛肉屋で會合した。そして誰れにも見付けられるおそれがないと云ふことが、不思議にも安心であり、またおもしろ味であつた。自分はその時のことを今や後悔しつつも、ます〳〵懷かしくなつた。あの時からして、こちらも向ふもよく太つてゐた。

さうだ、あの時には、自分は男の身ぶんがあまり低いのを卑しめて、まだ夫婦になるまでの考へは持つてゐなかつた。ただ兎に角に太いからだを、自分獨りで手よりなく持て餘してゐたのであつた。

『………』まだ何か向ふのふたりは云つてるやうであつたが、そのあひだに『あなたがした手に出てゐるからいけないんだ、わ――よしんば、養子だツても』と云ふのも、何だか耳遠く聽えた。

『………』いつのまにか、自分はあの時の氣ぶんを恢復して、胸が早がねを打つやうに鳴りとどろいてゐた。からだぢうの血があたまのどこか一ケ所に集つて行くのであつた。

すると、俄かにまたふら／＼と自分はそこに轉倒しかけたのである。そのあひだに、渠等がかげで何を云つてたか、聲は聽えてゐながらも、その意味は全く分らなかつた。何でもこちらの惡くちと向ふらに都合のいいことばかりであつたのは、それでも、あきらかにおぼえてゐる。

が、若しここで子どもをおんぶのまま氣絶でもすると――さうだ、それが自分には甚だおそろしくなつた。そして自分はまたそこの敷き石をさけて、庭の土を踏みながら、こツそりとそとへ引き返した。

いいにほひや喉の鳴りなどはどこへやら行つてしまつた。あまりの妬ましさが先づ心のさきに立つてゐた。が、自分の目に映つてたところを思ひ出すと、お瀧のしてゐた前かけはどうもうちで無くなつた品物のやうであつた。あいつが盗んだのか、それともうちの人がやつたのか？

烈しくぴん／＼する兩方の米かみを兩手で押さへながら、急いで自分はうちへ戻つた。そして勝手ぐちを這入つたあとの戸締まりをしてから、茶の間へ來ると、何だかきなくさかつた。

何か火鉢へくべて行つたか知らんと、直ぐそこへ行つて見たけれども、そんなやうすもなかつた。念の爲めにあんかを二つとも調べて見たが、また火を入れてないのに物がくすぶるわけもなかつた。まきで焚く釜の下だツても、朝焚いた切りで、火のありやうわけがない。

はばかりへ行きたくなつたので、行つてきてから、また茶の間の手前で鼻を明かせて見ると、矢ツ張り、然し、きなくさい。

ふと、うちの人が店で坐わる火鉢のそばを思ひ出し、渠があわてて出て行く時に何か粗相をして行つたのではないかと考へた。そしてそこへ行つて見ると、――さうだ！自分の出る前に一緒くたにして投げ込んだ切れがごちや／＼と火鉢の周圍にちらかつてゐた。そして自分ながらびツくりしないではゐられなかつたことには、火がその上へ落ちた一つの切れのはじを傳つて疊に移り、丁度他の切れの落ちてないところを圓くさし渡し二尺ばかり燒いたところである。

あわてて水を持つて來て消しとめたことはとめたけれども、今少しぐづ／＼してゐれば下の根太へ燒け移り、根太が燒ければ緣の下から風があふつて、ほんとうの火事になるところであつた。

自分のお友達のうちに夫婦喧嘩からおほ火事を起したものがあるのを思ひ出して、ぞツとした。嫉妬さわぎどころではなかつた。うちの人が歸つて來て、これを見た時、どう云つて申しわけをしよう？けれども、その時には、もとの起りに對して云ひぶんのないことはない。いや、十分にあるのであ

る。

兎に角、氣を持ち直して、自分は寢どこを取つた――いま〳〵しいけれども、いつも通りの二つを。そしてうちの人の方へもあんかの火を叮嚀に注意して入れた。どうせ歸つて來ることは來るだらうから。

赤ン坊の時々ぎやア〳〵泣くのも、今夜に限りうるさかつた。そして珍らしくもうへの娘のことが頻りに思ひ出された。若しうちにゐたら、もう、こんな時にも隨分話し相手になつて呉れて――さうしたら、またこんな粗相もなかつたものを！

今から思へば、あんなに取り急いであんなものにしなくツてもよかつた。別にもツといい考へもあつたらう。自分があんまり面喰らひ過ぎたのである。源氏節は自分も好き、娘も好きであつたが、――さて、かの女が行つて見ると、早速――器量がいい方である爲めだらうが――お師匠さんの御亭主に當る人のおめかけにされてしまつたといふ。かの女だツて初めはいやであつたさうだが、お師匠さんからも達ての賴みがあつてよんどころないので、とう〳〵いはれるままになつてしまつた。

が、どこの男もなぜそんなにみだらなものであらう？尤も、娘はお師匠さんも承知の上のことだから――そしてそれが爲めに歌や三味線その他の藝ごとは他のものらよりも一層叮嚀に、また親切に敎へて貰へるだらうから、――のち〳〵は人よりもすぐれて一かどの藝人にはなれるだらう。が、――

『然しその爲めにわたしは却つてほかの朋輩衆よりも氣苦勞が多うございますよ』と、可哀さうに、ませたことを云ふやうになつた。『お師匠さんのお膝もとで大切にされてをりますだけに、それだけまた位も見せて置かないといきまへんし、な、また下のものへ情愛も持つてあげまへんと――』斯ふ云つて、ませた上にもお師匠さんの連中が使ふかみがた言葉がまじるやうになつたもの可哀さうであつた。

けれども、大阪へ行つても、仙臺や北海道へ行つても、師匠の一弟子だと云ふのでお座敷がかかることが多い。從つて御祝儀を貰ふことも澤山で――然し。それだけ、連中の間へ歸つて來てからは、朋輩衆に十分滿足を與へるほどのおすそ分けをしてやらねばならぬさうだ。

いつか淺草の柏木亭ができた時に、その舞臺びらきをやりに來たが、――こちらがまだしもた屋でゐた住まひの近處なる料理屋へ呼ばれたついでだとかいつて、久し振りで尋ねて來たのだ。丁度、うちの人が留守であつたので、あがつて暫らくいろんな話をして行つた。その話のあひだに斯ふ云つたこともある、――

『わたしが度々來ますと、またおツ母さんの爲になりません。たよりもしたいのは山々ですけれどもまア、たよりのない方が無事だとおもて貰ひます。お互ひにいつ死ぬやも分りまへんが、死んだ時には誰れからでもまた知らせて來まッさ。』

『……』そんな心ぼそいことを云はれては、娘に向つてだツてこちらの肩身(かたみ)が狹かつた。しないでもよかつたものにしたと云ふ、かの女からの棄てツ鉢の恨みが云はせてゐるのかとも思はれたが、あながちさうでもなかつた。きのふは東、けふは西の旅藝人になつてゐては、かよわい女としてもそれ位の覺悟(かくご)が出るものらしい。早くから世の中の苦勞をした爲めでもあらうが、年の割りにはほんとうにませたことを云つた。その言葉があとまでもこちらの耳に殘つて、可哀(かあい)さうで可哀さうで溜らなかつた。

『わたしは、もう、これで仕かたがおまへんさかい、これでよろしゆおますけれど、世間にはわたしらよりもツと、もツと不仕合せな人があります。』

『……』こちらから見れば、娘はその自分自身も不仕合はせであるのを忘れて、人のことを考へてやつてゐるのであつた。朋輩衆(はうばいしゆう)の中には、よくその身の上を聽いて見ると、隨分氣の毒なものがあつて――親があつてもその行くゑが分らないのや、兄弟どもが薄情(はくじやう)で世話一つしないのや、病身の母に年中みついでゐるのや、男に棄てられて棄てツ鉢になつてるのや！

『さう云ふ人に比べますなら、わたしらはまだ〳〵仕合はせの方ですさかい、自分の身のことは二の町にしても、成るたけそんな人をようしてやらうとおもてます。』

『ああ、さう親切(しんせつ)にしておやりよ。』こちらは思はず涙をこぼしてゐるのであつた。『女と云ふものはど

こへ行つてもどうせ不仕合せだらけだらうから、ね。』

いつまた會へるか分らないと云つて、かの女は母に壹圓、妹に五十錢を殘して行つた。

その時には、まだ今度のことなどは夢にも起きてゐなかつた。こんな小さい店でも再び持つことになつたのを喜んだのに、うちの人は直ぐまた心がつのつて、この昨今のありさまである。これを娘に聽かせたら、また／＼悲しみを加へさするに違ひなからうけれども、斯ふ獨りぼツちのやうになつては、今ここにかの女がゐて呉れれば、自分の心を少しでも晴らして貰へただらうに！

七

十二時も打つた。そのうちにまた一時も鳴つた。

と切れてゐた電車が一つ、がう／＼と音を立てて新宿の方へとほつたのを、多分赤電車であつたらうと思つた。

じツとなほわけもなくそと通りの方へ耳をかたむけながら、自分の目はあふ向けに寢たまま、天井を見つめてゐた。

『支那そば！支那そば！そばや、そばや！』お向ふの旦那の口調を口のうちで早くちにくり返して、われながらまたをかしくなつた。

『わたしなどよりもツとも、不仕合はせな人がをります。』斯ふ云つた源氏節の娘は今ごろ、どこの、どんなところで眠つてるだらう――はねたあとの席に寒い薄團を着て皆とごツちやに寢てはゐなからうか、それとも男と一緒にあツたかく？

その次ぎの娘の奉公も――まだ年が行かないのであるから――さぞ、この寒さがつらいであらう。近ごろは一向にやつて來ないが、今度來たら、坊やの笑ふのを見せてやりたいのに――。

『………』ふと、泥棒が來たのぢやアないかと云ふ氣になつて、ぎよツとした。先づ、坊やをかばひながらあたまを枕から上げて耳をきき澄ますと、勝手の戸ががた〳〵云つてゐる。ああ、それかと分つたのでまたあたまを下げてしまつた。

『あけて呉れ！あけて呉れ！』

『………』自分には、うちの人の聲が今夜に限り、全く、誰れかほかの人のそれのやうに聽えた。

『あけて呉れ！おい、あけろ！』

『………』

『おい、お葉あけて呉れ！』

『………』

『おい、あけろ、あけろ！』

『………』先代のたましひででもあつて呉れればー―、それとも、また別にもツとまじめな人であらばー―。

『おい、こら！あけろ！』

『………』そちらがあのざまなら、こちらも亦今來た人が別な男であつてもかまふまいと云ふ反抗心があつた。

『こら、お栞、あけろ！』

『………』ますく戸の叩きかたの烈しくなつたのが却つてこちらにはをかしかつた。自分はなほうツちやつて置いた。尤も、もツとがたくさせてゐるうちには、自然に明くだらうと思へるほどに戸締まりをゆるして置いたのだ。

『………』聲が納まつたと思ふと、果して戸が明いた。

『………』こちらは俄かに、火の粗相をあした見られたら、どう云つて申しわけをしようかと考へてゐた。

『もう、寢てゐるのかい』と云つて、うちの人は臺どころから茶のまへ這入つて來た。

『………』心でばかり叫んだ、夜たかぢやアあるめいし、今ごろ、誰れが起きてるものか？顏でも洗つて出直して來るがいい！

『起きねいか、なア』と、失望でもしたやうな聲はこちらの枕もとなる上の方から聽えた。ぼんやりと突ツ立つてるらしい。『みやげがあるぞ。』

『………』自分は横を向いて蒲團を引ツかぶつてゐたが、その中で、つい、ぷツと私かに吹き出した。お瀧さんのおそばなど、もう、もう、十分であつたから。

『仕かたがねいや――ぢやア、うツちやつてしまへ！』

『………』聽いてると、渠がわざとらしく投げ出した物は果して疊の上でばたりとひらべツたい音を立てた。

『きみがアなさアけエのウかり寢エのウとこウよツか』と、鼻うたを歌ひながら、渠はその角帶を解き初めたやうすだ。きゆう／＼と云ふ音がした。『まくらアかたア敷きイ夜もウすがアらア。』

『………』御苦勞さまと云つてやりたかつた。自分を初め、いろんな女を、恐らくその手でたらして來たのかと思ふと、憎らしくツて！

その横ツつらをいきなり一つ、起きて行つて張り飛ばしてやりたいのだ。自分の身うちに燃え立つ血を押さへるやうにさへしてゐれば、男と云ふものが帶を解いたあとの姿ほど、今や思つて見ても、これほど見にくいものはなかつた。而もいい年をして、いまだに浮氣ばかり！餘ツぽど飮んで來たものと見え、こちらまで酒のにほひがきこえる。

『やア、どうだい、一度起きねいか？』またおそくなつた申しわけとも、また全く別な意味とも取れるこの棄てぜりふで、どたりと大きなからだをとこの中に投げ込んだ響きがした。

『………』何かのきツかけさへあらば、それをしほにしてまた一つ――今度は確かな證據を握つてるから――十分に責めつけてやらうと考へてゐた。

『おう、あツたけい、な！』

『………』あんかを入れて置けば、あツたけいのは知れたことではないか？

『矢ツ張り、自分のうちほどいいとこアねいや、な、どこへ行つてもこんなにして呉れるところはねい。へん、女房と云ふものアありがていものだ、わい。』

『………』お葉はその所天の獨り言を聽いてをかしくもあり、また憎らしくもあつた。が、矢ツ張り、そら寢をしてゐながらも、所天の歸つたのが一番安心であつた。

――（大正七年十一月）――

征服被征服

この作は事件の性質上、『蜜蜂の家』、『空氣銃』、『離婚まで』等と連絡あるものである。

一

「どうせ僕は妻子に絶望した者でありますし、またその絶望の結果が不慣れな事業をやつて失敗したものでありますから、決して贅澤は申しません。向ふの婦人さへ承知すれば、直ぐ夫婦も同樣になつていいし、またほんのただ同棲して僕の話し相手だけになつて貰つてもいいのです。ましてそれが向ふの人をその苦しい境遇から救ひ上げるわけになりますなら」と喜んで、耕次は自分の紹介者なる婦人とその母親との許しを得て、近藤澄子を初めて訪問したのであつた。

耕次としては、最後の思ひ出にと思つて試みた事業の失敗の爲めに、自分のあたまもからだも殆んどからツぽになつてゐた。獨りで當てもなく北海道に放浪してゐて、つい、こないだ、東京へ歸つて來たのだ。が、北海道では、あの無秩序ながらに活氣のある大きな世界に觸れてゐながら、無一文の爲めに爲すこともなくぶらついてるやる瀨なさを、薄野遊廓の或賤しい女の爲めに僅かにまぎらすことができてゐた。東京から來て、わざ〳〵そんなことをする物好きと、事情を知らぬ人々にはあざけら

れたが、自分としては意地にも東京へ歸りたくもなくなつてゐたし、さりとて北海道に落ち付くだけのたつぎも發見されなかつた。もう、このまゝ野たれ死にをしてもかまはないと云ふ氣になつてゐた。云はば、絶望と焼けッ鉢とが自分のいのちであつた。そしてこの狀態が自分のしげ〳〵通ふ女から與へられる多少の誠實によつて慰められてゐたのである。もう、直きに年が明けると云ふかの女を——年が明けたら、直ぐ——自分の事業さきなる樺太へつれて行つて、共に生き死にのあらかじめ保證できぬ越年をして見ようとまで思つてゐた。

けれども、萬事がぐれて來た爲め、それさへもできなくなつて、早く來る雪と分り切つた無一文とに追はれて、東京に歸つたのがやツとのことであつた。からだの神經衰弱のうへにも亦自分の精神までが衰弱の極に在つた。自分はさきに東京でかち得てゐた立ち場を全く無くなつたものと信じて、自分の生活をまた初めからやり直さなければならぬ身であると思つた。從つて、何よりもさきに欲しい異性の話し相手にはその美醜と貴賤とを問ふまでの資格を持つてゐないものと諦らめてゐた。

別に訴へるところもないので、自分の舊友なる房子と云ふ婦人を音なふと、そこで幸ひにも澄子なるものがあるのを聽き込んだ。

『今の婦人としてはなか〳〵の活動家で——婦人の政治結社加入禁止の解除運動を、つい、ことしの春まで、五六年間つゞけてましたが、今は社會から遠ざかつて、引ツ込んでゐます。思ふ男の爲めに

一旦自殺までしたほどですから、正直な人なことは分つてましよう』とのことであつた。

『……』思ひ出すと、渠は樺太に於いて自分のかた手間に通信を引き受けてた一東京新聞の三面記事に、何とか云ふ社會主義婦人が男の無情を恨んで鎌倉海岸の海に身を投げたが、漁師に救はれたと云ふことが出た。それから、また引き續いてその本人なる婦人がその新聞に投書して、その事件の辯解のやうなものを發表した。決してわたしは社會主義ではない、然しその男のことは今でも思つてる、と。大膽若しくは正直な女もあるものだとその時寧ろ感心したが、澄子が乃ちそれであつた。渠は自分の精神が疲れ切つてゐながらも、先づそれに對する好奇心からして自分の元氣をふり起したのであつた。『僕の力で救へるものなら色をんなにするなり、獨立した婦人文學者に仕立てるなりして、お互ひの爲めになつて見ましよう』とも友人に誓つた。

そして明治四十二年十二月の一日に、友人紹介の名義を以て、初めて、渠は獨りで澄子を訪問した。かの女の住まひは赤坂檜町の幽靈坂を下だつて行つたところの裏長屋で、――そこに達した時はわれ知らずこちらの顏が赤くなつてゐた――三軒並んだそのどん詰まりであつた。二間しかないその奥の六疊に据ゑた長火鉢に向ひ合つて、かの女はこちらをあしらつた。

「そりやア、ね、いてふ返しにでも結はせて縮緬の衣物を素はだに着せて御覽なさい、そりやア美人ですから』と紹介者なる房子さんが云つたのを、案外の儲け物だと思つてたが、それはこちらの豫期

に反してゐた。なすび紺の色に雨のかすりが這入つたお召し――と云つても、綿らしい――の書生羽織りを着て、手を火鉢のふちにかけて下向きがちな――然し、どちらかと云へば雄大な――顏は、自殺までしかけた程精神を使つた者としては割り合ひに肥えてゐて、さう美人らしくもなかつた。そして見ツともないやうに幅ツたい。その上、時々、

『ほ、ほ』と、わざとらしく笑ひながら、こちらの顏を下からのぞく眼にはしろ眼が勝つてゐる。それが少しこちらの感じに添はなかつた。『あなたのお作は初めてこないだ△△と云ふのを拜見致しましたが、――奧さんやお子さんがおありになる方がどうしてあんな氣ぶんになつてゐられるか、それを聽いて見たいとただそれだけ思ひまして、一度お目にかかりたいと房子さんに申しましたことがございますが、それはその時のほんの出來心で申したのでした。』

『そりやア出來ごころなら出來ごころでもかまひませんが、ね――あなたがあれを餘り形式的な道德眼で見てしまつたのぢやアありませんか？』そちらだツて、妻のある男を戀してゐたのではないか？

然し、斯う答へた、――

『さうでもないでしようが――』

『……』渠はかの女をまだ人の手まへをつくろふ作見のある婦人と見てしまつた。

『人間が眞實に生きようとする場合、時には普通の道德心をぶち破らなけりやアならないことがあり

ますよ。それは何も無道徳になると云ふわけぢやアない。ただの習慣道德を眞實の生活につり合ふやうに改造するのです。』

『そりやアあたしにも不贊成はございませんが、ね――』

『無論、あなたにも、少くとも最後の御經驗が證明してゐましよう』と云つて、渠はかの女とその思ひ物との關係を諷した。渠の知つてたところでは、かの女が思ひ合つてた男にも妻子があつたのだ。中野と云つて或通信社の政治掛りだが、それがさきに或新聞社の編輯長をしてゐた。そしてかの女もその新聞にゐた。その時代から殆ど五年間。渠とかの女とは雛仲であつた。が、その人並み外れたまじはりは最後に破綻を來たしたのであつた。

かの女の投身記事が新聞に出ると、房子さんは中野を一度呼び寄せて、

『あなたは、まア、ひどいことにさせました、ね』と、取りすがらんばかりにして泣いたが、中野は不斷の親切や溫厚な人物にも似合はず、

『わたしの知つたことではなかつたのです』と云つたさうだ。渠に限らず、誰れがまた世に死ぬのを承知してやるものがあらうぞ？かかる場合の答へとしては實に冷淡であつた。こちらが見ても、それには、だから、渠の申しわけなさのまご付をも加はつてゐただらう。けれども、また、渠の本心が矢ツ張りそこにあつたと云へようか？なほ續いて斯う白狀したさうだ、『近藤さんが餘り度々わたしの本

妻に直せと強迫するものですから、わたしは止むを得ず申しました、別にそれほどの罪もないのに妻を離婚することはできませんと。』

『………』耕次は會はぬうちから澄子に肩を持つやうになつてたので、中野なる者のその場になつての冷淡、と云ふよりも初めからの意久地なしを心からあざけつた。妻と離婚してもいいと云ふ覺悟もなしに、なぜ他の女を戀してゐたのだ？いや、妻の外にまた女を持つことその事は必らずしも惡いことではないが、かかる特別な行爲に對する處置としてなぜ妻にも公然と納得させ、女にもその分にとどまることをしツかり敎へなかつたのだ？世間の手まへばかり思つてたあり振れた男としては、きツと、そこにその兩方に對して多少の不正直な胡麻化しがあつたに違ひない。だから、また、女の方にして見たところが、そんなあり振れた弱い男に五年間もいい氣になつてゐたのが馬鹿だ。その結果が――あとで何と云つて辯解して新聞紙上に公表したところで――全くうま〳〵と裏切られたことになつてるのは、當り前である。同情して云へば氣の毒だが、惡く見れば應報てきめんだ。だから、――

『お澄さんもお澄さんで、なんて未練がましくも不見識だらう、一旦自分を棄てた男のところへ死にそこなつてまた訪ねて行くなんて！』と、房子さんも義憤を漏らしてゐるのだ。

『………』耕次には、然し、それほど熱心と云へば熱心、馬鹿と云へば馬鹿な女に、接近して見るのも樂しみになつてゐた。『あなたがこれツ切り社會を引ツ込んでしまうのは餘り意久地がないでしよ

ろ。どうです、一つ、生活ぶりを一新して文學者にでもなつて見る氣は出ませんか』と忠告した。

『一つ考へて見ましようか、ね、あたしはこれまで新聞や政治の方にばかりあたまを突ツ込んでをりましたので、軟文學の方には關係が疎かつたのですが――』

『さう軟文學、軟文學と云つたツて、俗物どもには夢にも分らない重大な使命が文學にはあるものですよ。』新聞屋からまた小學教員になつたが、事件以來遠慮してただ自分のうちで英語を――それも恐らく初歩の英語を――人に教へ初めてゐたと云ふばかりの婦人を、渠は異性と異性たる以外のことでさう尊敬を拂ふ氣にはなれなかつた。

が、自分はこの場合、不美人でも無學者でもかまはない、一人の異性の必要を感じてゐたものだから、この點から、若し滋子が自分の思ふやうになればこれほどもツけの幸ひはないと私かに考へた。けれども、まだ自分の來意をうち明けるまでには至らなかつた。ただ、自分のやつて來たこと。妻と事實上は既に三年間絶縁してゐるが、妻の同意がない爲めに戸籍の上の離婚だけは成立してゐないこと。その間にめかけ同樣の女もあつたが、その女も北海までやつて來たのをしほに手を切つたこと。藝者買ひや女郎買ひもしたことがあるが、これから生活をやり直して、しツかり立つて行かうと云ふこと。などを、正直にうち明けて別れた。

二

『さう何もかもいつてしまうかたも少いです、ね』と、かの女は氣取りをまぜて笑ひながら云つたツけ――それに對して、

『ぢやア、あなたのはさうでなかつたのですか』と、渠は突ツ込んだ。

『ええ――極卑怯で小心な人でしたから。』

『………』渠にはかの女の答へが房子さんの見てゐたところに一致してゐると思はれたのである。割り合ひにかの女も正直であるやうに受け取れた。こちらが自分の持ち前なる强みを以つて押して行きさへすれば――さうだ！この自分らの問答に得た印象を一番賴母しく思ひ浮べつつ、もう、自分は思ふ壺へ這入つたかのやうに喜びながらも、二三日を無理に自分で遠慮してゐた。

『いづれ文學者になる決心がつきましたら、こちらから御返事をさし上げますから』と云ふのであつたが、五日の日には待ち切れなくなつて、再び訪問に出かけた。午後の三時頃で、格子戸のところに、きたない身成りの老人がゐて、丁度、そのかついで來たのらしい納豆や酒のかすの荷を天秤棒と共に狹いおもて土間へしまひ込んでるところであつた。

『………』はて、な、違つた家か知らんと思つたとたん、渠はその奥から出て來た澄子を見た。貧乏

の爲めに假りにもこんな男の世話になつてるのか知らんと、ちよツといやな氣がした。かの女とその男とに對して私かに顏を赤めながら『おさしつかへはありませんか？』
『ええ、ちツとも。どうか――』かの女は然し別に違つた顏も見せてゐなかつた。
『………』渠は惡いものがゐたとなほ躊躇してゐると、
『さア、どうかおかまひなく』と、老人がからだをよけて呉れた。
『ぢやア、御免をかふむります。』思ひ切つて、渠はつか／＼とあがり込んだ。そして例の火鉢をさし挾んでさし向ひになつたが、先日とは丸で違つて、堅くるしくなつてゐた。
『………』かの女もこちらの樣子を察したらしく、『あれは父でございます。不斷はよそに住んでをりますが、時時來て呉れるんでございます。物好きに納豆なんか賣つてまして、ね。』
『さうですか？』渠はさう聽いて少し安心したが、この日自分が持つて來た言葉を云ひ出す氣にはなれなかつた。『例の決心がつきましたか』などと、暫らく文學の話をしてから、『いづれまた明日あがります。少し僕からの要件を申し上げたいのですが――』と云つて、いとまを告げた。
　その翌日、渠はかの女に今一度自分の家庭の事情を說明した。それによると、自分は事業の爲めに抵當に入れた持ち家を抵當から出すことはできないが、それでもそれを妻子に與へて置けば、こちらが仕送りをしないでも渠等の日常生活はらく／＼にできて行く筈になつてゐた。妻子は自分を敵の如く惡

く思つてゐるが、自分も亦渠等を見てゐたくなかつた。うち明けて云へば、歸京後、もう一週間もうちに寢起きしたが、一度だツて妻に接觸はしてゐない。自分は別に家を持つ必要がある。そして家を持てば、書生の時代とは違つて、自炊もできないから、ひとりは世話をして吳れる婦人が入る。それには、房子さんのところでの話では、澄子が丁度都合いいのであつた。自分はかの女を女中代りなどと輕い物に見ないが、その代り、時を見て夫婦同樣になつて貰ふかも知れぬ。いや、それを承知して貰ふまではうるさく全力を擧げて口說くかも知れぬ。が、紳士の體面を守るから、誓つて暴力は用ゐない。そしてそれ位の敎養はさきに自分が耶蘇敎を信じてゐた時代に、多くの婦人と交際してついてゐるから、かの女も安心してゐていいとつけ加へた。

『ですから、どうです、一つ――僕はざツくばらんに申しますが――あなたが僕を色をとこにするか、僕があなたを色をんなにするか、どツちとも氣が向けばかまはないつもりで、先づ一緖に住んで見て吳れませんか？』つまり、第一は、同棲。第二に、夫婦の實際――。

『さうです、ね――』かの女は微笑しながらもまじめになつた。『餘り突然のことで――』と、突き出たひさし髮の下からしろ目がちで以つてこちらを見上げて、而も年增らしい落ち付きを以つて、『ですが、その――北海道へまでもあなたを追ひかけた人はどうなすつたのです？』

『……』渠はそこにかの女に少くとも同棲するだけの氣がないでもないのだらうと分つた。『それ

は、もう、御心配にやア及びません。すツかり手を切つたのですから。』

『でも――』

『いや、實を云ふと、僕に一日後れてまた出京したのですが、僕を別な男に乘り換へた證據の電報があやまつて僕のところへ達したので、それを封じて送つてやりました。それで全く關係が絶えたのですから。』

『實は、あたしの方にも問題がないでもありませんのですが、ね』と云つて、かの女が語つたところによると、或紳士で、而も金のある若い紳士で、結婚をして吳れるなら、自動車をも備へて、大抵の物質慾なら滿足させてやると申し込んだのがある。そしてかの女もあらかた承知して置いたのだが、一つ面白くないことには、結婚の時期を今半ケ年ばかり待つて吳れろと云ふのだ。それも純粹な止むを得ない理由ならいいが、さうではなく、かの女が今のところまだその事件と不評判とを世間におぼえられてゐるから、必らず男の親戚どもから反對が出るにきまつてるからと云ふのだから、その世間體を遠慮する氣が、かの女から見れば、男の心として大して賴母しくもなかつた。且、その結婚で滿足を得られるのは物質慾ばかりで――それも失戀の反動作用として思ひ切り贅澤をして見るのだとすれば白面くないこともないが――失つた戀の痛みを別に恢復できるわけのものでもなかつた。その上、そのやらせると云ふ贅澤がどこまで行けるか、本人にただ金があると云ふことが分つてるだけでは見當

も付かなかつた。で、『その方は思ひ切つても少しもかまひませんが、あたしの方にも條件があります。』

『何です?』笑ひながら、『何でも聽きますよ。』

『第一に、決して暴力に訴へないと云ふことです、ね。』

『そりやア、無論です。』

『それから、中野とはこれまで通りの交際をつづけますから。』

『それも承知です。』渠はかの女が既に自分の來たことを中野に報告しに行つたことを聽かせられてゐた。

『とう〳〵あなたへまで近づいて來ました、ね——危險ですよ』と忠告したさうだが、

『そんなことは、もう。あなたの干渉する權利内にあることではありません』と、かの女は答へたさうだ。『關根さんだツて、さう世間の人が惡く云ふやうな人物ではございません、わ』とも。

これによつて見ても、かの女には隨分未練もあらうが、意地もあつて面白さうな女であつた。晝めしを馳走しに渠はかの女をその近處にあつて自分もよく行つた西洋料理の龍土軒へつれて行つた。そして、碁を少し父からをそはつて知つてると云ふので、かの女に井目を置かせて二回試み、二回ともかの女の負けであつた。それから、また暫らく玉突きをやつて見せた。

かの女の僅かな生活費の大半は矢ツ張り中野から出てゐるのであつた。そして二三日前にも澁谷の奥あたりに家を一緒に見つけに行つてちよツと靜かさうなのができ上りかけてゐたので、それを約束した置いたのださうだ。耕次は然しそんな面白くもないゆかりあるところへ這入りたくはなかつた。どこか全く方角の違ふところへ行きたかつた。

『兎に角、家を借りる準備に預けて置きますから』と云つて、渠はかの女に拾五圓を手渡した。北海道にゐる時から書き初めて、歸京後急いで完成させた長論文の原稿料のうちからであつた。渠はこの原稿がきのふ賣れたことや久し振りで玉突きをやつたことにやや元氣と都會的氣ぶんとを恢復した上にも、斯う容易に最近に會つた婦人と同棲することができるのを自分ながら勇ましく思つた。

歸宅してからも心が緊張してゐたので、直ぐペンを取つてかの女に手紙を書いた。『同棲のこと御承諾下すつてこれほど嬉しいことはありません。そのついでに第二の條件もお考へ直しの上承知して戴きたいのです。けれども、それがどうしてもできないとあらば、第一條件だけでも兩方を拒絶されるよりは結構なのでございます。僕は飽くまで一個の紳士としてあなたに向ひ、これから自分の新生活を築き上げます。人は僕のことを珍らしいほど傲慢な男だと云ひます。が、その實、ただ思つたことを無遠慮に云つてのけるだけのことでしよう。その證據には、今回、歸京しても、さきに十年間つづけて奮闘した自分の文學的努力に對して、少しの未練がましい要求も持つてゐなかつたのです、全く初歩

からの出直しをやらねばなるまいと思つて、これにも餘り望みなく歸つて來たのです。ところが、友人と云ふものはありがたいもので、僕をもとの通りに認めて呉れました。これに元氣を得たと同時に、またあなたと云ふ新らしい獲物が加はりました。これから共同の新生活をやり初めましよう。あなたもしツかりおやりなさい。僕は十分あなたの話し相手になりましようから、あなたも亦僕の手賴りになつて下さい。』

翌朝、この手紙が届いたあとへ渠はまた訪問して行つた。

『實は、きのふお預りしたおかねを手紙に入れてお返し致さうかと思つてましたのですが、――』

『そんなことを今更ら』と、渠は何げなく笑つてしまつた。

『お手紙を拜見しまして、また思ひ直したところでした。』

『無論ですとも！』

暫らく雜談をしてから、家を探しに一緒にそとへ出た。そして先づ飯田町なる紹介者の家へ行くつもりで、電車を九段したで下りる時、渠はかの女よりさきに飛び下りると、あやまつて自分の下駄の齒を折つてしまつた。すると、かの女はあとから下りて來て、

『見ツともないぢやアございませんか、どこか近處で買ひ換へなけりやア』と云つた。そして丁度角から二軒目にあつた下駄屋へ這入つて、かの女のがま口から出して新らしいのを一足買つて呉れた。

『………』渠はかの女の年が年だけに、もう女房氣取りになつてるわいと思はれた。二十六と申し上げたのは思ひ違ひで、本年二十七歳、明ければ二十八になりますと云ひ直したツけ。一つでも若く云つて置きたかつたのだらうが、同棲するとならば、やがてどうせ分るものだからと思ひ返したのらしい。渠には、さきの色をんなが二十二歳であつたから、今度のもせめて嘘にももツと若くあつて欲しかつたと云ふやうな慾心が、もうあたまの隅に出てゐた。

紹介者の家に行くと、房子さんの母親が『それはいいことでありました、ね』と云つて喜んだ。『近藤さんもこれからはまじめになつて、關根先生と御一緒にしツかりおやりなさいませ。中野さんなんか、あれは見かけによらない不まじめな人でしたから、ね。』

『………』澄子の顏にむツとした樣子が現はれたのを耕次も見た。

『不まじめと云ふのでもないでしようが』と、房子は取り爲しながら、『矢ツ張り、近藤さんが思つてるほど正直な人ではないのですよ。わたしはわたしの大切な友だちを臺なしにしたと云つて、泣いておこつてやりましたのですもの。』

『………』澄子は矢ツ張りむツとして默つてゐた。あの事件に對する自分の立ち場に理解のないものなんか來て貰ひたくないとかの女が云つたとかで、房子さんはかの女のところへ二度と忠告しに行かなく、またかの女も一方のところへ來なくなつたことは、渠も房子から聽いて承知してゐた。この行

きがかりからであらう、――三人の間に男女貞操問題の議論が盛んに出て、關根さんのやうに妻があつても全く關係を絕して別に女を持つのならまだしもいいけれど、中野のやうに妻と住みながら他にも女に關係しようと云ふのは不都合であり、またその女の方もよくないと云ふ結論に房子さんが達した時、耕次もそれに贊成すると、澄子は興ざめた顏で、かた手をふところに入れたまゝ、『いやなら、よすがいい、さ』と云つた。そして御馳走になつてそこを出てからも、なほ不興な樣子をつづけた。
『あれは誰れに云つたのです』と、渠は不審だからかの女に尋ねて見た、『房子さんにですか、僕にですか？』
『もちろん、あなたにです！』
『ぢやア、あなたの思ひ違ひですよ』と、苦笑しながら、僅かに云ひぬけをした。『僕はあなたの特別な事情をまで含めて云つたのぢやアないのです。ただ一般論で云つたのですから。』けれども、渠はかの女に多少でんばふ肌の口調や態度があつたことを見のがしはしなかつた。そしてこれが毒婦の本性を持つてゐて呉れれば一層に面白いがと思つた。どうせ自然に自分の女が變はるなら、いろんなのに接して見たかつた。

三

『兎に角、けふは、もう、家さがしはやめにしましようよ』と、かの女は云つた。寒いうへに、時間が後れてゐた。一緒に電車に乘つて、あす中には家をきめてしまひましよう、ね。』渠は急いできめないと、『ぢやア、大久保邊を探して、あす中には家をきめてしまひましよう、ね。』渠は急いできめないと、

かの女の心がまたどう變はるか分らないので、夜に入つても、そのそばを離れたくなかつた。

『明日のことは明日にして、お酒でも飲みましようよ。』かの女の燗をしたのはおととひかの女の父と一緒に飲んだと云ふその殘りであつた。父は餘り飲めないが、もとから好きであつたのでその相手をさせられたのが地になつて、かの女は社會に出ても隨分多くの酒飲みにつき合つて來たと云ふ。おとひも、『酒あり、肴あり、お出でを待つ』と云ふハガキを出したので、今でも小學敎員の恩給を貰つてる父がやつて來たのだが、『まるで赤壁の賦を讀むやうであつたよ』と云つてたとか。そしてこの頃は、獨りで考へ込むうるささに、かの女はコップでひや酒をやつてると云ふことが自慢らしかつた。

『つまり、燒け酒でしよう、ね』と、耕次は微笑して最初の猪口を受けた。自分が飲み手でないことは分つてるのだが、かの女の相手なら少しは自分もして見たかつた。

『あたしは原稿を書きます時でも、そばにコップを置いとかなけりやア書けない習慣ですの。』

『………』渠はその點にはかの女に呆れざるを得なかつたが、自分が相手をしてゐるによつてかの女が近頃の寂しみを多少でも慰められてるやうすが見えないでもなかつた。

『燒けにもなりましよう、さ』ともかの女は云つた。

『………』渠はそれがまた自分に嬉しいやうな可哀さうなやうな氣もして、雜談をつゞけた。『どうです、斯うしていらツしやつたら、いろんな男が張りに來ましようが』とも尋ねて見たに答へて、かの女が微笑しながら、然し多少自慢さうに語つたところでは、曾ては地方選出の代議士で、なにがしと云ふ有名な色魔的ぢイさんが、夜おそく酒氣を帶びてやつて來た。請願運動の爲めに一度面會に行つたことはあるが、今となつては、而もそんなありさまで會ふ必要がないから、達てと云ふのを無理に玄關から追ひ返した。その頃はかの女が白襟、白すそ、白そで口の美人傍聽者と云はれて、帝國議會に關係あるものらの間におほ評判であつたさうだ。最近の狀態になつてからも、一度、もと同僚であつた教員がやつて來た。その時はかの女が試みに丸髷を結つてゐたところ、その男が變な顏をして、

『結婚なすつたのですか？』

『なに、ほんの、これは狼よけですの。』少し皮肉にさう答へた。

『ぢやア、安心ですが、僕も實はその狼に――然し、おとなしい狼にですが、――なつて來ましたが』と云つて、同じやうな問題を持ち出した。これには、かの女は今でも心に思つてる人は變らないからと返事した。尤も、それには今更ら小學教員風情と結婚する氣もなかつたのだ。

『………』耕次にはさう云ふ話が私かに自分の好都合に受け取れた。向ふも相當に見識を持つてるの

だから、こちらも自分の見識を信じて進めばいいと思へた。

中野との間にまだ事件が突發しなかつたうちは、渠が毎晩のやうに十二時過ぎまで來てゐたさうで、――かの女の見せた追回文によると、渠のことを『半夜の友』と呼んでゐる。無論、然し、とまつて行つたこともあるに違ひない。それに、かの女は男に接近することを平氣になつてゐるらしい。その原因はかの女のまだ〳〵若い時の初戀が破れたことである。かの女の一番好きであつたいとこが醫學校を卒業して目黑に開業したので、父の許しによつて無人の手傳ひに行つた。やがては結婚式を兩方の親どもが擧げて呉れることにきまつてたのだが、それをも待たないでいとこはまだひよわかつた女を暴力に訴へた。で、直ぐその翌朝逃げて歸つてから、かの女の胸に一般男性に對する憎しみと復讎心との芽ばえが生じたのである。

その後、かの女の父の開らいてゐた小學校に預かつて養ひ育ててゐた或小華族の若子なる春夫さんと云ふ、ずツと年したなのを多少不自然な戀ごこちを以つて可愛がつた。一緒に寢せてやつてもゐたのだが、父が學校を賣り拂つて藥り屋になり、直ぐ失敗してまたかの女と共に郡部の敎員になつてからも、かの女は時々春夫をその家長の屋敷へ尋ねて行つて、同じ室にとまつたが、或時春夫の父がそれを餘り妬ましいやうな、如何にも氣違ひじみた目つきをして見に來たので、それツ切り行かなくなつた。それから、かの女が最初の敎員生活をやめて再び東京市に出で、鐵道局の事務員になつた時も、

父のうは役なる郡視學からの達ての願ひで――かの女の言葉では、表面だけは――その視學の甥なる人と夫婦同樣に一つ貸し間に住んだ。けれども、實際は男が餘りに弱くて意久地がなく、かの女を姉さん、姉さんと呼んで、かの女の出勤や歸宅を送り迎へするのが却つてありがたくもなく馬鹿々々しくなつて、逃げ出してしまつた。そして男が血で書いた手紙(これをもかの女は耕次に出して見せた)を以つて今一度歸つて來て吳れろと云つて來たが、相手にしなかつた。

かの女はまた或學生雜誌の編輯にたづさはり、その年若い金主兼社長の家に夜おそくまでゐることがあつた。そして歸りには新宿まで送つて貰つて、山の手線から電車を信濃町で下りると、そこにはまた中野が來て待つてるのであつた。が、或夜、餘りおそくなつたので、とまることにして『いたづらさへしなければ』と斷わつて社長と一つ室に眠つた。ところが、その翌朝、社長なる青年の夢中になつてる藝者が尋ねて來て、ひよんな顏をしたので、遠慮なくお這入んなさい、わたしは別に何でもないのですからと云つてやつたさうだ。

かの女はこちらが正直な態度になつてるのに報いる爲めであらうが、そんなことをもすツかりしやべつてしまつた。一つには、また、そこにかの女が男子どもに對して意張つて來たと云ふ自慢若しくは興味があるらしかつた。最近にはまた若い會社員があつて、夜、英語を習ひに來てゐたが、毎度おかねか使ひ物かを持つて來るのがをかしいと思つてゐたら、三晩目にはいろ〳〵身の上ばなしを初め

て、なか〳〵歸らうともしなかつた。で、とめてやつたら、遠慮がちにだが、だから煮え切れないで、結婚を申し込んだ。それを斷わつたら、その明くる日からぱッたり來なくなつたさうだ。耕次も、だから、とまる氣で火鉢のそばを離れなかつた。すると、かの女は

「まだお話がございますなら、横になつてから伺ひましよう」と云つた。そして無論別々になつてゐてだが、中野のことばかりは思ひ切れないと云つた風にその話をつゞけた。云はば、のろけばなしだ。然し、こちらにはそれがかの女の男その物を親しむよりも、かの女の戀その物を懷かしんでるやうに取れた。つまり、かの女の戀は既に實際の世界を離れて、全く空想界のあこがれに變じてゐるらしかつた。

『羅曼主義者よ』と、渠は心のうちでかの女を卑しんで呼んだ。そしてその空虛な箇所を滿たしてやるのは自分だと、同時にまた自分の今の空虛にはかの女を入り込ませてやらうと考へた。

かの女はふと再び起き出でて原稿入りの小籠を枕もとに持つて來た。そしてもとのところに腹這ひになつて籠から出した一つの新聞切り抜きを讀み初めた。男の女に對する弱點をかの女が冷かした警句のやうなもので、——

「男をいつも引きつけて置くには、女はいつもただ微笑してをれば足る。然らば、その微笑の言葉に對して男は犬馬の勞もいとはざるべし」とか、「女は少くとも一度は下だらぬ男の口説きを受けるもの

なり』とか云ふ文句などが集まつてる。かの女はその一句を讀み終はる毎に得意さうな顏をこちらに向けて、こちらが何と云ふかをうかがつた。

『面白い』とか、『眞理です、ね』とか、渠は口のうへでは答へた。そしてかの女が起き上つた時にちよッと見せた脛の白かつたことを思ひながら、かの女の朗讀の口調がしッかりして、而も齒切れのいいのがここ地よかつた。尤も、かの女は歌の文句通り芝に生れて神田に育つたと云ふ。けれども、その先代は地方出であるに對して、こちらはまた生まれたのはかみがたに於いてだが、最近の先祖數代の墓は深川に在り、父も祖父も八丁堀の生まれで、自分の育つたのは芝でだと云ふことを負けずに告げて置いた。こんなことはこちらには實際どうでもよかつたのだが、かの女の氣取りの一つがそこにあつたので、こちらも負けてはゐなかつた。

暫らく二人とも無言であつた。

渠には、自分が青くさい部屋で賤しい女のやつて來るのを待ち詫びたこともある。そんな時の經驗から云へば、女がそばにゐさへすれば溜らぬ刺戟を受ける筈であらうが、——種類の違つた女にはまた種類の違つた感じを保つてゐるだけの餘裕があるのを、幸ひにも自分年來の教養のおかげだと思はれた。自分の神經がます／＼冴えて行つて眠られないのは、必らずしも一方の暗い刺戟ばかりではなかつた。また、かかる婦人の心のうちがいろ／＼に考へられて、小憎らしくもあり、また賴母しくも

あつた爲めだ。こんな紹介があつたのなら、何も、降り積む雪に追ひ迫られるまで北海道などにぐづぐづしてゐるには及ばなかつた。馬鹿だ！自分は何であんなにあちらでまご付いてたのだらう？女郎に釣られたり、追ツかけて來たやまひ付き女を病院に入れたりしてゐたのは、――その時にはいろいろの理由もあつたが、――皆、今となつては、自分の絶望から出た無方針の結果であつた。これからは一つまた新しい氣ぶんを以つてこの婦人にも自分の努力を見せてやらうなどと思ひつづけると、自分は思はずしんみりした感激の涙をまでこぼしかけてゐるのをおぼえた。

そしてこのまだ見せはしない涙を以つて自分の本心はかの女を迎へてやるのだと思ふと、これが自分その物の正直なところそツくりであるだけに、これを直ぐにもかの女の胸に傳へたかつた。自分は全人的に緊張してゐるやうな、そしてまたデカダン的にだらけ切つてるやうな氣持ちになつて、心ではそれとなく自分にもある寂しみを訴へつつ、右を向いて、かの女の厚化粧をした丸い横がほに自分の目をそそいだ。不眠性にかかつてると云ふかの女も、無論、まだ眠つてゐないやうすであつた。けれども、こちらはいつのまにか眠れた。翌朝、目をさますと、かの女は既に奉どころをしてゐた。渠は手を延ばして枕もとの時計を引き寄せて見ると。九時を過ぎてる。

『……』直ぐ起きようとしたが、

『もう少し寢ていらツしやいよ、今に起してあげますから』と、かの女がわだかまりのないやうな聲

をかけた。そして來てゐる魚屋にさしみを二人前つくることを命じてゐた。

『……』渠はかの女が少しも人に憚つてゐないのにちよツと驚きもしたし、また安心もした。そして手を引ツ込めて、再び寢どこのあツたかみに親しんだが、その手がゆふべどう云ふ感じを自分に傳へたかと云ふことを考へて見ながら、私かに寢まき姿のかの女がしてゐることを枕のうへから見てゐた。

その日、二人で府下なる西大久保の方へ出かけたが、電車に乘つてる間にも、耕次は自分のゆふべだらりと延ばした右の手にまだあツたかい夢を見てゐた。

向ふも不眠性の苦しまぎれにだらうが、

『お眠りになれなければ、手を貸しましようか』と云つた。こちらは寧ろ先づ恥かしみを感じた。自分の前にとまつた男もさうして貰つて、自分通り多少の滿足を得たのだらうと思へたからである。切迫してゐた自分の呼吸はその時却つて少し落ち付いた。そして、さうだ！わけもなく無事にぐツすり眠りに落ちることができた。

それから、西大久保へ渠等がわざ〳〵目當てをつけたのは、渠の友人も三四名ゐるし、またかの女は去年まで學生雜誌の編輯に行つて、そのあたりの工合ひを知つてると云ふしするからであつた。その雜誌社は去年でつぶれたのだから、かの女のとまつたこともあると云ふその家が――恰好な家で

―ひよツとすると明いてるかも知れぬと云ふ望みであつたのだが、それは明いてゐなかつた。そしてその近處で、戸山の原に近いところで閑靜らしい、そして又ふたりの住むに丁度いいのを見付けた。玄關の間が三疊、客間が八疊、奥が六疊、茶の間が四疊半で、勝手の方には下便所もついてゐた。

『何よりもいいことには、門がまへで、玄關には式臺が附いてます、ね』と、かの女は嬉しがつた。

そして二ケ月分の敷金も渠がかの女に渡してあつた金で直ぐ間に合つた。

『よくそツくり持つてました、ね。』渠には、かの女の經歴をちよツと聽いたところでは人の物など何とも思はぬ婦人のやうでもあつた。

『まさか――あたしだツて――』

『實は、つかはれても仕方がないと思つてましたが――』

『あたしだツて』と、またほがらかな聲で笑ひながら、『責任は重んじます、わ。』

『………』渠はそのことに於いて先づかの女を妻同樣に信じてもいいと思つた。

同じ大久保に住む木山と云ふ友人の家に立ち寄り、渠はあす移轉して來ることを報告し、またかの女をも自分のこれからの同棲者として紹介した。その歸りは夜になつたので、かの女を赤坂へ送つて行つて、暫らくまた話をした。

『記念ですから、庭の乙女つばきと鉢うゑのけやきとは持つて行きますよ。』二つとも多少物ごころが

付いてからの春夫さんが時を異にして持つて來たものださうだ。

『あなたにはいろんな記念があるから、斯うぞんざいな言葉が使へるだけ、渠は少しらくな氣ぶんになつてゐた。直接の返事として、『然しそれも結構です。』

お互ひに友人のところで飲ませられた酒の醉ひがまだ殘つてゐた。

渠は家を探して歩いてる時、或雜誌の發行者に出逢つたのを幸ひ、原稿を約束してかねを借りた。その時向ふがにやり〳〵と笑つてた樣子を思ひ出しながら、今夜も亦とまりたかつたのだが、もう、たツた一晩のことをあつかましいと思はれたくはなかつた。

四

九日は先づ澄子の方を引ツ越しさせる手筈にしてあつた。が、餘り早く行つて、男が臺どころの物までかたづける手傳ひをするのは、近處の人に見られても、餘り見ツともいい圖ではなからうと思つた。渠は朝から落ち付きを失つてる心を押さへながら、丁度正午を過ぎてから出かけた。

『大層御ゆツくりでした、ね』と、かの女は不平さうであつた。

『なに、さう早く來たツて仕かたがないと思ひましたから――』

『でも、まア、――もう、車さへ來ればいいんですの。』

『ぢやア、直ぐ呼んで來ます。』

渠はゆふべの歸りに賴んで置いた荷車屋へ行つて歸つて見ると、お向ふとお隣りとの細君だと云ふのが揃つて來て、まとまつた荷物の間で茶と餠菓子との馳走になつてゐた。渠にはこの一方の細君だな、壁に耳をつけて澄子の話を聽き取つて、近處へ得意さうに布れまわつたと云ふのは、と分つた。成るほど人の惡さうな顏つきをしてゐる。それに、今度の男はまたどんな人物だらうと見たがつて集つて來たのでもあらうから、渠は耻かしいやうな氣もした。が、かの女はこちらを皆におほびらに紹介した。

『都合によると、――さうして結婚するかも知れませんの。』いろんなことを旣に話してゐたらしい。

こちらに向つて、

『あなた、あのをとめ椿を賴みますよ。』

『さうでした、ね』と受けて、渠は心の足もとを皆に見られないやうにして裏庭へ下りた。二間に一間ばかりの陰氣な庭にただ一つ、枝も少なにひよろ長く延びてる、例の記念だと云ふ木は、わけもなく拔き取れた。それを成るべく多くの土をつけたままで座敷から玄關の外へ運んだ。それから、また、いや／＼ながら皆のそばへ坐わると、

『ついでに橫手からまわつて下すつたらよかつたですのに。』かの女は疊の上に落ちてる土を氣にして

ゐるやうすであつた。
『ほ、ほ、ほ！』お客さんどもはわざとらしく笑ひ聲を擧げた。
『……』渠は苦笑しながら、『どうせ引ツ越すんですよ。』
『でも』と云つた切りで、かの女も亦客と顔を見合はせて笑つた。それはこちらを年うへの女が年したの男を扱ふやうであつた。
『あア、お菓子がたべたい』などと、かの女の告白によると、夜中にかの女が突然大きな聲を出すのも、隣りに聽き取られた。けれども、中野はめんどうくささうな顔をしながらも、そんな時にはてくてく出て行つて正直に買つて來たさうだ。
『……』耕次には、然し、そんなことは私かに眞ツ平御免の覺悟であつた。
かさ張るものは簞笥一さをと蒲團ふた組と長火鉢とであつたから、外に机や小行李や手桶を積んでも、荷車一臺で足りた。渠はかの女が棄てたとも知らずに一つの古びしやくを取り上げたら、けち臭いと冗談らしく叱られた。そこへおほ屋のおかみさんらしいのがやつて來て家賃を催促したが、
『それは中野さんが承知してをりますから』と、かの女は答へた。ゆふべは行けなかつたので、けさ早く報告に行つて來たことは、かの女の話でこちらにも分つてゐた。が、そこに金錢上の念をも押して來たものらしい。ただそれだけのことに關してでも、かの女をこちらが右から左りへおいそれと承

け縋ぐかたちになつたのは、餘りいい氣がしなかつた。

『………』渠は自分ながら卑怯と思へるほど冷靜になつてゐたが、かの女は假りの荷作りの荷積みにも多少の昂奮をしてゐたと見え、かの女の寵愛物がにやア〳〵泣いてそばへやつて來た時、

『おや！猫を忘れてゐましたよ』と云つた。

『………』渠としては忘れてはゐなかつたが、そんな物は嫌ひなので成るべくうツちやつて置いて貰ひたかつた。さりとて、これも一つの記念物で、緣日で拾つて來てから二年間も飼つてあるとかの女が云つてたのだから、萬ざらそれだけを切り離して虐待もできなかつた。『ぢやア、僕にいい考へがあります』と云つて、かの女にそれを捕らへしめて最も古い風呂敷に包んだ。そしてその前後の兩あしを縛つてから、積めた荷の一番うへなる炭箱の中に入れた。

『ぎやア〳〵』と、猫はびツくりした爲めか一生懸命にもがき初めた。

『可哀さうに！』かの女は然し半ば微笑してゐた。が、餘りに死に物ぐるひに聲を擧げてもがくのを見て、かの女の顏も見る〳〵眞ツさをになつた。

『………』渠も自分で笑つてゐられないほどそれの物ぐるひに同情したが、再び手を近つけるとすれば、きツと嚙み付かれる恐れがあつた。そしてもがき狂つてるそのさまを人間のそれにまで想像して、ぞツとしながら見つめてゐた。

そのうちに、どれかのくくりどころがほどけたと見え、猫は荷のうへからお向ふの板塀に飛び移り、そこを渡つて行つてこちらの長屋横手の塀から家根の方へ逃げた。きたない風呂敷をそのからだに附けたままだ。

『仕やうがないでしよう。うツちやつて置いて行きましよう』と、かの女は云つた。『どうせあなたにはお嫌ひのつれツ子ですから。』

『ぢやア、さうしましよう。』渠は逃げた物のことよりも、寧ろかの女が獨り者にも拘らず割り合ひに世故にたけてゐて、近處や知り合ひの夫婦喧嘩を仲裁したり、人の細君の爲めに離婚請求の六ケしいかけ合ひを引き受けたりしたと云ふことを考へた。

渠等が轉居さきへ行つた時は、日が暮れかかつてゐたので、差配に立ち寄つて提燈と箒木とを借りた。そして電氣が今夜間に合はないとのことで、戸の突ツかひ棒を持つて來てその横へまた別に蠟燭の火を立てて、それと提燈とのあかりで晩めし代りに蕎麥を喰べた。

『いよ〱これからあなたのお三どんですか、ね？』

『なアに』と渠は簡單にうち消した。『條件さへ滿足になれば――』

『ですが、それはまだ分りません、わ、――あたしは男に對して少くとも二度の復讎心こそあれ、戀などは、もう、二度としたくないのですもの。』

『……』渠はかの女がいとことと中野とのことを云つたのだらうと思つて、『それは分つてますが、ね、やがて第二若しくは第三の戀を僕が産ませて見せますよ。』

『それまではきツと約束を守つて下さるでしよう、ね？』この疑問にはまだかの女の顏に疑惑の色を見せた。

『無論です。僕がそんなことに教養のない人間と見えますか？』

『だから』と、かの女は一段安心したやうに、『紳士として尊敬します、わ。』

『よろしい！僕もあなたを一つの人格者として取り扱ひます。』渠はかの女の舊惡や古きずが如何にあつても、それは問はない決心であつた。自分も一新した生活を初める代りには、かの女にもさうさせたかつた。

荷車が着した時は七時を過ぎてゐた。うす暗いあかりを辿つて、荷を運び込んだ。玄關のから紙の奥なる六疊をかの女の部屋ときめて、渠は客間の八疊を占領することにした。兎に角、友人としてまだ同棲するだけのことだから、お互ひの寢どこは別室に取ると云ふのであつた。かの女の室へは玄關の間を通つて這入るほかには、茶の間からの開らきを明けるのだが、かの女はそのひらきに内がわからの假り錠をつけることにした。

氣候が氣候で、根を凍らせる恐れがあるので、をとめ椿をもついでに植ゑてしまふ爲め、渠はかの

女に提燈を以つて場所を選定せしめた。そして門內と前栽とを仕切る建仁寺垣のうらがわにきまつた。今一つかへでの本を持つて來たのを玄關さきへ植ゑた。

　その翌日は耕次自身の荷物が移轉するのであつた。こちらの懷中が乏しいのを察してゐる爲めか、かの女は

『これでもお役に立つなら』と云つて、小形の銀時計をこちらに渡した。が、渠には持ち時計が北海道で無くなつたままになつてるので、一つは必要の爲め、かの女から預かつても質入れはしなかつた。そして自分にたツた一つ殘つて來た化海道製のせびろ服を曲げた。そして荷車二臺の書籍と、夜着と、鐵の手あぶりと、碁盤とを持つて來た。その整理に日が暮れてしまつたが、二人で相談して、自分等の名をあつた板に二つ並べて書いた表札を門の向つて右手にうち付けた。

『………』渠はそれを人に自慢してもいい關係の表示として餘ほど得意に思つた。

『人が見たら、珍らしがりましようよ』と、かの女も嬉しがつた。

　落ち付いて、茶の間の火鉢に向ひ合つてから、渠は自分の舊作詩集を出して、そのうちから四五篇戀の歌を『實は、朗吟などしたことはないのですが』と前置きして、かの女に聽かせた。そして今かの女に對して有する同じ心持ちをそれとなく自分の調子にまで發表した。自分では詩や實生活に現はれた感傷心を卑しめながらも、少からずその感傷的になつてゐるのをおぼえた。

『あの猫はどうしてるでしよう、ね？』かの女は然します〱沈んで行つた。
『猫ぢやアないでしよう――』少し拍子ぬけがして、渠にはあはい嫉妬が燃えた。『中野のことだ。』
『そりやア』と、かの女はやや引き立つてこちらを微笑しながら見つめ、『あたしにやア戀がいのちですから。でも、中野との關係は、もう、過去のことですから御安心下さい。』
『そこがあなたのまだ羅曼主義者たるところですよ。』
『然し戀は靈で、靈は神聖です』とまた云ひ出したので、渠も意地になつてかの女に反對して、神聖も不神聖もない。靈も肉もない。かかる區別はどツちへかた向いても部分的物質的な考へで、人間の眞相や本心はかかる物質的區別を撤去した合致のうへに在ることを說いた。
然しかの女には矢ツ張りそれが理解できなかつた。肉は物質で、靈はその反對だと云ふあり振れた先入見がある爲だらうと思はれた。

五

かの女の父へハガキを出して置いたので、十一日の晝過ぎには早速やつて來た。それが納豆賣り、酒のかす賣りであることは耕次にも別に氣にならなかつた。且、娘のことは一切娘自身の自由にまかせてあると云ふのだから、今回のことはただこれを報告しさへすればいいのであつた。

が、父がかつぎ荷を裏手の方へまはして、それを臺どころ口へ迎へに出た娘に向つて、
『けふは、もう、商賣はこれでやめだ。こツちの方は初めてだが、かすはよく賣れたよ』と語つてゐるのを聽くと、耕次は八疊の机がはりになつてる一閑張りに向ひながら、少なからず一種の威壓をおぼえた。そして今までこちらで何げない話をしてゐた澄子が俄かにその態度を改めて、父と共にこちらがしよひ切れぬほどの要求を持ち出したりしてはと云ふ空想と恐怖とが浮んだ。
『……』が、改めて初對面の挨拶をした時には、また澄子の家を初めて音づれた時のやうなうぶな赤面を感じながらも、大分に渠の心は落ち付いてゐた。座敷の鐵火鉢を三人で取り圍んだのだが、かの女もまじめになつて、渠に、
『事情はあなたからお話しして下すつた方がいいと思ひますから――』
『さうです、ね――わたくしから申し上げますが、つまり』と云つて、渠は自分のかたちを正した。
『先刻やつて來た萬朝報の記者にもよく話して置いたので、いづれ明日の新聞には出るでしようが、』渠は簡單にだが明け放しに自分等の僅か四五日の間に同棲するに至つた事情や要件をかの女も一致できるやうに説明した。『ですから、僕はまだ戸籍上では別に妻を持てませんが、澄子さんさへ承知なら、いつからでも妻同樣の待遇をしたいのです。』
『尤もです。』父の六十を越えてもなほするどさうな目には、この時うるほひも出てゐるのが見えた。

『……』耕次は心で父の同情を感謝した。

『あたしは』と、かの女も耕次の言葉を引き取つて、『まだそこまでの決心には行つてゐないのですが、兎に角、さう云ふわけですからお父さんは御安心なすつてて下さい。』

『もう、僕は――いつもお前の自由にまかせてゐるのだから。』

『ぢやア、もうお分りになつたとして』と云つて、耕次は話しを父の商賣のことや、父やかの女が教員をしてゐた時のことに移した。かの女らの赴任地であつたと云ふ方面に、これも矢張り教員で教員の妻になつた昔の友人がゐる筈なのを思ひ出して、その人名を擧げると、それはまた意外にもこの父が媒介の勞を取つた夫婦であつた。こちらは今一つ意外なことを知つてゐた。自分らの仲間の一人ふたりにいたづらなものがあつて、電車や道ばたで知りもしない女によく物を云ひかけた。そしてそのうちにはそれが爲めに友人になつたり、甚だしいのは、即座に怪しい待ち合ひへしけ込んだりしたのがある。自分も一度それをやつて見ようとして、最初の試みに最後の失敗をした。もう、古いことだが、芝の品川電車通りで、けば〳〵しい服裝で、ちよツと見つきの違つた若い女が通つてゐた。それに話しかけて、

『どうです、晝めしでも一緒にたべませんか』と云つた。

『それどころですか、今から急いで帝國議會に行くんですよ。』女の昂奮してゐたのは、こちらに對す

る侮蔑の爲めよりも、議會と云ふ大きな場所でかの女の請願事件がその日の問題にのぼる故であつた。その女がいかなる奇縁か澄子だと云ふことは、おととひ、かの女が思ひ出ばなしにかの女から語り出したので分つた。そして今は渠から一つの笑ひばなしとして父に告げられた。

『だから、世間は廣いやうでも狹いものだ、ね。』父はこちらの私から緊張してゐる心持ちに比べては一般平凡な意見しか持つてゐないやうだが、そのはなし振りにちよツと物の分つた老人にありがちな超脱味、世の中を茶化してゐる趣きがあるのは、昔の士族や老教員の物好きとして――娘には勿論、息子夫婦にも手頼らないで、――こんな商賣をしてゐるにふさはしく思はれた。

『……』父を失つてる耕次は澄子の爲めに第二の父を得たやうな懷かしみをおぼえた。

『碁盤があるやうだが、やつて見ようか、ね？』

『願ひましよう。』

『關根さんも强いやうですよ』と云つて、澄子は盤の置いてある方に立つた。やさしく見せる爲めか、かの女は人並みより長く裾を引いてるので、兩手に持ち上げて盤を運んで來るその步みの間にふとつてゐさうなくるぶしのうへが見えた。

『……』渠は前にこれをかの女と一度戰つて見たが全く、同棲條件に對する程の手ごたへがなかつたことを思ひ浮べながら、父とは對で打つて、直ぐ負けてしまつた。それからまた何度努めても勝ち

味が少く、とう／＼二目の差があることになつてしまつた。そしてこの敵は老人だけに手が鈍いやうでも、なか／＼馬鹿にできぬ野心家であることが發見された。そして殘念さうに考へた上で、『えい、やつちまへ』と劫を思ひ切るところなど、まだ／＼老いぼれてるとは思へなかつた。

今夜から茶の間と客間とに電燈がついたので、日が暮れても碁をつづけてゐるうちに、かの女の働きで酒が出た。さしみと、その他にちよツとした物とが出た。そし三人が一緒に耕次の机兼用の一閑張りを圍んだ。

澄子はこちらと二人の時には隨分あまへるやうなおしやべりをするにも拘らず、父のゐるところでは言葉ずくなであるのが寧ろ思つたよりもこちらには奥ゆかしく取れた。

『僕と澄子さんとはどツか似たところがあるやうです。だから、合はない點もまた明かであり過ぎるのだと思ひます。』

『これは』と、父は娘をさして、『二つの時に母親に死に別れてから、云つて見りやア、まア、男のあひだに育つたものだから、どうしても女としちやア荒ツぽ過ぎます。』

『そんなことも不斷はございませんよ。』かの女は笑ひながら『中野に、かたなを拔いて出したのは、お向ふの野田の細君が見てゐて知つてる通り、あたしも死ぬ氣でしたのです。』

『それがよくない。』父はまじめ腐つてその手なる猪口を口の方へ持つて行つた。

『………』耕次も微笑してかの女と目を見合はしたが、そんなことまであつたものとしては必らずからだの關係にも違してゐたに相違ないと察せられた。
『尤も、そのかたなは、もう』と、父はこちらに向つて、『こツちへ取り返しましたが、ね。』
『あれがありますと、』今度はかの女がその口へ猪口を運びながら、『こんな寂しい場所では泥棒の用心にもなつていいのですが――』
『その代り、僕がまた斬られちやア――』
『ほ、ほ、ほ!』かの女は半ば飮みさした酒をこぼしかけたが、こちらを氣を兼ねたやうに見ながら猪口を置き、絹のハンケチを出して口をふいた。
『………』渠はかの女を取りつくろつてやるつもりであつた。矢張り笑ひながら、父に向つて、『今ぢやア、然し、いのち懸けなのは僕の方ですから――』
『まア、何でも人は無事圓滿にくらして行くに越したことはない。昔、神田の學校を持つてゐた頃は、僕もこれでも二三名の俠客を獨りで引き受けて追ひまくつたこともあるが――さうして、これがまた子供のくせに大膽で、それを隣りの部屋で寢ころんで見てゐたが――』
『………』耕次はそのことをも既にかの女から聽かせられてゐた。俠客の前には合ひ口があつたが、父がどうせ負けはしないとかの女は見てゐると、果して手に持つてたきせるをいきなりさか手に振り

上げて、俠客の眉間に突き刺した。けれども、初めから向ふの出に弱みがあつたので、それツ切り何も云つて來なかつたと云ふのだ。
『もう、年を取ると、』父の言葉はつづいた、『然し、何でも人は皆無事にあれかしと願ふやうになるものだ。』
『………』耕次はここに戀の必要がない人間と自分やうにまだ〳〵それの必要ある人間とを比べて見た。そしてその間に大きな間隙があるのを、また自分と澄子との間隙の如くにも考へられて、自分の心は人生の思はぬ悲哀に觸れてゐた。そしてまたかの女に對する自分の遠慮がちな心持ちは既に戀になつてることを自覺した。僅かの酒にだが、斯うそそられた自分はわツとでも、喝とでも叫んで、この痛切に振ふ自分の心を皆の前に活現させて見たかつた。
が、父も案外弱いのだと見え、大して飮まなかつた。そしてとう〳〵醉つてしまつた。
『喰ふ方にかけちやアまだ〳〵誰れにも負けないつもりだが』と云つて、父はまだずツと立派に揃つてるうへ下の前齒をむき出して見せた。が、『鞭聲肅々』や『孤鞍雨』などを得意さうに吟じたのは、奧齒の方からでも息が多少漏れてるやうなかすれ聲であつた。
『父から貰つたのですから』と云つて、かの女は酒のかすを入れた味噌しるを出して來た。
『寒い時アこれに限るよ。』

『………』耕次もその汁のにほひにあツたかみをおぼえながら、皆と共に飯をたべた。

うら横手の貸し家はまだ人が這入つてゐず、前庭の向ふには支那人らしいのがゐる。こちらの門まで這入つて來るまでに、支那人のと細い道を隔てて並んで家があるが、その間をまた曲がつて支那人の裏どころ口を通りこちらの勝手へまわつて來るまたのほそ道は、もう、人の廣い大根ばたけの生け垣に添つてゐる。犬の遠吠えが寒さうに聽えるばかりで、戸が締まつてゐれば、あたりはしんかんとして、家の中にのみあツたかい味噌しるに得た勢ひが保たれてるばかりだ。

『………』耕次は父をどこへ寢かすのだらうと考へてゐた。すると、かの女の明いた物をすべてかた付けてから、父が座敷に坐わりながらうと／＼してゐるのに聲をかけた。

『ぢやア、お父さん！』

『おう』と、しよぼ／＼する目を明けた。

『お休みなさいますか？』

『それぢやア、失敬させて貰ふか、ね？』

『………』かの女は客間へ父の床を取つた。そしてこちらに向つては斯う云つた。『あなたは六疊の方へいらツしやい。』

『………』渠は結構だとも、かまはないかとも云へなかつた。まだ關係のない時から父を變に思はせ

るにも及ぶまいと考へられたが――ここだけは矢ツ張りランプを用ゐる必要があつた室に於いて、

『あすの朝の新聞が見ものですよ』と、かの女は機嫌がよかつた。

『……』渠も醉つてるが、醉ひとは別な心の壓迫を感じながら、――顔だけを向き合はして、どちらからも微笑してゐると、かの女が先づ低い聲で話をし初めた。

『あなたがさツき憚かりへ行つてらしつた時、父は中野のことを馬鹿なやつだ、なア、と申しました。』

『……』こちらには都合のいい言葉だと思つたが、さうは見せないで、『どうして？』

『分つてるぢやアございませんか、しツかり踏みこたへてゐさへすりやア、こツちは少しやア不利益な位置でも無事につづいたものをと？』

『……』渠には然しそんな女と見えなくなつてた。『あなたが女房にしろと迫たさうぢやアありませんか？』

『そりやア、何度も申しました、さ。でも向ふがいつも強く出て呉れて、一度も逃げ腰になりさへしなかつたら、あたしだツても事を起しはしませんでした、わ。』

『あア、それでけふの話のかたなですか？鎌倉の前ですか、あとですか？』

『前ですが、ね――あれがあれば鎌倉までも出かける必要はなかつたかも知れませんでしよう。』

『さうとも限らない』と、渠はちよツと別な方へ目を轉じたが、またかの女に向き直つて、父の話を思ひ浮べながら、わざと無理に老人くさく理窟を捏ねた。『かたなと云ふ物は自分を殺すこともある代りに、また自分を自分で活かす爲めにもなります。』

『それこそどうして？』

『分つてるぢやアございませんか？』渠も亦かの女の言葉を繰り返したので、かの女は

『ほ、ほ』と少し高い聲を出した。實はさう高くもなかつたのだが、それがあたり近處へも聽えたやうに渠には思へてひやりとした。

あの檜町の家に於いてであつたさうだが、お向ふの野田夫人を立ち合ひにして最後のかけ合ひをして見たところ、中野は澄子から云へば卑怯にも、

『まださう妻子を棄てるほど熱心になるまでの關係はできてゐませんから』と答へた。

『……………』耕次はてツきりさうとは思つてないので、そしてまた自分も現に望んでる通り結果を避ける爲めの不自然な辛抱もあり得るので、これとそれとを僞善的に區別してはならぬ。だから、かの女のこの話を聽いてわが身も中野からかかる區別的侮辱を受けたやうに感じて、かの女の爲めに自分の胸が怒りに燃いた。同時にまた自分はそんな卑怯な云ひぬけをする男ではないぞと云ふ氣が出た。『何でまたそんな男に未練があるのです？』

『でも、あたしは關係があるも同樣ぢやアないかと云つてやりましたの。』

『………』さうだ！尤もには相違ない代りに、それで女がかたなに訴へかけたり、入水事件を起したりしたのでは、どうしてもその女の處女性を疑はなければならなくならう。これが最前から最も自分の氣にかかつてゐたのだ。嫉妬から出る少し皮肉な微笑になつて、『ぢやア、矢ツ張り押し詰めた關係もあつたのです、ね？』

『………』かの女は答へなかつた。そしていやな顏をして天井の方を向いた。

『それ位なら』と、渠は自分に顫えまでおぼえて口には云ひにくがりながら、かの女の横がほに向つて、『いツそのこと、──僕の──條件も──聽いて下さい。』この賴みは既に時を得てゐなかつた。

『あたしを信用おしなさい！それが先決問題です。』これが本心からか、それとも不本意ながらの胡麻化しか、棄てツ鉢に兎に角、かの女はその聲までがけんどんであつた。

『………』七日の夜に於ける如くまた手だけは許して貰へるのかと喜んだのが無駄になつてしまつた。ぐうぐうと安らかさうに大きないびき聲が隣室から聽える。左りには、また、かの女の息ぐるしさうに出してる鼻いきだ。が、ゆふべは引ツ越しの當夜でありながら割合ひによく眠れたと云ふから、かの女は父の來たのを安心して今夜は、まだ早いが、一層よく眠るだらう。けれども渠自身は、女の意志を無理に曲げられてその女がさんざんな棄てツ鉢ものになつた例を別にも澤山知つてるか

ら、そんな者をしよふことの利害上からだけでも飽くまで暴力は用ゐないつもりである。

六

新聞記者が來たのは、こちらから通知した爲めであつた。どうせあとからいい加減な想像を書き立てられるほどなら、寧ろこちらから進んで實際をうち明けて置く方がましだと云つて、耕次の友人にハガキを出した。それでその社の社會部の一記者がやつて來たのだ。

澄子の考へでは、この發表によつて公けにかの中野に對する意地深い復讐の一端を示めし初めるつもりであつたかも知れぬ。いや、さう云ふ口吻をかの女は記者やこちらに漏らしもした。耕次に取つても、また、私かに友人どもを驚かせてやらうと云ふ程のいたづらッ氣がなかつたでもないが、それ程のことは正式の結婚を披露する場合の花婿にでもありがちな意氣込みであつた。で、渠自身には、今度やり出す同棲生活のよし惡しは人の解釋の仕かたによつて何とでも云はせてかまはないのであつた。が、自分だッても再び妻に歸らない以上、また以後は世間の所謂放蕩をぱッたりやめてしまう以上、少くとも一人のきまつた女の必要なことだけを誰れにでも理解させて置きたかつた。

それが爲めに全く他人なる新聞記者に向つてもかの女には勝手にかの女自身の云ひたいことを云はせ、その代り、渠も亦自分の俯仰天地に耻ぢぬ自說と誠意とを述べたのである。けれども、その記事

が十二日の朝に出たのを見ると、先づ第一にその見出しを見てがツかりしないではゐられなかつた。『變り物同士の同棲』はまだしもいいとして、『肉が勝つか靈が勝つか』と云ふ割り註は如何にも不まじめに響いた。本文を讀んで見ると、かの女が

『私の愛は今でも中野に集注されてゐる、關根さんとはただ第一の條件通り同棲してゐるまでのことです。現在では露ほどの戀も愛もありません、云々』と云つてるに對して、自分はまた

『澄子はその後强情にも第二の條件を拒絶して今日に至つてゐる。だが、僕に成算あり、近き將來に於いて必ず僕の主義を遂行して見せる、云々』と云つてる。

　これは兩方とも成るほど意味から云へばおぼえのないことはない。が、記者が兩方を獨斷的に區別して前者を靈とし、後者を肉とした爲めに、――たツた一言の書き添へに於いてだけれども、――ただそれが爲めにこちらの考へをそツくりぶち毀わされてしまつた。

　かの女に取つては、然し、寧ろその方が高尚らしく見えてよかつただらう。が、その反對に、こちらは下等なものに見えてゐるのだ。人生の哲理的眞相から云つても、はたまた人間生活の實際から見ても、そんな區別の僞はりであり、空しく且おろかしくあることが自分には餘りによく分つてるのである。

『でも、大體は間違つてゐないぢやアありませんか？』さきに讀み終はつたかの女はかた膝を立てて、

得意さうであつた。

『……』なんだ、目じりにきたない目くそをつけてゐながら！渠は私かに先づ斯う憤慨した。かの女が新聞と云ふ聲を聽いてはね起きたので、こちらも直ぐ追ツかけて床を出た。二人ともまだ寢卷きのままで朝の寒さにふるえながら玄關の間に集まつてた。中野のことが書いてあるだけに、ますく渠はかの女の喜んでるのが不本意であつた。

『たツた一句、記者の獨斷がつけ加へられてる爲めに僕が臺なしになつてゐます！』

『どれ、お見せ。』父は、もう衣物を着かへて、また一方の室からふすまを明けて出て來た。そのあひだに、こちらの二人も急いで衣物を着かへた。

茶の間にはその前から父が既に火鉢の火をおこしてあつた。そこへまた集まつた時、父はこれで以つて昔、神田の俠客を感服させたのか知らんと思はれるほど不恰好で、厳丈なきせるを喰はへながら、そらうそぶいて云つた、

『ふたりが勝手に勝手なことを云つてるのも淡白で正直でいいが――』それから娘の方に向つて、『お前が中野のことをまだ愛してるなんか云ふのは――心では知らず――おもて向きよくない、ね。あんなに猫のやうな、陰險で輕薄な男を。』

『……』耕次には、父がいいことを云つて吳れた。それに似たことを自分も云ひたかつたのであ

る。男は先ツ張り男の味かただと思へた。
『弱いだけですよ』と、然し、かの女は和らかに反對した。『別に陰險ぢやアございません。』
『さうしたところでも、さ、ね。』それから、こちらに話題を轉じて、笑ひながら『きのふから僕も氣が付いてたのだが——君は至極淡白で、男らしくツて面白いが、この新聞にもよく人のあらを書いてある通り、ちよツとうすぎたなく見える、ね。』
『………』澄子も無邪氣に笑ひを吹き出した。そしてこちらを微笑して見ながら、『直ぐお湯に行つて、おついでにちよツと顏を當つていらツしやいよ。』
『さうです、ね。』渠はわれ知らず頰のひげをかた手でなでて見た。そして癪にさはる新聞を取つて、その記事に再び目をそそいで見ると、その前置きには矢ツ張り左の如くある、——
『奧樣の年は二十五六、むらさき矢がすりの書生羽織りをぞろりと引ツ掛け、いやと云ふほどひさしを出した厚化粧のおほハイカラなのに引きかへ、旦那と見えしはふけだらけのうすぎたない男、木綿の羽織りに山の出た小倉の帶、十日もかみ剃りの當らぬひげづらをのツそりと窓から出してゐるところ、その配合が極めて不調和だ……』
　無論、記者の書き都合のいいやうに誇張してあるのだが、綿服は渠自身の前身に於ける一つの主義だと云つてもよかつた。藝者買ひにもそれで通して、却つて信用を受けたこともある。樺太へ行つて

から、部下のものらが、それではあんまり渠等までの肩味が狹いからと云ふので、絹物を拵らへさせた。が、それは皆北海道で流れてしまつた。で、止むを得ず昔の名殘りを用ゐてる。その上、帶の如きは長い間の、親からの讓り物で、殆ど棄ててあつたのが殘つてたのだから、山の出たのは當り前であつた。

それはさうとして、父の注意も新聞記事に從つてわざと冗談をまじへてのことであることは分つてながら、こちらはわれながらまづい氣がして苦笑を禁ずることができなかつた。

九時頃であつたが、かの女の出して呉れた手ぬぐひとしやぼんとを持つて、渠は先づかの女と共に近處の錢湯に行つた。そして獨りで歸つて來た時には、自分でもひげの剃れた顏が晴れて冬の空氣にすうツとして氣持ちがよかつた。

『……』自分でまた頬をなでて見ながら、またの茶間に立つてるまま、かの女と父とに向つて、『どうです、ね？』

『大層きれいになりました。』父の返事は豫期したよりもまじめ腐つてた。

『ほ、ほ』と、澄子は笑つたが、機嫌よくしてゐる時の聲は相變らずほがらかであつた。

『……』

その日も、こちらの占領ときまつてる客間で碁をうち初めた。かの女は初めのほどは見てゐたけれ

ども、やがて六疊の方に引ツ込んだ切り顏を見せなかつた。
こちらはかの女の爲めにかの女の父を歡待してゐるつもりだが、かの女は多分おのれだけが忘れられてると思ひ取つてじれてるらしかつた。どうせ初めから氣六ケしい女だと見てかかつてるのだから、時々かの女の部屋へこちらから出かけて行つて慰めの言葉を與へるだけの勞は惜しまなかつた。その度毎にかの女はにが笑ひを向けるが、見ると、女に向つてけふの新聞記事を讀み返してゐたり、中野への手紙を書いてゐたりした。そんなことにもかの女の寂しさが堪へ切れなくなつたかして、つひにかの女は默つてだが押し入れのふすまや臺どころの戸棚をがたツぴしさせたり、その急いで往き來の足の疊ざはりを荒くさせたりした。
『………』父がから紙のこちらでその音に氣付き出した時は、ただちよツと耳をかた向けて向ふの方によこ目を使ふだけであつたが、あまり度々になつたので、『あんな女でもなかつたのだが』とつぶやいた。そして、そんなことの爲めにだらうが、碁盤の一方の隅に重大な失策ができたその防禦の一子を打つた。けれども、もう、父は手後れの爲めに全體を投げにしてしまつた。
『ぢやア、けふはこれでよしましよう。』耕次は父の與をそぐのも氣の毒でならなかつたが、かの女に對しても氣がねがあつた。黑石を納めながら、六疊の方に向いて、『さア、いらツしやい。もう、やめます。』

『……』父もこちらのつもりは分つてたらしい。かの女のことを『いい年をしてゐるのだが、まだ丸で赤ン坊のやうで――。』

『……』かの女は茶の間とのあひだのふすまを明けてのツそり出て來たが、少し目を据ゑて、きまり惡さうであつた。こと更らに聲を和らげて、『もう、おやめですか？』かう云つたとたんに、かの女は疊の上に落ちてる毛か何かを發見して、腰をかがめて拾ひ上げ、椽がはへ棄てに行つた。

『みんなでまた話しましよう。』

『もう』と、父は殊に頓狂に大きな聲で、『年を取ると、血の出るやうな決戰はできない、ね。高が碁盤のうへのことだが、どうもおツかなびツくりが先きに立つて、ね。』

『でも』と、これはかの女に向つて、『お父アんは二目うへだけのことはありますよ、なか／＼手ごわくツて。』

『全體の通算はどうですの？』

『僕の負け越しです。』

『そりやア、これでも少しやアこツちに强みはあるが――』

『古くからのことですから、ね。』かの女も心がうち解けて來たやうすだ、『あたしの五つか六つかの時からやつてるのですもの。』

『これはまた物おぼえがいい子で』と、父はかの女を――これも機嫌取りのやうに――讃めた。『十二の時にやア、もう、自分とおない年の男の子にまで大學や中庸を敎へたものだ。英語もその後どうやらかうやら獨學で讀めるやうになつたらしいが――。』

『………』耕次は、父から少しもかの女の兄のことを聽かないのは、五六年前から新宿の女郎を受出してゐて、かの女とも仲が惡いさうだし、父自身も共に住むことを嫌つてるさうだし。する爲めだらうと思つた。

『あたしのして來た學問なんか何の役にも立ちません、わ。』

『そんなこともない、さ。第一、お前だツて敎員もしたし、新聞記者もやつたし――』

『それが皆、あたしの失敗のもとになつたのですから。』

『………』耕次から見れば、それもかの女の實際上に一理があつた。

『字を知るは憂ひの初めと云ふこともあるが』と、父はさう云ふ方へ持つて行つて、『そんな厭世觀はこの老人にも禁物だよ。』

『自分の精神からさう厭世になるんなら、仕かたがないぢやアございませんか？』

『そりやア、ほんの、氣の持ちかた、さ。』

『………』耕次が傍聽してゐると、父がそんな呑氣なことを云つてるには、まだその娘のさうした心

持ちがかの女の女性としての根本的失敗をその根本から後悔してゐるのであることに氣が付いてないらしかつた。こちらには、かの女の厭世的態度や羅曼的な得意がりはそれを身づからまぎらす爲め、もツとひどく云へば、人にも胡麻化す爲めであるに相違なかつた。けれども、父はそれに氣付いてゐないのか？それとも、昔は矢ツ張り遊んだこともあり、また自家の女中を孕ませてその結果が、もう、品川あたりでそこの總領息子として十六七歳ばかりになつてると云ふほどの男だから、氣付いてながらも、再び娘に身投げなどしないやうに戒しめるつもりで、わざと呑氣さうにそらとぼけてゐるのか？兎に角、またこんなことを云つた、

『僕なんざア、もう、至つて樂天家の方だから、自分で働ける限り自分で世を茶化して働らくのだ。人間はどんなに死にたくないと云つたツて、獨り手に死ぬ時が來るものだ。』

『そりやア、さうですが、お父アん』と、耕次はそこで口を出した、『僕らは働らくにも二通りあると思つてるんです。さうして世の中を茶化してなら、働らくと云つても、まだほんとの物でないと思ひますが――。』

『若いものは皆さう行かなけりやアならんが、ね。然し、僕のやうに年を取つて來ると、盛んに働らいて意張つてるものを見ても馬鹿々々しくなつて、なんだ、べらぼうめと云つてやりたくなる。さうして、同じ價の物でも、意張つてるやつにやア意地にも高く賣つてやる代り、貧乏さうなものにやア

成るべく負けてやるんだ。』

『それも面白いでしようが――』

『僕らの合宿所にやア、いろんなものがゐて、ね、僕のやうに恩給を貰つてる老書生がゐるかと思へば、親は立派な軍人だが、社會主義の爲めに納豆賣りになつてる人物もあつて、それにこないだ探偵がついたから僕が仲に這入つてよく突きとめて見たんだが、ね、一向そんな惡い人物ぢやアないやうだッたよ。』

『さう云やア、あなたも』と、耕次はかの女を返り見て、また鎌倉事件の新聞記事を思ひ出した、『あなたも社會主義者にされてゐました、ね？』

これも自分が念の爲めに聽いて置く心要があると思へたことの一つであつた。自分にはそんな主義は彌次馬のおもちやとしか見えなかつた。

『間違ひですよ。たださう云ふ人の爲めに二三度議會の傍聽券を貰つてやつたばかりです。』かの女はまたむツつりしてゐたが、直ぐ笑ひに持つて行つて、『あたしやア戀でなければ復讐主義です、わ。』

『おそろしい人ですから、ね。』渠は冗談にまぎらせて、自分の目をかの女から轉じて父の方に移した。そして父の顏に困つたものだと云つてるやうなやうすを見た。この親子の間にもまだ理解し合はぬところが殘つてて、そこをかの女がそれとなく云つてるのぢやアないかともこちらには考へられ

た。』然し復歸もいいです。』さうだ、中野には、かの女が未練をまだ殘してる中野には、復歸もいいが、その半ばは旣にこの同棲によつて果されてゐるではないか？更らに思ひ切つて自分らが夫婦同樣になれば、こちらの熱心な望みが叶ふばかりでなく、かの女の執念深い敵意も十分滿足になるわけではないか？然しそこまでは父のゐる前でかの女へ突ツ込めなかつた。日は暮れかかつてゐた。三人でもツとよく親しめる爲めに、酒の方がいいと見て、『また一つ飲みましようか、ね？』

『別に何もありませんよ。』かの女がちよツとこちらへ目くばせしたのは、さうかねを使つてる餘裕がないとのことらしかつた。

『いや、もう』と、父は遠慮して、『飲むのはかまはないが、肴なんか無くツても――』

買つて來いと耕次は命じたのだが、かの女は寒いからと云つて行かなかつた。そして茶の間の火鉢のそばであり合はせの物にまた、朝と同樣、父の納豆を添へて出した。

七

十三日も晴れであつた。

ゆふべ、かの女はまたランプの光で新聞の記事を開らいて見ながら、

『あたしだツて靈ばかりを要求してゐるんぢやアありません、わ。心が承知すりやア、あなたの肉に

も一致して行きます』と云つた。

『……』數日間の交渉で多少はこちらの說が分つて來たのか？それとも、前々からその本心はさうであつたのか？いづれにしても、まだこちらに取つてかの女の考へは十分とは見えなかつた。云はば不熟未熟の考へであつた。すべて人間の働らきには――そして戀愛もその働らきの一つだが――肉を受ける靈もなく、靈に與へる肉もない。その承知する力を有する心とは、乃ち、肉であり、さう云ふ肉はまた眞に生きた靈であるから。これをかの女に對してめんと向つてよりも寧ろ皮肉に、『然し、僕と云ふ物をあなたの肉としてばかりとツつかまへれば、その前に、もう、僕はあなたをすり拔けてゐましよう。夫婦の眞相は男と女との一致と云ふよりも、男女相互の肉靈が無區別に燃燒合致するのだから』と答へた。

渠はそんなことを思ひ出しながら、かの女と共に朝おそく起きると、井戸端の霜ばしらがなかなか解けさうもなく深かつた。それをざく／＼踏み碎きながら、かの女の炊事の爲めにまた水を汲んでやつた。

第一便に――これがここへ郵便の屆く初めだが――かの女宛てのハガキが一つ舞ひ込んで來た。かの女はその自室に耕次を呼び込んでから、少し氣取つたやうすで云つた、

『これを御覽に入れます。』

[illegible]簡單な文句を讀んで見ると、
『意外の新聞記事を見て當方は驚き入り候。約束をお破りになるのは御勝手に候へども、まさか當方の姓名だけは先方へお告げになるまじと信じ候。以上』とある。妻にするつもりであつたか、それともめかけか、それは實際にこちらに分らないが、かの自動車をも用意するからと申し込んだと云ふその本人らしい。そしてこの文句の云ひまわしが少なからず恨みや卑しめを帶びてゐるにも拘らず、六體の禮儀を守つてるところを見ると、かの女がさきに說明した通り、紳士であるらしい。若し果してそれならば、ゆふべ、中野のことを云はせながら、ふいとわざと反對の方へ押し詰めて、既にかの女をして——どうしても云はないと云つたのを、無理に——その住まひとその姓名とを白狀させてある。○○のお宮の森わきに住んでゐて、○○○○と云ふ人だ。その森わきの道をこちらもよく通つたことがあるので心に浮べて見ながら、

『あれでしよう——?』渠の微笑した目にも矢ツ張り卑しめや妬みを帶びた。

『えい』と答へたかの女も亦無理に笑ひを見せてるだけのやうであつた。

『……』渠には、かの女が成るべく秘密を持たないやうにすると云ふかの女自身からの約束を——胸に斯く痛みを感じつつも——直ぐ實行して呉れたのはありがたかつた。それには自分も亦秘密をないやうにして報いなければならぬ。ましてやそんな金持ちとの約束——萬ざらうそでもなかつた——

を棄てて、こんな貧乏人と同棲したのだ！けれども、また、それをうらはらに考へて見ると、中野に對する復讐としては、ただ金を持つて意張るよりも、寧ろこちらと共に精神的な評判を取る方がいいのかも知れぬ。若しさうなら、こちらも亦ただの出しに使はれるに過ぎない。そして氣が向かなくなると、また、ふいと約束を破つて行くのだらう。こんな短かいハガキの文句に、渠が妬みを產み出すのもその氣まぐれを思つてだ。

さきに房子さんが語つて吳れて置いたところによるも、かの女らが東洋學生會と云ふのに加入してゐたところから、或支那人に熱心に思はれたのをはね付けたにも拘らず、また同じ會員の一人であつた或朝鮮人と共に御嶽の山で一週間も暮した。澄子の自家辯護に從ふと、それは向ふが友人の情としてかの女の失敗を慰めて吳れただけで、――眠る時には、疑はれない爲めわざ〳〵から紙を明けて、部屋を隣室の客と共通にして、かの女の寢どこをその中間に敷かせた。で、反對に、山みちを散步しながら口說かれることがあまり烈しくなつたので、二十日の豫定をずツと早く切り上げて歸つたのだと云ふ。

けれども、また、かの女が二三の通信社、さまざまの雜誌にたづさはつた間に、或實業雜誌の社長なる洋行歸りを餘りにうるさい爲め椅子で投ぐり付けたのは、おほできだから自慢をしてもいいとしてからが、或通信社長に待ち合ひで云[illegible]その斷わりの返事をしに翌晩また同じ待ち合ひへ出

しては他にどう云ふ意味をも成さないのである。或は、それも結果を殘さぬ用意があらばとでもかけ合つて見て聽かれなかつたのだらうか？

　それに、また、かの女はおのれの思はれた若しくはおのれが思つた男の細君のところへ、——白狀してならまだしも殊勝らしいが、——そらとぼけて遊びに行つた。通信社長の場合にもそれださうだが、中野のにもさうだ。前者はやがて牢に這入つたので、そのあとで知らせたら、その細君はそんなことがあつたのですかと笑つただけださうだが、後者の今でも燒き餅を燒くと云ふ。が、男子たるこちらの今の心持ちにだツても違ひはない通り、燒くのが當り前ではないか？

　かの女のかかる不謹愼、かかる圖々しさをすべて、渠は自分でその場の一瞬間にごちや／＼と思ひ浮べたのである。そしてかの女を愛してゐるだけに、そんなことが實際になかつたのを望んだ。けれども、あつた事實は、隱し立てや誤解のできる餘地のあるものとしたところが、事實としては動かせなかつた。そしてその動かせない事實のやうに、自分の立つてるからだがいつのまにか堅くなつてゐた。

『……………』かの女も然しこちらに釣られて立つてゐた。

『むツ』と、渠は自分の口を結んだ。そして自分のその堅い心持ちが顏にも出たのを胡麻化す爲めに、

わざと首を後ろにそらせて、ハガキを持つてる方の手を不恰好に力を入れてかの女の方へさし延ばした。

『………』かの女も冗談にそのうすい口びるの口を結んでとがらせた。そしてその和らかい羽織りの肩と手とを怒らせてハガキを受け取つてから、『ほ、ほ、ほ！』

『………』渠はかの女の頰と足とが可なり肥えて見える割り合ひにその肩などのあまり角張つてるのを初めて見て取つた。が、その聲にして若し全く僞はりがないものになれば、かの女の前身などは――たとへ淫賣であつても、穢多であつても――問ふところではなかつた。立ちどころに自分の愛が動き涌いて來たので、『まア、いらツしやい』と云つた。そして自分がさきになつて、裏の明き家の庭に向つた窓に押しつけて据ゑてある机のそばに行き、そこに坐わつてそのこちらがわの片隅に自分の左りの肱を突いた。

『………』かの女もついて來て、机の眞正面に坐わらうとしたが、こちらの避けためりんすの座蒲團を先づ半分押しつけて、投げ出したやうに慣れ〴〵しく『お敷きなさいな』と云つた。そしてあとの半分の上に膝をおろして、左りの肱を机にもたせた。すると、こちらとの間に座蒲團のたるみが挾まつたが、渠が自分の揃へた膝をちよツと上げたので、その下にたるみは延びてしまつた。

『………』渠は燃えてるやうな胸の騷ぎを頰づゑにまぎらして、かの女の自分に向けてるその顔と目

詰めながら、『これでこの方は僕にも安心ですが、まだ中野がありますね。』

『……』ちよツとにツこりして、『あれはきツとやつて來ますよ――もう、あたしからは行かないと決心してをりすが――』

『それはどうも、あなたが會つてやるつもりがある以上は、止むを得ませんが――』渠はこのことにも父が何とか云つてるだらうと見て、『お父アんの意見はどうです？』

『父は、もう、あなたを信じてをりますから、中野のことはきツぱり思ひ切つて、ここに落ち付けと云つてます。』

『それ御覽なさい！』渠は笑つて右の手を擧げて輕くかの女の肩を叩いた。決してそんなことで樂觀したのぢやアないが、少しでもかの女の心にもツと接近する機會を得ようとしたのだ。

『でも』と、かの女はほほゑみながらも、『あたしのは未練ぢやアありません。復讐ですの。』

『なアに、復讐だツて、未練だツて、向ふを眼中に置いてるのは同じですよ。』

『ぢやア、さうとして――お氣の毒ですが、ほ、ほ！あたしの目がなくなるまでは――』

『無論、一年でも二年でも待ちます！』これは渠がかの女の冗談的誇張に應じて同じくまた誇張した答へに過ぎなかつた。

この日は晩になつてから、かの引ツ越しの前日に澄子を紹介して置いた木山が――こちらに負けな

い氣でだらう――一人の美人を紹介しに來た。それから、また、つい近處の川上も來た。

　その翌日、まだ父がとまつてるのを幸ひにして、耕次はかの女と共に朝めし後直ぐ、十一時半頃に家を出て、自家の後ろ手を一二丁しかない戸山の原へ散步に出た。風は寒く霜ばしらの深いまばら林の道で若い男女の一組に行き違ふと、かの女もこちらのからだの左り手へ接近して來た。

『男は女の右手につくものです、わ』とは、かの女がさきに一緒に家を探しまわつた時に云つたことだ。

『………』今は、もう、全くおもて向きだけでは夫婦に見られるのをかの女も耻ぢてゐないやうだが、――いや、わざとにもさう見せようと云ふやうすもあるが、――あの時、渠はまだ自分の方が、九歲も年うへでありながら、寧ろ少し耻かしかつたので、それをまぎらせながら、

『そりやアさうでしようよ、左りにゐさへすりやア自轉車や自動車にもぶつかりツこがないでしようから』と高笑ひをしたツけ。

　思はず早稻田へ出たついでに、共に眞宮と云ふ友人を若松町に音づれた。そこからまた氣が向いて、電車で房子さんを訪ねた。が、そこでまた前のと同じやうな婦人論、戀愛論で渠は自分の澄子と衝突した。

　自分が考へて見るに、房子さんのところへ來る度每に斯う自分らに衝突があるのは、必らずしも自

分らの間に不理解がある爲めばかりではなかつた。澄子は自身に弱點ができて以來、それを無理にでも否定して置かうとして堅くなり、その親同士までこいぎになつてるこの獨身親子に對しても暗に楯を突いてるのであつた。

それに、また、かの女には面白くないだらうと見えることには、渠は房子さんとはずツと以前からの交際で、お互ひにいろんなことも知り合つてる。が、男と女とのことだから、さう痛切に競爭もならねば、妬みにもならぬ。或時など、ふとした話から、房子さんはこちらに向つて、むろん冗談に、

『あなたはさう女を探しまわりながら、わたしを一度も口說いたことはないの、ね』と云つた。

『口說いたツて駄目だと分つてるから。』渠にはそれ位の理解はあつた。他の婦人で、房子の寫眞を見た者が、この器量ぢやア如何に關根さんでもおとなしくしてゐるのは當り前です、わ、ね、と冷かしたさうだ。渠は男女の接近をさう單純なものとは考へてゐないのであるが——。

こんなことをも澄子は既に聽かせられてるだけに、房子さんが渠の肩を持ち、渠がまた他方に贊成するのを——おのれがうとんじられてると思つて——面白くなかつたにも由るだらう。だから、渠はここを辭する時當分再びは一緒に來ない方がいいと決心した。

『房子さんは理解も同情もないくせにつけ〳〵云ふから癪にさわる！』澄子はそとへ出てから斯う獨

り言のやうに云つた。

『ぢやア、僕はただその癖の犧牲になつたんですか？』

『あなただツてあんなものに贊成する必要はないでしよう。』

『………』一槪にさうとも行かなかつたのだ。

ふたりが新宿の電車終點を下りた時は、もう、十時過ぎであつた。暗い方へ這入るに從つて人通りは少く、店屋も多くは戸が締まつてゐた。

『手をつなぎましようか』と、突然かの女は云ふが早いかこちらの左りの手を握つてゐた。

『………』渠は、歸京早々或友人のお古を貰つたインバネスの羽根の下にかの女の血のあツたかみをおぼえながら、じツとあまく胸のとどろきを辛抱した。そして自然に足の歩みを早めた。

『………』かの女にもそれツ切り言葉はなかつた。が、これまでにも隨分圖々しく見えてた女も、こちらの動悸か電氣かに感じてゐるかのやうに、その息を急がしさうについてる。そしてそれがかたわらの〇〇と書いてある門燈の光に白く見えて、直ぐ消えたり現はれたりしてゐる。

一方は芝草の土手に立派な門がまへ、他方はあらい生け垣なる、その間を少しのぼつて行く道であつた。

『………』渠はかの女とたツたふたりツ切りの世界であるやうに迫つて來たので、矢張り默つてだが、

手を取られてゐるまゝいきなりかの女の前へまわり、自分の右の手をかの女の肩にまわした。
『………』かの女も素直に進んで暫しこちらの接吻を取けてゐた。『もツとゆツくり歩きましようよ』
と云つてから、また暫らく間を置いて『あたし、實はあなたを好きになつて來ましたの。』
『感謝しますよ。』少し行つてから、また立ちどまつた。
『中野のことはただ過去の追回に過ぎませんから、ね――あたしの一つの趣味として許して置いて下さい。』
『僕としちやア、然し、その趣味もなくなつて貰ひたいのです。』
『また、さう急いで』と、かの女はこちらを力強く引き戻した。再び手を取り合つてるのであつた。
『この奥に關根、近藤』とかかげてあるところを曲がれば、四五間で自分らの住まひに達しられるところまで小一丁ばかり、そしてなほ戸山の原までも眞ツ直ぐにとほつてる狹い横丁になつた時、生け垣のあひだから小菊の霜にしぼんだのと白い八ツ手の花が湯のゆき歸りによくのぞかれるあたりで、――川上氏の門よりも少し手まへだが、――もう一遍立ちどまつた。
そしてまた歩き出した時には、手が解けてかの女がさきに立つてゐた。
ところで、僕はかの女をその後ろから見て行くと、かの女は相變らず昔のをとこ書生の如く一方の肩を少し高くいからせてゐる。これは一度その前にも注意したことであるので、

『それ』と云つて、突然、かの女の左りの肩を輕く叩いてやつた。すると、「あ、さう、さう！」かの女は忘れてゐたと云つたふうで頓狂に笑ひながら、それを舐めたが、今度はまた右の方が高くなつた。

『………』渠はいやな癖もあるものだと呆れた。向ふがそれを獨りで氣にし出して、また直して見たりして行くのを、もう、こちらはほうつて置いた。

女の獨り者がいろんな男に持てて來た思ひ上りの結果として、それも面白くない記念の一つかと思ふと、かの女がその度每に與へたらしいのと同じ今の接吻には、それだけいろんな黴菌が傳はつてるかも知れなかつた。

で、渠は自分の袂からそツとハンケチを出して、そツと自分の口のあたりのべた〳〵したのを押しぬぐつた。

八

父は娘のところへ來ると、いつも娘の朝寢坊に釣られて自身も寢坊をすると云つてたが、十五日の朝、食事をすますと直ぐ、娘の小使ひとして三圓を置いて、歸つて行つた。その歸る時、臺どころから荷をかついで出るが早いか、うら庭で一つ、

『かすやア酒のかす』と呼んで見せた。

『面白い人』と、かの女はこちらに向つて獨り言を云つた。

『……』渠はひと風變はつた親子の情を思ひやりながらも、然し笑つてはゐられなかつた。ゆふべは餘ほど盃けて、惡く取れれば馬鹿にして、かの女に當つて見たのである。けれども、矢ッ張り無駄であつた。

初めは、かの女がかけ蒲團の中で腹這ひになつて雜誌を見てゐるのを手で以つてからかつて見たりした。すると、かの女はおこりもしないで、こちらを見て、

『いたづらッ兒』とかの女のとがつたあごをしやくつた。その子供らしいところから、段々と說いて行つたのだけれども、つまり、徒勞であつた。

かの女は相變らず、それが中野のゐる爲めではない。また、耕次を嫌つてるのでもない、と云ふのである。

『あなたが僕を嫌はないなら、嫌はないやうにしようぢやアありませんか？女が男を戀して行くと同樣に、男も女の全部を得てしまうまでは安心ができません。また苦しくッて、精神もからだも瘦せて行くものですから。實際に、渠は澄子を見てから自分のたださへ瘦せてる顏が一層瘦せて來たやうな氣もしてゐるのだ。

『ですから、これからはおもて向きでは十分夫婦同樣に見えるやうに致しましようよ。あたしも今ぢやアあなたが無いと寂しい氣がしますから。』けれども、五年間も戀をしてその爲めにいのちまでも一旦は棄てたそのまとにさへ許さないで來た『處女性』を、今となつてさう容易に棄てたくはないと云ふのだ。

　それは、然し、渠には半ば豫期してゐたことのやうでもあり、また半ばはうそのやうでもあつた。正直に云つて、かの女に果して純全たる處女を標榜するだけの資格が殘つてるだらうか？

　かの朝鮮人のことは、豚に玉を與ふる勿れであつたとしてもいい。また、皆に或待ち合ひでわざと置き去りにされて、殘つた唯一人の男の爲めに午前の一時、二時まで引きとめられ、それでも逃げて歸つたのを、その男が翌日になつて既に成功した如く吹聽した。それをかの女が怒つて中野を立ち會ひ人にして、皆の前で取り消さしめたと云ふのも、それで少しもかまはない。が、――

『それぢやア、最初のいとこにはどうです』と、渠は重苦しい挑戰的氣ぶんを以つて突ツ込んで見た。

すると、かの女は、

『あれはまだ何にも分らない子供の時で、而もこツちが不承知の無理强いでしたもの。』斯う答へて、平氣であつた。

『では、――ぢやア――』中野のことは渠には、もう、よく分つてるやうな、また分らないやうなの

で、聽きかけたのだが、聽き糺すにも及ばなかつた。

無理强いの不承知を穢れてゐないと云ふ格で、不自然の用意をも『純潔』だと云つてるのなら、注意深い道樂者のやつてることにも純潔で通せるのがあらう。こちらはそんな偽善的申しわけをしないでもかの女の舊惡は——きツとあるものとして——すべて許してやる氣でゐるのに、そこへ信じ込んで來ないのがもどかしかつた。

アメリカのをんな青年のうちには、おのれの愛する婚約者には結婚式をするまで決して身を許さないでゐながら、その間に他の男を——殊に日本人や支那人やアメリカ印度人を——近づける氣まぐれものがあると云ふ。却つて一たび、おのれの一生を共にする男にさう容易に許してしまへば、その男がいい氣にもなり、そしてまたおのれが速やかに卑しめられるからである。それに似た考へを澄子も持つてゐるのぢやアなからうかとも、渠には臆測できた。若しそれならお門が違ふ——『生意氣に、人を——馬鹿に！』

『………』かの女はこちらがそこまで考へてることなどを知らう筈がなかつた。父の歸つたあとでも、また相變らず前夜に見たたわいもない夢のことなどを語りながら、『あたしの親はあれだけよく分つてる人でしよう。然し、あたしが若しほかのことに熱心になれば、親なんぞア——どうでも——』

『………』渠は、かの女のさう云ふ心持ちが果して生まれ付きの眞實なら、むろん、これまでにもあ

の男、この男に浮かれるやうなことはなかつただらうとも考へられた。斯うしていろんなことに昂奮し、いろんなことに思ひ惑つた。

十五日のけふは少し氣を拔いて來るつもりで、友人訪問や仕事の要件に出かけることにきめた。そして明けツ放してある室を日當りのいい椽がはに出で立つて、暫らく庭の南天やゐすなろや持つて來た椿などに目をやつてゐた。すると、自分の向つてる眞向ふの支那革命黨の家の窓から一人の支那人がちよツと顏を出して、こちらを見た。あれが宋敎仁と云ふのか？今一人の黃興は西鄕隆盛のやうに肥えてるさうだ。そのどちらかのめかけになつてる日本人の女中のゐるのが澄子には自身のいやな對照になつて、一層かの女の思ひ切りを惡くした。

『あたしやアあんな女と遣ひます』とも云つたことがある。おのれも御獄の山で朝鮮人に或程度までの世話を受けたくせに――。

いろんな支那人も出入りする樣子だが、こちらで困るのは喰つた菓子の紙ぶくろを丸めて窓からこちらの庭にまで投げ棄てることであつた。疊の上に短い毛が一すぢでも落ちてるのまで氣にして拾ひ步く潔癖な澄子は、きのふ、それに對する抗議を向ふの女中まで共同の井戶端に於いて申し込んだ。が。また一つ白い紙の丸まつたのが庭の檜のしめつた根もとに落ちてゐる。また棄てたらしい。

………『頭も癪にさわつたので、向ふへも聽えるやうに『また落ちてる――云つても分らない奴ど

もだなア！』一つには、然し、新聞の記事が渠等にも馬鹿にした興味を持たせたに違ひなかつた。『あなたは胸が明いて見ツともないから、これをおさしなさいよ』と、云つて、かの女は一つのピンを持つて出て來た。

『純金だから、惜しいんですが――』

『また何かの記念ぢやア――？』

『いやなら、およしなさい。』かの女は有無を云はせず、こちらの襦袢の襟を兩手で直して呉れて、一寸二三分で曲がつたさきに何かの小さな寶石が光つてるのをそこに留めた。

『いい、ね。』渠は今一度自分のあごを引いて、自分の目をピンの光りへ向けた。結婚ゆび輪の代用にも思はれるので嬉しくもないことはなかつた。

『またのぞいてる！』かの女はこれも聽えるやうに云つて、ちよツと横目をして向ふを睨らんだ。

『………』渠がまたその方に目をやつた時には、然し、もう見えなかつた。その自國の爲めに亡命して、その苦境を近ごろは懸け軸など賣つて切り抜けてると聽いては、あんまり馬鹿にもできなかつた。貧乏や亡命の所在なさにか、向ふにも時々碁を打つ音がする。

『行つていらツしやい。』かの女のたツた半日をでも名殘り惜しさうにした顏と聲とを、それでも新らしい無事な家庭から出たそれだと空想しながら、渠は或雜誌社へ行つた。

すると、そこの友人が直ぐ澄子の話になつて、あれは君、中野の前にも男とくツ付いたことがあるぞとのことであつた。血で書いた手紙のぬしのことを傳へ聽いてたのだ。

『なアに、あれなら今の僕と同樣、ただ同棲してゐたばかりだ。からだの關係があつたのぢやアない。』

『若い女にそんなことができるだらうか？』

『現に、僕とまだ潔白ないきさつをやつてるぢやアないか？』

『そりやア、證據になるものか？たとへ人のいい君とはさうやれても、それはもう女も老巧になつたあとのことで――中野の方の連中から聽くと、また、あれは不具者だらうツて云つてる。』

『……』耕次には寧ろこの最後のことが新しく發見した事實ぢやアないかと思はれた。不具の爲めに女が男のやうになつて、平氣で男に接近して行つたりまた來たりする。そしてそれが女の氣ぶんに立ち返つた時は、俄かに一般の女よりも痛切にその缺點からの寂しみをおぼえて、男に熱心にもなり、いのちも棄てることがあらうが、それは女の心ばかりのことで男には關係がない。渠は、自分がかの女と關係を遂げて見るまでは、さう考へて却つてかの女を人にも辯護して置きたかつた。さうすれば何がなんでも、かの女の疑はれてる男は――中野でもその他でも――すべて潔白なあひだがらであつた。で、友人の非難をまじへた報告に對しても隨分らくな心持ちになつて、『それが本統かも知れな

い』と答へた。

そしてその他のところででも冷かしやら忠告やらを受けた時、矢張りその心持ちでらくに受けてしまつた。が、渠はみち〳〵私かに考へて見ると、自分も人にかの女を不具者と云はせて置く方が便利でありまた高潔に見える如く、中野の方でもその爲めにさう皆に云はせて置いたのかも知れぬ。そして中野自身には十分秘密な樂しみがあつて――。

矢ツ張り、どうもかの女の處女性が氣になつたので、房子さんのところへ立ち寄つて、あけすけに聽いて見た、

『どうでしよう、あなたは中野と近藤とがすツかり關係してゐたやうに云はれましたが、近藤は今でもその身を純潔だと意張つてますよ？』

『わたしにやアさうは云はなかつたですよ』と、房子は答へた。『ぢやア、あなたはからだもすツかり許してあるのですかと尋ねて見た時、無論と返事しました、わ。』

『あなたにやア止むを得ないから白狀したんでしよう、ね。』渠は鬼の首でも取つたやうに心がすツきりした。それが自分の愛してゐる女の前身を不純潔にきめてしまう所以ではあつたけれども、その方がかの女に對して自分がもツと多くの征服力を持てるのであつた。

市中の空の一方につるぎの兩端をぴんと上に反らせて冷たさうに光つてる三日月のかたちに、渠の

心もぴんと振つた。そして今夜こそかの女の僞善を素ツぱだかにして、生まれたまま又けがれたまま
でこちらに降服させてやらうと樂しんだ。が、これは取りも直さずかの女に對する自分の切實な愛で
あつた。

けれども、歸宅して見ると、迎へに出たかの女は先づこの報告をした、

『先刻、中野がまゐりました。』

『………』客間からさしてゐる電氣の光にかの女がにこ／＼して見えたのも却つて面白くなかつた。
この女も亦かのアメリカ女の如く、婚約實行までを、假りに他の男をおもちやにする種類のにもなれ
るだらうと云ふことが切にこちらのあたまに響いた。『さうか』と、わざと輕く受けて、茶の間へ來
た。これから再び中野に對するかの女のよりが戻らうと決して思つてゐないが、けふの房子さんの
證言が氣にかかつた。

『………』かの女もこちらと向ひ合つて火鉢のそばに坐わつたが、こちらの顏を見い／＼また報告し
た、『一時間ばかりゐて歸りました。』

『………』

『よろしくと申しました。』

『さうか』と、また二度目には答へた。渠には、かの女がさう問はず語りをするのは自分らの間の約

束を守つてるのであるに違ひなかつたけれども、それが却つてかの女の逆襲であるやうに取れた。
『………』かの女もそれツ切り默つて、少しいやな顔つきになつた。
『………』暫らくしてから、渠は食事を命じ、それの給仕をかの女にして貰ひながら、『どうでした？』
『どうツて』と、苦笑しながら、『餘ほど謹直に遠慮してゐました。』
『謹直はあれのお箱ぢやアないのですか？』渠には、實際、世間を憚かることに勝てぬやうな謹直は、そしてその謹直から愛する女を裏切るやうな男は、問題にならなかつた。
『あなたからおつしやれば、さうかも知れませんが――報告だけは致して置きます。』
『………』渠はこの方はすべきが當り前だと思ひながら、『いや、あなたから云つてもでしよう――？』
また兩方からの沈默が少しあつた。
『………』かの女は火鉢にあたりながら下に向けてた目をちよツとじろりと上げて、『ぢやア、來させてはいけないとおツしやるのですか？』
『それは最初からの承知ですから、いけないとは決して云ひませんが、ね――』渠には今やそんなことを一小事件に過ぎないものにしてしまうほどのことがあつた。そして房子さんを裏切るのはよくないと思つたけれども、止むを得ないので聽いて來た言葉を持ち出した。『飯田町ではあなたが中野とは

からだの關係もあると白狀したさうです。』
『そりやア、俗物には』と、眉をきりりツと上げて、『面倒なことを說明したツて分りませんから、ね。』
『………』渠はさうきツぱり云はれて見ると、それもさうだと云ふやうな方面へ自分の疑惑を轉じさせないでもなかつた。かの女にして若し世間の一部で評判されてるやうな不具者であつたら、一層のことだし――また然らざるも、現に自分が一個の紳士としてかの女に暴力をさし控へてゐるのをも、ただ凡俗の考へしか有しないものらは、或は、あんな體裁のいいことを云つても、實は何とか馴れ合つてるのだらうと、見當違ひのうがちを云つてるかも知れなかつた。

九

一般婦人の感傷的な態度に小理窟を加へてだが、かの女は轉居早々から同棲日記を書いてゐた。そしてそれが――こちらの論文や創作をするに對して――かの女の何よりの仕事であるかのやうに見えた。
渠は試みにその十二月十五日のくだりを讀んで見ると、
『乃父歸る。無事。中野氏來る。君は留守なり。座に在るやや一時間にして恐縮頓首して去る』とあ

つた。

『………』渠はかの女が筆に多辯なのにも拘らず、その思想上に一番大切な男の來たのを書きしるした物としてはあんまりあツけない書きかただと思へた。いや、いろ〱書きたいことや書けることがあつたのだらうが、こちらに遠慮して詳しく云はないのだらう、と。渠には、かの女が一面には水くさく取れたが、また一面には、それでも、中野の『恐縮』してゐたのは恐らく事實であつた――中野の人物から云つても、またかの女がそれに對する一種の復讐的決心のあるところから想像しても。

さうだ、かの女には向ふにうそにも見せつけてやれ、燒かせてやれ、羨やまして向ふを後悔に苦しめてやれと云ふやうなたくらみもあるに相違なかつた。

このたくらみのわなへ向ふが這入つて來たのであるから、かの女の心は先づ待ち受けた最初の凱歌を奏した筈だ。が、それを例の感傷癖から羅曼的に多辯を弄してないのは確かにこちらへの遠慮であつたらう。渠の心が落ち付いた時に口で聽いて見ると、

『どうお暮しですか』と尋ねたに答へて、

『至極平和ですよ』を以てしたさうだ。そして日記の十六日にも『無事、できるなら斯うした平和な生活にゐたいと思ふ』とある。また十七日には、『淡々として水の如し』ともなつてゐる。

『………』それを渠が、實際に解釋して見ると、水の如しとは決して淡々としてゐるのではなく、こ

ちが蟲を殺して隨分さりげなくしてゐる爲めである。從つて、その平和と云ふのもほんのおもて向きの、うはツつらの狀態に過ぎないのであつた。

かの女だツて多少はそれを知つてゐるだらうし、それに對するかの女自身の不滿の原因も分つてる筈だ。が、中野に對して無理にも無事滿足のやうすを示したのが嬉しくなつたからであらうか、

『あたしは當分あなたのおそばでこの日記を書くのを仕事に致しましよう。このままで決してあたしは不滿足でもございませんから』とも云つた。

『さうですか――決して惡いことぢやアありませんから』と、渠は答へた。さうしてゐるあひだには、段々かの女の心がこちらへばかり向いて來るだらうと思はれた。

成るべくかの女をして過去を過去として葬むらしめ、執着の種となつてるものは速やかにその根がなくなるやうに、渠はさきにかの女がこちらへ讀んで聽かせたところの追回文――その中には中野のことを『半夜の友』と呼んである――を雜誌に公表するの發議を出した。かの女も異存はなく、喜んでそれをその雜誌の記者に渡した。まだ新年號に間に合ふと云はれたので。

十二月二十日には、眞宮が尋ねて來た。耕次は渠の關係してゐた新聞の文藝欄に長らくその時の問題を發表してゐたし、また渠と共に度々かきがら町の暗い怪しい小路へ行きもした。が、今では、もう、向ふもこちらの事情を知つてそんなところへ誘はうともしなければ、こちらでも二度と再び行き

たくなかつた。茶を汲みつつ碁を打つたり、雜談に耽つたりしてゐるうちに、澄子が錢湯からお化粧を新たにして歸つて來た。

『射るやうな目つきをして人をじろ〳〵と見る』と云つて、かの女がさきに初對面のあとでいやがつたその人の來訪であるから、かの女はちよツと挨拶に出た切り、ふすま一つ向ふの自室に引ツ込んでばかりゐた。

『まだか』と、眞宮は向ふの澄子にも聽える聲で云つた。

『まだ、さ。』耕次は斯う事實を以つて答へるのが寧ろ苦痛であつた。

が、澄子はそれをふすま越しに耳に入れて面白かつたと見え、早速この問答をその通り日記へ書き入れてあつた。、そして更らに左の如き文句だ、――

『われは今日では關根氏が世間の定評の如き、單なる放蕩者でないことを認めたり。赤坂の家に在りし時より今日まで十有餘日、私の處女性を犯さざるを見ても、此の定評の誤まれることを知る。』

『……』こちらは然しそんな呑氣なことに滿足してゐられなかつた。

二十二日は晴れたり曇つたりして、寒いばかりの日であつた。共に一歩も外出せず、夜になつて耕次はかの女の前で詩を歌つたり、うろおぼえの長唄や淸元をやつたりしたが、その間にも流れ出ようとする暗涙をつとめて押し忍んでゐた。

ただ冷淡に考へて見れば、純潔か不純潔かも分らない高が一婦人のことではないか？若し腕力を以つてすれば、そしてそれッ切り喧嘩してしまうつもりなら、實に、何でもないことだ。が、一新した生活をつづけようとしてゐるものには、そのあとの寂しさが火の消えたあとのやうになるだらうと思はれて、寧ろこのままでも今更ら喧嘩別れをしたくなかつた。

さうかと云つて、また、ただ獨り冷たい蒲團の上に目をさまして、そとなる雀のちゆうちゆう云つてる聲を聽くと、その僅かに小さい輕快な鳥に對しても面目がなかつた。大の男が朝早々からわざわざ陰欝な不滿足を心にいだいて起き出でねばならぬとは！

兎に角、こちらの誠意誠心がまだかの女に十分に屆かぬのだと、殘念であつた。成るべく皮肉や嘲笑を出さないやうにして、かの女の心を荒立たしめなかつたので、かの女からの發議によつてその夜からかの女も耕次の勉强室に眠ることになつた。

『あたしの室は壁ひとへでそとになつてますから――』少し大きな聲を出してれば、立ち聽きされる恐れがあると云つた。そしてその翌日、耕次が東京へ出てゐる留守に、かの女は多くの手紙や書類を燒き棄てた。

『中野のものですか？』

『あれだけはどうしても燒けませんでしたの。』

『……』それもさうだらう。入水の節にもしツかりそれをかかへて死んでたので、助かつてからも、警察の人が何か大切の書類でしようから、御身分に對して開らきませんでしたと云つたほどの物だから。

『然し、行李の底深く納めましたから、再び取り出して見ることはございますまい。』

『……』こちらには、然し、燒かない以上は、どうせどちらでもよかつた。が、かの女がそんなことをするだけでも、少しはこちらの物に成りつつあると思はれた。

二十五日に中野からハガキが來て、その一友人なる松山と共に明日やつて來ると云ふのであつた。二十六日は耕次も敵意と好奇心とをまじへて待つてゐると、おひる頃に二人同道でやつて來た。一方の男は極らいらくな代りにあたまは粗笨らしく、

『おい、姉御』と澄子のことを呼んで、前々から來ると必らず酒を要求し、とまつた時は朝になると、自分からさきに立つて家ぢうを箒木を以つて掃除してまはるほどちよくであつたと云ふ。それに、話して見ると、その男の一友人がまた耕次の友人であつたので、そんなことから話が進んで、割り合ひに圓滑な小酒宴がひらかれた。

別な來客の爲めに、耕次が暫らく別室にゐると、かの女は不斷よりも堅苦しくなつた手つきや物ごしでこちらの世話もした。が、隣室のやうすに耳を傾けてると、男の方の聲はひそめられてるが、か

の女のは却つて晴れやかな笑ひ聲にもなつてゐた。これは必らずしもこちらへの申しわけばかりでもなかつただらう。かの女は機嫌よく醉つて來ると、その聲がいつでも高く晴れやかになるのであつた。

　こちらが再び一方の男と盃を取りかはせることになると、澄子は獨りでその自室の方へ立つて行つた。そして窓を明けた音がすると、

『中野さん、ちよいといらしつて御覽なさい、月がいいから』と云つた。今夜は確か十四日の月で、天は晴れてるのであつた。

『………』中野もこちらへ氣がねしたやうにだが立つて行つた。

『………』耕次には、もう、それを惡い方へ怪しむなどの氣はなかつた。人のかげでまた手を握らせるやうなことはないと信じてゐた。が、澄子が一旦世を悲觀してからの天然憧憬を以つてまた平凡な感傷だらうと思ふと、それを尤もらしく聽いてるらしい者の馬鹿げたつらが見たかつた。二人が歸つて行つてから、『僕は中野のやうな人物はきらひです』と、かの女に告げた。『正面から人の顏を見詰め得ないやうな男は邪心か多いものです。僕はあア云ふ男と交際したくない。』

『それは全くあなたの誤解でしようよ。』かの女は遠慮がちに渠のことを辯解した。『不斷は如何に弱い人でもあんなではありません、わ。胸にこツちに對する弱みと痛みとがあつて、冷靜にあたし達に向つてることができなかつたのです。』

『ぢやア、どうしてそれが分りました？』耕次は、それでは中野がまた慾を出して來て、今までの詫びやら後悔やらを述べて、かの女を再び取り返す氣であつた、な、と思はれた。そして多少氣がのぼせて、こちらがまた元の獨りになるかも知れぬ時の寂しさを想像した。

『松山が申しましたのですが、あたしと別れるやうになつたのはほんの氣が弱かつた爲めで、素よりの本意ではなかつたさうです。』

『だから、今一度歸つて呉れろと云ふんですか？』

『向ふでは、まア』と、かの女はこちらのじツとさし向けた目をまたじツと見つめながら、『さう云ふつもりでしたでしようが――』

『………』なほ進んで聽いて見ると、松山からは澄子に直接に今一度逆戻りすることを勸めたさうだが、中野はただかの女に

『あなたは關根君と結婚なすつたのですか』とまでしか立ち入つて來なかつた。そしてそのあとはかの女を眞正面から見つめて、かの女のけしきにかの女の心を讀まうとしたさうだ。

『………』耕次はあんな氣の弱い者にも見つめられねばならぬ閲歷を有するところのかの女を、心ではさげずまざるを得なかつた。然し、かの女はその時中野に向つて、

『どうでもあなたの御想像にまかせます』と答へたさうだ。これはこちらに取つてもかの女のおほ出

來で、ちよツと氣持ちがよかつた。

『……』然し渠は、かの女がまた直ぐ日記に向つたので、きツとまたこちらの神經にさわることを書くに相違ない、そしてけふのことには殊に不快を感ずるやうな感想が一層多いだらうと思つた。で、かの女をうツちやつて置いてさきへ床に這入り、習慣通り電氣を消した、「そしてふすまを隔て、『以後、もう、あなたの日記は讀まないことにしましよう。』

『何もあなたに讀んで戴く爲めに書いてるのぢやアありませんから。』

『……』その癖、初めのうちはその古くさい文章を得意さうにこちらにも讀ませたのだが――。

獨りで天井に向つてそぞろに考へてると、何となく熱い涙がほと走るのであつた。この愛に於ける征服を自分は切實にまた眞實に考へてゐた。飽くまで亂暴はしたくない。かの女がその舊惡とその肉體とを心から投げ出して降服して來るのを――じツと辛抱して――意地にも持つてゐるより仕方がない。が、小理窟の多いかの女には、それができるであらうか？どうせそれができないほどなら、まだ純潔をかの女が標榜してゐるのを幸ひ、そして中野の方ではまだよりを戻さうとする下ごころがあるのを幸ひ、こちらがこちらの友人どもから不成功の爲めに逃げられたと云ふあざけりを受ける恐れなどはかまはないで、下手な妥協をするよりも、寧ろ今のうちに隨分面倒なかの女をそツくりのしを附けて返上してやる方がよかつた。

つまり、さう云ふ風に考へて、自分の誠實心が自分の胸をくら闇にはち切れさうにしてゐたところへ、かの女も日記を終へてやつて來た。が、こちらの樣子をこちらの迫つてる呼吸に氣付いたと見え、そのかた手で以つてかの女はこちらの枕もとを探つて見た。坊主枕のしめつて熱くなつてるのが分つたらしく、

『あたしはどうしたらいいのでしよう』と歎息した。

『………』向ふの決心一つであるから、こちらは何も返事をしなかつた。

夜が明けて、二十七日の朝、渠が目をさますと、かの女は直ぐまた夢を語つた。

『ゆふべのはおそろしい惡夢でしたよ。黑い蛇があつて、あたしに向つて來ましたの。あたしは一生懸命に逃げまはりましたけれど、とう〳〵追ひつめられたのを、自分のうなされた聲で目がさめました。』

『………』渠は純粹の征服をそんな風に進めたくはなかつたが、切實な精神では然し、もう、そこまでも行つてるのだと思つた。『その蛇は、つまり、僕の執着心であつたのでしようよ。』

かの女をさきへ湯にやつてから、渠はゆふべの會見にまだ何か殘つてる秘密でもないか知らんと、かの女の机の引き出しから矢張り日記を出して見た。

『中野氏、松山氏と同道にて訪問せらる。君と初對面の日なり。胸のあらしは知らねども、兎に角、無

事なり』と云ふ、氣取つたやうな文句に初まつてた。そしてそのあとは斯うだ、『中野氏とわが部屋の窓より十四日の月を望む。澄み渡る空、物凄きまで清し。嗚呼、この月、去年の今日はわれも人も世にも人にもうらやまれし相思の人なりしを、浮世なれや、今年の今夜、利鎌とすめる月影を同じ窓に眺めながら、お互ひの胸は月とわれらとほどの距離あり。今やわれは彼れの愛人に非らず、彼れはわれの戀人に非らず。胸に悲哀を抱いて、つとめて笑みを含む。かの明星はわれよ、われに光明のあるあひだ、この戀のさかゆるあひだ、かの星も亦永劫の空に輝かんと語りしが、明星はさんとして光をはなてどもわが胸は無限の闇に閉されて。』

『…………』如何にも古くさい想でもあり、文章でもあるとは思へたが、ゆふべかの女に向つて、『けふの會見に、若し僕が既にあなたの全部を得てゐたら、中野に對しても勝利者として臨む強みがあつたでしようが、それがない爲めに、隨分侮辱されてるやうな氣がしました』と云つたことを、もう、撤回してもよかつた。

一〇

『あたしは戀と愛とは少し意味が違ふと云ふ說ですが、ね――』

『…………』また何を呑氣に考へ出したのかと渠は思つた。が、何か返事をしてやらないとかの女がす

ねてしまうのだから、そしてそのすねかたと來たら、無邪氣な娘などのと違つて、なかなか執念深く、その幅ツたい顏が二度と再び見られないやうないやな物になるのだから、こちらも微笑と云ふよりも苦笑を見せて、『ぢやア、どう云ふのです?』

『簡單に云へば、戀とは詰り間接に思ひ忍ぶのでしよう。だから、どうしても自分のそばから遠く離れてゐるものに向けることになります。』

『ふん――』渠はをかしくなつたのを無理にこらへてゐた。かの女がこちらをこの十數日間苦しめてゐたところの、中野に對して有する考へに段々と體裁のいい申しわけ付きの見切りをつけて來たのぢやアなからうかと思はれた。『ところで――?』

『ところで、愛はその反對で』と、かの女はこちらに微笑を向けながらも、なほこちらに負けて行くのぢやアないぞと云はぬばかりに眞面目腐つた目つきを見せて、『間接でなく直接に、遠くなく近く、自分のそばに親しく心の相手を持つことです。』

『して見ると、中野に對するあなたは戀で、それとは衝突もしないであなたは僕にはまた僕に對して愛を持てると云ふ意味ですか?』

『若しその氣が出ました時にはです。』

『無論でしよう――』渠はかの女の云ふところを、かの女がさう無理に羅曼的に持つて行つたよりも

實際的に、理解することができないではなかつた。『それは然し珍らしいことでも何でもないのです。誰れでもその初戀が死に別れか生き別れか見棄てられかで破れた痛みをまだ持ちながら、再び別な男に心が向いた時の感じです、だから、あなたの所謂愛も第二の戀に過ぎず、あなたの所謂戀は最初若しくは一つ以前のそれでしようよ。』

『さうすりやア、矢ッ張り、靈も肉も一緒くたになつて』と、かの女はなほ未練らしかつた、『つまり、あなたの合致論になつてしまうぢやアございませんか?』

『無論、それでいいんです。』渠のこの答へには自分ながら隨分威壓の力を持つてゐるやうに思へた。『あなただツて、まさか、戀が靈で、愛が肉だと云ふやうな馬鹿なことを云つてるんぢやアないでしよう――?』

『でも、どツちかと云へば、愛は合致的、實際的で、戀は靈的な傾きがございましよう――?』

『さう云ふ靈的を僕らの新らしい哲學で矢ツ張り部分的、物質的だと云ひます。』ここまで來てまだ分らないぢやア、もう、議論で敎へたツて駄目であつた。

渠には、然し、そんなことよりも別に一つまた氣になることを思ひ出してゐた。「初戀若しくは一つ以前の戀」とわざ〳〵區別して云つたのもそれが爲めであつた。しば〳〵夢を語る女は馬鹿だと云ふ例へがあるが、澄子はそれをやつてるのである――無邪氣にだが、もういい加減な年になつてのかかる

無邪氣はどこかにぬけてるところがあるとも見られ易い。つまり、そんなところからでもあらうか、かの女はよく易を見て貰ひに或易者を訪ふてたさうだ。その有名な易者が例の新聞記事を見て、あの女なら度々男が變はつた、そして變はるたんびに今度のは長くつづくかどうかを見て貰ひに來たと、耕次の一友人へ直接にしやべつた。それをまた聽きに聽かせられた耕次自身は、その時、あまり念頭には置かなかつた。蓋しかの女に語つて見ると、一度は行つたが二度と行かなかつたと云ふから、向ふが人違ひをしてゐるのかも知れないし。又、實際に度々行つたとしても、同じ男の違つた事件毎にそれがどうなるかを見て貰ふのを、男までが違ふのだと向ふが思ひ取らないとも限らなかつた。その間を誰れだツて、まさか、はツきり區別して行くものもなからうから。

けれども、自分でも昔、耶蘇教を信じてゐた時は、澄子とはまた反對に、戀は卑しいもので、愛は高尚だなどと考へさせられてゐた。その時のあはれ貧弱な知識程度と生活內容とを、今、かの女のうちにも想像して見ると、おのれの思ひに餘つて、據ん所なく、その是らはぬ眞ごころを迷信やら神秘的方面やらに馳せて行くこともあつたかも知れない。その場合、たとへ何人目の男に關してであらうと、女が今度こそは長くつづくかどうかをうらなつて見ると云のは、寧ろ氣の毒にもあはれで、而も男から見れば、奥ゆかしいことではないか？

で、渠はその夜、かの女を珍らしくもさう云ふ女として心に描きながら、矢ツ張り、私かに暗涙を

催してゐた。かの女が枕もとをさわつて見るのも前夜と同じであつた。そしてとう〱かの女の方からこちらには思はずも早く許しが來た。

その翌二十八日は、一旦門を明けてから、いつもより遲くまで朝寢をしてゐると、突然、その室へ這入つて來たものがある。さぶあツたかくうと〱してゐた目を明けると、それは耕次の妻であつた。

『なんしに來た！』渠は斯ふ叫ぶが早いかはね起きた。

『いくら御免なさいと云つても』と、妻は瘦せて尖つた目をきよろ〱させながら室内に突ツ立つて、『御返事がないものですから。』

『あるまで待つてるがいい！』睨み付けながら、渠はかの女を玄關の室に締め出してしまつた。

『何物ですか、失敬な』澄子も斯ら向ふへも聽えるやうに云つて、急いで衣物を着かへてた。

『………』どうせ妻がやつて來たのだとは分つてるだらうから、渠はわざと、『僕の一番きらひな婆々ア、さ。』

『婆々にやアきまつてまさア、ね』と、ふすま越しに尖つた聲で、『ながねん、苦勞をさせられて來ましたから、ね！』

『默れ！』あいつがこちらの北海道から弱わつて歸つた夜に早速やつて來たのかと思ふと、それをき

ッぱりはね付けたのでさへ何だかごつ〳〵した感じがあとに殘つたを思ひ出されて、今や新らしく得た感じの方をも半ば興ざめさせられるやうであつた。それでも、北海道までとう〳〵やつて來た女の東京に於ける隱れ場所へ躍り込んで來た時とは違つて、今回は初めからよく明らかに分らせて置いただけに、その出かたが割り合ひに、穩やかだと思はれた。人の寢室へ無案内で這入つて來たのも、澄子が怒つてるらしいほどには無謀をしたのでなく、こちらが聽えつけなかつたのが惡いのであつた。

女ふたりで理解が仕合へるならしろと云ふつもりで、兎に角、うツちやつて置いて渠は先づ湯に行つた。錢湯にはこれも湯好きの川上が來てゐた。あとから、また木山も落ち合つた。こちらは最初の征服を仕就げたと云ふ、何だか樂しい誇りを私かに胸にいだゐてゐたので、いつになくゆツたりとした氣持ちで皆と話しをしながら、度々湯に這入つたり出たりした。そして考へた、若しけふの突然な闖入がきのふの朝あつたとしたら、或はゆふべの成功はできなかつたかも知れぬが、然し、もう大丈夫だと。そしてかの女に貰つたピンを襟に刺した時も、その感じが新らしかつた。

そして歸つて見ると、もう女ふたりは火鉢のそばでうち解けて語り合つてゐた。澄子の感想文がのつてる新年號がそばに出てゐるのを見ると、自慢さうに見せたものらしい。

『………』妻は然し皮肉さうな目をこちらへ向けて、『大相いいかたを今度はおえらびになつたのです、ね。』

『ほ、ほ』と、澄子は笑つた。

『………』渠はわざとそれには返事をしなかつた。が、皆と一緒に食事をしながら、妻に向つて、『お前の飛び込んで來るのは、いつも、きまつて金の時だが――』

『そりやアきまり切つてまさア、ね。』

『………』渠はその語調からして圖々しいのがいやなのだ。それでも、まア、おだやかに、

『今一度念を押して置くが、おれがお前にまかせたと云ふよりも、やつてあるその家をうまく經營して行きさへすれば、決してお前らは困るわけはないのだ。』

『わけはないと云つても』と、もう、こちらの云はうとすることに突ツかかるやうになつて、『困るから仕かたがないぢやアありませんか？』

『………』わざと暫らく間を置いてると、妻はこちらの返事を見越したやうに、

『子供までが困つてるのに、それを――』

『まア、待て』と、突然叱り付けてから、またおだやかに、『あの家にはおれの事業失敗の借金が附いてゐる。然し、あの先代から讓り受けた商賣を尋常にやつて行きさへすりやア、少しづつ借金を返しながら、らくに親子四名は喰つて行ける筈なんだ。』

『それが[illegible]かなへんですよ。』

『いや、誰れに云はせても——たとへば、親類のものでも、他人でも——そんなことはないと云ふんだ。』

『そりやア、なにも知らないものは——』

『馬鹿！貴さまの不精でだらしなさを自分で分らないんか？』斯う怒鳴つてから、また心を落ちつけるやうにして、『お前が甲斐性なしだから、あんな單純な商賣さへうまくやれない。どうせ男が何人ゐたツて役に立たない商賣だから、お前が承知して貰つた以上は獨りでもツとしツかりやるべきだ。』

『それにしたツて、この年末に迫つちやア——』

『だから、少しでもやれたらやるが、ね、こツちだツて澄子さんの衣物を質に入れたりまでしてやツと行つてる始末だ。金のことは例の通りここでもまかせツ切りだから、ふたアりで相談して見るがいい。』『けれども、澄子が思ひ違ひをしてまた氣を惡くしないやうに。』『が、できなけりやア仕かたがないんだぞ。』

渠は妻子に對する金錢上の責任だけは家をやつてあるので十分に帳消しになつてるつもりであつた。だから、それ以上妻に話しをしたくもなく、またその顏を見てゐたくもないので、早く歸れと云はないばかりにしてちよツと木山のところへ出かけてしまつた。

それでも、しやべり出すと誰れに向つてもくどくどしい妻のことであるからと思つて、三時間ばか

り留守にしたあとで歸つて見ると、幸ひにもかの女はゐなかつた。

『仕かたがございませんから、三間渡して置きました。』澄子はそれだけしか告げなかつた。

『………』こちらも妻のことに就いては餘り云ひたくも思ひ出したくもなかつた。

澄子が湯に行つたあとで、またその日記を引き出して見ると、もう、ゆふべのことやけふのことも書けてゐた。

『二十八日。古き戀はわれに寐ざめの涙となれり。われは君の僞りなき告白、抑へがたき男性の要求、熱烈なる君のセコンドラブに訴へられて、われは犧牲となりぬ。昨夜、われは精靈にそむき、わが特色を棄てて』とあるが、この特色などゝは僞はりでなければ、かの女の氣休めに拵らへて置かねばならなかつた偶像の一つだらう。ゆふべの降服をかの女が中止しかけた時のわざとらしい處女氣取りがまた思ひ出された。が、なほ讀んで見ると『君の熱情に燒かれたり。ただわれら寂しき人々が互ひに半生慰藉の友となるべく誓ひぬ。』それから、またこちらの妻が來たると云ふこともあつて『この人も亦同情にあたへすべき人なり、然しながら、これ運命なり。』

『………』その最後の句には渠もちよツと考へさせられた。と云ふのは、女が他の女の亭主を、わざとではなく自然にだが、取るやうになつたその時に、その女がどう云ふ風に覺悟してゐられるかと云ふ問題の一實例を示めしたものだ。同情をするが、運命だと。そこに渠は澄子なる物の女らしい而も

冷酷な本性を見當つたやうな氣がしたのである。かの女が頻りにわざわざ戀を標榜して、殊更らに人の熱意を求めるのは、自己の本性に於ける缺陷を無意識に補はうとしてゐるのであつて、だからかの女の現實を一足飛びに飛び越えて、空想などを高尚らしく見てゐるのだらうかとも思へた。

二十九日には、二人の名を並べた年始狀を郵便局へ持つて行つた。

『あれでまた友人間や新聞社に新年早々また一と問題起りましようよ。』かの女はこんなことを考へて嬉しがつた。

松山がまたやつて來て、渠の經營してゐる滿洲の新聞への寄稿を耕次に賴んだけれども、それはほんのおもて向きのことであつて、實は、私かに澄子の中野に對する返事を聽きに來たのだ。この日の記事には、

『空は曇つて、寒月見るべからず。されどわれは幸ひ多し、熱なき戀に獨り悶へし過去にくらぶれば、すべてを燒きつくさんとする君のパーニングラブはわれにより多くの幸ひありと信ずるが故に』

とあつた。

三十日には、中野が房州からハガキをよこした。大原や勝浦方面へは澄子も渠に伴はれて行つたことがあると云ふから、その舊跡を思ひ忍びつつまはつてゐると云ふ思はしめ振りに、きのふの松山の來訪を思ひ合はせると、向ふは餘ほど用意ある二度目の手を盡してるらしく見えた。が、もう、耕次

には少しも恐ろしくも姤ましくもなかつた。

三十一日、おほつごもりの晩には、かの女は吉例として毎年市中を歩きまはつたと云ふから、渠もかの女の乞ひを容れて家をそとから締めて共に市中に出で、先づ淺草の活動寫眞を見たが、雨に降られて午前一時頃に歸宅した。

二

年が明けても昨夜からの雨は降り續き、風までが烈しくなつて板戸をかた〱と叩いてゐるので、起きる氣がしなかつた。まだ珍らしいだらけた氣持ちで、元日早々から寧ろ蒲團のあツたかみに親しんでる方がよかつた。年賀に出るのも詰らないやうだし、その訪問客にき來て貰ひたくなかつた。『何と云つたツて、兎に角、元日ですから、ね』と、それでもかの女が先づ九時頃に床を起き出でた。そして空の雲からは日光も照らすやうになつた。

最初の訪問客は眞向ふの黃興氏であつたが、これは名刺を置いただけで行つてしまつた。次ぎは、すぢ向ふに住んでる若い新聞記者で――お目にかかりがてら伺ひましたと云ふので、ちよツと上げて耕次は面會した。が、この人やそこへやつて來る連中のいたづらに相違なかつたことには、そこの家の前板壁に、かの萬朝の記事が出たその翌朝には、『この輿に關根近藤』の手引きをもじつて、

『この奥に鬮根、妾澄子同棲』と、白墨で大きな文字を落書きし、いろんな惡口をも記してあつた。澄子が最初に氣が付いて、怒りながら、

『どうしたらいいでしよう』と云ふので、耕次もちよツと見て來てから、來てゐた父に賴んで、濡れ雜巾を以つて行つてぬぐひ消して貰つた。けれども、もう、そんなことは念頭から去つてゐたし、また今思ひ出しても根に持つ必要がなかつた。

それから、木山が不斷着のままでやつて來て、

『御年始ぢやアありませんよ』と云つた。その姿や物ごしのすツきりしたのを、澄子は初めから氣に入つてゐた。そしてその夫人も東京生れであると云ふのを、かの女は一人の味かたでも得たやうに自慢であつた。若しこちらがゐなかつたら、かの女は或はそこへものこ〱細君に會ひに行つて、おしまひにはまたその家庭に一波瀾を起したかも知れぬと、耕次には思はれるやうになつてゐた。

二日から四日にかけては、客が來たり、客に行つたりして賑やかであつたので、寂しがりの澄子をも喜ばしめたが、かの女の心は初めて會つた人に一々好き嫌ひの斷定を與へてゐるやうであつた。

四日のゆふかた、耕次がかの女をつれて訪問したのは、昔、渠が書生同樣に取りあつかはれてゐた人であるから、そしてさきの女をもつれて行つたことがあるから、十分氣を許して馳走になつた。そのあとで將棊をさしたのだが、王のあたまに步を指されてゐるのを知らないでうと〱といい氣持ちに

醉つてゐた。

『どうしたのです、ね』と云はれて渠は目をさますと、澄子がをかしさうにこちらの顏をのぞいてゐた。

『ぢやア、失敬しよう。』醉ひざめの爲めに俄かに胸がむか〳〵して來たのでそとへ出た。そして淺嘉町の暗い道を歩いて行く時、かの女はこちらの手をしツかり握つて、笑ひ聲で、

『あなたはほんとに可愛い人、ね。』

『………』渠は言葉なしにかの女を接吻した。が、この時にはその意味も感じも近い去年のとは違つてゐた。不自然がある爲めに本氣にならないのか、それともうわさ通り生理上の不具者か？兎に角、かの女のからだと心とがいつまでも一致して來ないやうなのを渠は非常に面白くなかつた。

初めは自分で一氣にかの女の許しを求める爲めに進んで行つたものが、今や許されてるのは却つてこの數日間の自分にまた新らしいこの疑問を生じて、馬鹿々々しくもあり、また苦しくもあつた。

若しこれがうわべばかりの征服で、ほんとうはさうでないとしたら、金を出して賤しい女を買つてるのも同樣ではないか？自分は眞實を以て眞實を得たつもりであつたが、かの女から與へてるのはよしんばそれとしても一部分の眞實であるらしい。矢ツ張り、中野から手紙の來るのが餘ほどの邪魔になると思はれるが、こちらにも無心を云ひに來たやうな妻があるので、この點は五分五分にされてし

まうだけ不愉快でもあり、不滿足でもあつた。

で、用もないのに渠は木山のところを初めとして、その他へも獨りで出かけるやうになつた。錢湯で友人と落ち合ふのをいいしほにして、二時間餘りもそこで暮して來ることもあつた。すると、かの女も亦、早速その手に丸めた手ぬぐひとしやぼんとを持つて、式臺の上でこちらと行き違ひながら、

『あたしも行きたくツてお待ちしてましたのに』と、不機嫌であつた。『あなたはあたしのからださへ自由にしてゐればいいのですか？』

『………』いや、その心をまでも十分に自由にしたいのだが、かの女の既成觀念に成る小理窟が邪魔になるのであつた。『僕には、あなたがすツかり中野との文通や交際を絕たなけりやア駄目だと思はれます。』

『ぢやア、あたしはあなたの條件を二つとも承諾してしまひましたのに、あなたはあたしの條件の一つを御承知なさらないのですか？』

『今となつちやア、おそらく、あなたがそれを撤回しなけりやア、僕の第二條件が合致的に承諾されたことにはなりますまい。』

『………』かの女が强情に出れば出るだけ、こちらも亦頑固になつた。そしてこんなことは晝間のことばかりではなかつた。共に眠つても互ひに物を云はないこともできた。

一月九日になつた時、かの女の赤坂に於けるおほ屋の主人が年賀がてらにやつて來て、猫を預つてあるが、どうしたわけか、糞性が惡くなつて困つてるから、取りに來て呉れろと云つて歸つた。が、こちらではそれも面倒なので、矢ツ張りそのまゝにして置くことに一定した。耕次には猫なんぞのことどころではなかつた。

『僕はいツそのこと蛇になりたい、ね』と、渠は云つた。かの女の一番きらひだと云ふ物になつて、どこへでもぬらりくらりと這ひまはつてやりたかつたからである。けれども、かの女は無邪氣であつた。そして斯う答へた、

『あたしがなるなら小犬です、ね。さうして方々の坊ちやんや孃ちやんのお相手をしたり、雪の中をころげ歩いたり――』

十日からみぞれが降つたりやんだりしてゐたのが、十一日の朝から雪になつて、正午ごろに本降りになり、午後三時には一寸ばかりの厚みを以つて見える限りを白くおほつてゐた。座敷の椽がは下に埋めて置く小鉢のけやきは、いつのまにか落葉して枯れ木のやうになつてゐたが、その枝にも雪が降り込んで積つてる。六坪ばかりの庭ではあるが、そこにある檜葉の四五本、椎の一本、かへで、乙椿、あすならふ、南天などの枝にも、垣根以上に出たのは垣根以上に、地べたに近いのは地べたに近く、それぞれ綿帽子をかぶつてる。そこから右手の垣根を越えて見える廣い畑も、一面に眞ツ白であつ

た。

きのふは戸山の原へ行つてどこかの子供と一緒に、あのどツしりとした重苦しさうな圖ウ體で、たこを擧げて來たと云つてたお向ふの黄さんは、けふはうちに引ツ込んで碁を打つてるかして、ぱちぱち云ふ音が聽える。大森の體育學校へかよつてるこの子の方がおやぢよりつよいので、おやぢが負けて躍起になるさうだと云ふのが人から聽いただけでも面白かつた。

こちらでも寂しさうに獨りでその室に引ツ込んでた澄子が、その窓を明けた音がするかと思ふと、直ぐこちらへ聲をかけた、

『まア、奇麗ですよ、あなた、來て御覽なさい、な。』

『………』渠はかの女と淺薄な感傷心を分ち合ふことなどは好まなかつたけれども、呼ばれたので行つてやつた。そこから僅かな低い人家を押し分けて見える原のつづきも、眞ツ白であつた。が、たとへ世界中が雪で眞ツ白になつたとて、それが自分の得られぬ眞實には何のことでもなかつた。

『奇麗ぢやアありませんか』と、かの女もこちらをわざと見ないやうにして話しかけてた。

『………』雪がきれいなのをちよツと月がいいのに取り替へて見ろ。それはさきにかの女が中野をこの窓に呼んだ時の言葉ではないか? きツと雪に對してもそんな思ひ出があるに相違なかつた。

『矢ツ張り、不愉快なので、晩食をすまして、直ぐまた獨りで木山を尋ねようとすると、かの女は例

の寂しがつた顏つきをして、自室へ引ツ込んで行つた。

『あなたはいつも口か手か動かしてゐる人です。人間の群れの中にゐて絶えず話をしてゐるか、さうでなければ仕事に熱中するか、この二つしかない人です。共に靜かに戀を樂しむやうな人ぢやアありません。』

『然し戀は決して閑散な人のすることにやアきまつてゐませんよ』と答へたことを、みち〴〵思ひ浮べた。

かの女が然しこちらの爲めに直接に餘ほど心を勞してゐることは、その顏が瘦せてその聲がいつもけんどんになつて來たのに見えてゐる。割り合ひに太つてるらしいと見たかの女のふくらツ脛が案外瘦せてて、而も俄か瘦せであつたのでその皮膚が大きくたるんでるのは、中野の薄情な爲めであつたとして、こちらには責任を帶びない。が、かの女が近頃の顏の瘦せにはこちらに直接の罪があると思へた。けれども、また、この罪はかの女の眞實をかの女がかの女の方で徹底させさへすれば補へるものと思へた。

そしてかの女の眞實の徹底とは、こちらには、かの女が中野のことを根本から忘れることであつたが、かの女と向ふとがまだ下だらぬ感傷を交換し合つてる限りは駄目であつた。

木山から鉢次が夜おそく十一時頃に歸つて來ると、果して中野からのハガキがかの女に來てゐた。

してその二人が見た過去の感慨を漏らしてあるのだが、これにまた返事を出すのだらうと思ふと　そして向ふのハガキ（これはきッとわざと向き出しにして置いて、こちらにも直ぐ見えるやうにだらう）に對してかの女はいつも封書をやると思へば、かさねがさねその不見識が憎ましかつた。

癪にさわつて溜らないのだが、それとなく、わざと、來客がこの遲くまで待つてゐたのをあしらひながら、午前の一時まで碁を打つた。

『すみませんが、あたしはおさきへ失禮致します』と云つて自室へこちらの室から蒲團をも引ッ込んだかの女は、客が歸つたあとまでも寢つかなかつた。見ると、中野宛の手紙が机の上に乘つてゐた。

『………』渠はかの女に向つて、『これから以後は、もう、中野の書信は見せて貰はないでもいいです』と宣言した。そしてかの女の方からはどんなことを云つてやつてるのであるかは、こちらが想像してゐるだけで、初めから少しも見なかつた。

二

矛盾とはかかる心か、熱烈の
　君を思はず、無情を慕ふ。
からうじて忘れはてむとする我れに

思ひ出でよと雪ぞ降りける。
われはなほ寂しく暗し、石炭の
ほのほの如き戀せらるれど。
思ひ出は見まれかくまれ、君なくば、
この戀なくばわれは死ぬべし。
君いはず、われも語らず、ただ讀みて
ただ書きてあり二とき餘り。

このやうな歌がかの女の十二日の記事中に盜み見られた。

十三日はまた耕次の妻がやつて來たが、
『ある時にはやる』と云つて、それを突ッ返した。

實際に融通が利かなくなつて、二人は湯錢や電車賃にも乏しかつた。どうせ蒲團は一組ですんでるのだから、耕次の方のを――少しよくないので使つてゐないから――賣り拂つてしまはうかと云ふ話も、ちよッと相談だけはあつた。

十七日には、澄子がいよ〳〵辛抱できなくなつたと見え、雪ぬかるみを踏んでその父を淺草の福井町に訪ふて、小遣ひ錢を貰つて來た。久し振りでかの女は獨りで外出をしたのであつたが、

『どうもあたしは親しいお友達のうちに寄留でもしてゐるやうな氣ばかりがして』と云つて、かの女の歸りがけの時の感想を相變らずこと更らに感傷してゐるやうに述べた、『自分の家に歸つて行くのだとは思はれませんでしたよ。』

『………』渠にはかの女が笑ひながらでもそんなことを云ふのが氣まづく取れた。そして、ついこんな皮肉に馳せた、『そりやアさうでしよう、貧乏してゐますから、ね。』

『………』かの女もたゞいやな顏をした。いかにかの女だツて貧乏にひるむやうなことのないのは渠にも分つてたが、お互ひに別々な意味で氣がいら立つてゐたのだ。そのゆふがた、相並んでお互ひに物を云はずに庭を見てゐると、そのかた隅の小さい椎の木のまだ雪を消え消してゐる枝の上に、舊曆六日ばかりの月が淡くかかつてゐた。

十九日に、渠はまた留守であつたので、中野がまたやつて來たのを知らなかつた。かの女の日記には、――

『今あるも昔なりしもわれはまた
憎みはてかね悶え苦しむ。』

『………』渠には、然し、それが全くかの女の眞實なのか、それとも半ばは例の羅曼的趣味からの拵らへごとか、いづれとも分らなかつた。然しまた廿日のくだりを見ると、

『ああ、われあやまてり。戀を捨てしはわれに非らざるか？捨てられしと信ぜし古き戀の却つてわれより去りたるに等しき事を見出せし今日、わが胸の苦痛！恨みし人に誠ありて、われの輕卒なりしを悔ゆる今日』とあるので見ると、向ふから餘ほどおだやかに口說き返されたものらしい。一たび捨てた女を人が拾つたからツて、また取り返したくなる男の心持ちは、耕次もさきに經驗して知つてゐないではなかつた。が、それが自分の時には尤もな理由となつたけれども、人からの場合には妬ましく、憎ましく、失敬な侮辱を與へられてる氣がして溜らなかつた。そしてこちらも以前の女に云つたおぼえのあるやうなより戾しの言葉に多分かの女が釣られてゐるのを心外であつた。文句のつづき『わが胸の懊惱、議理てふのがれ難き人情のとりことなりて、今更らに捨て去り難きわれの、昔しの人、今の人いづれにもかた糸のより分けられぬ窮境を如何にすべき？ああ、われ過まてり、われ過まてり！死！死！われに最善の道、ただ一つの死あるのみ。』

『……』えい、死ぬなら、いツそのこと死ね！と、渠もつひ私かにその面白くない意味に怒つて釣り込まれてゐた。

けれども、――二十二日に渠がよそから歸つて來て、ふと直ぐに自分の一閑張りの前なる座蒲團に坐わると、誰れがゐたのか、そこに人のあツたかみを感じた。そして何よりもさきにくわツとして耳を產どころの出ぐちの方へすました。不都合な男でも來てゐたのぢやアないか知らん、そして今こち

らに見付からないやうに逃げたかとおもへたからである。

『何をお考へですの？』かの女もそばに來てゐて、こちらの素振りに感づいてゐた。

『………』渠は餘りにかの女を侮辱したやうなことになりかけたのを悔いた。そしてまだ多少は不審さうに、『誰れか坐わつてましたか？』

『あたしが坐わつてをりました。』

『………』それも亦意外であつたが、『僕はまた』と、久し振りの冗談にまぎらせて、『あなたのあだし男でも來てゐたのかと思ひました。』

『そんな女に見えますか、ね？』かの女もこだわりなく微笑した。『あなたのお留守をせめてはあなたのお机のそばにでもと思ひますから、あたしはいつもさうしてをります。』

『………』渠はそれを聽いて、以後用事の外は、あまり外出しまいと考へた。自分がゐないと、矢ツ張り、かの女は實際に寂しいのだらうから。

けれども、二十三日のゆふがたにはどうしても出なければならぬ用があつて、そこで牛スキと日本酒とをちやんぽんに飲ませられて歸つて來た。まだ八時をちよツと過ぎてゐただけだが、わる醉ひの苦しさに直ぐ床へ這入つた。そして前後も知らず眠つてしまつた。あとになつてこの日のかの女の日記を見ると、

「わたしは君の机に向つて靜かに坐わつてると、白山學校の消燈喇叭が寂しい冬の夜の靜寂を破つてきこえる。場所は違ふが、檜町の寓居で、五年間聞き慣れた聯隊のそれと同じ喇叭だと思ふと、一種懷かしい響きだ』とあつて、いつのまにか文章が口語體になつてるが――『君は昏醉してゐる。喇叭の音が消えるとまた元のしんとした夜にかへる。机の上のウオッチのセコンドが僅にこの間の靜寂を破つてゐる。ああ、君は何と云ふ多感な人だらう？戀も事業の一つだと云つて、戀の爲めには家をも社會をも無視して返り見ない程、强い熱烈な人で、自覺して耽溺し、叉自ら社會公衆の前にそれを告白して耻を感じない程の人でありながら、愛人の前では若い青年よりはまだ感じ易い涙を持つてゐる。わたしは幾度か君のあつい涙をわたしの袖でふいてあげた。そしてその熱した額に手をあてて青春の血にもゆる君の顏を見た。外に向つて强いだけ、胸の中の寂しさと苦悶とに痛む君の寂しみを同情せずにはゐられない。わたしは自分ら二人こそ眞に寂しき人々だと思ふ。』

『………』そこまでになつてゐながら、然し、なんでまた全人的になつて吳れないのだと思はれた。そしてかの女の『寂しき人々』と云ふには、かのハウプトマンの脚本に捕はれた型になつてるのが想像された。

二十四日には、兼て賴んで置いた女中がやつて來た、これで澄子にこの一ケ月半ばかりもお三どんをやらせてあつた勞が省けるわけだ。かの女も亦それをありがたがつたが、二十五日に耕次の妻がま

たやつて來たので、またかの女の落ち付きかけた心が亂れた。その日記はまた文語體に返つて、

「ああ、われは複雜なる戀の生活に堪えず。われはひたすらにもとの——寂しくとも、もとの獨身生活を思ふ。一身の不滿足、そはわれの覺悟するところ。ただ老いたる父の思ふところを加何?心しらぬ社會の誤解をいかん』云々。この夜、然し、二人は女中に留守を頼んで久り振りに淺草の公園へ遊びに行つたのである。

二十六日には雪が降つて、三寸も積んだ。二人は別々に自室にとぢ籠つて、興奮してゐる心持ちを——互ひに誤解や憤激からの中止やのない爲めに——手紙を以つて取りかはした。そして夜中になつてから、かの女の發議で木山その他一名と四人して、そとを歩きまはつた。舊暦十五日の月が寒く澄んで眞ツ白な地上を照らしてゐた。

光つて而もさく／＼云ふ地上を踏んで、この一園は鬼王神社の横丁をさきの通りへ出て、左りへまがつて高千穗學校の前まで行き、また左りへ二度まがつてもとの通りを歸り路になつた。その左り側で、けやきや椎の木らしいものでちよツと樹立ちをかたち造つてるその高枝を漏れる月の光の中に、大きな古めかしいわら葺き家があつて、可なり廣い庭を隔てて、また低い離れ屋が見えた。その屋敷のかまへが耕次には何だか自分の記憶に殘つてるところらしく思はれた。

『若し果してそれなら』と前置きして、渠はそこを通り過ぎながら、二十何年か昔の友人に關するこ

とを語つた。友人はそこの植木屋に下宿して、早稻田の政治科へ通學してゐた。離れが建つた當座のことで、食事はその度毎におも屋からそこの娘が運んで來た。そのうちに友とその娘とは互ひに若い思ひの仲になつた。けれども、娘の父はそれを許さなかつた。友人が暑中休暇に歸省して、秋を待ち兼てまた上京して見ると、かの女は既に人に嫁してうちにはゐなかつた。そして友人の机の引き出しには、女の止むを得ない事情の訣別狀が這入つてて、花かんざしを一つ添へてあつた。

『さう云ふことはただほんのあまい感情の話ではあるけれど、聽いて矢ツ張りあはれを催す、ね』と、木山は云つた。

『あたしもそんなお話を好きです、わ。』澄子は斯う木山に同感さうに告げた。

『……』耕次は、無論、それとなくかの女の心をやわらげるつもりで語つたのではあるが、あたしもと云はれては、如何に木山だツて、そのおのれのくろう人じみて氣取つて見せた意味を臺なしにされたに相違なかつた。

それから三四日の間に、たツた一度或大學へ臨時講演をしに行つた切り、耕次は引ツ籠つて創作に沒頭した。生活が迫つてゐて、さう／＼かの女の本意を云はせようとばかりもしてゐられなかつた。二三日前の手紙往復の結果でだらう、中野がまた三十日にかの女を訪ねて來たが、耕次は自分から渠等の話に立ちまじらなかつた。そしてかげにゐて、自分の心はくさ／＼した。が、それは不思議にも

この客の來た爲めではなかつた。渠には、かの女がいつもこちらに許してゐながら、いつもまたとぼけてゐるやうなのを痛く遺憾にばかり思はれたのだ。

　客がかの女の室から歸ると、かの女はひらきを明けて茶の間へ來るけはひがしたので、渠もこちらのふすまを明けて行つて、いきなり、兩手をひろげて踊りながら、

『お澄ひとりか――おいらなんぞは目が一つで、齒が二つで、舌が長くツて油をなめる！』

『……』呆れたやうにぼんやりとこちらの顏を見上げてゐるのは女中であつた。もう、ついてる電燈のもとで何か煮ものをしてゐる。が、冗談と分つたかして、やがて吹き出してをんな主人の方を見た。

『……』澄子はおだやかに微笑して手を鍋のよこにあぶりながら、『こないだお話ししてあげたお化けのお眞似ですか？』

『……』渠はかの女から聽いた『おきよ獨りか』を踊り出す東京流のお化けばなしの文句を、かの女の名に變へて出鱈目にもじつたのであつたが、自分がどこかの坊ちやんの如くかの女から輕く取り扱はれたのを寧ろ自分からの痛快な皮肉だと思つた。自分はかの中野のやうな生まじめのうそ付きや未練ものではなかつた。直ぐ苦笑に變じて火鉢のそばへ腰をおろしたが、そこにもゐたたまらず、また自分がさきに立つて澄子をかの女の室へつれて行つた。そしてまたかと云はぬばかりの顏をしてゐ

るかの女に向つて、先づ『「僕はいくらあの人が來たツてあなたが再び誘惑されて行かうとは思ひません。それは安心してゐますが、ね』と、鎌をかけた。それから、『然し、どうしてあなたの眞實の全部が僕に與へられないのです？』

『……』

『あなたは實際に不具なんですか？』

『さうかも存じません。』こちらをまじめに見つめて涙ぐみながら『世間がさう云つてゐるさうですから。』

『若しさうなら』と、渠も全身がまじめになつて、『若しさうなら僕も決心して不具になる手術でも施しましよう。どうせ部分的關係なんかなくツていいんですから！』

『許して下さい、ね、あたしにはこれがほんとうの性分なんですから！』かの女から聲まで顫はせながら進んでこちらの手を取つてゐた。

それから、お互ひに氣を取り直すつもりになつて、共に散歩に出かけた。そして下が大分に融けて出た月の寒さうな姿にも二人のあツたかみをおぼえつつ、柏木まで行つて友人を訪ねた。大酒家の友人は澄子にも酒を飲ませようとしたけれども、かの女は兼て耕次からとめられてゐる通りよそでは固く辭して一杯も飲まなかつた。庭にはその主人の趣味でいろんな草ばなの根や芽ばえが雪どけの中か

ら月の光に見えてゐた。それをまたかの女は提燈をつけて貰つて近く見る爲めに庭へおりた。

『うちでもこの春は花を植ゑましようよ』と、かの女は歸り路で云つた。寒いので、二人はしツかり寄り添つて歩いてゐた。

『それもいいが――』渠には人間の眞實に添はないでは春も園藝趣味もなかつた。

二月一日からかの女は風を引いて發熱したので、渠はかの女のあたまを冷たい水で冷やしてやつたりした。二日に二六新聞の記者が來て、また二人の生活のことを聞いた時、かの女は

『あたし達の間ですか？お互ひに一歩づつ讓り合つたのです』と答へた。

『……』けれども、こちらには、そんな解釋では征服したのでもなく、されたのでもない。そして熱ある眞實には、國家の生存と同樣に、必らずどちらかが征服し、他のどちらかが征服されねばならぬのであつた。そして征服被征服を戀愛以外のことでもあるかのやうにして讓歩や妥協にとどまる位なら、寧ろこの最初の狀態とは既に違つてる同棲をけふ限りに破壞すべきであつた。

二月三日には父が二度目で來たけれども、耕次はその相手をする餘裕もなく、涙を呑みながら最近に思ひ付いた一つの脚本を書いてゐた。女がその男に棄てられたと思つて、その腹いせに直ぐ第二の男を持つた。ところが、さきの男はかの女を棄てたのではなく、周圍のものの讒言であつた。第二の男はまた女がまだ純潔であると人に云はれたのを信じて受けたのだが、さきの男があるを知つたので

直ぐ離れた。つまり、女は男を棄ててまた棄てられたのだ。第一の男は中野よりも罪や弱みがない。第二のを耕次自身とすれば思ひ切りがよ過ぎる。そしてこれは佐用姫の傳説を改造して見たのだが、女を澄子に比べて見れば、初めはちと輕卒(けいそつ)であつたが、二度目に得た男がかの女を棄てて海に出たのを、飽くまで石にかじり付いても呼び慕ふ點は、多少は遊戯的氣ぶんに古い戀を持てあそんでるところの澄子よりも果斷で而も頼母(たのも)しいのであつた。

澄子はその脚本の趣意を遠かせられて、こちらが直接にかの女に何を云つてるかが分らないほどの頑迷(ぐわんめい)をんなではなかつた。かの女は自室に引ッ込んでまた考へ込んでしまつた。

一三

一月四日も渠は自分の座で朝から頻(しき)りに脚本を書いてると、郵便をほうり込んで行く聲がした。茶の間で父と話しをしてゐる澄子がその自室の方からまはつて行つて受け取つた。

『どこからです』と、渠はふすま越しに聽いて見た。

『あたしのところへ』と云ふ返事はまた嬉しさうであつた。

『…………』また中野からに違ひないと思つたが、うッちやつて置いた。

かの女が父のそばへ立ち戻るけはひがいつまでもしないので、耕次は筆を置いて先づ茶の間へ行つ

て、暫らく自分の父の相手をした。それから何げなくかの女の室へ行つて見ると、かの女は机にもたれて泣いてゐた。

『どうしたのです？』渠はついそれに釣り込まれて、そのそばに坐わつた。そしてそれとなく見ると、封筒の裏が出てゐて、そこには果して中野の姓名があつた。

『これを見て下さい』と答へて、かの女はそれの中味が矢張り机の上に乘つてるのをこちらへ近づけた。

『別に見たくはありませんが、何を云つて來たのです？』

『永別の手紙です。』

『……』ぢやア、とう／＼向ふから負けて來たのか？さうだ、——いや、——向ふはかの女がどうしても動かないのを知つて、今一つ最後の手を思ひ付いたのであらう。もう、止むを得ないからこの後は一般的な交際をも絶たうとでも云ふ訣別の文にこと寄せて、つまり、今一度かの女を引いて見ようとしてゐるのだらう。から考へると、こちらには、中野なる物が少しく手ごたへある人物になつたやうで、氣持ちよくもなると同時にいよ／＼氣の毒にもなつた。「けなげにもよく云つて呉れたとでも返事したらどうです？』つい、またこんな皮肉が出た。

『……』かの女には答へがなかつた。

『然し若し眞實の力が向ふに强いと思ふなら、今から直ぐにでもお歸りなさい――いやな義理などをこツちへ立てる爲にあなたがわざ〳〵僞善の生活をつづけるにも及ばないでしようから。』
『さうあたしをお突ツ放しになるなら、あたしも考へます。』
『それがいいでしよう。』義憤のやうな感じに滿ちて渠はそこを立ち離れた。そして父と共に茶の間で碁を打ち初めた。そして、父をさへこちらへ取り込んで置けば、かの女が逃げようたツて逃がすものかと云ふ意氣込みで碁盤のおもてに向つてた。
するとヽ午後三時頃であつたが、かの女は獨りでどこかへ出て行くやうすであつた。そしてまだ玄關を出るか出ないうちに、父はこちらからかの女に聲をかけた。
『いいかい、まだよく風が直つてないのにそとへ出て？』
『………』耕次はかの女に返事がないのをちよツと不思議に思ひ、茶の間から立つて客間の障子を明けると、今、不斷着のままで門を出て行く後ろ姿があひの垣根の上から見えた。まさか、中野のうちへなど行くつもりぢやアあるまいと安心して座に戻つて來て、『實は、中野から絕交狀が來たのです。』
『馬鹿な』と、父も受けて、『丁度いいぢやアないか――あんな男を！』
『そりやアさうですが、澄さんにはさうも行かないんでしよう。』
『僕の番だ、ね』と云つて、父はまた碁盤のおもてへ熱中して來た。

『あら手のやうに盛り返して來ました、ね』と云ひながらも耕次はそれとなくまだ心配が殘つてて、かの女の早く歸るのをこころ待ちに待つてゐた。が、その勝負が付いても姿を見せなかつた。今の負けをまた取り返した時も、まだであつた。次ぎにまた負けてもだ。

『おそい、ね』と、父も少し心配をし初めたやうすだ。

『……』あんなざまで矢ツ張り中野のところへ行つてしまつたのか知らん？若しさうなら、あア云ふ風に突ツ放した言葉を用ゐたのがこちらの惡いのだから、今更らのやうにそれが後悔された。そしてかの女が行つてしまつたものなら、ここに殘つてる老人も直ぐにこちらとのゆかりが絶えるので、これも亦向ふへ行つてしまうに相違ない。そしてまたかの女の爲めに置いてやつた女中も必要がなくならう。斯うして耕次は自分が又たツた獨りぼツちになる時の狀態までが思ひ見られて、父に對しても世間に對しても、もう、自分の面目が全くつぶれたかのやうにこころ苦しかつた。女中が食事の仕度をどうしようと聽いたのに對しても、自分の燒けやら憤りやらの爲め、わざとうツちやつて置かせるつもりで、それとなく、まア、待てと答へて、父に向つては『もう歸るでしようから――』

二時間ばかり勝負をしたところへ、かの女は歸つて來た。そして、

『今戸山の原へ行つてまゐりました』と、泣いてたらしい目を見せまいとしながら、父へとも付かず、こちらへとも付かず、何げないやうに苦笑しながら、『冬の日が火葬場の森に沈んでゆくところがよう

ございました。』
『そりやアよかつただらう、ね。』父は娘の方を見向きもしないでだが答へた。『冬の入り相は一體に氣がしまつていいものだ。――さア、占めたぞ！』
『………』こちらは父の突然な叫びで氣が付くと、大きな石の唯一の聯絡點を中斷されてしまつてた。
そしてこの投げでおしまひにした。
『けふは舊暦の年越しだから――一つ景氣よく』と云つて、食事に晩酌の勢ひも添つた父は大きな聲で舊式な豆まきを初めた。『鬼はアそと、福はアうち！』その聲がさきに『鞭聲粛々』を吟じた時のやうにかすれたけれども、夜の空氣をまことに平和に破つて聽えた。が、それはただ父のやつてることに對して一時の敬意を表したあひだのことで――そのあとはまた家のうちにもそとにもうわツつらにだけの靜けさであつた。
病後の身をそとで冷えて來て燒け酒をあふつたせいか、かの女は皆と一緒に茶の間にゐながらおこりに取りつかれたやうに振るつてゐた。
『お先きへ休ませて貰ひます。』斯う云つてかの女はこちらの書齋兼用の客間へ立つて行つた。
『………』渠はその後ろ姿を目で見送つて、ざまを見ろと云つてやりたい氣も出ないではなかつた。が、この不快をうち消してしまうほど痛切な情愛がかの女に對して起つて來たので、自分もあとを追

つて早寢に行つた。そして自分は一ことも口に發しなかつたけれども、かの女のふるへと忍び泣きとを自分にも感じつつ、同じやうな思ひをしてゐた。

まだ十時頃であつたが――締まつた門の戶を叩くものがある。そして木山の聲やその他のものの聲が聽えた。で、父が門を明けに出たあひだに、こちらの蒲團をすべて茶の間の方へ押し出して置いて、また衣物を手早く改めた。すると、這入つて來たのは木山、外二名と、木山夫人とであつた。こちらもこれに元氣を得たので、老人なる父までも入りまじつて、雜談をしたり碁を打つたりして、午前の二時までに及んだ。

その翌朝は不斷よりもおそく起きて、二人一緒に湯に行つたが、耕次は湯屋でいつも衣物の襟にさして置くピンを失つた。かの女からゆびわがはりに貰つた純金のネクタイピンで、梅のすかしが這入つてたものだ。歸宅のうへ、殘念がつてかの女に告げると、かの女はちよツといやな顏をして、

『あたし、知りませんよ――また不吉なことができて！』

『どうも濟まないことをしたが――』渠は斯う多少とぼけて云ふほかには申しわけの仕やうがなかつた。そしてこれをまた一つの不吉と云ふなら、かの女の今一つのそれは何であらうと考へて見た。中野の絕緣狀若しくは絕交狀のほかにはないではないか？そしてそれをも一つのつぢうらと見てゐるやうでは、かの女がよく易者にかよつたと云ふ世間のうわさも萬ざらうそでないやうな氣がした。こちら

には、かの女がよく夢を語つたりまたつぢうらを見たりする女の一人になつてゐた。して見ると、かの女が戀に遊戲分子をまじへたり、羅曼的に走つたりするも止むを得まい。渠はなほかの女のかかる無意識の迷信を破らねばならぬのであつた。

ところが、同じ日に、三度定の日の不吉が來た。中野の絕緣狀にかの女はなほ未練らしくも返事を出したと見え、それが封じのまま向ふから返されて來た。

『失敬ぢやアございませんか、向ふから永別の手紙が來たから、こッちからもおだやかに永別の言葉を送つたのですのに？』かの女は斯う云つて、耕次の見てゐる前で、添へ書きも何も這入つてないおもて封筒と共に、かの女の封じのままなる手紙を引き裂いた。

『……』渠はただ見てゐて、向ふとかの女とどちらに對しても痛快であつた。

『あんな詰らない人ッたら、ない！呆れてしまつた！もう、誤解なり呪ふなり勝手にするがいい！』

それから、こちらに向つて、『あたしはあなたのおッしやつた通り輕蔑されてしまひました。』

『いや、その方が向ふも氣が利いてるんぢやアないのですか？』

『どうしてです？』かの女はこちらに對しても亦ちよッと不機嫌を見せたが、直ぐなほつた。と云ふのは、渠が斯う云つて聽かせたからである、――

『それで向ふも』と、笑ひながら、『あなたに心を僕ばかりに向けろと忠告したやうなものですから。』

『………』かの女は然しちよツとにツこりするだけであつた。

『まア、湯にでも行つて一あびしていらツしやい』と云つて、かの女の留守にまたかの女の日記を盗み見ると、中野からの永別狀が來た二月四日のところに、

『熱い涙がとめどもなく出る』と書いて、左の文句が引用してあつた、——

『僕はあなたを今一度私の手に取りかへす時があると信じ候。澄さん、今一度かやう呼ばして下さい』とは、こちらに安ツぽい新派劇の泣き場を思はせたが、却つてそれでよく向ふの下品なした心が讀めた。『若しあなたが圓かな月を眺める時は、同じ月をどこかの空で失戀の恨み——』馬鹿！向ふはおのれの意久地なしから自身で失戀と云へば失戀をしたのぢやアないか？お友だちを思ふ房子さんのくやし泣きに對して、その時どんなに冷淡な返事をしたかを正直に白狀して見ろ！如何に房子やこちらをそのことでは信じない澄子だツても、一遍にその白狀で愛相をつかしたに相違ないのだ。——『を抱いて見てゐる人があることを思ひ出して下さい。戀を失つた淋しい人にも——』ふん、何が淋しいのだ、飽くまで妻子と共に住みながら！『まだなすべき仕事があるでしよう。僕はもう再びお目にかかりますまい。あなたの幸福を祈つてゐます。』

『………』こちらには、矢ツ張り、かの女をおびき出すあまい手としか讀めないのである。けれども。かの女はこれをそツくり正直に受け取つたものと見え、

「今これだけの熱があるなら、なぜあの時もう少し強くなれなかつたのです。周圍の爲めにでも、なぜすげなくわたしも突ッ放したのです。わたしはそれをあなたに聽きたい』と、口語的に書き出してある。

『………』こちらには、かの女の云ひぶんの方が、尤もに見える。そして多分この意味でかの女が最後の手紙をやつたものとすれば、相變らず向ふに於いては手ごたへがなかつたのだから、七分まではいよ〳〵の斷念と三分のそら賴みとを以つて、それを思ひ切りがいいかの如く突ッ返して來たものらしい。兎に角、もう、これでその方はすッかり安心になつた。

市内へ用事があつたので、午後三時頃から出て、十時過ぎに歸宅して見ると、澄子は客間の疊の上に横になつて、その上から蒲團を着てゐた。そして、

『お歸んなさいまし』と、近頃にない優しみを表して起き上らうとした。その顏がおそろしいほど眞ッ青であつた。

『どうしたんです？』また燒け酒でも飲んだのかと、こちらはその實かの女の馬鹿々々しさをむッとした。

『苦しいので、早くお歸りをお待ちしてゐました。』

『どうして苦しいんです？』立つたまゝかの女を睨み付けて、矢ッ張り、つよい語調であつた。

『………』父がそこへ茶の間とのふすまを明けて出て來た『實は、今、木山さんがどこかの雜誌記者をつれて來て、これに隨分飮ませたのだから――』
『誰れです、その記者は？』
『秋田とか云つてたが――』これも立つててだが、少しおど〱してゐた。
『ぢやア、おほ酒飮みです！』これは些か誇張に過ぎたやうに思へたが、耕次は父とかの女とをおどし付けるには役に立つと見た。
『さうだらうよ、一升德利を下げて來たくらゐだから。これがまたさう知つたらよせばいいのに、調子に乘つてばかりゐて――。』
『お父アんが見てゐて、まだどうしてとめなかつたのです？』
『いや、とめても聽かないんだから――とう〱、みんなが歸つたあとで喰べた物を戻してしまつて。』
『馬鹿げ切つてる！』渠はかの女がまたぐツたり倒れたのを上から見おろしながら、涙となつて溢れ出ようとする忠告を自分の喉のところで暫らく差し抑へて、『あなたもまたなぜさう飮んだのです？』
『あなたがお留守でしたから』と、かの女は全く往生してゐるやうになつてた、『お代理をつとめなけりやアと思つたので――』

『馬鹿なことです。そんな代理なんか何もするにや一當りません！』友人どもから自分が侮辱されたも同様だと思ふ憤りでだが、渠には、自分が斯うまで意張つて物が云へるのはかの女の中野との絶縁があづかつて力を添へて呉れてるのであつた。『早くお休みなさい、早く！お竹もなんで床を敷かなかつたのだ？』

『さうだ、らくに休む方がいいよ。』父もそれから女中に向つて、『早く床を取つてやんな。』

澄子が床に這入ると、耕次はその枕もとに坐わつて、先づ自分の手をかの女の仰向きのひたひへ當てて見た。まるで死人のやうにつべたかつた。

『………』渠はこちらがあべこべにぬくめてやらねばならぬ順番が來たと思ひながら、聲をずツとおだやかにして、『以後、あなたは酒をうちででもお愼しみなさいよ。』これは自分でさう飲まぬだけに十分うらはらなしに云へることであつた。

『許して下さい、ね』と、かの女もすツかり從順になつたやうすだ、『あたしが惡うございましたから。』

一四

二月六日には、古谷露子と云ふ小說家志願の婦人が尋ねて來た。この婦人は耕次がこちらで弟子に

してゐるのでもないが、向ふから弟子のつもりで前にはよくやつて來た。そしていろんな相談をも持ちかけられるところから隨分渠の心に親しく這入つてゐた。

丁度渠が北海道まで追ひかけて來た女を東京でめかけ同樣に世話することになるその以前のことであつたが、渠は露子をその借り二階の住まひに訪問した時、何かの話から持つて行つて、ざツくばらんに、

『どうです、僕の女房になる氣はありませんか』と云つた。

『………』かの女はこの時その脊中で泣く兒をゆすりながら、疊の上に立つてゐた。凄いほど美人の資格ある顏をちよツと赤くして、それでもこちらを信じ切つてると云ふやうな落ち付きで微笑しながら、『奧さんがおありぢやアございませんか？』

『あれはどうせ別れるつもりだが――』その時にはまだ渠は容易に自分の妻と離婚ができるものと思ひ込んでゐた。離婚をいよ〳〵持ち出して今に至るまで手こずつてる經驗がまだ附いてなかつたからである。が、斯う云つてかの女を見あげながら直ぐそのあとをつづけた、『然し、それには條件がある。』

『………』かの女も微笑をつづけてこちらの顏を素直に見つめながら、一二歩あるいてゐたのを立ちどまつた。

『その赤ン坊をどこかへ呉れてしまふのです、ね。』
『………』『かの女は自分を棄てた男にはもう思ひ殘りはないが、そのかたみだけは――と云つた風にして、『子どもがあツたツてかまはないぢやございませんの？』
『ぢやア、駄目、さ。』渠はそこまでの責任を持つ氣がなかつたので、その話はそれツ切りにして、相變らず無事につき合つてゐた。が、渠が妻のゐるところへ滅多に歸らぬやうになつてからは、かの女は來てもこちらが留守がちなので來なくなつてから、こちらが樺太へ渡つたりして、その間殆ど一ヶ年半ばかりを置いて、久し振りの訪問であつた。
　こちらがまた東京に歸つたのに張り合ひができて、かの女も創作を二篇ばかり書いたからと、菓子折りなど持つて來て、二時間ほど話していとまを告げた。が、その歸らうとする時に、かの女はつれてゐた子供――もう、ちよこ〳〵歩けた――の小便を椽がはのはなでさせた。これを見つけた澄子は、云ひやうもあらうに、つけ〳〵と、
『そんなところでおしツこをさせちやア困りますよ』と云つた。
『僕の客になぜあんな失敬なことを云つたのです』と、渠はあとで澄子を責めた。父もこのときそばで聽いてゐた。『正直に云へば、曾ては一緒にならうかとまで思つた人ですが、子供を手離したくないと云つたので、その後も交際はしてゐますが、決して關係などあるんぢやアございません。それに、

澄子さんは何だか燒き餅らしくつんけんと――第一、初めての客に對して見ツともないぢやアありませんか？僕はあなたの』と、今度ははツきりかの女に向つて、『お客が來た時にはそんなざまを見せたことがありますか？』

『ですから、あたしは最初おだやかに會つてやつたぢやアございませんか？然し、向ふが苟くも一家の主婦たるものを馬鹿にしてかかつてました。』

『いや、そんなやうすはなかつたが――』小說の原稿などはそれを見て貰ふ者に手渡しするのが當り前だらうからと思つた。

『ありましたとも！第一、みやげを持つて來てゐながら、あたしが出てゐる時にあたしに渡さないであなたに出すとはどうしたことです？』

『成るほど、ね。』渠は女がいよ／＼主婦氣取りになつて來るとそんなこまかいことにまでも氣をもむのかと感心した。が、なほ、歸つた方をもかばつてやるつもりで、『然し、向ふはそんなことにやア無邪氣であつたのだらうよ。』そして心では、露子が或は澄子をどう見ていいのかに迷つたから、兎に角こちらにさへ渡せば間違ひツこはないと思つたのぢやアないかとも考へられた。

『なんにしろ』と、父も最後に口を出して、『僕もあの時直ぐ思つた、ね――主人のところへ來た客が如何に女だからツて、主婦たる者があア叱り付けるのはよくなかつた。』

『何もあたしやア燒き餠なんかで――』

『さうでないにしても、さ。』

『………』耕次は、もう、その親子の話にまかせてしまつて、自分では露子さんがこれで二度と再び來ないだらうと考へてた。然し、もう、たとへ來ないでもよかつた、澄子の征服をして行けさへすりやア。

ところが、かの女はこれまでに於いて最も從順であつたゆふべてさへ、その心とからだとが合致しないで、別々であつた。そして渠がそれを追窮すると、かの女は

『中野の爲めでなかつたのだけはお分りでしよう』と云つた。

『ぢやア、何の爲めです？』

『多分、あなたにまだ奥さんがおありの爲めでしよう。』

『………』そんな平凡なことを云ふ女であつたのかと、一ときは興ざめてしまつたが、

『僕は、然し、あなたが中野のことを思つてたやうに僕は僕の妻を思つてやアしません。』

『五十步百步でしよう。』

『………』渠はそこで考へた。かの女はそんなことを云つた上にも、けふはまたこまごましい主婦の權利じみた物などを求めて、こちらの左ほど重んじてもゐない家庭のことまで氣にして、つまり、い

よいよ出でてます〳〵平凡なのである。涙はそれを卑しむより寧ろあはれましくなつたので、つとめて惜しんでた自分の涙と共に、夜になつてまた部分の全體化的燃燒とその眞實とを說いた。そしてそれが人間の生活としては偏肉や偏靈よりもずツと正しく、ずツと高尙で、而もずツと大切なことを說き明した。『よく考へて御覽なさへ。不斷のことは緊張した一刹那の餘波に過ぎません。その大切な刹那に全人的合致ができないで、どうして不斷にばかりその合致の結果なる愛がありましよう？で、あなたが若しどうしてもこの愛を實現させることができないとおツしやるなら、僕はあなたを矢ツ張りうわさ通りの不能者と見て、僕も亦こんな要求の生ずるその根元を切斷致しましよう。

『……』かの女は顫えながら暫らく考へてゐた。そして涙ごゑになつて、『では、あなたもお死にになららうとおツしやるのですか？』

『いや、お付き合ひに不具となつてあなたと生きたいのです！』

『感謝します。』かの女は暫らくまを置いてから、『然し、それだけ貴いあなたを不具者にしたくはありません。あたしはいつ死んでもかまひませんけれど――』

『僕の爲めに死ぬだけの氣があれば、その氣であなたの全部をお投げ出しなさい。』

『……』かの女はます〳〵顫えてゐたが、溜らなくなつたと見え、起き出しながら、『あたしはあなたの御親切にはお報いすることができない身でしよう。死ぬか、投げ出すか、どツちとも父に正直に

相談して處決致します。』

『………』渠はかの女が直ぐ六疊の方へ行くかと思つてひやりとしたが、かの女は椽がはへ出て便所に行つた。そしてまたこちらへ歸つて來てから、

『あたしにはまだ一つ云ひ後れた條件がございます。それを云はないのに免じて、どうか今少しおそばに置いて下さい、ね——父にまた心配をかけるに忍びませんから。』

『何です、それは』と聽いて見たが、かの女は云ひたくないとばかり答へたので、どこまでも何か一つ秘密を持つてゐたがる女だ、わいと思はれた。

一五

その翌日、父が歸つて行つてから、かの女が俄かに丸髷を結つて見たいから許して呉れろと頼むので、耕次は女中に命じて髪結ひを呼んで來させた。そして六疊の方が近ごろ珍らしくほがらかな聲を出してるのを、こちらの想の中絶した間を利用して二度も見に行つた。

髪結ひの年はまだ若いやうだが、その腕は十分にあるものと見えた。髪は立派にでき上つたのである。

『どうです、ね』と云つて、かの女がこちらの机のそばへ來て坐わつて、結へた髪を見せた時では、

人がらが殆ど全く改まつたかのやうに引き立つてゐた。そして右や左りへ肩があるがるやうな、もとの堅苦しいからだ付きのあとなどは少しも見られなかつた。

「なか／＼結構だよ。』斯う一つ嬉しがらせて、渠は何げなくかの女の姿を左右に見まはしながらも、私かに自分の顏が赤くなつたやうに思へた。さきに紹介者の房子さんが美人だと說明したのも、多分こんなところを見て知つてたからだらうが――それを今、自分は全く競爭者なしに引きつけてゐるのであつた。できることなら、一組、立派な裾模樣をでも拵らへてやりたかつた。

ふと、かの女に自動車をも備へてやらうと云つたと云ふ男はどうしてゐるだらうと思ひ出された。兎に角、けふの丸髷は、もう、かの女の所謂『狼よけ』ではなかつた。そしてかの女が中野に對して「關係があるも同樣ぢやアありませんか』と云ひ迫つたと云ふその關係は、今やこちらに於いてもツと實際化してゐるのであつた。若しここにかたなが一と振りあつて、それをこちらが拔いてかの女に迫ることができるなら、かの女が中野へ迫つた時のよりも一層深い理由を以つてだらう。が、かの女の所謂肉を征服するにもこちらが全く强迫がましいことをしなかつたのであるから、かの女の分離した心を奪取するにも無論强迫はしたくないのであつた。

兎に角、かの女が眞劍な戀を初めて中野におぼえて、それを今ではこちらに移さうと努めてゐることだけは事實だと感じられるので、渠はその點ばかりにでも可愛さが餘つて溜らなくなつた。そして

直ぐ引き寄せてかの女を接吻してやつた。

かの女の前身に對するいろ／＼な疑ひなどは、もう、渠に少しも問題ではなかつた。が、二月九日に、かの女が或人から聽き込んだと云ふところによると、渠にまた新らしい問題ができた。簡單に云ふと、渠にも友人なる島田と云ふ男のやつた仕事にかの女が雇はれてゐたが、あまり面白くないのでやめた。すると、同じやうに雇はれてた一名の男もまたやめて、かの女のところへ島田に對する不平をこぼしに行つた。それを島田は、この二名がくツ付き合つたが爲めに面目がなくなつて同時に辭職したのだと、今になつてまたこと新らしく吹聽してゐた。

『あれはあすこの下女から成り上つた細君が下だらない卑劣な根性から割り出した想像ですが』と、かの女は憤慨してこちらに辯解した、『若しあの時あたし達が關係してゐたとしても、あたしはあんな夫婦に面目ながるやうな意久地なしぢやアありません。』

『ぢやア、さう云つて念の爲め手紙でも出して置けばよからう。』

『いえ、あたしはぢかに行つてあいつの青瓢簞のやうな横ツつらを張り倒して來ます。』

『………』渠は、如何にも、向ふの島田と云ふ男が女にかげでだけもそんな意氣込みを見せさせるに適するやうなひよ／＼した弱みのあることを思ひ浮べた。だから、それに對してかの女が若し言葉通りの報復をしても可いと思つた。十日になつて、かの女が獨りで行くと頑張るのをなだめて、自分も

一緒について行つた。
『細君をお呼びなさい』と、かの女は迫つたけれども、島田はわざと呼ばなかつた。そして渠自身で茶の世話などもした。それを一層不滿に思つてか、かの女は、『ろくに約束通りの月給も出さなかつた癖に、よくもそんな下だらないことが云へたものです、ね？』
『あなただツて』と、島田は青くなつてからだを顫はせながら、『かさを借りて行つた切り、返さなかつたでしよう？』
『あれは、もう、初めから破れてゐましたから、お返ししたツて使へる物ぢやアなかつたのです。』
『………』耕次はこれを聽いて、かの女も餘りに思ひ切つたことを云ふと思へた。その當座に既にさう云つてもいい物であつたのか、それとも今云はれて俄かに賣り言葉に買ひ言葉を出したのか、どちらともこちらには分らなかつた。
『然し』と、島田は口をむぐ〳〵させながら、『直す道もあります。』
『ぢやア、あたしの方でも取るべき物を取らなかつたのはどうして呉れます？』
『まア、そんな過ぎ去つたことはお互ひに云はないことにしまして、さ』と、耕次は兩人の仲を取つた。そして兎に角誰れと誰れとに澄子のおこるやうなことをしやべつたのかと聽いて見ると、島田は三四人の名を擧げた。そして、

『それにもそんなうわさがあつたと云つただけで――』

『そのうわさのもとはあなたの細君ぢやアありませんか?』

『……』島田はかの女の追加に取り合はないで、『別にさう云ふ事實だと斷言したのぢやアありません。』

『兎も角も、ぢやア、その人々には君から今度お會ひの節に思ひ違ひのないやうに取り消して貰ふことにして』と耕次は渠に賴んで、かの女にも口をつぐませた。自分もかの女をやがては正式の妻に直すつもりでゐる以上、かの女に一つでも面白くないうわさの多いことは望んでゐなかつた。

自分がついてゐたからこそ島田も、無事に濟ませることができたのだが、渠には恐らくさうとは思へまい。で、このことの爲めに、自分はどうせ淡い交際仲間の一人をまた失ふのだらうが、それは自分もかの女の愛に對して止むを得ないのであつた。

が、――斯うしてこちらは自分のたださへ少い友人のうちから二人なり三人なりを失ふに從つて、自分の心はますますかの女にばかり熱中して行くのだ。それにも拘らず、かの女の方は最後に中野を失つても、直ぐまたその代りに何か別な詰らない物をその心に補つてゐるのである。一つには、又こちらどもの生活に冷かし半分の興味を持つて尋ねて來る客が少くなつたからでもあらう。それを趣味からであると思へばそれまでだが、こちらには何だかそれだけ水くさかつた。八日には花屋が白桃を

持つて來たと云つて、その喜びかたが尋常ではなかつた。わざ〳〵さうしてこちらの一直線な態度に反抗を見せてるのぢやアないかとも考へられた。

『如何に奇麗な花でも、人間眞實の生活に添つてゐなければ何でもない。』

『あなたは女學者に似合はず無趣味なんですよ。』

『そんな淺薄な趣味なんかで文學者は動いてるんぢやアない――一番重大なのは矢ツ張り人間その物の趣味です。』

『花を愛するのも人間の趣味でしよう。』

『……』渠はかの女との間にいつも斯うして行き違ひがあつた。そしてそれを一々說き明すのも、もう、面倒であるほど毎日の仕事が急しかつた。そしてその間のかの女は、こちらから見ると、ほことにゆるみたるんだものであつた。

かの女が白桃を愛するもいいが、かの女の白好きは既に姑息な因習になつてるのである。帝國議會の傍聽席に於ける『白襟、白うら、白そで口の美人』をいまだに夢見てゐるのに過ぎなかつた。そしてまたむく毛がこれも白いからであらう、かの女はどこかよそから近頃よくやつて來る小犬をいつも『ポチ、ポチ！ポチや、ポチよ』と呼んでわが子のやうに可愛がつた。

『………』女房がその子に目もなく持つ愛情をも半ば燒き餅じみて見る男の經驗をして來たこちらには、そしてかの露子との交渉にも先づその子をよそへやれとまで云つたこちらには、澄子が犬や花を愛するに對しては一層抗議がましい言葉が出ないではゐなかつた。

十二日には、音樂と芝居とに關係ある友人が來て、澄子を女優にしたらどうだと勸めたのである。『舞臺に出てさう引き立たない顏でもないから』と。『近代劇の女優なら、踊りの素養などはなくツたツてできるから。』

『それもいい、ね。本人がやらうと云へば、僕に不贊成はないが――』實際、若しどうせかの女が最後の不具者なら、今日以上に逼窮しても駄目なことであつた。寧ろ、その不具から來た、不滿や寂しさを花や小犬に費やさしめるよりも、一つ花々しく舞臺にでも立たせる方がかの女の爲めにも一生の思ひ出にならうと思はれた。けれども、自分はこれまでに、もう、三名も女優の志願者には失敗してゐた。一には、藝者を受け出して裏切られたし、二には、有名な本願寺の役僧の落ちぶれた家族の娘をその約束で引き受けて、見習ひの最初から立派な衣物を要求された爲め駄目になつた。三には、餘りに不美人であつたが爲め、芝居の關係者がはから受け付けられなかつた。兎に角、かの女を友人もゐる前へ呼んで話して見ると、

『其へ[illegible]思ひますから、暫らく考へて見ます』と答へた。で、その翌日になつて、渠は

あまり熱心でなしにだがまた尋ねて見た。

『きのふの話はどうです？』

『……』かの女もさう乘り氣になつてゐなかつた。『それよりも、あたし』と、ちよツと云ひにくさうに言葉を切つてから、『矢ツ張り、斯うしてあなたの熱い愛を受けてゐたいのです、わ――あなたさへこの狀態でお許しになつて下されば。』

『これ以上に』と、渠は重苦しい氣持ちで、『若しどうしてもあなたが進めないとすれば――』その夜は寒かつたけれども、月はまたよかつた。その輝くおもてに、ふと、渠は鏡を思ひ出したので、自分の机の前へ行つて懷中かがみに自分を寫して見ると、一時は多少恢復して來たと思へた顏が、また、自分ながら凄いほど瘦せてゐた。

かの女の近況を心配してか、それともこちらにも親しみをおぼえてか、十六日に父がまたやつて來た。すると、生憎、その日になつて初めて、北海道からの途中で別れた女が――新聞でこちらの住所を知つたからであらうが――尋ねて來た。そしてさきに東京でこちらがかの女のよそ行き衣物を質に入れてあつたが、それを出す金二十圓を渡せとのかけ合ひであつた。

渠はこの女の最後に於ける不都合などを殊更らなじりたくもないので、云はれるまゝに金をやることにして、それができるまでの期日を入れた證文を書いて渡した。そしてこちら二人も同じく電車へ

出るついでを、かの女と共に出た。そしてその途中で澄子がたばこを買ひにちよツと店屋へ寄つたあひだを、渠は久し振りに自分の心の緊張をゆるめて、笑ひながら低い聲でかの女にのしかかるやうに斯う云つた、

『さうこわい顏をして來ないでもいいぢやアないか？今度來る時はおとなしく、もツとおだやかにして來るがいい。さうすりやア、あれだツて萬ざら惡い氣の女ぢやアないから、お前も多少話し相手にならうと云ふものだ。』

『………』かの女はこちらを矢ツ張り恨みがましく見詰めたが、その目つきには少し和らぎが見えた。

『………』さうだらう。たとへさうでも、今更らこちらはもと〳〵通りによりを戾さうと云ふやうな野心は微塵もないが、何といつても小一年ケ間は、隨分いろんな苦勞を共にしたのであつた。思へば、可哀さうなこともあつた。

一六

最初の女中はお嫁に行つたので、近處の桂庵から老婆が來てゐたが、それが十七日の夜に金を持つて買ひ物に行つた切り、とう〳〵歸つて來なかつた。すると、夜明けの五時半頃に臺どころの戶口を

叩いた。どうしたのかと聽いて見ると、狐につままれて一晩中歩いてゐたとの答へだ。馬鹿々々しい！こちらの想像では、買ひ物の金で酒屋をちびり、ちびり飲み歩き、いい心持ちに醉つてしまうと、裏手の明き家まで歸つて來て、そこの床の上でぐう〳〵眠つてゐたのだ。そして餘り寒くなつたので、斯う早くそこを出て來たのだらう。皆もこれには呆れてしまつた。二錢でも一錢でも持てばちよツと酒屋に行くと云ふ惡い癖の老婆で、これまでにも買つてある酒がいつのまにか思つたよりも減つてゐた。

『なんしろ着がへ一つない婆アやで』と、澄子は顏をしがめて父に語つた、『寢まきの上に裾のぼろを隱す前かけを一つして來たのですから。』

『………』さうかと云つて、それをこちらが追ひ出せば、早速澄子が困るのであつた。

ここ一週間或は十日ばかりを、渠は自分の仕事にばかり熱心であつた。そして夜も午前二時より早く寢に就いたことがない。その間に雪が降つたり雨になつたり、また雪やみぞれがあつたりしたけれども、自分と澄子との間には殆ど葛藤がなかつた。蓋し自分がかの女をその根本に於いて追窮するひまさへもなかつたのである。

かの女は却つてそれを喜んでるやうに、ただこちらの餘りに仕事に精力を籠めてる爲めの健康をばかり心配した。が、それだけこちらはそこに一方の空虚を無理にこらへてゐたのである。それとも知

らないで、老いてる父はこちらどものおもて向きだけの無事を喜んで、十九日に引ッ返して行つた。

その夜、二人がまだ床に這入らぬうちに、互ひの暗鬪がまたおもて向きにもぶつかつたのである。かの女は

『あたしは刹那の滿足で明くる日は行路の人となつても構はぬやうな發作的の戀には不贊成です』と云ひ放つた。

『………』まだかの女の生意氣がぬけてないのかといきどほろしくなつたので、渠は『何が發作的です』と少し聲を荒らげた。『僕は刹那の緊張に吸收されてない日常や永久なら、あつたとしても取るに足りないと云つてるんです！』

尖つた一點にはいのちが充實するが、延びた尺度は死んだ物に過ぎない。どちらの主張してゐる戀を『たわむれ』であるかと云へば、寧ろかの女の尺度癖にあるではないか？戀の永久とはその尺度で、その內容は却つて刹那の充實緊張に在る。そしてそれを體現させようとするのは、決してたわむれでも下等でもない。熱烈の度から云つても、戀なり愛なりを一日でも二日でも押し延べようとしてその刹那をうとんじ忘れる方が不熱心に傾いてるのである。

これほど簡單明瞭なことを云はれて分らないかの女でもないが——と思ふと、矢ツ張り、こちらには、かの女がこちらを愛しながらもその自己の不能を飽くまでも云ひのがれようとする口實を拵らへ

てるのではないかと云ふ風にばかり見えた。今夜はどうしてもそれを突きとめてやらうと考へたから、渠はかの女を無理にさそつて家を出た。その留守中に、だらしない酒飲み婆アやの爲めに、たとへ無けなしの家財道具をすツかり持ち運ばれてしまつたとしても、そんなことは少しも憂へるどころではなかつた。

舊暦十一日の月は、もう大分に中天を外れて冴えてゐたけれども、まだ滿ちるに至らないその光に却つて原ツぱへの雪のぬかるみ道を目の前にちら付かせた。そして夜ふけの寒い風がうす暗く二人の足もとに吹いてゐた。が、それを避けないで寧ろ氣持ちよく歡迎したほど、渠のあたまは熱してゐた。

家から左りへ一直線の道をいよ〳〵人家のなくなつた原ツぱへ突き當ると、渠は大きく掘れた穴の左りへ道を取つて、枯れ芝の上を五六歩さきへ出た。が、考へて見ると、その向ふにはまばらなくぬぎ林しかなかつた。その間へ初めての雪を踏みにかの女と手を取り合つて來たことはあるが、その時を今から思へばただだうわツつらの情愛を交換した言葉しかなかつた。今やそんなあまいことではうそにも滿足してゐられないのである。

ちよツと踏みとまつたが、それからあと戻りをした。そして工兵どもの練習のあとかたなる大きな長四角畑のやうな穴のふちをまはつて、さきの角からその穴と陸軍射的場のまとなる山との間を二十

間ばかり眞ツ直ぐに進んだ。そこでは射的場が二つに分れて、その兩方を二つの高い練瓦塀で仕切つた狹いぬけ道が右の方へ長く向ふまでとほつてゐる。渠はそれへかの女をつれ込まうかと考へた。そとからよくのぞいて見ると、うへの方へ少し月の光が横照らしに照つてるけれども、壁のふもとは暗かつた。這入つてもいゝが、ちよツとした聲でも籠つて遠く響くのを知つてるのでそれを恐れた。また同じ方向を穴に添つて進み、とう／＼、最大距離の射的場の內部に來てしまつた。つい、こないだのこと、矢張り西大久保に住む或紳士が散歩がてら何も知らないでここへ這入つたところ、射的の眞ツ最中であることを横はばの眞ン中ごろへ來た時に初めて氣が付いた。ぷす／＼と云つて彈丸がいくつもあたまの近くを掠めた。進退に苦しんで地べたを這つて逃げてると、今度は狙らひ外れのが横ツ腹の前後にも落ちて來た。どうにも仕やうがないのでまた立ち上つて一目散にやツと驅け拔けたと云ふ。

さう云ふ苦しいあわてかたの場面をその起つた場に於いてじツとまじめに想像して見ることができるに付けても、今や渠は自分の眞劍になつてることが確かめられた。若しかの女にしてなほ曖昧であつたり、なほ不正直であつたりしたら、今夜こそここで刄物があつたら光つたかも知れぬ。こちらのやうすでかの女もそれと察してゐるかして、餘ほど覺悟のやうに見えた。

こちらが然し言葉を發しなかつたので、かの女も亦ただ默つて附いて來たのだが、縱に長く渡つた

廣ツぱの一方で、低いいばらや枯れ草の間に突ツ立つて、暫らくふたりは互ひに月の光りをかすめて互ひの顏に互ひの心を讀み合つた。そして高みや地べたのところどころに白いのがまだ消え殘つてるのが、却つて人の目をちら付かせた。

また山の後ろを一回、重い荷物列車の通過するのが聽えたあとは、全くしんとして、もちろん他に人げなどあらう筈はなかつた。

『いらツしやい！』渠は突然自分の足もとなる枯れ草の上に腰をおろした。そしてそばなるかの女を引き寄せて、横抱きに抱いた。

『……』かの女は素直に抱かれて、燃えてるやうな目つきでじツとこちらの顏を見詰めたのが、光りにかすれてちよツとよく見えた。が、恐怖の色もまたまじつて見えたので、こちらも餘ほどこわい目つきをしてゐるのだらうと身づから思へた。

『十二月の二十七日以來』と、成るべく優しくしようとした聲がそれが爲めにうつろに顫えて、

『あなたはいつもからだと心とが分離してゐたんですか？』この問ひがおしまひになるに從つて、渠は憎しみと可愛さとが一緒に溢れて來て、かの女を半ば夢中でゆすぶつてゐた。

『……』こちらをなほも見つめてるかの女は、その首のがく〳〵するのがやむと、むせびをこらへてるやうな聲で答へた、『一番初めはさうでもございませんでした。』

『ぢやア、矢ツ張り、不能者ではないのです、ね！』渠は實際に一たび斷念したことがまた有望になつたのを喜んだ。

『でも』と、かの女もつゞけてまじめに、『あたしが一生懸命になればなるほどまた中野とのことを繰り返すやうなものですから。』

『と云ふと――？』渠にはちよツとその意味が分らなかつた。

『………』まを置いて、かの女は、『それがあたしの云ひ後れた條件ですから。』

『………』何だらうと考へながら、渠はかの女の少し和らいで來た顏を見てゐた。

『あなたはそれをも白状しろとおツしやるのでしようから、今、申し上げますが、あなたはまだ正式の奥さんがおありです。』

『ああ、分りました！』渠はそこにも既に意外でもなかつた意外のことを發見した。『あなたは、成るほど、それが爲にこないだも僕等が不自然なまじはりになつてるのを氣にしてゐたんです、ね。』

　さうだ、自分はもう占めたと云ふ一と安心の爲めに、割り合ひに平凡な理性の勝つてるかの女の立ち場を全く踏み付けにして、かの女をばかり追窮してゐたのであつた。そしてかの女が最後に中野に要求して失敗したことをこちらにも云ひたいながら遠慮してゐるのであつたことが分らなかつた。然し今や、理性の平凡は女としてまぬがれないもので――かの女は矢ツ張り正式の妻になりたいのであ

つた。自分は今やそれに十分の同情を向けることができる。かの女が無邪氣に猫を記念にしたり、わざとらしくも主婦の權利を主張したり、ただ丸髷を結つて見たり、頻りに小犬を可愛がつたりするのは、結局、みな子を欲しがる年輩に達した證據ではないか？かかる爛熟した女を手に入れながら、自分らは今日までそれに子を與へる道を取らなかつたのだ。中野にしても、自分にしても、『關係したも同様』でありながら、なほ且かの女に『處女性』主張の餘地を殘す所以は、乃ち、そこであつたらうそこには正式の手つづきをすませてかの女を安心させる必要があつたのだ。若しかの女の肉靈區別觀で云ふと、かの女の最も否定する肉を實際にもツと多く要求してゐるのはこちらではなく、却つてかの女自身であつた。かの女にそれを直接に與へて子のできる道をひらかないでは、かの女をこちらの所謂合致の愛に救ひ上げることができないのであつた。澄子の如き女に對しては、如何に熱烈な合致觀も、正式な、それが爲めに平凡な家庭を持たせないでは實現できないことが分つた。かの女のいろんな小理窟や思はせ振りも決して空想や僞善ではなかつたのだ。

『よろしい！僕は中野とは違ひます。成るべく早く、あなたの望み通り、あの死んだも同様の妻と離婚する方法を考へます。』

『あたしは然し』と、かの女は全く涙ごゑになつてその顏をこちらの胸に埋めて、『そんなことをなさらないでも、もう、あなたの物ですから！』

『いや、分りました。僕が惡かつたのです。幾たびもあなたばかりに許してを云はせましたが、最後に今僕から返します——どうか許して下さい。』斯う云つて、今一度かの女を抱き締めて接吻を與へた。そしてこの心持ちを自分らの家庭に實行してこそ、さきに房子さんらに誓つた澄子の救ひが初めて全くされるのであつた。そしてこの救ひがまた自分自身の救ひにもなるのであつた。『もう、すツかり分りました。さア、歸りましよう。』

『…………』かの女も一緒に立ちあがつて、下向きがちに歩き出した。

『…………』渠は無言でだが、かの女を導きながら射的場のいばらや枯れ草の間を出る時、仰いで西の空を見ると、冷たさうならは虧けの月にも熱い感じが伴つてゐた。

——(大正七年十二月)——

お竹婆さん

『お竹さん、さう飲み歩いてばかりゐないで、少し稼いで貰はないぢやア――』と云はれてゐたので、かの女は自分の厄介になつてる桂庵のおやぢにつれられてこの家へ目見えに來たのであつた。自分としては前借をして、これまで桂庵でごろ付いてた喰ひ扶持の實費參圓五拾錢を拂つてしまひさへすれば、それで氣がすむのだ。

不斷着までも自分は飲みしろに替へてしまつて、寢卷きを着のみ着のままと云つても、その裾はぼろツ切れ同樣に破れてゐた。それを隱す爲めに桂庵のかみさんのふる前かけを借りてまとひ付け、夜になつてから來たのである、が主人となるべき人の奥さんはこちらの樣子を見て取るが早いか、いやな顏をした。どうせここにも亦ゐ付かれさうではなかつた。

前以つて聽いてたのでは、この家はおもてと奥とに別れて、おもてのおほ旦那はお役人で、奥の若旦那はどこかの會社へ勤めるのだが、自分は奥の方へ使はれるのであつた。先づ、おもての茶の間に於いて、自分はおほ旦那夫婦のゐる前で若奥さんに引き渡された。

『まア、こツちへおいで』と、奥さんはこちらに向つて云ひ付けた。
『………』自分はそれに從つて長い廊下を曲つて行くと、また廊下が曲つてるその角の部屋に呼び入れられた。六疊の座敷だが、黑びかりのした机や、澤山の本を詰めた書棚や、大きな瀨戸のまる火鉢などがあつて、旦那のお部屋らしい。
奥さんは机の前の座ぶとんに坐わると、こちらに向いて、電氣の光に指輪が一つ光つてるその綺麗な兩手を火鉢のふちにかけ、
『寒いだらうから、お前もおあたり』と云つた。
『へい。』お竹は自分も寒いのだけれども、遠慮して固くなりながら、火鉢には近づきかねて、じろりと奥さんの方を見ただけで、自分の前かけのよこからぼろの出ないやうにばかり注意してゐた。
『今まではどこにゐたの？』
『どこにもをりません。』
『でも』と笑ひながら、『自分のうちがあるだらう？』
『うちもありません。』
『ぢやア、全くの獨り者？』
『へい。』

『子どももないの？』

『子どもはありますけれど、皆親不孝ばかりで――』斯うでも答へるより外はなかつた。如何にこちらが飲んだくれだツても、親を親とはすべきであるのに、どの子もどの子も申し合せたやうに、實は、相手にして吳れないのだ。

『それぢやア困るだらう』と、奧さんは氣の毒がつたやうな聲になつて、『でも、とまるところはあつたのだらう？』

『桂庵にとまつてをりました。』

『その桂庵が親類でもあるの？』

『へい――』斯うでも云はないと、あんまり取りとめがなささうであつた。

『ぢやア、桂庵は親類としてもお前の身元保證をするのだ、ね？』

『左樣です。』何とでも口から出放題に云つて置けばいいのだらうと思はれた。

『………』奧さんは、然し、一と安心と云つた風で、また『おあたりよ、遠慮しないで』と云つて吳れた。それから、年よりだツてかまはないから、ただ正直に働いて貰ひたいと云ふことを述べ立てた。

『………』自分は然しそんなことはどうでもかまはなかつた。うち合せてある桂庵があすやつて來た

時、奥さんが前借までをさせて呉れさへすればいいのであつた。ただその爲めに奥さんの機嫌を取つて置くつもりで、何げなくいい顏をしてゐたのだが、火鉢に出てゐる紫じみた模樣に橋の上の人間を書いてあるのが、さツきから、頻りに自分の氣に入つてゐた。で、これも奥さまの機嫌を取るつもりで、自分の兩の肱を膝の上に置いてから、顏と共に自分の左りの手を延ばして指さしながら、『これはいい繪です、ね、大高源吾でしよう』と云つて見た。

『どうして――?』奥さんは可愛らしい目を丸くして、不思議さうであつた。

『でも、大高源吾は橋の上と申しますから。』

『ほ、ほ』と、笑つてから、『そりやア、お前、支那の山水に支那の人間がかいてあるのだよ。』

『左樣ですか?』ちよツとその場はきまりが惡かつたけれども、その直ぐあとで、次ぎのそのまた次ぎの三疊で晩めしをよばれながら、獨りで考へて見ると、奥さんはまだ年が若いだけに浪花節の文句を知らないのであつた。それだのに、いい氣になつて、もう、おもての茶の間へ行つて大きな聲で笑ひながら、こちらの惡くちを云つてるのが聽える。が、そのおかげでこちらは遠慮なく御飯を十分に喰べることができて、からだが大分にあツたかくなつた。どうせ行けば御はんをたべられるのだからと云つて、桂庵ではいつも通りの膳を出して呉れなかつたのだ。

そして、三疊を出たところの椽がはの直ぐそとに附いてる流しで自分の喰べたあとの茶腕や皿を洗

つてると、やがて若旦那が歸つて來た。そして自分もちよツと六疊――果して旦那のお部屋だ――へ一挨拶に出された。

『やア、なんだ、今度は婆アやが來たのか？うちぢやア何でもいいのだが、正直に働いて呉れないと困るよ。』

『へい、かしこまりました。』斯うは答へて置いたものの、どこへ行つても、正直と云ふことが女中の仇名ででもあるやうに云はれるのを面倒くさかつた。自分をつれて來て呉れた桂庵のおやぢも、『この人なら正直でよろしいかと思ひます』などと云つてゐたツけ――。

『……』誰れに聽いて見たツて、ほんとうは正直ものなんかどこの世にあるものか？誰れでも皆つまみ喰ひをしたり、買ひ物の金を少しくすねたり、人が見てゐないと御飯を一ぜんなり二ぜんなり多くかツ込んだり。みなそれでとほつて來てゐるのである。それがいやならおいとまするだけのことで、また別なところへ目見えに行きさへすれば、それで一日なり二日なりづつの飯は喰つて渡れる。

こちらは、もう、色け拔きで、喰ひ氣に飲みけ一方だが、まだいやらしいところのあるのはここの奥さんで――旦那がどこかで飲んで來たのかして直ぐ醉ひつぶれてしまうと、おのれまでが醉ひ苦しくなつたやうに鼻いきを荒くして、旦那にお床を取つてやり、ついでにおのれまでも一緒に並べて、一

は、もう、あとができて、四五ケ月にはなつてるやうすでもあるのに。あの突ツ張つたお腹が小憎らしい！

けれども。自分も三疊で與へられた寢床へもぐり込んでから考へて見ると、使はれるにはさう面倒な家でもないらしい。第一、奥さんが浪花節を知らないほどうぶで、割り合ひに扱ひ易いやうだし。子供だツて、もう、多少うんこやおしつこを敎へるだらうから、今度のが生まれるまでは、さうおしめの洗濯も澤山は出なからうし。旦那と來ては、またこちらのあつらへ向きで、今夜のやうすでは隨分酒好きらしいから、うちにも酒の買ひ置きをしてあるだらう。して見ると、自分もそれを人の氣の付かないやうにちび／＼と盗み飲みができようと云ふもの。まア、旦那がたが置いてやらうと云ふなら、こちらはその氣になつてもいいやうな親しみが浮んだ。

さう思ふと、着のみ着のままでゐる自分のからだも、あツたまるに從つてらくに延びて行つて、いつのまにかよひからの夜中を一と眠りで過ぎてしまつた。

お寺でするやうな木魚の音がぽこ／＼とし初めたのに目がさめて起き出たのだが、先づ、そとの流しもとの隣りに當るところの戸ぶくろへ七八枚の雨戸をくり込んだ。それで旦那がたの寢てゐる部屋の一方の四枚障子も明るくなつたわけで――ついでに、また今一つの一方をも明けにかからうとした。が、この方の椽がはがおもてのにも眞ツ直ぐにつづいてゐて、戸が兩方から眞ン中の戸ぶくろへ這入

ゐやうになつてるので、向ふのが這入つてからこちらのを入れる順序だと、ゆふべ奧さんから聽かせられたことを思ひ出した。ところが、向ふの女中も起きてるやうすでありながら、一向にまだそこを明けないので、こちらもそのままにして置くことにした。が、さう云ふことに付けても、奧とおもてとの別々な女中の關係に込み入つたことができて來はしないかと案じられた。

ゆふべは戸が締まつてから來たので、そとの具合ひが少しも分らなかつた。が、この鍵なりに曲つた椽に添つた鍵なりの庭は、幅二間ばかりで竹を割つたのでできた垣根に仕切られて、そのそとはお寺の庭になつてるらしい。少しあひだを置いてお寺の家根がこちらをのぞいてゐる。椽のかどなる柱につかまつて右の方を見あげると、こちらの家根に半分は邪魔をされながら、八幡さまの山が見えてる。何げなく、その山に見える杉の木の數を一本、二本と數へ出してゐたが、氣がつくと、旦那や奧さんの寢てゐるお部屋の前なので、おそる〳〵そこを離れた。そして椽のつき當りで戸ぶくろのかげにある釜のしたへ、云ひつかつた通りに、瓦斯の火を付けた。まだ不慣れの爲めにほかの用事をどう云ふ風にすればいいのかも分らず、且、障子のそとで而も板の間に坐わつて、朝の寒い風に吹かれてるのだから、からだがちぢこまつてただ兩手を火の方に近づけて行くばかりだ。そして頸だけを左りへ向けて小さい流しを返り見ると、ままごとでもしてゐたかのやうに取り付けられてゐて、大きな手桶でも置けば、それ一つで一杯になりさうで――とても、らくには食後の洗ひ物もできさうでなかつた。

一體、井戸はどこにあるのだらう？おもてのと一緒な便所へ行つた時に、そのそとの方でどこかの人の水を汲む音がしてゐたが、こちらもそこまで行くのだとすれば、ここの木戸を庭からそとへ出て、おもての玄關や臺どころの前をまわつて行かねばならぬ。まことに厄介なものだ。この町なかでありながら、まだ水道も引けてないのであらうか？

『婆アや——婆アや！』旦那のお聲であつた。

『へい。』答へて行つて椽がはに坐わつて、そこの障子を明けると、奥さんが今衣物を着かへるところであつた。めりんすの腰卷きがぷツとふくれたあたりまで見えた。

『向ふへ行つて、〇〇新聞が來てゐたら取つて來い。』

『へい。』もう、實際のところ、何ゲ月だらうと云ふことに氣が取られてゐたので、返事はしたものの、旦那さんが何と云つたのかはツきり分らなかつた。が、確か『ヨメ入り新聞』と云つたやうであつたので、その通りをおもて茶の間へ行つて、そこから自分の見すぼらしい姿を隱すやうにして、臺どころの朋輩に聽いて見た。すると、これも飯を焚いてる新らしい朋輩は

『ほ、ほ、ほ』と笑つた。そしてこちらを馬鹿にして、『ヨメ入り新聞なんかありませんよ。』

『………』ぢやア、何だらうと思つて、自分は引ツ返さうとした。

『ヨミ賣り新聞でしよう。』

『………』踏みとまつて、『ぢやア、それが來てをりますか？』

『それなら、あれを持つてお行きなさい』と、同じ朋輩でありながら、飽くまで年よりを馬鹿にして、あごで以つて人に云ひ付けるやうなことを云つた。

『………』こちらは自分でそれを手に取るが早いか、ちよこ／＼と引ッ返して來て、再び障子を明けて旦那の枕もとにさし出し、念の爲めに『これでございますか？』

『ああ、さうだ／＼。』

『………』自分には、旦那はなか／＼ちよくな人に見えた。が、奥さんはこの時釜の前に行つて、何かを氣にしてゐるやうであつた。何が何だツて、めし焚きに來たものがめしの焚きかたに間違ひなんかあるわけがないのに――。

『お早うございます。』

『ちよいと、ね、そこの庭下駄をはいて、顏を洗ふ水を汲んで來ておくれ。』

『へい――』果してそこから井戸へまわつて行くのであつた。だから、井戸ばたで出會つたよその女中に向つてだが、『この邊はけち臭いところだ、ね、水道も引かないで』と云つてやつた。すると、その女中は生意氣にも、

『水道は引かないでも、この井戸の水はいいことよ』と答へた。『夏になると、近處から皆わざ／＼貰

ひに來ます、わ。』

『……』自分には、それが餘ほど甲斐性なしの女だと見えた。こんなところに半歳なり一年なりつづけてゐたらしい。自分なら、水のよし惡しよりも水を汲む不便さの方を先づ考へる。半歳が一ケ月でもいやなことだ。それに、その女中も、またおもて向きの女中も、皆こちらの婆ばかりをじろ〳〵と意地惡さうに見るのが憎らしかつた。

『婆アやはあんまりひどい風をしてゐるぢやアないか？いよ〳〵ゐるときまつたら、何とかしてやらなけりやア』と云つた旦那は　こちらが先づ中の間（これも六疊だ）の掃除をしてしまうと、そこで奥さんと一緒に朝の食事を初めた。

『……』おみをつけのあツたかいところが障子越しにぷんとこちらの鼻にもにほつて來ると、この寒い朝をも却つて溜らなく賴母しくなつたが、それをじツと辛抱してからだをかぢかませながら、そのあひだに他の部屋々々をも掃除してしまつた。そして旦那が勤めに出て行つてから、自分も朝めしにありつくことができた。そして食事をしてゐるあひだばかりは、そこにしか自分の落ち付く世界がないやうに思はれた。その上、一つ都合のいいことには、家の向きが東にひらけてるので、寒いと思つた椽がはも、段々と日あたりがよくなつた。

少しほか〳〵し出した太陽の光に照らされながら、皿小鉢を洗つてしまうと、今度はおしめの洗濯

を云ひ付けられた。それも覺悟のうへだからかまはないが、旦那に比べては、奥さんの方が大分そツけないやうに見える。旦那に向つてはよくべちや／＼おしやべりをしてゐながら、こちらに向つてはあんまり言葉が少いので、ゐて呉れいと云ふつもりか、それともゐないでもいいと云ふのか、どちらとも分らない。もう、云ひ付けることがないとなると、子供を抱いたまゝ、中の間の障子は明けツ放しにして、そこの後ろふすまを明け立てして出て行つてしまつた。そのふすまの後ろは押し入ればかりかと思つてたら、半分はおもてへ拔けて行く通り道であつた。それが明いた時にちよツとこちらから見たところでは、狹い女中部屋らしいのが一つあつて、そのさきが玄關のあがり口で、そのまたさきがおもて茶の間だ。して見ると、若しおもての女中が夜なかにそこからこちらへこツそり這入つて來て、こちらの物を盜んで行つても、ちよツと分らないかも知れぬ。そしてその罪をこちらに着せたツても――。

　何はともあれ、こちらはこの時だと云はぬばかりにこツそり誰れもゐない中の間へ庭からあがつて行つて、茶簞笥やら半間の戸棚やらを明けて見た。ゆふべの旦那の醉ひつぶれがいまだに羨ましくツて、うちにも酒を買つてあるかどうかを知りたかつたのだ。せめては、燗德利のすがたをだけでも見たかつた。そのにほひをだけでも嗅いで見たかつた。が、德利は一つあつても酢が這入つてゐた。四合入りの瓶には醬油があつた。そしてその他には酒を買ひ置くやうなうつわもなかつた。こしこまで

望したと云ふよりも腹が立つて、その腹立ちまぎれに、茶箪笥の方の菓子皿に三つ四つ蒸し菓子が殘つてたその一つのかの子餅を盜み出して、ぱツくりと口へ入れた。そして長火鉢のそばへしやがんで、手當り次第の湯呑みでお湯をぐツと呑んだ。と云ふのは、あまり急いで菓子をまる呑みにしたので、胸につまつたからだ。それから、卷きたばこの吸ひさしでもないかと、隣室のまる火鉢へ行つて見たけれども、吸ひがらのかげさへもなかつた。そして奥さんがいつのまにか倚麗に灰をならしてあつた。

『うちの旦那は倚麗ずきだから、ね』と云はれたことを思ひ出すと、自分はまだ起きツ放しで顔を洗つてゐないのに氣が付いたが、どうせ自分の手ぬぐひはなし、且、今ごろになつて井戸へ顔を洗ひに行くのも臆劫であつた。

『……』その癖、おしめを洗ひに井戸ばたへ行つたのだけれども――。そして洗ひ物を庭へ來てどこへ乾したらと考へた末に、鍵の手の隅をえらんだ。眞ツ隅に向つて、その左り手の梅と右手の松とへさを竹を渡して、それへ一つびとつおしめを廣げてかけた。赤ン坊がうんこやおしつこをしないものなら、面倒くさくないが――まだぷんとくさいにほひのしさうな物が寒い風にひら〳〵するのを見ると、色のさめ切つた萬國旗とやらのやうだ。自分の子どもさへ親不孝に育つものを――馬鹿々々しい！

竹垣のちよツとした明きへ行つてそのそとをのぞいて見ると、果してお寺の裏椽に年よりの坊主がつくねんとしやがんで庭を見てゐた。何が面白いのだ、死人を扱つたり、お經を讀んだりして？それでも、こちらの一番いやな、いやなお墓と云ふ物はないやうだ。然し氣のせいか、線香のにほひがして來た。そしてげろを吐きさうになつた。ああ、自分はどんなに喰へなくなつても、人のやうに死にたくはなかつた。けがらはしい、ペツと、横を向いてつばきをしたとたん、自分の後ろの椽ばなへ奥さんが默つて來てゐるのに氣が付いた。

『何をしてゐるのだ、ね、福壽草の芽を踏んでしまつて！』

『へい、すみません。』梅のした枝をくぐつて垣根から離れ、そのあとへ自分の目をやつて見ると、ちよツと小高くなつてるところにぱツと葉をひらいた二三寸ばかりの太い草のくきが六七本あるうち、三四本は踏みたたくられてゐた。自分は顔を赤くしただけではすまないやうに思へた。

『旦那さまがお歸りになつたら、お叱りになるぢやアないか？』

『すみません。』

『それに、お前、折角つぼみを持つてる梅の枝にそんなことをして、若し折れたらどうする、え？』

『では、どこへかけましよう？』自分は恐れ入りもしたし、またどうしていいか分らなくなつた。

『あツちへ乾すのだよ。』

『…………』自分は子を抱いてる奥さんがあごで示めした方へおしめをさをのまゝ持つて行き、一方を木戸のうへに載せ、他の一方を少し低い垣根の上に出てゐる棒のまたへかけた。

『さう――いつもさうしてお呉れよ。』

『…………』して見ると、もう奥さんも自分を使つて呉れる氣でゐるのか知らん？けれども、自分の方でこんな抹香くさいお寺のあるところなど考へ物ではなからうか？また、こんなにきちようめんらしいところは？それに、自分は少しも酒ツ氣のないところには一日もゐられないのである。

私かに待ち受けてた桂庵は、おやぢの代りにおかみさんがだが、午後になつてやつて來た。それも、こちらの知らないうちに、話をあらましおもての方で相談してゐた。こちらが呼ばれて行つて、おほ奥さんと若奥さんとがゐる前にきちんと坐わつて左りの手を疊へ突いてると、桂庵のかみさんが云ふには、

『こちらさまではお前さんでもいいとおツしやつて使つて下さるおつもりですが、ね、桂庵賃の立てかへをしてあげる上に、また前借と云ふわけには行かないとおツしやるのです。』

『さよですか？』ぢやア、仕かたがないぢやアないかと云ふ意味をおかみさんには目で知らせるつもりであつたが、おほ奥さんの顏がおそろしかつたので、却つてにやりと、自分でも自分の齒ぐきまで出たと思はれるほど口びるをひらいて、わけの分らぬ笑ひかたをした。

『ここは相談ですが、ね、お前さんも前借なんか云はないで、その方の金はさきへわけを云つて待つて貰ひ、段々とお給金から爲しくづしして行くことにして、こちらさまに辛抱して置いていただくとしたら？』

『………』こちらには、おかみさんもなかなかうまいことを云ふと思へた。おのれのところを、さきなどとそらとぼけて。こちらは、然し、それならそれでもいいのだ。『では』と、自分の顏をした手に出して、『さう致しましようか？』

『なんだか、たよりなささうな返事だ、ね』と、若奥さんが笑ひながらこちらを眞綿責めにして來るやうにこちらには取れた。『お前がいやならいやでもいいのだよ。』

『いいえ』と、つい、手ツ取り早く云つてしまつた、『置いていただきます。』この時、ちよツとおもい肩がぬけたやうに氣の輕くなつたのをおぼえたが、またにやりとして見せたのはこちらがそれを喜ぶ爲めでも何でもなく、ただ向ふを少しでも喜ばせるつもりであつた。

『確かか、え、さう云ふのは』と、今度はおほ奥さんがこちらを見つめて口を出した。『お前の心がほんとうに承知してゐないで、ただほんの當座のでき心で返事されてゐたのぢやア、あとで直ぐこツちが困りますから、ね。』

『そりやア、こちらさまのおツしやる通りですよ』と桂庵のかみさんもこちらにのしかかつて來るやう

に、『お前さんが落ち付く氣でゐないと、こちらさまもお困りですし、またお前さんの借金も返せませんから、ね。』
『では、落ち付くことに致します。』何となくいま〱しかつたけれども、仕かたがないので自分もさうきめた。それで桂庵とこの家とのあひだに契約とかができた。そしておほ奥さんからその着ふるしだと云ふ綿入れを一枚貰つて、自分の不斷着にすることになつた。安く見つもつても、日に五合づつを十日間は確かに飲みつづけることができる品だと考へられた。今一つ、手ぬぐひを貰つた。
『ぢやア、早速それを着てお湯に行つておいで』と、若奥さんが云つた。
『……』自分だツて、さツぱりした着物を嬉しくないことはなかつた。そしてお湯の歸りには頻りに喉が渇いてたばこが吸ひたくなつた。が、自分の持つてるたばこ入れにはこなさへも吸ひ殘つてゐないのが分つてゐた。
『婆アやがにこ〱して歸つて來たよ』と、おほ奥さんが云つた時には、こちらはおもての勝手ぐちからあがつてそこの茶の間へ這入つてゐた。少しいい考へが浮んでゐたからである。
『ただ今』と、矢ツ張りにこ付きながら挨拶してそこに坐わり込むと、呑氣さうに長ぎせるからけぶりを出してるをほ奥さんに向つて、わざとだが、こちらも自分のきせるを出してたばこをがん首に詰めようとした。そして底をはたいても無いものは無いことを見せた。

『ないのか、え、お前のには？』

『へい――』思ふ壺へ直ぐ這入つて來たとは思ひながら、口びるをひらいて氣の毒だと云ふ心持ちをまぎらした。

『………』おほ奥さんは親切さうに笑ひながら、『少しあげよか、ね？』

『恐れ入ります。』こちらは一日でもこれで凌げさへすればいいのだ。この次ぎにはまた何とかなるであらう。それにしても、さすがは年が行つてるだけに、若奥さんとは違つて、いろ〳〵に行き屆いてる人のやうに思へて、これからまた何かとねだりを云へさうであつた。入れ物につめて貰つてから、今一度『恐れ入ります』を繰り返して、やツと最初の一服にあり付いた。それが溜らなくうまかつたので、なほつづけざまに三四服をやつた。久し振りで湯に這入つてゐた氣持ちものんびりして惡くはなかつたけれども、このあまいやうな、また氣の遠くなるやうな味はひには及ばない。いのちがそれだけ延びたやうである。

『お前は餘ほどたばこを好きのやうだ、ね。』

『へい。』ただ然し笑つて答へた。

『ぢやア、お酒の方はどうだ、ね？』

『飮みません。』その實、然し、湯錢を以つて酒屋へ立ち寄らうかとも考へたのであつた。

その時は、若旦那はしらふで歸つて來て、またしらふで食事をすませた。これでは酒のにほひさへも嗅げないから、こちには餘り張り合ひのない家であつた。いツそのこと、おもての女中さんと入れかはりになつて呉れたら都合がよからう。おほ旦那は毎晩お酒をあがるやうすだから、たまにはおつき合ひもできようし、また人の寢しづまつてから、買ひ置きの酒をぬすみ飲みすることもできようと云ふもの。

來てから三日目には、またちよツといい思ひ付きができた。丁度、赤ちやんをおんぶさせられたのを幸ひ、たばこを買つて來たいからと云つて、その五匁のお代をおもてで借りた。そしてそとへ出てから、前に見て置いた酒屋をさして急いだ。が、それは餘りに目に立つところに在つた。主人の家は八幡町だが、我善坊の通りにあつた。その通りを西の久保通りへ突き當るところに自分らの行く湯屋があつて、その筋向ふに當つてるから、人目につき易かつた。で、もツと目に立たぬところはないかと思つて、飯倉の四つ角の手まへまで來ると、右手に當つて一ケ所丁度都合のよささうなのを發見した。そしてそこの繩のれんをくぐつたのである。

すると、樽やら壺やら瓶やらに詰めてあるいろんな酒のにほひが一度期にこちらの鼻を突いたが、かの七色だと云ふ虹の色がそれぞれに見分けられるやうに、このにほひも亦それぞれに自分には嗅ぎ分けられた。そしてそのうちの何を飲まうかと迷つて、ただにこ〳〵してゐると、そこのおかみさん

が

『何をあげましよう』と尋ねた。

『たツた四錢しかないのですから』と遠慮しながらも、なほ迷ひながら、『何か早く醉ふのがいいのですが――』

『では、泡盛りは？』

『泡盛りはさめ易いし、ね――矢ツ張り、燒酎を貰ひましよう。然し、これからまた度々來ますから、うんと負けてお置きよ。』

おかみさんが承知してそれをコツプについで呉れてるあひだにも、こちらの喉はぐびり、ぐびりと鳴つてゐた。そして背中に忘れられてた赤ン坊が泣き出したのを、

『どこのお子さんですか』と聽かれたのをさへうるさがつて、

『つい、そこのですが』と答へた切り、肩を一とゆすりして、『えい、やかましい餓鬼だ！』

それから、直ぐそばの石段を八幡やまへ登つて、醉ひのさめるのを待つた。が、山の横手から見おろすと、主人の家もその前なる醫者の家のかげに見えるのが、却つて、氣持ちがよかつた。どうせこ
こにゐるのは分るまいと思へたからである。

『この寒いのに、どこへ行つてたの』などと若奥さんが叱るだらうが、まだ物の云へぬ子であるか

ら、告げ口のできる筈はなかつた。
　その翌日はまた、湯錢を落したからと云つて、湯へはただで入れて貰ひ、その分だけを同じ居酒屋へ行つて飲んだ。が、それ位では顏へ出ないのを幸ひ、そのまま知らぬふりをしてゐた。すると、晩になつて、若旦那が風を引いたやうすであつたので、わざ〳〵忠義ぶりを見せる爲めにそのお部屋へ行つて、
『旦那、玉子酒をしておあがりになつたら、直ります』と勸めて見た。
『さうしようか、な、お花』と、旦那はそのそばに附いてる奧さんに相談した。まだ寢はしないで、火鉢にかじり付いて、鼻ごゑを出しながら寒い〳〵と云つてゐたのだ。
『ぐツと飲で』と。こちらは自分で、もう、から喉を鳴らしながら、『おやすみになつたら。』
『ぢやア』と、奧さんもその氣になつて、『お酒を一合買つて來てお呉れ。』
『かしこまりました。』われながらこの返事がいつもよりも勇ましく聽えた。寒いのはこちらも同じなのだけれども、それを樂しく辛抱して、奧さんの出して呉れたから德利と共に自分の胸を兩の袖に抱き込んで角の酒屋なる伊勢屋まで行つた。
『いつも、うちで取る一番いいのを、ね』と云つた奧さんの物ごしまでが、今夜に限り、なつかしく思はれると、丁度今自分と一緒に酒屋に落ち合つたどこかの丸髷——お味噌を買ひに來た——を奧

さんに比べては、器量も惡くまた下品らしく見た。で、そんな人のゐるには頓着しないで、番頭さんに向つて、

『これからわたしがお使ひに來るのだから、少しお飲ましよ』とねだつて、たツた五勺ばかりをだが飲ませて貰つた。

『立派な手ぎはだ、な、お婆アさん、あんたはなか／＼話せるわい』と云つて、番頭さんはこちらの肩を叩いた。

『………』ぢやア、もツと飲ませてお吳れよとも――初めてだから――云ひかねて、今度をまた樂しみにしてそこを出た。そしてその歸り道の暗いところでちよツと立ちどまり、あたりに人が見てゐなかつたのを幸ひに、德利の口から口うつしにし一と飲みした。それから醫者の家の門前をとほつて、その直ぐ横手へ這入ると、直ぐうちのおもて臺どころの隅についてるそと電氣の光に照らされたけれども、今一度立ちどまつて今少しばかり飲んだ。そしておもての勝手口からあがり、おほ旦那もゐる茶の間を急いで挨拶もしないで横切り、玄關わきの女中部屋から中の間へ這入つた。

『寒かつたらう、ね』と云つて、旦那のお部屋から出て來た奥さんに、こちらの買ひ物を暗い椽がはで渡した。すると、都合のいいことには、奥さんは、もう、用がないから休めと云つて吳れた。

『………』いい心持ちで寢どこへ這入れたのだ。考へて見ると、こんならくなところは恐らくまたと

はなからう、この上には、赤ン坊が大小便をたれなくなり、毎朝、早くからいやなぽこ〳〵木魚が聽えさへしなけりやア――。

あすの晩も、あさつての晩も、かうして泰平樂の夢を見てゐられればわけのないことだ。醉つて寢た夜に限つて、必らずおもしろい夢を見る。これはどこへ行つてもであつた。自分はずッと以前、二三十年も前にだが、ひどい因業なしうと、しうとめに苦しめられた。そんな人々も死んだし、また同じやうに因業な自分のつれ合ひも死んだ。生き殘つてるのは、もう、自分ばかりだから、結局、のん氣なのだが、――昔の生きてたあひだはなか〳〵のん氣ではなかつた。苦しいばかりであつた。その苦しみを夢ではあべこべに自分がやり返すのであつて、――それが面白いことには――自分の主人が自分の息子になり、その奥さんが自分の嫁になつて、自分と息子とでその嫁をいぢめるのだ。

息子としては餘りわけの分らぬことを云ふやうだが、その可愛がつてる女に向つて、かげかたちのありもしないことをつかまへて、

『お前がおツ母さんに楯をつくやうなことをするからいけないのだ』などと叱り付ける。もちろん、前以つてこちらが焚きつけてあるからだ。

『……』嫁は何も云はずに、直ぐと泣き出してしまう。すると、こちらはおお奥さんのやうに取りすまして、長ぎせるを長火鉢にぽんとはたいて、待つてゐましたと云はぬばかり威だけ高になつて、

『子供ぢやアあるまいし、泣いて威したツて、そんなことぢやアちツともこたへはしないよ』と云ふ。

『……』主人の奥さんなる嫁がます／＼ただ泣きつづけるのをこちらはぢツと見てゐて、如何にもここちよいのである。

時には、また、自分の子どもが皆親孝行になつて歸つて來る。そしてそれぞれにうまい酒を自由に飲ませて呉れたり、赤いさしみを競爭で買つて來たりする。そんな間は人間もまことに愉快なものだ。

そしてその夢がさめた時はちよツと不愉快な氣がするけれども、すツかりさめてしまふと、また、何でもない。自分ひとりが好きなことをして生きて行けさへすればいいのであつた。そしてその好きなこととは酒とたばことの外になかつた。

「伊勢屋の番頭さんに聽くと、爺アやは大相お酒を好きだと、ね』と、その後二三日してから奥さんに中の間に呼びつけられて云はれた時には、こちらもちよツとぎよツとした。けれども、ただうち消して置きさへすれば、それでいろんな面倒は免れられると思つたから、胡麻化し笑ひをしながら、

『お酒は飲みません』と答へて、長火鉢のふちを兩手でわけもなくこすつてた。が、實際には、これがただのうち消しであるか、それとも以後は愼みますと云ふ詫びか、自分ながらどちらとも分らな

かつた

『若し好きなら好きで、お酒の取れたお給金で飲むのは、それもたまには、構はないけれど――』

『…………』自分のお給金が取れた上で、自分がそれでお酒を買つて飲むのをまで奥さんにつべこべ云はれて溜るものか？自分は一ケ月分の給金が取れると、直ぐひまを取つて、ふところがからツけつになるまで飲み歩いたことも度々である。僅かに三圓や三圓五十錢のことだけれども、それを使つてる間には、酒の上で知り合ひになる男どもからも振舞はれることがあるので、それだけはまた飲み歩く費用が省けて日にちが延びるわけだ。が、大抵は先づ五日と續かなかつた。

『うちにゐる間は、出入りの商人などのところへ買ひ物に行つても、餘りいやらしいことはして貰れでないよ。』

『へい――』

『うちの名にかかはるから、ね。』

『…………』そんな名にかかはるやうな卑しいことをしたおぼえはない。駄賃に飲ませろと云ふ位のことは、女中として當り前ではないか？

『それに、お前はうちのおツ母さんがよくして下さるにあまへ込んで、度々たばこを頂戴したさうだが、ね、如何に同じうちでも、別れてゐる以上は、こツちの女中も少し遠慮して貰はないと困りま

す——おもての御夫婦に對してわたしの落ち度になるから、ね。』
『すみません』と、ほんとだから、ちよいとあたまを下げたけれども、矢ツ張り自分は當り前のやうに笑つてゐた。年の行かない癖に、この年寄りをさう叱つてゐて見ろ、やがて、こちらが例の夢を見る時には、その仕返しとして、こツぴどくまた泣かせてやるから。
こないだの晩だツて、見ろ！餘りにその亭主とばかりべちやくちや云つてるのを責めてやつたら、さんざん泣いたあとで、涙をふきながら、
『これから愼みますから、許していただきたい』と詫びたぢやアないか？赤いてがらまでゆれてたその時のいぢらしさを思ふと、然し、こちらは今でもおほ奥さんの代りになつてる氣がして、この若奥さんを自分の嫁として小憎らしくもあり、また可愛くもあつた。が『たばこ錢がなければ、それ位はわたしが立てかへて置いてあげるから』と云はれたので、再び自分はうつつに返つた。
『では、早速ですけれど——どうぞ』と云つて、二十匁代金を渡して貰つた。そのうちから、ほんとうはたツた四錢の小ぶくろを買ひ、あとのすべてを以つて酒屋へ行つた。角の伊勢屋ではまたその番頭の口がうるさいと思つたので、八幡山したのへ行つたのだが、ここへは、もう二三度も來慣れて、顏をよくおぼえられてゐた。そして、
『また燒酎ですか』と云はれた。

『馬鹿にしてお呉れでない』と、少しおこつて見せながら、自分の右の手へ握つてた白銅と銅貨とをざらりと投げつけるやうに、正面の立つて飲む飲み臺の上にさらけ出して、『けふはこれでも人並みのを二合は飲ませて貰はないと――』十分負けて呉れろと云ふ意味をも含めてだが――さうだ、ここへはいつも僅かの買ひ物代からくすねたのを持つて來るので、少い分量で成るべく多くの醉ひを買ふには燒酎でなければならなかつた。が、二合も飲ませて呉れるのなら、人並みの方がいいのである。

『お前さんのことなら負けてあげるのはかまはないが』と、おかみさんはそれでもこちらへ敎へて呉れたには、『こんな時間にさう飲んで、お前さんの化の皮が主人にあらはれてしまつちやアおしまひだぜ。』

『それもさうだ、ね。「こちらもさう云はれて見ると、これはあとの樂しみにした方がいいやうだ。』『ぢやア、寢酒に持つて歸らうか知ら?』

『さう。その方がいいだらうぜ。さうしてまた奥さんをいぢめる夢でも見る、さ――どうせ浮き世は三ぷん五厘だから、ね。』

『……』どちらにしようと考へてるうちに、こちらがいつも醉ふとしやべり出す夢のことや洒落を向ふから云はれてしまつた。『えい、仕かたがない!ぢやア、容れ物を貸してお呉れよ、あのお燗徳利でも。』

自分で足を運んで、奥の方の德利立てにさかさまにさし並べて立てられてる燗德利の一つを取つて、それにブリキのじようごを載せた。そしてそれを、おかみさんがちよツと傾けた五合桝へ樽酒を拔いてるところへ持つて行つた。

『さうあせらないでも負けとくよ』とは云はれても、なほ少しでも多くなつて呉れるといいと思ひながら見てゐると、おかみさんの口分量は確かなもので、桝のすみからじようごへ這入つて行く酒が德利に溢れて殘るまではありさうもない。そしてみんな入れてしまはせるのが惜しくなつた。

『もう、いいよ』と云ふが早いか、そばのコツプを取つて、最後に桝に殘つてるだけを横取りして、ぐい／＼と飮んでしまつた。

德利には木のふたをしツかりして貰つて、それをふところのうちがはから帶の下に押し隱して歸つて來た。この帶と云ふのは、今の主人の前の、そのまた前の主人の家で、これもまだ若い奥さんのおふるを貰つたもので、牡丹色の繻子だが、糸がぼそ／＼によれたり、拔けたりしてゐる。それの下に德利を隱しておもての勝手口からあがつたのだが、まだ歸つてゐまいと思つてたおほ旦那が、そこの茶の間の火鉢に向つて坐わり込んで、長い口ひげだらけの顏をあげてこちらを見た。おほかたは商賣家ばかりを渡つて來たものには、見慣れてないので、その胡麻鹽ひげの長いのが何となく初めからおそろしかつた。まして今は隱し物があるので、思はずからだがすくんで、ぺたりとその場に坐わつて

しまつた。そして
『ただ今』と云つて、わるあわてにお辭儀をしたとたん、お腹と帶とに押し詰められた物が私かに音を立てて毀われた。あツ、しまつたと思つたが、もう、何の役にも立たなかつた。直ぐ、からだのそとから、ひや酒がお腹にまで滲みて來た。が、何はさて置き、坐わり小便を垂れたのだと見られては困ると思つた。その爲めに變な顏をしたと見え、おほ旦那がすかさずこちらに向つて、然し心配さうに、

『骨でもくじいたのぢやアないかい、ぽきツと云つたよ。』

『いいえ――』まだもじ〳〵してゐたが、溜らなくなつたので、『お藥の瓶がこわれたのでございます』と胡麻化して立ちあがつた。そしてじく〳〵帶の下を帶の上から押さへたまま、玄關わきの部屋をとほつて奧の椽がはへ逃げて來た。

この時、丁度、若奧さんが椽がはの方からおもてへまわつて行つたので、その留守を幸ひに手早く帶をほどいて見た。ばら〳〵ところがり落ちた德利のかけらをいま〳〵しいけれども――大小とも一緒にかき集めて椽の下へ投げ込んだ。それから、自分の襦袢のすそや腰卷きのうへの方に滲み込んでゐる汁をかた手で押し搾つてかた手に受けたのを、一とすくひ、自分の口へ持つて行つた。そして今一とすくひしてゐる時、若奧さんが中の間へぬけて來て、

『婆アや』と聲をかけた。『藥を買つて來たツて、俄かにお腹でも痛むのか、え』

『………』急いで帶を締めながら、『大したこともありません。』

『こぼした藥を買ひ直すなら、おあしはあげるよ。』

『もう、よろしうございます。』

ふと氣が付くと、だら〳〵としづくのあとが附いてゐる。それを椽がはからふき初めて、雜巾で以つてふいて行くと、おもての女中部屋までは、もう、向ふからふけてゐた。おもて女中はなか〳〵意地が悪いので、手早くこちらへ當てつけたのだらうと思へた。

兎に角、燗德利の姿は見せなかつたのだからまさか皆も酒であつたとは思ふまいと、こちらは高をくくつてゐた。晩になつて歸つて來た若旦那も、この話を奥さんから聽かされてゐながら、別にこちらを叱りもしないで、

『どうだい、婆アやのはら痛は、もう、直つたかい』と云つた切りだ。

『………』あのおほ旦那のとは違つて、この若旦那の短く切つたうはひげを寢床に就いてから思ひ出して見ると、丸でおツちよこちよいのやうで、まことに扱ひ易い。それだけにまた可愛くツて、夢の中での自分の息子にするには持つて來いの役者だが、思へばけふは如何にも殘念なことをした。ひやでただ腹の皮に滲みてさへいい氣持ちであつたものを、斯う横になつてからぐツと飲んで、腹の中か

らほツこりとあれだけの醉ひが出て來て見ろ。またいつもの泰平樂であつたものを！

　はだに附いて來た襦袢の裾を鼻のさきへ持つて行つて嗅いで見ても、もう、自分のあかのにほひの爲めにアルコオルの氣は拔けてゐた。こんなことなら、いツそのこと、あの居酒屋で思ひ切つて飲んで置いたらよかつたのにと思ふと、今やただ殘念と手持ち不沙汰とに鼻の神經が冴えて行つて、喉がから鳴りをし初め、特別に腹がへつて來たやうだ。そして苦しいほどに空熱が出て眠れなくなつたには、一つのまとが自分の目さきに見えてゐた。それはほかでもない、おもての臺どころ戸棚には、いつも一升入りの瓶があつて、多少の酒が這入つてることだ。無くなればまた買つてある。それはちよく／＼勝手の手傳ひを賴まれた時に見て置いた。

　そして二時の音を聽いてから、とう／＼そこへ自分のからだを潛めて持つて行つたのである。が、ごと／＼させたと見えて、おほ旦那が茶の間の奥の部屋からいつのまにか起きて來て、

『誰れだ』と云つた。

『わたしです』と、びツくりして答へた時には、手ぢかの茶碗を一つ攫んでゐた。そして直ぐ流しもとへ下りて氷かかつてる手桶の水をすくつた。

『何をしてゐるんだ？』

『喉がかはきましたので――』これはうそでも何でもなかつた。酒のつもりでそのつべたい水を一と息に飲みほすところを見せてから、そこ〳〵に逃げて來た。

もう、よんどころなく往生して、一と眠りしたが、その明くる朝になつても、何かに付けて思ひ出すといま〳〵しいことばかりであつた。今夜は一つ、こちらから賴んで湯にやつて貰つて、湯屋のおかみさんから少し飲み代を借りてやらうと、それをばかり一日の樂しみにしてゐた。すると、午後の二時半頃になつて、現金を持つて買ひ物に出されたのが案外の仕合せであつた。そのまま、例の居酒屋へおほ意張りで飛び込んだ。

『おかみさん、けふはうんと飲めますぞ、えー――熱いのにして貰ひます、あの燗に、ね。』

『大相な景氣らしいが、大丈夫ですか？』

『………』いつものやうに立ち飲み臺などには向つてるつもりがないので、ずん〳〵店の奥へ這入つて行つて、帳場に主人が坐つてるそのそばなる疊へ腰をかけたが、自分よりもそとの方に立つてて自分を見てゐるおかみさんに、『大丈夫とも、さ！お札を持つてるから、ね。』

『おかねのことを云ふのぢやない、お前さんの爲めを相變らず思つて、さ。』

『爲めを思つて呉れるなら、たまにはゆツくり飲ませてお呉れよ、きのふからいま〳〵しいことばかりあるんだから、ね』と云つて、借りて行つた德利を抱きつぶしたことや、襦袢に滲み殘つてた分を

一とすくひだけ搾りすくつて飮んだことなど、手がら顏にしやべり立てた。
『お前さんにしちやア、成るほど、浦島の玉手箱をこわしたも同樣だから、ね。』
『さう、さ、ね、察してお呉れよ。』
『飮み氣一方のお婆アさんだからいいやうなものの』と、口數の少い主人も笑つた、『これが若い娘のしくじりででもあつて見りやア、全くの色消しだア、な。』
『ほんとに、さ』と、こちらも一しほ調子に乘つてゐた。そしてあつ燗を獨りでちびり／＼やりながら、自分の使はれてる主人夫婦が『子供も一匹ある癖に、』『まだからツけつ、たわいの無いものであることなどを語つて、肴のかはりにした。そしてその方のはなし種が盡きると、また伊勢屋の番頭の惡くちや、お湯屋の娘の人好きがしないことや、その他、この八幡町内に於ける自分の知つたこと知らないことを皆と一緒になつて語り合つた。
　そして大高源吾は橋の上と云ふ文句を、しやがれ聲を眞似してうなり出すことが二三度に及んだ頃には、お燗を三本平らげてゐた。主人の酒を買ひに來た若い女中には惡くちを云つてからかつたし、立ち飮みして行く男には、まア、こちらへ這入つてゆツくりやつて行けなどと聲をかけた。が、――
『もう、それ位にしてお置きよ。』おかみさんに斯う云はれたので、折角一本立ちになつてる興を折られてしまつた。

『かねがないと思つて飮ませないのなら、またよそへ行つて飮んでやる！さア、つりをお吳れ！』牡丹色の帶のあひだから、そこへ前以つてしツかりと挾み入れてあつた一圓札を出して、おかみさんに突き付け、自分の飮んだだけを差し引かせた。そして『もう、二度と再びこんなところへ來やしないぞ』などと棄てぜりふを云ひながらそとへ出ると、いつのまにか夜になつてることが分つた。暫らく大道の眞ン中に立ちどまつて考へると、どうせ直ぐには歸れない。そして左りへ行けば見つかるかも知れないので、右の方へ坂をあがつて行つたのだが、寒い風が顏に當るのが却つて氣持ちよかつた。

ふら〳〵と、ふところ手をして步きながら、坂のうへの四つ角を左りへ曲つた。窓々にあかりが見える、耶蘇のお寺らしい西洋造り――如何に西洋造りでもお寺では矢ツ張り氣味が惡い――の前をとほつて、それから廣町のうへへ出た。そして心で指して來た桂庵の看板電氣が光る方へ下りて行つた。その家へ這入るが早いか、そこのかみさんをまた癪にさわつた。

『また癖を出した、ね、お竹さん、そんなことでうちの立て替へはどうしてお吳れだ、え』と云はれたのである。

『まだそれどころぢやない！』

『ないから、當分しをらしくしてイればいいぢやアないか？』

『やかましい、ねい——どこへ行つても、どこへ行つても癪にさわることばかりだい！』店を帳場格子の前にあがつて、ごろりと横になつてしまつた。
『仕やうのない婆アさんだ』と、ここの主人の言葉だ。
『お酒さへ飲まなけりやアいい人なんだけれど——』おかみさんの聲だ。
そのあとにも何か話し合つてることがいい心持ちに聽えてゐた。
ちよツと一と眠りしたのを呼び起されてそこを出たが、みち〳〵思ひ出して帶のあひだを調べて見ると、確かにさツきのおつりは殘つてゐる。それに、醉ひざめの寒けがして、奧齒と奧齒とがかたがたして合はなかつた。
『えい、飲み直してやれ』と心に呼んで、うす暗い電車路を少しあと戻りして、前々からふるなじみの居酒屋へ行つた。そこでの飲み友達も二三名落ち合つたので、久し振りで皆が皆店を斷わられる時刻まで飲みつづけた。何でも一時頃までゐたのだが、餘りおしやべりをしたので却つて何をしやべつたか一々のおぼえはないほどだ。自分の心の目に殘つてるのは、ただ、がらす戸の中をおほ火鉢の炭火であツたかくして、一人や二人や三四人の別々な組が、泰平樂を云ひながら話を云ひかはし、それを肴にして飲むその飲み臺として、——あの八幡町の居酒屋のは立ち飲みするひら板の高臺だが、——ここのは、二間ばかりの土間に、明き樽が三つばかりあひだを置いて並んでるありさまであつ

た。

そのありさまをいつまでも目の前に思ひ浮べながら、神谷町、八幡町の寢しづまつた町を、今の主人の家のそと電氣のもとまで歸つて來た。が、假名でお家の名が書いてある圓い電燈が人の顏に見えて、それが今にも口を明くと、

「お前のざまは何だ」と云ひさうで、云ひさうで――どうしても、このままでは戶を明けて貰ふ勇氣が出なかつた。

ふと思ひ出したのは、井戶ばたのひら家がきのふ明き家になつたことをだ。われながらいい思ひ付きだとして、足おとのしないやうに行つて、戶を明けて見ると、うまく明いた。そこへあがり込んで、眞ツ暗い奧座敷の疊の上へぢかに橫になつた。そしてひイやりと氣持ちがいいので、そのまま眠つてしまつたのだ。

何だかちく〱と痛いやうな、寒いやうな氣持ちがして目をさますと、もう、明けがたであつた。直ぐ起きあがらうとしたけれども、自分のちぢこまつたからだが直ぐには延びなかつた。先づ、枕にしてゐた方の手を少しづつさすつて延ばした。それから、足を。それからまた半身を起したが、疊に當つてた骨ツぽい腰のあたりが痛むので、暫らくそこをもさすつてた。

『ひからび婆アさん』と、ゆふべ飲み仲間の男が冷かしたのをおこつてやつたが、實は、全くのこと

たと今更らに思へた『おめへさんは、な、その顚狂に瘦せこけた顏で目が据わつて來ると、まるで狐ツ憑きのやうだぜ。』

『ぢやア、さう云ふおめへは狸ぢぢイだらう』と云つてはやつたが、そつ前にあつた話のことを自分は氣にしてゐたので、『時に、八幡山に狐がゐるのはほんとうだらうか？』

『ゐたツて不思議はねいぢやアねいか、明治の御維新前にやア、八幡町の奥などア草ぼう〱の茅ツ原で、——山賊の巢で、——その大將の名を取つて我善坊町ができたのだと云ふから、な？山賊は平らげられても、明治十年ごろまでは今の麻布狸穴には狸がゐたし、おめへが今奉公してイるあたりにやア狐の巢が澤山あつたと云ふから。』

『……』さう聽いて見ると、それを思ひ出しても、このあたり何だかうす氣味の惡いところだ。それだのに、よくもこんな明さ家で夜が明かせたものだ。圓い電燈が人間の顏に見えておそろしかつたのを思ひ合はせても、矢ツ張り、自分は化かされてゐたのかも知れぬ。

兎に角、さう斯うしてゐられないほどおそろしさと寒さとに胴ぶるひがして、自分は立ちあがらないではゐられなかつた。そして飛び出すやうにそとへ出ると、それでも、自分がいつも水を使ふ井戸や、その井戸に向つて窓のついてるおほ旦那の離れ座敷やの見えるのが、多少の親しみをおぼえさせた。が、自分のあたまの上にかぶさつてる山の木々の枝々からも、またこの狹い漏路を通りの方から

も、夜明けの風が自分のうへした左右から吹き廻つて、からだ中が一層すくむやうに振ひ出した。

われながら馬鹿々々しかつたやうな氣がして、これをどう主人に云ひわけしようかと考へながら、眞ン中にとほつてるどぶ板を避けて、音のしないやうに足をおもて臺どころの方へ急がせた。どうしても早く家の內へ這入つて、火の氣に當らなければ溜らなかつた。

臺どころで物おとがしてないのは女中がまだ起きてゐないのだと分つたので、玄關の方へまわつて、そのわきの窓に向つて

『おまツさん、おまツさん』と呼んで見た。もう、目はさめてゐながら、お互ひにおぼえがある通り、ずるを構へてゐる時刻だと思はれた。

『誰れ』と、とぼけたやうな聲だが、果して返事があつた。

『わたしよ。』

『ちよツ』と舌うちが聽えたのはこちらに癪であつたが、床を起き出たやうすだ、『今ごろ歸つたの?』

『………』こちらは向ふが衣物を着かへるのを待つのでは溜らなかつたので、直ぐ入れて貰へるやうに、『直ぐちよツと明けてお吳れよ、寒いのだから!』

『ぢやア、お待ちよ——勝手にこんな時に歸つて來て!』

『………』こちらが玄關の前に來て立つてゐると、おまツさんは玄關の障子と戸をあけて土間へ飛び下り

たけはひがした。そして、
『あなたの爲めにゆふべどんなに寒い思ひをして探しまわつたか知れやアしない』とぶつ〳〵云ひながら、戸を明けて呉れた。が、こちらを見ると、びツくりした。『まア』と兩手を廣げ、胸を後ろへ反らせて、『どうしたの、その様子は？』
『………』こちらは握り固めた兩手の肱を兩の小脇にしツかり着けて、顫えてゐるばかりであつた。が、尤も、顏は眞ツ青になつてるのだらうと自分でも思へた。申しわけを主人にするには、これが却つて丁度ふさはしい様子だと、自分で自分を投げ出してもゐるので、先づこの女中に向つてもとぼけかたを顏にまで大きく見せて、斯う告げた、『狐に化かされて今まで歩きまわつてゐたんだから。』
『ふん！馬鹿々々しい！』
『………』まん更らうそでもないと云ふことを、こちらは自分でも不思議がつてる通りに云つて聽かせてもよかつたのだが、おまツさんはそれツ切り引ツ込んで行つたので、自分も暗い廊下をまわつて奧の方へ來た。そしてまだ電氣の消えない主人のお部屋の前を通り切る時、
『婆アやかい』と云ふ、奧さんの寢ぼけたお聲であつた。
『へい』と、立ちどまつた。胴ぶるひには、何と叱られるかと云ふ恐れも手傳つてゐた。
『どうしたんだ、ねい、お前は？』

『………』障子を隔ててるだけ答へ易い氣がして、『狐につまれてまして、持つてる物を皆おとしましたのでございます。』

『何を云つてやがるんだか！』これは旦那のこちらへも聽えよがしのお聲だ。

『………』抱き付き合つてゐるかも知れないと思はれたので、こちらは遠慮もあつて、そのまゝ釜のある方へ進み行き、先づ雨戸を二枚明けた。そして釜を調べて見ると、瓦斯に火を付けさへすればいいやうになつてたので、マチ一本でけさの用事を初めることができた。

そして自分はかぢけ切つたからだに少しでもあツたか味を取る爲め、燃える瓦斯に肩をすくめて手と顏を近づけた。すると、また、瓦斯の青い火が自分の昔見た狐火と云ふ物を思ひ出させた。どこまでも化け物くさくなつて——あの買ひ物代だツて、あれを——いくら自分が馬鹿でも——正氣では使つてしまう筈がないのだから、だまされて使はせられたに相違なからうし、——現に、自分のたばこ入れやきせるだツてまた無くなつてた。

泥棒が逃げる時はおのれのことをわざ〳〵泥棒々々と云つて驅け出すさうだが、ゆふべの明き樽を飲み臺にした酒屋で狐の話をしたのも、實は、ふるなじみの居酒屋に於けるふるなじみの飲み友達ではなく、この邊に住むふる狐どもであつたかも知れない。あすこへあと戻りする時に電車みちが俄か

[illegible]自分の心にまでもそツとするほどおぞけの粟つぶがつぶ立つやうだ。ただ一と口に取り喰らはれなかつたのがまだしも仕合せであつた。

ところで、取り喰らふと云ふことで氣が付いて見ると、自分もきのふの晝から御飯を少しも喰つてゐなかつた。そしてすが〴〵しい空氣に自分ながら自分の酒くさいのが鼻につく。そこへお寺でやり初めたぽこ〳〵の音が響くと、そのからツぽのやうな響きに一層自分の空腹が感じられた。けさに限つて、抹香のにほひをでも喰へる物なら直ぐ喰つて見たいほどに。そしてお酒などは飽き〳〵して、當分は飲みたくもなかつた。そのうちに、瓦斯の加減をするやうになつたが、御飯の勢ひよく吹いた湯げを鼻に受けてから、自分はやツと眞人間に立ち返る氣がした。

旦那は奥さんに何と云ひ置いたか知らないけれども、こちらへは何も叱らないで出て行つた。そして奥さんがこちらを中の間へ呼び付けたのは、こちらの朝はんもすんでしまつてからであつた。

『お前は全體』と、長火鉢の上座に生意氣にも立て膝をして、『そんならそを云つたツて、とほらないよ。けさ、歸つて來た時にやア大相お酒くさかつたと云ふし、こないだの晩は晩で、おもての方のお酒を盗み飲みしようとしておほ旦那に見つかつただらう?それに、薬り瓶を毀わしたなんて云つて、お薬りぢやアなかつたやうだし。』

『…………』もう、何もかも分つてゐるのであつた。

『これがお酒だからまだ罪がないやうなものの、若しおかねの爲めであつて御覽、警察へもあげられるかも知れないだらう――？』

『懲り〳〵しましたから』と、こちらは顏を赤めて、こわごわに、にや〳〵笑ひながら、『もう、お酒もやめます。』

『旦那は、もう斷わつてしまへとおツしやつて出られたのだが、ね、お前がその言葉通りけふから本氣になるつもりなら、今暫らくわたしがお前を預かつてあげるが、ね――その代り、きのふ使つた分もお前のお給金からさし引くから。』

『どうぞよろしいやうに――』こちらは酒さへ酒まなければいつまでも本氣でつとめられると思つた。そしてこの考へも決してうそではないのだ。で、奥さんの顏いろが少し和らいだ時を見て、またにやりとしながら、『ゆふべだツて、すまないから歸らうとしたのでございますけれど、だまされてをりましたので、つい、飯倉の四つ角や、芝公園のふちや、廣町の方を引きまわされて、一度はまたこの邊へも來ましたけれど、どうしてもここへ這入れなかつたのでございます。』これは皆ほんとうのことであつて、酒を飲んだことと明き家に寢たこととを云ひ隱しただけだ。そして『きツと、この邊にはふる狐が住んでをると思はれます』と、まじろで附け加へた。

『まさか、そんな物が』と、奥さんは笑ひにまぎらしてしまつた。
『……』こちらには、魔と云ふ物は醉ひにつけ込んでさす物だと分つたので、好きな酒をもおそろしくなつてゐた。
それからと云ふもの、若奥さんやおほ奥さんの機嫌を直して貰ふ爲め、一生懸命になつて立ち働き、赤ン坊の守りをも以前よりはずツと叮嚀にした。
そのうち、間もなく、おほ旦那の誕生祝ひだとか云つて、おほ奥さんがおこはを五つ蒸籠ばかり蒸かした。その爲め急がしいので、こちらも手傳ひをした、が、どうせ假りの手傳ひに過ぎないのだから、裾分けがあつてもこちらなどには小皿にたツた一杯か二杯しか渡るまい。そして最後にあり餘つた分はおまツさんならいくらでも勝手に喰へるがと思ふと、働きながらもおもて向きのおまツさんを羨ましかつた。そして他に誰れもゐない時を見て、からかひ半分にだが、
『けふだけは入れ替りたい、ね』などと云つて見た。
ところが、ほか〳〵と色のいいのができたのを見ながら、まだ一杯も御馳走にあり付かぬうちに、そのおこはを飯倉の親類へ配りに行く役目がこちらに當つたので、自分は一層不平であつた。顏には見せないやうにしても、自分の心では——おまツさんを使ひにやればいいではないか、おまツさんはおもてに附いた女中で、この用事はおもての用事ではないか、と。

けれども、自分はおほ奥さんの無理強いだと思はれる手でずん〳〵支度を急がせられた。

『あんまり見ツともない風をして行つても困るから、ね』と云つて、先づおほ奥さんの古い黒繻子の半はば帶を借りて締めるやうに云ひ付けられた。それから、また――これもおほ奥さんの――ふる羽織りを着せられた。そして、お負けに、『まるでどこかの立派な御隱居さんのやうだ、わ』と冷かされた。

『……』こちらはただにが笑ひで受けてゐたが、そのうへに赤ン坊を寢んねこでおんぶして、いやいやながらお使ひに出かけたのである。が、こちらを立派な御隱居になつたなどとおだてて突き出して置いて、向ふはひよツとするとこちらにおこはを呉れないつもりでゐるのかも知れないと思ふと、皆がちよツと蓋の明けてあるおはちのそばを離れたあの時に、自分はこツそりと手早く、少しでもあの出來立てのあついところをつまみ喰ひして置いてもかまはないのであつた。

あんな時にこそ若奥さんも出て來てゐて、――さうだ――

『お使ひにおやりなら、その前に少し婆アやに喰べさせてやつて下さい』とでも云ひ添へて呉れたら、よかつたのに――氣が利かない！けさに限つて、おもての方へは滅多に顏を見せなかつた。そして、おほ奥さんが

『奥へもあツたかいところを分けてあげるお皿を出してお呉れ、紫のすぢの這入つた西洋皿を二と、

おまツさんに云ひつけてるお聲が、勝手口をこちらが出たその直ぐあとに聽えてゐた。して見ると、おほ奥さんはもちろん、それにお相伴してておまツさんも、今ごろは、もう、喰べてゐるだらう。そして喰べて行けばそれだけ無くなつて行くだらう。さうだ、自分の爲めに殘つてるのは、もう、今ここに風呂敷で包んで提げてる重箱の中だけのやうであつた。

『あかちやん、え、これはわたしの分捕り品でしよう——え、さうぢやアない？』八幡町を西の久保の通りへ曲つた時に、斯う立ちどまつて獨り言のやうに云つた。が、伊勢屋とさし向つてる角の八百屋の店で、こないだ、こちらに向つて

『お前さんはいつもにこ〳〵してゐる、な』と聲をかけたそこの主人が、けふは默つてこちらを何だからさん臭さうに見てゐた。で、一たび右の肱をあげて、底あさで大きく四角い包みのあツたかいその片すみを自分の鼻へ持つて行つてた、その手をあわてておろすと共に、この感じのいい鼻のさきをまた前の方へ向けた。すると、歩きながらも、矢ツ張り、右の手におもみを持たせる物のうまさうなにほひがしてゐる。

『………』自分はまた立ちどまつて、それを風呂敷のうへから左りの手で以つていじくりまわして見ると、その底までがあツたかくなつてゐて、でき立てに湯氣の立つてたあづき色のこは飯がおもたい箱の中に見えて來るやうだ。『あかちやん』と、自分の脊中をふり返つて見て、何とか云ふのだがその

名を自分はおぼえてゐない兒に向つて、『うま〳〵喰べたくない？』

『……』兒はこちらへ脊中の横からその顏を少し突き出して、にツたりとした。まだ物は云へないけれども、こちらの云ふことは分つてゐるのである。

『あかちやんも喰べたいのでしよう。へい〳〵、それでは婆アやが喰べさせてあげますよ』と、決心して足を速めながら、大きなお重に十分詰め込んであるのだから、少し位うはツ皮をへずり取つても分りはしまいと思つた。

八幡山のあがり口に來ると、重箱を一方の手から一方のへ持ち替へて、脊中とかた手と兩方のおもみを辛抱しながら、高い石段を二度にも三度にも休んで、うへまでやツと達することができた。そして古いおやしろや多くの大きな杉の木を見て、また、もう自分には眞ツ平御免の狐のことを思ひ出したけれども、今はまだドンにもならぬ晝まのことでもあり、且、今度は自分自身があぶらげや赤のまんまを盜み喰ふおいなりさんのやうな眞似をするのでもあるから、この人かげの見えぬ寂しいところが却つて都合よかつた。

たとへ人がお參りにあがつて來ても、正面からも、横手からも見えぬやうにと、お神樂堂の後ろ手なる太い角ばしらを目隱しにして、その土臺石のわきの緊い土の上へ、赤ン坊をねんねこにくるんだままおろして、足を投げ出させて坐わらせた。そして自分もそのそばへペツたり坐わつて、自分の膝

の上で風呂敷を解いた。

黒いうるし塗りの蓋には、眞ン中に金いろの大きな紋が附いてゐた。それを明けると、うらは朱塗りであつた。こはい御飯も赤いい色に赤くて、まだ少し湯げを立てた。これを見ると、自分の口の中には俄かにつばきが澤山出て來た。

『さア、あかちやん』と、先づ舌と口びるとでつばきをこぼれないやうに防ぎながら、『うま〱あげますよ。』箱のすみの方を少し三本の指でつまんで赤ン坊の口へ入れてやつた。』

『うま〱』と云つて、何も分らぬ兒は嬉しがつた。

『さう、うま〱、ね。』つい、その利口らしい可愛らしさに釣り込まれかけたが、こちらも喉から手が出さうになつてたので、蝶がたに疊んだ紙を明けるが早いか、その中の胡麻鹽をちよツとつまんで御飯の一部へふりかけた。そしてその部分へ指を三本突ツ込んだが、口へ持つて行く時に多過ぎてこぼれさうになつたので、またあとの指をも添へた。その味はひは目が飛び出さうにうまかつたのである。

今一つ、別な部分へ鹽をかけて、それを口へ運んだ。そして、また別なところをも。この三回目でやツと少し安心したので、指にこびり附いた飯つぶの方をなめるやうにして舌で取つた。これでおしまひにして、あとをならして置かうと思つたのだ。

が、どうもまだ滿足はできなかつたので、今一つ別なところへ指を入れた。すると、またその上にも重ねたくなつて、つづけざまに今度は三口ばかりやつた。うはかわは大抵手がついでしまつたので、もう、この邊でやめようと考へた。そして氣が付くと、赤ン坊が泣き顔をしてこちらを見てゐた。

『おう、まだ喰べたいのですか』と云つて、こちらはまた一とつまみをその口へ入れてやつた。兒にはこれが二度目のだが、こちらは何度か分らなくなつたのを今一度自分の口へも養つた。そして兒に向つて『お前さんが、ね』と自分のことを人から呼ばれる通りの言葉をここにも使つた、『喰べたいと云ふから明けたのですよ。婆アやは知りませんよ。』斯う云つて、今一とつかみ頰張りながら、『婆アやは、ね、どうせお前さんにまかせて置けば喰べ過ぎてぽん／＼を痛くしますから、ね、その身がはりに喰べてあげるばかりですよ。』

『………』何と思つてか、赤ン坊は聲を出して嬉し笑ひをした。餘り可哀さうなので、今一つ喰べさせてやつた。すると、こちらはまた三度ばかりつづけざまであつた。

『もう、これでおちまひ、ね。』ならして見ると、まだもとの半分はあつた。これだけでも別に體裁の惡いことはなからうと考へられたが、さて、明けた紙の方をどう疊み直せばいいのか分らなかつた。あながち、蝶がたにならないでも構はいなだらうけれども、斯うかあアかといじくつてるうち

に、紙その物がくちや〳〵になつてしまつた。これでは見ツともないばかりでなく、途中でどうかしたと云ふことがあり〳〵と感づかれるにきまつてた。

えい、ままよ、いツそのことと云ふ氣になつた。殘りの鹽をもぶちまけて、中の物をすツかり喰つてしまつた。そして兒が羨しがつて泣き出した時には、やるべき物は一つぶも殘つてゐないで、重箱の中は若奥さんの湯もじのやうに綺麗に眞ツ赤であつた。

人に見られてはと、急いで蓋をして、もとの通りに包んだ。それから、自分のからだを延ばして見ると、お腹が一杯にふくれて、胸のあたりがちく〳〵し、あたまのしんへつんと痛く響く。自分自身がおも苦しくなつたうへに、これではとてもこの重いそしてぎやア〳〵泣く赤ン坊のおんぶはできなかつた。

それに、また、どうせおめ〳〵とは主人のもとへ歸れないのであつた。

狐の時にはまだほんとうの申しわけがあつたけれども、今度と云ふ今度は、再び化かされて重箱の中を喰はれたとも云へず、全く申しわけの仕やうがない。

このままどこかへ逃げてしまはう！さうすれば、桂庵の借金を返すにも及ばず、また、今持つてるおほ奥さんの帶や羽織りも自分の物になつて、萬更ら損はないのである。さうだ、さうだ！

『あかちやん。え、お前さんには可哀さうだがね、ここへ棄てて置きます。精々さうして泣いてをれ

ば、誰れか來て助けて吳れます。でも、風は引かないやうにしてあげますから、ね』と云つて、手早くねんねこにくるんだが、なほそれを泣きもがきの爲めに蹴りはだけてしまはないやうに、うまく負ぶひ紐を卷きつけてやつた。それから自分は立ちあがるが早いか、自分の裾についてる土をふり拂ひながら、獨りで四五あし、神樂堂の後ろ橫手を雌坂の方に向つて驅け出した。

が、ふと考へて見たのである――からの重箱をここへ置き殘して行けば、よしんば人に盜まれはしないとしても、自分が喰べてしまつたと云ふ證據を主人の爲めに殘すやうなものであつた。で、今一度あと戾りをしてそれをかツ浚ふやうに手に取りあげた。そしてまた驅け出した。

『………』赤ン坊はこちらの姿を最後に見やつた時、一層ひどく泣き出したのが、こちらには坊やも一緖につれて行つて吳れいと云つてるかのやうであつた。が、お重をからにして持つて行くうへに、またそんなむごたらしいことができますものか？

『少しのまですから、辛抱していらツしやいよ』と、こちらの腹一杯に胸苦しい心が神さまを拜むやうに云つてた。火が附いたやうに泣いてる聲を後ろの方に聽き流してだ。

自分はこの胸苦しさでは、おならばかり出さうで、とても、正面のをとこ坂は下りて行けないと知つたので、雌坂の方に向つたのだが、――それを氣ばかり急ぎながら中途まで下りると、社務所へあがつて行く御用聞きらしい男の子がその兩方のかじかんだ手を口へ持つて行つて、はア〳〵と白い息

を吐きかけつつやつて來るのに出逢つた。こちらも、喰ひ過ぎのいやな氣持ちと共に手や首すぢのあたりにぞツと寒けをおぼえた。けれども、丁度いいところだと思つたので、それに向つて、「小僧さん――」自分ながら自分の聲にびツくりしたので、あとは早くちに、『山の上に棄て兒がありますよ』と知らせてやつた。

そしてまた自分は急いでそこを思ひも寄らぬ横みちへ下りて行つたのであるが、狹く向ひ合つてる雨がはの家々から、人が皆家なし女の自分をあざ笑つて見てゐるやうな氣がした。

――(大正八年二月)――

泡鳴全集第六卷 終

お竹婆さん

大正十年八月十五日印刷
大正十年八月二十日發行

泡鳴全集第六卷

（非賣品）

著作者　岩野美衞

發行者　國民圖書株式會社代表者
中塚榮次郎
東京市麹町區内幸町一丁目六番地

印刷者　井波修次郎
東京市神田區三崎町二丁目三番地

發行所　國民圖書株式會社
東京市麹町區内幸町一丁目六番地
電話新橋一一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所國民圖書株式會社印刷所

（製本　佃製本所）